都市計画道路博多駅築港線関係
埋蔵文化財調査報告（Ⅲ）

博　多

福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集

1989

福岡市教育委員会

都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（Ⅲ）　博多

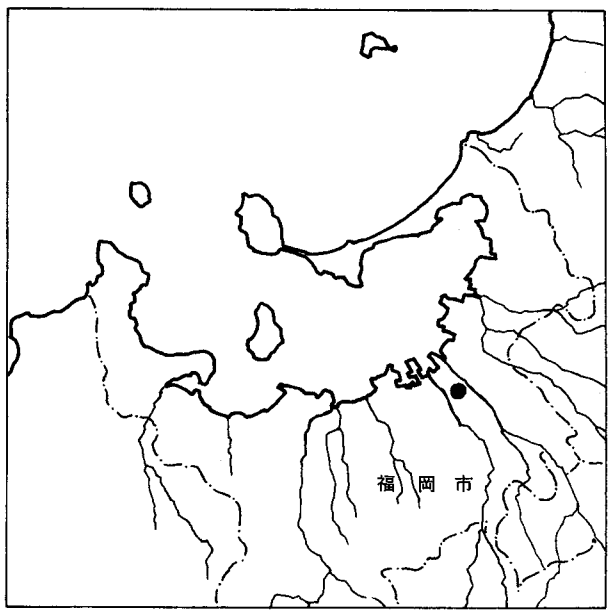
正誤表

頁	行	誤	正
4	16	湿地性の推積土がのっている。	湿地性の堆積土がのっている。
61	32	108　854号土壙出土遺物	106　854号土壙出土遺物
220	8	1～11・13～16・18～25・30～35は白磁、26・27・36は青磁	1～11・13～15・18～25・30～35は白磁、16は鉄釉陶器、26・27・36は青磁
232	Fig.340 17	祥符元寶	祥符通寶
232	Fig.340 18	祥符元寶	祥符通寶

都市計画道路博多駅築港線関係
埋蔵文化財調査報告(III)

博　多

福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集



1989

福岡市教育委員会

Ⅳ面下出土五銖銭

698号土壙出土折烏帽子

10号溝出土漆椀

698号土壙出土漆椀

序

福岡市は，古くから大陸を受け容れる窓口の役割をはたしてきました。市内には，大陸との交渉を物語るさまざまな遺跡・遺物が残されています。中でも博多遺跡群は，大陸・朝鮮・琉球との貿易で栄えた国際都市といえる遺跡です。また同時に，現在の福岡市都市発展の基礎となった遺跡でもあります。

都市計画道路博多駅築港線は，ＪＲ博多駅と博多港とを一直線に結ぶ道路で，拡幅工事が終了し，国際シンボルロードとして整備が進められています。福岡市教育委員会では，昭和57年から62年まで，博多駅築港線の道路拡幅部分を対象に埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。本報告書は，その第３次調査の結果を報告するものです。

本書が市民の皆さまの文化財に対する御理解を深めるだけでなく，学術研究の分野で広く貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまでの多くの方々の御協力に対し，心から謝意を表わすものです。

平成元年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は，都市計画道路博多駅築港線（通称大博通り）の拡幅工事に伴なって福岡市教育委員会が実施した，福岡市博多区上呉服町１番地における第３次調査の報告書である。

2．本書の編集・執筆は大庭康時が行なった。

3．本書に使用した遺構実測図は，松村道博・吉留秀敏・大庭・山口満・池田光男・崎山伸一松本美保・大庭智子が，遺物実測図は，田崎博之・大庭・森本朝子・山口満が作成した。また整図には，大庭・森本・山口・池田・入江のり子・熊琳・近藤かほる・伊佐真奈美が分担してあたった。

4．本書に使用した方位は，すべて磁北である。

5．本書に使用した遺構写真は，大庭が撮影した。また遺物写真は大庭が撮影し，萩尾朱美が焼付した。

6．遺構番号は，第１次調査からの通し番号である。土壙は698番，柱穴状小土壙は1201番，井戸は100番，配石遺構は51番，溝は11番，不明遺構は05番から番号を付けた。

7．遺物の整理・報告書の作成にあたっては，村田喜代美・生垣綾子・中嶋玲子・萩尾朱美・山田由美子・瀬戸満寿江・森本・山口らの手を煩した。また，銅銭の銹落し・解読・集計には，前田直子・大庭智子があたった。

8．本調査に関するすべての記録類・出土遺物は，福岡市埋蔵文化財センターにおいて，収蔵管理される予定である。

遺跡調査番号	8404		遺跡略号	ＨＫＴ－Ｒ３	
調査地地番	博多区上呉服町１番地		分布地図番号	天神49	
開発面積	1,100㎡	調査対象面積	1,100㎡	調査実施面積	417㎡
調査期間	1985年１月25日～12月４日				

目　　次

第一章　　はじめに……1

1．発掘調査にいたるまで……1

2．発掘調査の組織と構成……1

3．調査地点の位置と環境……3

第二章　　発掘調査の概要……6

1．発掘調査の経過……6

2．Ⅰ面の調査……8

3．Ⅱ面の調査……10

4．Ⅲ面の調査……12

5．Ⅳ面の調査……14

6．Ⅴ面の調査……16

7．Ⅵ面の調査……18

8．Ⅶ面の調査……20

9．遺構と遺物……22

(1)　整理の記録……22

(2)　近世の遺構……23

①土壙……23

701号土壙……23

713号土壙……23

741号土壙……25

776号土壙……26

②井戸……27

101号井戸……27

102号井戸……27

104号井戸……28

105号井戸……29

112号井戸……30

③配石遺構……31

51号配石遺構……31

(3)　中世Ⅲ期の遺構……36

①土壙……36

702号土壙……36

703号土壙……37

705号土壙……37

710号土壙……39

711号土壙……40

712号土壙……40

722号土壙……41

723号土壙……42

727号土壙……43

735号土壙……44

738号土壙……44

739号土壙……45

742号土壙……45

755号土壙……46

771号土壙……46

779号土壙……47

793号土壙……48

800号土壙……49

803号土壙……50

807号土壙……51

820号土壙……52

832号土壙……52

833号土壙……53

834号土壙……54

836号土壙……55

839号土壙……56

840号土壙……57

841号土壙……58

848号土壙……59
854号土壙……59
858号土壙……62
698号土壙……64
699号土壙……84
②柱穴状小土壙……86
1430号ピット……86
③井戸……88
107号井戸……88
④溝……95
10号溝……95
15号溝…… 117
⑤配石遺構…… 126
54号配石遺構…… 126
55号配石遺構…… 127
56号配石遺構…… 128
⑥その他の遺構…… 130
ＳＸ05（地鎮遺構）…… 130
ＳＸ09…… 132
ＳＸ10…… 133
ＳＸ11…… 134
ＳＸ12…… 135
ＳＸ20…… 136
ＳＸ21…… 136
⑦製鉄遺構…… 137
790号土壙…… 137
(4) 中世Ⅱ期の遺構…… 139
①土壙…… 139
780号土壙…… 139
813号土壙…… 140
842号土壙…… 141
845号土壙…… 142
846号土壙…… 144
859号土壙…… 145
860号土壙…… 146
861号土壙…… 149
862号土壙…… 149
869号土壙…… 151
887号土壙…… 151
899号土壙…… 152
898号土壙・913号土壙…… 153
②柱穴状小土壙…… 160
2041号ピット…… 160
2366号ピット…… 161
2381号ピット…… 163
2406号ピット…… 164
2515号ピット…… 164
③井戸…… 166
114号井戸…… 166
④溝…… 168
13号溝…… 168
(5) 中世Ⅰ期の遺構…… 172
①土壙…… 172
877号土壙…… 172
879号土壙…… 173
881号土壙…… 174
895号土壙…… 175
909号土壙…… 176
②井戸…… 177
100号井戸…… 177
109号井戸…… 178
110号井戸…… 187
111号井戸…… 191
(6) 古代Ⅱ期の遺構…… 193
①土壙…… 193

876号土壙…… 193
880号土壙…… 193
883号土壙…… 193
886号土壙…… 194
911号土壙…… 194
(7) 古代Ⅰ期の遺構…… 195
①土壙…… 195
874号土壙…… 195
905号土壙…… 195
②柱穴状小土壙…… 195
2149号ピット…… 195
2439号ピット…… 196
2445号ピット…… 196
2620号ピット…… 196
2681号ピット…… 196
③井戸…… 197
127号井戸…… 197
④地鎮遺構…… 202
ＳＸ27…… 202
(8) その他の遺構と遺物…… 203
①建物址…… 203
②その他の出土遺物…… 207
③墨書土器…… 220
④呪符木簡…… 224
⑤銅鏡…… 226
⑥銅銭…… 227
⑦板碑・墓石…… 234
第三章　小結…… 236

付論１　博多遺跡群築港線関係第３次調査出土の鋳造鉄精錬溶解滓の金属学的調査
大澤正己…… 247
付論２　福岡市内に所在する３遺跡出土木製品の年輪年代測定結果について
奈良国立文化財研究所　光谷拓実…… 267
付論３　博多遺跡群第26次調査，築港線関係第３次調査出土の中世人骨について
九州大学医学部解剖第２講座　中橋孝博…… 273

第一章　はじめに

1．　発掘調査にいたるまで

都市計画道路博多駅築港線は別称を大博通りと言い，ＪＲ博多駅から博多湾に向って一直線にのびる道路である。その起源は古く，新しく見ても豊臣秀吉による博多復興（天正15年＝1587年）を下らない。福岡市土木局街路課では，中世以来のこの博多のメインストリートを，現代都市にふさわしく拡幅・整備する計画を立てた。この拡幅工事は1982年３月に着手されたが，当初は文化財への考慮を欠き，急拠福岡市教育委員会文化課より街路課へ申し入れをして協議を持ち，同11月15日より拡幅用地内の発掘調査にとりかかった。これが第１次調査であり，その後断続しつつ1987年１月まで５次の調査が実施された。第３次調査は，1985年１月25日より第２次調査の北に隣接する417㎡について調査を開始したものである。

2．　発掘調査の組織と構成

調査委託　福岡市土木局道路部街路課

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　佐藤善郎

調査総括　文化課長　生田征生　（昭和60年４月組織改正）

埋蔵文化財課長　柳田純孝　（元文化課埋蔵文化財第１係長）

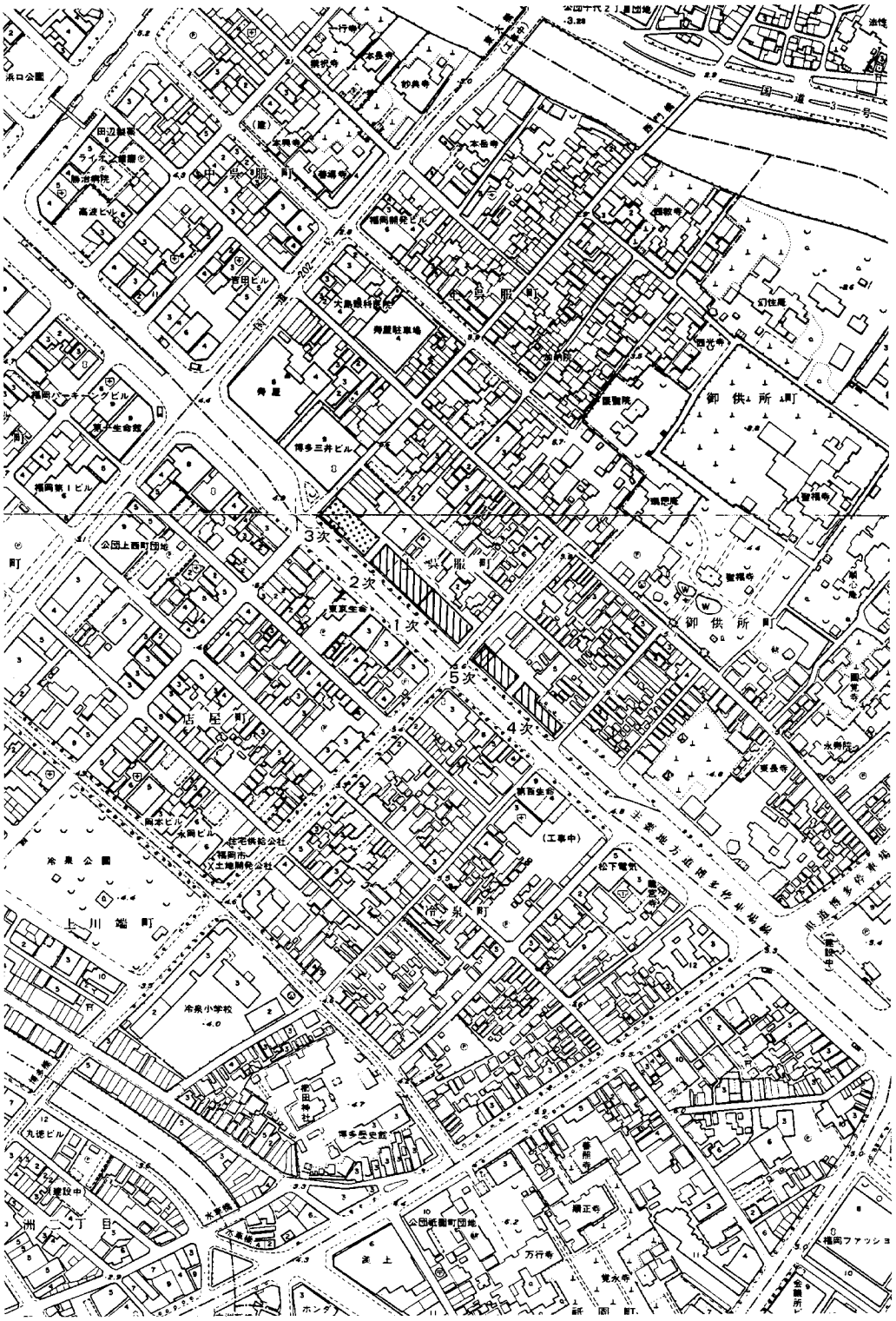
埋蔵文化財第１係長　折尾学

調査庶務　埋蔵文化財第１係　松延好文

調査担当　埋蔵文化財第１係　力武卓治　松村道博　大庭康時　吉留秀敏

調査作業　山口満　池田光男　日野光嗣　崎山伸一　甲斐徹　中園慶志郎　大部茂久
山崎光一　三浦力　権藤利雄　高田勘四郎　松浦直和　山本二郎　関冨美男
米丸次男　松永武士　芭蕉英一　江越初代　古賀博子　関加代子　曽根崎昭子
黒木静子　関政子　桑野正子　井手口美代子　野口ミヨ　長野康子　徳永道子
尾崎文枝　山村スミ子　石本ミスエ　川崎道子　西本スミ　高野晧代
荒木君子　村崎祐子　副島(大庭)智子　松本美保

室内作業　生垣綾子　鶴ちとせ　井上友子　稲益貴子　北原章子　金子幸世
村田喜代美　酒井もと子　末永トシ子　深沢美代子　林朝美　渡辺美千代
世利裕美　清水由美　高原裕子　北野まや　円入菜穂子　中村美穂　寺田康子
寺田亜紀子　阿部由美子　白井三千代　川島美佐子　実渕祥子



1　第3次調査地点位置図（1／5,000）

3．調査地点の位置と環境

博多遺跡群は，博多湾に面して形成された砂丘上に立地する遺跡群で，東を石堂川，西を那珂川によって区切られている。北は博多湾の埋め立てによって大きく変貌しているが，本来は海，南は旧比恵川の流路で中世末期堀として穿たれた房州堀で画されている。都市計画道路博多駅築港線は，この博多遺跡群の中央を東南から西北へ一直線に貫通しており，第３次調査地点は更にその中央に位置する。

第３次調査地点から100mほど海よりにある国道202号線との交差点を呉服町交差点と呼ぶが，博多遺跡群は国道202号線をはさんで，北の沖ノ濱と南の博多濱とにわかれる。沖ノ濱については，いまだ本格的な発掘調査がなされず，その様相はつかめていない。わずかに試掘調査の結果や文献史学の研究により，おそらく鎌倉時代以降になって博多の都市域にはいったものと考えられている。室町時代には，大友氏の代官がおかれており，博多濱にまさるとも劣らない繁栄をむかえる。

博多濱については，昭和52年12月に始まる地下鉄関係調査を嚆矢として，各種公共事業及び

2　第３次調査地点遠景（東南より）

41次を数える民間開発関係調査が行なわれている。それらの調査成果から，博多濱における遺跡の状況について概観したい。

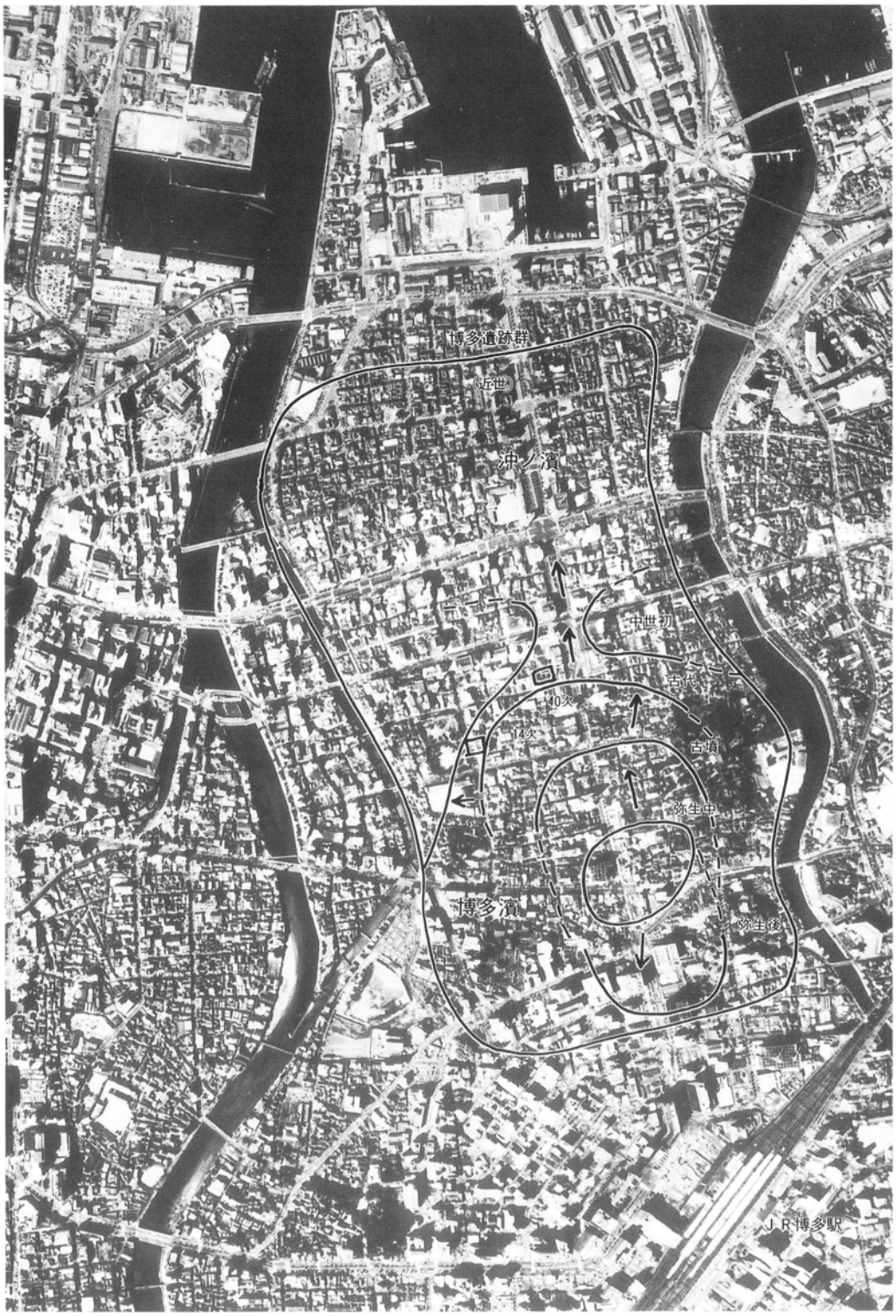
博多濱において確認されている最古の遺構は，弥生時代中期にさかのぼる。円形の竪穴住居址・甕棺墓などが検出されている。この時期の遺構は博多濱中央からやや南寄りに集中しており，発掘調査やボーリング調査で確認された博多濱の最も高まった地点とほぼ一致している。弥生時代後期には，遺跡は南にひろがり，終末期の甕棺は博多遺跡群の南縁近くで検出されている。

古墳時代にはいると，遺跡は北に拡大する。築港線関係第５次調査においては古墳時代前期の土壙が検出されているが，それより北側の調査では遺構の検出例がないので，北限といえよう。築港線の調査では，第５次調査区から第１次調査区にかけて砂丘の浅い谷部が想定できる。この時期の中心は，やはり南部の博多濱最頂部にあったと考えられる。そこには，５世紀初頭には墳丘の長軸が56mをこえる前方後円墳すら築かれている。

古代の遺構は，博多濱のほぼ全域に拡がっていると予想される。築港線関係第３次調査・民間開発関係第40次調査・試掘調査において，この時期の博多濱の北限はほぼ確定された。すなわち，遺構ののっている基盤砂層は築港線第３次調査区の中程から民間第40次調査地点の南側にかけての線で大きく北に落ちこみ，その上には湿地性の推積土がのっている。この堆積土中には，９世紀以前の須恵器・土師器・灰釉陶器・越州窯系青磁片がふくまれており，少なくとも平安時代の中頃まではこの湿地が残存していたと考えられる。古代の遺物の中で目をひくのは，越州窯系青磁の多さであり，これにまじって長沙窯系陶器・邢窯系白磁・また石帯・銅銙帯・円面硯・風字硯・皇朝12銭・墨書須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器片などが出土する。この時期の遺構としては，博多濱最頂部を中心に東西南北を指す大小の溝・井戸が検出されており，何らかの官衙および官人の居宅等が設けられていたと考えられている。

11世紀後半には，博多濱の北限を形成していた湿地はその一部が埋め立てられ，居住域に取りこまれる。この段階で，博多濱と沖ノ濱とは接続するにいたる。民間開発関係第14次調査では，陸揚げの際に荷崩れして堆積したと思われる白磁の集積が出土した。この点から，博多濱の西限は民間第14次調査地点の東側にその一点がもとめられる。11世紀後半から12世紀代は博多が最も繁栄した時代であり，おびただしい量の中国産陶磁器が出土している。

おそらく鎌倉時代には沖ノ濱の開発もすすみ，博多濱・沖ノ濱とその間の湿地状の入江とが一体となって博多という都市を形成する。博多濱と沖ノ濱との間の湿地が完全に埋め立てられるのは，近世初頭になってからである。中世の博多は，この範囲を超えることなく焼亡・復興をくり返し，天正14年（1586）島津氏による焼打，同15年（1587）豊臣秀吉による博多再興（太閤街割り），明正16年（1639）の鎖国へと流れるのである。



3　博多遺跡群全景

第二章　発掘調査の概要

1．発掘調査の経過

第３次調査は，1985年１月25日より12月４日まで行なわれた。ただし，これに先立って，重機による近現代の撹乱層の除去が行なわれている。除去作業は，第１次調査・第２次調査の経験から表土下1.5mまでを一率に掘り取った。

博多遺跡群の場合，最下層は砂層上面を遺構検出面とするが，その上に数メートルにわたって継続した生活面が形成されている。この間堆積土壌の変化はほとんどなく，鍵層となりうべき焼土層が検出されても，更に上からの遺構の掘りこみで乱され，面的に拡げて検出しえないのが実情である。そのため，同一生活面の検出はほとんど不可能である。発掘調査に際しては，一定の掘り下げ→遺構検出→精査→記録→掘り下げをくり返すことによって，目的意識的（恣意的）な遺構検出面を設定して遺構確認と遺物取り上げをなさざるをえない。第３次調査においては，７面の遺構検出を行なった。上層から順次Ⅰ面・Ⅱ面と呼ぶ。また，都心部での調査の為，廃土置場を調査区内に求めざるをえず，Ｃ－01区をこれにあて，その部分については廃土搬出後に調査を行なった。

調査経過の概略は以下の通りである。

１月26日～３月５日　Ⅰ面調査

３月６日～４月９日　Ⅱ面調査

４月１日～６月21日　現場作業中断，この間５月17日～６月21日まで隣接する博多遺跡群第26次調査を行なう。

６月22日～７月８日　Ｃ区Ⅰ面調査

７月９日～７月16日　Ｃ区Ⅱ面調査

７月17日～８月17日　Ⅲ面調査

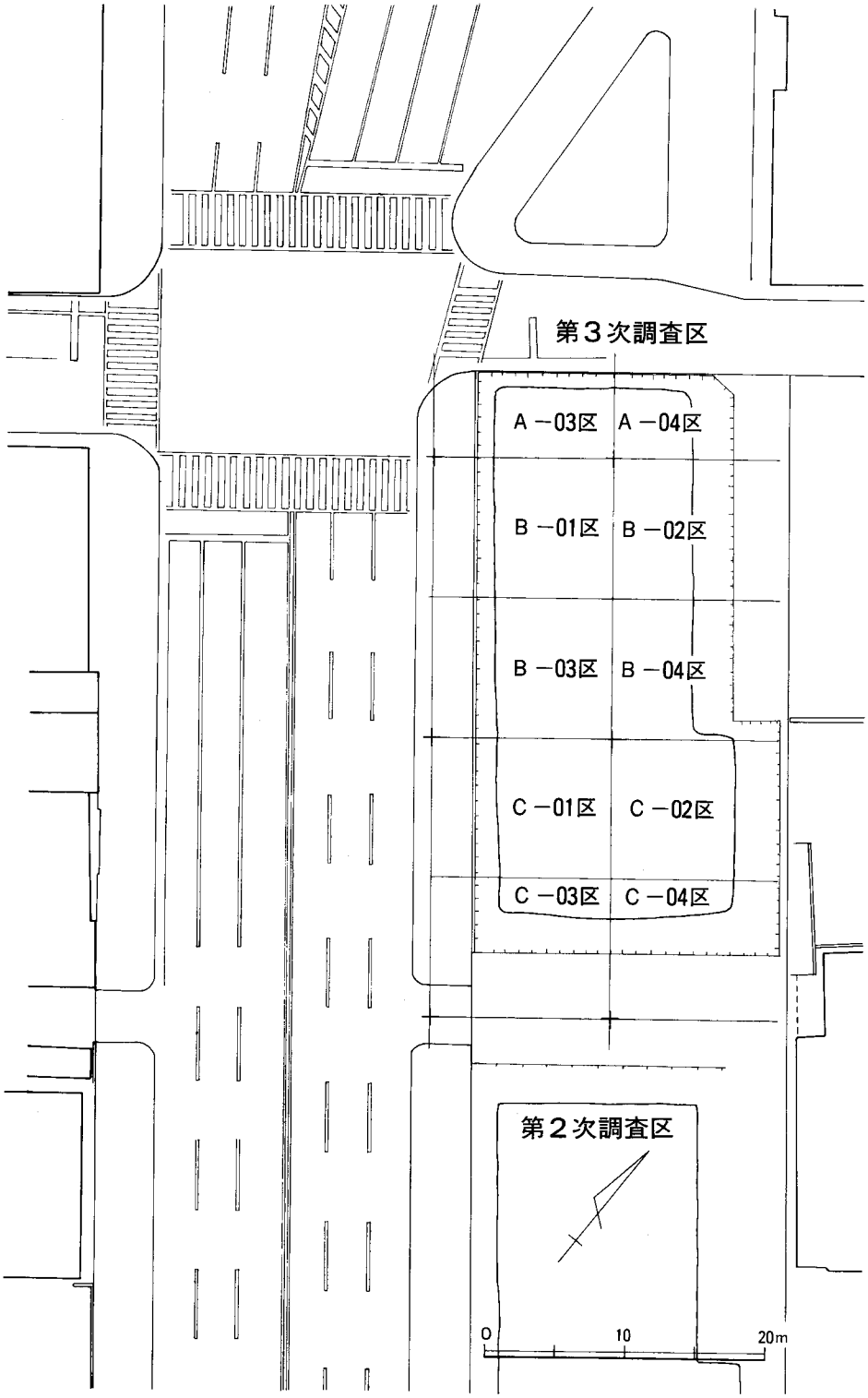
８月19日～９月11日　Ⅳ面調査

９月11日～10月３日　Ⅴ面調査

10月４日～10月18日　Ⅵ面調査

10月19日～12月４日　Ⅶ面調査　　この間11月５日～18日までＣ－01区Ⅳ面，11月19日～27日までＣ－01区Ⅴ面調査

８月には，４月から２ケ月間にわたる作業中断及び調査期間の不足から早くも終了延期の話がおこり，地中管埋設部分のみは調査を断念し工事に着手することを認めた。この為Ｂ－04・Ｃ－02区の東側張り出し部分については，９月５日をもって埋め戻された。



4　第３次調査地点グリッド設定図（１／500）

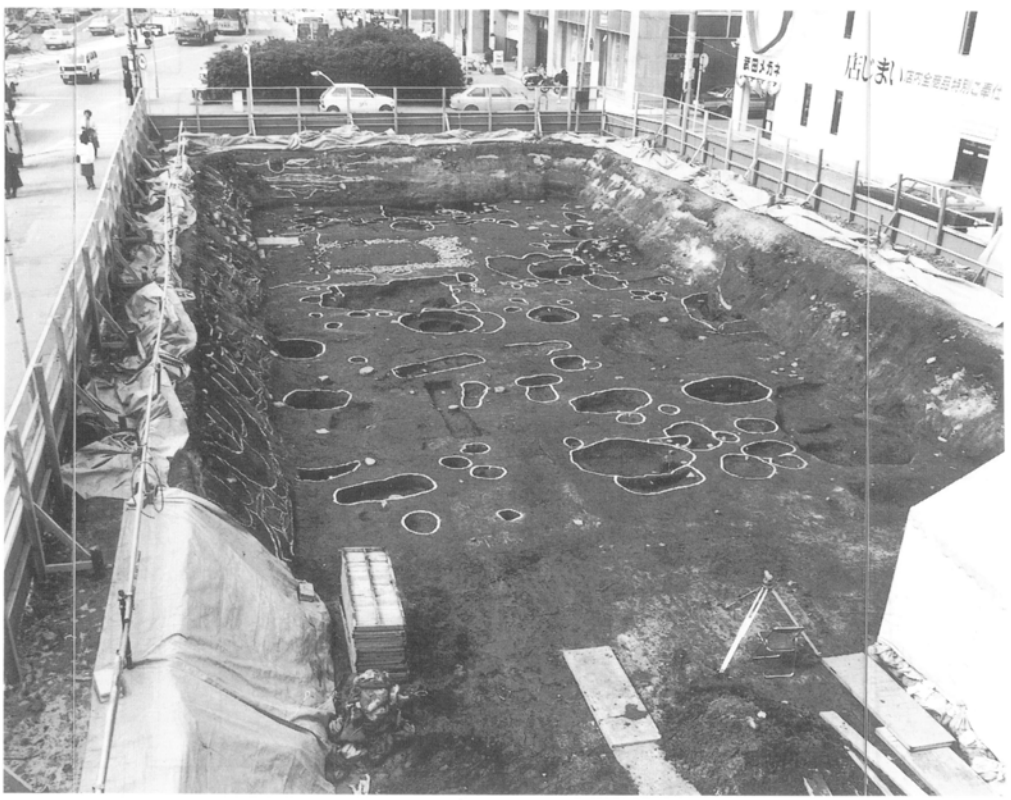
2．Ⅰ面の調査

Ⅰ面は，近現代の撹乱を取り除いた直下の遺構検出面である。現地表からは，1.8～1.95m下であり，標高3.95～3.8mをはかる。

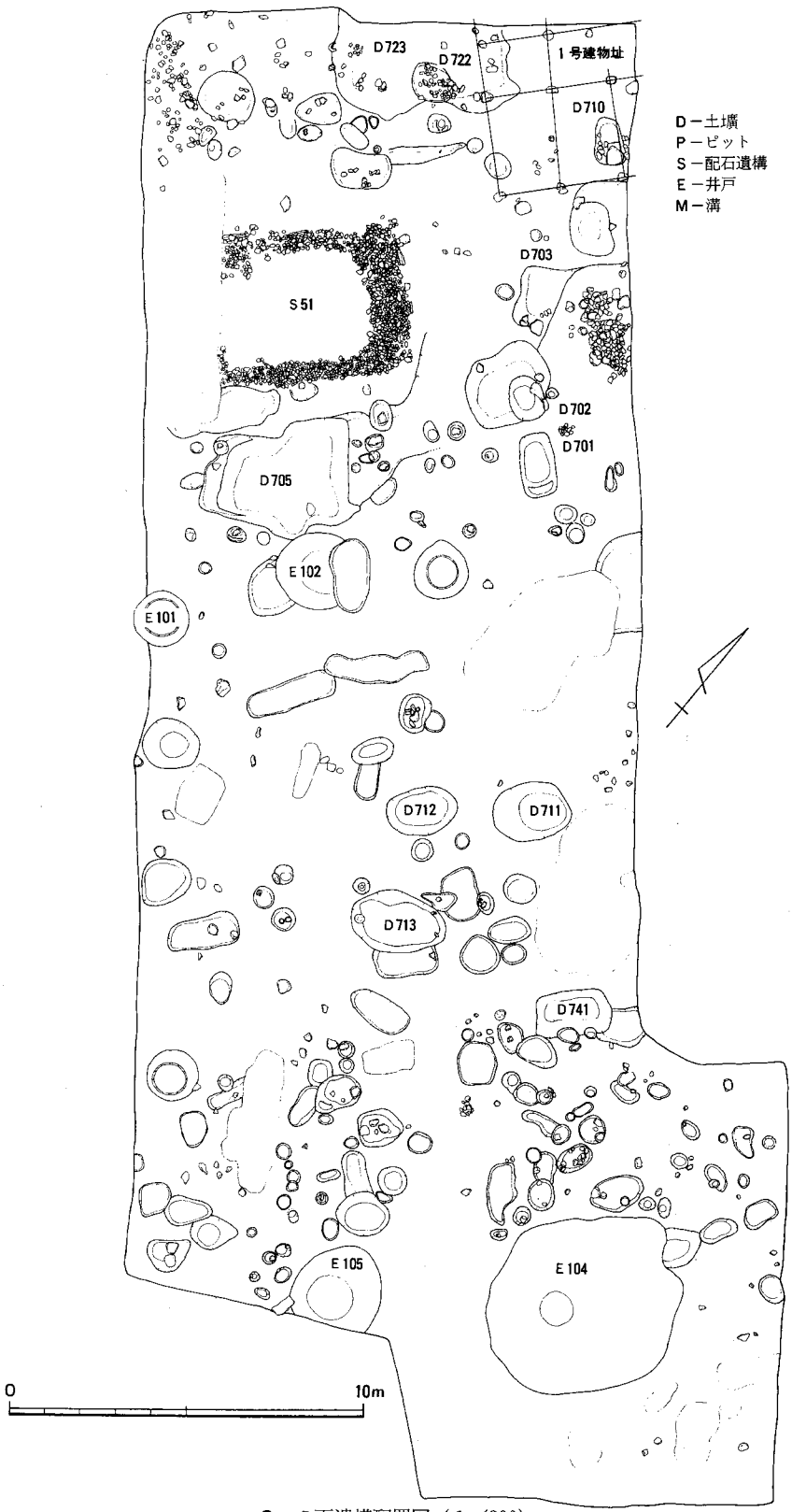
Ⅰ面で検出された遺構は，土壙38基，柱穴状小土壙117基，井戸６基，配石遺構２基，溝状遺構１基である。もとよりこれらの遺構のすべてがⅠ面にともなうものではなく，大部分はより上層から掘り込まれたものである。また，撹乱の下部も点々と残っていた。

Ⅰ面の年代観としては，16世紀後半と考えるのが妥当であろう。ただし，江戸時代に下る遺構も少なからず検出されている。741号土壙，763号土壙，102号井戸等からは，「寛永通寶」が出土しており，これらの遺構が少なくとも17世紀の第２四半世紀以降に下ることを示している。また，埋土中に焼土，壁土小槐，炭等をまじえる遺構が多く，戦国時代とりわけ天正14年（1586）の島津氏の博多焼き打ちから復興した際の遺構である可能性が考えられる。

なお，調査区西側壁の地表下50cm程で，「光長」銘の柄鏡が出土した。江戸時代の後期のものと考えられ，Ⅰ面から上の約１m程の堆積土は江戸時代を通じてなされたものと推測される。



5　Ⅰ面遺構全景（南より）



6　Ⅰ面遺構配置図（1／200）

3．II面の調査

II面は，標高3.75～3.6mで検出した面である。

II面においては，土壙33基，柱穴状小土壙162基，配石遺構２基，溝状遺構１基を検出している。

II面の年代観を示すものとしては，II面からIII面への掘り下げ段階で出土し，便宜的に不明遺構（ＳＸ）としたＳＸ05，ＳＸ08があげられる。ＳＸ05は地鎮遺構であり，出土した青磁碗は，15世紀前半におかれるものである（後述，P.130・131)。ＳＸ08は土師坏片と完形の天目茶碗とが出土したもので，おそらく土壙の一部であろう。天目茶碗は，瀬戸・美濃系の陶器で古瀬戸後期の製品で，15世紀の後半頃と考えられる。ＳＸ05・08ともにII面においては遺構としては確認されておらず，II面はＳＸ05・08よりも年代的に下るものと思われる。したがって，大雑把に，16世紀代をII面の年代として考えたい。

その他，Ｂ－01区北西隅では焼土のひろがりがみられ，その中心をやや掘り下げたところ，鍛冶炉の一部が検出された（790号土壙：後述Ｐ.137～138)。

7　II面遺構全景（南より）

8　II面遺構配置図（1／200）

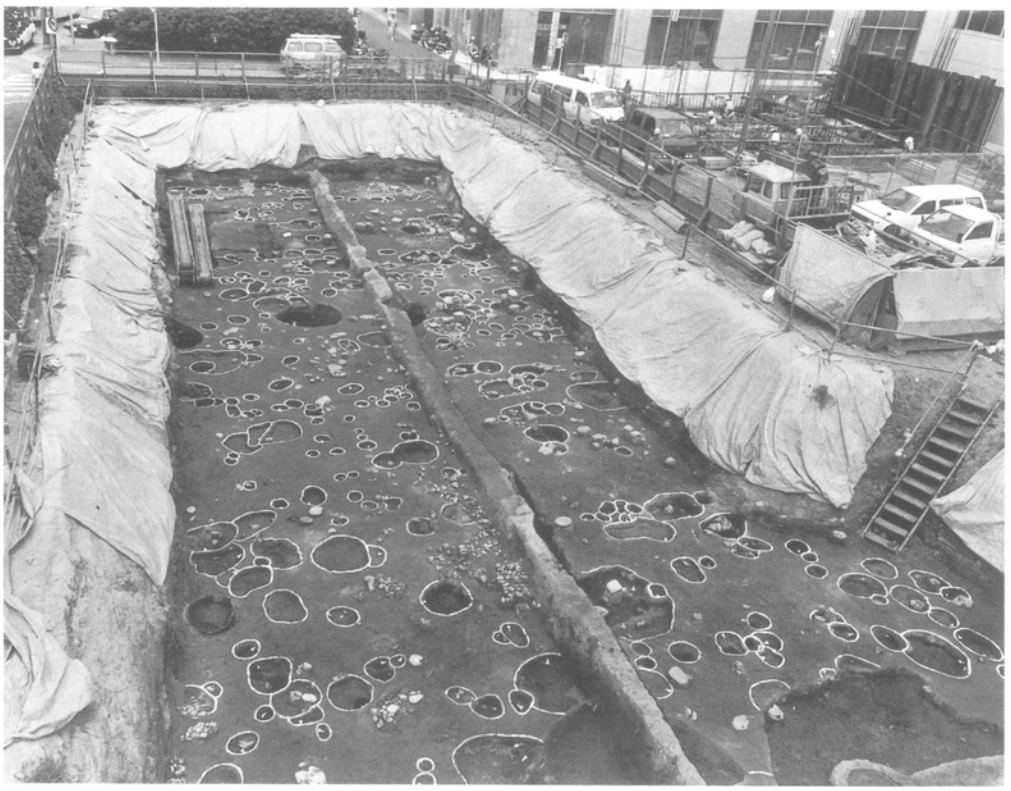
4．Ⅲ面の調査

Ⅲ面への掘り下げは７月17日よりとりかかったが，この過程で７基の不明遺構を検出した。ＳＸ05は地鎮遺構であった。ＳＸ06・09～11は，土師器溜り，ＳＸ07・08は数点の遺物が一カ所に集中したもので，ＳＸ06～11はおそらくⅡ面とⅢ面の間から掘りこまれた土壙状の遺構の一部であろう。

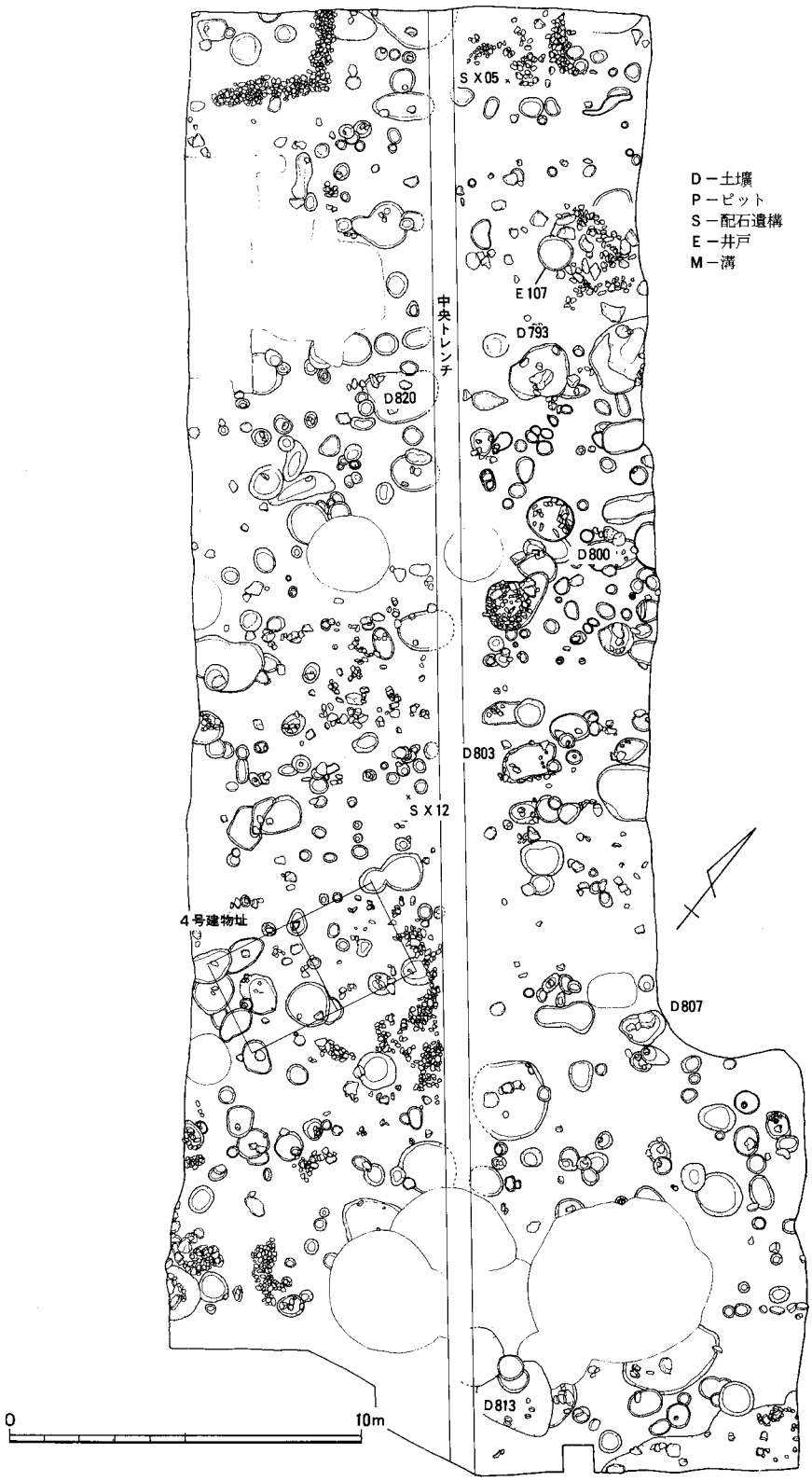
Ⅲ面は，標高3.3～3.2mで検出した遺構面である。

土壙60基，柱穴状小土壙298基，配石遺構３基を検出した。全面にわたって，礫が多くみとめられる。配石遺構として把えられるものと，建築物の礎石と思われるものとが混在している。配石遺構にも集石墓と考えられるものはなく，すべて建築物の基礎にかかわるものと考えることができよう。このような配石遺構・礎石は，一部Ⅳ面以下にも見られるものの，Ⅲ面以上に多くみとめられる。

Ⅲ面の年代としては，Ⅳ面で検出された遺構に15世紀に下る遺構がみられる点，Ⅱ面下のＳＸ05・08が15世紀代のものである点から，15世紀の中頃を中心に考えたい。



9　Ⅲ面遺構全景（南より）



10　Ⅲ面遺構配置図（1／200）

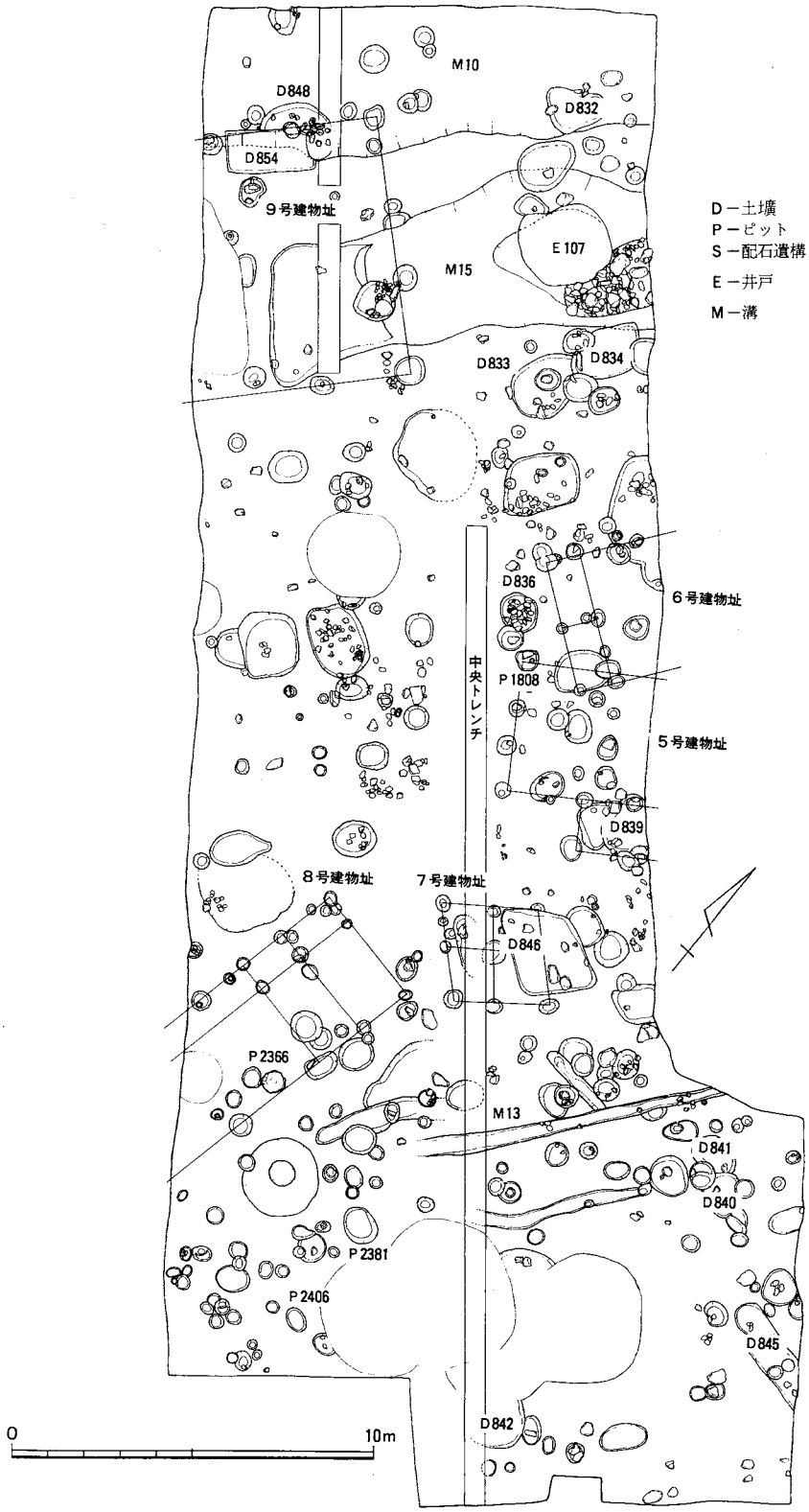
5．Ⅳ面の調査

Ⅳ面は，標高2.95～2.9mで検出した遺構面である。

Ⅳ面では，土壙28基，柱穴状小土壙289基，井戸３基，配石遺構２基，溝状遺構５基を検出した。調査区北側で検出した10号溝は，護岸に石積を持つもので，堀的な要素が強い。ただし片側を確認しているだけで溝幅等は不明である。15号溝は10号溝に平行して東に向って深さをます大溝であるが，東側は107号井戸と重複し，溝底を掘りそこなっている。13号溝は両側に板材をあてた側溝状のもので，14号溝と平行する。13号溝と14号溝との間は道路としての可能性を考えたいが，土層の観察では，同時関係は確認できなかった。2366号ピットは，焼き締め陶器の埋め甕遺構である。おそらく，町屋にともなう貯蔵用の甕であろう。

Ⅳ面で検出した遺構には，15世紀に下るものと14世紀代でおさまると考えられるものとがある。おおむね南側Ｃ－01・02区側で古く北側Ｂ－01・02区側で新しい傾向がある。調査区壁面の土層観察では確認できなかったが全体として北に向って生活面が下っている可能性がある。なお，Ⅳ面上では「文明六年」（1474）銘の墓石が出土しているが，これは折損後柱の根石として柱穴底におかれたもので，Ⅳ面の年代を示すものではない。

11　Ⅳ面遺構全景（南より）



12　Ⅳ面遺構配置図（1／200）

6．Ⅴ面の調査

Ⅴ面は，標高2.55～2.45mで検出した遺構面である。

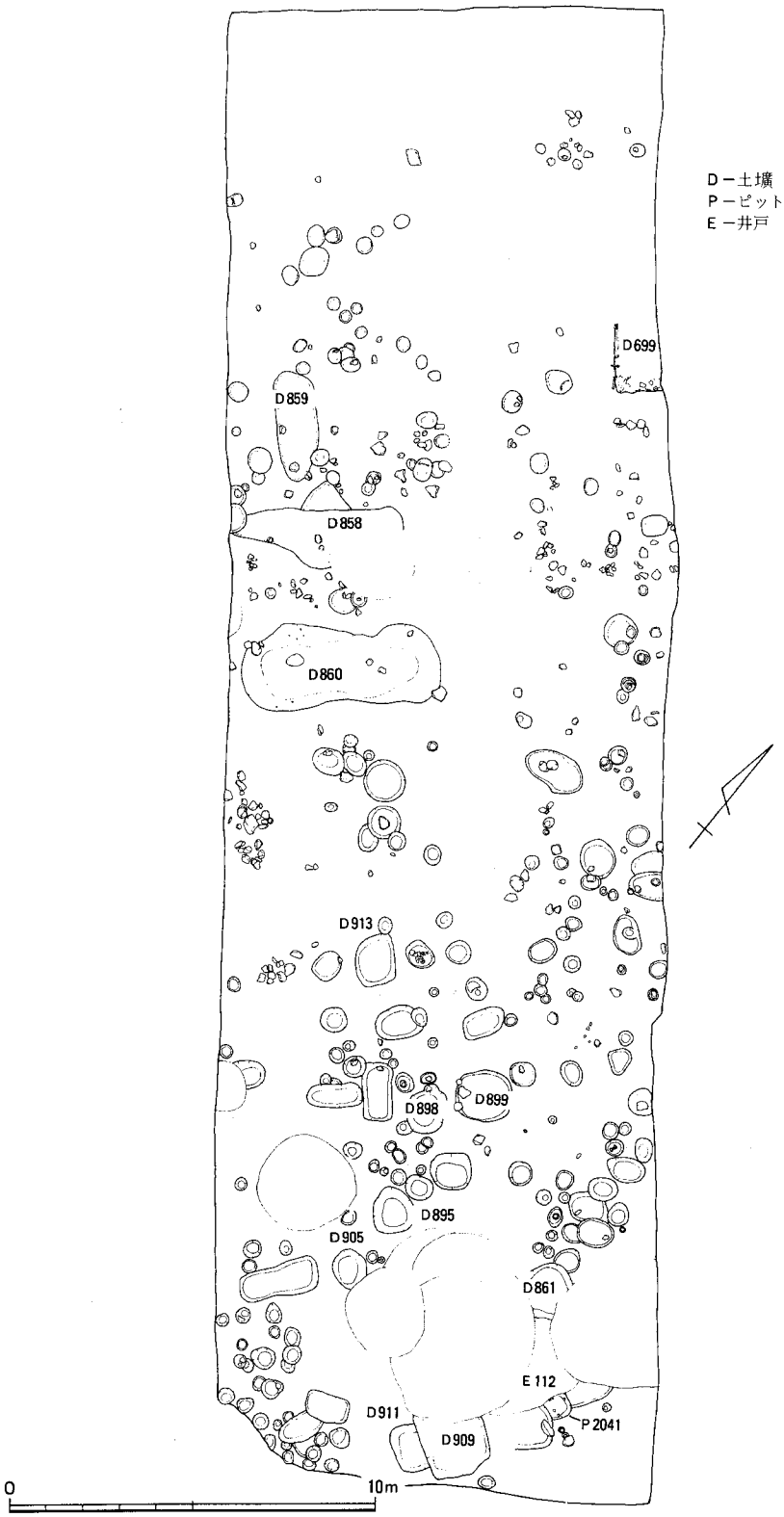
Ⅴ面では，土壙25基，柱穴状小土壙264基，井戸３基を調査した。

Ⅴ面においては，15世紀代に下りうる遺構は少なく，大部分は14世紀代の様相を示している。とりわけ，898号土壙と913号土壙は，2.4m程離れているにもかかわらず，遺物を接合することができ，14世紀前半代の特徴を示している。両土壙とも遺物の出土状況から後世の混入の可能性はなく，同時期に埋められた遺構であることは疑いない（後述，Ｐ.153～159)。Ⅴ面の年代としては，14世紀前半を主として14世紀代を考えたい。

なお，前述した様に，調査期間延長とのからみから，Ｃ－02区東側の張り出し部分については，Ⅴ面以下では調査を断念し，Ⅳ面まで調査して埋め戻した。

また，Ⅳ面からⅤ面への掘り下げ中，Ｃ－01区より「五銖」銭が一枚出土した。遺存状態は比較的良好である（Ｐ.227 巻頭図版)。

13　Ⅴ面遺構全景（南より）



14　Ⅴ面遺構配置図（1／200）

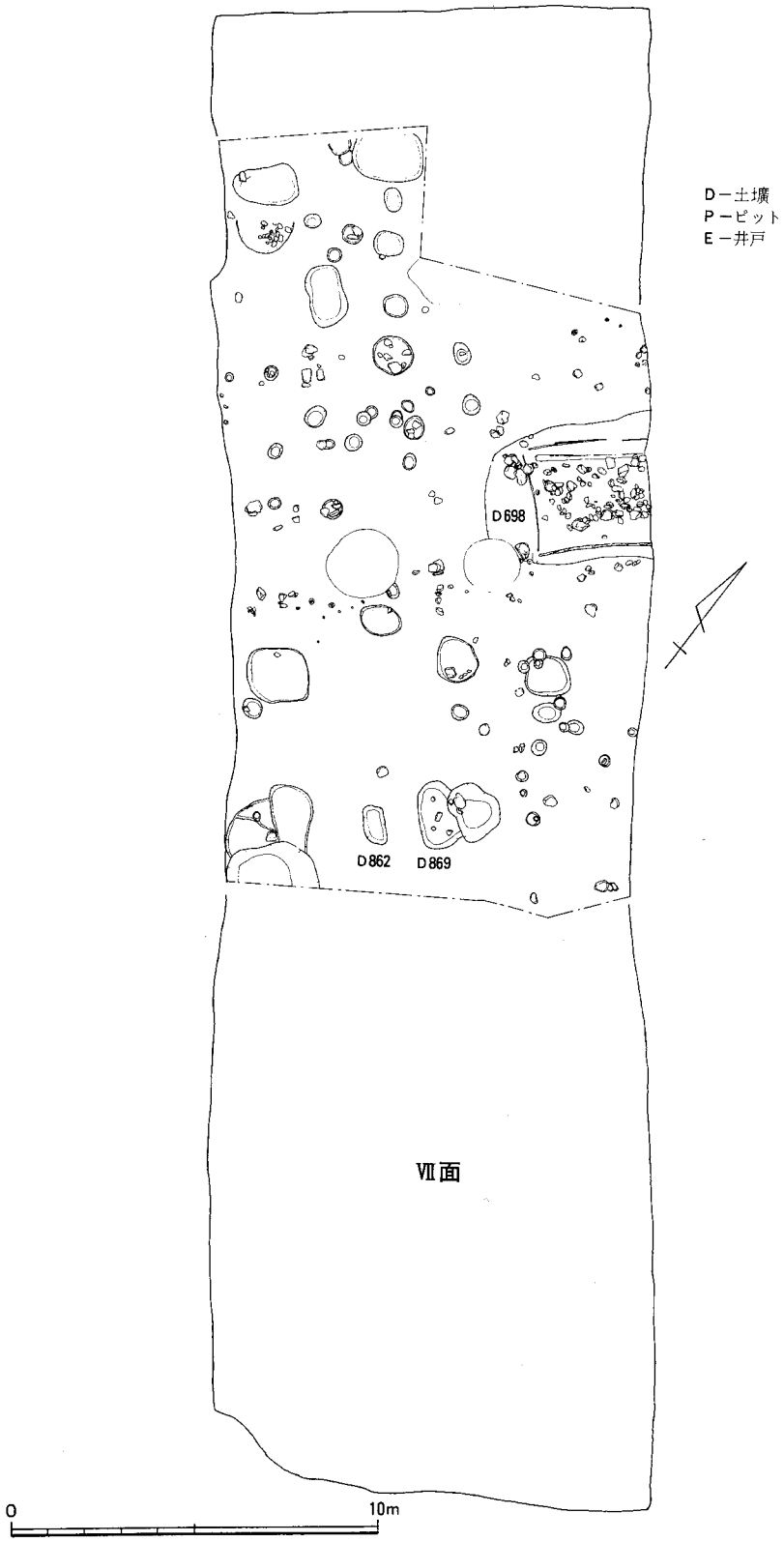
7．Ⅵ面の調査

Ⅴ面からの掘り下げは最終遺構面である砂層上面を目指したものであったが，調査区南部のC－01・02区で砂層を検出したのみでその北側は砂層が落ちこみ，厚い堆積土がみられた。その為，B－02・04区以北についてⅥ面を設定し遺構の検出，調査を行なった。

Ⅵ面は，標高2.25～2.05mで設定した面である。

Ⅵ面では，土壙13基，柱穴状小土壙42基を調査した。698号土壙（ＳＸ19）は，板で周囲を囲った溜枡状の遺構である。各種木製品を初め多くの遺物が出土した。遺物からみる限り，一部15世紀に下る可能性を持つ遺構である。862号土壙は，龍泉窯系の鎬蓮弁文青磁碗を２個副葬した墓壙である。14世紀前半を下らないと考えられる。Ⅵ面全体としてみると，698号土壙の年代がやや新しい可能性を持つ以外は，おおむね13世紀後半～14世紀前半をあてるのが妥当であろう。

15　Ⅵ面遺構全景（南より）



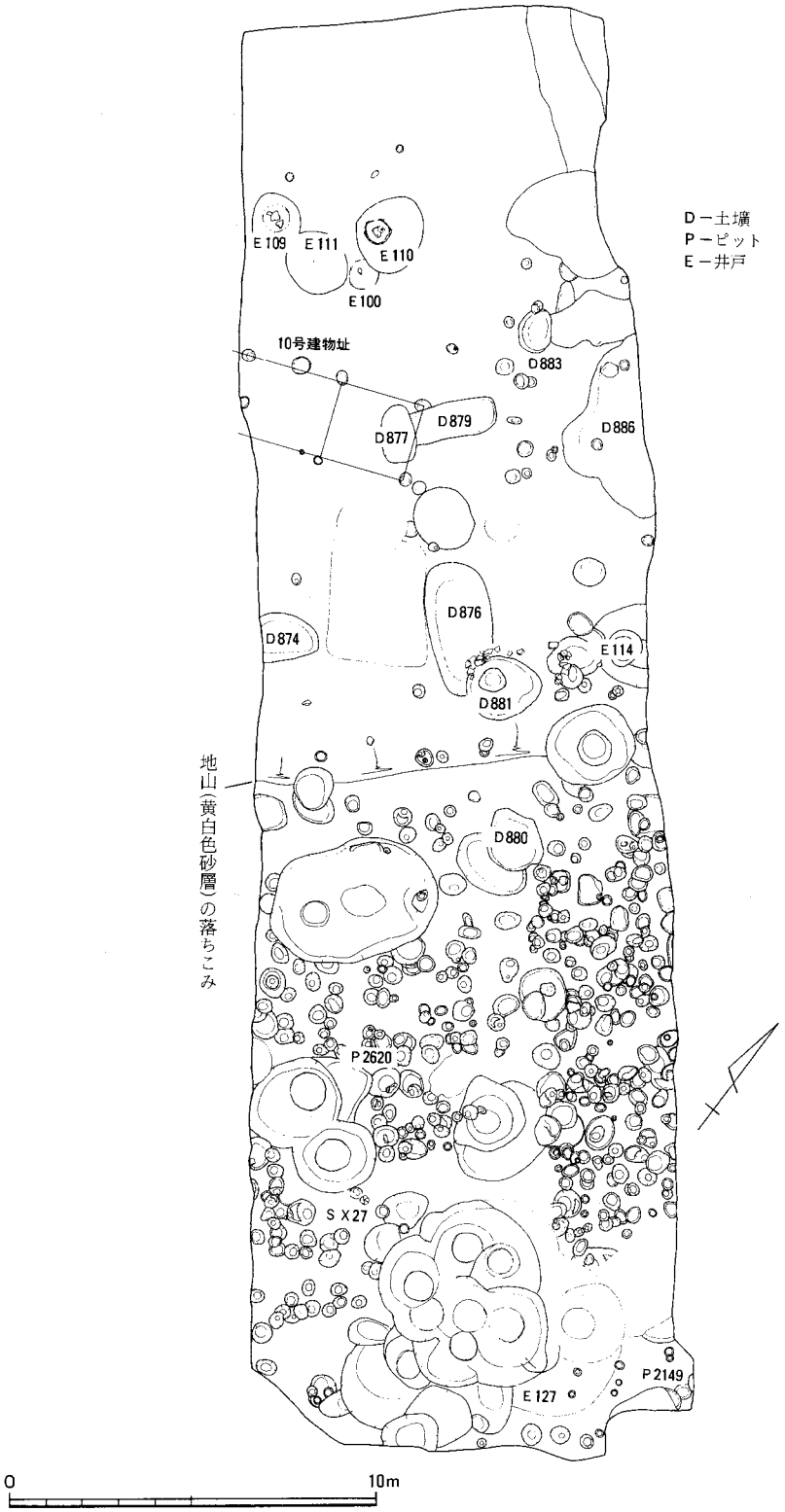
16　Ⅵ面遺構配置図（1／200）

8．Ⅶ面の調査

Ⅶ面は最終遺構面であり，標高2.3～1.0mで検出した。基盤の黄白色砂層は，Ｂ－03・04区とＢ－01・02区の境あたりから急激に北におちこんで行く。この調査区北半部のおちこみには，流れこんだ砂の堆積が厚くみられ，標高1.5m付近まで堆積がすすんだ後に遺構が掘りこまれている。

Ⅶ面で検出した遺構は，土壙21基，柱穴状小土壙390基，井戸12基，溝状遺構１基である。奈良時代にさかのぼる遺構はほとんど確認しえなかったが，Ｃ－01区において８世紀後半頃の地鎮遺構（ＳＸ27）を検出した。遺構が爆発的にふえるのは11世紀後半以後である。この頃には，北半部の湿地状の落ちは埋まりつくし，遺構がみられる様になる。877号土壙は，成人女性を埋葬した土壙墓である。遺存状態は決して良くはなかったが，全身分の人骨が検出された（Ｐ.172･173）。109号井戸・110号井戸は，12世紀後半から13世紀にかかる時期の井戸である。北半部では，11世紀前半以前の遺構は全くみられなかった。南半部は，かなり稠密に柱穴が集まっている。建物の規格性にかけるのか，復原しえた掘立柱建物はほとんどない。ただし，柱穴の並びには一定の方向性がみてとれる。

17　Ⅶ面遺構全景（南より）



18 Ⅶ面遺構配置図（1／200）

9．遺構と遺物

(1) 整理の記録

発掘調査は，前述の通りⅠ～Ⅶ面までの遺構面を基準に実施した。遺構の呼称である遺構番号も，検出した順につけている。しかし，それは必ずしも個々の遺構の属する年代に対応するものではない。そこで以下の記述にあたっては，検出した遺構面の如何によらず，遺構の年代観にしたがって述べることとする。遺構の年代観は，図化しえた遺物に限らずすべての出土遺物を通観して決定した。なお，記述における時期区分は，以上の点および博多遺跡群における土器編年が未だ確立していないことから，指標となる遺物を設定して大まかに括った。

近世　国産磁器（もっぱら古伊万里に代表される肥前系の染付)・唐津焼などを含む遺構。おおむね江戸時代にあたる。

中世Ⅲ期　中国明代の磁器（青磁，白磁，染付等）を出す時期。朝鮮陶磁器では，李朝の青磁，白磁，粉青沙器などがみられる。国内産陶器では，備前焼の出土量が飛躍的に増す。室町時代後半を主とする時代である。15～16世紀。

中世Ⅱ期　鎬蓮弁文の青磁，口ハゲの白磁碗・皿に代表される時期。土師皿・坏では，体部が直線的に開き，比較的器高の高いものがみられる様になる。鎌倉時代後半～室町時代前半。おおむね14世紀前半を中心にして，その前後を含む。

中世Ⅰ期　土師皿・坏では，外底部の切り離し技法として回転糸切り技法が確立し，前代までのヘラ切り技法はみられなくなる。中国磁器では，青磁が一般化する。青磁碗には，見込みに画花文・雲文などを描く。12世紀後半から13世紀代。

古代Ⅱ期　白磁に代表される時期である。土師皿・坏では，ヘラ切り技法から回転糸切り技法への転換期までを含む。11世紀後半から12世紀前半までを主とする時代。平安時代後期。

古代Ⅰ期　白磁の出現（大量輸入）以前の時期。中国陶磁器では，越州窯系青磁が比較的多くみられる。国産陶器である緑釉陶器，灰釉陶器もそれぞれの生産地から持ちこまれている。奈良時代から平安時代中頃までにあたる。8世紀から11世紀前半。

築港線第3次調査においては，中世Ⅲ期の遺構・遺物が最も多く，中世Ⅲ期を更に細分することも可能と思われる。しかし，今回の整理においては時間的制約から充分な検討ができていない。したがって，時期区分の細分，遺構の編年的な位置付けは別の機会にゆずることとし，今回は，第2次調査の報告時に用いた上の時期区分によることにする。

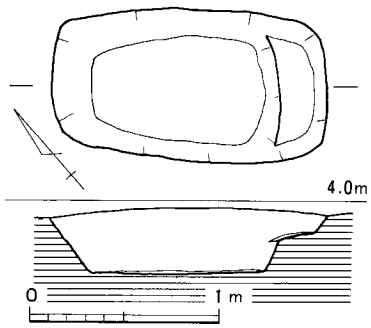
(2) 近世の遺構

① 土壙

701号土壙

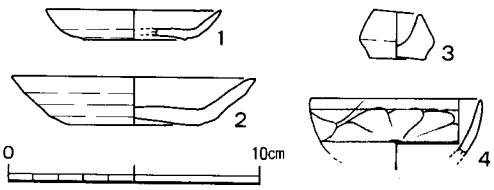
Ⅰ面B－02区で検出した土壙である。長軸約 148 cm 短軸約82cmの隅丸長方形を呈する。南辺側のみ，二段掘り状をなす。深さは36cmをはかる。

遺物は，土師皿・坏，近世陶器，備前焼甕，瓦質すり鉢などが出土した。小片で，実測しえたものは，4点にとどまった。



19 701号土壙実測図（1／40）

1～3は**土師器**である。**1**は皿で，口径7.0cm，底径4.1cm，器高1.2cmをはかる。**2**は坏で，口径9.8cm，底径5.0cm，器高1.9cmをはかる。いずれも回転糸切り底に板状痕をとどめ，内底部にナデを施す。**3**は小壺である。口径1.8cm，底径2.2cm，器高2.0cmである。外底部は糸切りする。体部下位が横に張って稜がつく。**4**は，**肥前系染付**である。やや青味をおびた白色の胎に，簿い紺色で花文を描く。口径は6.9cmをはかる小碗である。

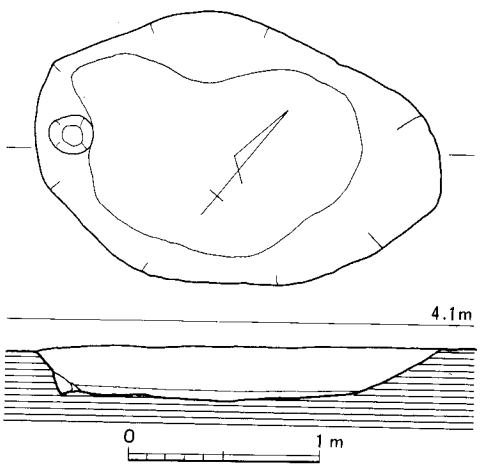


20 701号土壙出土遺物（1／3）

713号土壙

Ⅰ面B－03区とB－04区にまたがって検出された不整形の大形土壙である。長軸約 220 cm，短軸約146cm，深さ約30cmをはかる。

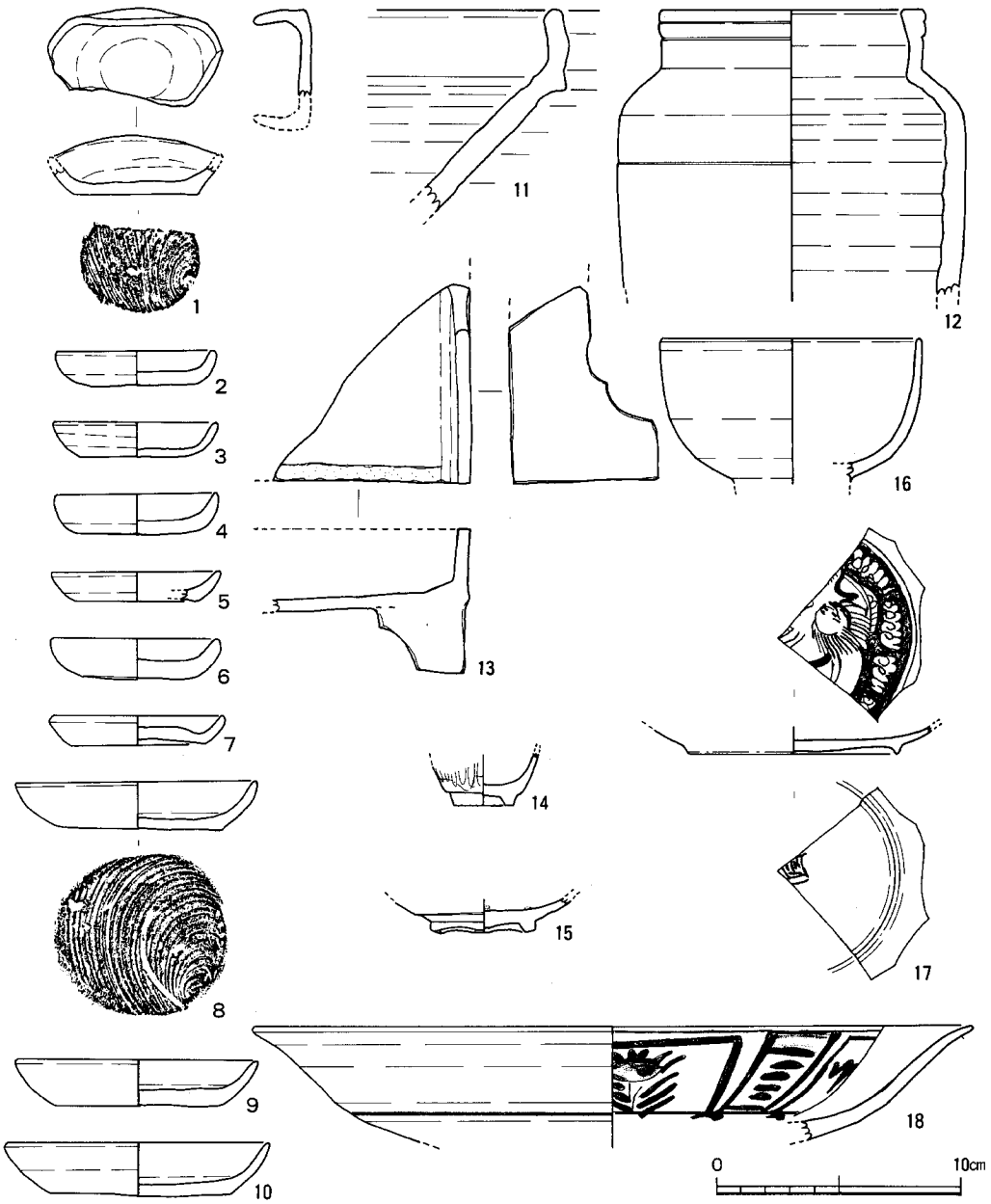
遺物は，土師皿・坏，備前焼，瓦，瓦質土器，青磁，白磁，染付，近世国産陶器などが出土した。



21 713号土壙実測図（1／40）

1～10は**土師器**である。**1**は皿の両側縁を上方にひねり上げた，いわゆる耳皿の形状を呈する。外底部は糸切りする。内底部はナデを施すが，外底に板状痕はみとめられない。口径は長径で7.2cm，短径で4.4cm，底径5.0cm，器高1.6～2.4cmをはかる。**2～7**は皿である。

2・4・6は，外底部に指頭圧痕をとどめ，糸切り痕はみられない。手捏ねであろうか。口径は6.6～7.0cm，器高は1.5～1.7cmをはかる。**3・5・7**は，外底部を糸切り，内底部をナデる。板状痕はみとめられない。口径6.8～7.2cm，器高1.2～1.4cm。**8～10**は坏である。外底部を糸切りする。内面のナデはみられず，体部とともに回転ナデで調整している。**8**は，逆糸切りで



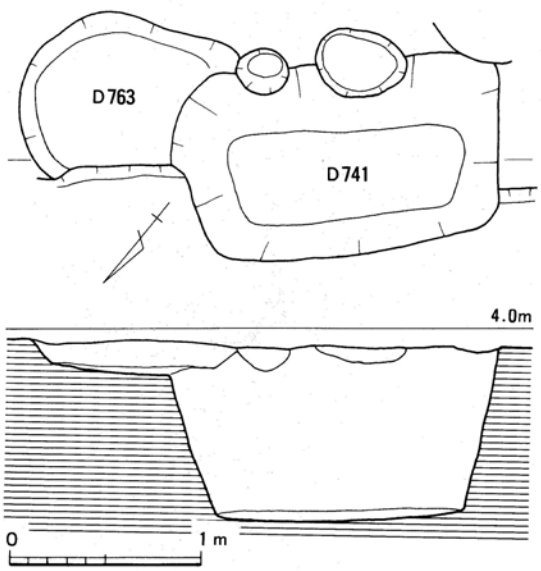
22　713号土壙出土遺物１（１／３）

ある。口径10.0～10.9cm，器高2.0～2.2cm。**11**は**備前焼**のすり鉢である。備前焼Ⅴ期に該当する。**12**は**国産無釉陶器**の壺である。口径11.0cmをはかる。**13**は，**瓦質土器**である。方形の盆形の四隅に脚のついたもので，一隅のみの破片である。**14・15**は，**白磁**である。**16**は国産の陶器碗である。**17**は中国明代の**染付**で，見込みに団龍文を描く。**18**は**肥前系染付**の大皿である。口

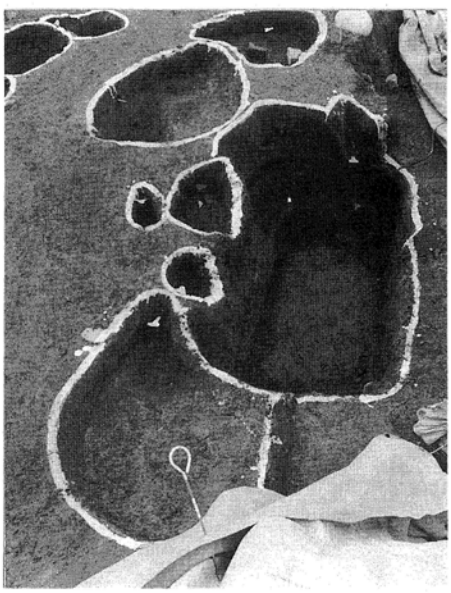
23　713号土壙出土遺物２（約１／３）

径29.8cmをはかる。その他，土鍋も出土している。

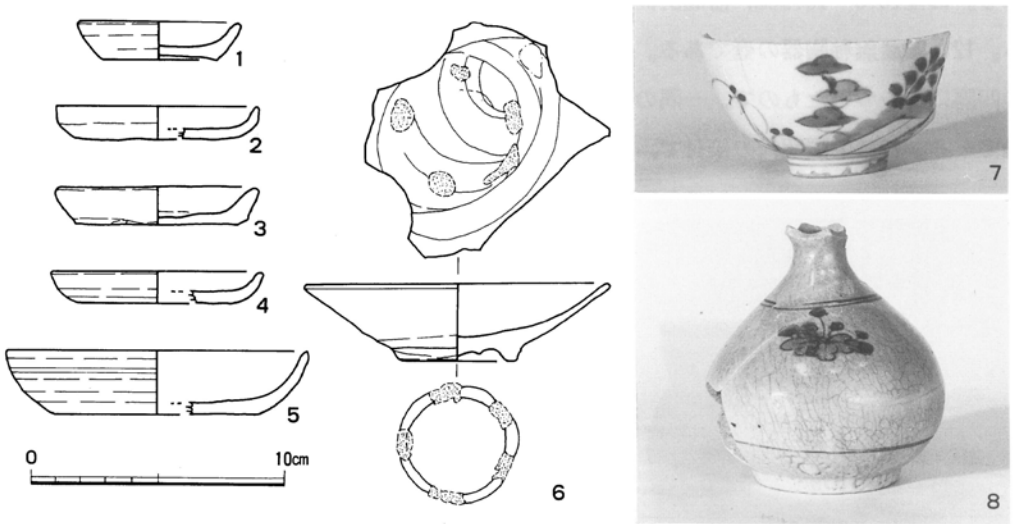
741号土壙



24　741号土壙実測図（１／40）



25　741号土壙（東より）



26 741号土壙出土遺物（1／3）

741号土壙は，Ⅰ面B－04区とC－02区にまたがって検出された長方形の土壙である。長辺約160cm，短辺約105cm，深さ約95cmをはかる。

Fig.26の**1**～**5**は**土師器**である。**1**～**4**は皿，**5**は坏で，底部を回転糸切りする。**1**・**2**の底部には板状痕がみとめられる。**1**は口径6.4cm，器高1.5cm，**2**～**4**は口径8.0～8.4cm，器高1.25～1.5cm，**5**は口径12.0cm，器高2.5cmをはかる。**6**は，李朝の**粉青沙器**の皿である。内底から体部上半にかけて白化粧土をかけ，刷毛目をいれる。内底と高台畳付に5ヶ所の砂目がある。**7**は**肥前系染付**の碗である。**8**は**陶器**壺で，白色の釉に藍褐色で花文を描く。その他，寛永通寶が出土した。

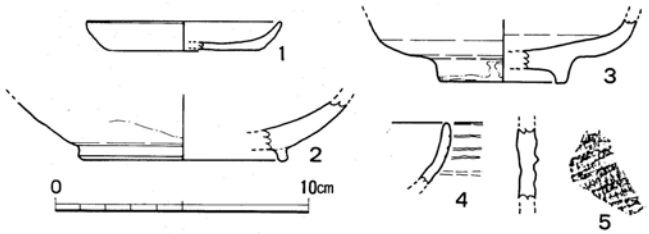
776号土壙

Ⅱ面B－03区で検出した土壙である。径約124cmの不整形を呈し，深さは約38cmをはかる。壙底には犬頭大の礫が散乱する。

遺物は，土師皿・坏，青磁，象嵌青磁，白磁，備前，瀬戸など多岐にわたっている。

1は**土師器**の皿である。底部を糸切りし，板状痕がつく。内底のナデはみとめられない。口径7.8cm，器高1.15cm。**2**は**灰釉陶器**の碗である。

27 776号土壙（北より）



28　776号土壙出土遺物（1／3）

灰色のややキメの粗い胎土に灰緑色の半透明釉がかかる。**3**は，**瀬戸焼**の丸碗である。登窯期のものと思われる。白肌色のキメのやや粗い胎土に茶褐色の鉄釉がかかる。**4**は李朝の**象嵌青磁**片である。**5**は**玄海灘式製塩土器**の小片である。外面にはタタキ目が強くのこる。

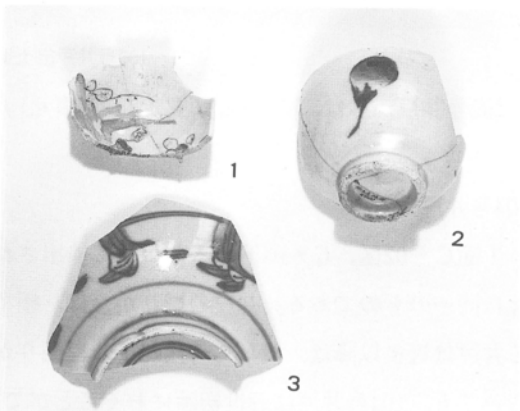
② 井戸

101号井戸

Ⅰ面B－03区で検出した井戸である。井戸側に井戸瓦を用いた井戸で，下限は近代に下る可能性もある。

国産陶器，染付等を多量に出土した。

1・2は**肥前系染付**である。**1**は赤で背景を描いた後，青で枝と葉の輪郭を描き，葉の部分に金をぬる。**2**は，青味をおびた白磁に茄子を描く。**3**は**明代の染付**である。体部外面に官人を描く。

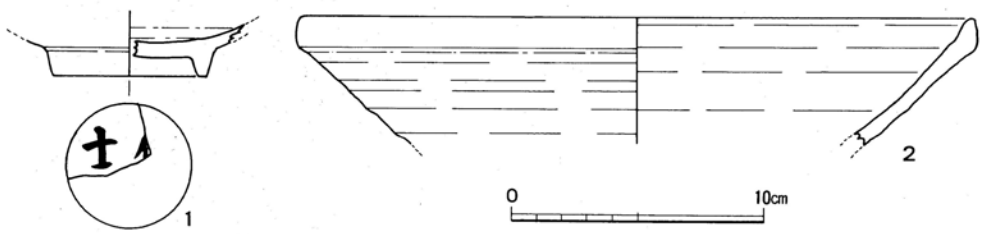


29　101号井戸出土遺物（約1／3）

102号井戸

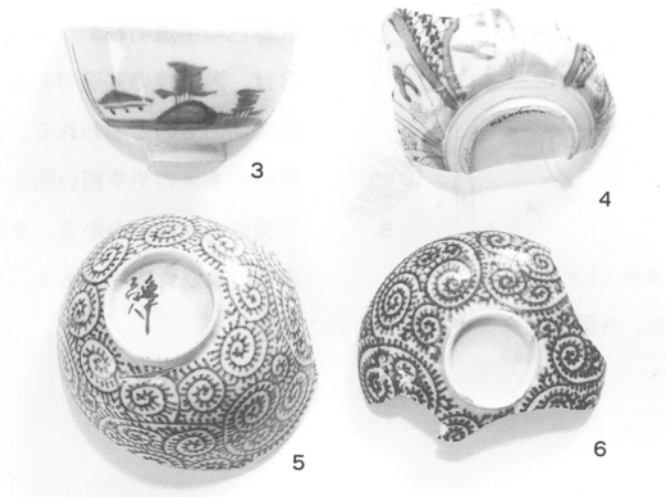
Ⅰ面B－01区で検出した井戸である。

Fig.30に示したのは，いずれも中世の遺物である。**1**は**白磁碗**である。見込は輪状に釉をかきとる。外底には墨書の一部が残り，「[イ]士」と読める。**2**は，**東播系須恵器**のこね鉢である。小砂粒まじりの胎土は，キメはやや粗めだが粒調はよくととのい，焼成も須恵質で堅く，青灰



30　102号井戸出土遺物1（1／3）

色を呈する。口縁部外面は，帯状に黒くテリがつく。小片であり，片口部を残さない。**3～6**は**肥前系染付**である。**5**の外底部には「魚平吉八」の文字がはいっている。



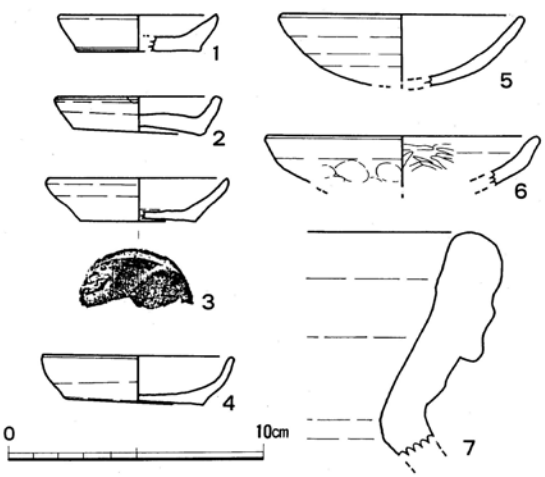
31　102号井戸出土遺物２（約１／３）

102号井戸からは，その他，「寛永通寶(裏元)」，「紹聖元寶」が出土している。

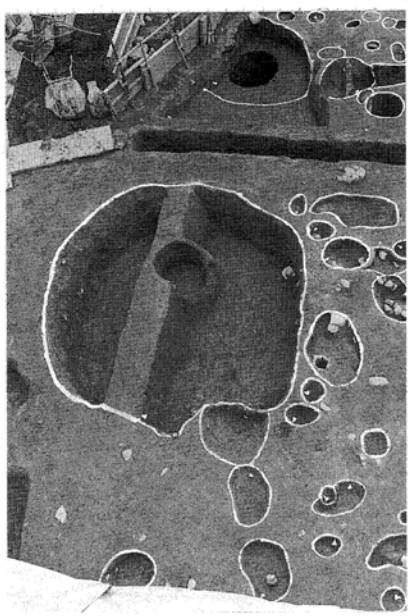
104号井戸

Ⅰ面C－02区，C－04区にまたがって検出された井戸である。Ⅴ面で番号をつけた113号井戸とは同一のものである。井戸の掘りかたは，極めて大きく直径4.4mをはかる。博多で検出される井戸は近世以降は，概して時代が下る程掘りかたが小さくなるという傾向にある。この点からみても，104号井戸は近世初頭におくことができる。

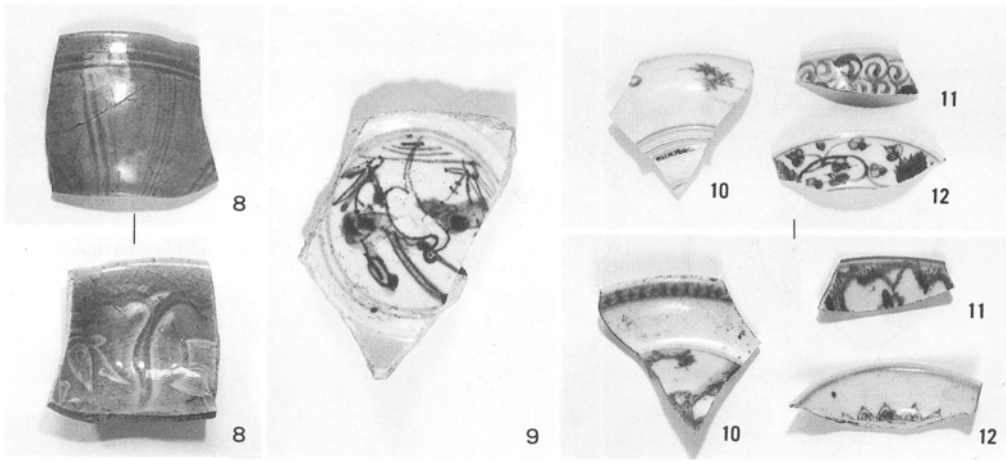
このことは，遺物の上からもうかがわれる。すなわ



32　104号井戸出土遺物１（１／３）



33　104号井戸（東より）



34　104号井戸出土遺物２（約１／３）

ち，出土遺物で最も後出すると思われるものは，江戸時代初頭の様相を示している。

１～５は，**土師器**である。**１～４**は皿で，底部を回転糸切りする。**３**は外底部をナデて糸切痕を消している。板状痕・内底ナデともにみとめられない。口径6.2～7.6cm，器高1.45～1.9cm。**５**は**早島式土器**の椀である。高台は剝離している。**６**は**瓦器**皿である。表面は銀化して光沢をもつ。**７**は**備前焼**の大甕である。口縁は幅広に垂れて，ヨコナデによる凹凸が強くつく。**８**は**青磁**碗である。内面に宝尽しの印文が施される。**９～12**は**明代の染付**である。**９**は明末の特徴を示し，16世紀末～17世紀初頭におかれるものである。

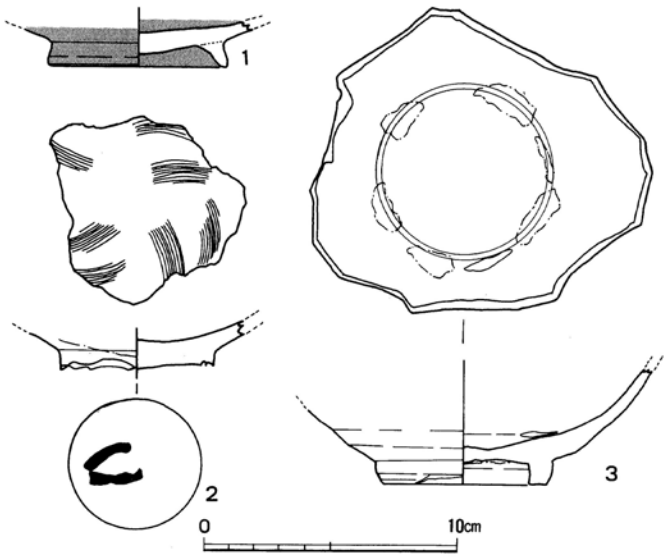
105号井戸

Ⅰ面Ｃ－01区とＣ－03区にまたがって検出された井戸である。掘りかたは比較的大きく、直径210cmをはかる。

肥前系染付，陶器等が多く出土している。Fig.36に示したのは，いずれも古代・中世の遺物である。

１は**黒色土器**の碗である。内面は密にヘラミガキを施す。外面は

35　105号井戸（南より）



36　105号井戸出土遺物（1／3）

高台を接着する際のヨコナデが強くみとめられる。高台内の中央には，ヘラ切り痕が残されている。全面に炭素が吸着し，黒褐色を呈する。**2**は，**白磁**の碗である。見込みには，櫛描文が施される。外底部には墨書が残る。数字の「八」ともみられるが，字体が崩れており，断定はできない。**3**は**高麗青磁**の碗である。濃灰色の胎土に，灰緑色の不透明釉を施す。見込みまわりには，目痕が5ヶ所ついている。高台畳付は釉を拭き取って露胎とするが，そこにも5ヶ所の目痕がみとめられる。その他，「元祐通寶」が出土している（P.229，表4）。

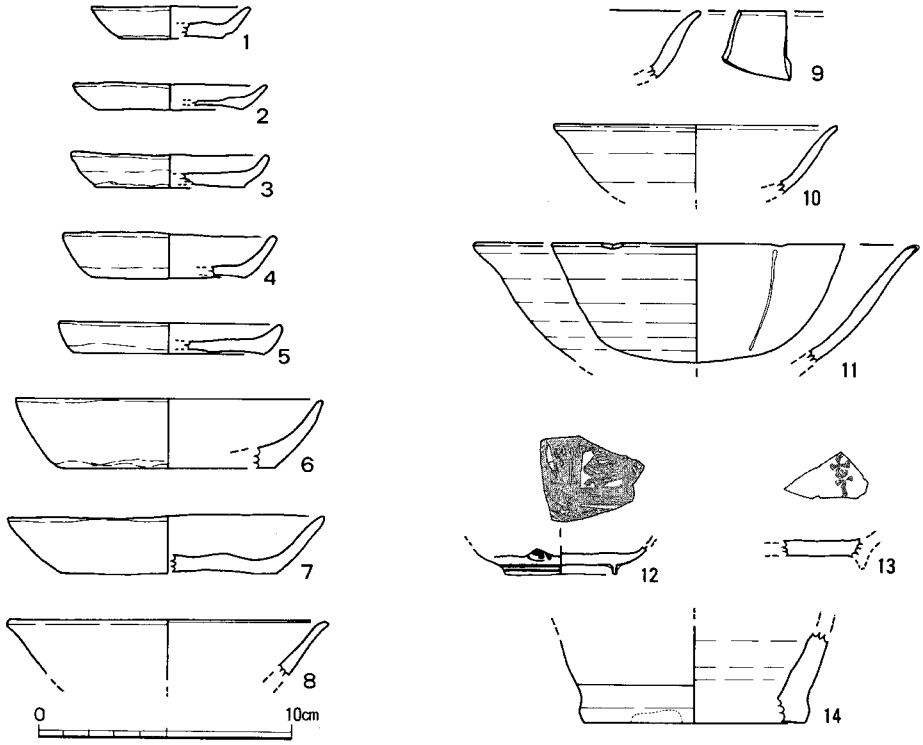
37　白磁碗外底部墨書

112号井戸

V面C－02区で確認した井戸である。104号井戸と切り合い関係にあり，またI面以下の調査時に設定した中央トレンチにかかっていた為，その検出が遅れた。本来はI面上において検出されるべき遺構である。

若干の近世陶磁器を含む為に，近世の遺構として位置付けたが，調査時における104号井戸掘りかたからの遺物混入を想定すれば，大多数の遺物の示す通り，中世Ⅲ期の井戸である可能性もある。

1～**8**は**土師器**である。**1**～**5**は皿で，底部を糸切りする。**1**は口径6.4cmと小形である。**2**～**4**は口径7.8～8.6cmをはかる中形品，**5**は口径9.0cmに対し器高1.2cmと浅くやや大形の皿である。**6**～**8**は坏である。**6**・**7**は口縁端部を丸くおさめるが，**8**は外方にひねり出し気味である。口径12.35～12.85cm，器高2.8～3.0cmをはかる。底部は回転糸切りをする。**9**は**須恵器**の坏である。112号井戸は，平安時代の127号井戸とも切り合っており，127号井戸からの混入遺物であると思われる。**10**・**11**は**白磁**である。**10**は口唇部の釉をふきとる，いわゆる口ハゲの碗である。



38 112号井戸出土遺物（1／3）

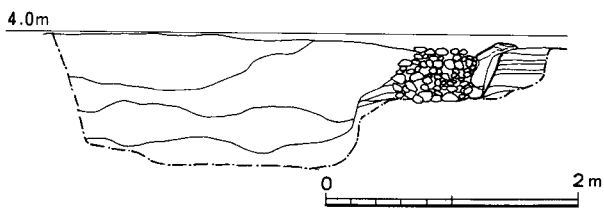
12・13は，**明代の染付**である。**14**は，**青磁**の壺底部である。胎土は灰色を呈しやや粗であるが，混りものはみられない。釉は灰色～淡オリーブ色の半透明釉で，釉層はうすい。越州窯系の青磁であると思われる。

③　配石遺構

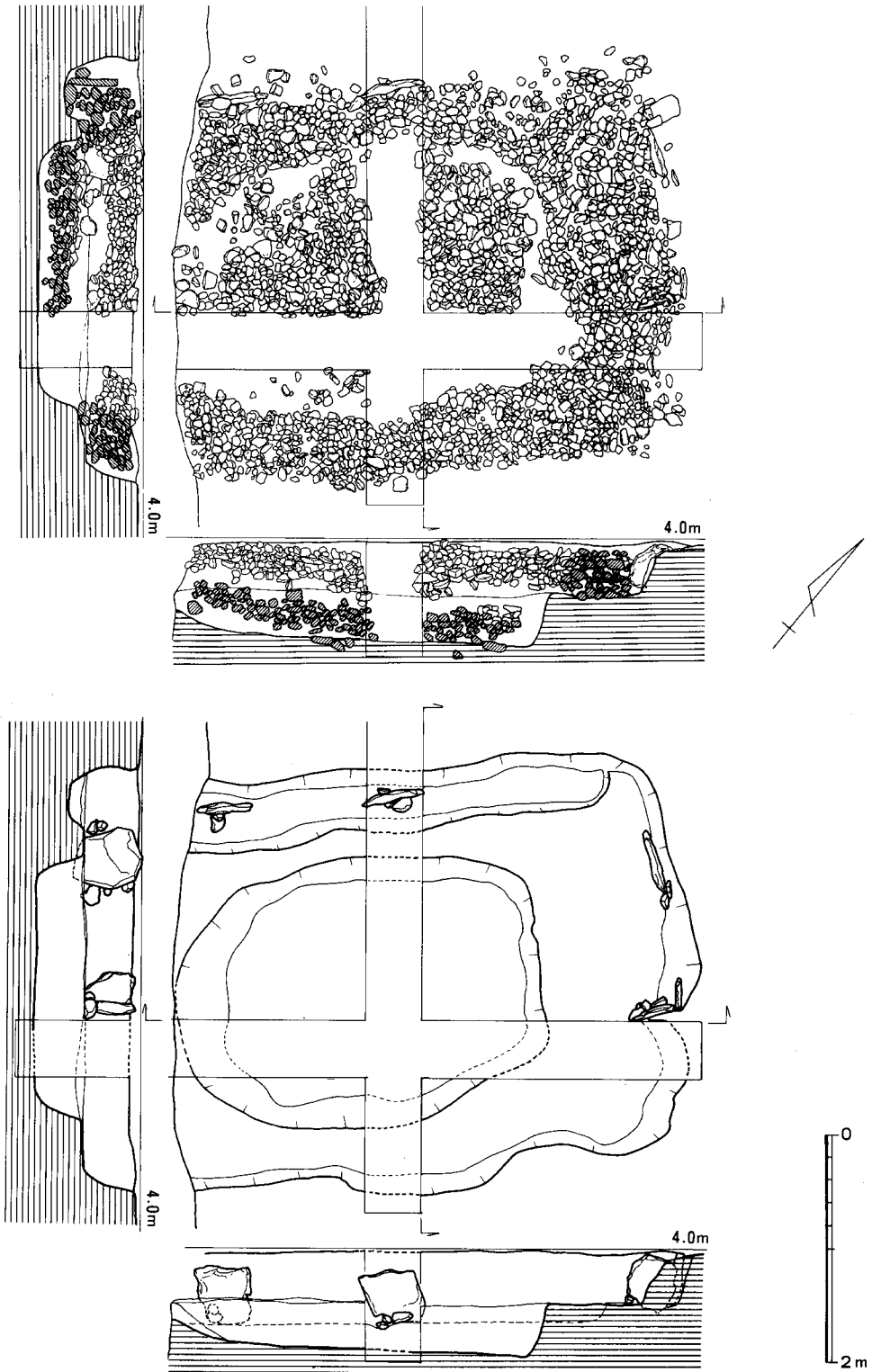
Ⅰ面からⅢ面にかけては，配石遺構が多くみられる。配石遺構には，大別して浅く溝状土壙を掘り礫をつめる**列石**，土壙の壁および周囲に礫を配した**配石土壙**，一定の範囲に礫を集めた**集石**とがある。以下の記述においては，配石遺構の形状を表わすのに，この分類を用いる。

51号配石遺構

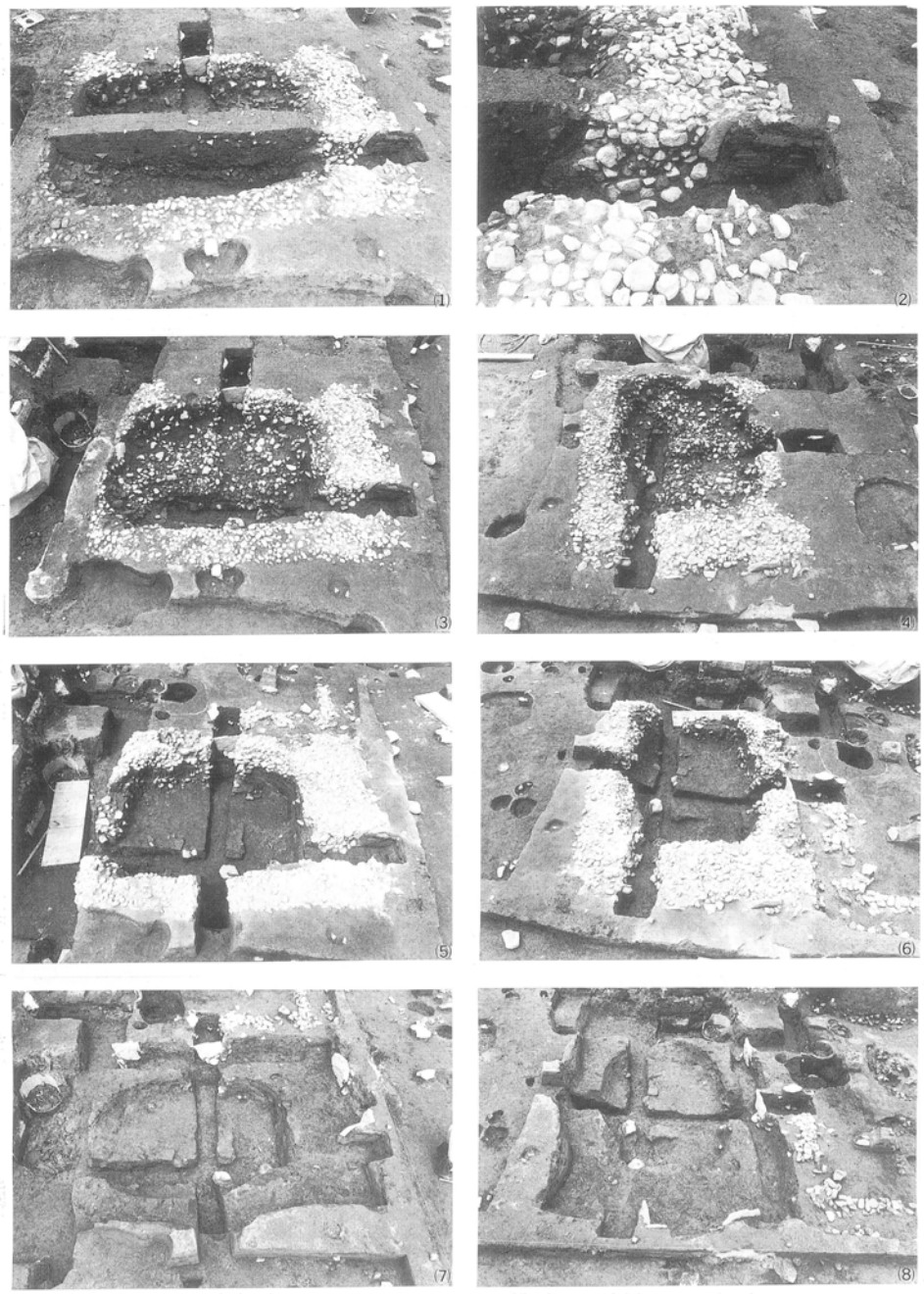
Ⅰ面Ｂ－01区で検出した配石土壙である。検出当初は方形列石として考えたが，方形区画内に焼土が多いためグリッドの東西軸方向にトレンチを設定した。その結果，大形の土



39 51号配石遺構東西断面実測図（1／60）

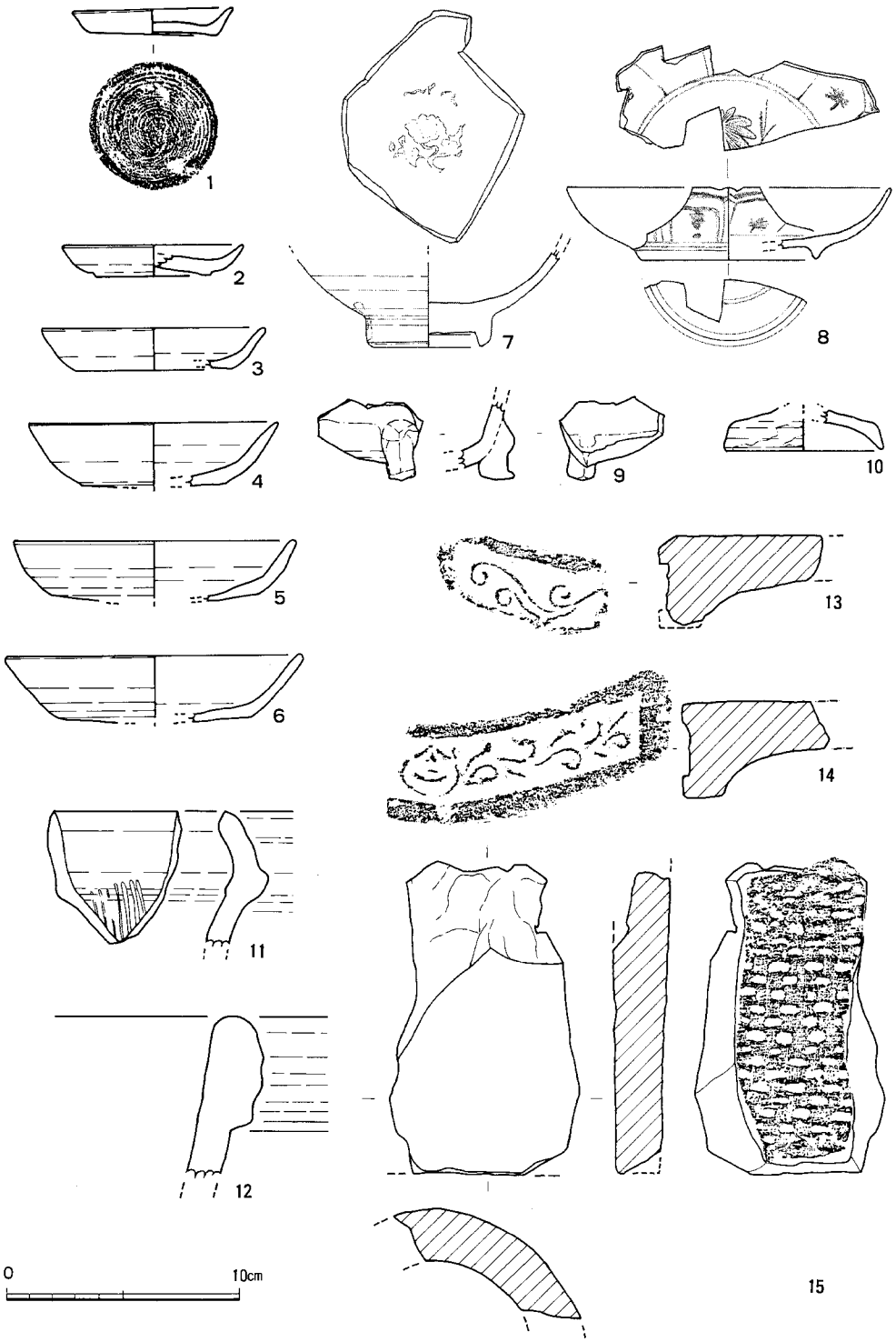


40 51号配石遺構実測図（1／60）



41　51号配石遺構

(1)　トレンチ断面（南より）　(2)　トレンチ石積状況（南より）　(3)　埋土除去状況（南より）
(4)　同左（東より）　(5)　床面礫除去状況（南より）　(6)　同左（東より）
(7)　完掘状況（南より）　(8)　同左（東より）



42 51号配石遺構出土遺物（1／3）

壙の壁および床に礫を敷きつめたものであることを確認し，配石土壙として掘り上げた。

土壙の構造は，まず外枠4.5m以上×3.4m，内枠3.3m×2.3mの２段掘りの土壙を掘る。ついで，外枠の壁に数ヶ所（確認できた限りで４ヶ所）板石を立てる。そして，その内側すなわち一段目のプラットホーム部分に礫を積み上げ，遺構の四壁とする。さらに内側の二段目の床にも礫を敷いて積みあげ，遺構の床とする。したがって，できあがった遺構の形としては，礫壁と礫床をもつ，丁度内枠の大きさの枡形の凹みとなる。より仔細にみると，土壙一段目の北辺は，溝状にほりくぼめて，その中に板石を立てている。また，東壁中程の板石は２枚で，１枚は壁にそって，もう一枚はこれに辺をそろえて壁に直交して立てられている。この直交する板石を支持する為か，土壙のほりかたもこの箇所だけ直角に張り出して掘られている。

51号配石土壙の性格については，発掘調査時の所見および出土遺物の検討からは判明しなかった。中央を東西に設けたトレンチの観察からは，51号配石遺構に水がたまったと考えられる要素はなく，溜枡として露天にさらされていたとは考えがたい。一応，土蔵のような大形の建物の半地下式の下部構造と考えておきたい。

Fig.42に示した**１～６**は**土師器**である。**１・２**は皿，**３～６**は坏で，いずれも底部は糸切りし，内底部をナデる。外底部に板状痕はみとめられない。法量からみて，**１・２**(口径7.0～8.0cm，器高1.2～1.4cm)，**３**(口径9.8cm，器高1.8cm)，**４～６**(口径11.0～13.0cm，器高2.8～2.9cm)の３種にわけられる。**７**は**青磁**の碗である。見込み中央に印花文をもつ。高台畳付から内側は，露胎となる。**８**は**肥前系染付**の皿である。口縁部は刻みを入れて輪花につくる。高台畳付は，釉を拭き取って露胎となる。この部分には，砂の付着がみられる。**９・10**は**陶器**である。**９**は香炉の獣脚部分と考えられる。暗茶褐色の胎に，暗緑褐色の釉がかかる。釉は光沢強い。**10**は蓋としたが，皿の可能性もある。淡褐色の胎に，黒褐色の釉がかかる。釉は表面があれており，光沢にかける。**11・12**は**備前焼**である。**11**はすり鉢で，備前焼Ⅴ期の特徴を示す。**12**は甕の口縁である。口縁部は幅広く垂れて肥厚し，内外ともヨコナデによる凹凸を強くとどめる。**13・14**は，**軒平瓦**の瓦当である。唐草文の彫りは浅く細い。**15**は**丸瓦**である。**13～15**はいずれも焼成があまく，淡茶褐色を呈する。

その他，「開元通寶」「洪武通寶」「永楽通寶」「至大通寶」「皇宋通寶」「天聖元寶」等**銅銭**が８枚出土している。

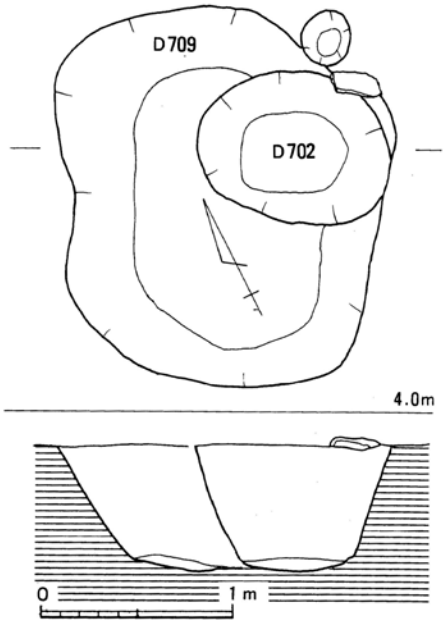
(3) 中世Ⅲ期の遺構

① 土壙

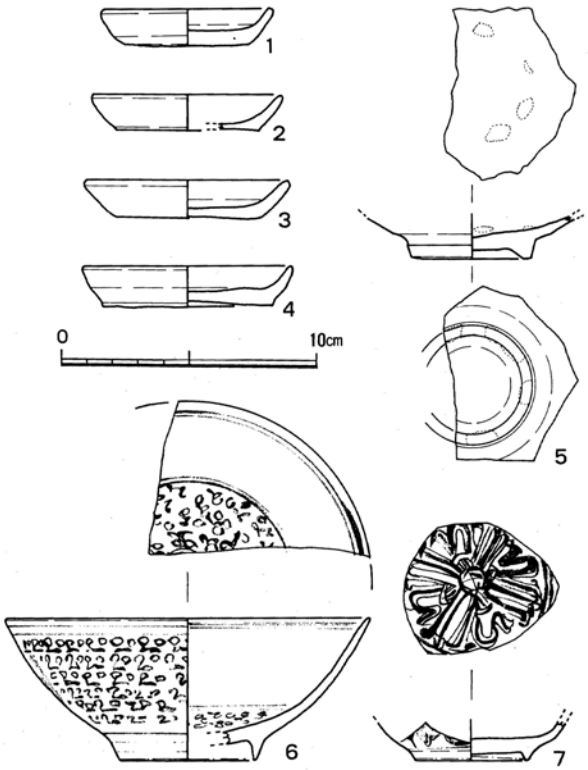
702号土壙

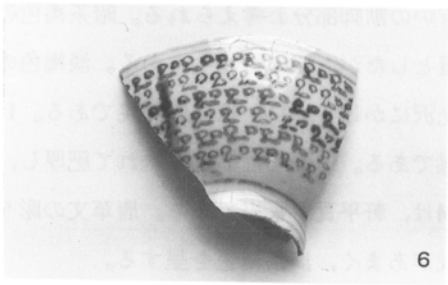
Ⅰ面B－02区で検出した土壙である。709号土壙を切る。長径約102cm,短径約82cmの楕円形を呈し，深さは約48cm分を検出している。

1～**4**は**土師器**の皿である。底部を糸切りし，内底部をナデる。板状痕はみとめられない。口径6.9～8.4cm，器高1.5～1.6cmをはかる。**5**は**李朝の青磁**碗である。見込みと高台畳付に，重ね焼きの目痕が残る。**6**・**7**は**明代の染付**である。**6**は蓮子碗で，高台畳付が露胎となる。**7**は皿である。底部のみ完存する。



43 702号土壙実測図（1／40）





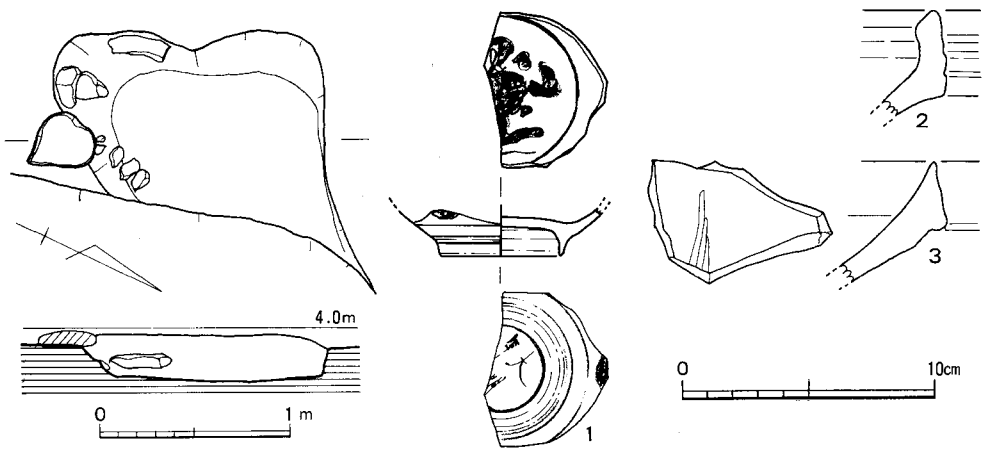
44 702号土壙出土遺物

703号土壙

Ⅰ面B－02区で検出した土壙である。52号配石遺構にともなう土壙（近世）に東半部分を切られる。西辺約260cm，北辺は150cm以上で，隅丸の長方形を呈していたと思われる。深さは26cmである。

出土遺物は小量で，備前焼・明代染付・瓦片にとどまる。

1は，**明代の染付**である，碗の底部片である。見込み部分は，饅頭心となる。外底部には，



45 703号土壙実測図（1／40）　　**46** 703号土壙出土遺物（1／3）

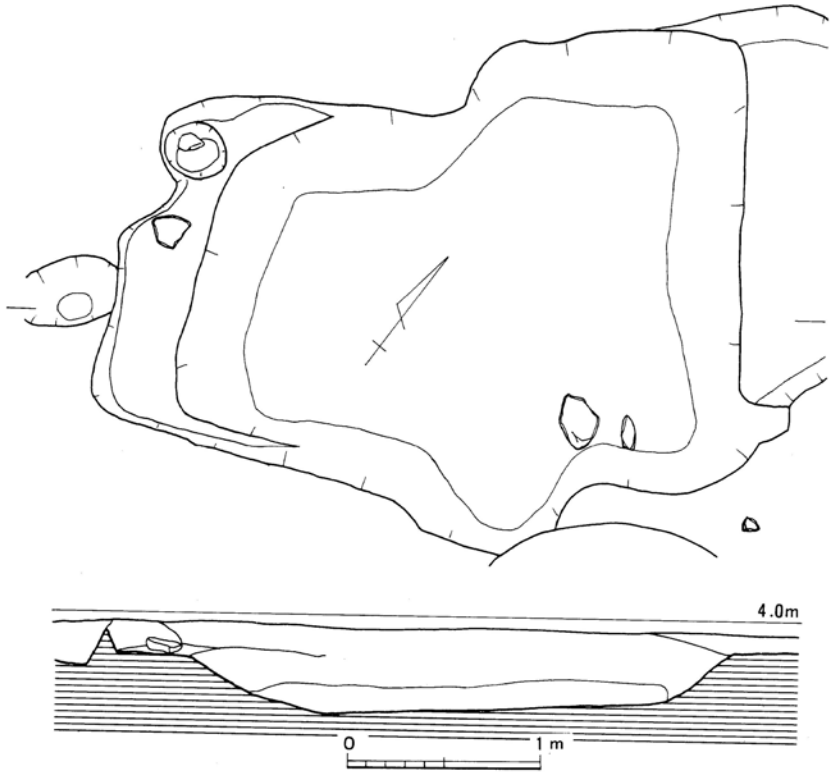
「大明年造」銘の一部がみとめられる。**2**・**3**は**備前焼**のすり鉢である。**2**の口縁端部は内傾して肥厚する。**3**の口縁は尖り気味に上方にのびる。**2**は備前焼Ⅴ期，**3**はⅣ期の特徴をしめしている。

705号土壙

Ⅰ面B－01区で検出した不整形の大形土壙である。西辺が2段掘りを呈するが，切り合いによるものと考えられる。深さは，約42cm分を検出したにすぎない。

土師皿・坏，青磁，白磁，明染付，瓦質土器，備前焼，土壁片等が出土している。

1～**3**は，**土師器**である。**1**・**2**は皿，**3**は坏である。いずれも口径に比して底径が小さく，体部は，**1**・**2**ではやや外反して，**3**では直線的に大きく外方に開く。底部はすべて回転糸切りで，内底部のナデ，板状痕はみとめられない。**2**の糸切りは，きわめて撚りのあらい糸によるもので，痕跡としては条線を呈していない。いずれも，外観としては周防の大内館などを中心としてみられる土師器（以下「大内系土師器」と仮称）に類似するが，器壁が厚く，また体部のヨコナデによる凹凸もみとめられない。胎土が精良で焼成がよく器壁も比較的薄い**3**を除いて，他は在地土師皿の流れでとらえるべきと思われる。**4**・**5**は**白磁**である。**4**は皿で，高台は底

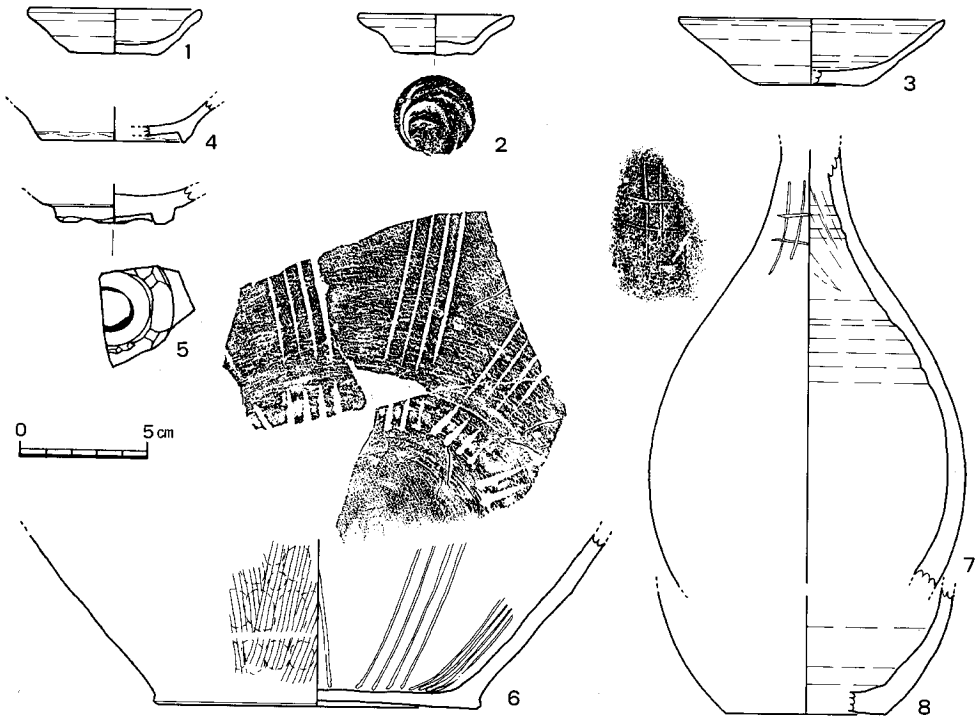


47　705号土壙実測図（1／40）

部と体部との境界につけられる。高台畳付のみ露胎となる。**5**は碗である。畳付を5ヶ所抉りとる。見込みには，重ね焼きによる釉落ちがみられる。また外底部は体部下方から露胎となるが，高台畳付には重ね焼きによる釉の付着がみられる。なお，外底には，墨書で「○」印が描かれている。**6**は，**瓦質土器**のすり鉢である。内面には，4本を単位としたすり目が刻まれる。内面はかなり磨滅している。**7・8**は，**備前焼**の徳利である。直接に接合できず，また器壁の厚さに若干の差があるが，同一個体である可能性が高い。頸部には井桁形のヘラ記号が沈線で刻まれる。

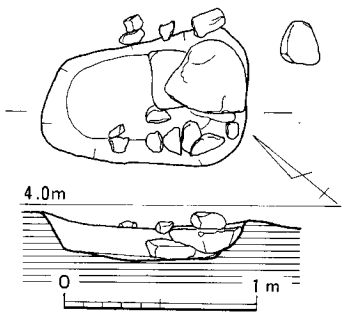
7

48　705号土壙出土遺物1



49 705号土壙出土遺物２（１／３）

710号土壙

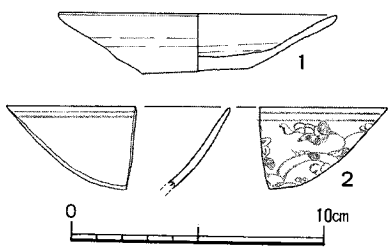


50 710号土壙実測図（１／40）

Ⅰ面Ａ－04区で検出した土壙である。長軸約112cm，短軸約76cm，深さ約25cmをはかる。南半部分には，大形の礫が集中し重なっている。

出土遺物は，土師皿・坏，明染付，陶器片等が少量出土したにとどまる。

１は，**土師器**の坏である。口径11.2cm底径4.3cm，器高2.3cmをはかり，口径に比して底径が小さく，体部はやや外反気味に大きくひらく。底部は回転糸切りで，体部は内外ともヨコナデを強く施し，その為器壁に凹凸がつく。大内系の土師坏である。**２**は**明の染付**の碗である。

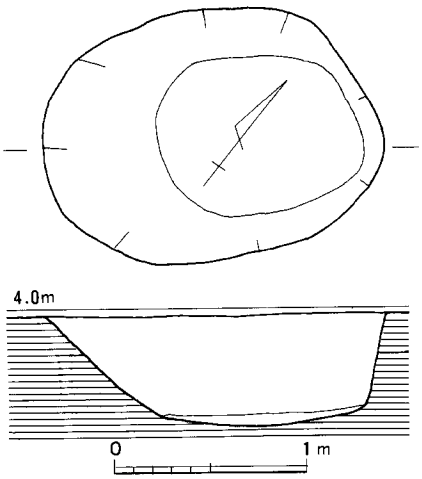


51 710号土壙出土遺物（１／３）

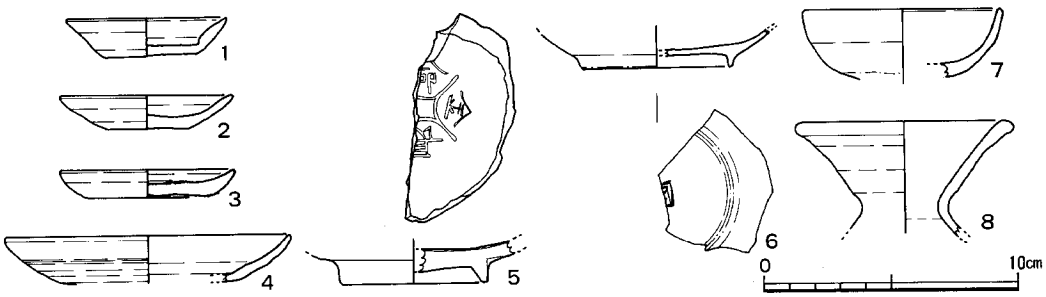
711号土壙

Ⅰ面B－04区で検出した土壙である。長軸182cm，短軸136cm，深さ60cmをはかる。

1～**4**は**土師器**である。**1**～**3**は皿，**4**は坏で，底部を回転糸切りする。**1**・**2**は，比較的器高が深く，体部が大きくひらくタイプで，口径6.4～6.8cm，底径3.1～3.5cm，器高1.35～1.55cmをはかる。**3**は口径と底径にあまり差がなく，器高も低いもので，口径6.9cm，底径5.0cm，器高1.1cmをはかる。なお，**3**にのみ板状痕と内ナデがみとめられる。**4**は口径11.45cmをはかる。**5**は**青磁**の碗底部である。見込みに吉祥句のスタンプが押されている。**6**・**7**は**白磁**である。**6**は皿である。外底部中央に染付で銘がつけられる。**7**は小碗である。**8**は朝鮮の**陶器**で舟徳利の口頸部である。濃褐色で緻密な胎に，暗緑褐色の釉がかかる。



52　711号土壙実測図（1／40）

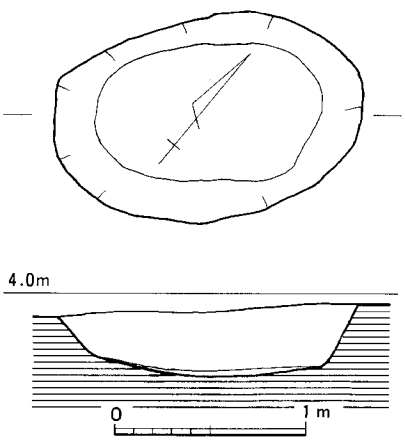


53　711号土壙出土遺物（1／3）

712号土壙

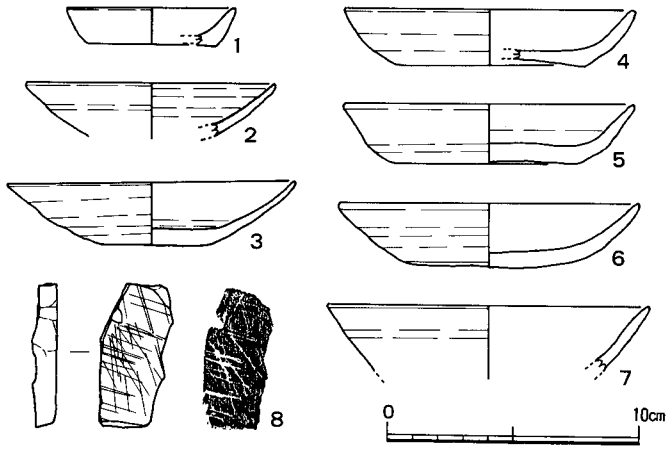
Ⅰ面B－03区・04区で検出した小判形を呈する土壙である。長軸166cm，短軸105cm，深さ36cmをはかる。土師皿・坏，白磁，備前焼，瓦，砥石等が出土している。

1～**7**は，**土師器**である。**1**は皿で，口径6.8cm，器高1.5cmをはかる。**2**～**7**は坏である。**2**・**3**は，大内



54　712号土壙実測図（1／40）

系の特徴を持つ。口径10.0～11.6cm，**3**で底径4.3cm，器高2.5cmをはかる。**4**～**7**は在地系で，口径11.7～13.0cm，底径6.8～7.5cm，器高2.2～2.6cmをはかる。いずれも底部を回転糸切りする。**8**は，**砥石**片である。砥石面の一部をとどめるのみで，側面と裏面は破損している。砥石面には，無数の刃傷が残されている。



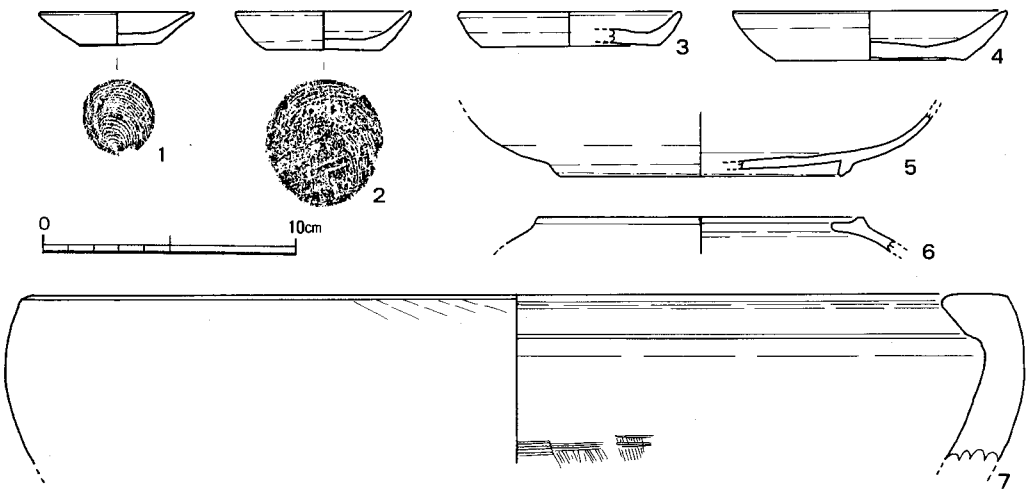
55 712号土壙出土遺物（1／3）

722号土壙

Ⅰ面A－03区で検出した土壙である。埋土には，焼土が多量にふくまれていた。また，土壙上面で1号建物跡の礎石が検出されており，722号土壙がⅠ面にともなうものであることを示している。

出土遺物は，土師皿・坏，青磁，白磁，備前焼（Ⅴ期），土師質土器，壁土片等である。

1～**4**は**土師器**である。**1**・**2**は皿，**3**・**4**は坏である。**5**は，**青磁**である。褐灰色のきわめて緻密な胎に，うすい青白色の釉を厚く施す。釉は高台畳付をのこして全面にかけられ，釉表には氷裂がみとめられる。**6**は**陶器**の甕である。暗い飴色の釉がうすく施されるが，熱をうけて発泡し，あれている。**7**は**土師質土器**の火舎である。小片しか残っていなかった。



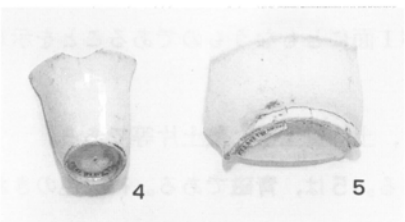
56 722号土壙出土遺物（1／3）

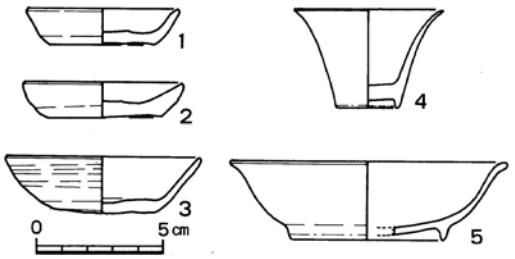
723号土壙

Ⅰ面A－03区とA－04区にまたがって検出した遺構である。前述の722号土壙を切る関係にあるが，埋土はほとんど同一で，あまり時期差はないものと思われる。

土師皿・坏，白磁，染付，備前焼(Ⅴ期)等が出土した。

57 723号土壙（西より）





58 723号土壙出土遺物１（１／３）

59 723号土壙出土遺物２

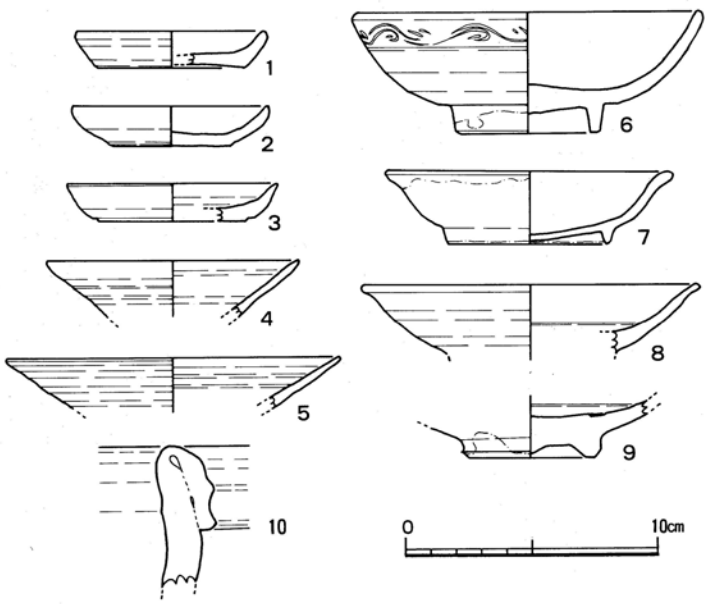
１～３は，**土師器**の皿である。底部を回転糸切りする。内底部のナデ，板状痕は，施されていない。口径・器高から２種に分たれる。**１・２**は口径6.1～6.4cm，器高1.4～1.45cm，**３**は口径7.8cm，器高2.25cmをはかる。**４・５**は**白磁**である。**４**は盃，**５**は皿である。**６**は，**明代の染付**である。**７**は，**備前焼**の四耳壺である。体部上半の約２分の１片で，耳は欠失している。口径は，約14cmと復原される。その他，「洪武通寶」**銅銭**が出土している。

60　723号土壙出土遺物３

727号土壙

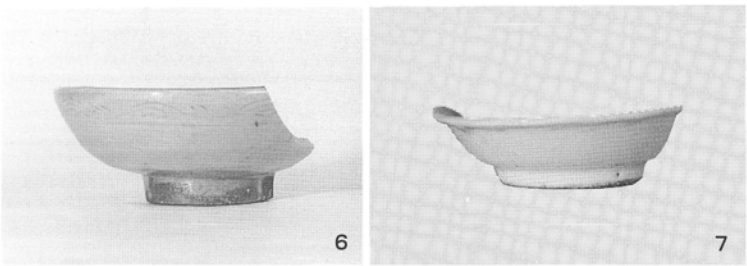
Ⅱ面Ａ－04区で検出した土壙である。Ⅰ面の722号土壙(前述Ｐ.41)の下部に切られる。不整形の土壙で，722号土壙と，北半が調査区外に出ることから，規模は確定できない。深さは約20cmをはかる。

１～５は，**土師器**である。**１～３**は皿で，口径7.4～8.4cm，器高1.45～1.6cmをはかる。底部は回転糸切りで，内ナデ，板状痕はみとめられない。**４・５**は，大内系の坏である。底部を欠く。**６**は，**青磁**の碗である。口縁下には沈線でくずれた雷文を配する。高台外面から内側を露胎とする。**７～９**は**白磁**である。**７・８**



61　727号土壙出土遺物１（１／３）

は皿，**9**は碗である。**9**の見込みには，重ね焼きによる剝離が3ヶ所みられる。**10**は，**備前焼**の甕の口縁である。口縁から頸部にむかって内湾する傾向を示し，「元亀2年」(1571)銘を持つ大甕の特徴と一致する。その他，「景徳元寳」**銅銭**が出土している。

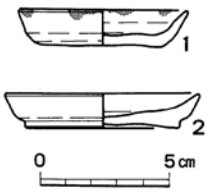


62 727号土壙出土遺物2（約1／3）

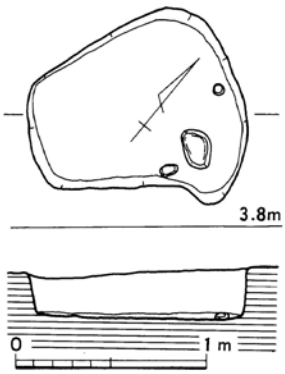
735号土壙

II面B－03区で検出した土壙である。いびつな台形状を呈する。長軸で約116cm，深さ約26cmをはかる。床面に密着して土師皿が出土している（Fig.63－1)。

1・2は，**土師器**の皿である。**1**は，口径6.7cm，底径4.8cm，器高1.45cmをはかり底部は回転糸切り，板状痕をとどめ，内底部をナデる。口縁部には，6ヶ所にわたって灯火痕がつく。**2**は，口径7.8cm，底径6.2cm，器高1.4cmをはかる。糸切り底だが，板状痕，内底ナデともにみとめられない。



63 735号土壙遺物

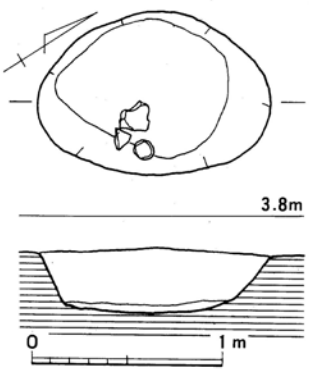


64 735号土壙実測図

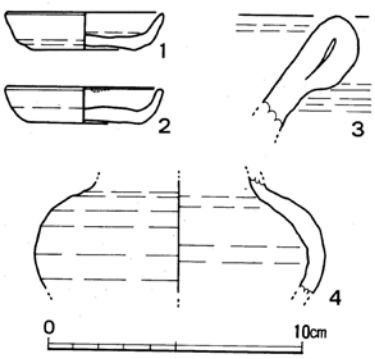
738号土壙

II面B－03区とB－04区にまたがって検出された土壙である。長軸126cm，短軸90cm，深さ36cmをはかる。

1・2は，**土師器**の皿である。回転糸切り底に板状痕をとどめ，内底にナデを施す。口径6.3cm，器高1.5cm。**3・4**は，**備前焼**である。**3**は甕の口縁部である。**4**は壺の胴部で，胴部最大径は，11.6cmをはかる。



65 738号土壙実測図

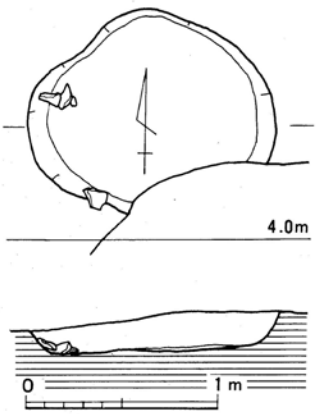


66 738号土壙出土遺物

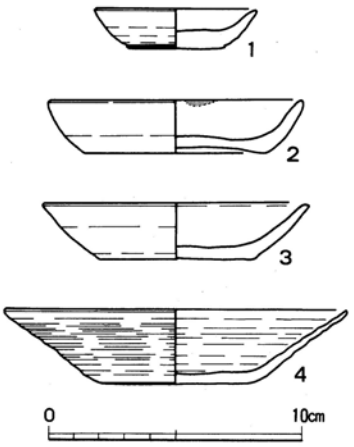
739号土壙

II面B－01区で検出した略円形の土壙である。I面の102号井戸に切られる。

1～**4**は**土師器**である。**1**は皿で口径6.6cm,器高1.6cm。**2**～**4**は坏である。**2**・**3**は在地系で，口径10.2～10.7cm，器高2.15～2.25cmをはかる。**4**は大内系の坏で口径13.8cm，器高3.0cmである。**4**の外底部には板状痕が，内底部にはナデが施されている。



67 739号土壙実測図（1／40）

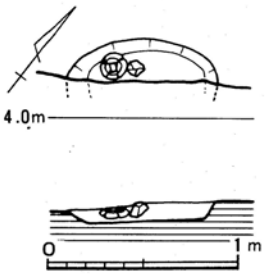


68 739号土壙出土遺物（1／3）

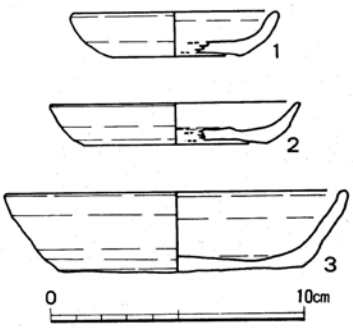
742号土壙

II面B－04区で検出した楕円形の土壙である。

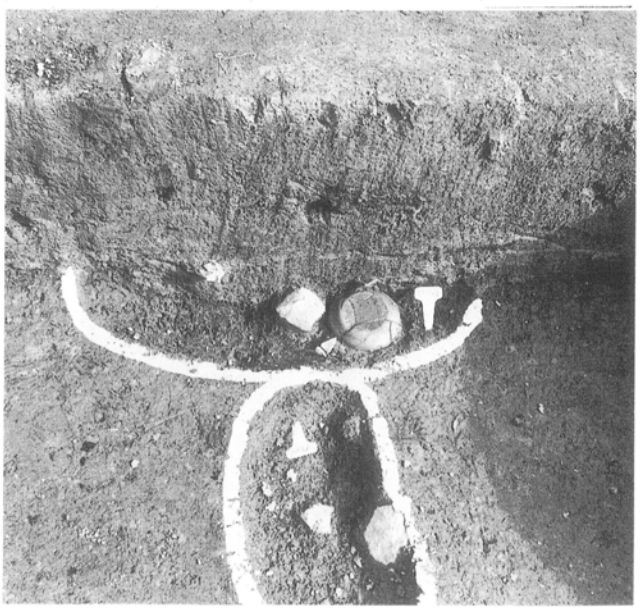
1～**3**は**土師器**である。**1**・**2**は皿で，口径8.2～10.4cm，器高1.6～1.8cmをはかる。**3**は坏で，口径13.7cm,器高3.2cmをはかる。すべて回転糸切り底で，板状痕，内底ナデはみとめられない。



69 742号土壙実測図（1／40）



70 742号土壙出土遺物（1／3）

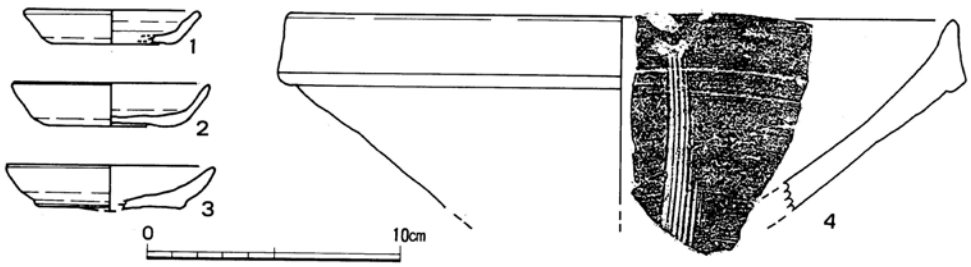


71 742号土壙（北より）

755号土壙

II面A－03区で検出した土壙である。長軸138cm，短軸116cmの楕円形を呈し，深さ約50cmをはかる。

1～3は**土師器**の皿である。口径7.0～8.2cm，器高1.35～1.8cmをはかる。底部は回転糸切りする。板状痕，内底ナデともにみられない。**4**は，**備前焼**のすり鉢である。口縁は下方に垂れ気味に肥厚する。内面の下部は，使用の為，磨滅している。備前焼Ⅳ期に属する。

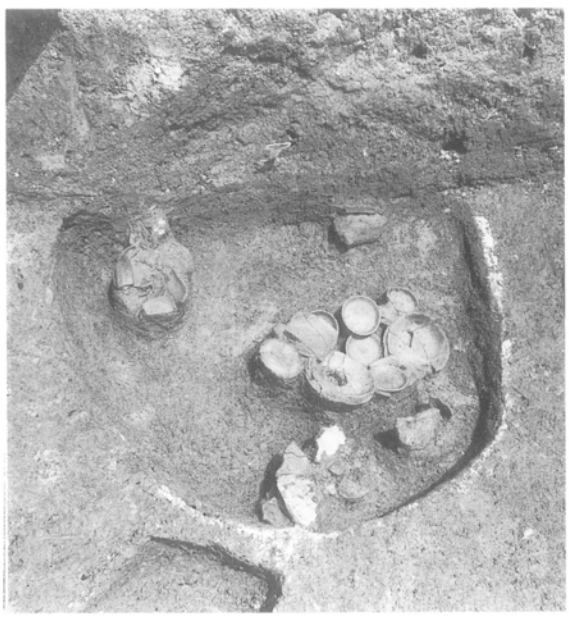


72 755号土壙出土遺物（1／3）

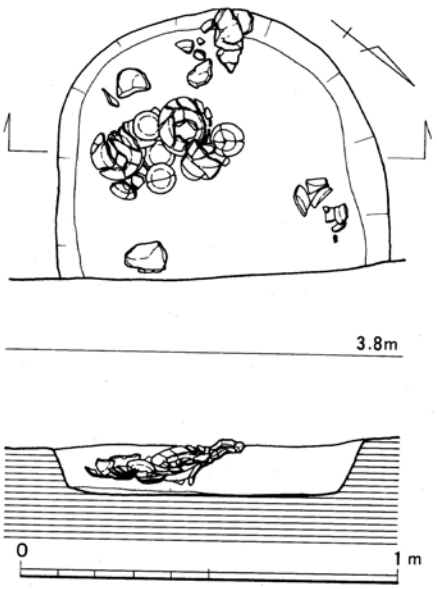
771号土壙

II面C－02区で検出した土壙で，東半分は調査区外へ出る。調査した部分で，長軸72cm以上，短軸88cm，深さ13cmをはかる。

埋土中に流れこんだ状態で土師皿・坏が出土している。



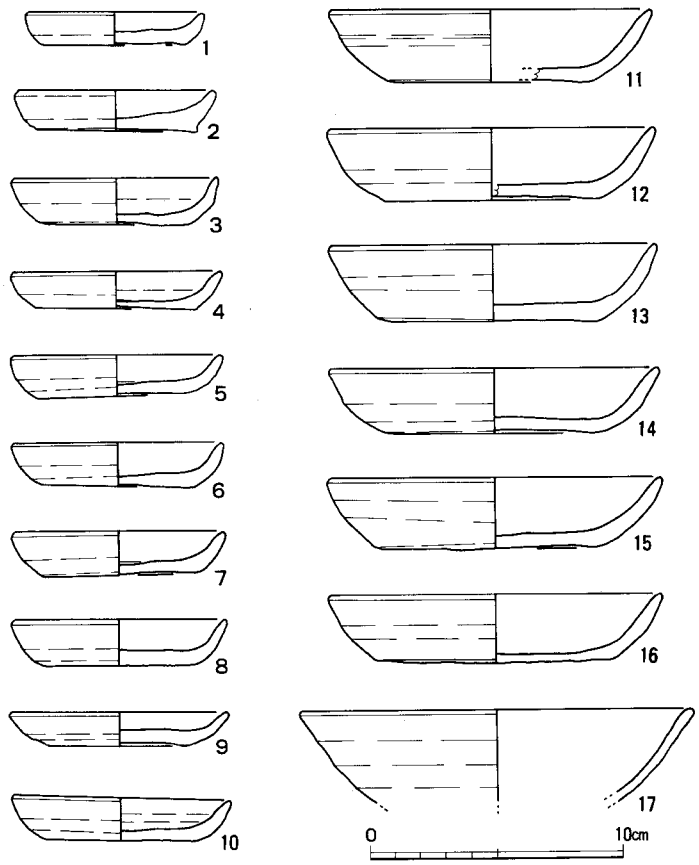
73 771号土壙（西より）



74 771号土壙実測図（1／20）

1～16は，**土師器**である。**1～10**は皿で，口径7.2～8.8cm，器高1.3～1.9cmをはかる。

11～16は，坏である。口径13.0～13.4cm，器高2.6～3.1cmである。土師皿・坏は，すべて底部を回転糸切りする。**8**の外底部に板状痕，**10**で板状痕と内底ナデ，**15**で内底ナデがみとめられる以外は，板状痕・内底ナデともに施されない。**17**は**青磁**の碗である。灰白色の胎土に，灰緑色の釉をかける。その他，「嘉祐通寶」**銅銭**が出土している。



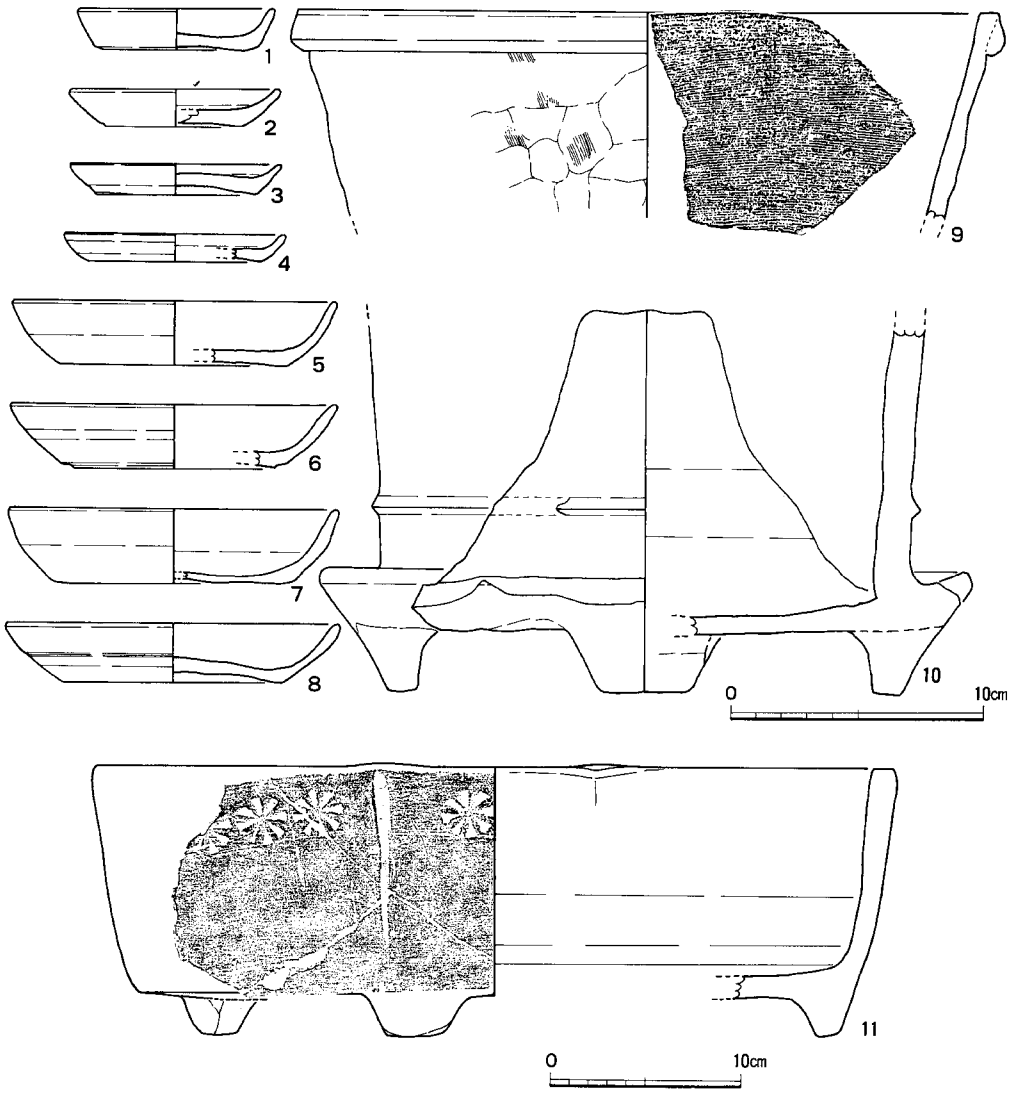
75 771号土壙出土遺物（1／3）

779号土壙

II面C－02区で検出した不整形の土壙である。長軸約240cm，深さ約21cmをはかる。

土師皿・坏，白磁，青白磁，土鍋，瓦質土器，備前焼，瓦等が出土した。

1～9は**土師器**である。**1～4**は皿で，口径7.8～8.8cm，器高1.1～1.7cmをはかる。**5～8**は坏である。口径13.0～13.4cm，器高2.3～3.0cmをはかる。すべて，外底部を回転糸切りし，内底部にはナデを施す。板状痕は，**2・7**において確認している。**9**は，土鍋である。口縁外面に粘土紐を貼り付け，断面山形に肥厚させる。内面はヨコハケ，外面は指頭圧痕の上に軽くタテハケを施す。外面には煤が付着している。**10・11**は，**瓦質土器**である。**10**は，脚を付けた桶状の器形を呈する。円盤状の底部の内側に筒形の体部を立てるため，器体部下端は大きく張り出し上反する。**11**は，火舎である。胴部は，縦に刻みを入れて木瓜状に分割する。口縁下には放射状のスタンプ文を押す。口径42.8cm，器高14.2cmをはかる。



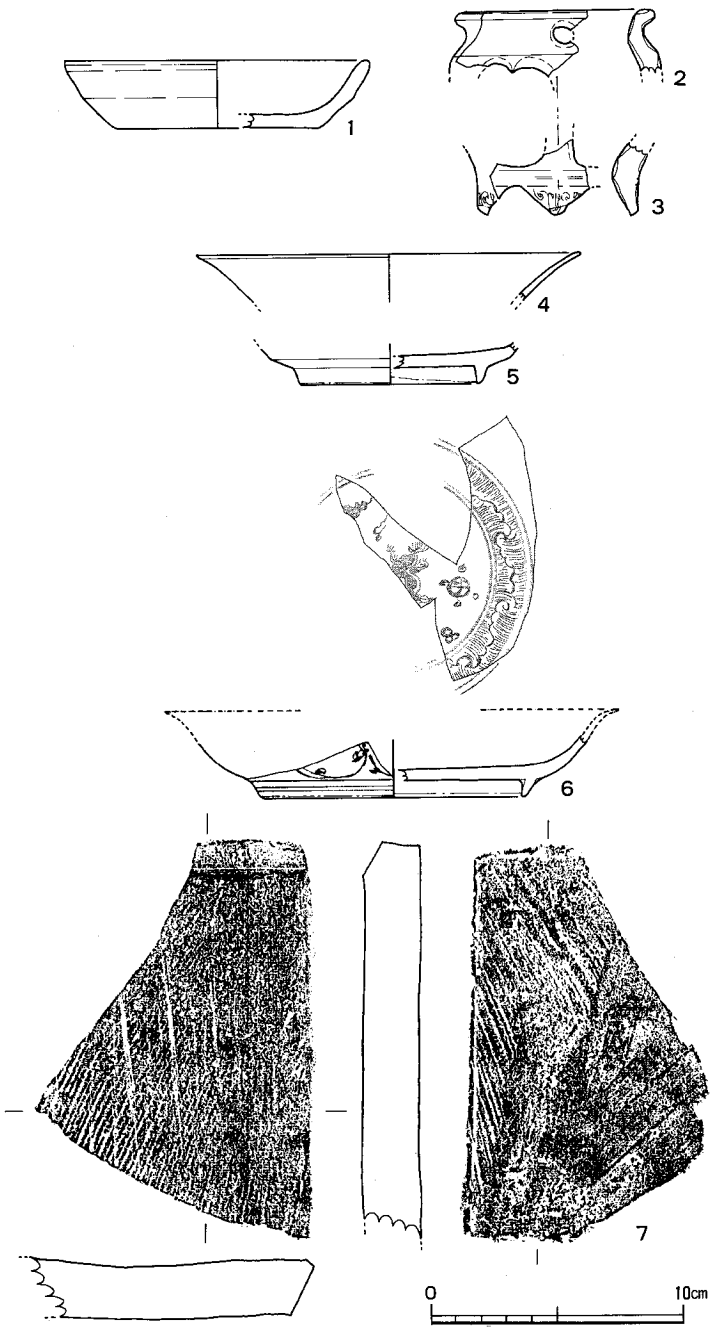
76 779号土壙出土遺物（1／3・1／4）

793号土壙

Ⅲ面B－02区で検出した土壙である。長軸約150cm，短軸約125cmの不整円形を呈し，深さは，約20cmをはかる。

出土遺物は，土師皿・坏，青磁，白磁，染付，象嵌青磁，土鍋，瓦等である。

1は**土師器**の坏である。口径12.1cm，器高2.7cmをはかる。図示していないが，口径8.4cm，器高1.7cmをはかる皿も出土している。いずれも外底部は回転糸切りで，板状痕，内底ナデともにみとめられない。**2・3**は**青磁**の香炉である。同一個体であると考えられる。白灰色の胎



77　793号土壙出土遺物（1／3）

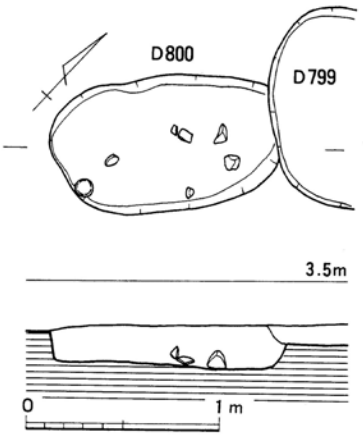
に濃緑色の釉がたっぷりとかかる。口縁部直下に円孔を穿ち，体部中央は輪花(？)に刳り抜く。体部上半は円形，下半は多角形を呈していたらしく，**3**は脚中央を通る線で稜がついている。**4・5**は，**白磁**の皿である。白磁では，他に八角盃の破片も出土している。**6**は**明代の染付**の皿である。体部外面には牡丹唐草を，内面見込には馬(麒麟？)を中心に雲と宝物を配す。**4～6**は二次的な火熱を受けており，火にかかって破砕したものと考えられる。**7**は，**平瓦**片である。上面は，あらいハケで調整し，端部をヘラで斜めにおとす。下面は，板であらくかいた後にナデを施している。

800号土壙

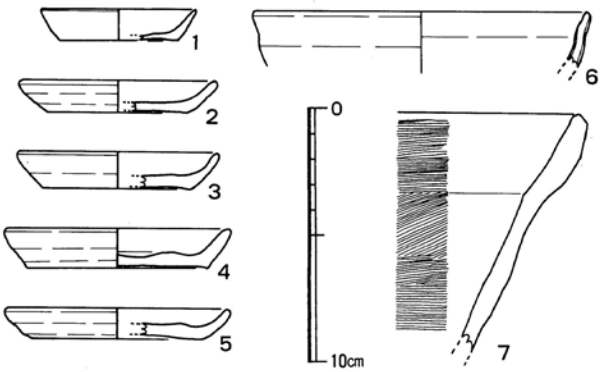
Ⅲ面B－02区で検出した土壙である。

1～5・7は，**土師器**である。**1～5**は皿で，法量から，**1**と**2・3**と**4・5**の3種に分た

れる。**1**は口径6.2cm，**2・3**は口径8.0～8.1cm，**4・5**は口径9.0～9.1cmをはかる。器高は1.25～1.6cmで大差ない。いずれも底部を回転糸切りする。板状痕，内底ナデはみとめられない。**7**は土鍋である。外面にはうすく煤が付着している。**6**は**天目茶碗**の小片である。灰色の緻密な胎に，光沢の強い茶褐色の釉が施される。



78 800号土壙実測図（1／40）

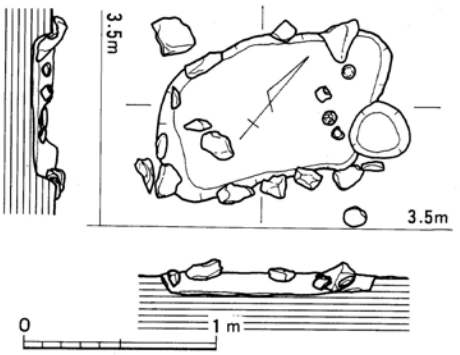


79 800号土壙出土遺物（1／3）

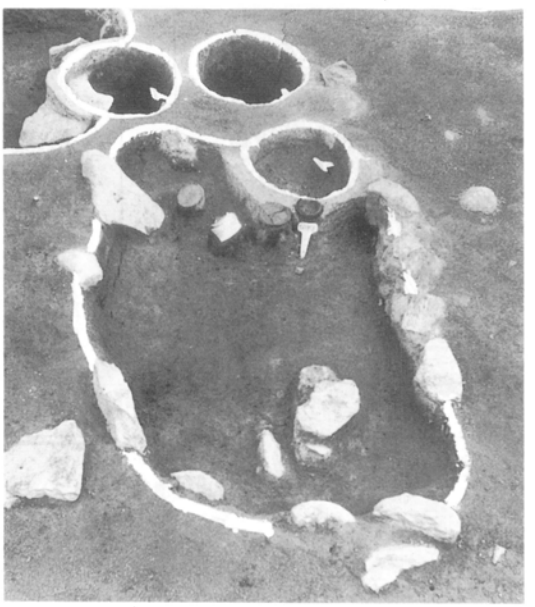
803号土壙

Ⅲ面B－04区で検出した土壙である。長軸138cm，短軸76cm，深さ12cmをはかる。土壙周囲に，20cm内外の礫を配している。

1～9は，**土師器**である。**1～7**は皿である。**1**は他と比べて器高が高く，体部の立ち上りも強い。口径6.7cm，器高2.5cmをはかる。口縁には，広く煤が付着し，灯明皿として用いられたことを示している。**2～7**は，口径7.4～8.0cm，器高1.3～2.0cmをはかる。いずれも回転糸切り底である。**1・2**で板

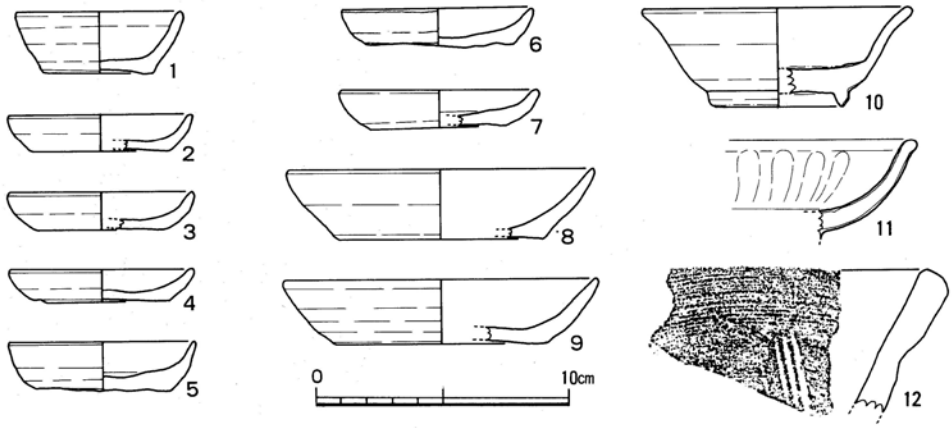


80 803号土壙実測図（1／40）



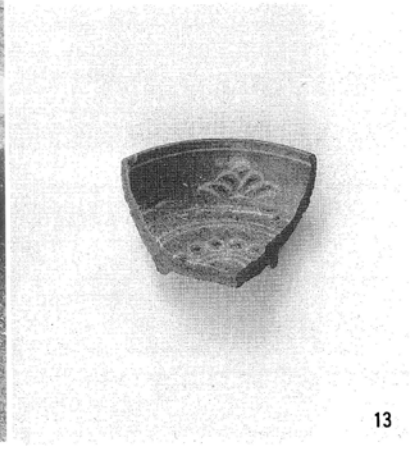
81 803号土壙（西より）

状痕と内底ナデ，**4**で内底ナデを欠く他は，板状痕と内底ナデを施す。**8・9**は，坏である。口径12.3～12.6cm，器高2.5～2.6cmをはかる。遺存している部分をみる限り，板状痕，内面ナデともにみられない。**10・11**は**青磁**である。**10**は高台付の皿である。肌茶色の胎に，灰青色の不



82　803号土壙出土遺物１（１／３）

83　803号土壙遺物出土状況（西より）



84　803号土壙出土遺物２（約１／３）

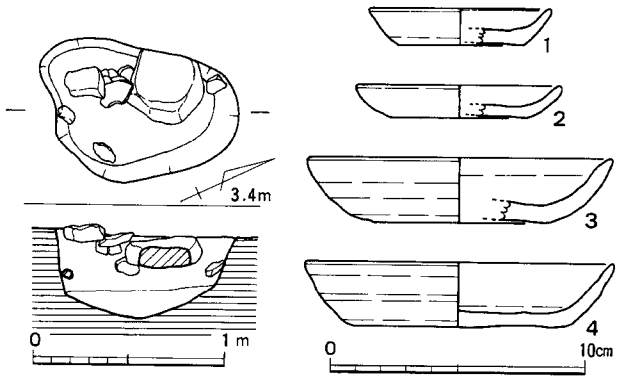
透明釉を施す。畳付から外底部及び見込は露胎となる。**11**は盤である。体部内面には菊花状に凹線を配し，見込みには圏線がめぐる。**12**は，**土師質土器**のすり鉢である。内面は，ヨコハケの上に３条を単位としたすり目を入れる。**13**は李朝の**象嵌青磁**で，高台付の皿である。

807号土壙

Ⅲ面Ｂ―03区で検出した遺構である。長軸96cm，短軸80cmのいびつな不整形の土壙で，最も深い部分で，深さ44cmをはかる。埋土中位から上に，扁平な礫がかたまってみられる。

出土遺物は，土師器と瓦質土器が小量にとどまる。

1～4は，**土師器**である。**1・2**は皿で，口径7.2～8.2cm，器高1.3～1.45cmをはかる。**3・4**は坏である。口径12.2～12.4cm，器高2.6cmをはかる。すべて底部を回転糸切りする。**3**には，板状痕，内底ナデがみとめられるが，他の皿・坏には施されていない。



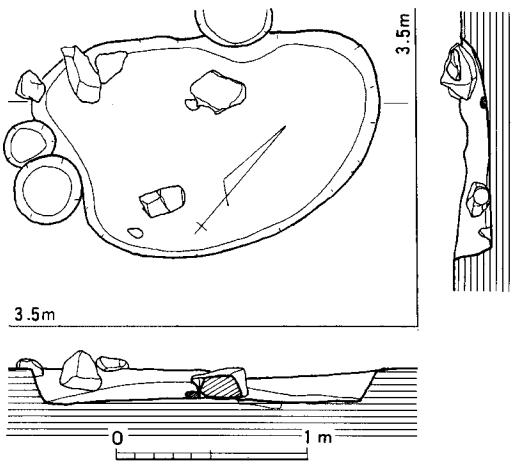
85 807号土壙実測図（1／40） **86** 807号土壙出土遺物（1／3）

820号土壙

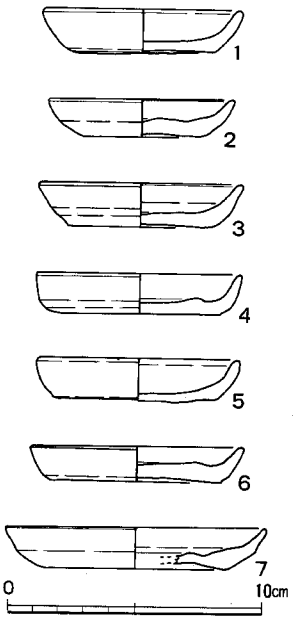
Ⅲ面B—01区で検出した土壙である。長軸186cm，短軸120cm，深さ20cmをはかる。

土師皿・坏，土鍋，青磁，瓦質土器が出土した。

1～7は**土師器**である。**1～6**は皿で，口径7.4～8.5cm，器高1.45～1.8cmをはかる。**7**は坏である。口径10.4cm，器高1.65cmである。すべて底部を回転糸切りする。板状痕，内底ナデはみとめられない。820号土壙からは，他に「嘉祐通寶」，「元祐通寶」**銅銭**が出土している。



87 820号土壙実測図（1／40）



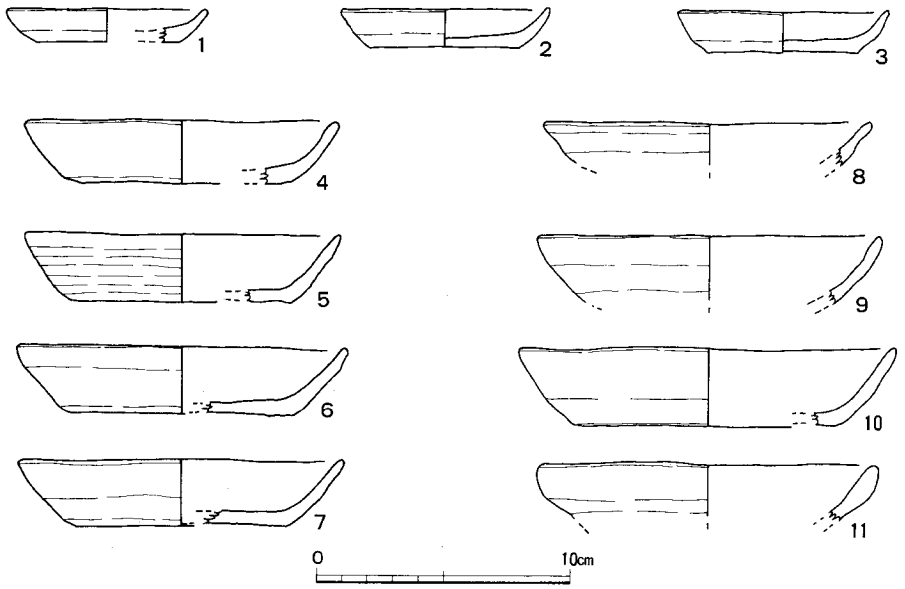
88 820号土壙出土遺物

832号土壙

Ⅳ面A—04区で検出した不整形の土壙である。長軸126cm，短軸108cm，深さ14cmである。10号溝（SX16）の上に掘り込まれている。

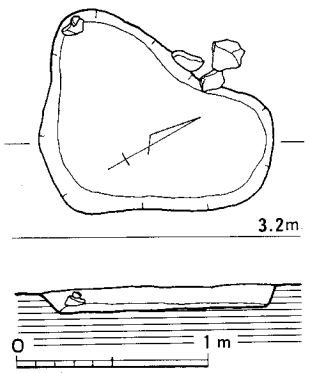
土師器が少量出土している。

1～11は，**土師器**である。**1～3**は皿で，口径8.0～8.35cm，器高1.35～1.65cmをはかる。



89 832号土壙出土遺物（1／3）

4～**10**は坏である。口径12.5～15.1cm，器高2.5～3.15cmをはかる。すべて底部を回転糸切りする。**11**は椀の口縁であろう。口縁部は，外方に肥厚する。器表は，内外面ともヨコナデ調整する。全周の8分の1程の破片であるが，口径は，13.6cmに復原できる。



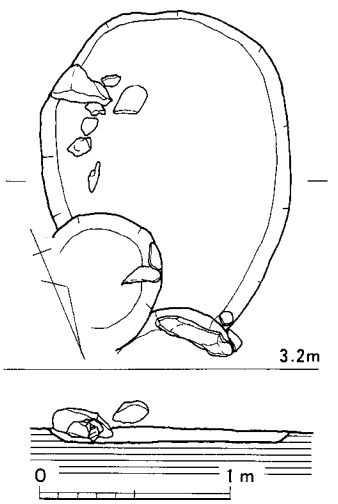
90 832号土壙実測図（1／40）

833号土壙

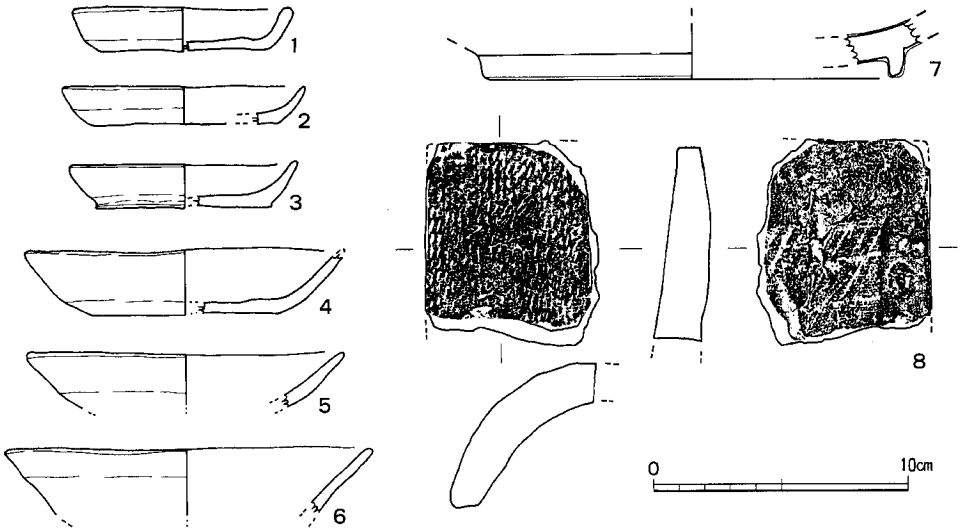
Ⅳ面B—02区より検出した土壙である。長径178cm，短径132cmの卵形を呈し，深さは8cmをはかる。

土師皿・坏，土鍋，青磁，陶器，瓦等が出土している。

1～**6**は**土師器**である。**1**～**3**は皿で，口径8.75～9.7cm，器高1.5～1.7cmをはかる。**4**～**6**は坏である。**4**は，口径12.7cm，器高2.6cmをはかる。**7**は，**青磁**の盤であ



91 833号土壙実測図（1／40）



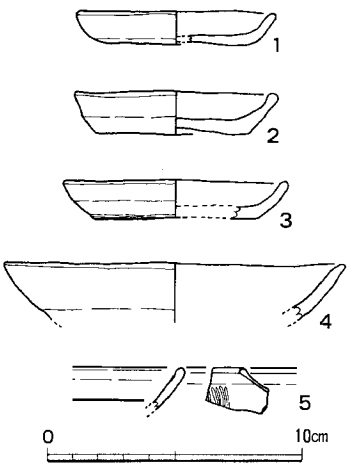
92　833号土壙出土遺物（1／3）

る。高台部分の小片で，高台径は14.4cmに復原される。**8**は**瓦**である。丸瓦片で，端部はヘラで削り面取りする。下面には布目，上目には叩きの縄目が残る。

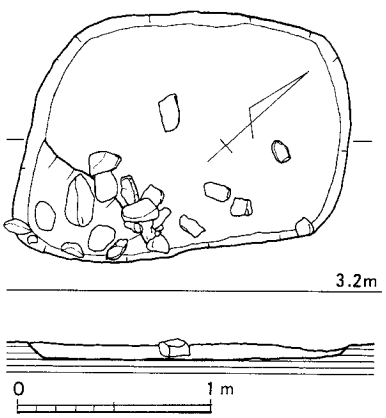
834号土壙

Ⅳ面B—02区で検出した楕円形の土壙である。上述した833号土壙を切る。長軸168cm，短軸112cm，深さ約8cmをはかる。

1～**4**は**土師器**である。**1**～**3**は皿で，口径8.0～9.0cm，器高1.3～1.7cmをはかる。すべて，回転糸切り底である。**4**は坏で，口径13.7cmをはかる。**5**は**青磁**の碗である。外面に櫛目文がみられる。



93　834号土壙出土遺物

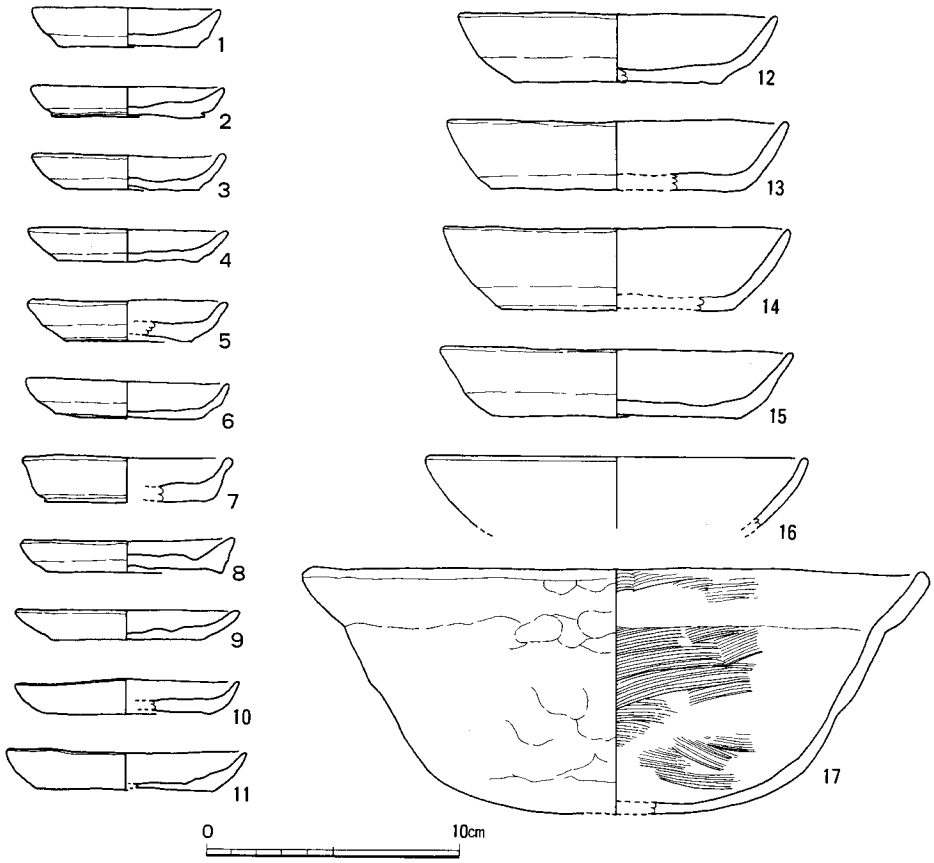


94　835号土壙実測図（1／40）

835号土壙

Ⅳ面B—02区で検出している。長軸198cm，短軸166cm，深さ8cmをはかる。

1～**15**・**17**は**土師器**である。**1**～**11**は皿で，口径7.5～9.5cm，器高1.1～1.8cmをはかる。**12**～**15**は坏で，口径12.8～14.2cm，器高2.7～3.2cmである。底部は回転糸

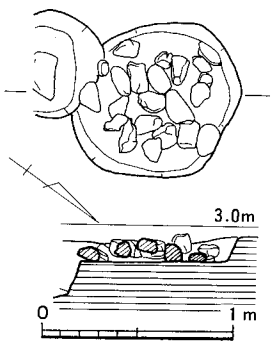


95　835号土壙出土遺物（1／3）

切りを施す。**17**は，土鍋である。内面はヨコハケ調整，外面は指頭押圧の上にあらくナデを行なう。外面には，煤が付着している。**16**は，**青磁**の碗である。小片のため，口径復原には疑問が残るが，15.3cmと復原している。文様はみとめられない。

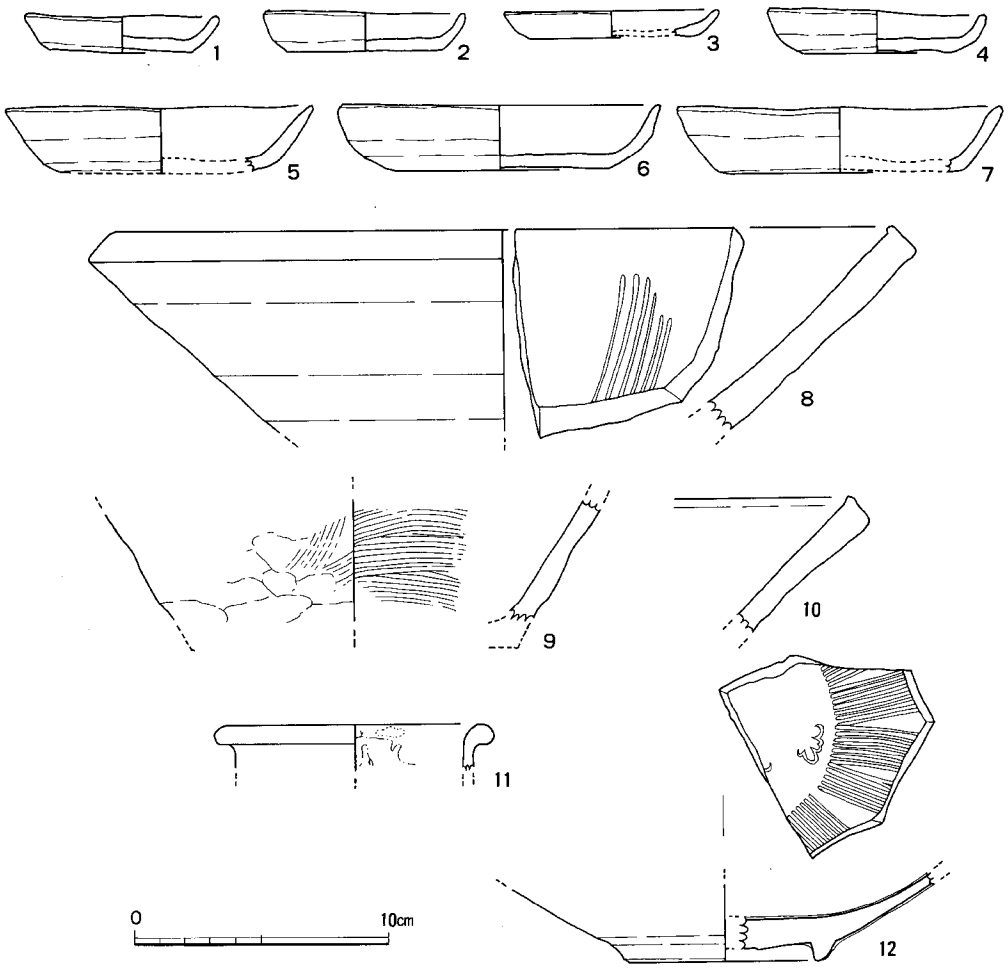
836号土壙

Ⅳ面B—04区で検出した土壙である。直径82cm程の略円形を呈し，深さは14cmをはかる。壙床面には，15cm前後の礫が置かれている。礫は48cm四方に敷かれた状況を呈する。五輪供養塔などの下部構造をなす可能性も考えられるが，第3次調査区内からは五輪塔に類する石製遺物は出土していない。また土壙内から骨片等の出土もなく，供養塔もしくは墓と断定することはできない。



96　836号土壙実測図

1～**7**は**土師器**である。**1**～**4**は皿で，口径7.7～8.6cm，器高1.0～1.6cmをはかる。**5**～**7**は坏で，口径12.3～13.0cm，器高2.55



97 836号土壙出土遺物（1／3）

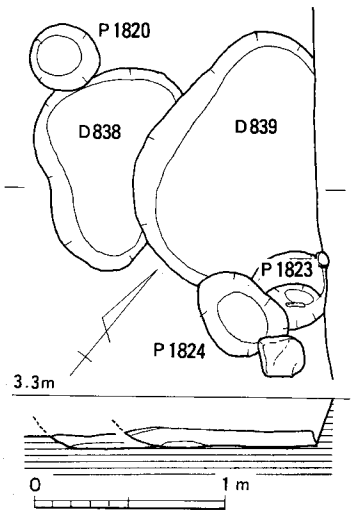
～2.6cmである。底部は，回転糸切りする。**8**～**10**は**瓦質土器**である。**8**はすり鉢で，6本を単位としたすり目が刻まれている。**9**はこね鉢である。内面には，あらいヨコハケが全面に施される。**10**は小片のため，スリ目の有無が確認できない。**11**は**黄褐釉陶器**の壺である。口縁部の小片である。**12**は**青磁**の盤である。内面には，7本単位の太い櫛目を放射状にいれる。その他に，「元豊通寶」**銅銭**が出土している。

839号土壙

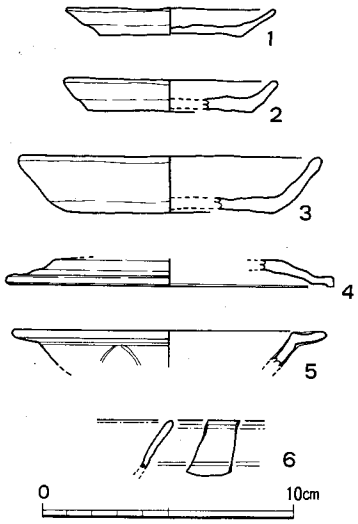
Ⅳ面B—04区で検出した土壙である。東側3分の1程は，調査区外に出る。長軸145cm，短軸98cm以上，深さ10cm程度をはかる。

1～**3**は**土師器**である。**1**・**2**は皿で，口径8.4～8.6cm，器高1.05～1.2cmをはかる。**3**は坏である。口径12.2cm，器高2.2cmをはかる。いずれも，底部は回転糸切りで切りはなす。**4**

は**須恵器**の坏蓋である。径13.2cmをはかる。**5**は**青磁**の鉢である。口縁を外方に折り返す。体部外面には，沈線で蓮弁を描く。**6**は**白磁**の皿である。口唇部は口ハゲとなる。体部中位に，断面が矩形を呈する隆線がみとめられる。



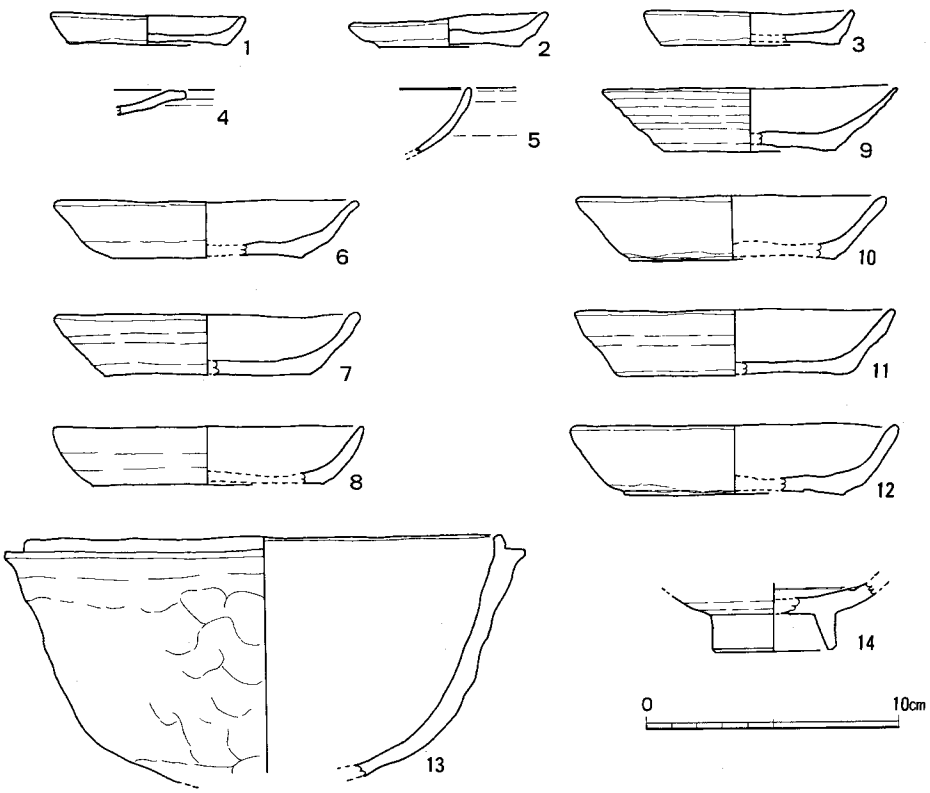
98 839号土壙実測図



99 839号土壙出土遺物（1／3）

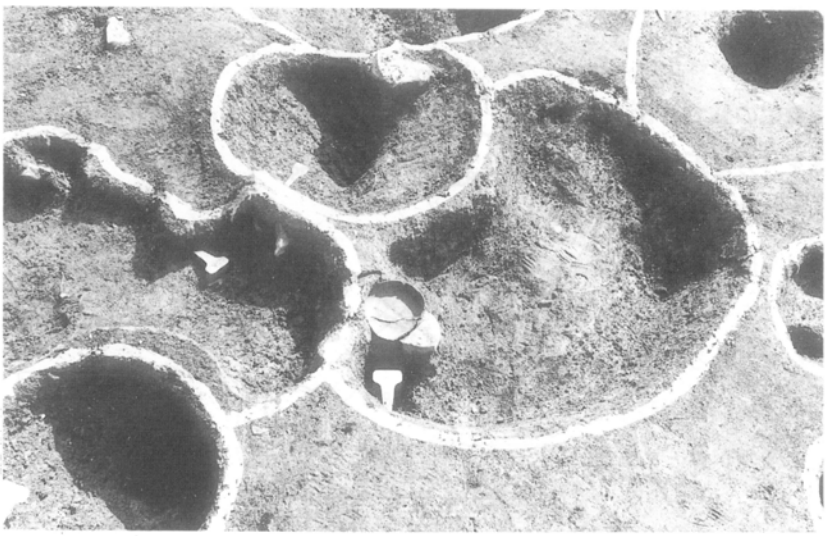
840号土壙

Ⅳ面C—02区で検出した土壙である。次に述べる841号土壙を切る。



100 840号土壙出土遺物（1／3）

1～12は**土師器**である。**1～3**は皿で，口径7.8～8.4cm，器高1.1～1.25cm。**4**は「て」の字状口縁皿である。**5**は早島式土器の椀片である。**6～12**は坏で，口径11.8～13.1cm，器高2.2～2.7cm。



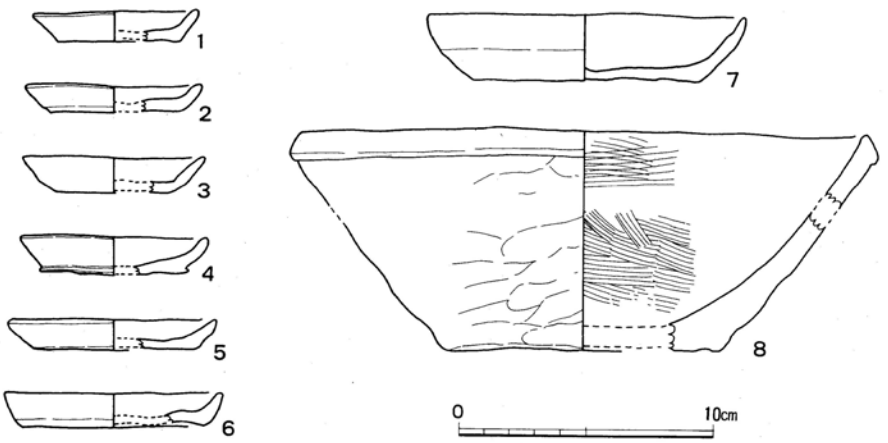
101 840号土壙(左)，841号土壙(右)（東より）

13は**瓦質土器**の鍋である。煤の付着はみられない。**14**は**白磁**の碗である。この他，越州窯青磁碗の小片が出土している。

841号土壙

Ⅳ面C―02区で検出した土壙である。840号土壙に切られる。

1～7は**土師器**である。**1～6**は皿で，法量の分布からみる限り，**1～4**と**5・6**の2種にわけられる。**1～4**は，口径6.6～7.35cm，器高1.05～1.5cmをはかる。**5・6**は，口径8.3～8.6cm，器高1.2～1.4cmで，前者と比べ浅く広い形態をとる。**7**は坏である。口径12.7cm，器高2.7cmをはかる。すべて底部は，回転糸切りする。**8**は，**瓦質土器**のこね鉢である。

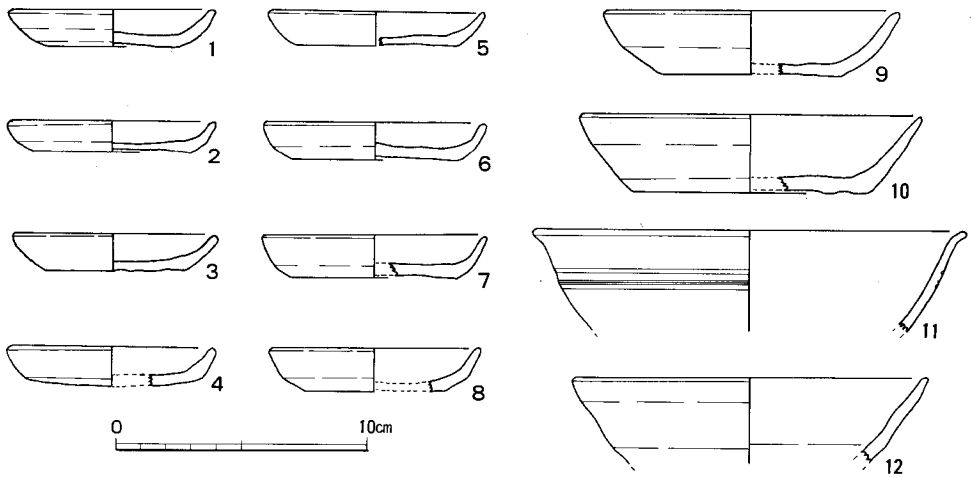


102 841号土壙出土遺物（1／3）

848号土壙

Ⅳ面A—03区とB—01区にまたがって検出した土壙である。次に述べる854号土壙に切られるため，その大半を失なっている。

1～10は**土師器**である。**1～8**は皿で，口径8.2～9.0cm，器高1.1～1.7cmをはかる。**9・10**は坏である。口径11.9～13.7cm，器高2.5～3.1cmをはかる。**11・12**は**青磁**の碗である。**11**は明代のもので，体部に2本の沈線がめぐる。**12**は，李朝の製品である。

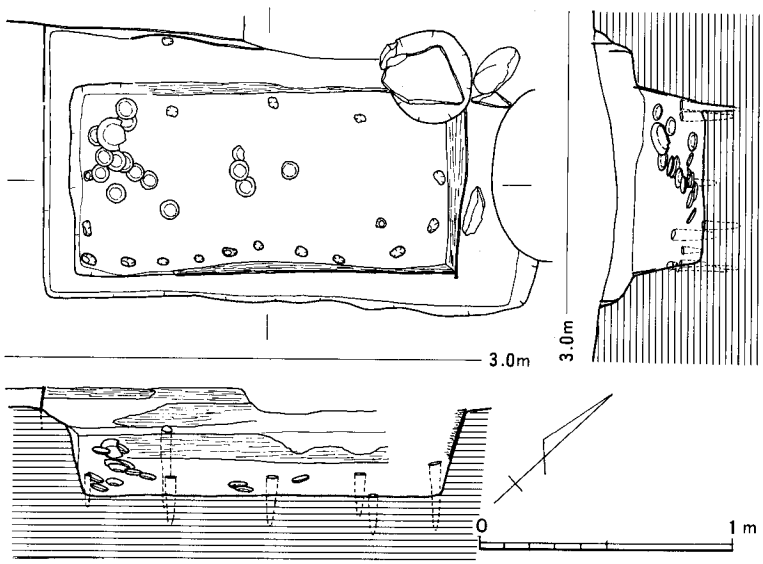


103 848号土壙出土遺物（1／3）

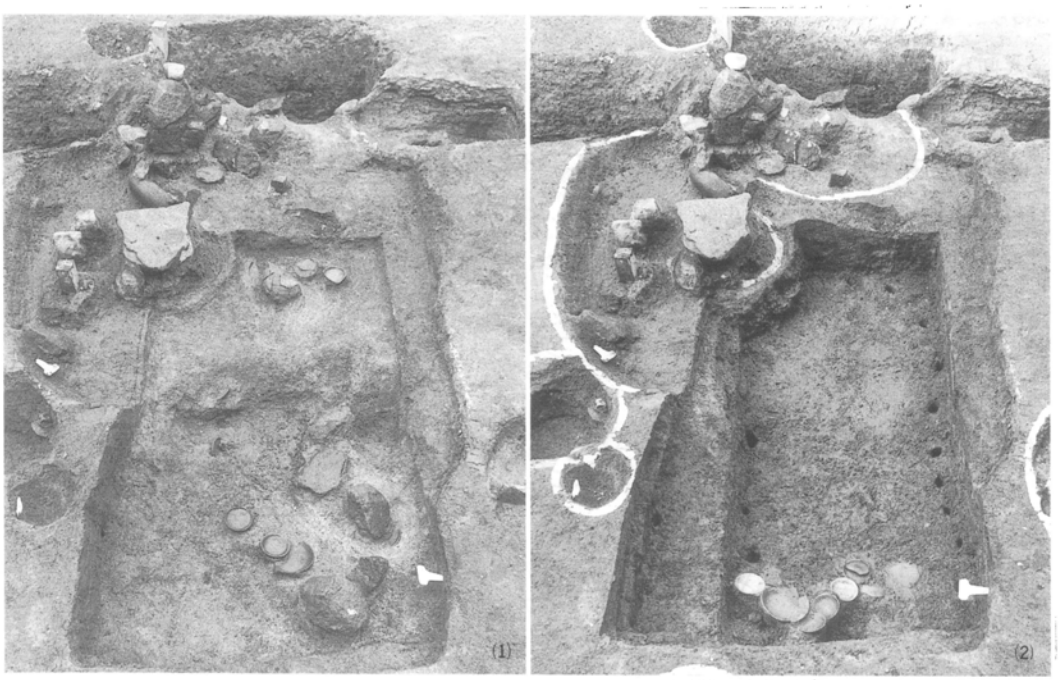
854号土壙

Ⅳ面B—01区で検出した土壙である。2段掘りの長方形土壙の壁に板を貼り，壁に沿って木杭を打ったもので，埋土中位から床面にかけて多量の土師皿・坏が出土した。

土壙は，1段目で201×108cm，深さ19.5cm，2段目で156×78cm，深さ25.5cmを



104 854号土壙実測図（1／30）



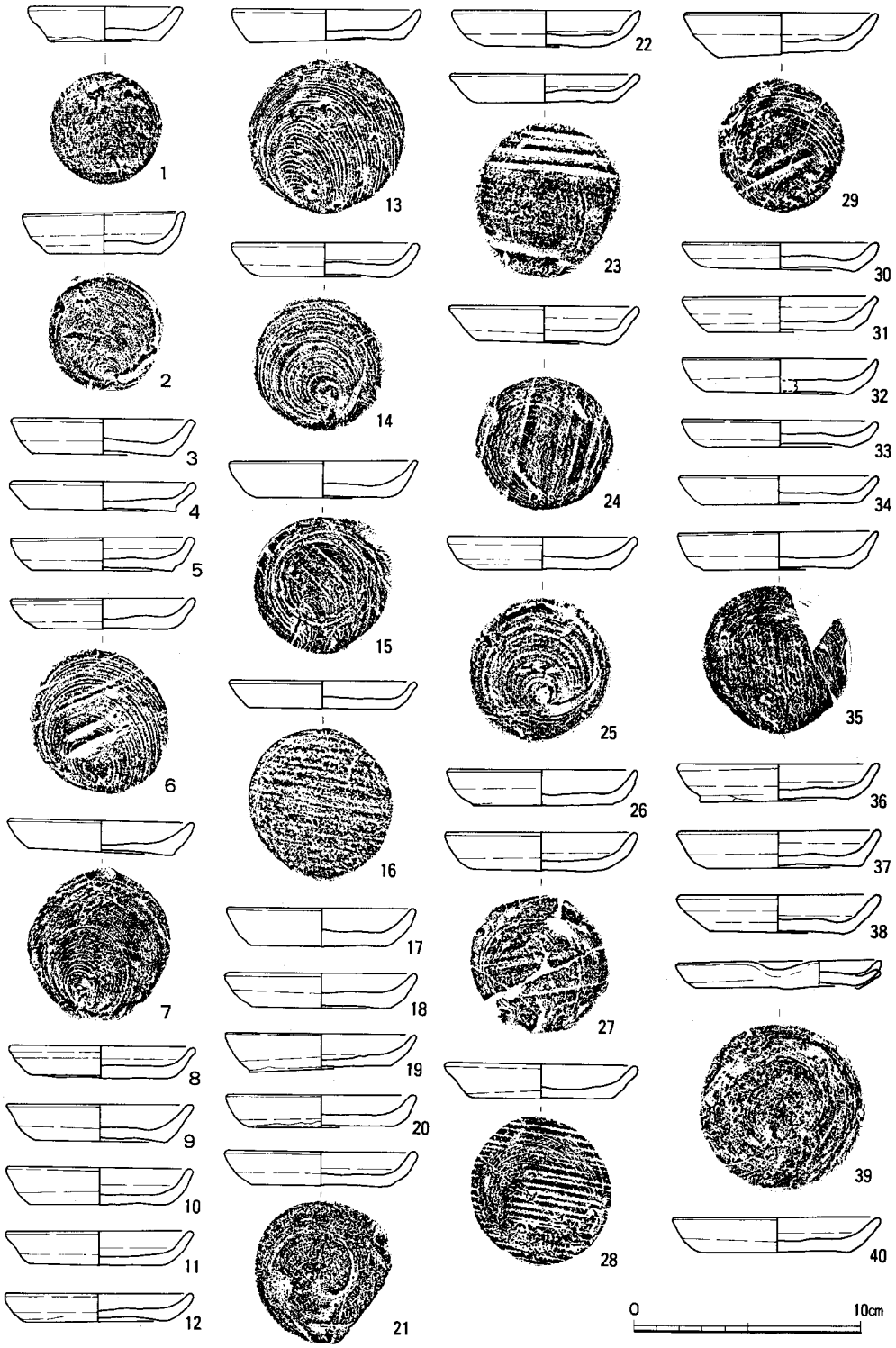
105　854号土壙,(1) 調査途中,(2)完掘状況（西より）

はかる。板材は朽ちており検出は困難であったが，1段目では北西壁，南東壁と南西壁の一部で，2段目では北西壁，北東壁，南東壁で確認することができた。杭は，整然と配されたものではないが，北西壁では36cm程度，南西壁では24cm程度の間隔をあけて打ち込まれている。おそらく，2段目の壁の板材を押えるのに打ったものと思われる。1段目では杭は1本しか検出していない。

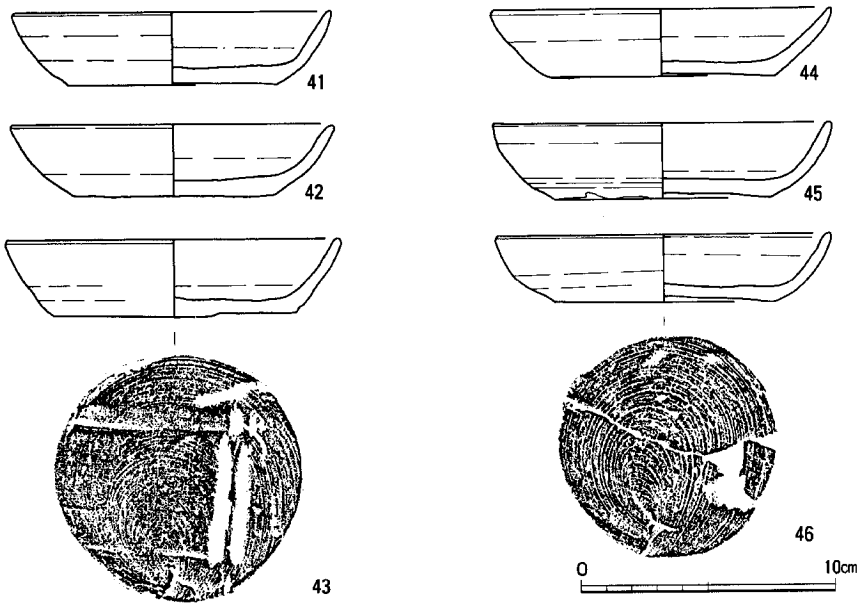
土師器は，埋土の中位から下で出土しているが，出土状況からみて時間的な幅は考えられない。また，西隅近くに分布の集中があるが，散漫ながら全体的に出土している。1段目からの出土は全くない。

土壙の性格については，その構造・遺物の出土状況からは判断できなかった。構造からみて，廃棄壙であるとは考えられない。墓壙とすると，土師器は木棺上におかれ，木棺の腐朽によって落ち込んだことになるが，遺物の配置に意図的なものが認められず，疑問が残る。また，壁面に板を貼って杭で押える点からみて，埋めることを前提としたものとは考えがたい。埋土からは，水が溜っていた形跡はない。ここでは，屋内に設けられた貯蔵穴の可能性を考えておきたい。

1～46は，すべて**土師器**である。**1～40**は皿で，口径6.5～9.0cm，器高1.3～1.8cmをはかる。**41～46**は坏で，口径12.5～14.0cm，器高2.4～3.5cmをはかる。底部は回転糸切りする。板状痕，内底ナデをもつものともたないものが，ほぼ半々の割合でみられる。



108　854号土壙出土遺物１（１／３）

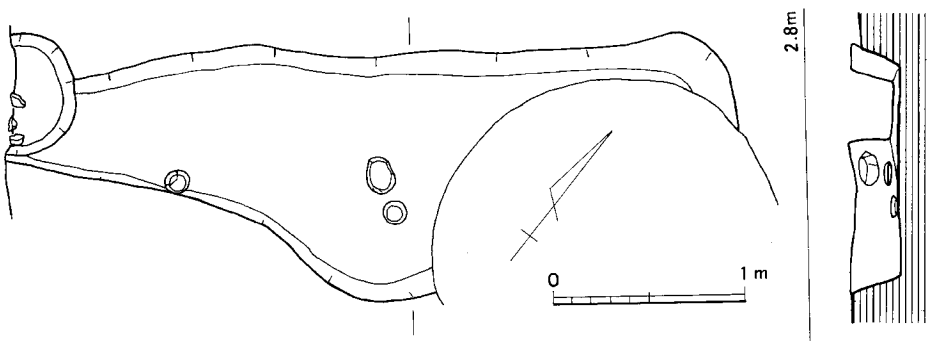


107 854号土壙出土遺物２（１／３）

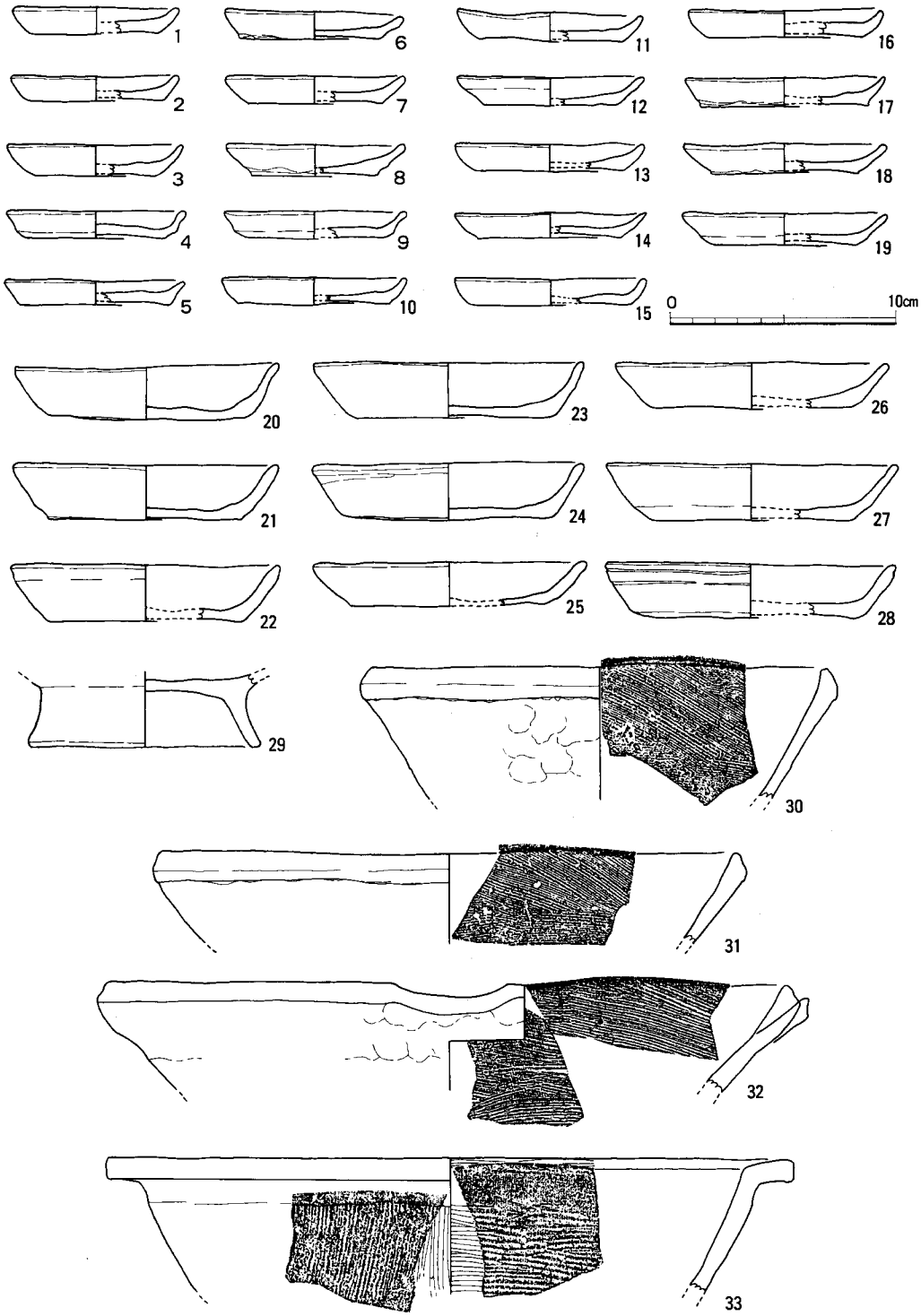
858号土壙

Ｖ面Ｂ―01区において検出した，大形不整形の土壙である。長軸で390cm以上，短軸で130cm，深さ28cmをはかる。

１～29は，**土師器**である。**１～19**は皿で，口径7.3～9.2cm，器高1.0～1.4cmをはかる。**20～28**は，坏である。口径11.7～13.0cm，器高1.95～2.5cmをはかる。すべて，回転糸切り底である。**29**は，埦の高台である。高台は，高く外方に踏ん張る。高台径10.1cmである。**30～32**は，**須恵質土器**のこね鉢である。**32**は，片口につくる。**33**は，**土師質土器**の鉢である。口縁は，大きく外方に折り返す。内面はヨコハケ調整，外面はタテハケ調整を施す。



108 858号土壙実測図（１／40）



109　858号土壙出土遺物（1／3）

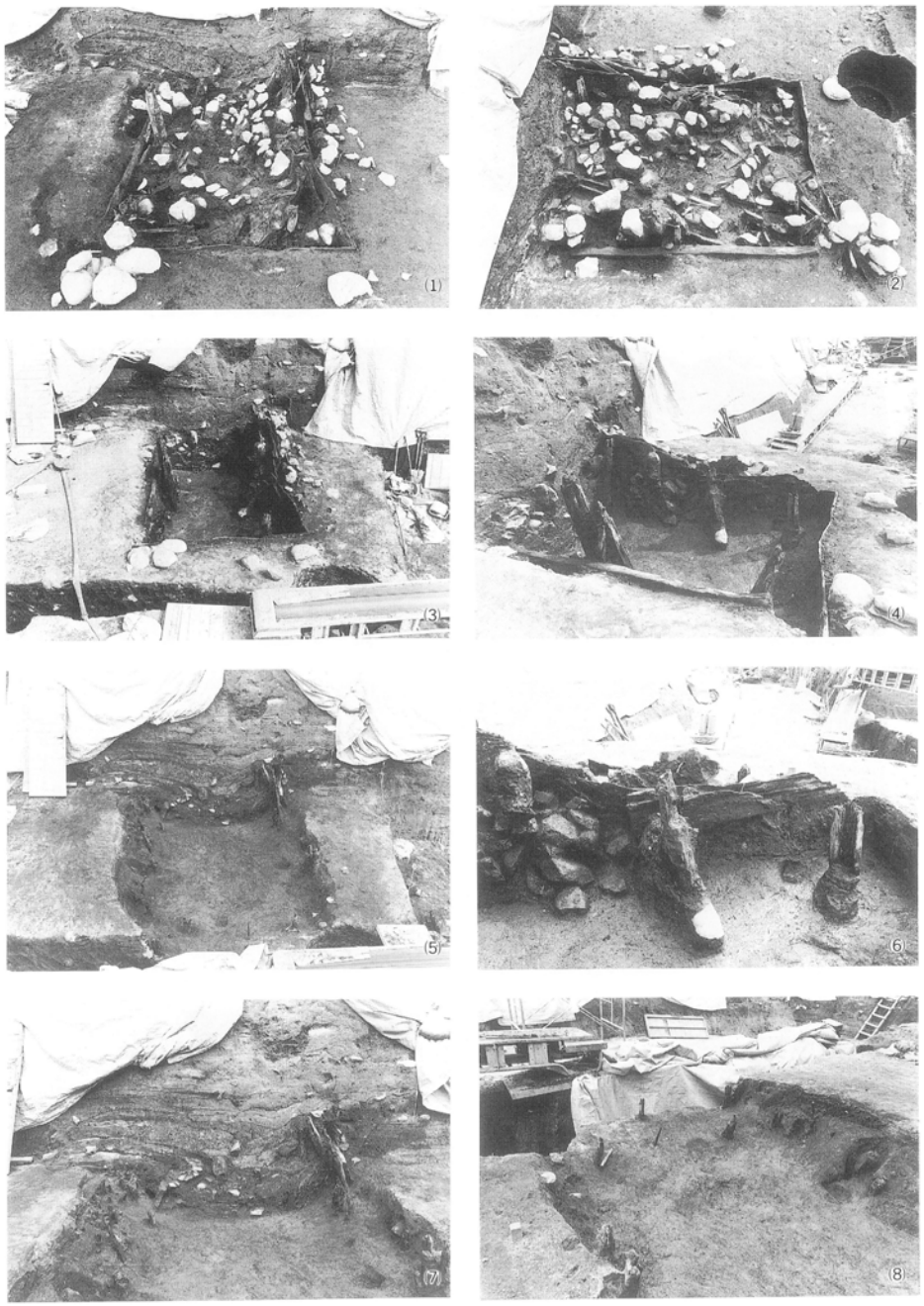
698号土壙（ＳＸ19）

Ⅵ面Ｂ―02区で検出した土壙である。隅丸長方形の土壙を掘り，板材で長方形に枠を組むもので，溜枡の機能を果していたと考えている。土壙の東辺は，調査区外に出ており確認できていない。掘りかたの西辺は，調査区中央に南北に設けた土層観察トレンチの為，その上端を検出できなかった。調査しえたかぎりで，掘りかたは，約400×300cm，深さ60cmをはかる。木枠は，板材を横に立て，杭と礫でおさえたもので，南辺で280cm以上，西辺で240cmをはかる。木枠の高さは，各辺でかなりの差があり，最も高い南辺で56cm，西辺で32cm，北辺では20cmをはかるのみである。この高低差は，調査区東壁で確認した土層堆積状況の掘りかたの立ち上りにも表われており，南と北で約20cmの標高差がみとめられる。698号土壙を掘った時点での生活面に傾斜があったものと考えたい。

埋土は，有機質を多く含む泥土で，未だ泥炭化しきっていない腐植土である。おそらく，溜枡の中に水がたまったまま次第に埋っていったもの（埋めたもの）と思われる。そのため，有機質遺物の遺存状態が良く，木器・漆器等，博多遺跡群では通常検出されることの少ない遺物が，数多く出土した。それらの遺物は，すべて廃棄された状況で出土したもので，特に土壙の上面近くでは，埋める際に投げ込まれたと思われる多数の礫にまじって，あるいは礫に押しつぶされている。また，壙底やや上に堆積した有機質土（藁状）の間からは，蛆とみられる昆虫遺存体がびっしりとつまって大量に検出された。この藁状の有機質土の形成は，うすく幾重にも層状をなしている点から，この土壙を廃する以前と考えられ，この溜枡が決して衛生的なものではなかったことを示している。汚水糟に近いものであったのかもしれない。

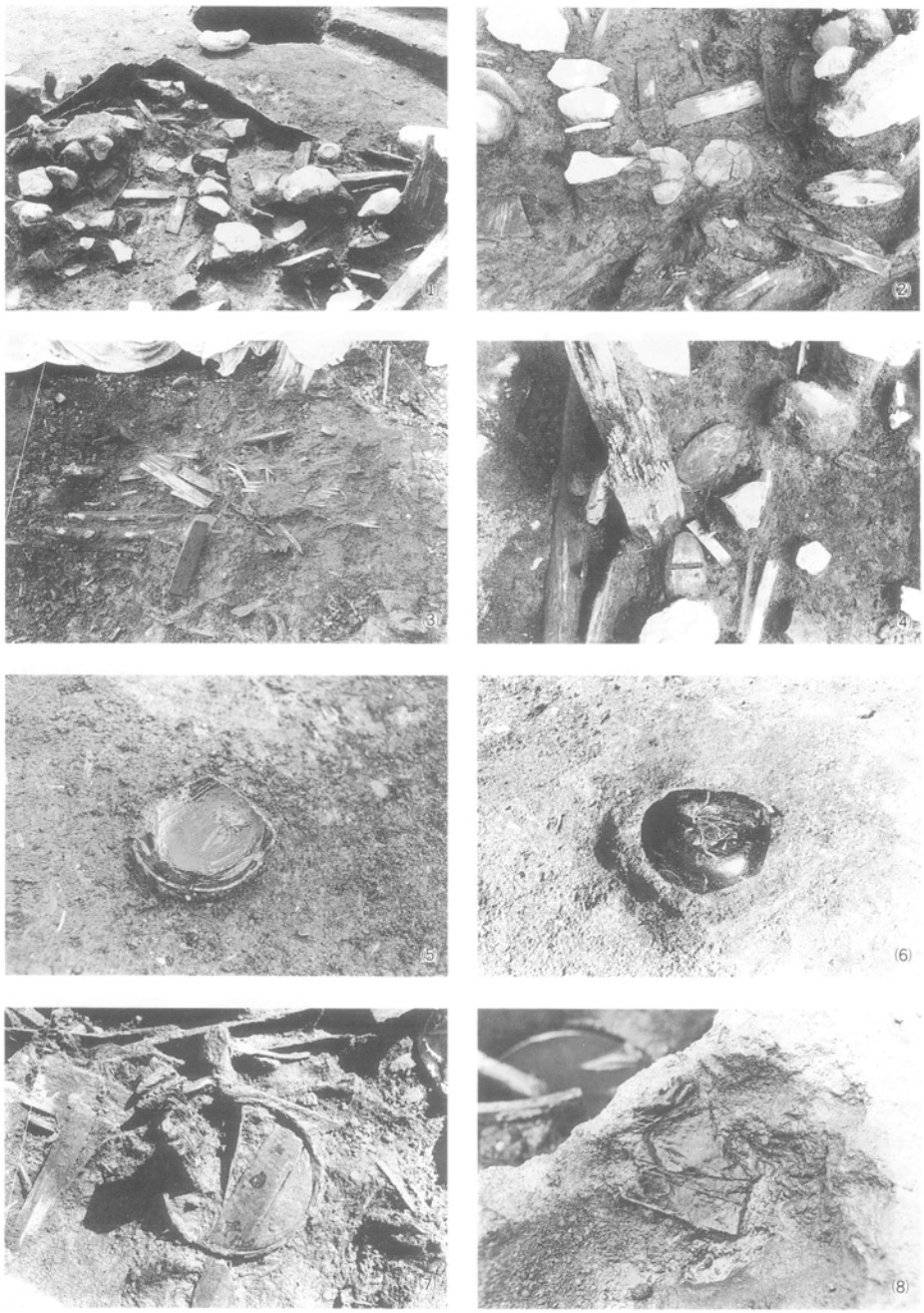
出土遺物は，土師器，緑釉陶器，瓦器，瓦質土器，青磁，白磁，陶器，天目，石製品，骨製品，漆器，木製品，布製品，銅銭と多岐にわたる。

1～84・89は土師器である。**1～56**は皿で，口径7.35～10.55cm，器高0.9～2.0cmをはかる。すべて底部は回転糸切りする。**1・16・20・25・28・30・32・41・42・43・54・55**において，板状痕と内底ナデがみとめられる。**57～84**は坏である。口径11.6～14.4cm，器高2.1～3.2cmをはかる。**59・63・65・68・82**において板状痕，内底ナデがみられる。**62**は，外面を指押え，内面をヨコナデするもので，在地系の土器ではない。底部と体部の境界は不明瞭で，内湾してゆるく立ち上り，口縁を外反させる。橙白色で粉質の精良な胎土で，焼成はややあまい。口径12.3cm，器高1.6cmをはかる。**89**は，土鍋である。内面はヨコハケ，外面の下部（底部）はヨコハケで，上半部は指頭押圧痕をつよくのこす。外面には，厚く煤が付着している。**85**は，**緑釉陶器**の底部である。内面は密にヘラミガキを施す。外底は凹線状にくぼませて，高台をつくり出す。**86**は**黒色土器**の埦である。内外面とも幅広のヘラミガキを密に施す。黒褐色を呈する。**87**は**瓦器**である。埦の底部で，断面三角形の高台を貼りつける。高台径6.3cmをはかる。**88**は**瓦**



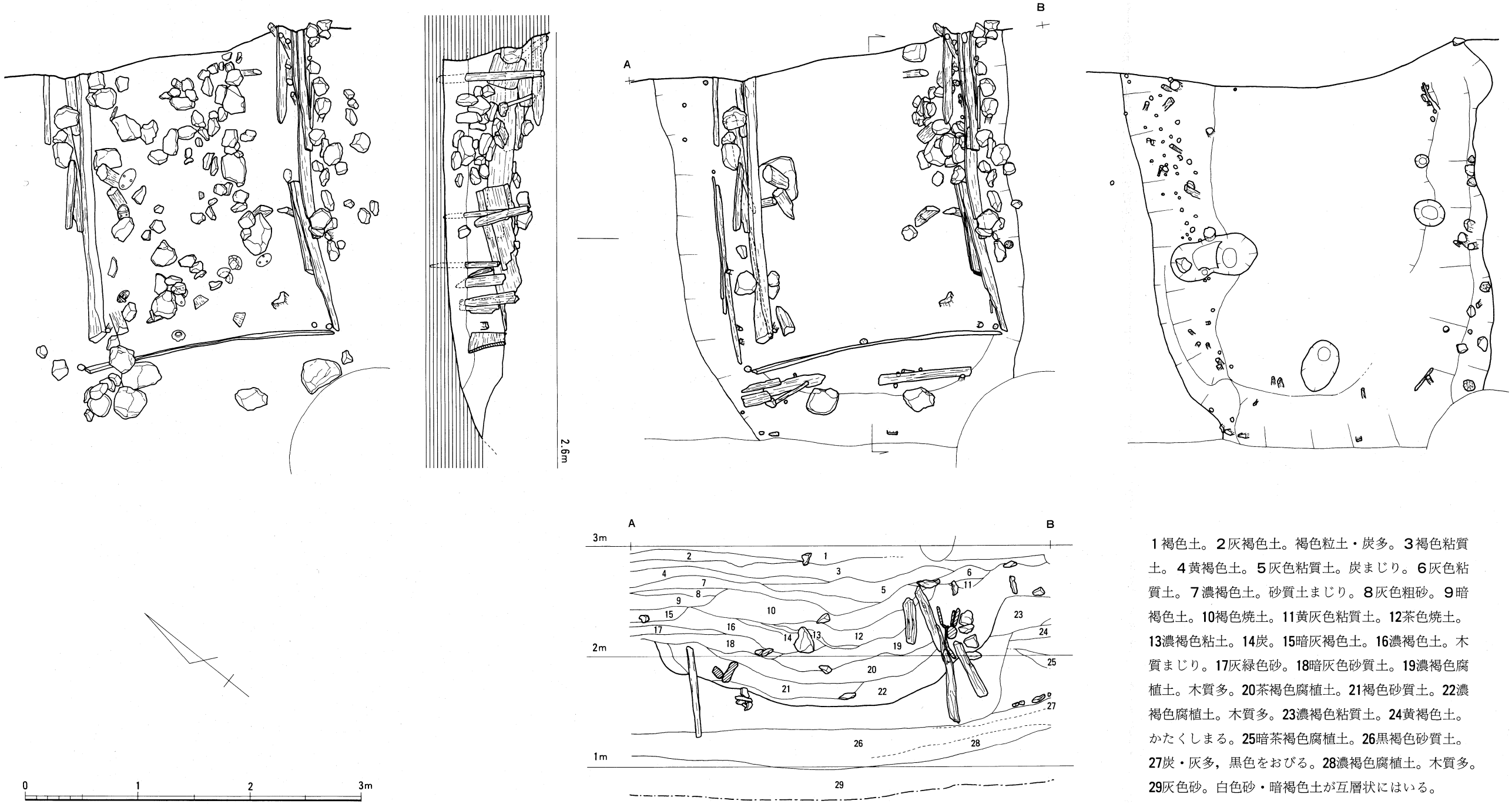
110　698号土壙

(1)　検出状況（西より）　(2)　同左（北より）　(3)　埋土除去状況（西より）　(4)　同左（北より）　(5)　掘りかた完掘状況（西より）　(6)　南辺板組状況（北より）　(7)　東壁土層堆積状況（西より）　(8)　掘りかた西壁（東南より）



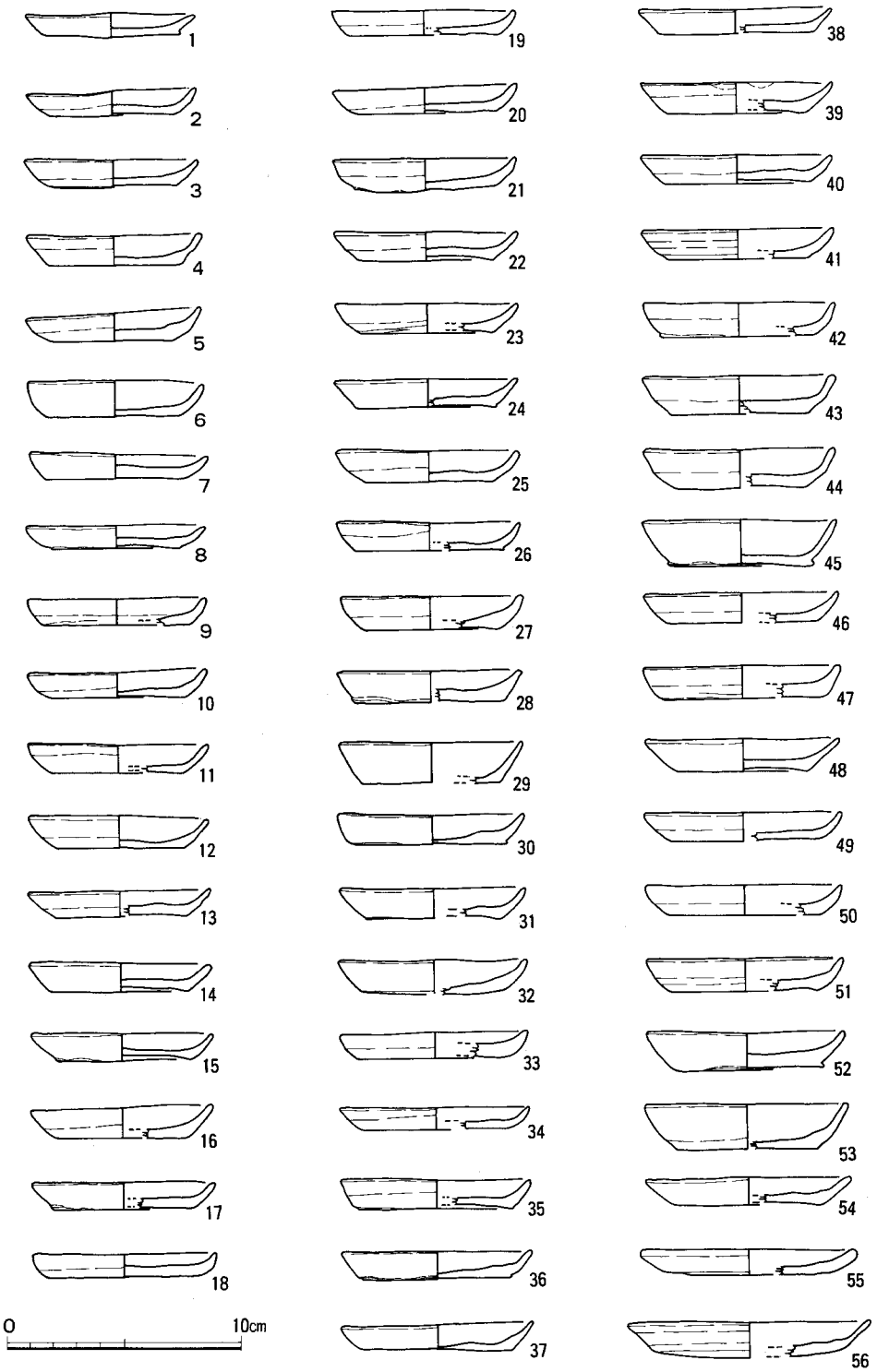
111　698号土壙遺物出土状況

(1)　埋土上面（北東より）　(2)　土師坏・下駄等出土状況（北より）　(3)　墨書折敷底板，編物出土状況（北より）　(4)　下駄出土状況（西より）　(5)・(6)　漆器出土状況　(7)　曲物出土状況（南より）　(8)　掘りかた内烏帽子出土状況（西より）

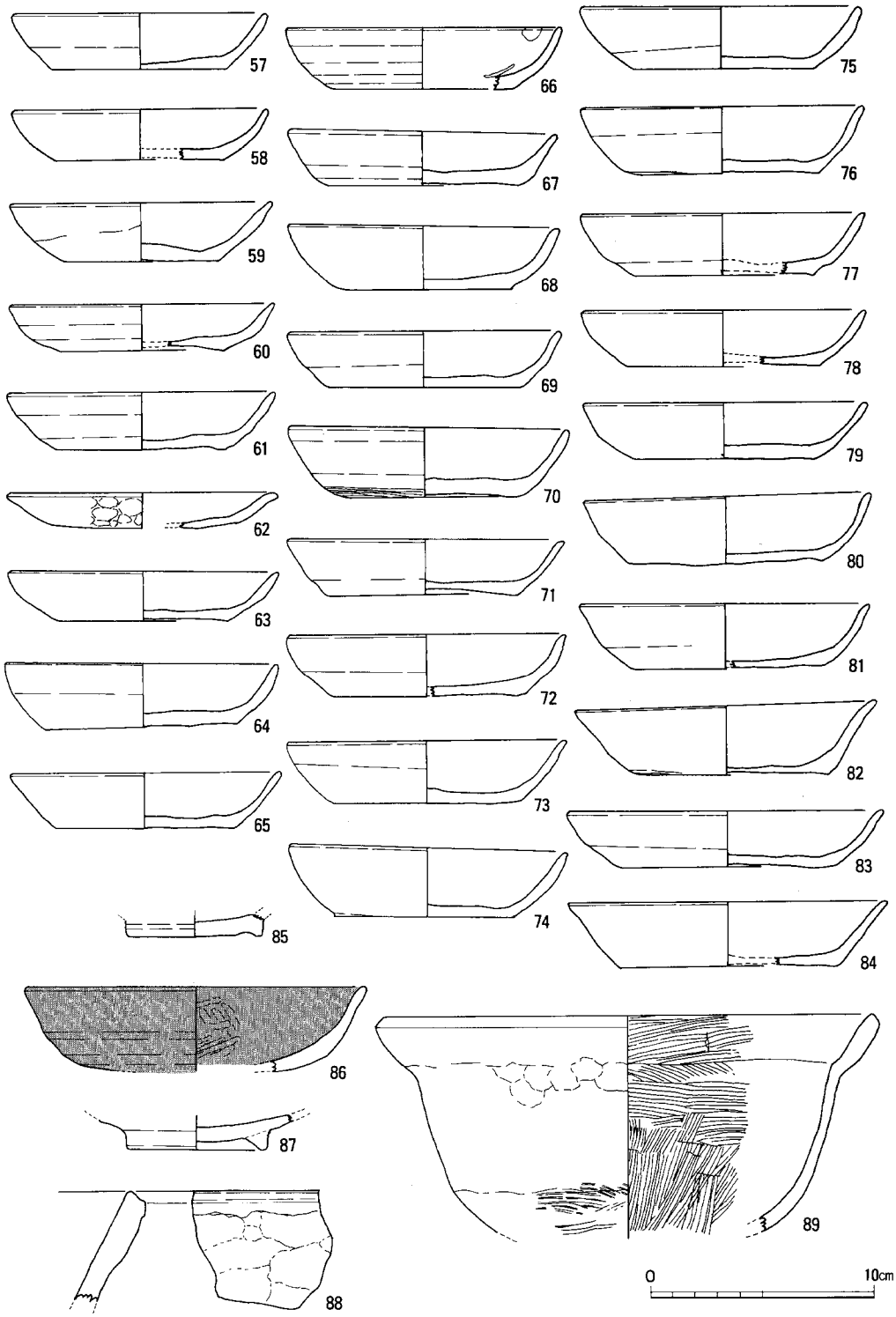


1褐色土。2灰褐色土。褐色粒土・炭多。3褐色粘質土。4黄褐色土。5灰色粘質土。炭まじり。6灰色粘質土。7濃褐色土。砂質土まじり。8灰色粗砂。9暗褐色土。10褐色焼土。11黄灰色粘質土。12茶色焼土。13濃褐色粘土。14炭。15暗灰褐色土。16濃褐色土。木質まじり。17灰緑色砂。18暗灰色砂質土。19濃褐色腐植土。木質多。20茶褐色腐植土。21褐色砂質土。22濃褐色腐植土。木質多。23濃褐色粘質土。24黄褐色土。かたくしまる。25暗茶褐色腐植土。26黒褐色砂質土。27炭・灰多，黒色をおびる。28濃褐色腐植土。木質多。29灰色砂。白色砂・暗褐色土が互層状にはいる。

112　698号土壙実測図（1／40）



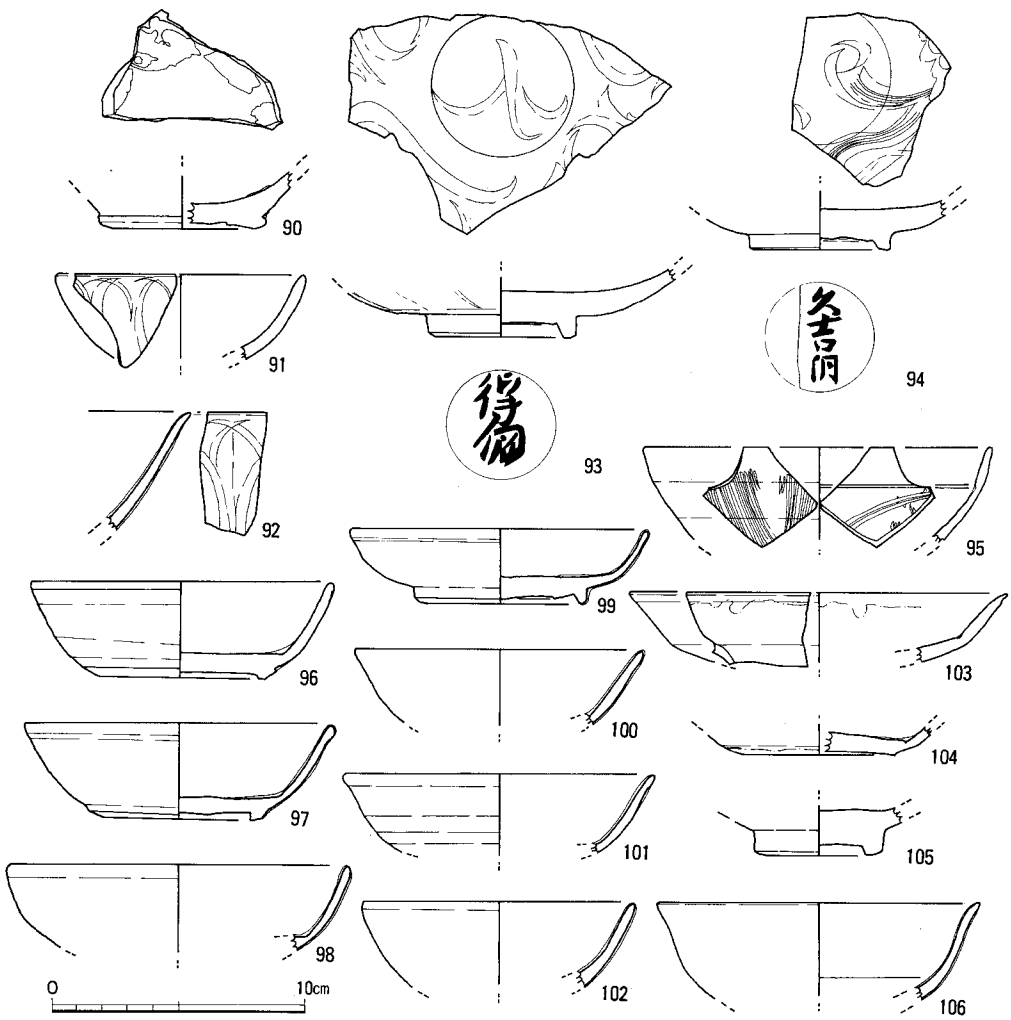
113 698号土壙出土遺物１（１／３）



114　698号土壙出土遺物２（１／３）

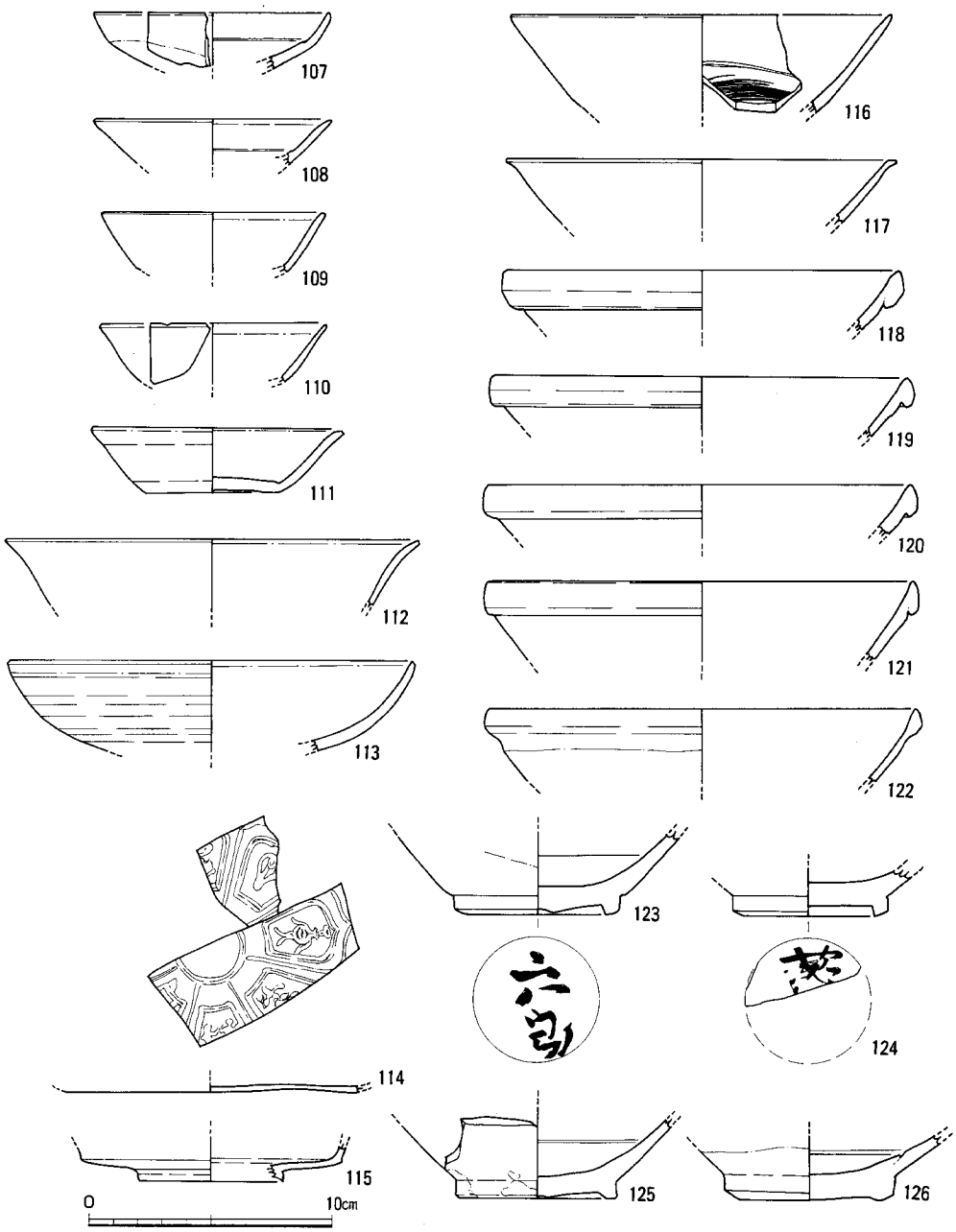
質土器である。小片の為，すり目の有無は確認できないが，鉢である。

90は，**越州窯系青磁**の碗である。乳赤茶色の胎土に，黄味がかったオリーブ色の釉を施す。外面は露胎である。見込みには，接近して灰白色の耐火土の目痕がならぶ。高台は，蛇の目高台につくる。**91**〜**106**・**127**は，**青磁**である。**91**・**92**は，鎬蓮弁文の碗である。**93**・**94**は，見込みに片切彫りで花文を描くもので，高台内の露胎部に，墨書が残されている。**93**は「得綱」，**94**は「久吉綱」と読める。綱司銘の墨書には，**93**の「得綱」の様に一字名のものが多く，在博多宋商人の名とかかわると考えられている。事実，従来の出土資料中には「丁綱」「張綱」など中国名を思わせるものが少なくない。**94**の「久吉綱」は，二字名をつけている点で異例といえる。昭和63年度実施された，博多遺跡群第39次調査（1989年度報告予定）では，「忠吉」「國

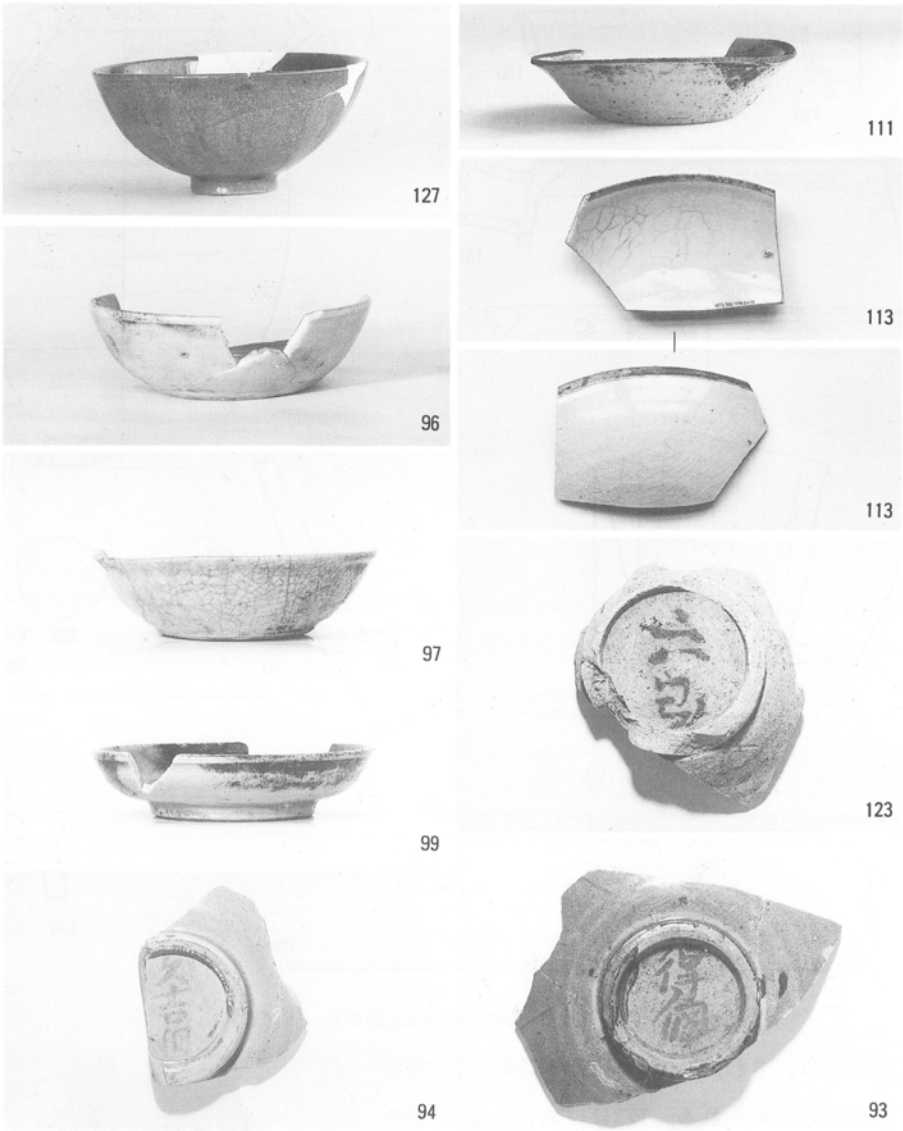


115　698号土壙出土遺物３（１／３）

吉」の銘を持つ墨書磁器が出土しており，調査地点も比較的近いことから，「吉」を通字とした同族の名とも考えられる。すなわち，久吉は，綱司を号する日本商人の名ということになる。博多の古代末から中世初頭にかかる貿易体制を考える上で，興味深い資料である。**95**は，同安窯系の青磁碗である。**96**～**98**は，外底を碁笥底につくる皿である。**96**の見込み中央には，印花



116　698号土壙出土遺物４（１／３）



117　698号土壙出土遺物５（約１／３）

文がみとめられる。**99**は，高台付皿である。見込み中央は，幅約２cmの輪状に釉をかきとっている。**100**～**102**は小碗である。**103**・**104**は皿である。**105**は碗の高台である。**106**は碗で，見込みに圏線がめぐる。

107～**126**は，**白磁**である。**107**～**111**・**114**・**115**は皿で，**112**・**113**・**116**～**126**は碗である。**109**～**113**は，口唇部の釉をかきとって露胎とするいわゆる口ハゲである。**114**は，枢府釉の皿で，見込みに印花文を施す。２片からなる底部片であるが，小片の方のみ火を受けており，接合がゆがむ。**115**は，青白磁の腰折皿である。内面にかすかに印花文と思われるものがみとめられ

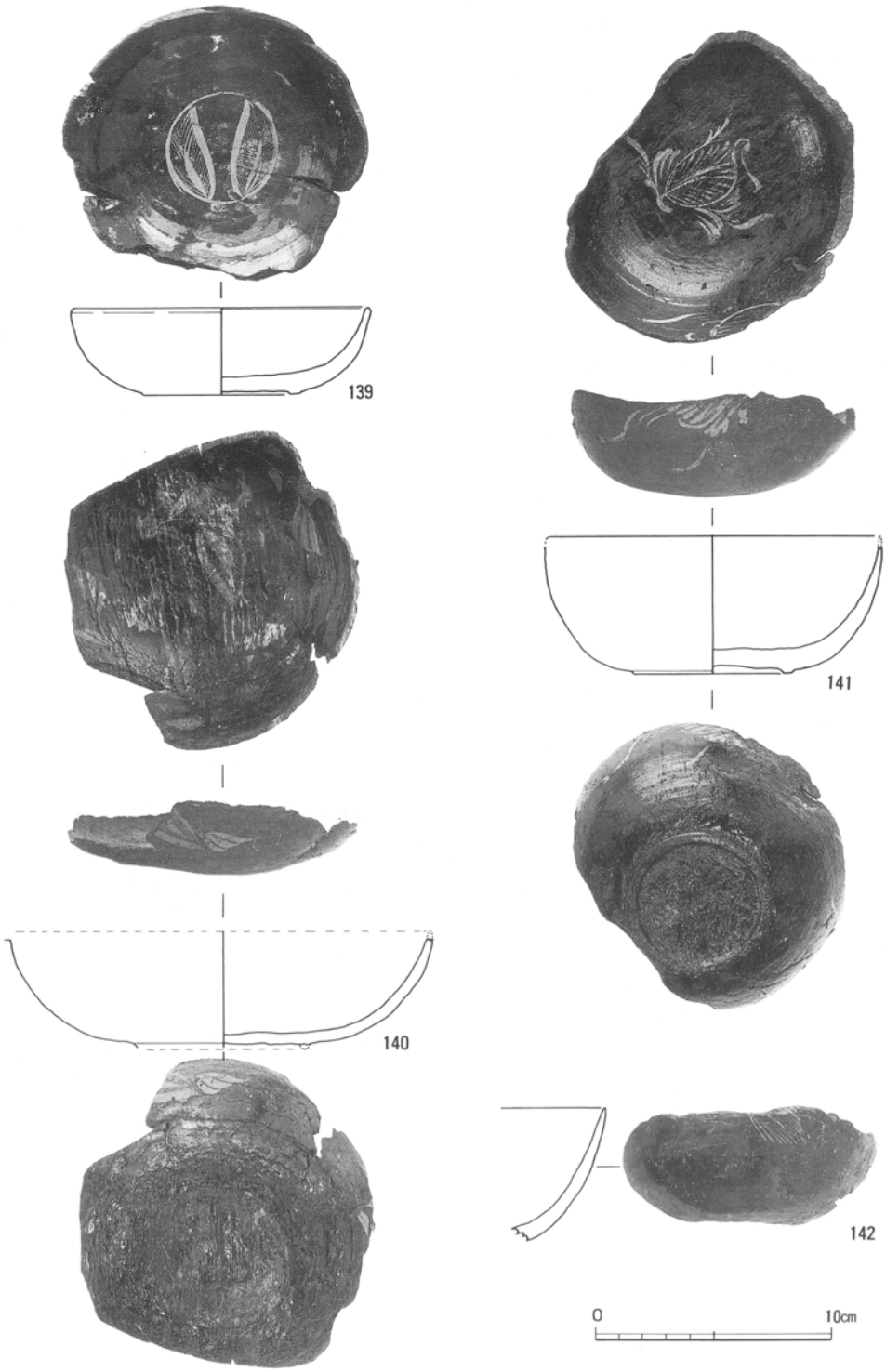
118　698号土壙出土遺物６（１／３）

る。高台畳付は，きわめて細い。**123・124**には，高台内側に墨書がみとめられる。**123**は「六郎」と読めるが，**124**は判読不可能である。

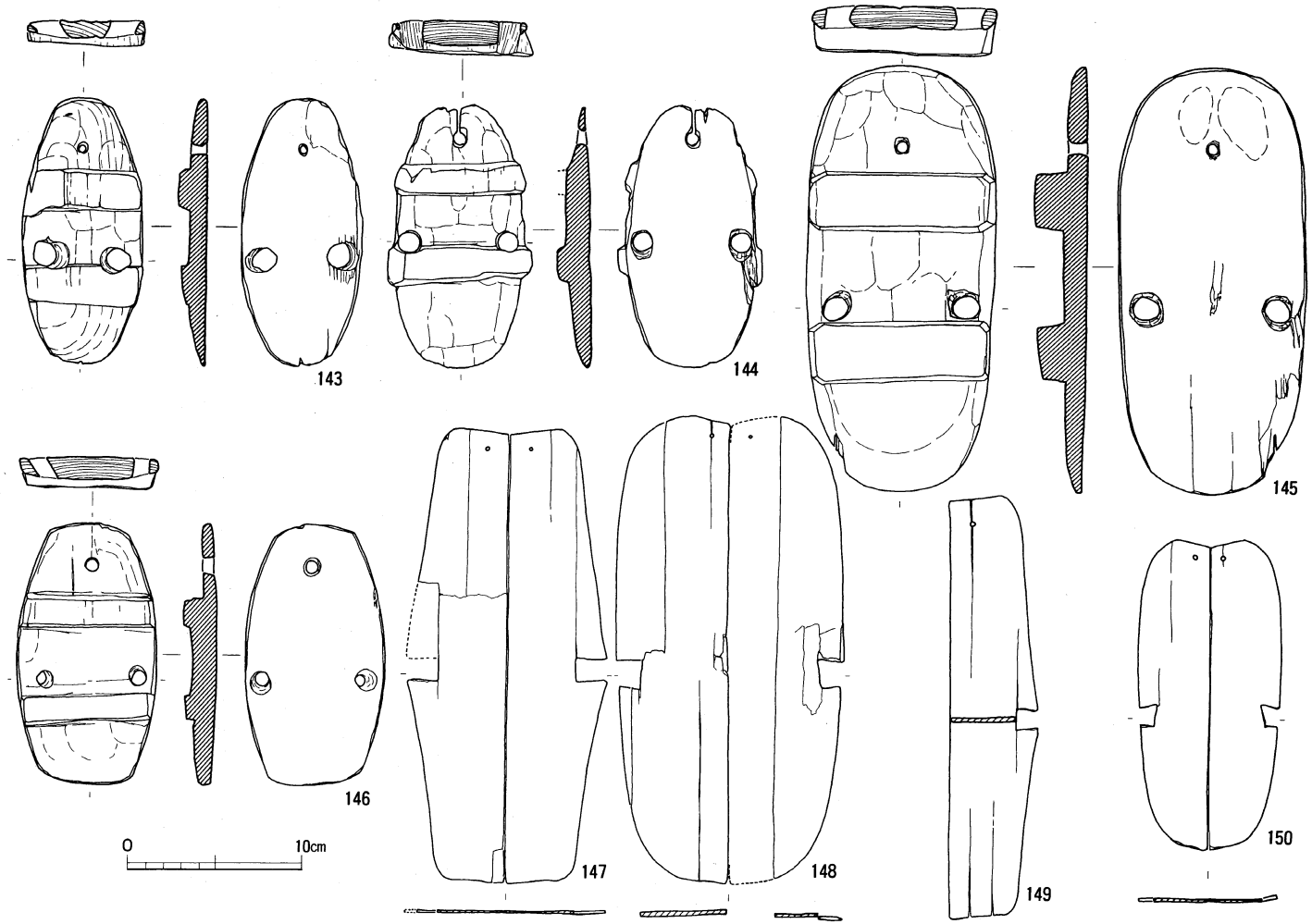
128～**136**は**陶器**である。**128**は黒褐釉の茶入，**129**・**130**は天目茶碗である。**131**は褐釉の行平，**132**は甕である。**133**は茶褐釉，**134**は黒褐釉の壺である。**135**は甕の底部，**136**は口縁である。

137は砂岩製の**毬球玉**である。**138**は骨製の**笄**である。先端部をわずかに欠いている。

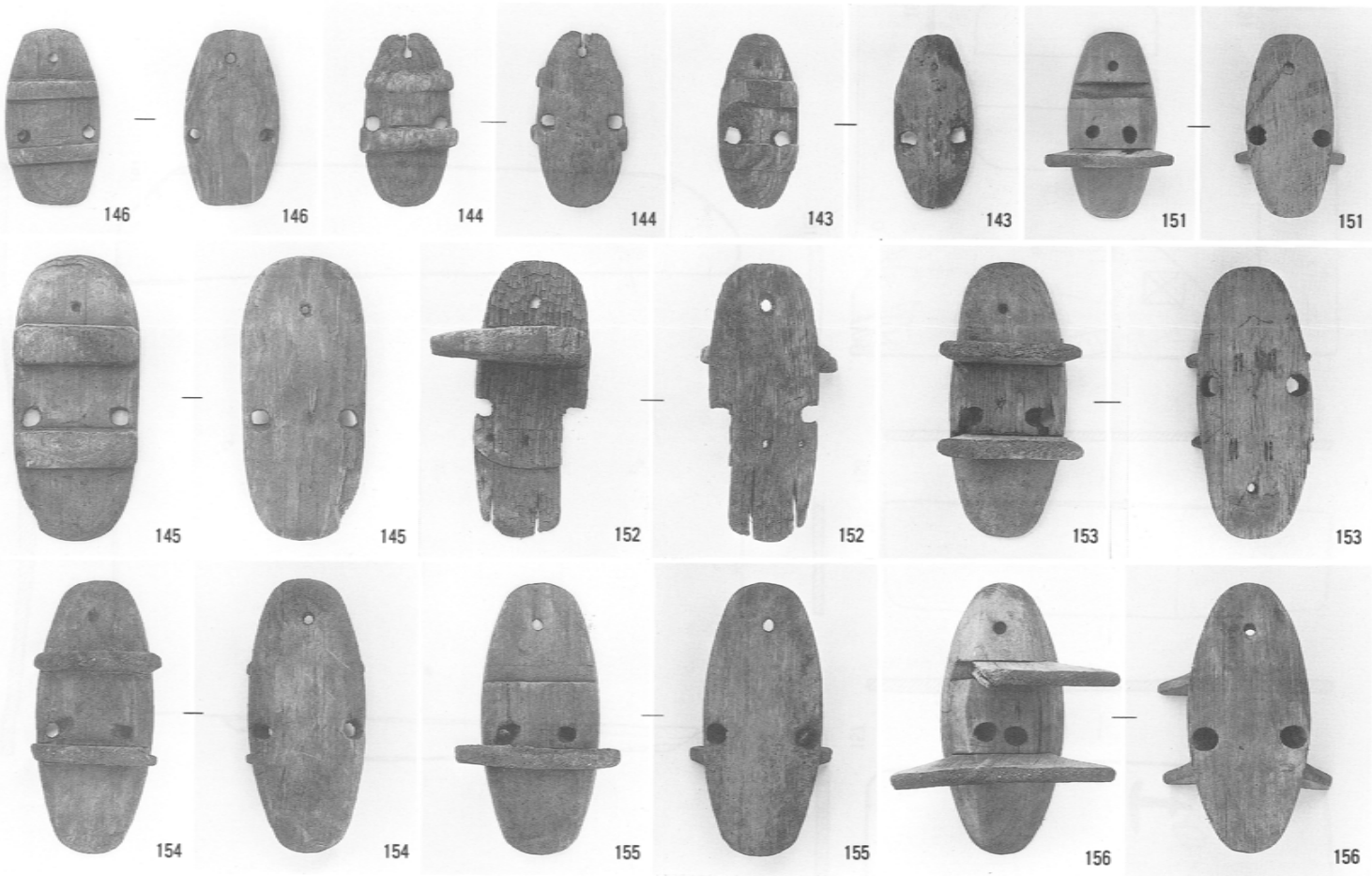
119　698号土壙出土遺物７　▶



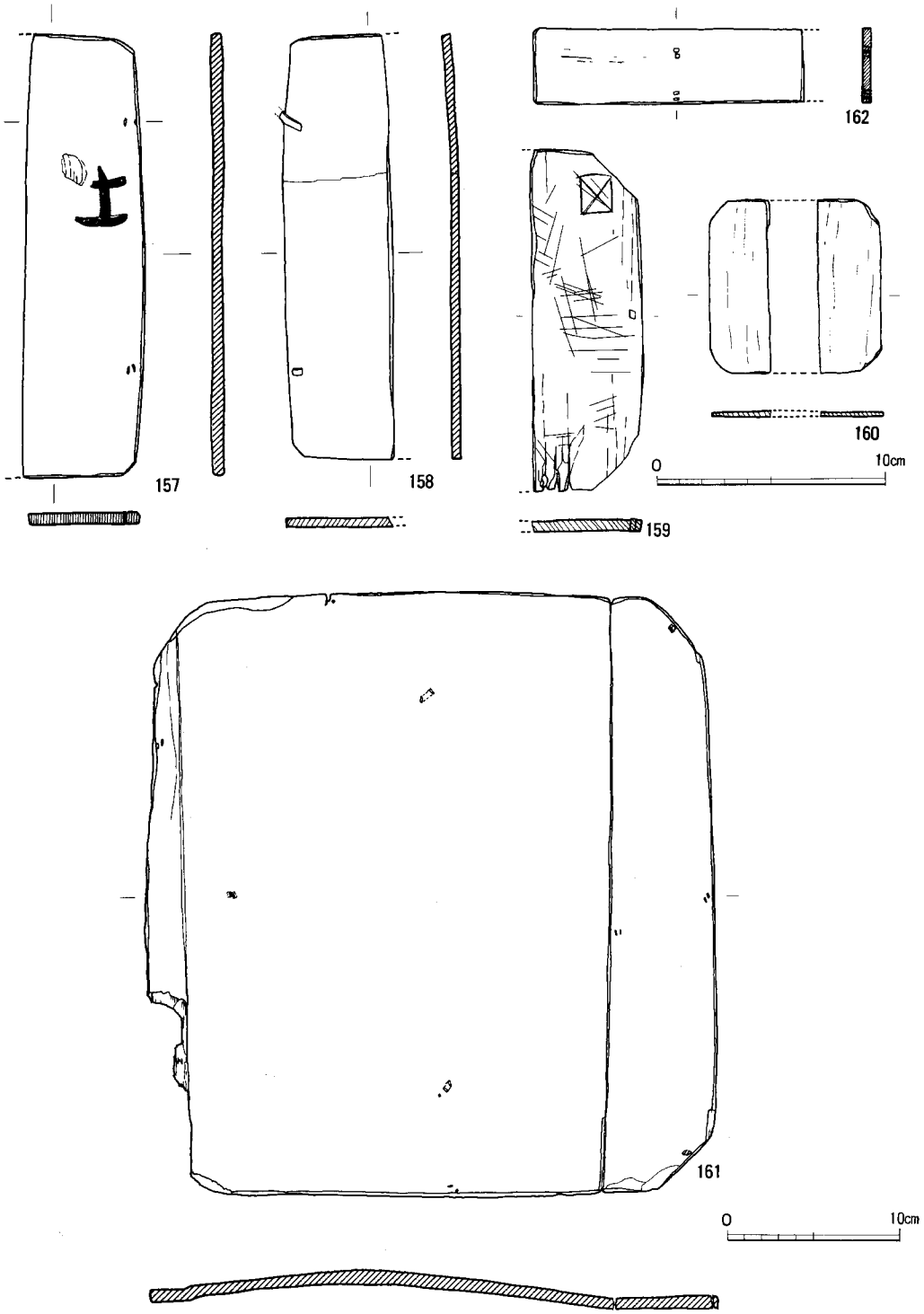
120　698号土壙出土遺物８（１／３）



121　698号土壙出土遺物９（１／４）



122　698号土壙出土遺物10（約１／６）



123 698号土壙出土遺物11（1／3・1／4）

139～**142**は，**漆器**の椀である。いずれも黒漆を地として，赤漆で草花文様を描いている。**139**は見込み中央に，２枚の葉を並べて描く。外面には，文様はみとめられない。**140**・**141**は，見込みと体部上半の内外に位置をあわせて枝葉文様をあしらう。**140**は口縁端部と高台を欠く。またつくりが比較的うすいため，遺存状態もよくない。**142**は，椀の体部の小片である。内面には文様はなく，外面口縁直下に枝葉文を描く。**140**を除いて，遺存状態は良好である。

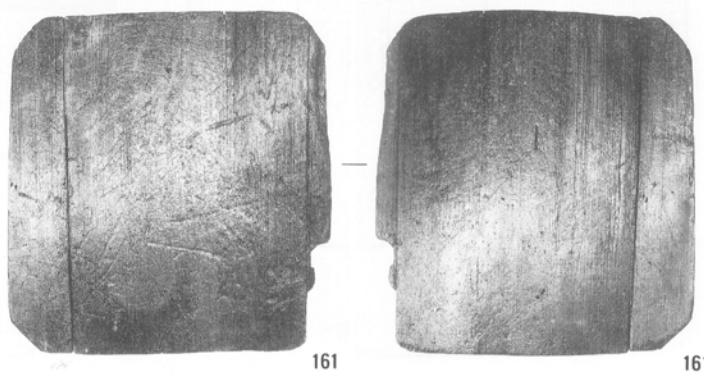
143～**156**は**下駄**及び**板草履**である。**143**～**146**・**152**は，一木から歯を削り出すものである。表１に分類と寸法をのべる。（下駄の分類については，第三章　小結　P.239を参照されたい）**147**～**150**は，板草履である。**147**から順に，長さ26.1cm，26.9cm，24.3cm，17.8cmをはかる。この他にも，歯を欠いた下駄の台，下駄の歯，板草履の破片等は数多く出土している。下駄の台からみた分類の構成数を示すと，Ａ類６点（１点は後歯に釘留穴３ケ），Ｂ類４点，Ｃ類45点（内楔併用７点），Ｅ類２点，Ｇ類１点（枘に楔を打つ）となる（表１の点数も含む）。

157～**161**は，**折敷**の破片である。**157**～**160**は底板で，**162**は側板と思われる。**157**には，墨書がみられる。「十一」もしくは「土」とよめるが，字体と字配りからみると，「十一」の方が妥当か

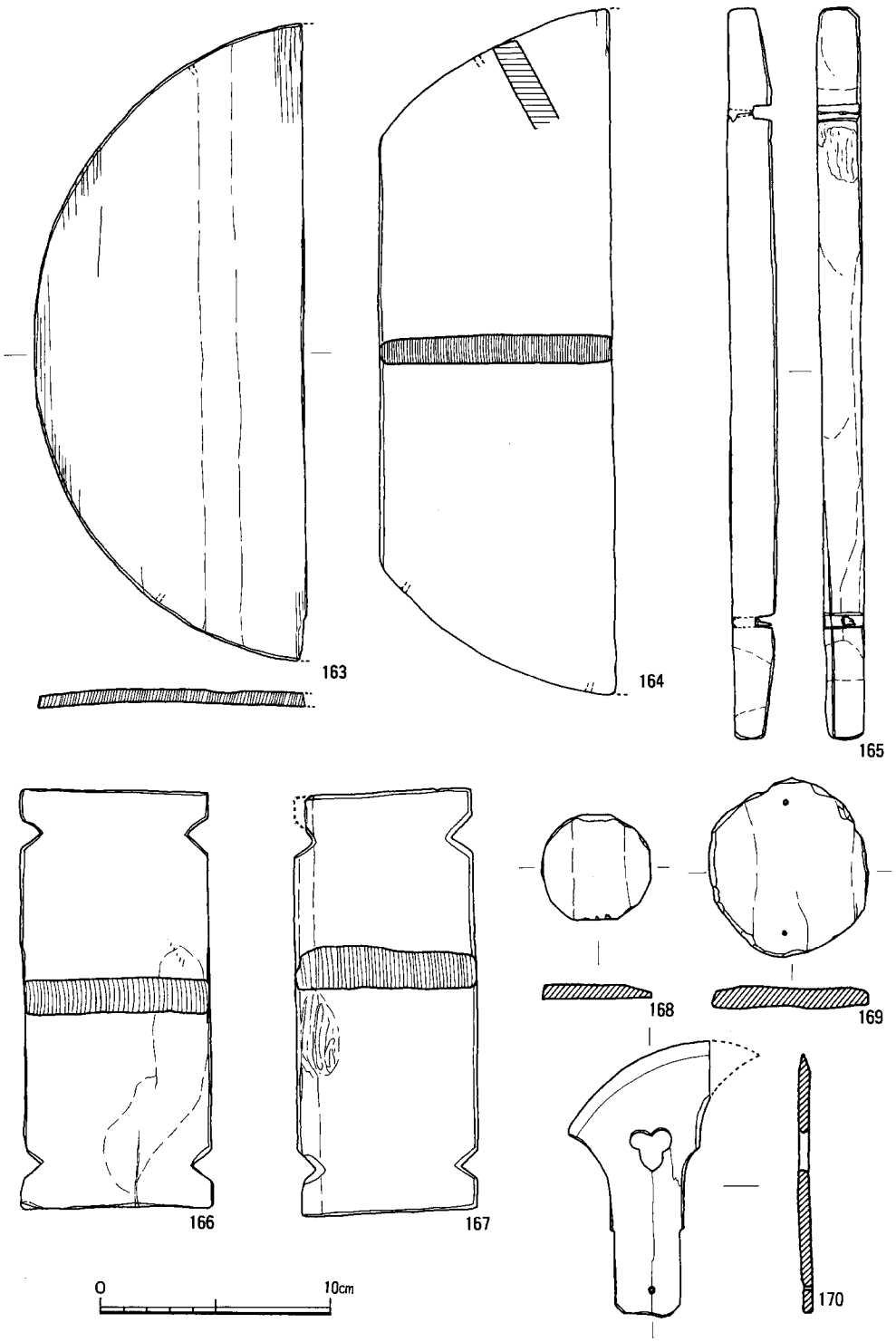
表１　698号土壙出土下駄分類表

番号	分類	寸法cm（長－幅－高）	備　考	番号	分類	寸法cm（長－幅－高）	備　考
143	B	15.3－ 7.0－1.65		**152**	A	23.6－ 9.6－ 7.9	後歯に釘留穴３
144	B	15.1－ 7.5－2.0					
145	B	24.4－10.8－3.1		**153**	E	23.2－ 9.8－ 6.3	
146	B	15.0－ 8.0－1.95		**154**	C	23.5－10.1－ 4.6	
151	C	15.9－ 7.6－5.9		**155**	C	23.4－10.2－ 6.8	
				156	C	23.2－10.5－12.5	

と思われる。意味から見ても，数字（番号）とした方が理解できよう。側縁にそって，２ケ所に桜皮を通した痕跡がみられる。**158**には，断片的に桜皮が残っている。**159**は，１辺約15cm，と小形の折敷である。

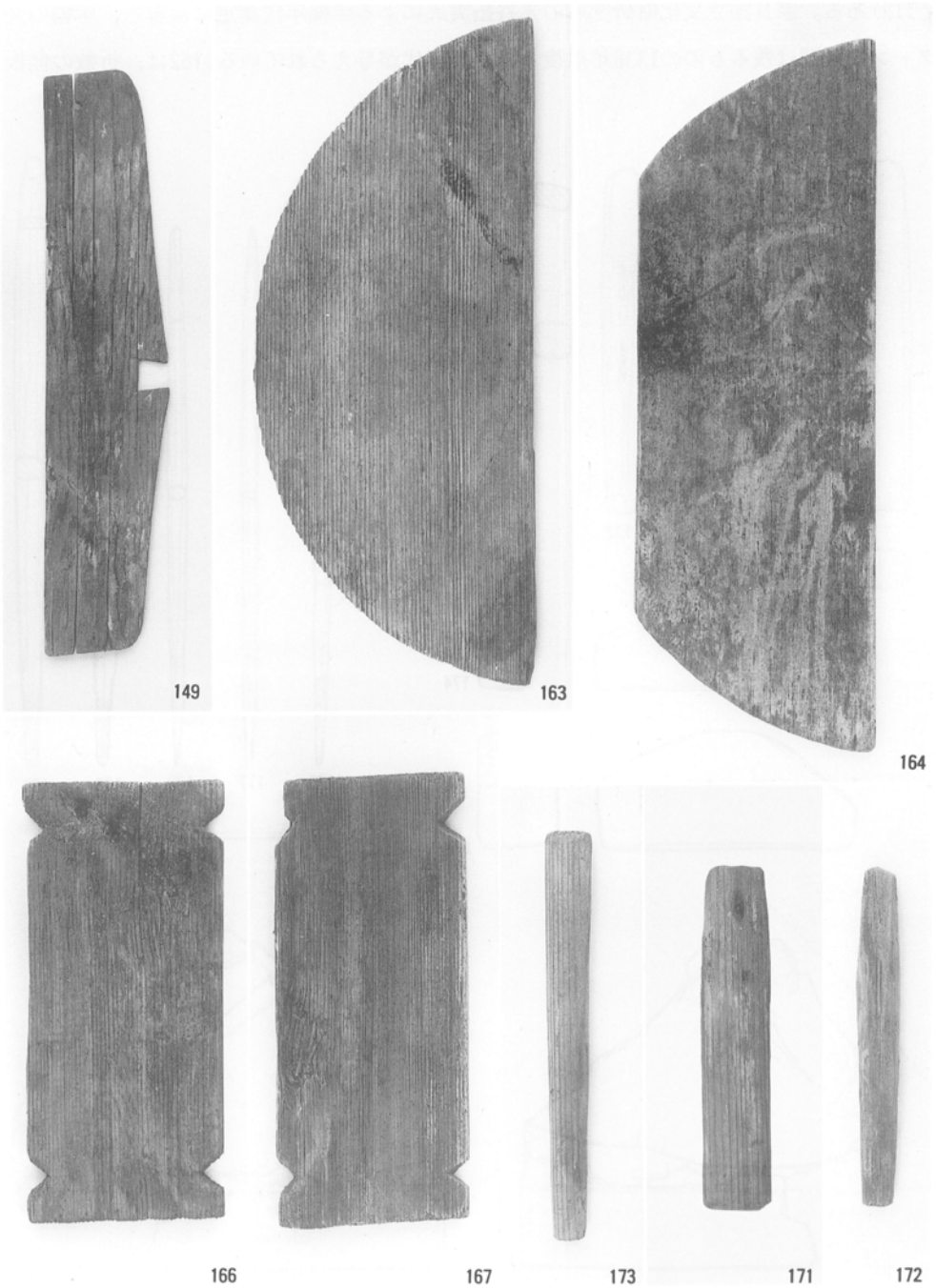


124　698号土壙出土遺物12



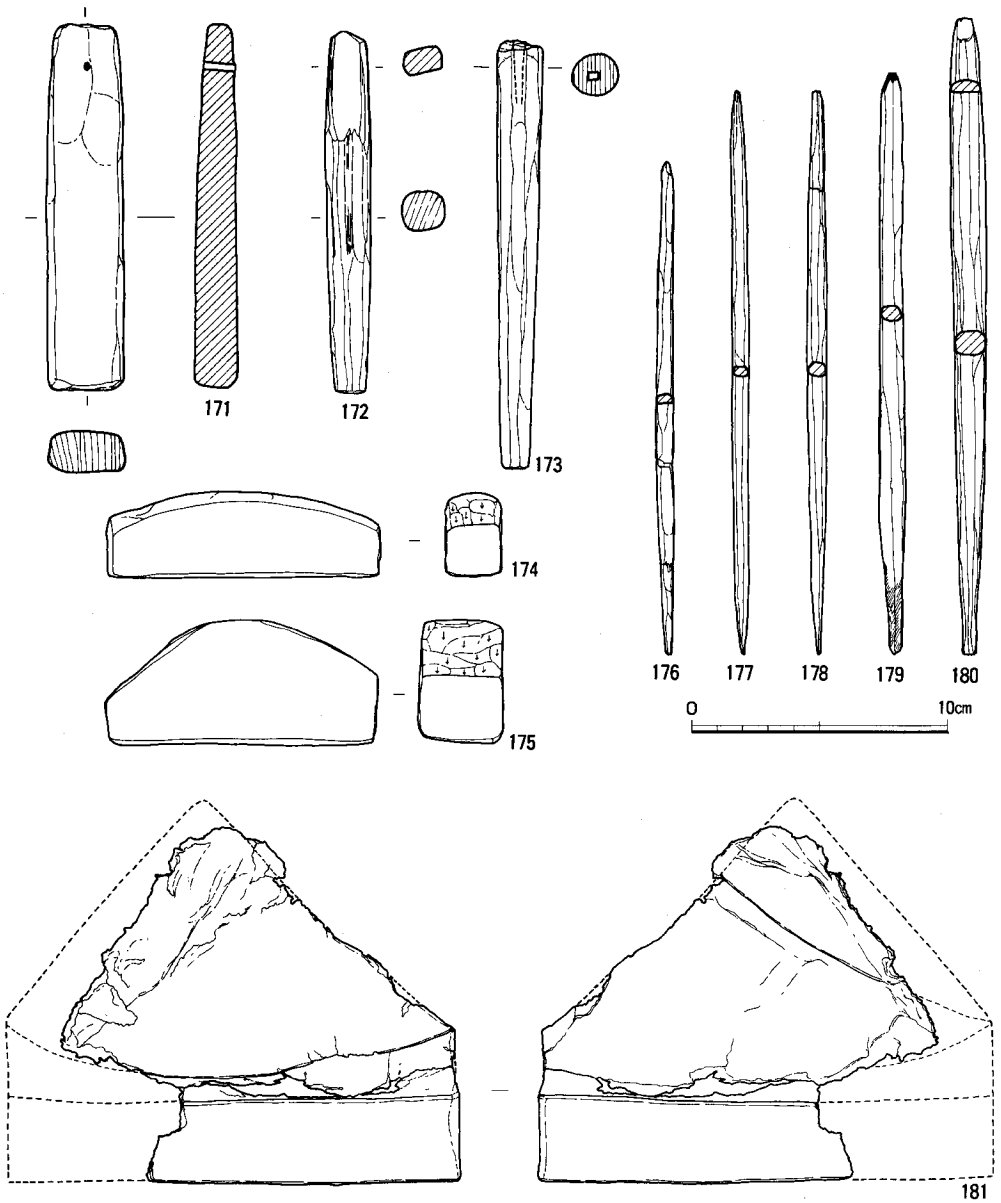
125 698号土壙出土遺物13（1／3）

底側の面には，刃物でつけた刻印「⊠」がみられる。また，無数の細かい刃傷が残されており，折敷を裏返して俎に使ったものと思われる。**160**は，２枚の板にわかれるが，材・寸法・形状から，同一個体であると考える。**161**は，一辺が35cm前後をはかる大形の折敷である。表裏面とも，



126　698号土壙出土遺物14（１／３）

無数の刃傷が残る。縁辺にそって6ヶ所，中程寄りに4ヶ所，桜皮を通している。縁辺の桜皮は側板をとめるもの，中程寄りのものはほぼ矩形に配されており，脚をつけたものであろう。698号土壙の木枠の南側板として，大形の板材(建築材？)とともに立てられていたもので(P.67, Fig.112)ある。奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏による年輪年代測定によると，年輪の変動パターンに疑問は残るものの1336年以後という実年代が与えられている。**162**は，折敷の側板で



127 698号土壙出土遺物15（1／3）

128　698号土壙出土遺物16（約１／３）

あろう。実測図右側は折損したか，意識的に折り取った状態を示している。

163・164は，**曲物**底板である。**165**は，建築材もしくは木工製品の一部である。長さ32cm程の角材の両端から4.5～5cm程で，細い枘を切る。枘から両端に向けては，削りを入れて斜めにおとす。枘には別材が組みあわされ，枘の裏側から枘内にむけて，木釘を打ってこれを固定する。実測図上方の枘部は，木釘を打った為に枘部で割れを生じている。面取りの丁寧さからみて，枘を切ってある面が，表に出る側であろう。**166・167**は，**糸巻状木製品**である。**168・169**は，木製円盤である。**169**には釘留孔が２ヶ所みられる。**170**は用途不明である。加工は丁寧で，面取りもなめらかになされている。下方は両側から削りこんで，中央に目釘穴を一つ穿つ。形状からみて，兜の鍬形を思わせる。装飾品であろう。**171**は，木棒である。一端を削りこんで細くし，鉄釘を打っている。用途不明。**172**は，全体に丸く削った後，一端を両側から平らに削りこむ。用途不明。**173**は，**錐の柄**と考えられる。錐の茎穴は，３×3.5㎜の長方形をなしている。**174・175**は，厚い材の一面を山形に削るもので，用途不明。**176～179**は，**箸**である。箸は大量に出土しており，その中から遺存状態の良いものをえらんで図示した。**177**と**178**は対になるものと思われる。

181は，**折烏帽子**である。698号土壙の掘りかたより出土した。近世の103号井戸に切られ後頭部部分を大きく欠く。布に漆をかけたもので，遺存状態は比較的良い。平らにつぶれた形で出土しているので帽子部分の径及び厚さは知りがたい。頭にかぶる縁の，厚くなった部分で２㎜強をはかる。烏帽子は，長烏帽子を右側頭部側に前から折り，更に後方から左側頭部側に折りまげて作っている。この工程から推定される烏帽子の幅は，前後に18cm前後，高さは15cmである。また，長烏帽子の高さは，約25cm程度と思われる。

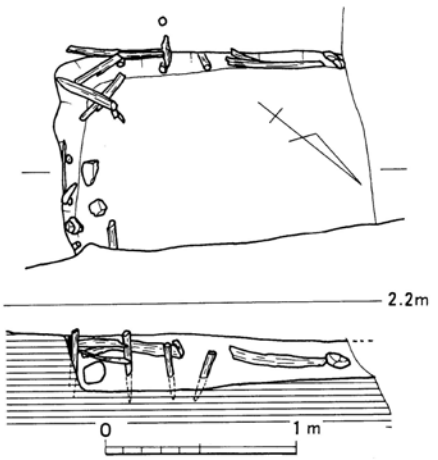
その他，「天聖元寶」「元豊通寶」「景徳元寶」**銅銭**が出土した。

699号土壙（ＳＸ－17）

Ｖ面Ｂ－02区で検出した遺構である。15号溝に切られ，北半部を失なう。東半部分は，調査区外となる。調査しえた2辺は，西辺で152cm，南辺で104cmをはかる。長方形の土壙を掘って，その壁にそって板を横に立て杭で押える。構造的には698号土壙と類似するが，土壙掘りかたが角を持った長方形をなし側壁も垂直に近く立っている点，板材は壁にそってあてる程度で貧弱な点など，相違点も少なくない。

埋土には，泥炭化しきっていない腐植土がうすくみられる。698号土壙にみられた様な藁の堆積層，蛆はみられない。また有機遺物も少なく，箸・下駄が数点出土したにとどまる。土壙内への礫の投棄はみられない。埋土の状況は，ほぼ水平方向の堆積で，壙外から流れこむ堆積層は，みられない。したがって，次第に浅くなって埋ったものではなく，一時に土砂を落して埋めたものと解される。

遺構の性格としては腐植土層がみとめられる点から，水を溜めていたことは考えられる。また，ゴミを投棄していない点から，698号土



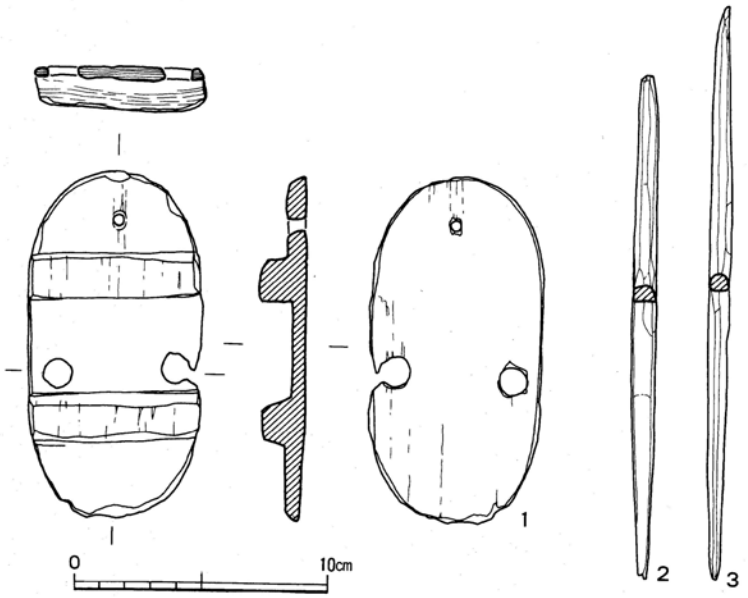
129 699号土壙実測図（１／40）

130 699号土壙 (1)土層堆積状況（南より）(2)北より

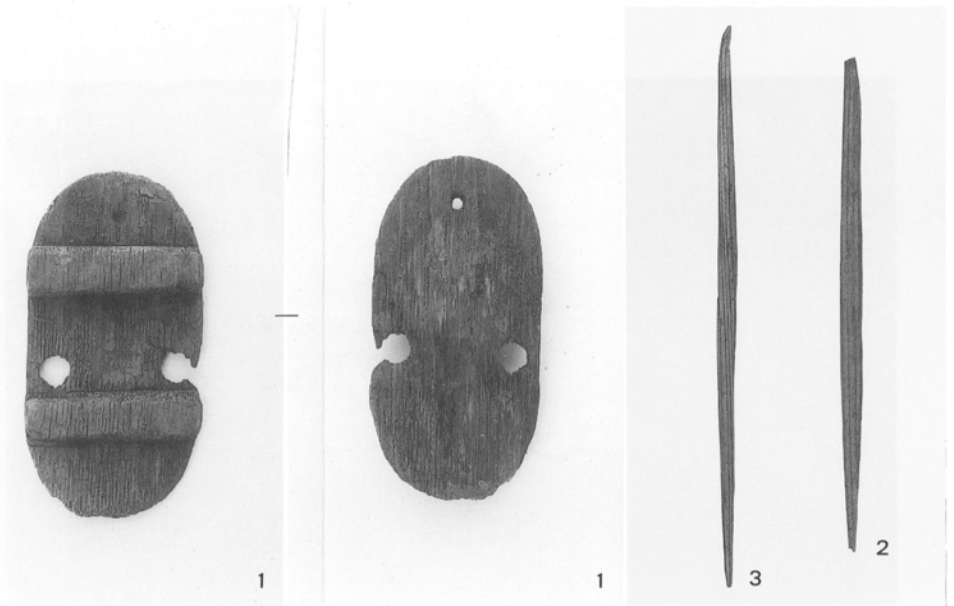
壙の様な汚水槽とは思われない。屋内施設の可能性もあるが，腐植土層の発達にみられる様に，湛水しそれに有機物が浮んでいたことは疑いないから，天水溜の様な機能を想定したい。

上述した様に，出土遺物は少ない。

1は**下駄**である。仮分類(P.239)によるB類である。長さ13.8cm，幅6.85cm，高1.95cmをはかる。前歯前方から下駄の爪先にかけて磨滅する。歯の左右端部も磨滅するが，歯は右側にむかって斜めに磨滅している。**2**・**3**は，**箸**である。**2**は長さ20.0cm，**3**は22.8cmをはかる。**2**の上端は，焦げている。



131 699号土壙出土遺物1（1／3）



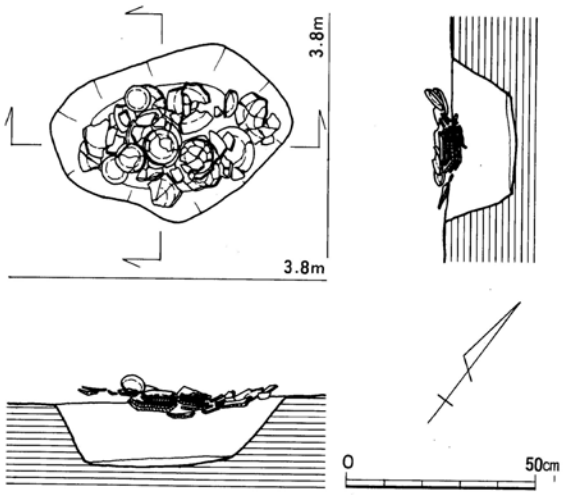
132 699号土壙出土遺物2（1／3）

② 柱穴状小土壙

1430号ピット

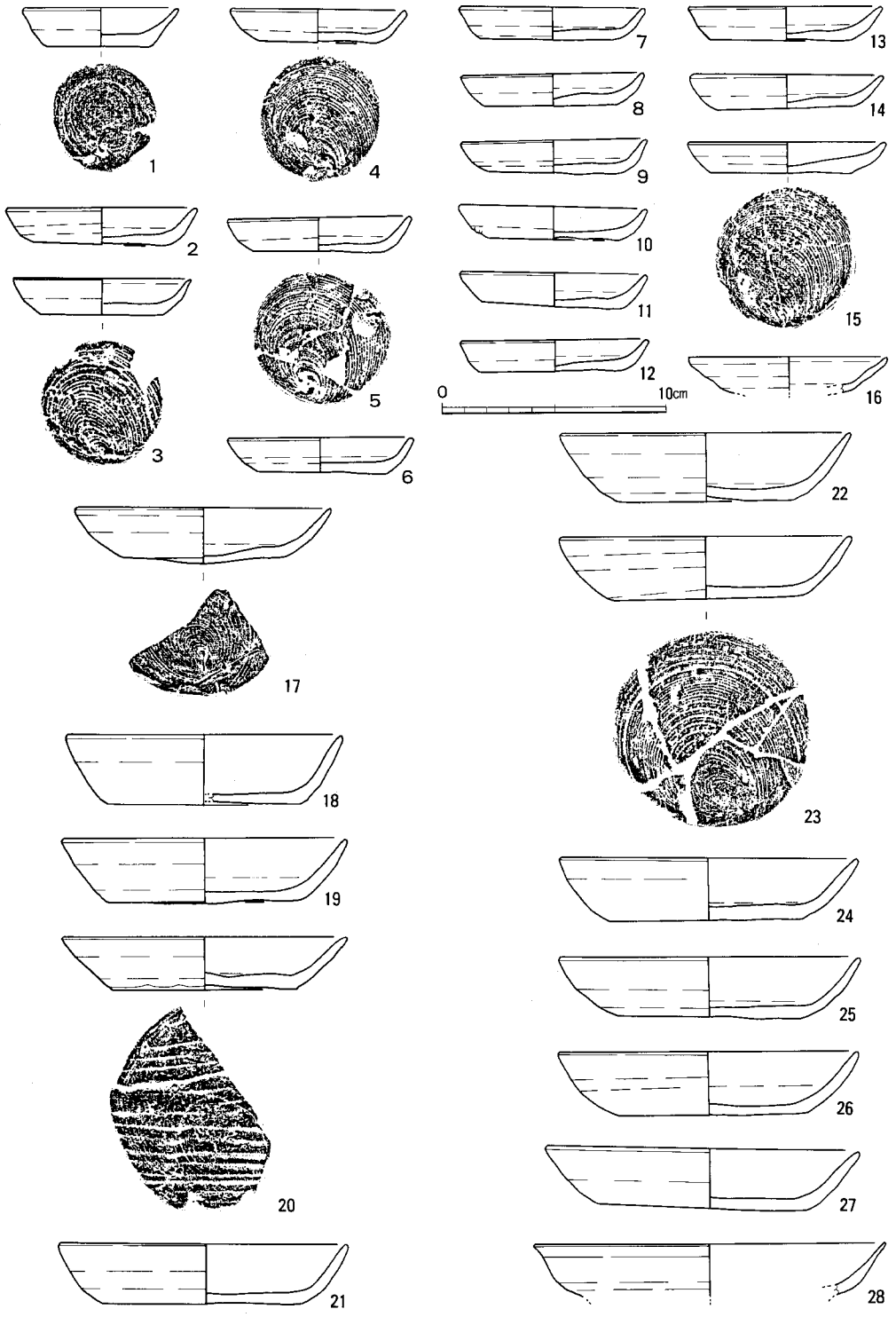
II面C－02区で検出した小土壙である。長径65cm，短径46cmの略楕円形を呈し，深さは16cmをはかる。土壙埋土上に，やや浮いた状態で土師皿・坏が出土した。

1～**27**は**土師器**である。**1**～**16**は皿で口径7.0～9.0cm，器高1.4～1.8cmをはかる。すべて回転糸切りで，**15**には板状痕と内底ナデ，**1**・**3**・**6**・**7**・**14**には内底ナデがみられる。また，**4**～**9**・**12**～**14**には外底部に指頭による凹みがみられる。**17**の口縁部には，煤がついており，灯明皿として用いられたことを示している。**17**～**27**は坏である。口径11.6～14.2cm，器高2.4～3.2cmをはかる。すべて外底部は回転糸切りを行なう。**21**には，板状痕と内底ナデがみられる。また，**24**には内底ナデがみられる。**28**は**白磁**の皿である。白色でやや粗い胎土に，光沢のある白色半透明の釉を施す。釉表には，きわめて細かい氷裂がみられる。



133 1430号ピット実測図（1／20）

134 1430号ピット遺物出土状況（南より）



135 1430号ピット出土遺物（1／3）

③ 井戸

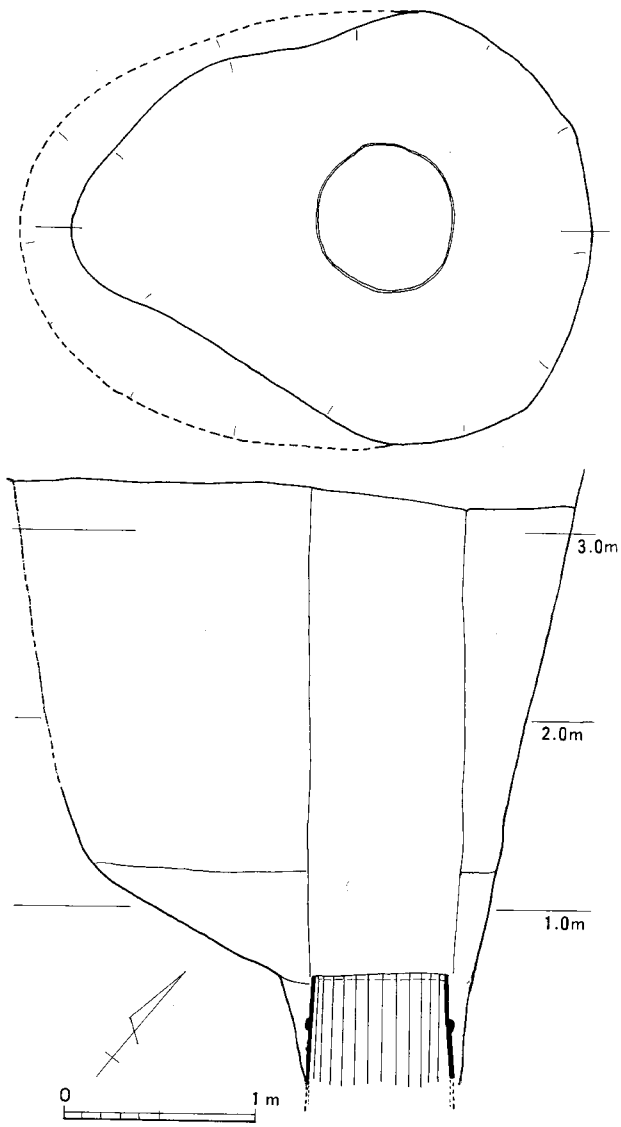
107号井戸

Ⅳ面B－02区で検出した井戸であるが，Ⅲ面で検出した792号土壙が，107号井戸の井筒部分の上部にあたる。Ⅲ面では，792号土壙周囲に，一部792号土壙にかぶって59号配石遺構が検出されており，掘りかたを確認するにいたらなかった。また，Ⅳ面以下では15号溝の調査に際して，107号井戸の壁を掘りとばした。その際，出土遺物の取り上げに混乱をきたしてしまった。また，107号井戸掘りかたの立ちあがりが不明瞭なままとなった。

Ⅳ面上で確認した107号井戸の掘りかたは，長軸280cm，短軸228cmの卵形を呈する。ただし，Ⅵ面以下の調査から，長軸方向で300cm程度までひろがると推測される。井筒は直径118cmの正円形で，Ⅶ面調査段階で，木桶が伏せてあるのを検出した。木桶内からは，銅鏡が一枚出土した。木桶の下部は，湧水による崩壊で確認できなかった。

出土遺物は，土師器・瓦器・青磁・白磁・染付・備前焼等，多岐にわたる。

1～14・63は，**土師器**である。**1～9**は皿で，法量・形態から，**1・2**，**3・5**，**4・6～9**の3グループに分類できる。**1・2**は，小振りで浅い皿形を呈する。口径6.7～7.6cm，器高1.0～1.4cmをはかる。**3・5**は，**1・2**に比べ口径は大きく，浅い皿形を呈するもので，口径8.0～8.25cm，器高1.3～1.35cmである。**4・6～9**は小形の坏形を呈する。口径8.0～9.8cm，器高1.7～1.8cmをは

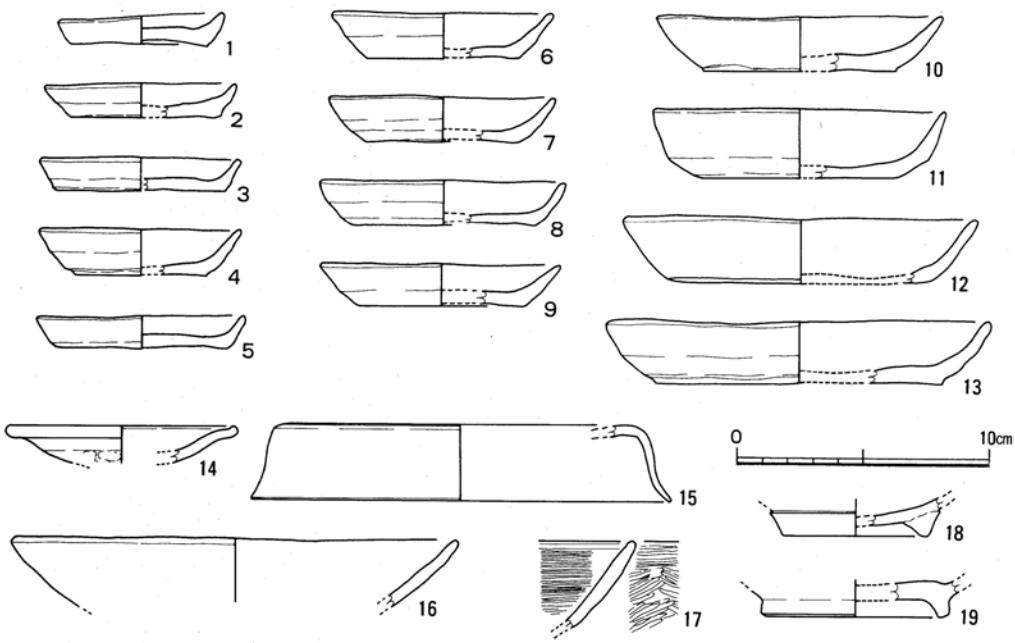


136 107号井戸実測図（1／40）

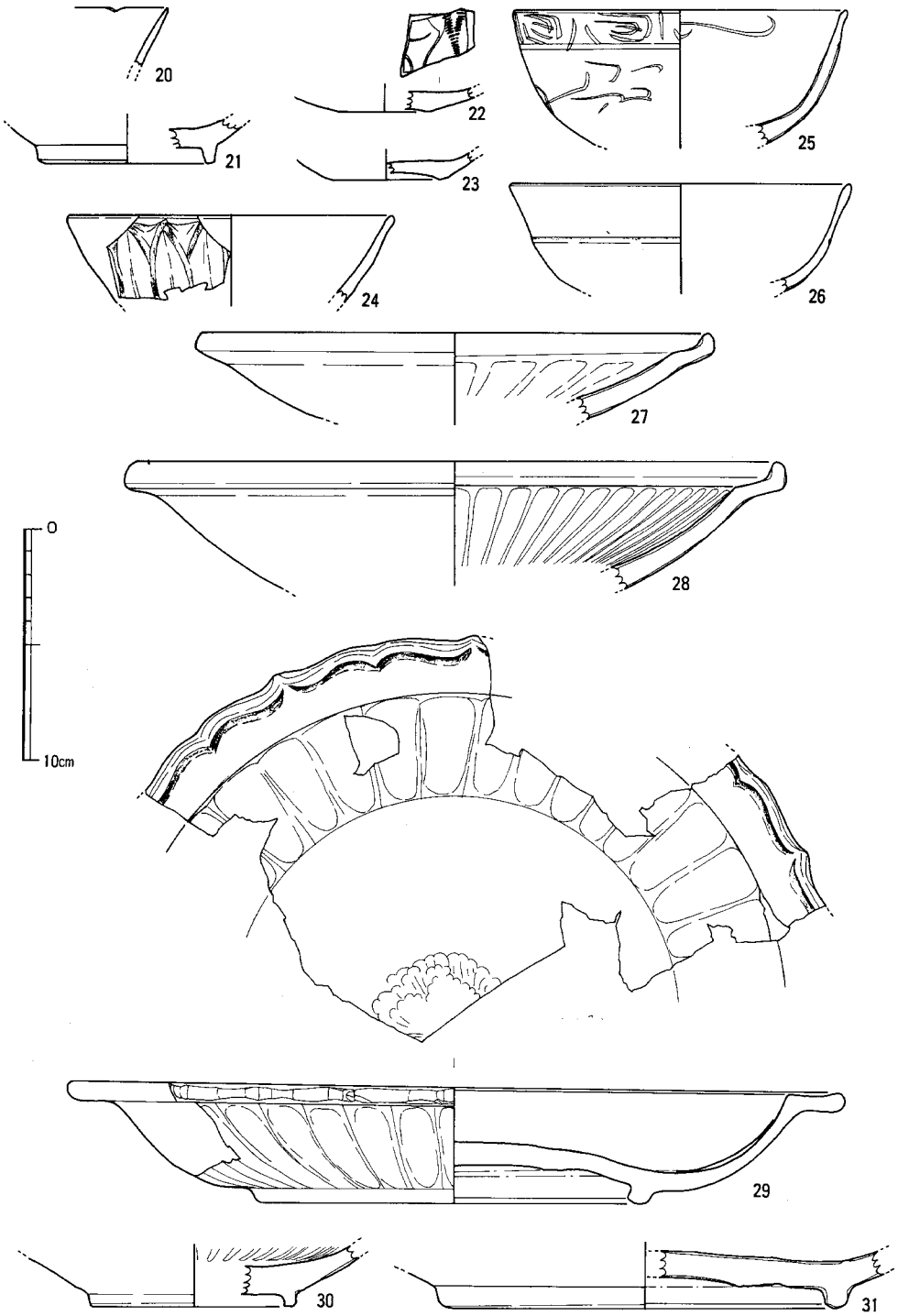
かる。**2**には，板状痕と内底ナデがみとめられる。**10**〜**13**は坏である。法量から，**10**・**11**と**12**・**13**の２種にわけられる。前者は，口径11.5〜11.7cm,器高2.15〜2.7cm，後者は口径14.2〜15.4cmをはかる。**14**は，「て」の字状口縁皿である。体部外面中位から内面はヨコナデ調整，外底部には指頭痕ならびに掌紋がのこる。口径9.2cm。**15**は**須恵器**である。小片であり，器形は知りがたい。高台坏である可能性が高い。**63**は土鍋である。

137　107号井戸（Ⅶ面）(西南より)

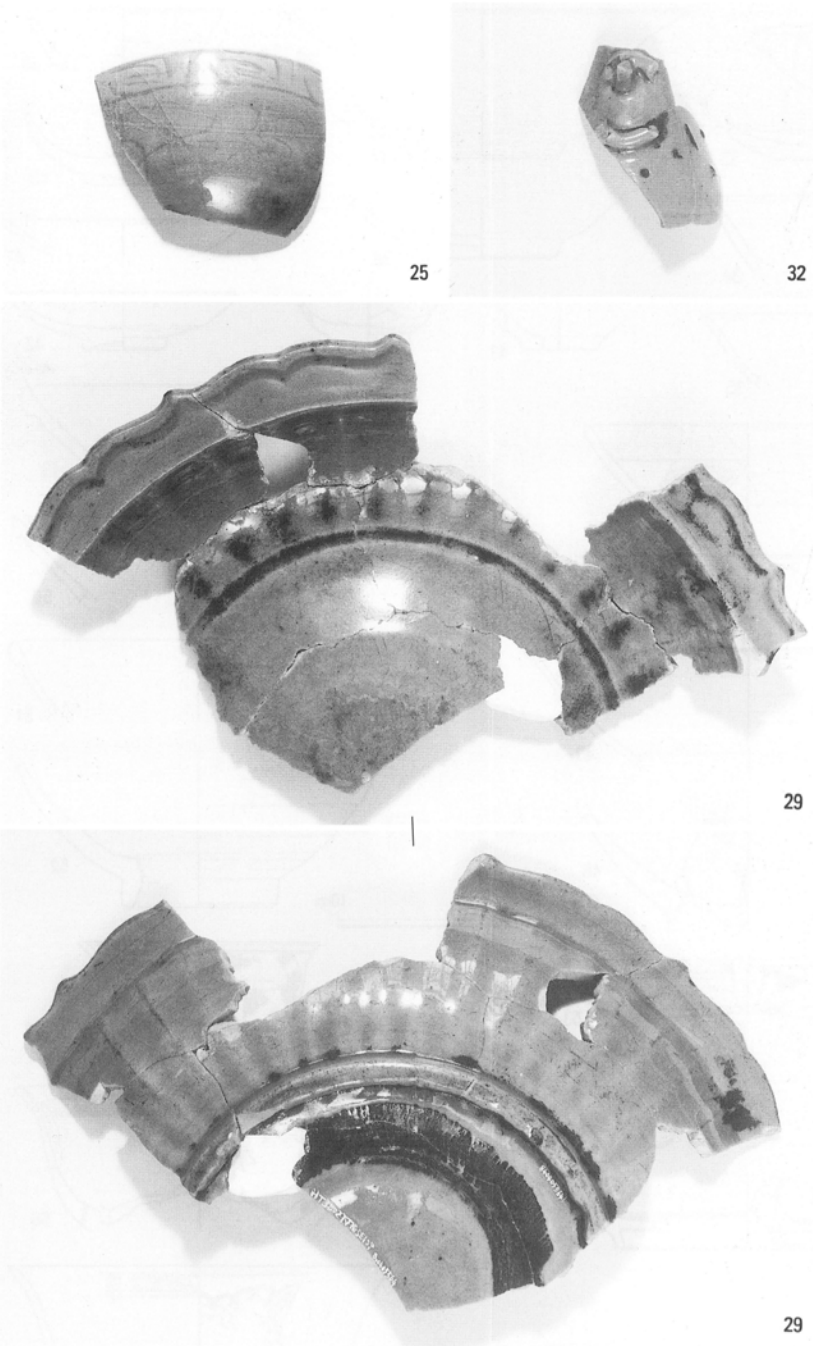
16〜**19**は**瓦器**の椀である。**16**・**18**・**19**は在地の製品である。**17**は，楠葉型の瓦器椀で，口縁直下に沈線をめぐらす。内面及び口縁部外面は横位のヘラミガキ，体部外面は，分割ヘラミガキを密に施す。



138　107号井戸出土遺物１（１／３）

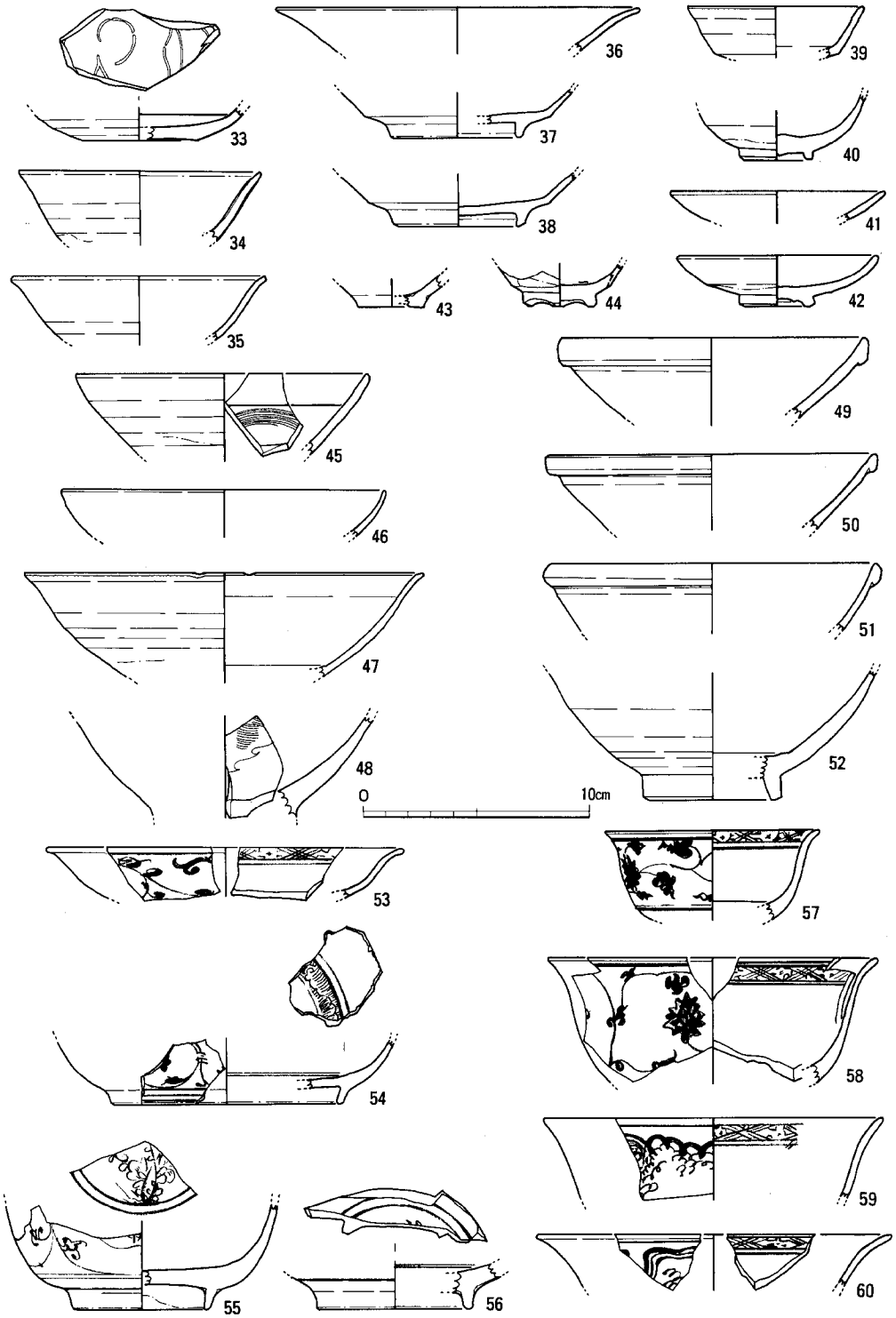


139 107号井戸出土遺物２（１／３）



140　107号井戸出土遺物３（約１／３）

20～**32**は，**青磁**である。**20**・**21**は**越州窯系青磁**の碗である。**20**は口縁を輪花につくる。**21**は全面に施釉する。見込みと高台畳付に重ね焼きの目痕が残る。**22**・**23**は皿である。**24**～**26**は碗である。**24**は，体部外面に鎬蓮弁文を施す。**25**は口縁直下に雷文帯を持つ。**26**は無文で，体部中位に沈線を１条めぐらす。２次的に火を受け，釉表面はあれる。**27**～**31**は盤である。**27**・**29**・**31**は，２次的に火を受け，釉があれたり，煤が着いている。**32**は，双耳花生の頸部片である。耳には，円環が貼付されている。やはり２次的に火を受けており，釉表があれ煤が付着している。

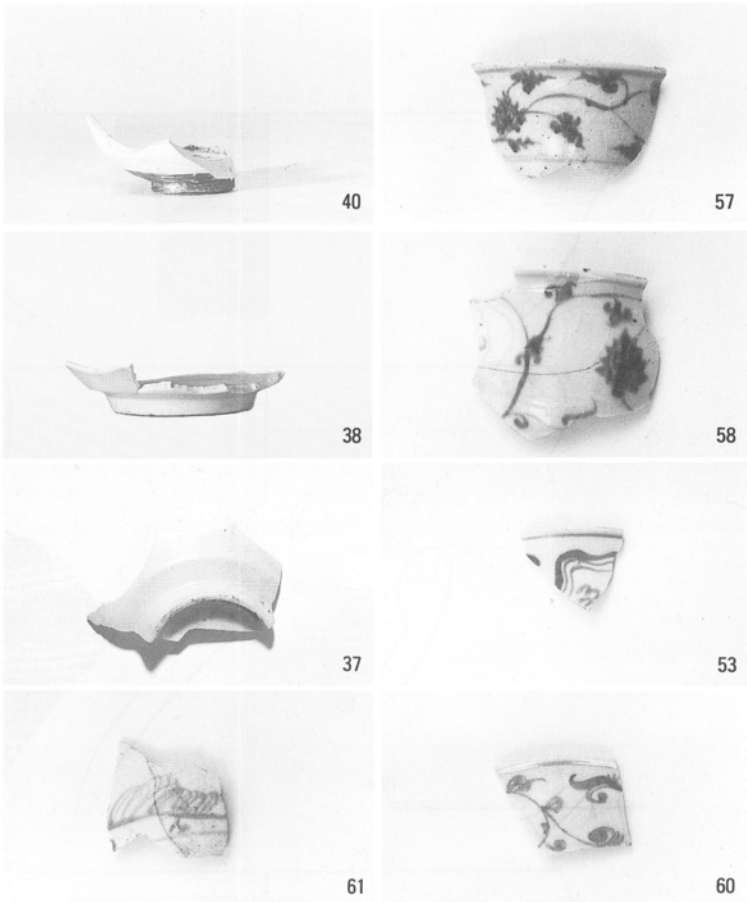


141 107号井戸出土遺物４（１／３）

33〜**42**・**44**〜**52**は，**白磁**である。**33**〜**42**・**44**は皿で，**34**・**35**は口ハゲとなる。**35**の口縁の露胎部分には，煤が付着している。**36**〜**38**は，腰折皿である。高台畳付のみ釉をふきとって露胎とする。**44**は八稜盃である。見込みと畳付に，重ね焼きの目痕が残る。**45**〜**52**は碗である。

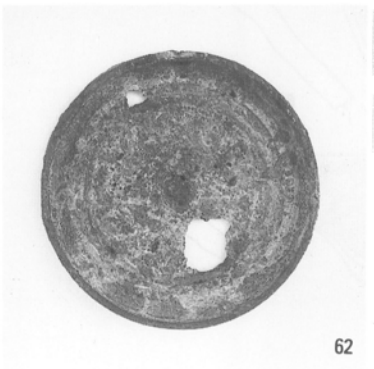
43は**青白磁**の小碗である。

53〜**61**は，**明代の染付**である。**53**・**54**は皿 **55**・**56**・**58**〜**60**は碗，**57**は小碗である。



142　107号井戸出土遺物５（約１／３）

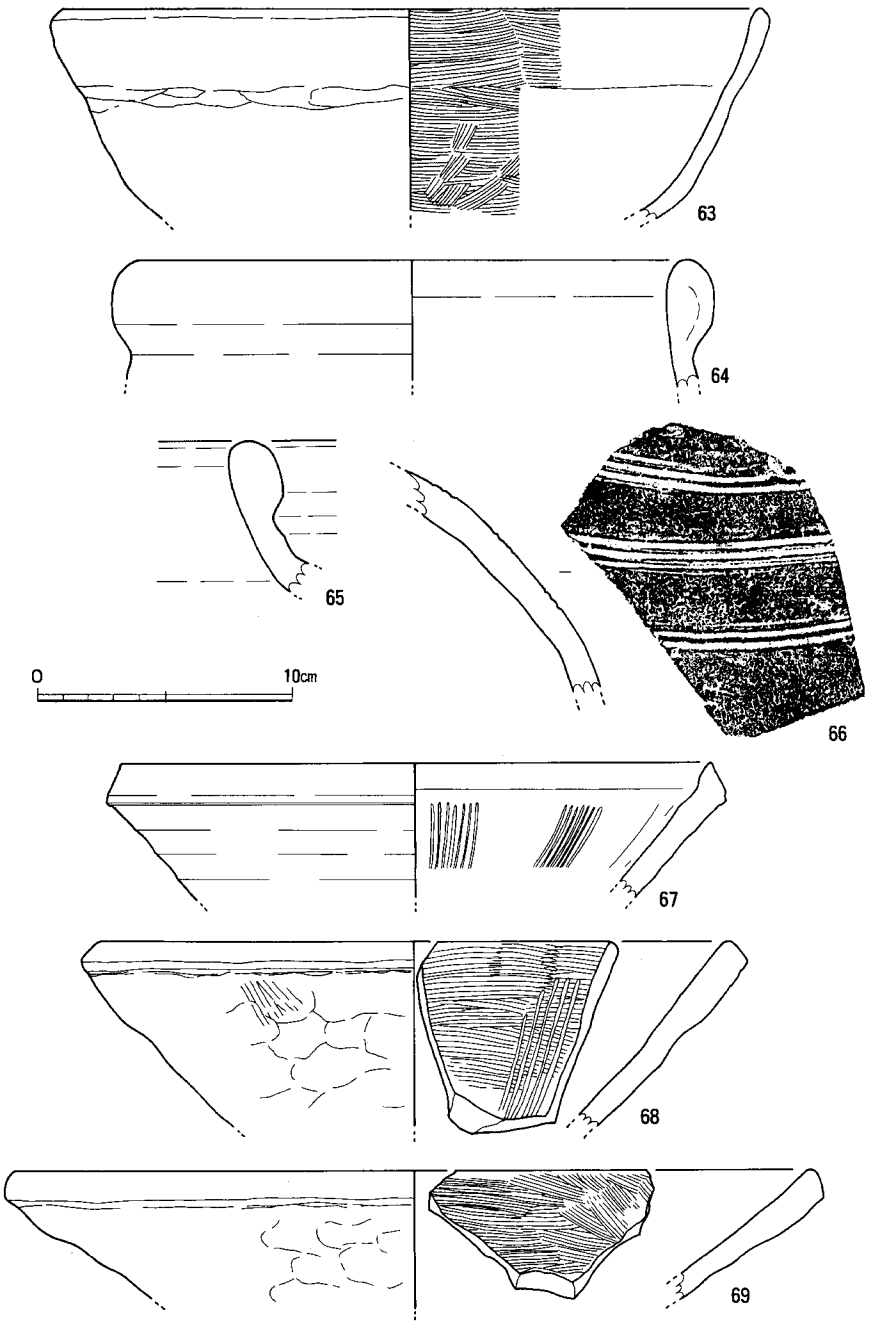
64〜**67**は，**備前焼**である。**64**〜**66**は甕である。**64**・**65**は，口縁を玉縁につくる。玉縁は下方にのびてやや丸味を失なっており，備前焼Ⅳ期の特徴を示す。**67**はすり鉢である。口縁は，上下に張り気味である。備前焼Ⅳ期に編年される資料である。



143　107号井戸出土遺物６

68・**69**は**瓦質土器**の鉢である。内面はヨコハケ調整，外面は指頭痕を残す。**68**には５本を単位としたスリ目が刻まれている。**69**には，小片のためかスリ目は残っていない。いずれも，口縁は肥厚する。

62は，**銅鏡**である。井戸最下部の木桶内より出土した。銹化が著しく，文様ははっきりしない。鈕は亀鈕で，内区には菊花文を散らす。圏線は内側のものは６輪花となる。圏線にそった内側には，珠文が連続してならぶ。



144 107号井戸出土遺物７（１／３）

④　溝状遺構

10号溝（ＳＸ16）

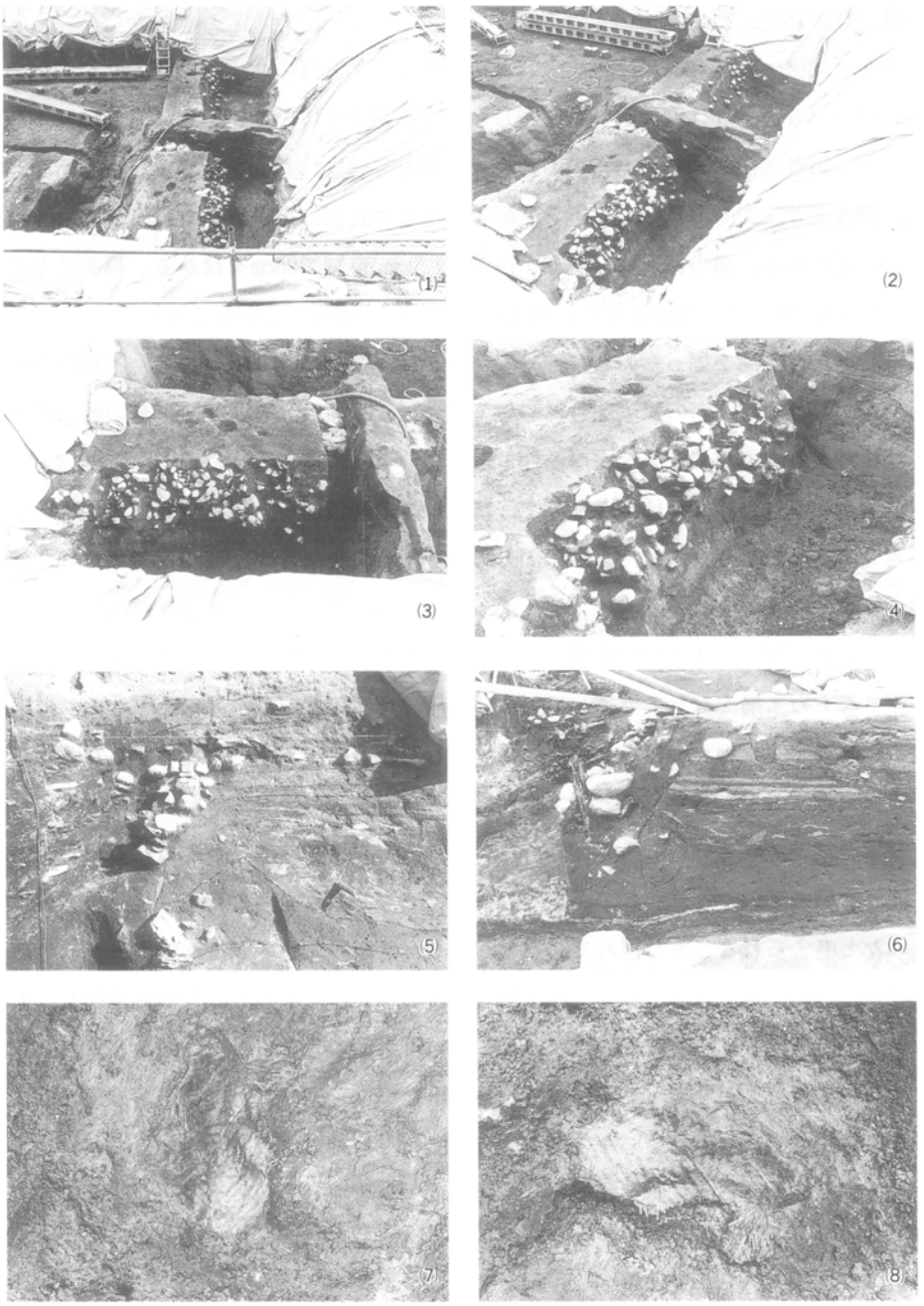
Ⅳ面Ａ－03区・04区において検出された溝である。調査区の北辺を南西―北東方向に通る溝で，北側の立ちあがりは調査区外に出てしまい，確認できていない。主軸方向はＮ－42°30′－Ｅを示す。調査区内で調査しえた溝の延長は，960cm，幅は340cmをはかる。土層断面から見る限り，調査区北端でも溝底は立ち上る気配をみせない。この点からすれば，溝幅は４ｍをこえるものと思われる。溝の深さは，調査区西端で120cm，東端で96cmをはかる。標高になおせば，西端で1.3m，東端で1.56mとなり，溝底は東から西に傾斜していたことになる。

溝は，素掘りの溝を掘ったのち，部分的に礫を貼って護岸とするもので，不規則ながら杭も打たれていた。礫は，溝の東半部分において顕著にみとめられる。東半部分の礫は，特に溝の上半部に積まれたもので，東端土層断面付近においては，高さ72cmにわたって積み上げられている。積石が溝底に及ばない点からみて，積石は溝の埋積が一定程度進んだ段階でなされたものと考えることができる。また，西半部分の礫は積石状をなさず，埋積過程において落ちこんだ礫とするのが妥当であろう。

埋土は，最下層にうすく砂が堆積するものの，大部分は泥炭化しきっていない泥土が，かなりの厚さをもって層をなして堆積している。土層の堆積の状況は，ほぼ水平かこれに近く，小単位でのブロック状の土層はみとめられない。したがって，人為的に埋め立てたとは考えがたく，自然に埋まっていったものと考えたい。また，堆積土に砂層がほとんどみとめられない点からみて，常時流れていたとは考えられない。最下層にうすく砂層がみられるので，当初は若干の流れを持っていたと思われるが，その後はほとんど流れず，常時湛水したまま澱み状になっていたと考えられる。もし流れていたとしても，きわめてゆるい流れであったろう。また，泥土層は，西側で薄く東側で厚い。泥土層中に含まれていた木器等の有機質遺物も，大半は溝の東半分から出土している。この点から，澱みは東半部で発達していたものと思われる。換言すれば，東側にゴミがたまって，西側ではわずかながらも流れている状態が推定でき，10号溝は調査区東側のあまり離れていない地点で終っていたと考えることもできよう。

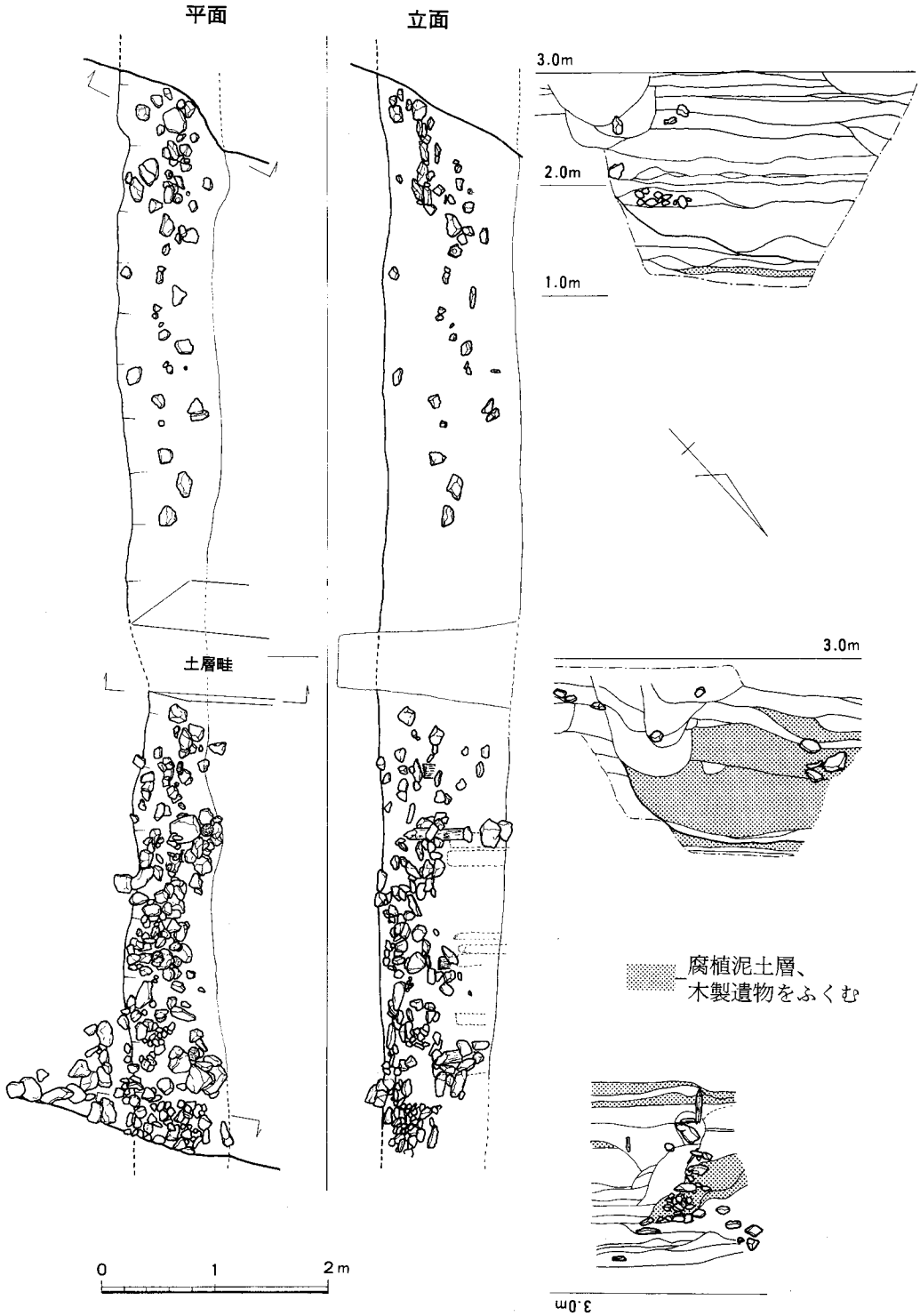
出土遺物は，土師器・瓦器・瓦質土器・瀬戸焼・備前焼・東播系須恵質土器・青磁・白磁・染付・天目・陶器・象嵌青磁・漆器・木製品・骨製品・土製品・石製品・銅製品・銅銭等，多岐にわたる。

１～89・106～108は，**土師器**である。**１～３**は，「て」の字状口縁の皿である。**４～７**は大内系土師皿である。体部は直線的に大きくひらいた後，内湾しておさめる。器壁はうすく，ヨコナデ調整の痕跡をつよくとどめる。**８**は小鉢状を呈するもので，亜白色系の色調を示し，胎土も精良で，在地のものではないと思われる。**９**は高台付皿である。**10～65**は，皿である。法量

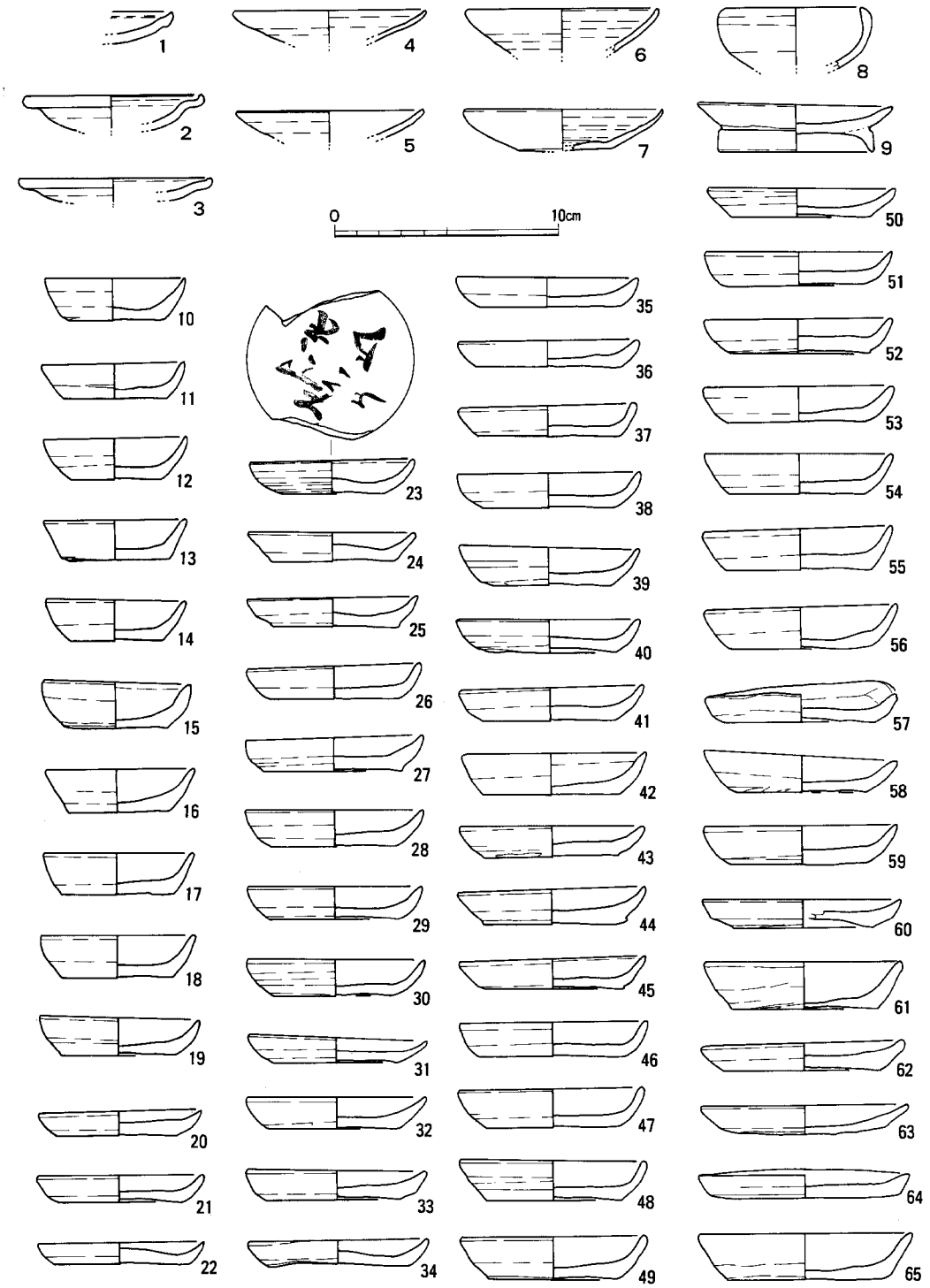


145 10号溝

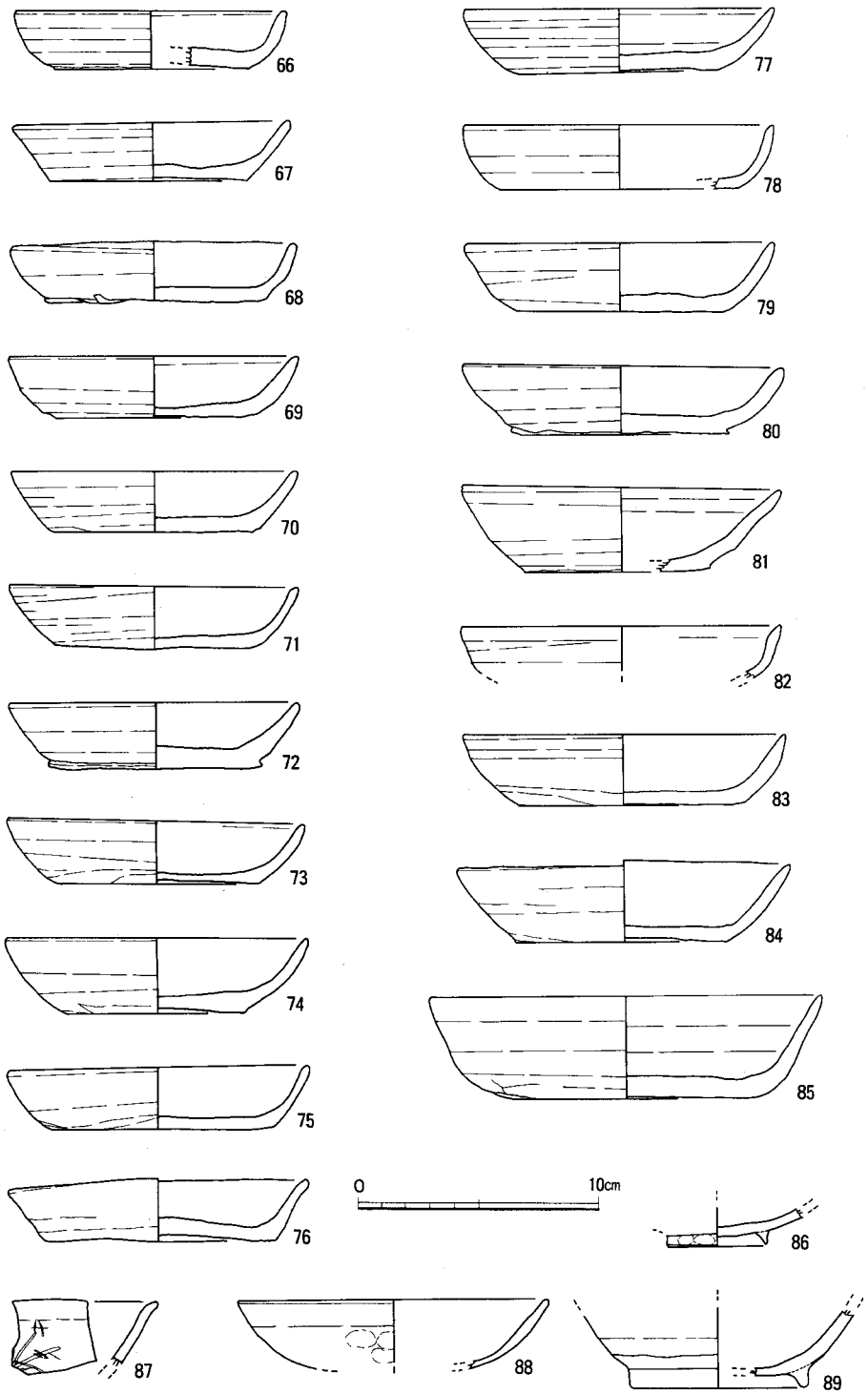
(1) 全景（北東より） (2) 同左（北より） (3) 東半部積石状況（北西より） (4) 同左（北より） (5) 東端土層断面（西より） (6) 中央トレンチ土層断面（西より） (7) 編物出土状況（東より） (8) 同左（北より）



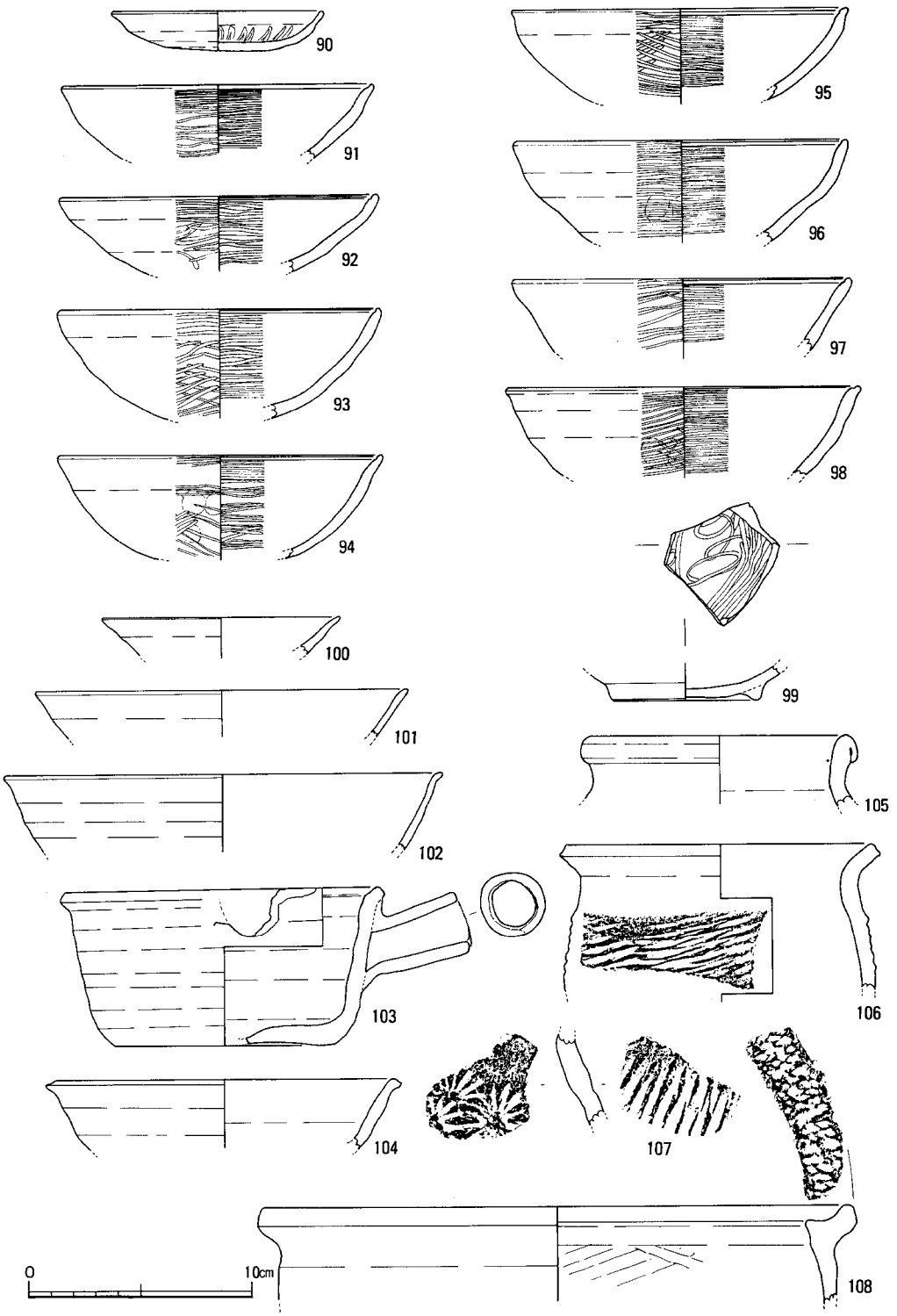
146 10号溝実測図（1／60）



147 10号溝出土遺物１（１／３）



148 10号溝出土遺物２（１／３）



149 10号溝出土遺物３（１／３）

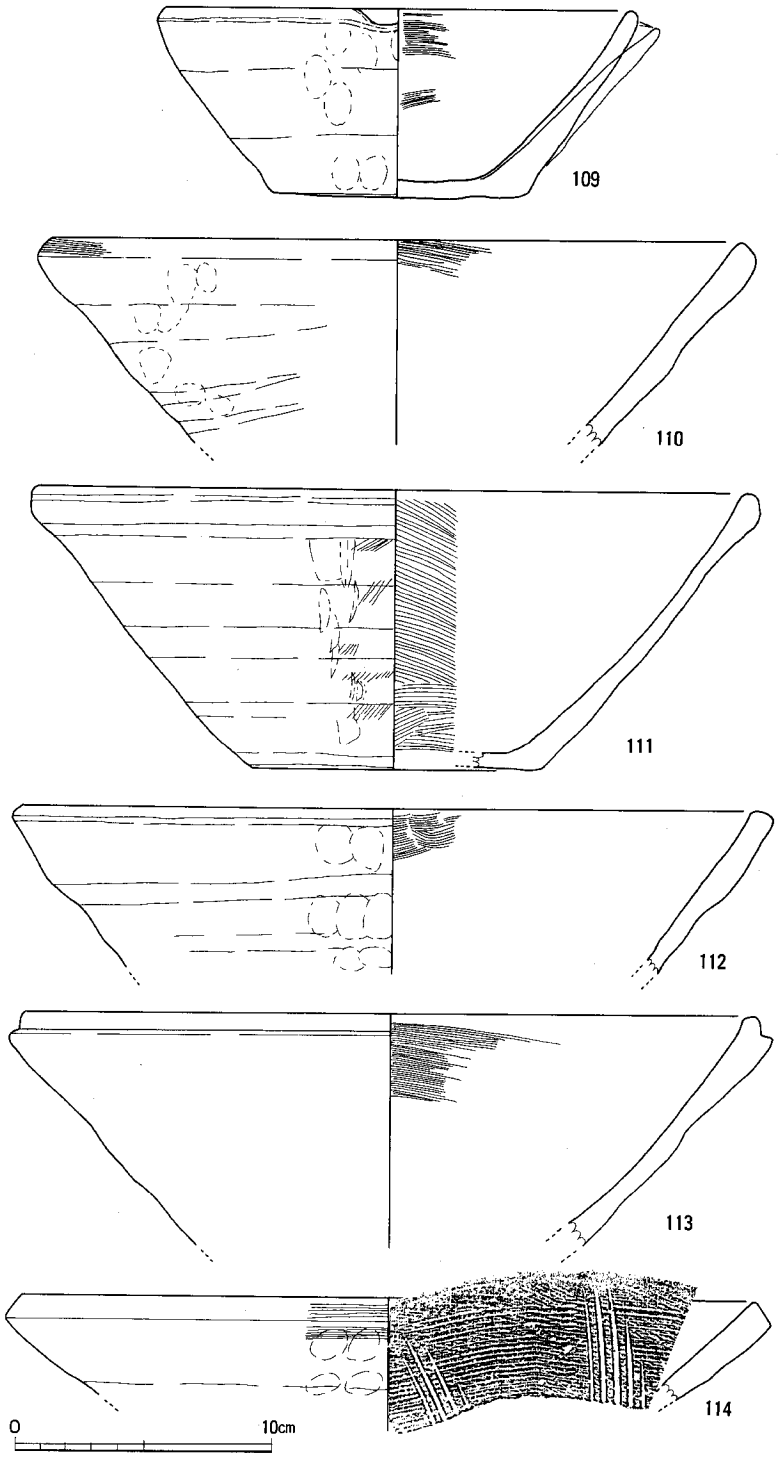
と形態から，３グループにわかれる。**10**～**19**は小皿で，器高が高い。口径6.3～7.2cm，器高1.65～2.15cmをはかる。**20**～**41**・**43**～**45**・**50**～**53**・**57**・**60**・**62**～**64**は，浅い皿形で，口径7.4～9.5cm，器高1.0～1.65cmをはかる。**42**・**46**～**49**・**54**～**56**・**58**・**59**・**61**・**65**は小形の坏形を呈す。口径8.3～9.5cm，器高1.6～2.1cmである。なお，**23**の内底部には習字と思われる墨書がみられる。**66**～**85**は坏である。**66**～**84**は口径11.4～14.0cm，器高2.4～3.3cm，**85**は口径16.5cm，器高4.3cmとひときわ大きい。**86**・**88**は早島式土器の椀である。**87**は，研磨土器の椀である。**89**は，９世紀に編年される碗で，底部はヘラ切りしている。**106**・**107**は玄海灘式製塩土器である。**108**は土鍋である。口唇部に縄目圧痕がならぶ。外面には，煤が厚く付着している。

150　10号溝出土遺物４（約１／３）

90～**99**は**瓦器**である。**90**は在地産の皿である。外底部はヘラ切り，体部はヨコナデ調整を行ない，内底部にはジグザグ状の暗文を施す。**91**～**99**は，楠葉型瓦器椀である。11世紀末に編年されるものである。内面は密に横位のヘラミガキを行なう。外面には分割ヘラミガキが，やや間をあけて施される。内面の口縁部直下には，沈線が一条めぐる。**99**の内底部には，ラセン状の暗文がみとめられる。体部の横位のヘラミガキは，ラセン状の暗文の上から施されている。

100～**102**は，**灰釉陶器**である。**100**は皿で，淡灰色のやや生目のあらい胎土に，淡緑灰色の釉が飛沫状にかかっている。**101**・**102**は碗である。**101**は灰白色の緻密な胎土に，淡灰色の釉がうすく施される。**102**は，灰色でやや生目のあらい胎土に，緑灰色の半透明な釉をうすくかける。釉表面は発泡し，光沢にかける。Ｃ－01区Ｖ面出土の破片と接合することができる。図示したものは，10号溝出土の小片からの作図なので，口径が大きく復原されている。Ｃ－01区Ｖ面出土片によれば，口径は16.4cmである（Fig.320

151　10号溝出土遺物５（約１／３）



152 10号溝出土遺物６（１／３）

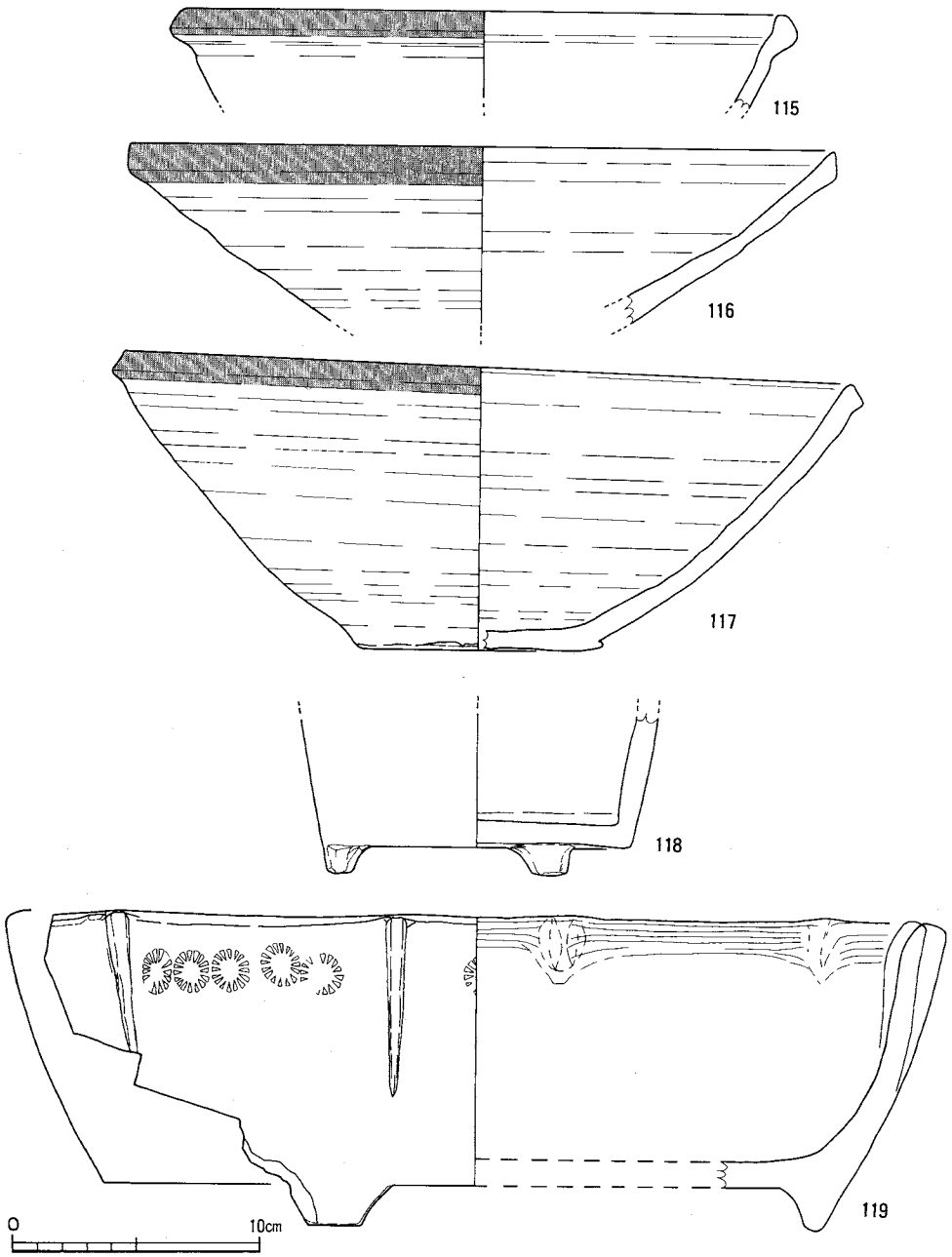
－62)。

103・104は**瀬戸焼**である。**103**は柄付片口で，片口部分を折損している。体部外面の釉は剝落して点々と残るのみであるが，本来は外底部を残して全面に施釉されていたと思われる。釉は灰緑色の灰釉で，細かい氷裂がみられる。**104**は卸皿である。他に卸目部分の小片も出土している。

105は，**備前焼**の壺口縁である。端部を丸く折り返して，玉縁につくる。備前焼Ⅳ期に編年される。

109～111・113・114・118・119・120は，**瓦質土器**である。**109～111・113・114**は鉢である。**109**は，

口縁の一部を小さく外方につまんで片口につくる。他のものも口縁部の4分の1程度の破片しか残っていないので，片口につくっていた可能性は高い。**114**の内面には，五本を単位とするすり目が刻まれている。**113**は，口縁部を2段につくる。**118**～**120**は三足の火舎である。**118**は，底径12.6cmと小形で，手焙りか香炉になるものと思われる。**119**は，体部を八輪花につくる。輪花

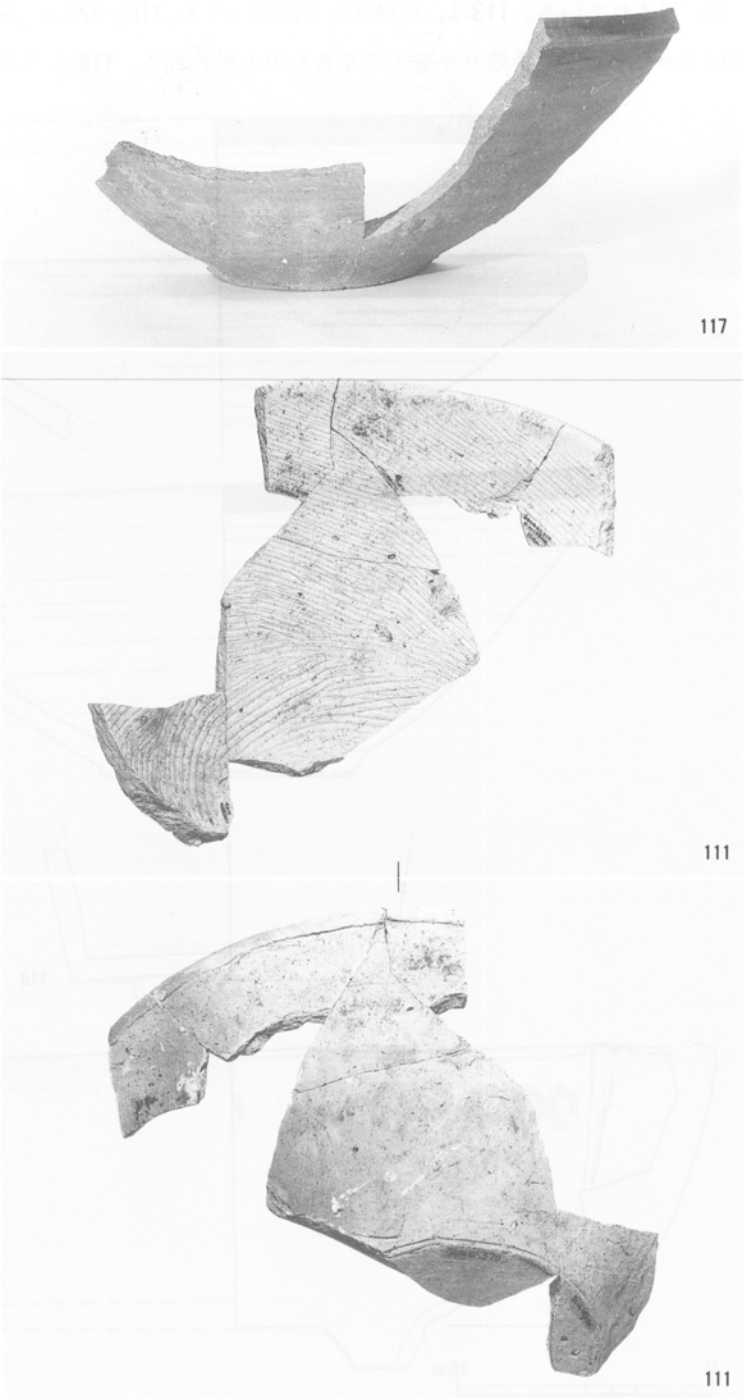


153 10号溝出土遺物7（1／3）

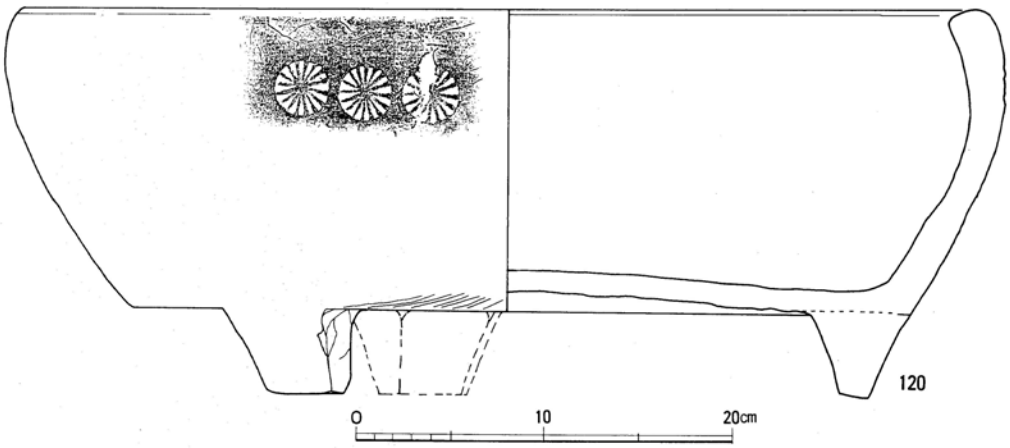
の１区画ごとに５個の菊文をスタンプする。**120**は，口径52.3cm，器高20.0cmをはかる大形品である。体部外面の口縁部下には，３個を１組とした菊花文のスタンプが，全周で９ヶ所にうたれている。

112は**土師質土器**の鉢である。内面は器表の剝落が著しい。

115～**117**は，**東播系須恵質土器**の鉢である。**115**は，口縁部を肥厚させつつ，受け口状に屈曲させる。胎土は砂質で，生目があらい。**116**は，大きく直線的に開いた体部から，口唇を斜めにおとして口縁をつくる。胎土は生目のこまかい砂質。**117**は，やや内湾気味に大きく開いた体部を持ち，口縁は下方に若干垂れる。底部は，回転糸切り痕を明瞭にとどめている。内外面ともにヨコナデする。内底から体部下位にかけては，使用のため磨滅している。胎



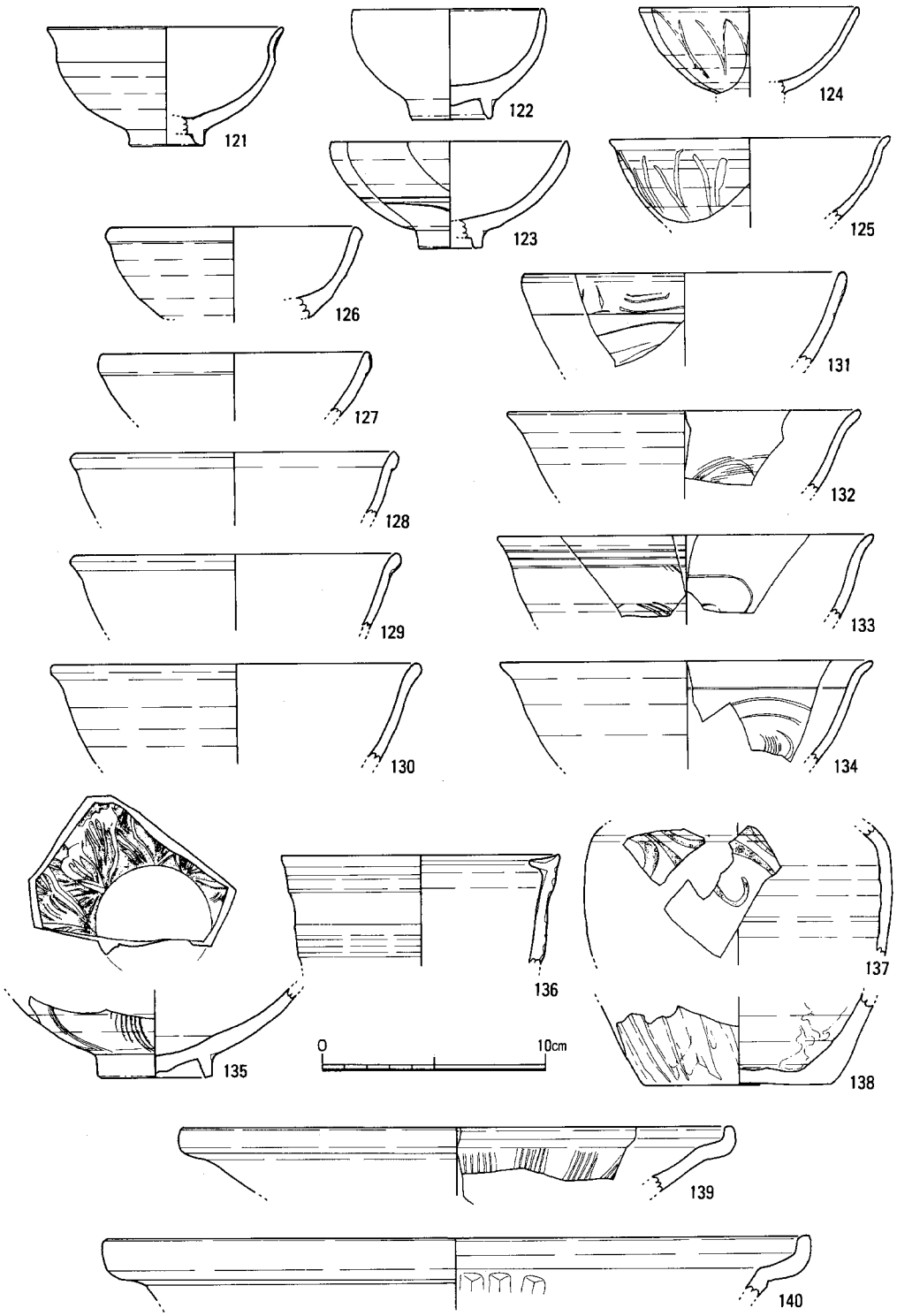
154　10号溝出土遺物８（約１／３）



155　10号溝出土遺物９（１／４）

土には，径３㎜以下の砂礫を多く含むものの，総じて生目は細かく，小豆色がかった暗灰色を呈する。

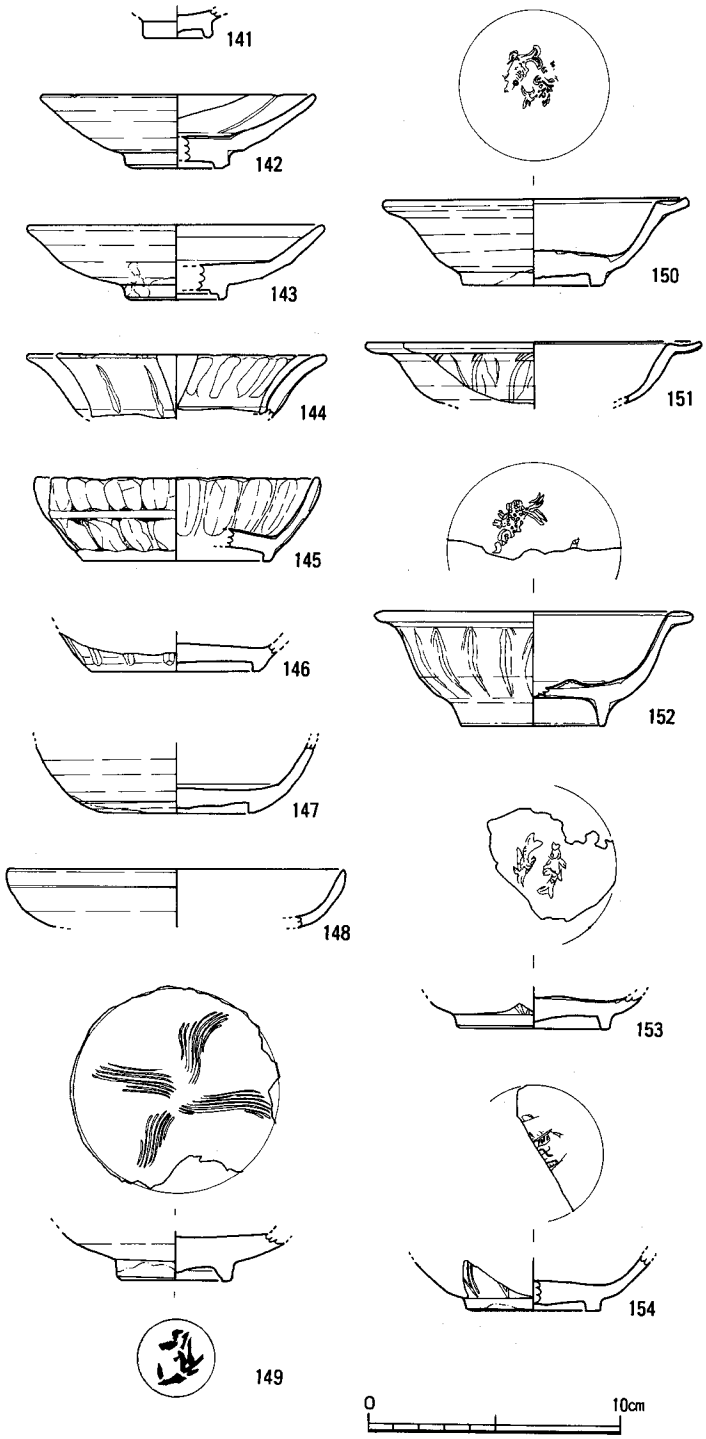
121～**155**は**青磁**である。**121**～**135**は碗である。**121**は，強い丸味をもって内湾する体部から，鋭く稜をなして外反して口縁をつくる。高台畳付は，露胎となる。**122**は丸い体部を持つ小碗で，口縁部は口ハゲとなる。高台畳付も露胎となる。酸化焼成で，釉は茶灰色を呈する。**123**は，高台畳付から外底部を露胎とする。体部外面の下半に，うすく刻線文がみられる。**124**・**125**は，体部外面に蓮弁文をあしらう。**126**～**130**は，口縁端部を小さく外反させ丸くおさめるものである。**126**～**129**の口縁は，玉縁状を呈する。**126**・**127**は，皿の可能性も少なくない。**131**は，口縁下に雷文帯を配する。**135**は印花文の碗で，体部内面に印花，外面に櫛描文をあしらう。高台畳



156 10号溝出土遺物10（1／3）

付と外底部の中央部分は露胎となる。暗灰色の胎土に，オリーブ色半透明の釉がかけられる。**136**は香炉である。**137**は壺の体部で，釉下に鉄絵が描かれている。**138**は越州窯系青磁の壺である。同一個体と思われる体部の小片も出土している。**139・140**は盤である。**142**～**149**は皿である。**142**は，口唇部の抉り込みと釉下の白堆線で五輪花につくる。畳付以内は露胎である。**145・146**は蕉段皿である。外底部の釉を輪状にかきとる。**147**は碁笥底の皿である。外底部は露胎となる。**149**の外底部には墨書がみとめられる。判読できず，花押と思われる。**150**～**154**は高台のついた小鉢である。**152・153**の見込には，双魚文貼花が，**150・154**には印花文がみられる。**155**は双耳の香炉である。畳付は露胎となる。耳は欠落している。

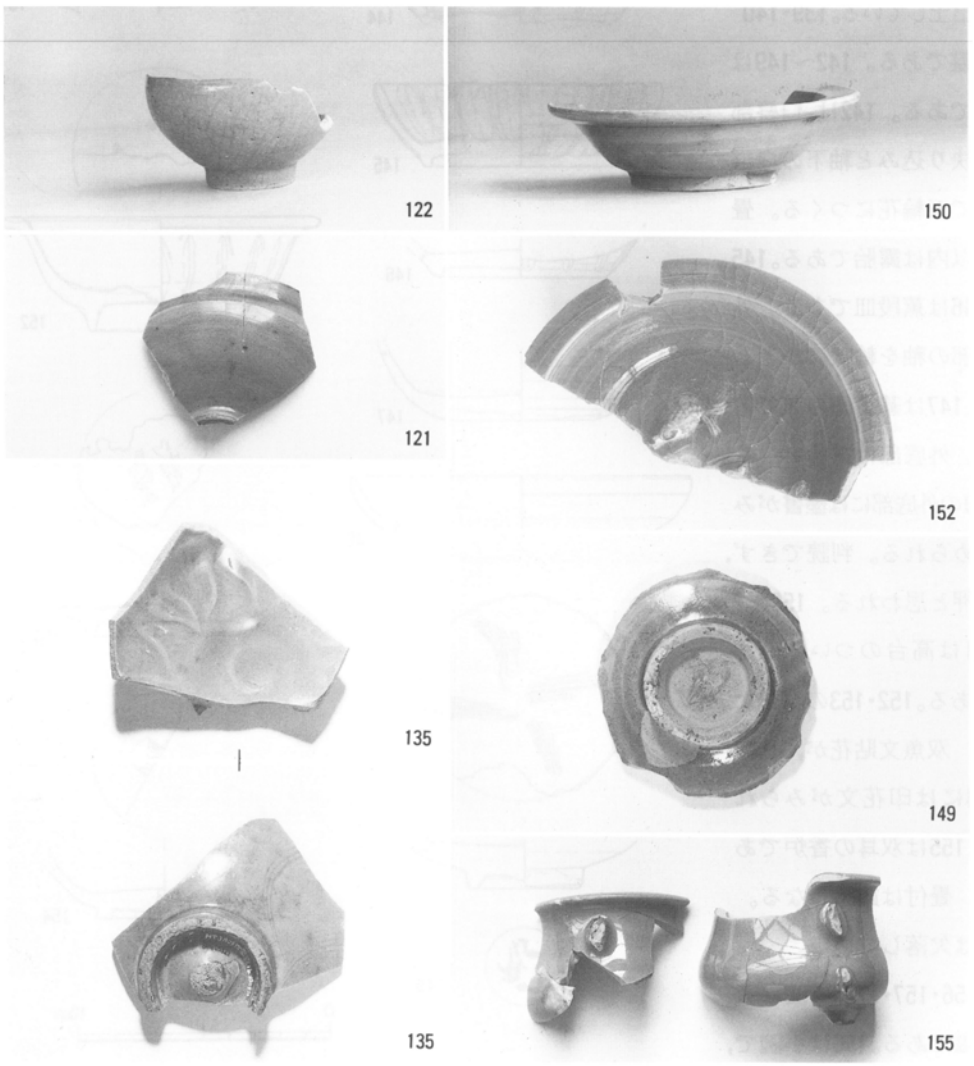
156・157・178～**182**は**青白磁**である。**156**は小碗で，見込に花文を浅くスタン



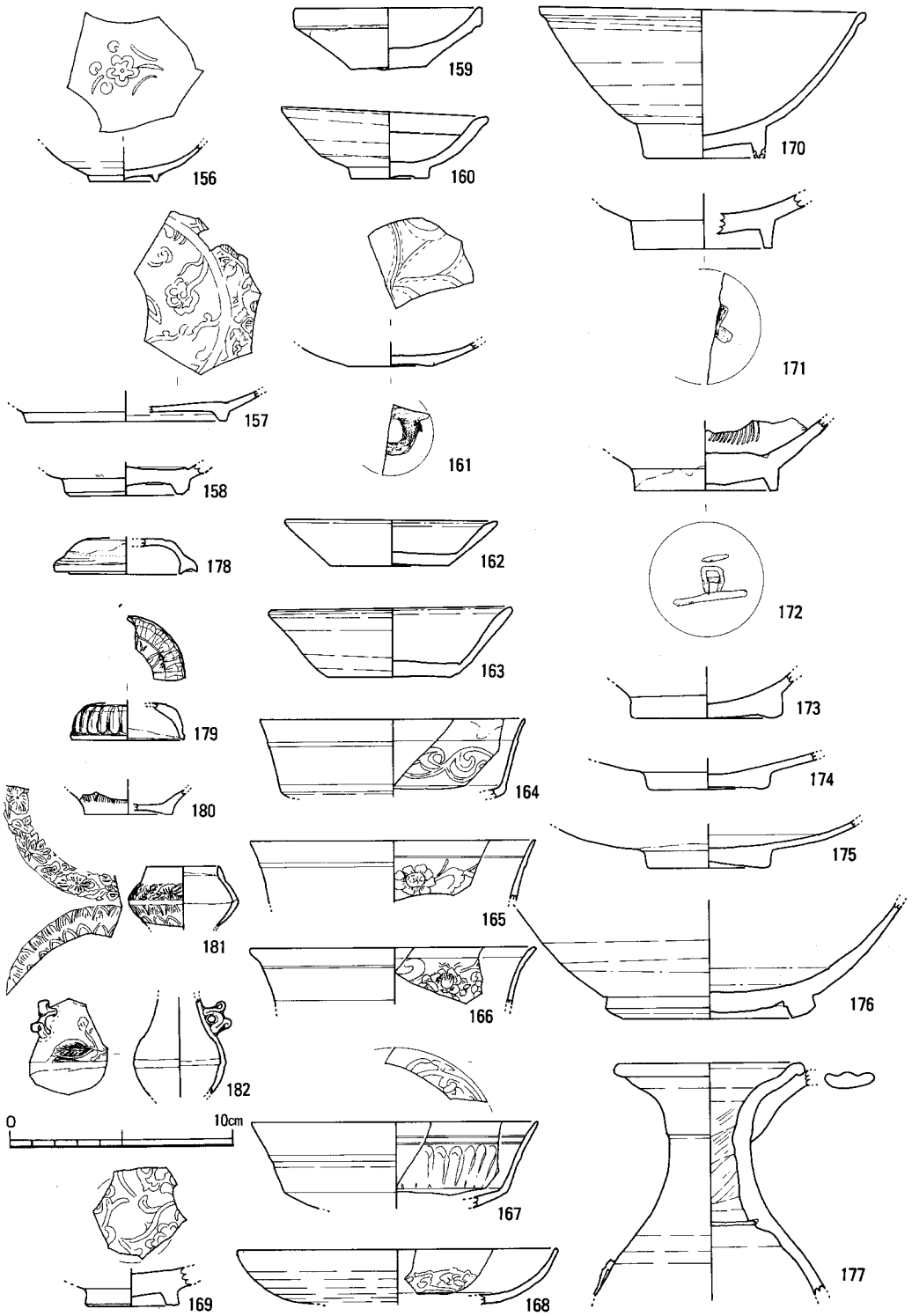
157　10号溝出土遺物11（1／3）

プする。**157**は皿である。内面に印花文がみられるが，不鮮明である。**178**・**179**は合子蓋である。**178**は粗製品である。**180**は小壺の底部である。外底部は露胎。**181**は小壺である。上部と下部にわけた型づくりである。口縁部は釉をかき取って露胎とする。**182**は小瓶である。型づくりで，上下を貼りあわせている。双耳になるものと思われる。

159～**177**・**183**は，**白磁**である。**159**～**169**は皿である。**161**の外底部には墨書がみえる。**164**～**169**・**183**は卵白釉をかけた，いわゆる枢府磁である。**164**～**167**は腰折皿で，体部外面に細隆線，内面には印花文が施される。**170**～**173**は碗である。**171**～**173**の外底部には，墨書がみられる。**173**の墨書は，墨痕とみられるのみで，形すらとらえがたい。**174**・**175**は大皿である。型造りであろう。**176**は大碗である。見込みは，不整輪状に釉をかきとる。高台脇のケズリは荒く，ヘラ

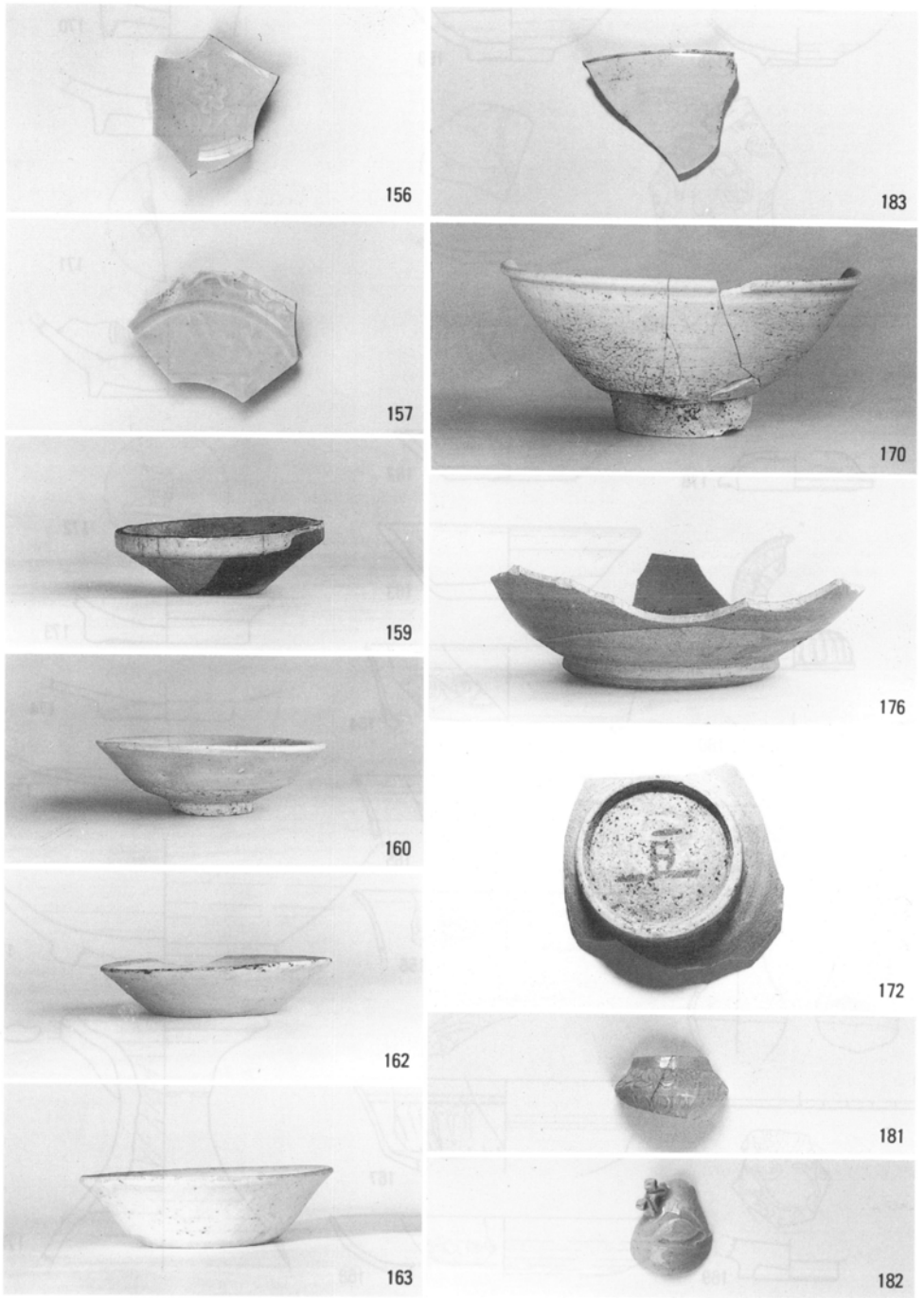


158　10号溝出土遺物12（約１／３）

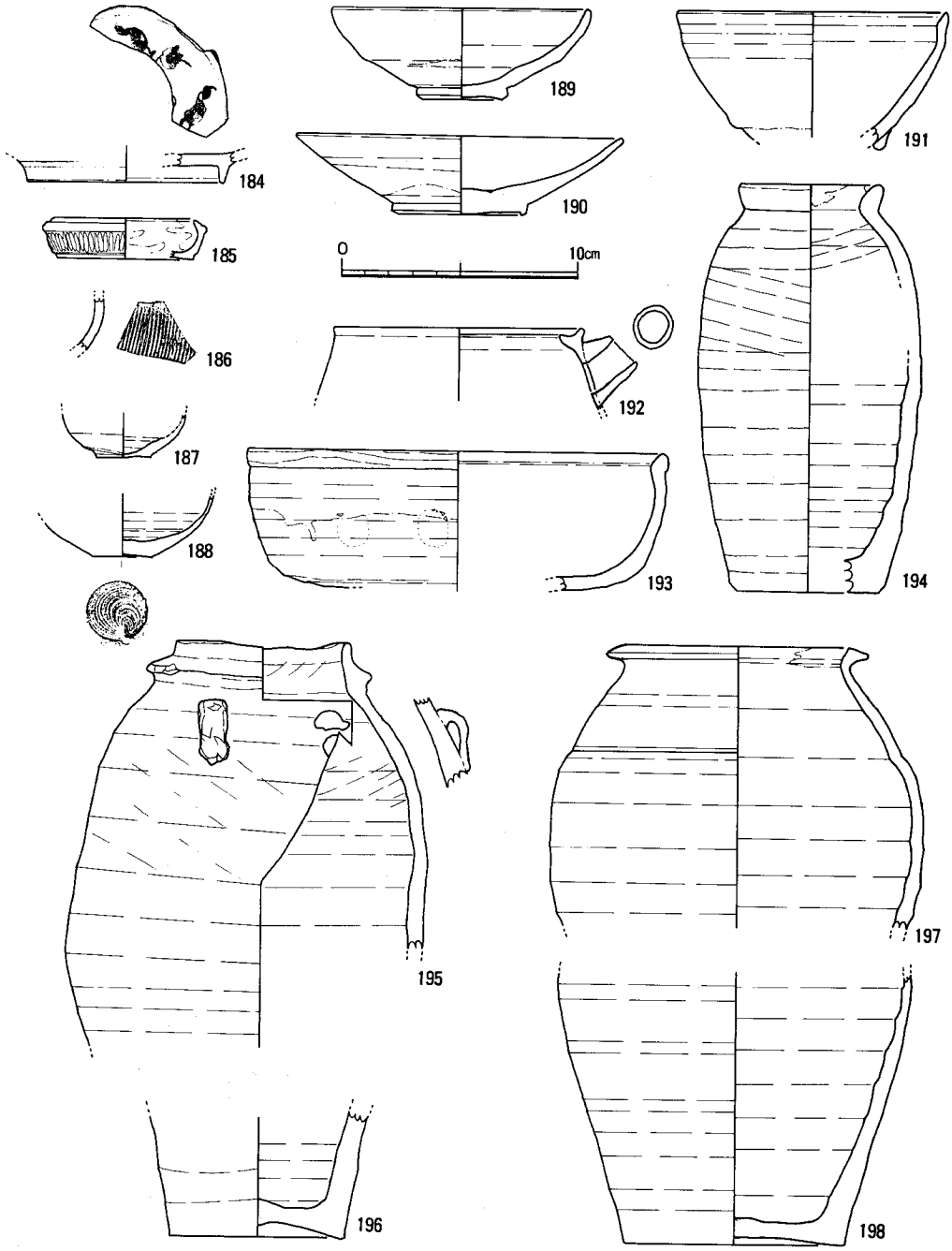


159 10号溝出土遺物13（1／3）

が大きくくいこんで凹凸をなしている。**177**は水注である。把手と注口の一部がみられる。頸部内面には，しぼり痕跡がみとめられる。



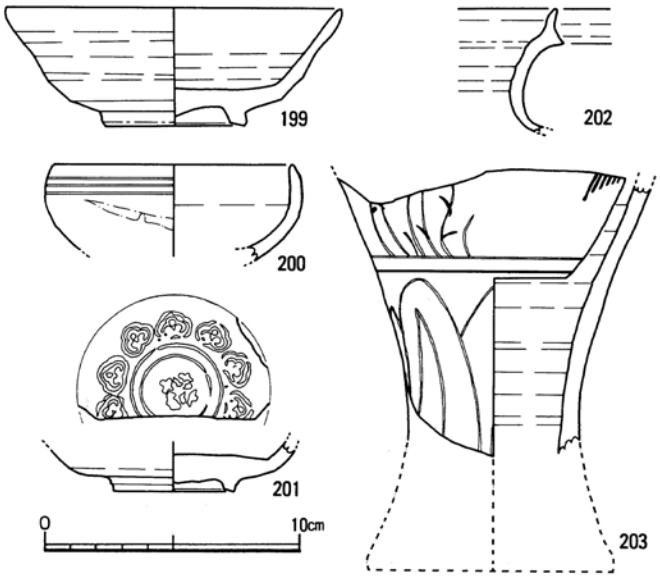
160　10号溝出土遺物14（約１／３）



161　10号溝出土遺物15（1／3）

184は，**明代の染付**である。

185～**198**は**陶器**である。**185**は黄褐釉の合子である。型造り。受け口部を露胎とする。**186**～**188**は茶入である。**186**は黒褐釉を施す擂座茶入である。**187**・**188**は褐釉をかける。**189**・**191**は天目



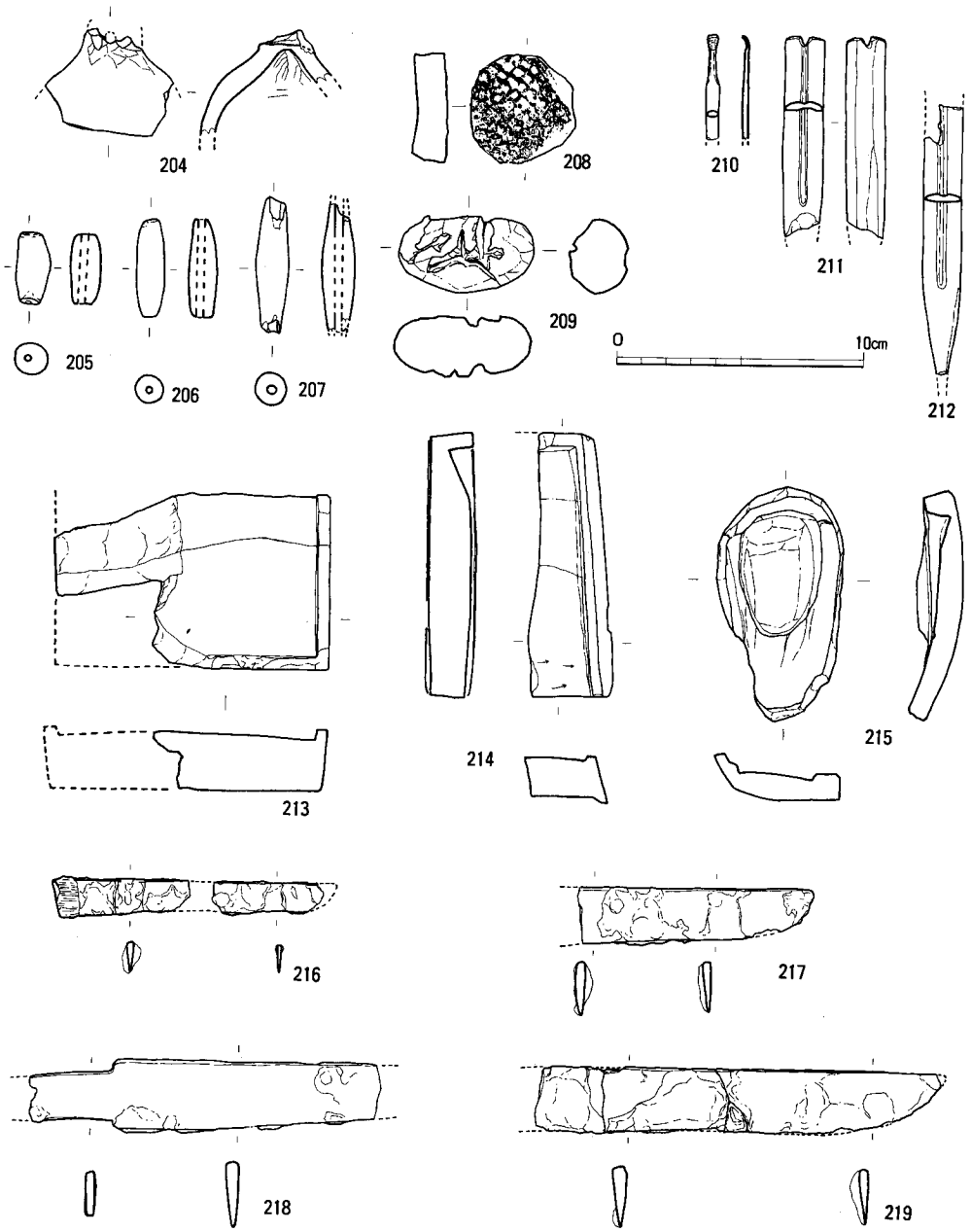
162　10号溝出土遺物16（1／3）

茶碗である。**190**は黒褐釉の皿である。見込みに擦れがみられ，使用痕と思われる。**192**は行平である。残存する部分には釉はみとめられない。**193**は，黄釉の盤である。口縁部内面は，釉を削り露胎とする。体部には目土のあとと思われる火痕がみとめられる。**194**～**198**は壺である。**194**は青磁系陶器で，オリーブ色の半透明釉が施される。**195**は，褐釉の四耳壺である。**197**は，褐釉の壺である。口唇部は，釉を削り露胎とする。

199は，李朝陶器の鉢である。灰色の胎土に，青味をおびた透明釉を施す。高台から底部は露胎となる。**200・201・203**は**象嵌青磁**である。**200・201**は李朝のもので，白土を象嵌している。**203**は，高麗の梅瓶の腰部である。白土と黒土とで象嵌する。**202**は，**須恵質陶器**である。盤口をなす。

204～**209**は**土製品**である。**204**は土鈴片である。**205**～**207**は土錘である。**208**は瓦質土器片の周囲を削りこんだ円盤状製品である。**209**は，弾状陶製品である。用途不明。灰色の胎土に黒灰色の釉が全面にかかっている。

163　10号溝出土遺物17（約1／3）

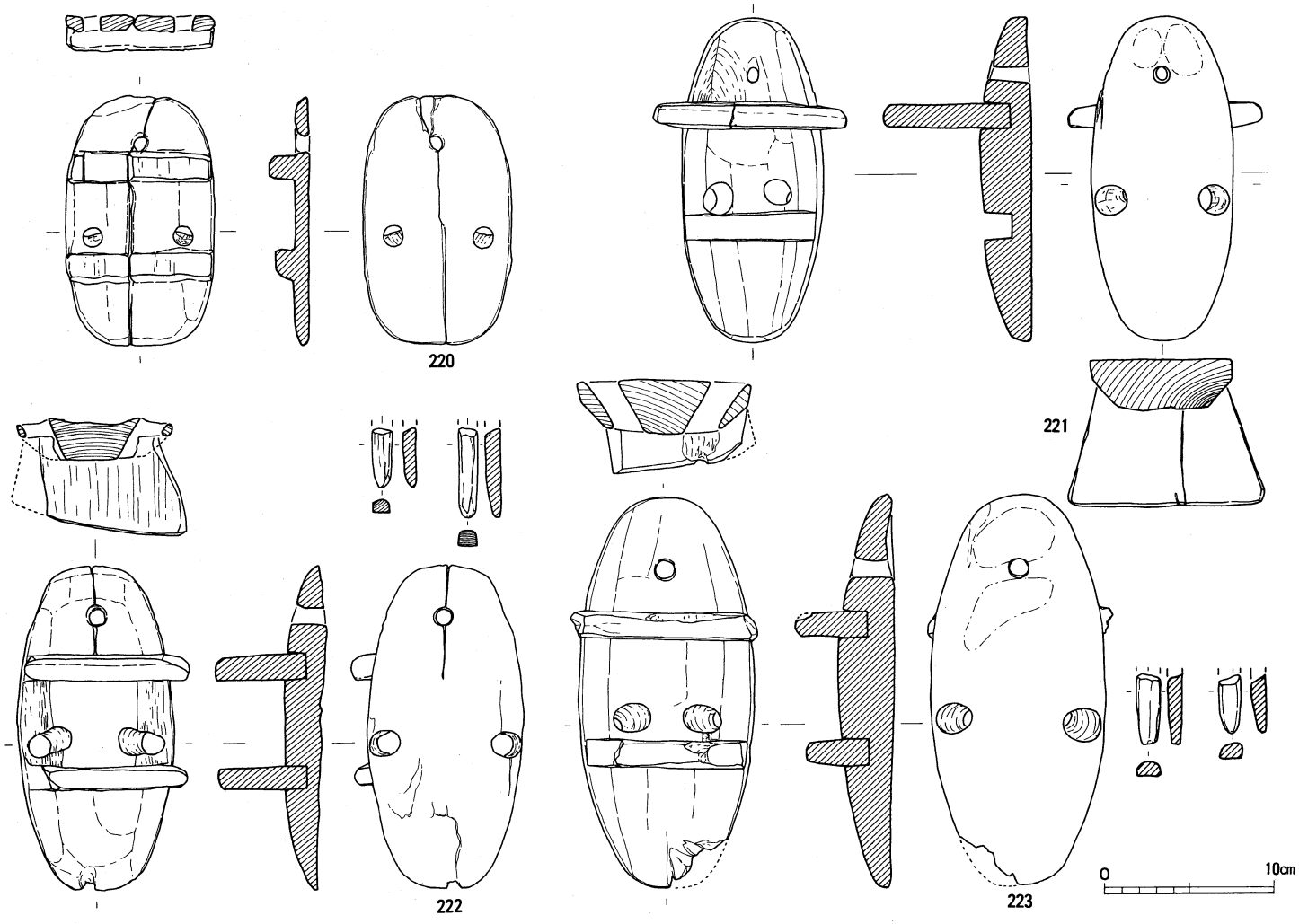


164 10号溝出土遺物18（1／3）

210～**212**は**骨製品**である。**210**は耳かき，**211**・**212**は笄である。

213～**215**は**石硯**である。**215**は滑石製石鍋の転用品である。

216～**219**は**鉄製品**である。**216**は刀子，**217**～**219**は短刀である。すべて平造りである。



165 10号溝出土遺物19（1／4）

220～**226**は，**木製品**である。**220**～**223**は下駄である。表２に分類と寸法を記す。なお，**220**・**222**・**223**の後方の鼻緒孔には，鼻緒のゆるみを防ぐために木の楔が台表から打たれていた。**224**は折敷の底板である。約２分の１を欠く。１ヶ所に桜皮が残っている。**225**は円盤状の木製品である。釘穴様の小孔が２つみられるが，一方には木釘が残っている。**226**は，ヘラ状木製品である。扁平な板材で，両側から大きく削りこんで把をつくる。把尻には，一方から抉込みを入れる。紐でもかけたものであろうか。

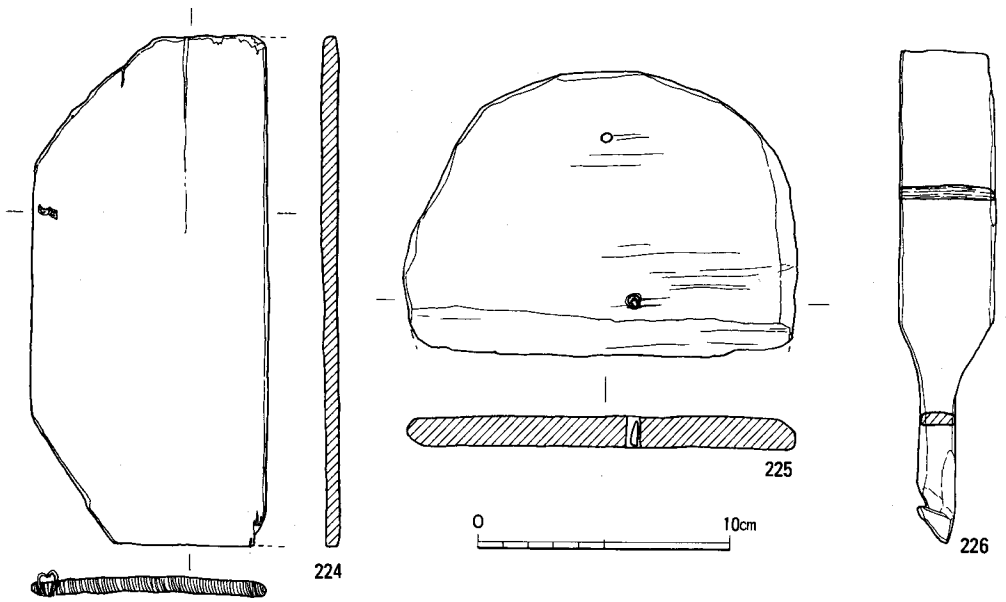
227～**231**は**漆器**である。**227**～**229**は皿である。**227**は黒漆を地とし，内面と体部外面の全面に大きく草花文を赤漆で描く。高台端部と口縁の一部を欠く他は，比較的良く残っている。**228**は，口唇部内側から外面を黒漆，内面を赤漆とするものである。文様は描かれていない。器壁はきわめてうすく，内外の漆の間にわずかに木質がみとめられるにすぎない。**229**は，見込みと体部外面に大きく菊花文をあしらう。地は黒漆で，赤漆で文様を描く。**230**は，浅皿である。黒漆塗り。内面は無文。体部外面に赤漆で草花文を描く。**231**は椀である。黒漆塗り，無文。

その他「開元通寶」「元豊通寶」「大観通寶」「政和通寶」「至和元寶」等**銅銭**が出土した。

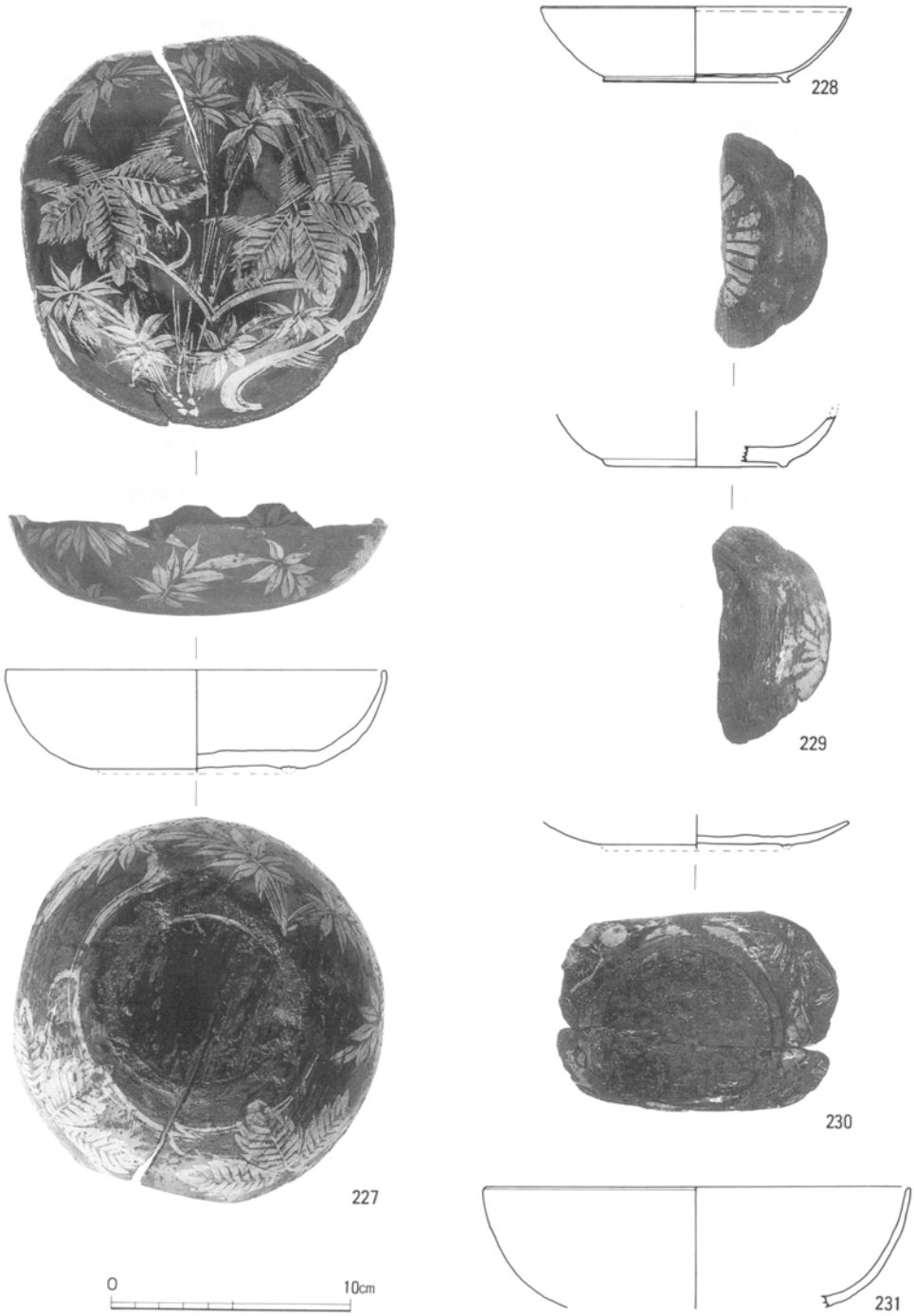
表２　10号溝出土下駄分類表

番号	分類	寸法cm(長－幅－高)	備　考	番号	分類	寸法cm(長－幅－高)	備　考
220	B	14.8－8.8－2.4		**222**	C	19.2－ 9.3－6.7	
221	C	19.2－8.4－8.75		**223**	C	23.2－10.3－5.85	

(註) 分類については，P.240参照。



166　10号溝出土遺物20（１／３）



167 10号溝出土遺物21（1／3）

15号溝

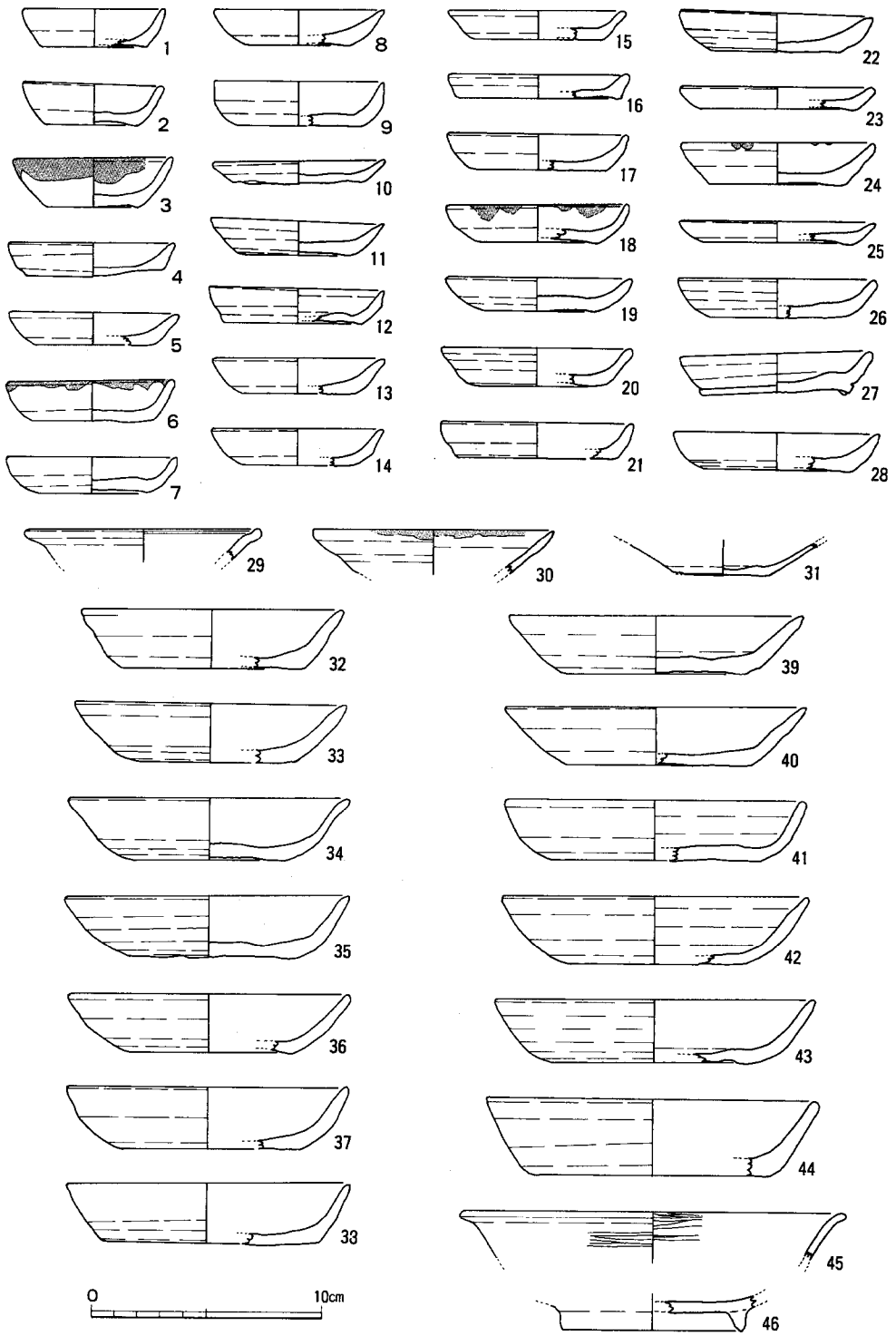
Ⅳ面Ｂ－01区から02区方向に検出された溝である。107号井戸掘りかたと調査が重複した為に混乱をきたし，一部掘り間違いを犯している。

溝は素掘りで，断面形はほぼＶ字形を呈する。溝幅は，107号井戸ほりかたと重複しない西側で270cm，深さは180cmをはかる。溝の西端はＢ－01区にあり，そこから急に深さをまして，東北方向にのびる。北側の10号溝と主軸が平行している。第３次調査区の長軸方向で01区と02区の間に設けた中央トレンチの土層観察からは，両者の前後関係はきめられなかった。遺物の上では，両溝から出土する遺物には共通する要素も多く，溝の継続年代の幅を半世紀単位までひろくとれば，10号溝と15号溝が併存した可能性は高い。ただし，前述した様に107号井戸との間に遺物取りあげの上でも混乱があるので，15号溝出土遺物に新しい要素が紛れこむ恐れは十分にあり，10号溝との前後関係については，判断をさけたい。

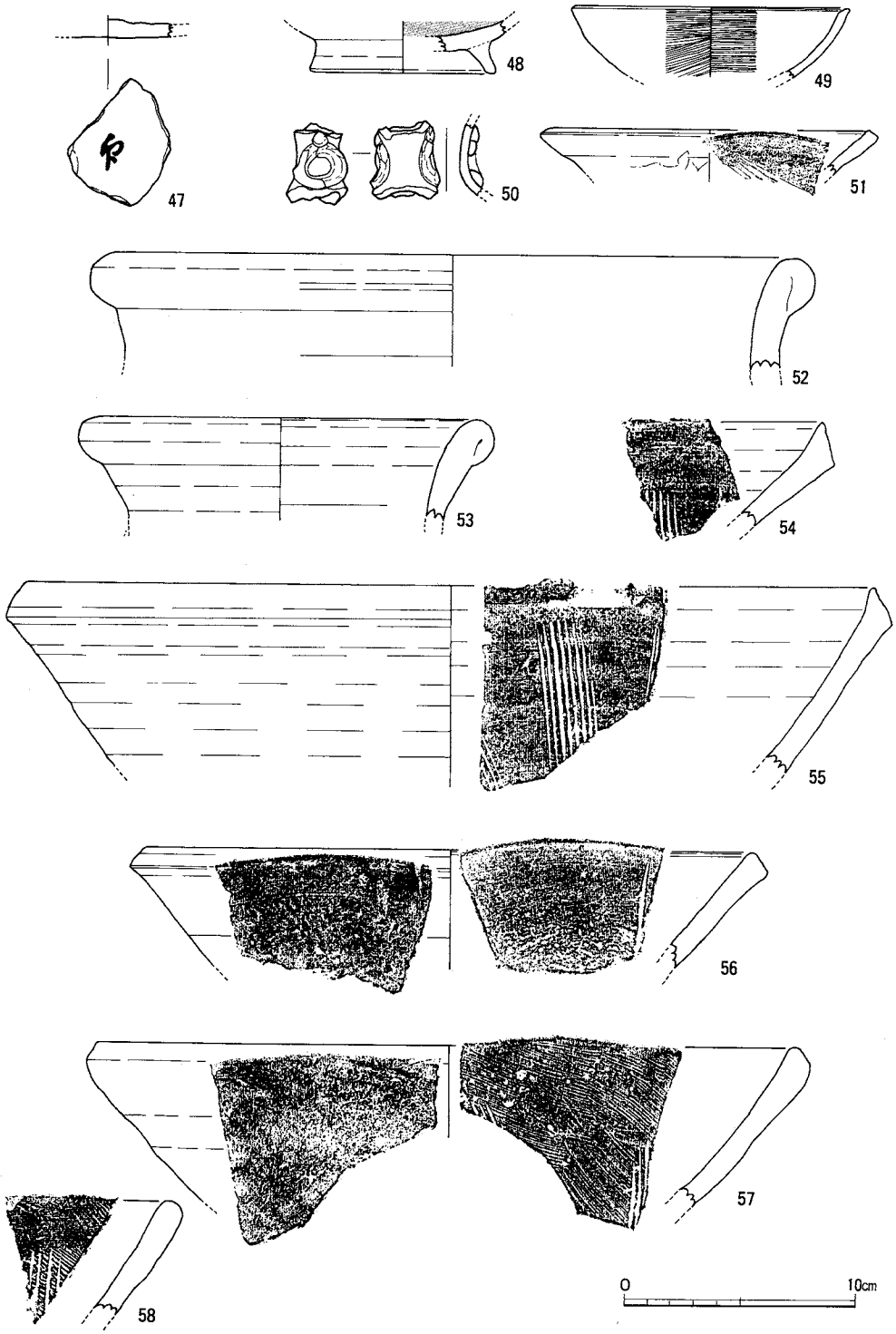
168　15号溝（西より）（奥は107号井戸）

169　15号溝土層堆積状況（調査区中央トレンチ　東より）

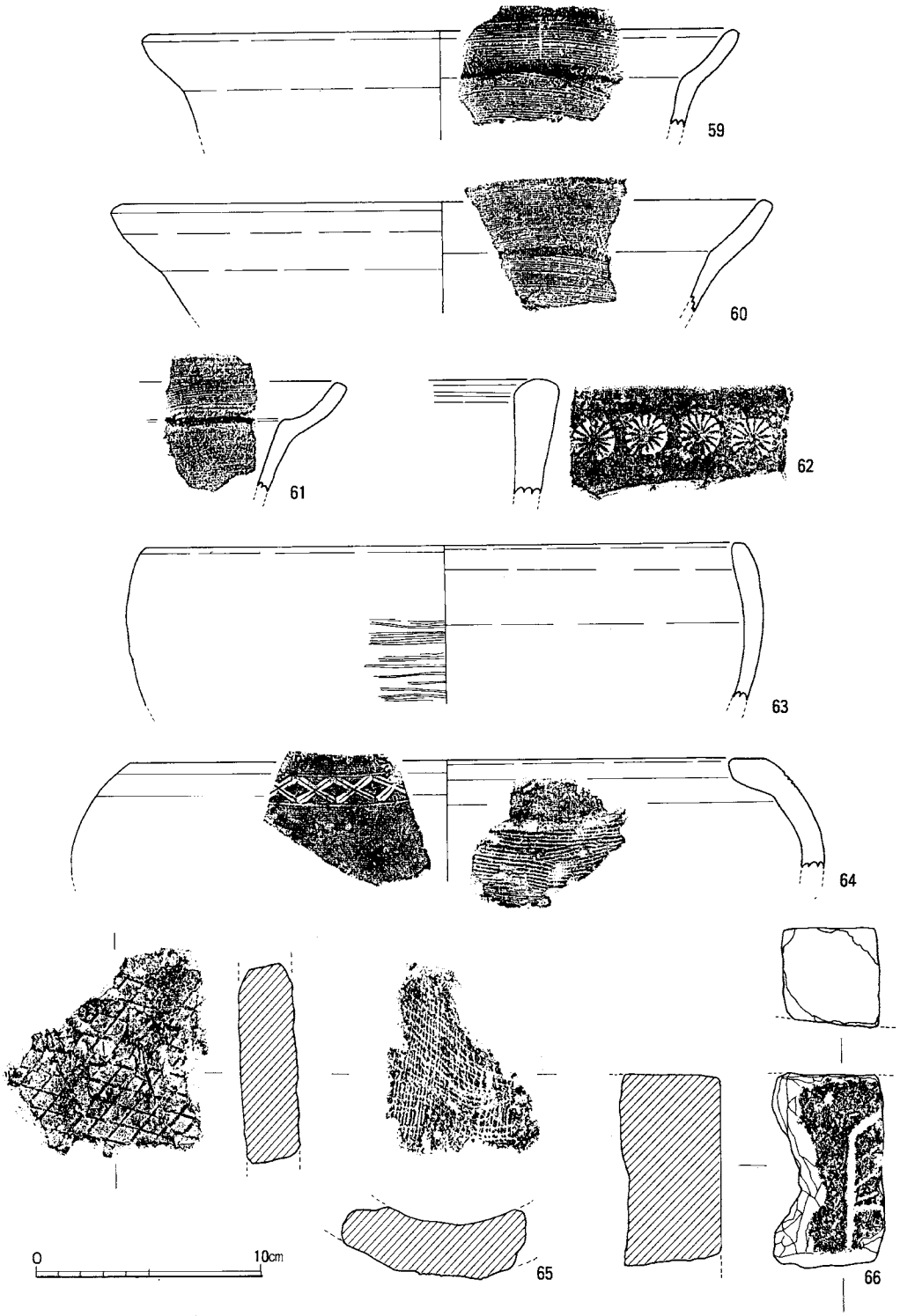
1～46・59～61は土師器である。**1～28**は皿で，口径6.2～9.1cm，器高0.95～2.1cmをはかる。**10**には，板状痕，内底



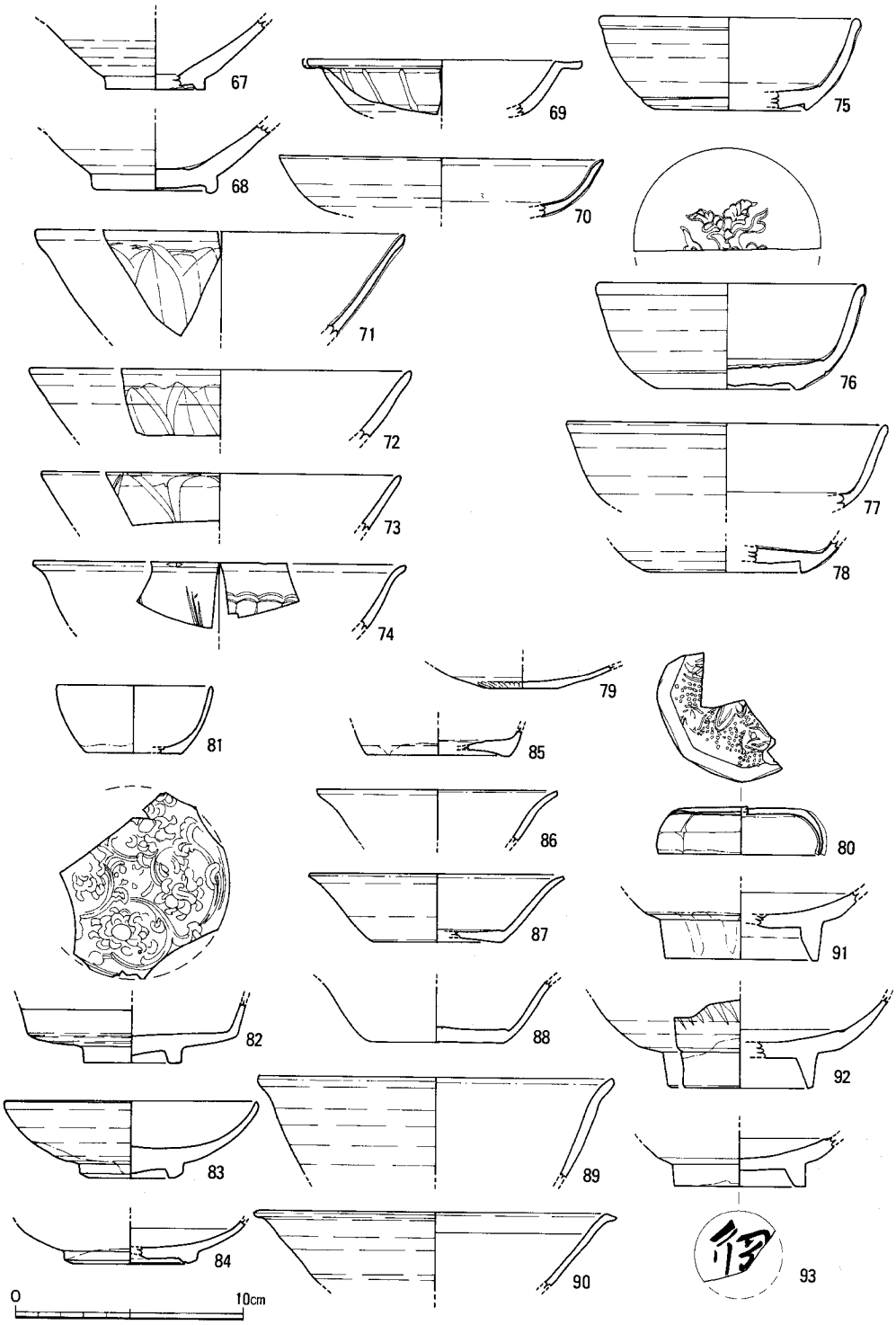
170 15号溝出土遺物１（１／３）



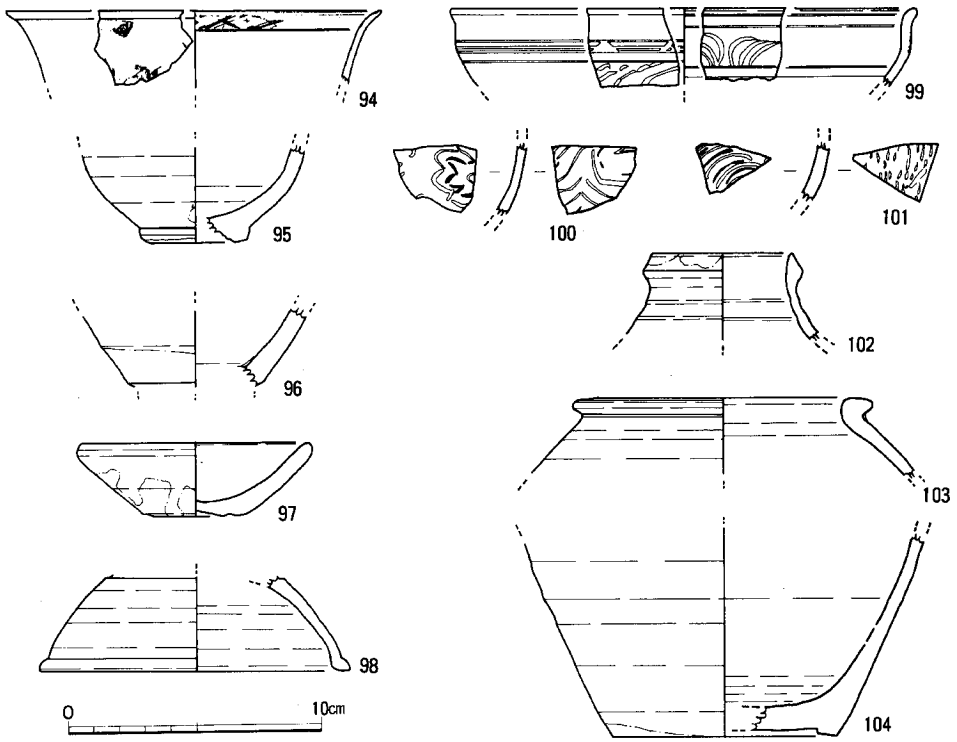
171　15号溝出土遺物２（１／３）



172　15号溝出土遺物３（１／３）



173 15号溝出土遺物４（１／３）



174 15号溝出土遺物５（１／３）

ナデがみとめられる。**１・３・６・９・11・14・18・24**において，口縁部に煤の付着がみとめられる。これらの皿は，概して口径の割合に器高が高く，灯明皿として用いられる皿には，一定のタイプが決っていたことを思わせる。**29**は「て」の字状口縁皿である。**30・31**は，大内系土師器の皿である。**30**の口縁には煤がついており，灯明皿に用いられたことを示す。また器壁は調整がみとめがたい程あれている。**32**～**44**は坏である。口径11.5～14.3cm，器高2.55～3.35cmをはかる。**41**には，板状痕と内底ナデがみとめられる。**45・46**は埦である。**45**は，細かいヘラミガキが密に施される。口縁が外反している点，器壁がうすい点，ヘラミガキが細かい点など，在地の研磨土器とは異なる要素であり，他地域から搬入された可能性がある。**46**は研磨土器である。**59**～**61**は土鍋である。外面には，厚く煤が付着する。

47は**須恵器**の坏の底部である。外底に墨書が残る。「印」と読みたい。

48は**内黒土器**，**49**は**瓦器**である。**49**は楠葉型瓦器埦で，内外面とも密にヘラミガキする。

50・51は**瀬戸焼**である。**50**は仏花瓶の頸部で，両側に環がつけられている。光沢の強い暗黄褐色の鉄釉がかけられている。**51**は卸皿である。灰色の灰釉が施される。

52～**55**は**備前焼**である。**52・53**は壺の口縁である。口縁を丸く折り返して玉縁につくる。備

前焼Ⅳ期にあたる。**54・55**はすり鉢である。口縁は斜めに面取りされ，上下にわずかに張る。備前焼Ⅳ期前半に編年されよう。

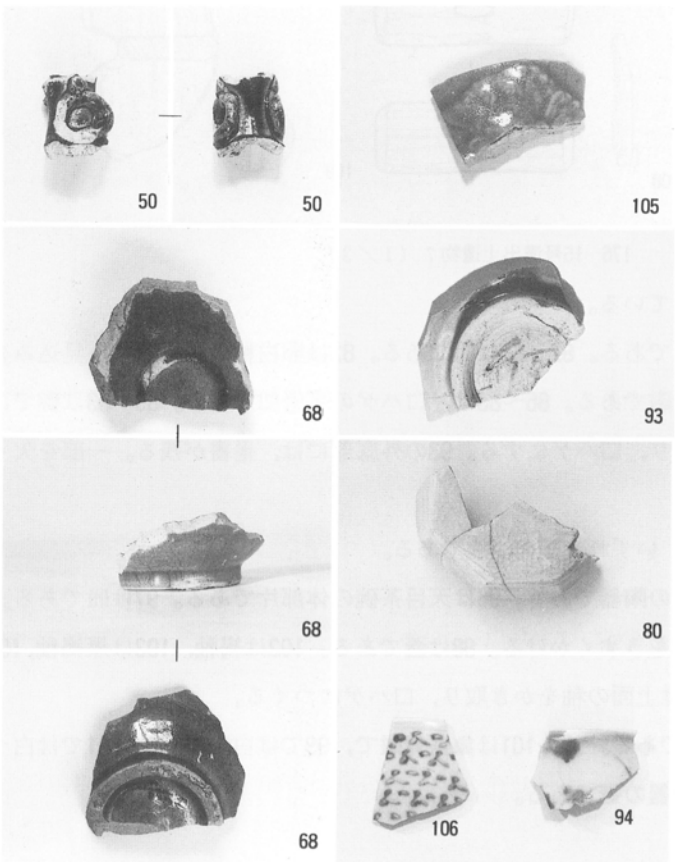
56は**土師質土器**のすり鉢である。内面下方には，使用による器壁のあれが認められる。

57・58・62～64は，**瓦質土器**である。**57・58**はすり鉢，**62～64**は火舎である。**62**の外面には菊花文，**64**の外面には襷文のスタンプがならぶ。

65は**瓦**である。平瓦片で，瓦上面には布目が，下面には斜格子の叩き痕が残る。

66は**石製品**である。茶色の砂岩で，平らに加工した2面をとどめている。1方の面には，線刻がみとめられる。線刻は，脚の長い「く」の字状に刻まれた太い線と，これに平行もしくは直交する細く浅い線からなる。直交する横線は，平行する斜線に比べるとやや太めであり、「く」の字状の線と，これに直交する横線とで区画を作っている様に見える。小片ではあるが，板碑の一片である可能性を考えたい。

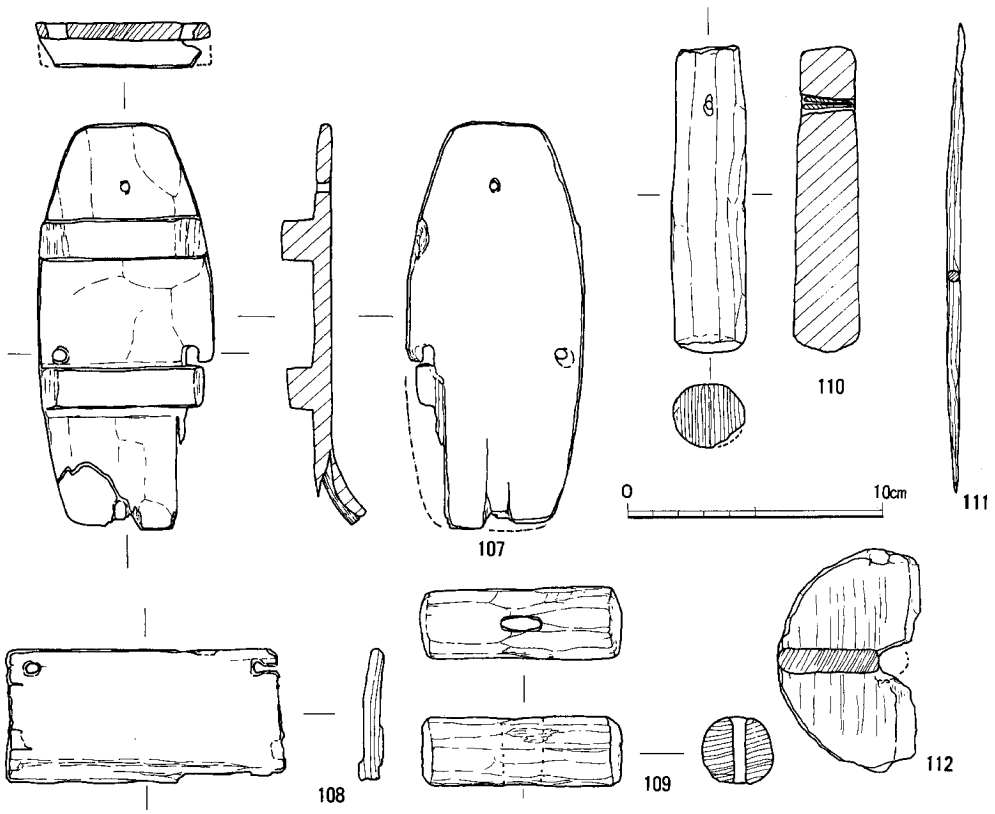
67・68は**高麗青磁**の碗である。灰色で精良な胎土に，**67**は青緑色，**68**はオリーブ色をおびた透明釉を厚くかける。釉表には，氷裂がみられる。釉は全面にかけられるが，畳付は釉をかきとって露胎としている。



175　15号溝出土遺物6（約1／3）

69～78・105は，**青磁**である。**69・70・75～78**は皿である。**69**の口縁は，鍔状に横に張る。体部には，太めの縦線を刻む。**75～78**は，碁笥底の皿である。口縁端部は小さく外方に肥厚させ，玉縁状にみせる。畳付から外底部は，露胎である。**76**の見込には，印花文が施されている。**105**は壺の胴部である。貼花文の上から濃緑色の釉を厚くかける。

79・80は，**青白磁**である。**79**は皿の底部である。**80**は合子の蓋で，八角形につくる。型造りである。頂部の文様ははっきりしない。口唇部から体部内面は，露胎である。B



176 15号溝出土遺物７（１／３）

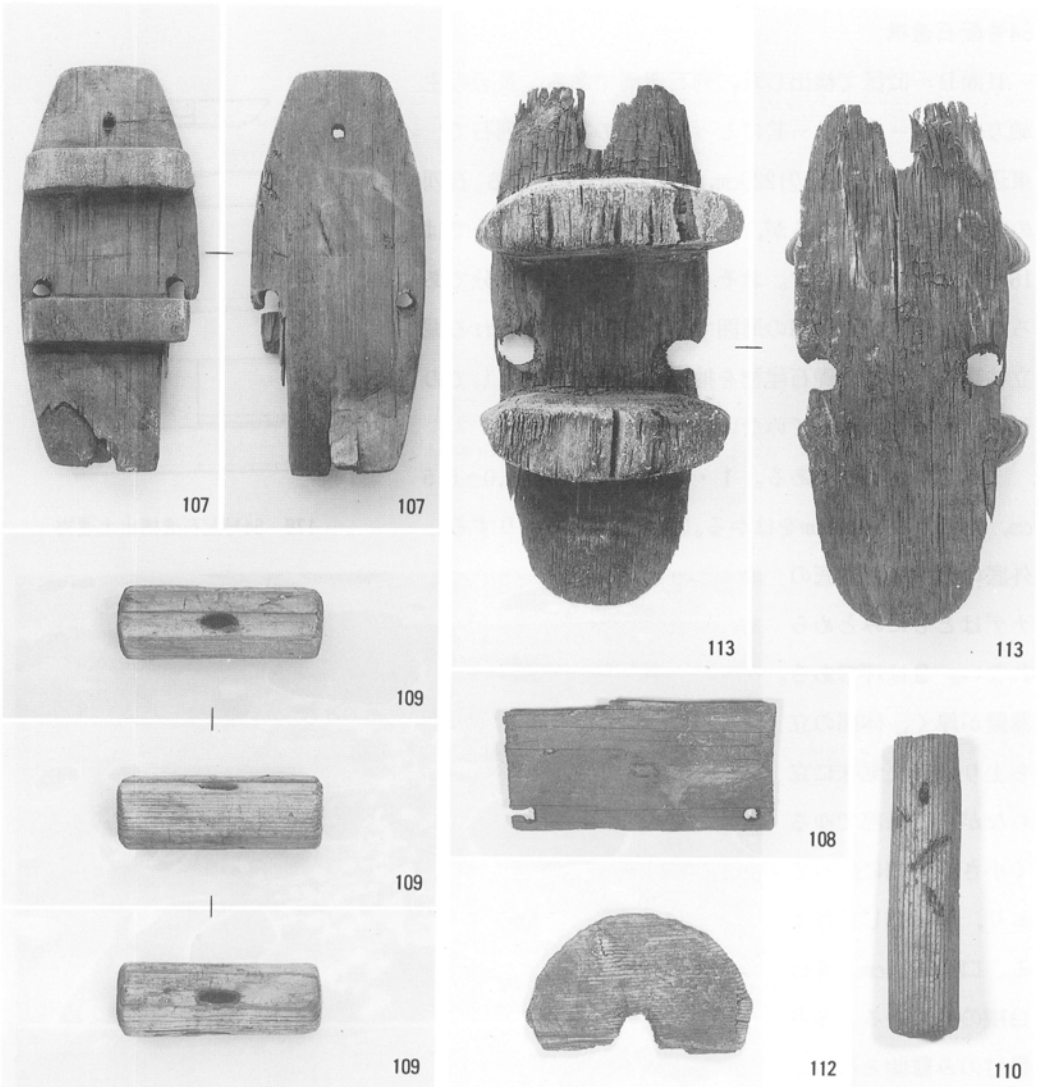
－02区Ⅵ面下出土片と接合できている。

81～**93**は**白磁**である。**81**は盃である。**82**～**88**は皿である。**82**は卵白釉の腰折皿で，見込みには印花文を施す。いわゆる枢府磁である。**86**～**88**は，口ハゲの平底皿である。**89**～**93**は碗である。**89**は，口縁部の釉をかき取り，口ハゲにする。**93**の外底部には，墨書が残る。一部を欠くが「綱」と判読できる。

94・**106**は**明代の染付**である。いずれも碗の小片である。

96～**98**・**102**～**104**は，中国製の**陶器**である。**96**は天目茶碗の体部片である。**97**は皿である。灰褐色の胎土にオリーブ色の釉をうすくかける。**98**は蓋である。**102**は褐釉，**103**は黒褐釉，**104**は黄褐釉の壺である。**103**は口縁上面の釉をかき取り，口ハゲにつくる。

95・**99**～**101**は**李朝**の陶磁器である。**99**～**101**は**象嵌青磁**で，**99**では白土，**100**・**101**では白土と黒土を象嵌している。**95**は**陶器**の壺である。



177　15号溝出土遺物８（約１／３）

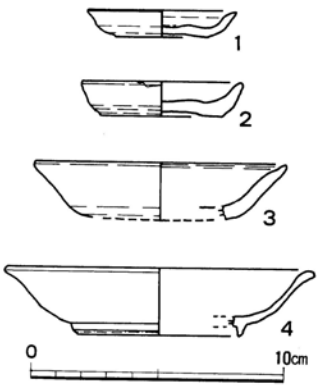
107～**113**は**木製品**である。**107**・**113**は下駄である。**107**はＢ類で，長さ16.2cm，幅13.0cm，高さ2.0cmをはかる。**113**はＡ類で，現存長21.0cm，幅9.0cm，高さ7.0cmをはかる。**108**は板材で，容器の側板に使われたと思われる。２ケ所に穴があいており，釘穴と考えられる。**109**は，木槌の頭である。柄孔は刃物でくりぬいたとみられる。槌頭は2.85×2.95cmの略円形である。**110**は棒状木製品である。全体に丸く削る。一端はやや細く，釘穴が貫通して木釘が残っている。**111**は箸である。長さ18.7cmをはかる。**112**は円盤状木製品である。直径約9.0cmの円盤の中心に，直径1.2cmの孔をあけたものと思われる。加工が粗く装飾にはならないし，重量が軽く錘の役も果さない。はずみ車の一種と考えたい。

⑤配石遺構

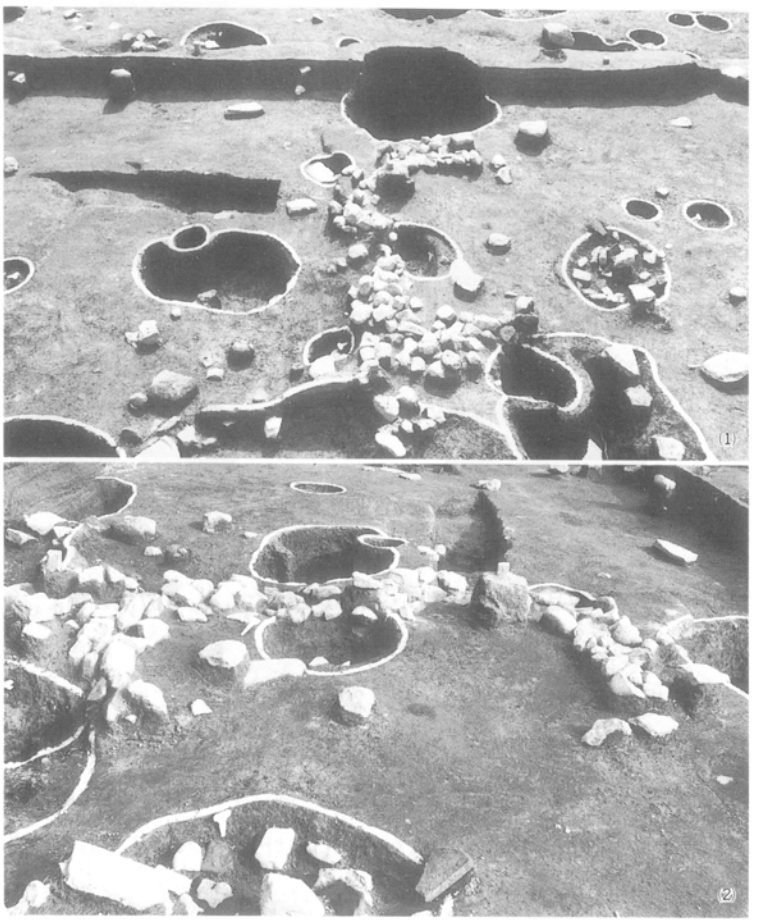
54号配石遺構

II面B－02区で検出した，列石遺構である。長辺の主軸方向をN－41°30′－Eにとった，コの字形の列石で，東辺104cm，南辺(長辺)220cm，西辺104cmをはかる。石列の幅は25cm前後であるが，長辺中央の68cm程の部分では16～20cmと幅を減らす。おそらくは建物の基礎部分であろうが，54号配石遺構の周囲でこれと関連づけられる掘立柱建物もしくは礎石建物を抽出できず，建物としての形状，規模はわかっていない。

1～3は**土師器**である。**1・2**は皿で，口径6.0～6.5cm，器高1.15～1.4cmをはかる。底部は回転糸切りする。外底の板状痕，内底のナデはともにみとめられない。**3**は坏である。器壁が厚く，体部の立ち上りは外反気味に立ちながら口縁部でゆるく小さく内側に尖っており，鈍い感じを与える。口径10.1cm。**4**は**白磁**の皿である。高台畳付のみ露胎となる。中国明代のものである。



178 54号配石遺構出土遺物



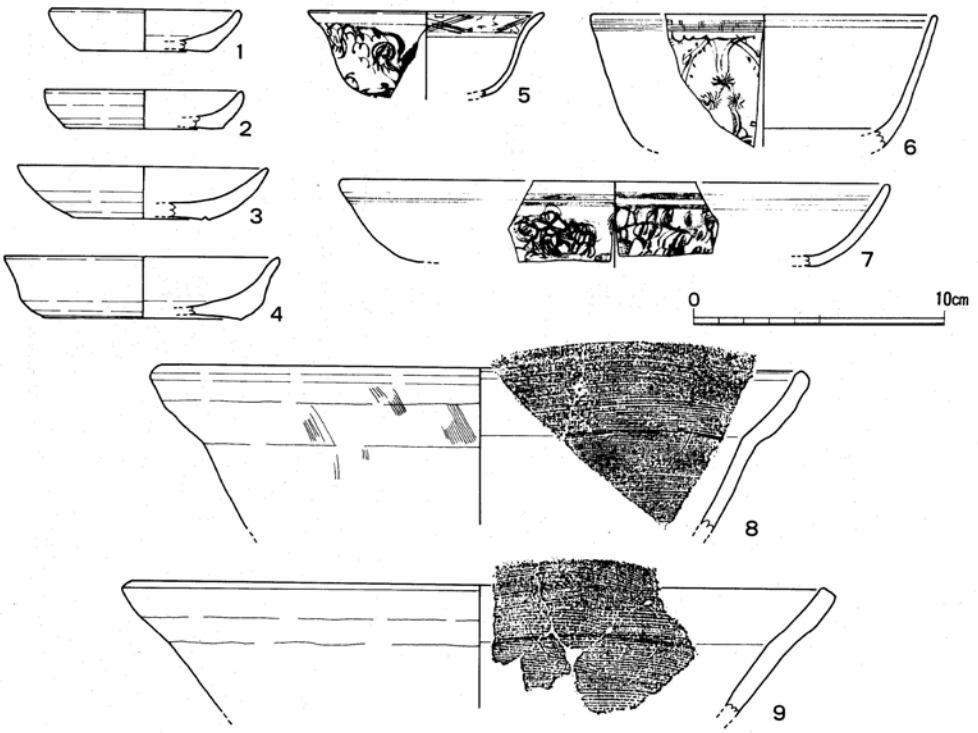
179 54号配石遺構 (1)…東より，(2)…北より

55号配石遺構

55号配石遺構と次にのべる56号配石遺構はII面からの掘り下げ途中で検出された列石遺構である。矩形の角の部分にあたる。調査しえた部分は，東辺で長さ220cm，南辺で長さ380cmをはかる。

180 55号配石遺構（東より）

1～4・8・9は**土師器**である。**1・2**は皿で，口径7.7～8.0cm，器高1.55～1.65cmをはかる。**3・4**は坏である。口径10.0～11.0cm，器高2.05～2.45cmをはかる。皿・坏とも糸切り底で，板状痕・内底ナデはみられない。**8・9**は土鍋である。外面には煤が付着している。**5～7**は**明代の染付**である。**5・6**は碗，**7**は大皿である。**5**は，外面に雲堂手の雲を描く。他に「永楽通寶」「祥符通寶」「元豊通寶」「景祐通寶」等**銅銭**が14枚出土している。



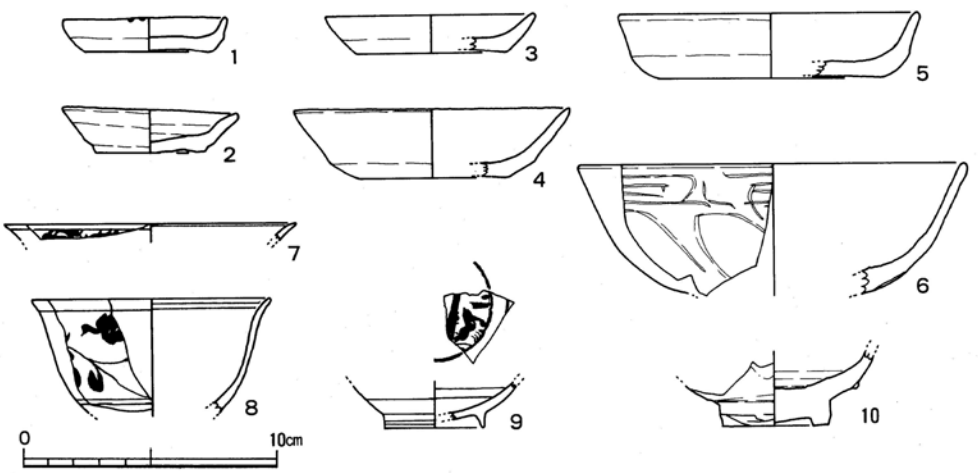
181 55号配石遺構出土遺物（1／3）

56号配石遺構

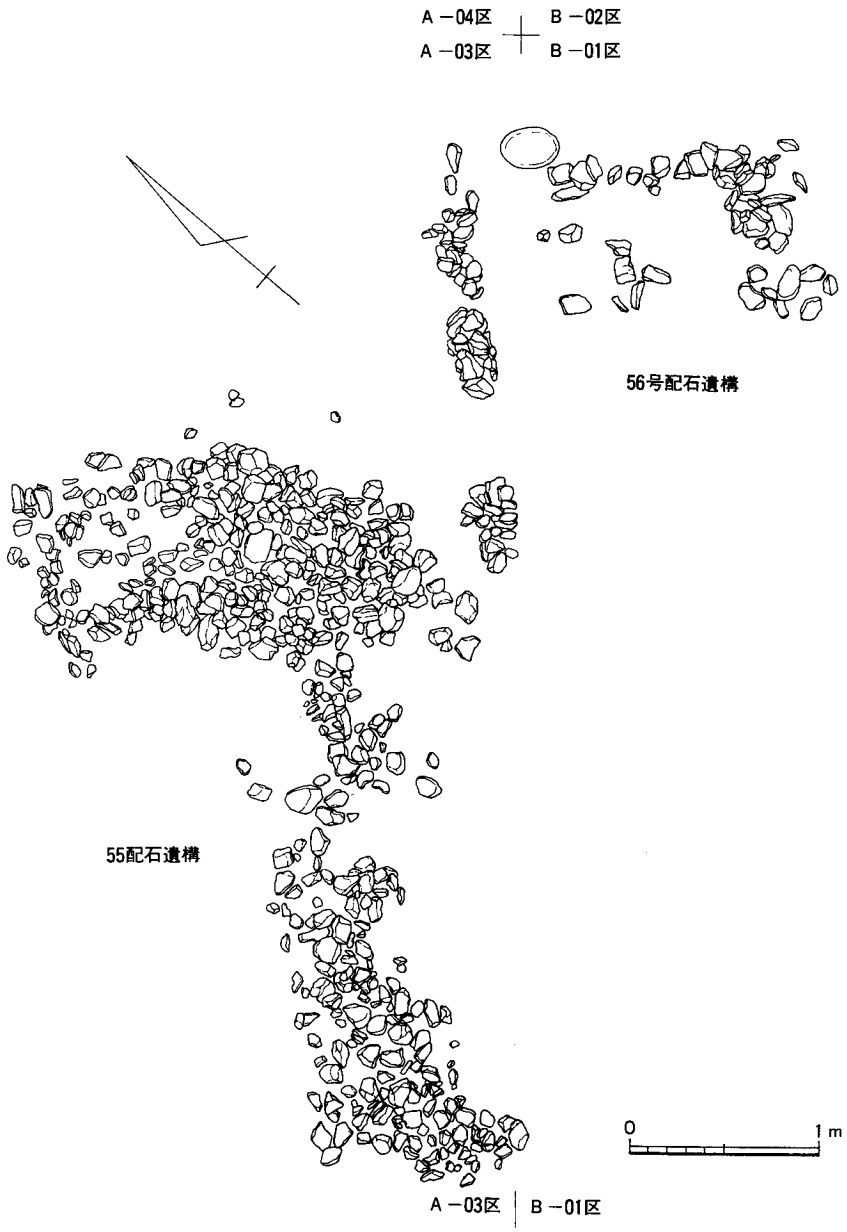
II面下A－03区より検出した列石遺構である。55号配石遺構の東に隣接する。一辺が長い「コ」の字形を呈した列石で，長辺（北辺）は断続しつつも長さ228cm，東辺は長さ172cm，南辺は長さ88cmをはかる。列石の幅は狭く，特に東辺において礫の集石度は低い。北辺はその西端において55号配石遺構と接し，わずかに24cm程間を置くだけである。同時存在した可能性も考えられる。

1～5は**土師器**である。**1～3**は皿で，口径6.4～8.3cm，器高1.4～1.7cmをはかる。**4・5**は坏である。口径11.0～12.0cm，器高2.6～2.75cmである。底部は回転糸切りする。**6**は**青磁**の碗である。二次的に火熱を受け，釉表面はあれている。

182 55号・56号配石遺構 (1)－西より (2)－東より



183 56号配石遺構出土遺物（1／3）



184　55号・56号配石遺構実測図（1／40）

7～**9**は**明代の染付**碗である。**8**は外面に蓮華唐草文を描く。**9**は蓮子碗の底部と思われる。**8**・**9**は2次的に火熱をうけて割れており，釉は沸騰している。**10**は**陶器**の椀である。

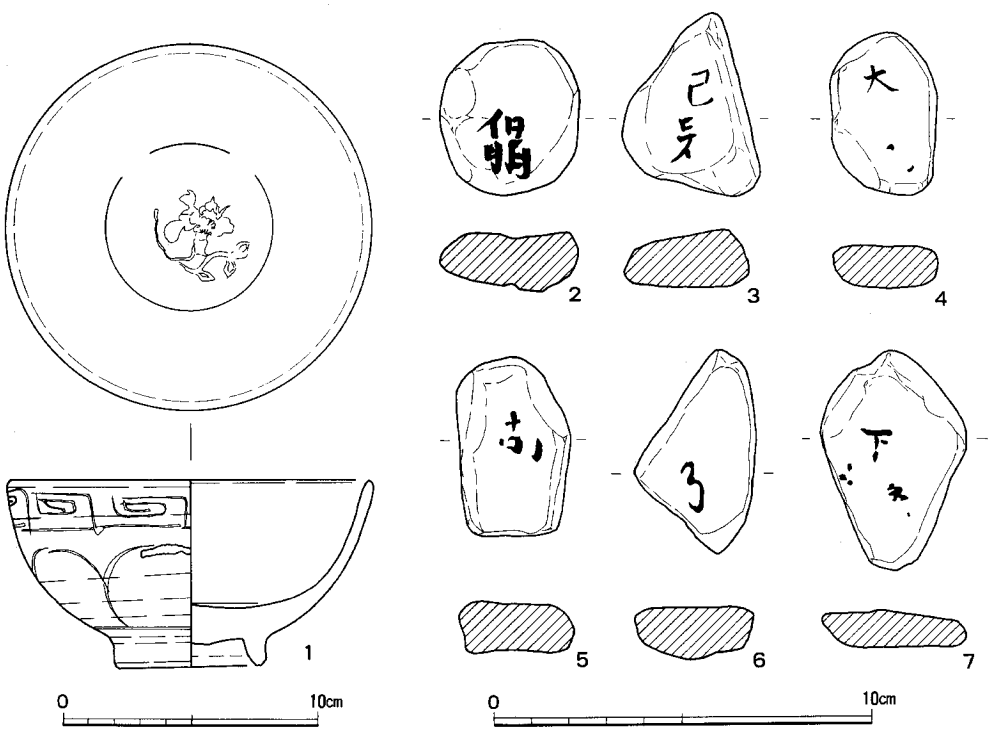
他に「開元通寶」等，銅銭2枚が出土している。

⑥　その他の遺構

ＳＸ05（地鎮遺構）

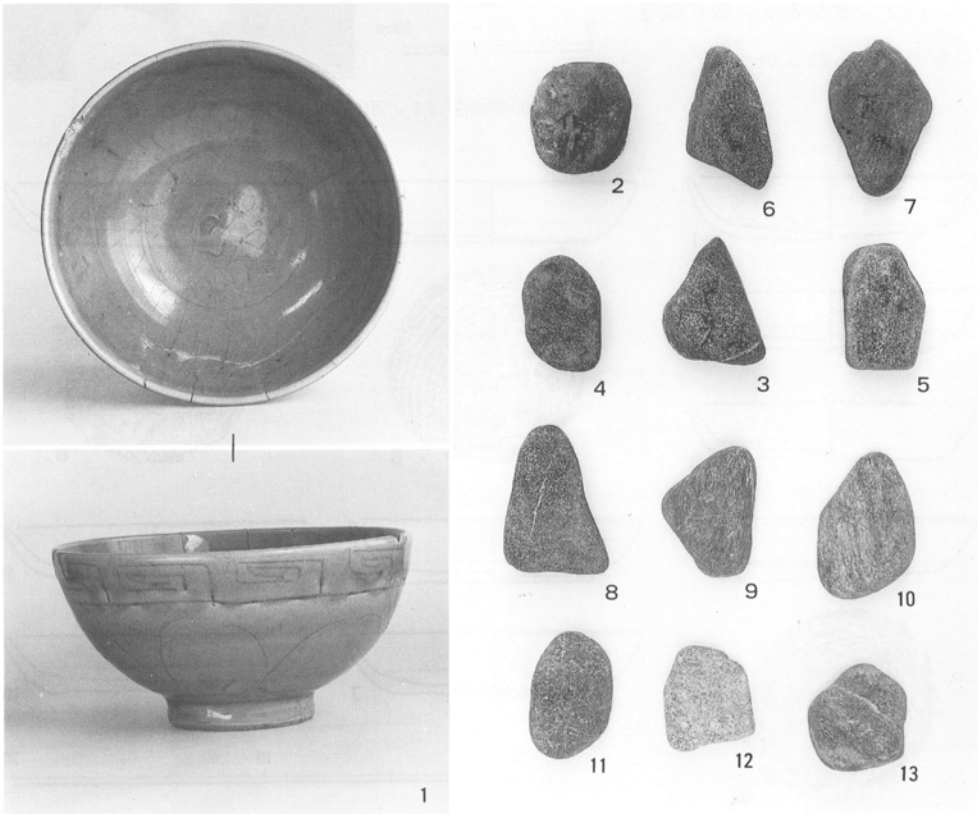
II面からIII面への掘り下げ途中，標高3.38mで検出した遺構である。遺構としては，直径10cm，深さ10数cm程の小土壙に12個の墨書礫を詰め，その上に12枚の銅銭を置いて，さかさまに向けた青磁碗で蓋をするものである。発見時の状況からは，この青磁碗が地上に露出していたのか，更に一回り大きな土壙の内に置かれ埋められたものなのか，確認できなかった。

1は，蓋としてかぶせられていた**青磁碗**である。口縁部直下に雷文帯を配し，体部下半には沈線で花弁を描く。見込みには印花文と圏線を施す。高台内側を露胎とする。**2**～**7**は，埋納されていた**礫**の内で墨痕の確認できたものである。**2**・**3**を除いて墨痕の残りは悪く，ほとんど肉眼では見えない。本来は12個の礫の全てに墨書が書かれていたものと思われる。**2**は「仲明」であろう。**3**は「己器」とでも読むのであろうか。**4**は，一応「大」としたが，きわめて不鮮明である。**5**～**7**も不鮮明で，墨書を判読するにはいたらない。礫の上におかれていた**銅銭**は，12枚の内11枚までが，さし銭状に連なっていたと考えられるが，検出した際には３～４枚づつのかたまりにわかれていた。内訳は，「洪武通寶」２枚，「元豊通寶」２枚，「元祐通寶」２枚，「皇宋元寶」１枚，「皇宋通寶」２枚，「聖宋元寶」１枚，「政和通寶」１枚，「至道元寶」１枚である。



185　ＳＸ05出土遺物１（１／３，１／２）

186　ＳＸ05　(1)検出状況（北より）　(2)青磁碗除去（東より）



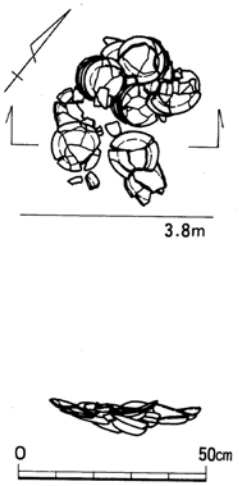
187　ＳＸ05出土遺物２（約１／３）

ＳＸ09

II面からの掘り下げ途中，III面から若干浮いて検出された土師器溜である。Ｂ－01区から02区にかけて，1.2m程の間を置いてほぼ同規模の土師器溜が３基出土し，東からＳＸ09，ＳＸ10，ＳＸ11とした（Ｐ．134，Fig. 196)。

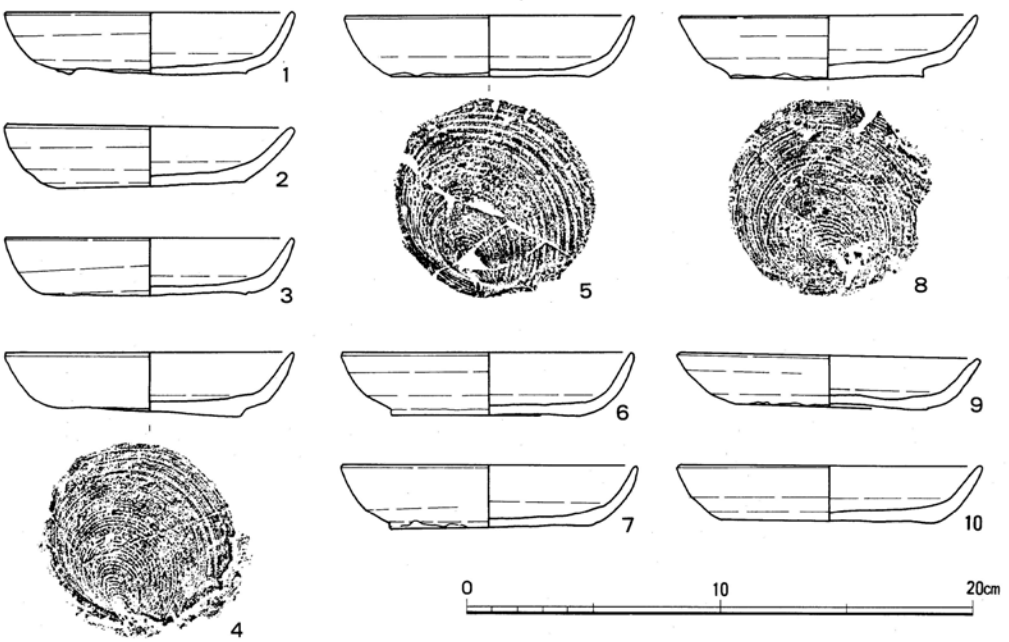
ＳＸ09では，土師坏ばかりが東西34cm，南北44cmの範囲に集中して出土している。すべて内面を上に向けており，４～６枚を重ねておいてある状態も３群ほどみられた。総枚数は，完形に接合しえたものだけで21枚を数える。

1～10に示したのは，その中で特に残りの良いものである。すべて**土師器**の坏である。口径は，11.6～12.2cmをはかる。11.6cmのものが最も多い。器高は2.1～2.6cmで，バラつきがある。板状痕をもつものはみられなかった。



188　ＳＸ09実測図（１／20）

189　ＳＸ09（南より）

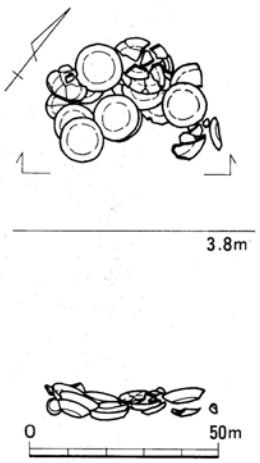


190　ＳＸ09出土遺物（１／３）

ＳＸ10

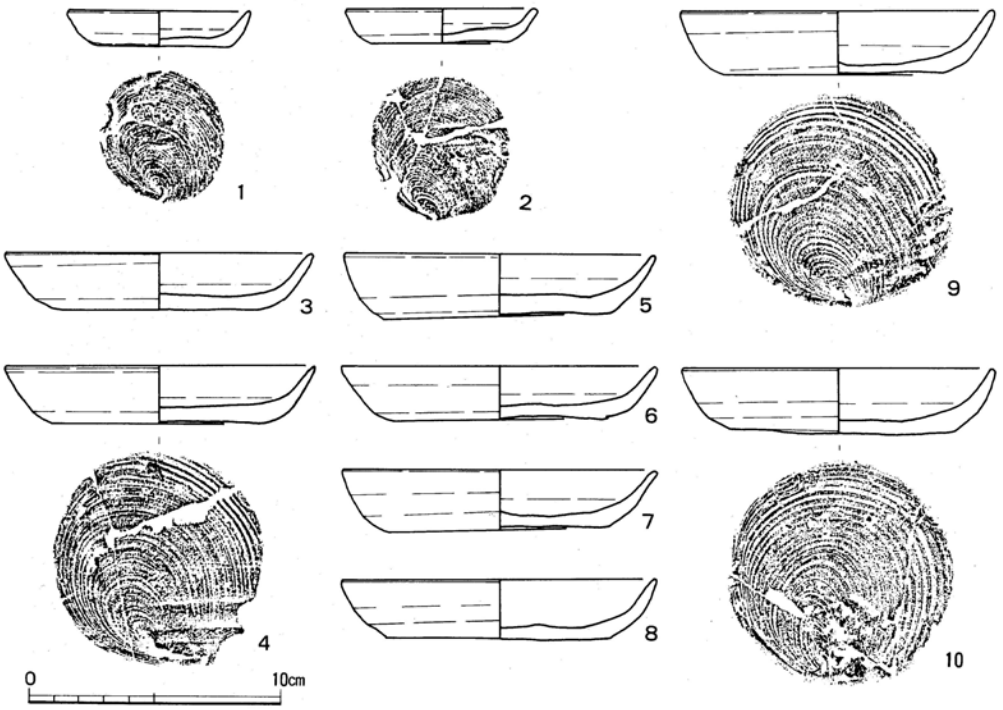
Ⅱ面下Ｂ－01区で検出した土器溜である。ＳＸ09・ＳＸ11とは，ともに約1.2 mの間を置いている。東西40cm，南北40cmの範囲に17枚以上の土師皿・坏が集中していた。

1・2は皿である。口径7.4～7.7cm，器高1.4～1.5cmをはかる。**3～10**は坏である。口径12.3～12.6cm，器高2.3～2.6cmをはかる。**2・4・9**において，板状痕・内底ナデがみられる。



191　ＳＸ10実測図

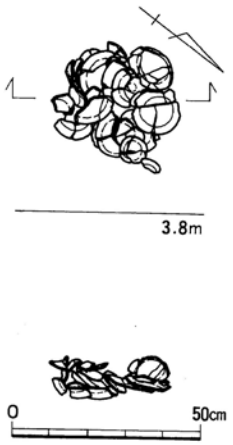
192　ＳＸ10　（南より）



193　ＳＸ10出土遺物（1／3）

ＳＸ11

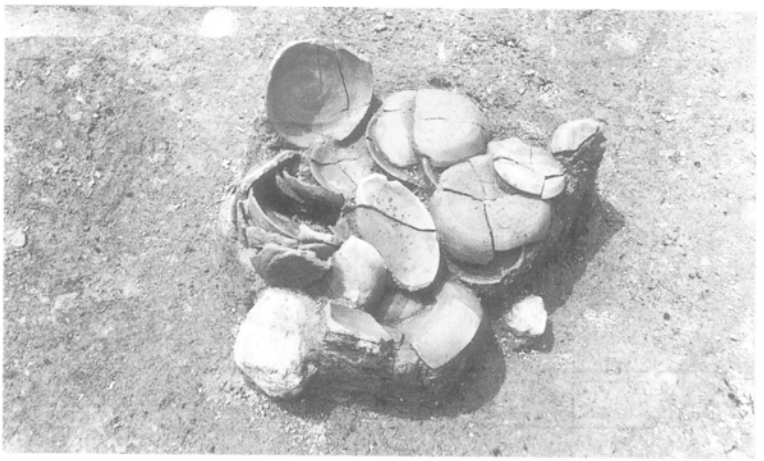
Ⅱ面下Ｂ－01区で検出した土器溜である。ＳＸ09・10・11の内では最も西に位置し，ＳＸ10とは約1.2mの距離をおく。東西32cm，南北32cmの範囲に22枚以上の土師皿・坏をかさねる。ＳＸ09・10では，皿・坏はすべて上向きであったのに対し，ＳＸ11では最上部におかれた皿・坏は下向きに伏せてある。また，西側の坏は斜めに立っており，小土壙の底に埋置されたことを暗示している。



194　ＳＸ11実測図

1～**5**は皿である。**1**～**4**は口径6.8～7.0cm，器高1.4～1.6cmをはかる。**5**は口径8.5cm，器高1.8cmである。**1**～**4**と**5**を比べると，**5**は，胎土は砂立って粗く，糸切りは逆糸切り，整形のヨコナデも強く施され，明らかに異質である。また**5**にのみ口縁に煤がみとめられる。**6**～**22**は坏である。口径11.4～13.1cm，器高2.3～2.8cmをはかる。**6**・**9**・**13**・**14**の外底部には，藁状の圧痕がはっきりと残っている。**11**・**16**には板状痕がみられる。皿・坏とも，内底部にナデを施すものはなく，すべて内底から口縁まで，回転ナデによって調整されている。

以上のＳＸ09～11は，その検出標高，構造からみて，同一時に埋められたものと考えられる。それにもかかわらず，土師器の特徴に若干の差がみとめられる点は興味深い。



195　ＳＸ11（南より）

196　ＳＸ09・10・11（南より，右からＳＸ09・10・11の順）

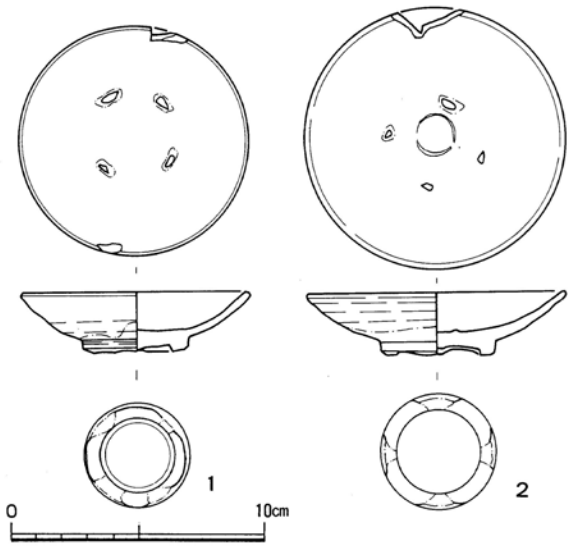
197　ＳＸ11出土遺物（１／３）

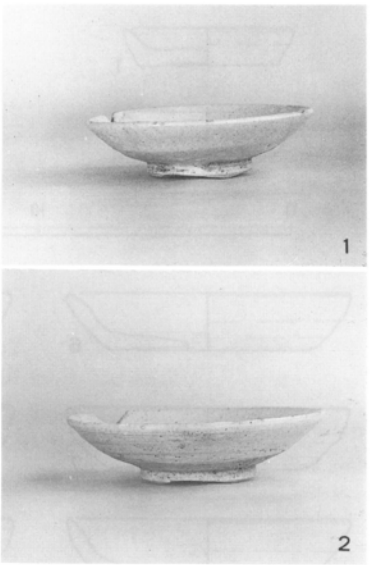
ＳＸ12

Ⅲ面Ｂ－03区において検出した。白磁皿２枚が，伏せた状態で重なって出土した。

１・２は**白磁**皿である。体部外面下位から底部は，露胎である。高台を４ケ所抉り込む。見込みに４ケ所，重ね焼きによる釉落ちがみられ，畳付には釉が付着する。

198　ＳＸ12（西北より）





199　ＳＸ12出土遺物（１／３）

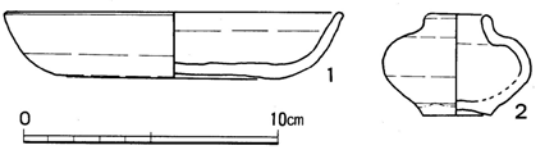
ＳＸ20

Ｖ面Ｂ－01区より検出した。直立した土師坏の横に，青磁小壺が伏せた状態で出土した。

１は，**土師器**の坏である。口径13.4cm，器高2.65cmをはかる。体部・内底はヨコナデ・外底は回転糸切りする。板状痕はみられない。

２は，**青磁**小壺である。体部下位から外底を露胎とする。露胎部分はテリがつき，茶色を呈す。釉は灰緑色でたっぷりとかかり，肩部に１ケ所鉄斑がみられる。

200　ＳＸ20（東より）



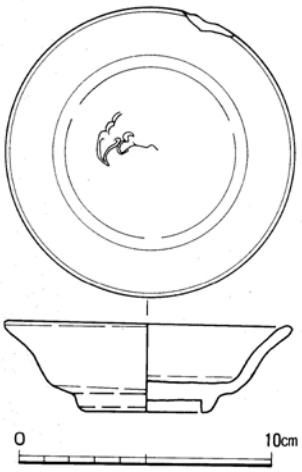
201　ＳＸ20出土遺物（１／３）

ＳＸ21

Ｖ面Ｂ－01区より検出した。ＳＸ20とは同一標高で，約１ｍ北にはなれている。青磁皿が１枚出土した。

青磁皿は，ほぼ完形品である。高台内面から外底部を露胎とする。

202　ＳＸ21（西より）



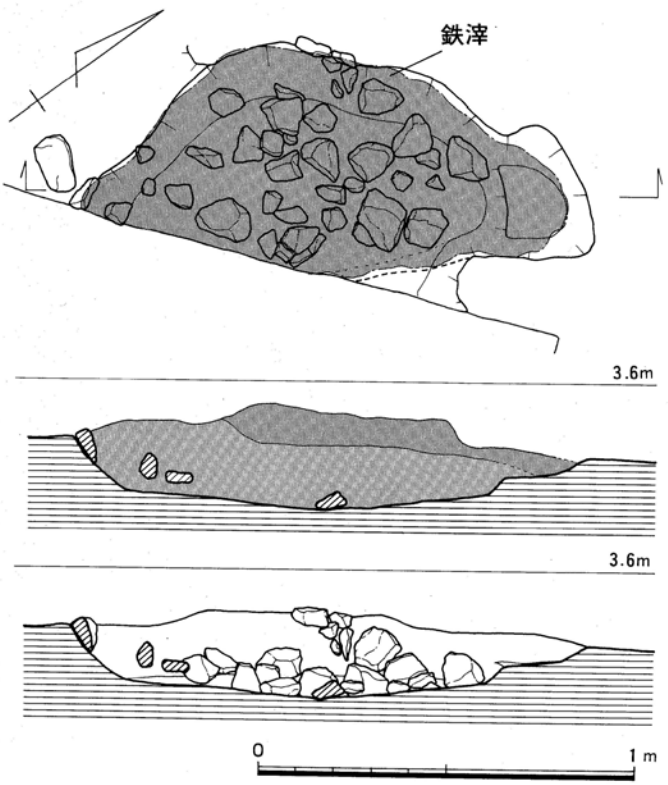
203　ＳＸ21出土遺物（１／３）

⑦　製鉄遺構

790号土壙

Ⅱ面下Ａ－03区で検出した土壙である。前述した55号配石遺構のすぐ南側にあたる。Ⅱ面では790号土壙を中心として，南北180cm，東西250cmの範囲で土が焼けて赤変していた。この焼土の範囲は，周囲を遺構に切られており，更に広がる可能性がある。ただし，790号土壙直上をピークとしてこれから離れるにつれて土の焼け具合はうすくなっており，上述の範囲を大きくこえることはなかろう。また，焼土からみて，790号土壙が本来Ⅱ面にともなった遺構であることは間違いない。

土壙は，南側を現代の地下



204　790号土壙実測図（１／20）

室の撹乱で破壊されている。確認できた範囲で，長軸138cm，推定短軸約65cm，深さ24cmをはかる。北東端は，2段掘状を呈す。

壙底には，まばらに礫をしく。土壙内には，すきまなくスラッグがつまっていた。スラッグは上下2層にわかれる。下層のスラッグは赤色でややもろい。上層のスラッグは暗赤色を呈し，非常にかたい。スラッグは土壙の北側約18cmのところにもひとかたまり散っている。

790号土壙からは遺物は全く出土していない。

790号土壙については，鉄製品の鋳造を行なった炉の一部と考えられる。

（P.247～265参照）

205 790号土壙

(1)検出状況（西より）

(2)検出状況（南より）

(3)土壙断面（南より）

(4)鉄滓除去状況（南より）

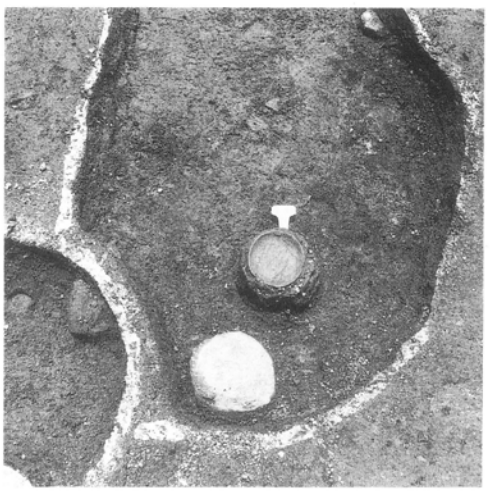
(4) 中世Ⅱ期の遺構

①土壙

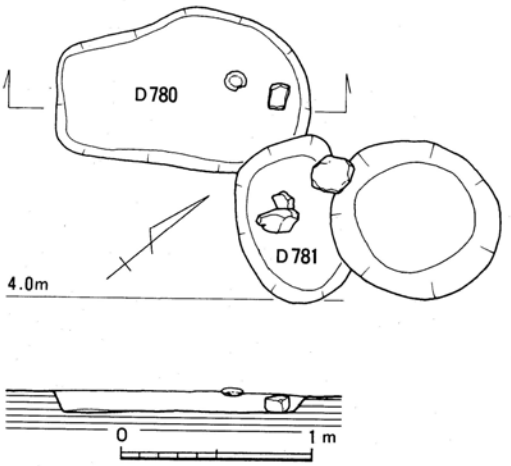
780号土壙

Ⅱ面C－04区で検出した土壙である。

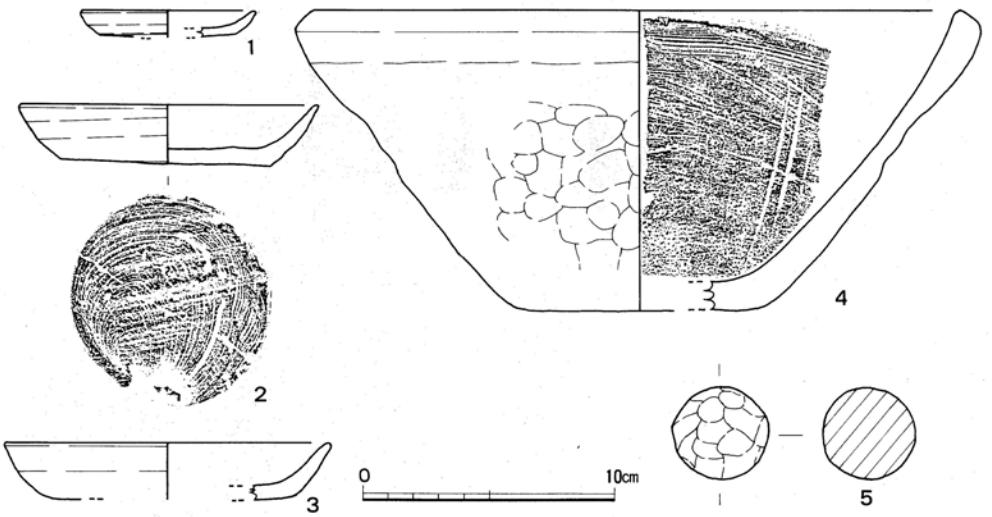
1～**3**は**土師器**である。**1**は皿で口径7.0cm，器高0.8cm，**2**・**3**は坏で口径12.0～13.0cm，器高2.3～2.4cmをはかる。**4**は**瓦質土器**のすり鉢，**5**は砂岩製の**毬球玉**である。



206 780号土壙遺物出土状況（東より）



207 780号土壙実測図（1／40）

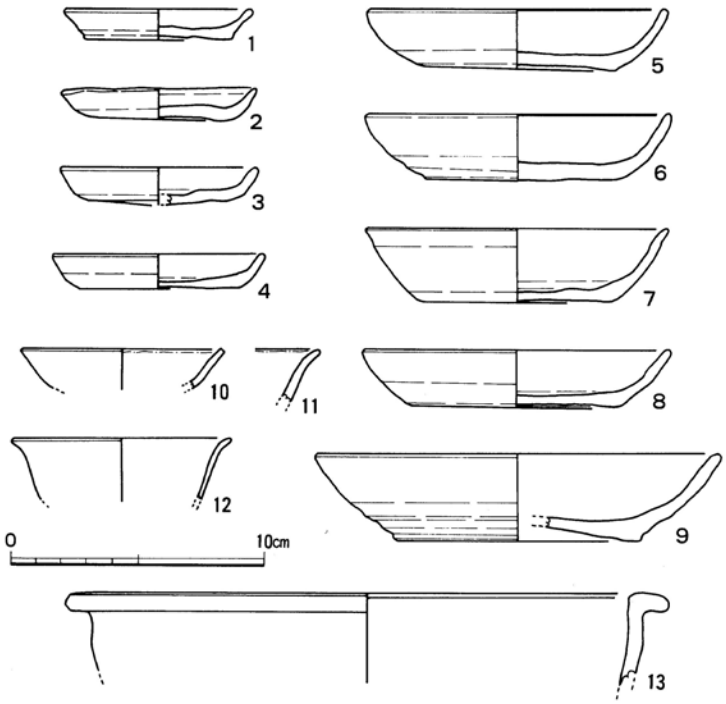


208 780号土壙出土遺物（1／3）

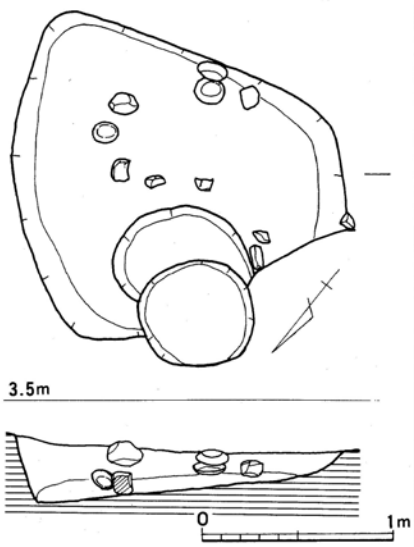
813号土壙

Ⅲ面C－02区において検出した土壙である。

1～**9**は，**土師器**である。**1**～**4**は皿で，口径7.6～8.6cm，器高1.25～1.55cmをはかる。**5**～**9**は坏である。**5**～**8**で口径12.0～12.3cm，器高2.3～2.95cm，**9**は口径16.2cm，器高3.5cmと大きい。**6**・**9**に板状痕が**9**だけに内底ナデがみとめられる。**10**～**12**は**白磁**である。**10**・**11**は口縁端部の釉をすべて拭き取って露胎とするいわゆる口ハゲの皿である。**13**は，**土師器**の土鍋である。口縁は直角に外方に折りまげる。体部外面には煤が付着している。



209 813号土壙出土遺物（1／3）



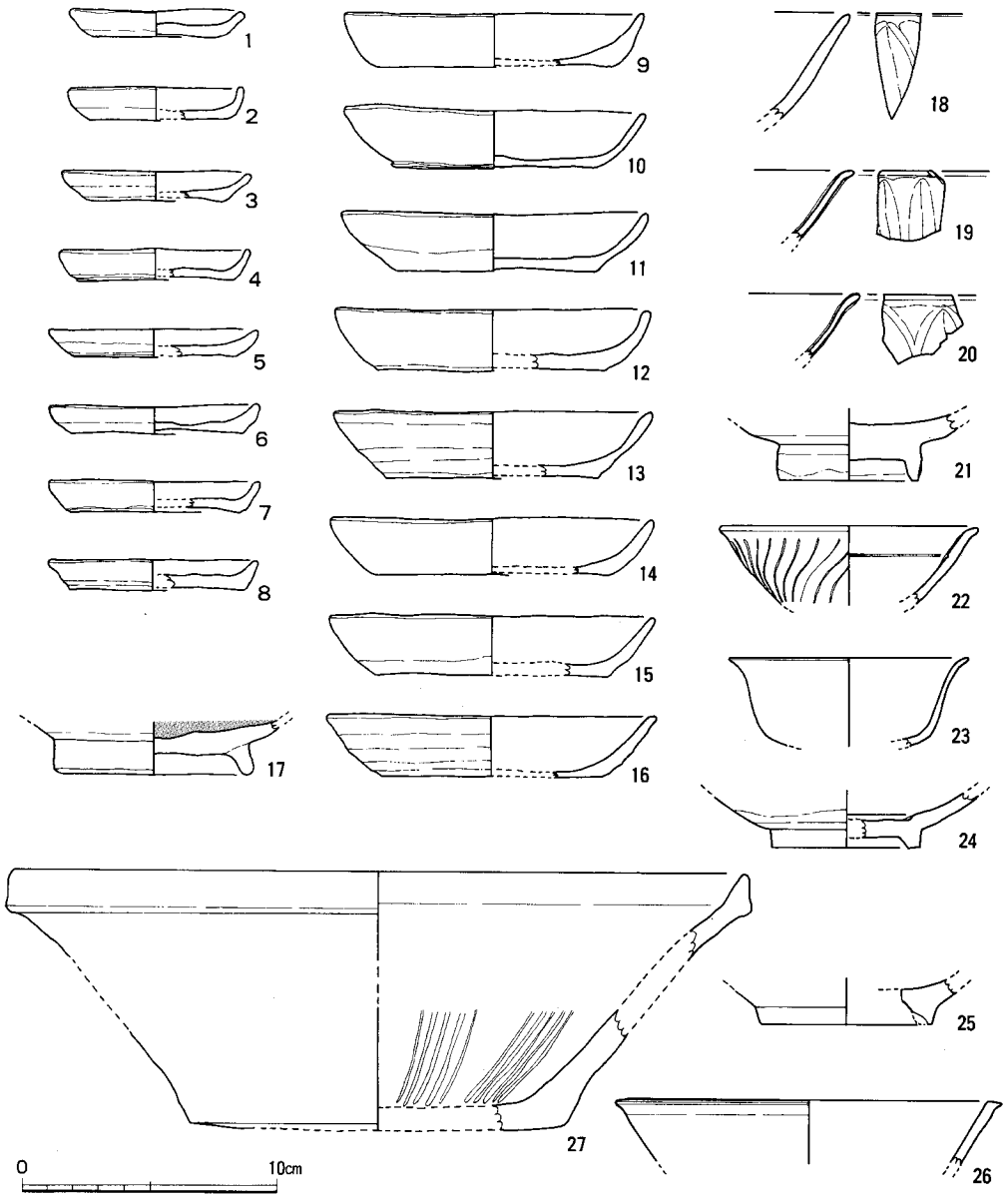
210 813号土壙実測図（1／40）

211 813号土壙遺物出土状況（北より）

842号土壙

Ⅳ面C－02区で検出した土壙である。112号井戸に切られる為，南半分ほどしか調査できなかった。土壙の深さは34.5cmをはかる。

1～16は，**土師器**である。**1～8**は皿で，口径7.0～8.4cm，器高1.05～1.3cmである。**9～16**は坏である。口径12.0～13.2cm，器高2.15～2.7cmをはかる。すべて回転糸切り底である。**17**は，



212 842号土壙出土遺物（1／3）

内黒土器の椀である。内面は密にヘラミガキを施し，炭素を吸着して漆黒色を呈する。**18**～**21**は，**青磁**の碗である。**18**～**20**は，鎬蓮弁文をあしらうもので，**19**の蓮弁は幅がせまく，弁の頭部がやや丸味を持っている。**22**～**26**は，**白磁**である。**22**・**23**は小碗の口縁部，**24**・**25**は碗の底部である。**27**は，**瓦質土器**のすり鉢である。口縁部下端は，下に垂れて肥厚し断面山形を呈する。内面には，５本を単位としたすり目が刻まれている。

845号土壙

Ⅵ面Ｃ－02区で検出した土壙である。長軸252cm，幅76cmをはかり，溝状を呈する。深さは，16.0cmをはかる。

１～**10**は**土師器**である。**１**～**９**は皿で，器高の高い皿と低い皿の２種がみとめられる。**１**・**５**は口径7.0～8.2cm，器高1.5～1.6cmで，前者に属する。後者は**２**～**４**・**６**～**９**で口径7.2～9.2cm，器高0.9～1.2cmをはかる。切り離しは，すべて回転糸切りによる。**６**には板状痕と内底ナデがみられる。**10**は坏である。口径14.0cm，器高2.6cmをはかる。

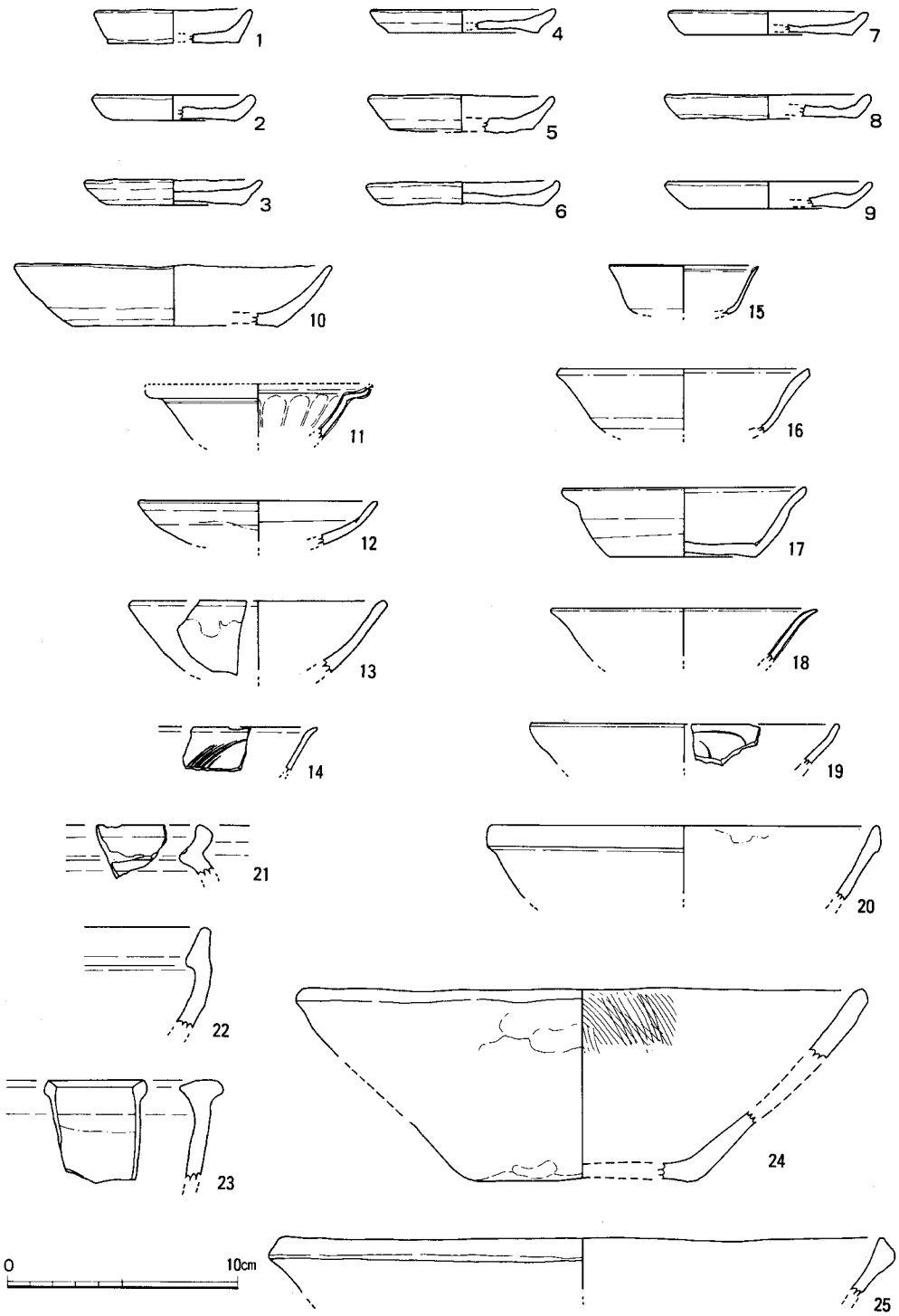
11・**13**・**14**は**青磁**である。**11**は小鉢である。口縁部下に沈線が１条めぐる。**14**の内面には，櫛描文が施される。

12・**15**～**20**は**白磁**である。**15**は，小鉢である。胎土は白色で精良，釉は乳白色透明で光沢がある。器壁はうすい。全体的に質の良い精良品である。**16**～**18**は，口唇部の釉をかきとる口ハゲの皿である。**17**は，底部まで施釉されている。**19**・**20**は碗である。**20**は口縁を玉縁に作る。**22**・**23**は**陶器**である。**22**は無釉陶器の鉢である。**23**は黄釉陶器の盤である。体部内面下半に施釉している。口唇部には，部分的に目砂が付着している。

24は，**瓦質土器**のこね鉢である。内面はあらい刷毛目を縦に施す。

25は，**須恵質土器**の鉢である。内・外面にヨコナデを施す。

213　845号土壙出土遺物１

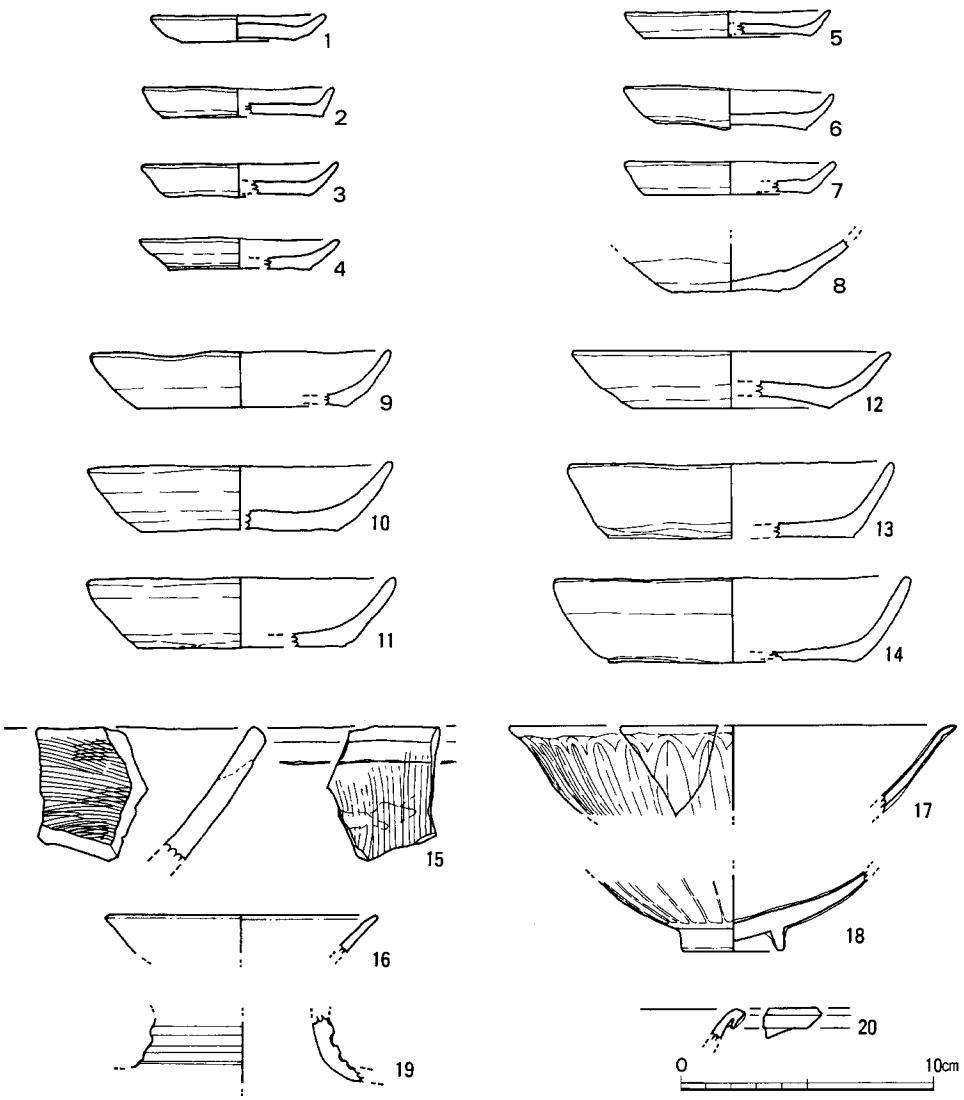


214 845号土壙出土遺物２（１／３）

846号土壙

Ⅳ面B－04区において検出した不整方形の土壙である。南西辺200cm，南東辺170cm，北東辺160cm，北西辺140cm，深さ22cmをはかる。

1～**14**は，**土師器**である。**1**～**7**は皿で，口径7.0～8.4cm，器高1.0～1.6cmをはかる。**1**・**2**・**5**・**6**の内底部には，ナデがみとめられる。**8**～**14**は坏である。**9**～**14**は，口径12.0～14.2cm，器高2.2～3.3cmをはかる。**13**の内底部には，ナデがみられる。**8**は底部のみの破片であるが，小さくすぼまった底部から，大きく開く体部を持つ。他の坏と比べ，白っぽい色調，



215 846号土壙出土遺物（1／3）

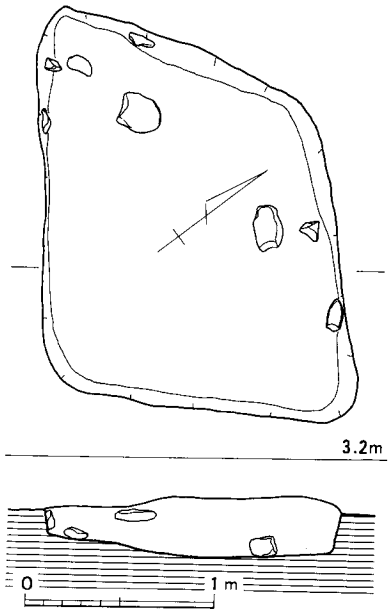
体部の特徴など，明らかに異なる。搬入土器の可能性も考えられる。

15は，瓦質土器の鉢である。内面はあらいヨコハケ，外面にはあらいタテハケが施される。小片のため，スリ目の有無は確認できない。

16は**白磁**である。口ハゲの皿である。

17・18は，**青磁**である。鎬蓮弁文の碗で，**17**は比較的細目の蓮弁が，片切彫で彫られている。**18**は，全面に施釉した後，高台畳付の釉をかき取って，露胎としている。

19・20は，**青白磁**の壺である。**19**は頸部片で，4条の凹線が平行してまわっている。**20**は口縁部である。端部は，小さく，鋭く折り返す。

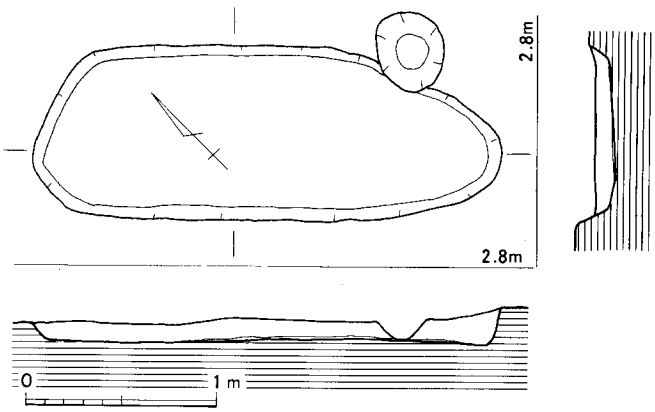


216 846号土壙実測図（1／40）

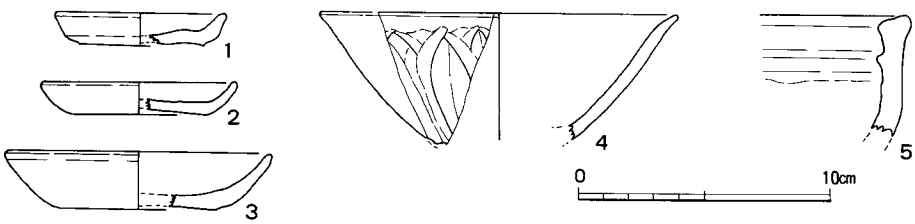
859号土壙

Ⅴ面B－01区で検出した。長楕円形の土壙である。長軸212cm，短軸96cm，深さ22cmをはかる。

1～3は，**土師器**である。**1・2**は皿で，口径6.9～7.9cm，器高1.3cmをはかる。**3**は坏である。口径10.65cm，器高2.2cmをはかる。**4**は**青磁**の碗である。片切彫で，鎬蓮弁文を施す。**5**は**無釉陶器**の鉢である。



217 859号土壙実測図（1／40）

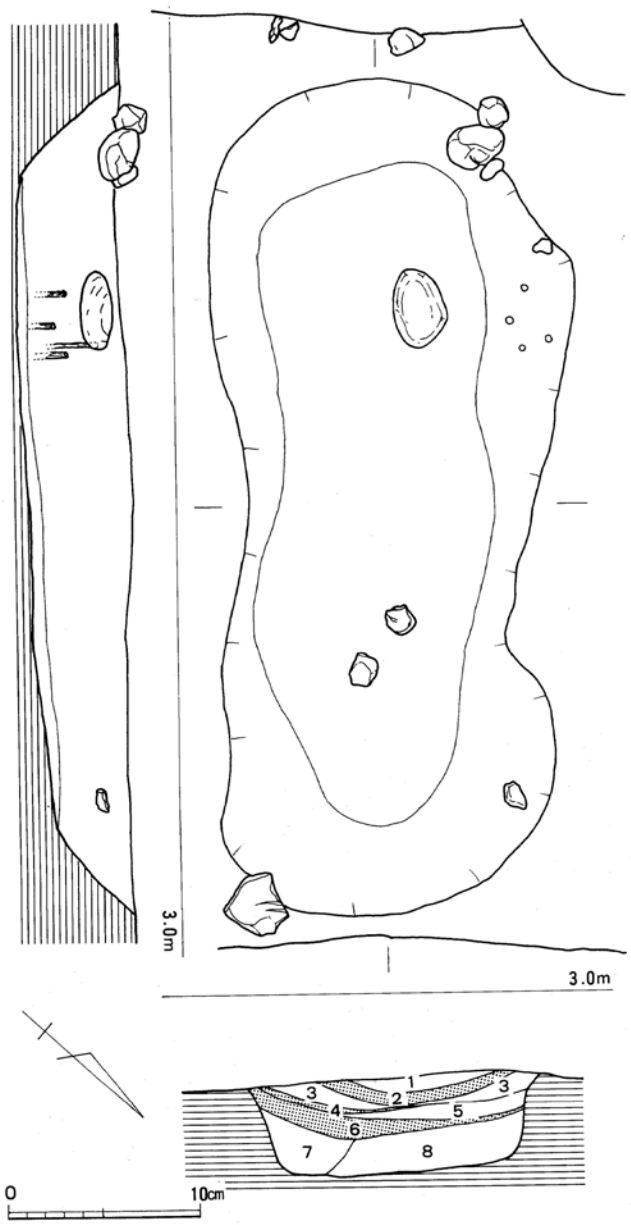


218 859号土壙出土遺物（1／3）

860号土壙

V面B－03区で検出した，不整長方形の土壙である。長軸448cm，短軸196cm，深さ52cmをはかる。埋土は，粘質土・砂・腐植土が交互に堆積している。Fig.219土層実測図では，第1層－暗灰色砂混り土，第2層－暗茶色有機質粘土，腐植土，第3層－暗灰色砂混り土，第4層－暗茶色有機質粘土，腐植土，第5層－黄灰色砂，第6層－暗茶色砂混り有機質土，腐植土，第7層－黄白色砂，鉄分含み黄変，第8層－暗灰色砂混り粘土となる。第6層以上は水成堆積層で，全体に層理状の堆積を示す。水がたまりやすい状況にあり，しかも時間をかけて序々に埋まっていったものと考えられ，おそらく露天に掘られ，そのまま放置されていたと思われる。

土壙壁沿いの一部に木杭が数本みられるが，860号土壙に木壁などの施設を伴った痕跡はみられない。



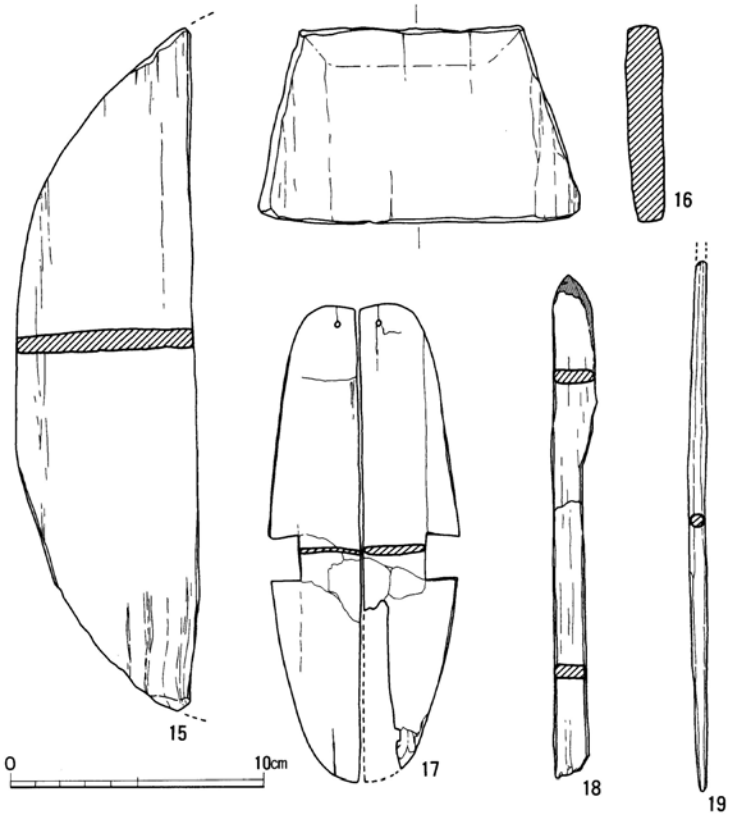
219 860号土壙実測図（1／40）

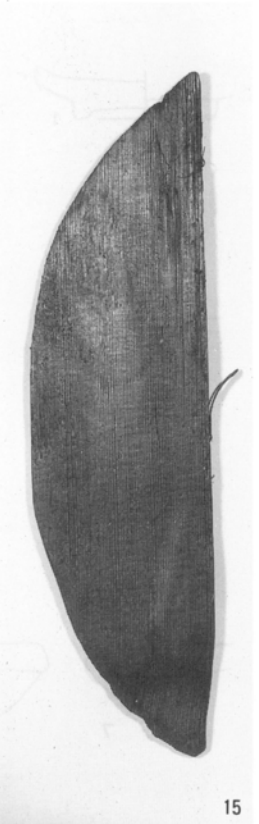
220 860号土壙（東より）

221　860号土壙出土遺物１（１／３）

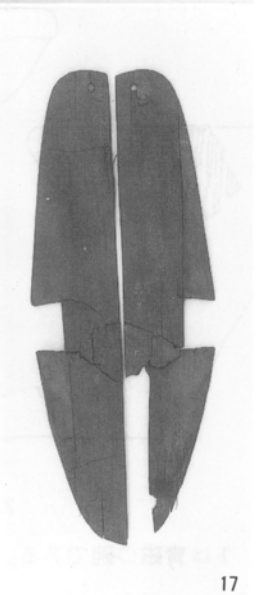
▶ 222　860号土壙出土青磁碗墨書

1は**青磁**の碗である。体部下位に蓮弁文の下端がみられる。外底部に「土」と墨書されている。**2**は**白磁**の皿である。体部内面には白堆線がみえ，内面は白堆線で５分割されていたと考えられる。外底部には花押





223　860号土壙出土遺物２（１／３）



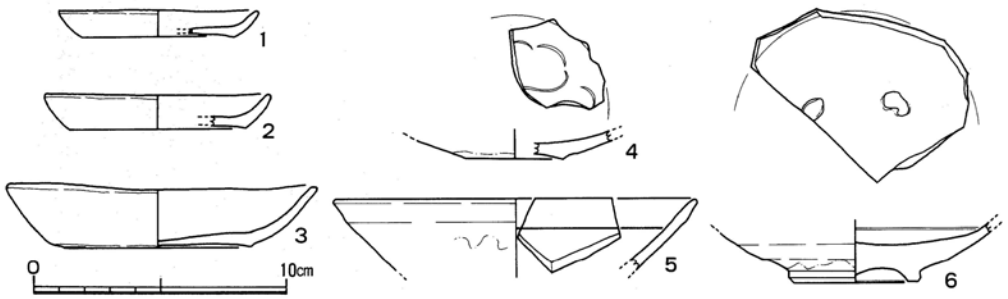
が墨書されている。**３・４・８**は**陶器**である。**３**は壺である。**４**は黒褐釉の茶入で，胎土はきわめて精良である。**８**は盤である。**５**は**土師器**の鉢である。**６・７**は**東播系須恵質土器**の鉢である。**９～14**は**瓦質土器**の鉢である。**９**の口縁は「く」の字形に大きく屈曲して外方に開く。**10～14**は，すり鉢である。

15～19は**木器**である。**15**は曲物の底板である。**16**は，下駄の歯である。歯の先は，使用による磨滅がみられる。また台側は，台形に圧痕がつく。**17**は板草履である。傷みがはげしい。**18**は，ヘラ状木製品である。剣形につくった先端部は，表面が焦げて炭化している。**19**は，箸である。手元側の端を欠損している。

861号土壙

Ⅴ面C－02区で検出した土壙である。104号井戸，112号井戸に切られ，一部しか検出できなかった。

1～3は**土師器**である。**1・2**は皿で，口径8.1～9.05cm，器高1.0～1.35cmをはかる。**3**は坏である。口径12.3cm，器高2.3cm。皿・坏とも回転糸切りする。**4～6**は**白磁**である。**4**は皿で，見込みに片切彫で花文(?)を描く。**5・6**は碗である。**6**は見込みと畳付に目痕を残す。李朝の白磁であろう。

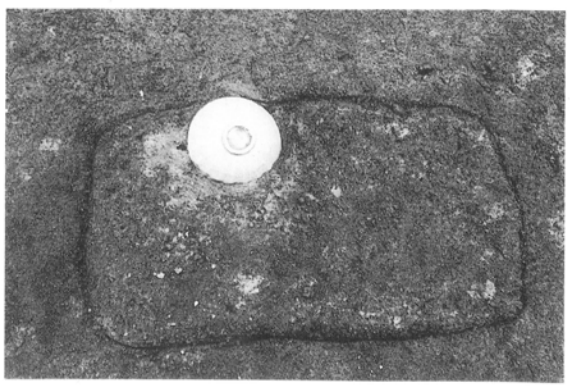


224 861号土壙出土遺物（1／3）

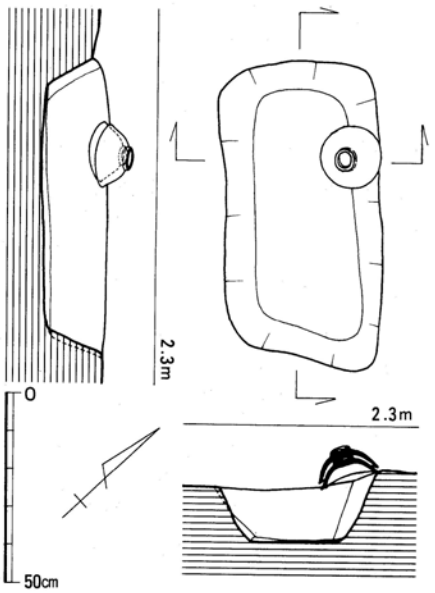
862号土壙

Ⅵ面B－03区より検出した長方形の土壙である。長辺81cm，短辺43cm，深さ30cmをはかる。青磁碗2個が伏せて重なった状態で出土した。おそらく，土壙の壁にそって置かれたものであろう。土壙の形状，副葬品と思われる青磁碗の出土状況から，木棺墓と考えられる。ただし，木質及び鉄釘の顕著な出土はなく，土壙墓の可能性も残っている。

1・2は，埋土からの出土である。**1**は**土師器**

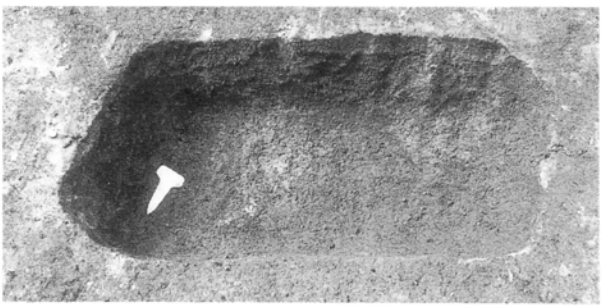


225 862号土壙検出状況（西より）

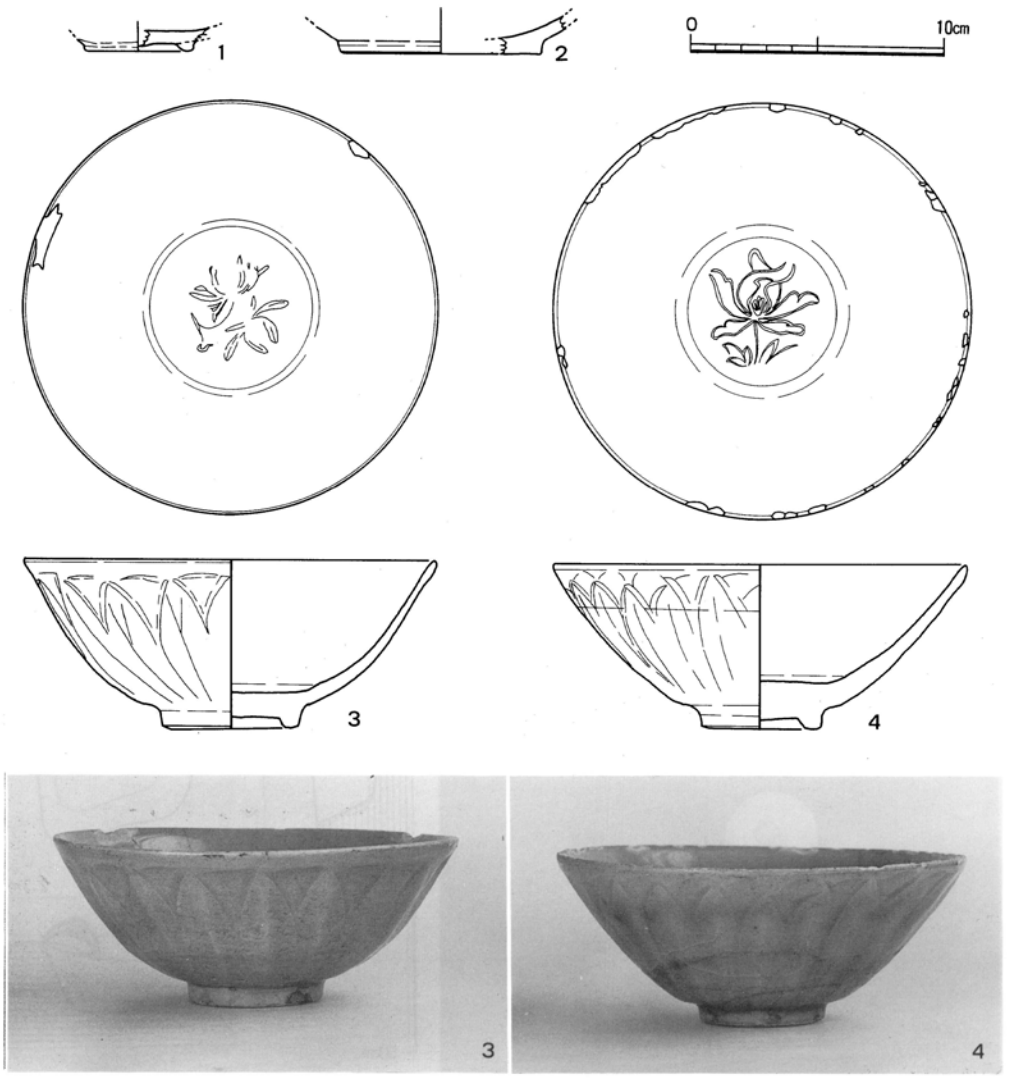


226 862号土壙実測図（1／20）

で早島式土器の椀である。**2**は**緑釉陶器**である。土師質軟胎に濃緑色の釉をかける。内面・体部外面はヘラミガキ，畳付はケズリとする。**3**・**4**は**青磁**碗である。体部外面には，片切彫りで鎬蓮弁文を描く。見込み中心には，印花文を押す。畳付から内側は，露胎となる。



227 862号土壙完掘状況（東より）



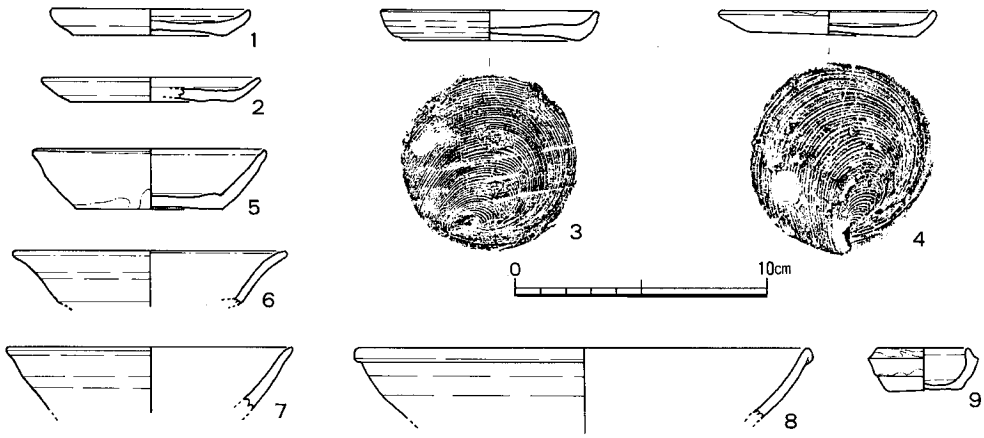
228 862号土壙出土遺物（1／3）

869号土壙

Ⅵ面B－03区で検出した不整形土壙である。長軸148cm，深さ約40cmをはかる。

出土遺物は，土師皿・白磁・青磁等である。

1～**4**は**土師器**の皿である。口径7.9～9.1cm，器高1.0～1.25cmをはかる。すべて回転糸切りするが，**3**・**4**は逆糸切りとなる。**3**は板状痕と内底ナデを，**4**は内底ナデを施す。器形的には，すべて浅い皿形で，差異はない。**5**～**9**は**白磁**である。**5**・**6**は，口縁部の釉をふきとる，口ハゲの皿である。**7**は小碗である。**8**は，口縁を折り返して，小さく丸い玉縁につくる。**9**は，合子の身である。蓋受けと体部下半を露胎とする。



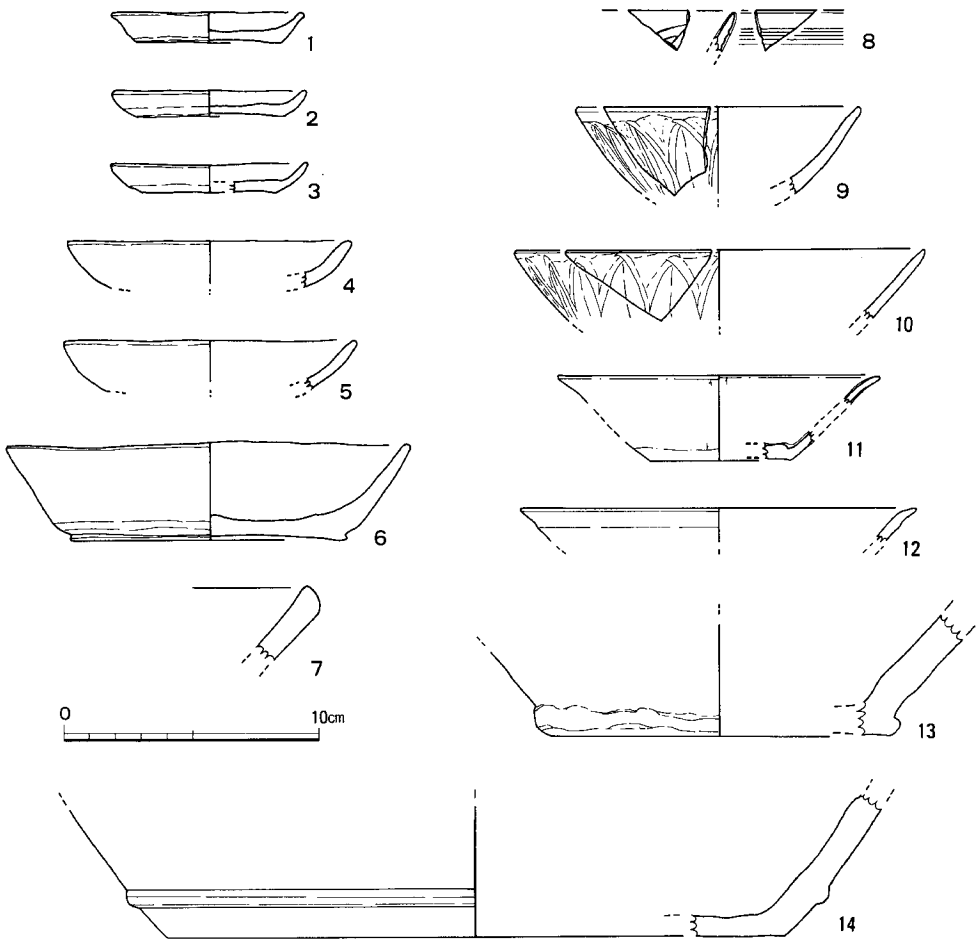
229 869号土壙出土遺物（1／3）

887号土壙

Ⅳ面B－03区で検出した土壙である。径約215cmの不整円形を呈する。深さは約17cmをはかる。

土師器，須恵質土器，瓦質土器，白磁，青磁などが出土している。

1～**6**は**土師器**である。**1**～**3**は皿で，口径7.6～7.95cm，器高1.0～1.2cmをはかる。**4**～**6**は坏である。小形のものと大形のものとにわかれる。**4**・**5**は前者で，口径11.2～11.6cm，器高は底部が残らないので不明だが2cm強であろう。**6**は後者で，口径16.0cm，器高3.7cmをはかる。**7**・**14**は**瓦質土器**である。**7**は鉢で，すり目の有無は，小片のために不明。**14**は火舎である。**8**～**10**は**青磁**の碗である。**9**・**10**は，体部外面に片切彫で鎬蓮弁文を描く。**11**・**12**は**白磁**である。**11**は，口縁端部を露胎とする口ハゲの皿である。**12**は碗である。**13**は**無釉陶器**である。甕の底部であろう。



230 887号土壙出土遺物（1／3）

899号土壙

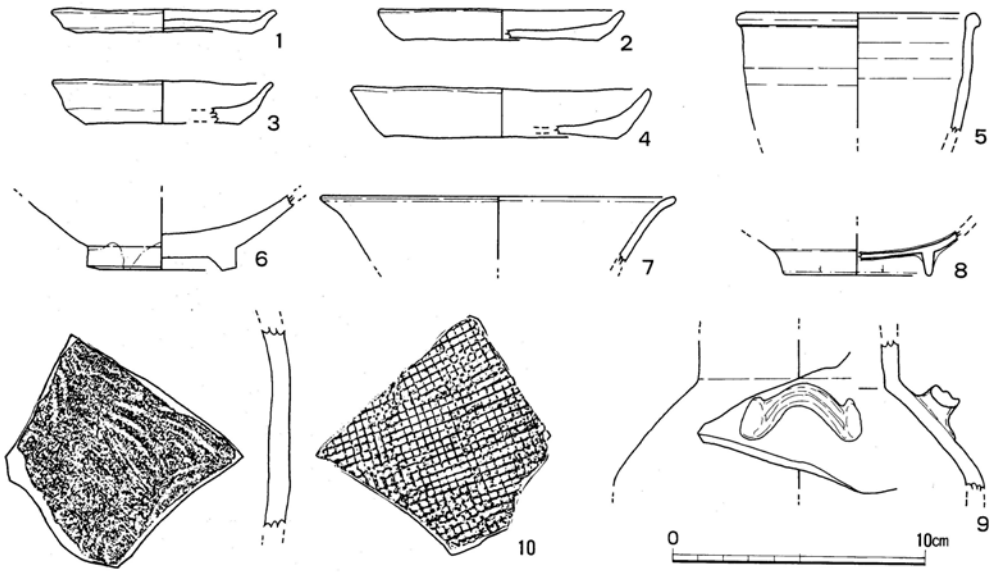
V面C－01・02区にまたがって検出した土壙である。長軸125cm，短軸115cmの楕円形を呈し，深さ25cmをはかる。

1～**5**は**土師器**である。**1**～**3**は皿である。**1**・**2**は浅皿形で，口径9.0～9.8cm，器高0.9～1.25cmをはかる。**3**は坏を小形にした形態をとり，口径8.8cm，器高1.7cmである。**4**は坏である。口径12.0cm，器高2.0cmをはかる。**5**は，小鉢である。器壁は，内外面ともヨコナデ調整を施す。

6・**7**は**白磁**である。**7**は口縁部の釉をかき取る，いわゆる口ハゲの皿である。

8・**9**は**青磁**である。**8**は，小鉢の底部であろう。畳付のみ露胎となる。**9**は耳壺である。

10は**須恵器**の甕の胴部片である。外面は格子目叩き，内面は同心円叩き痕をナデで消そうと



231 899号土壙出土遺物（1／3）

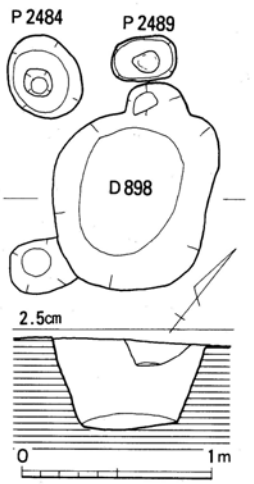
している。

898号土壙・913号土壙

898号土壙はⅤ面C－01区より，913号土壙はⅤ面B－03区より検出した土壙である。913号土壙は898号土壙の2.5mほど北西に位置するが，両土壙から出土した遺物には，接合できる資料が多いことから，一緒に述べることにする。

898号土壙は，長径96cm，短径88cmをはかる不整円形の土壙である。深さは50cmをはかる。遺物は，土壙の中位から壙底にかけて，土壙壁にそって出土している。

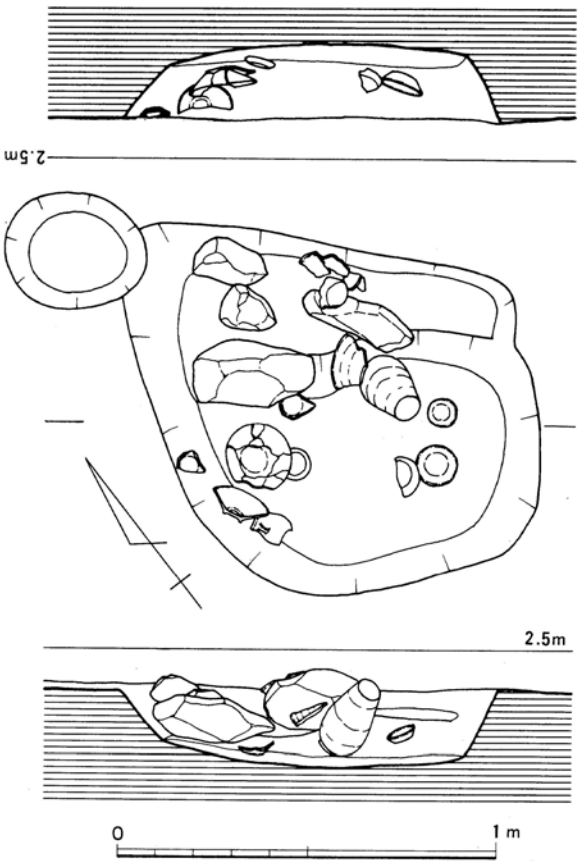
232 898号土壙遺物包含状況（南より）



233 898号土壙実測図

913号土壙は，不整方形の土壙である。北辺160cm，西辺80cm，南辺70cm，東辺116cmをはかる。深さは22cmである。遺物は，土壙床面から埋土中位にかけて出土している。褐釉壺が斜めに倒立している状況も含めて，土壙を埋める過程で遺物が入ったものと考えられる。遺物は，当初より破損していたもの，埋った後割れたとみられるもの，完形品の3種がある。完形品といっても，褐釉壺の様に，斜めに倒立して出土したものもあり，意図的に埋納されたものとは思われない。おそらく，完形品，破損品をとわず，不要になったものを廃棄したと考えられる。

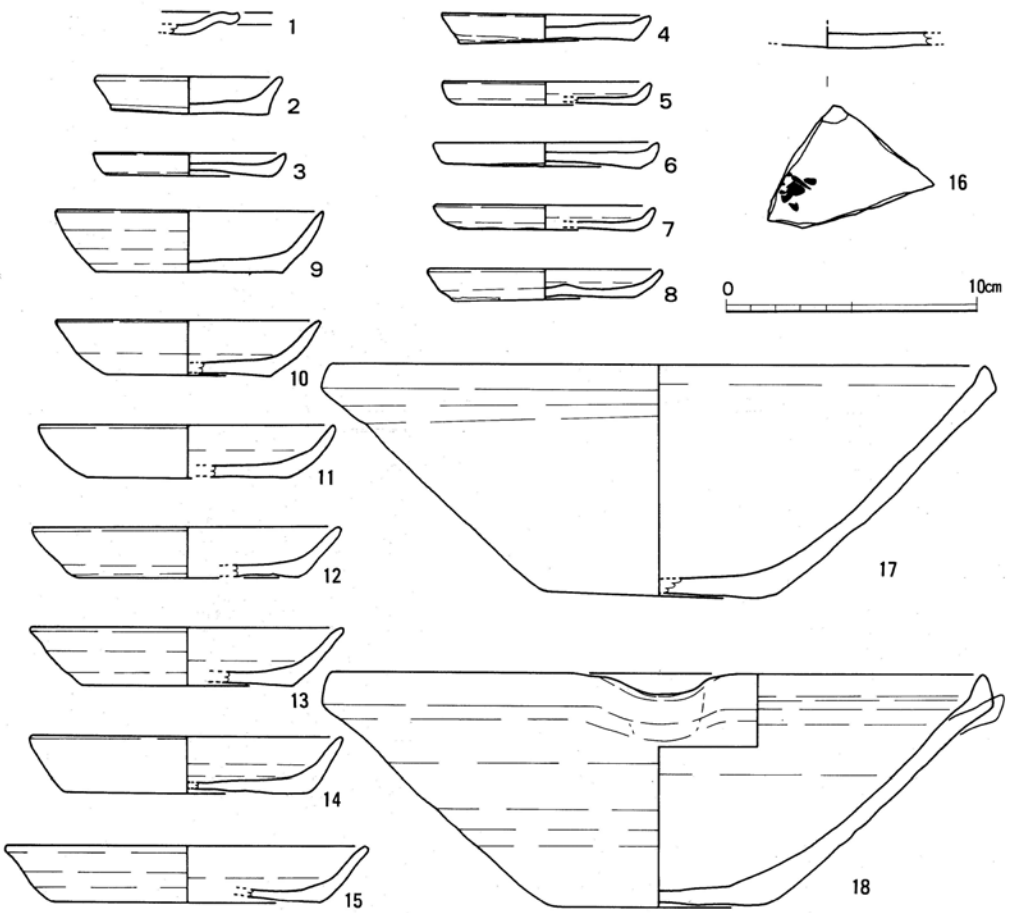
出土遺物についても，898号土壙・913号土壙ともに一緒に説明することにする。



234 913号土壙実測図（1／20）

1～16は**土師器**である。**1**は「て」の字状口縁皿である。898号土壙出土。**2～8**は，皿である。比較的器高の高いものと，浅いものとに分れる。**2**は前者である。口径7.6cm，器高1.5cmをはかる。底部は回転糸切りで，外底に板状痕，内底にナデを施す。**3～8**は，浅い皿形を呈する。口径7.7～9.4cm，器高0.9～1.3cmをはかる。**4**を除

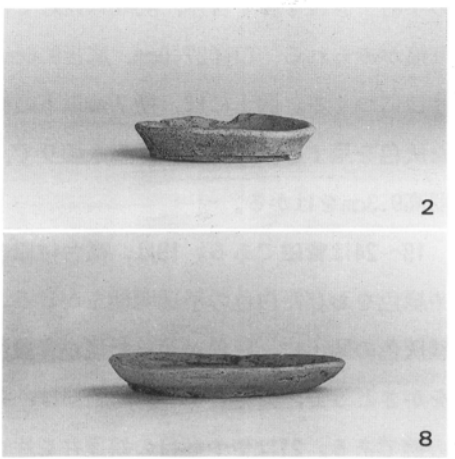
235 913号土壙（東より）



236 898号土壙・913号土壙出土遺物１（１／３）

いて，すべてに板状痕と内底ナデがみとめられる。**2**～**6**は，898号土壙出土資料である。**9**～**15**は坏である。口径10.6～14.6cm，器高2.0～2.3cmをはかる。**9**・**10**・**12**～**14**に板状痕，内底ナデが，**11**・**15**に内底ナデがみとめられる。**9**～**13**・**15**は，898号土壙出土である。**16**は坏の底部である。外底はヘラ切りする。外底の一部に墨書が残っている。文字は「□京」と読める。字体・字義ともに不明である。898号土壙より出土した。

17・**18**は，**東播系須恵質土器**の鉢である。ともに，898号土壙出土片と913号土壙出土片とで接合



237 898号土壙・913号土壙出土遺物２

238 898号土壙・913号土壙出土遺物３（約１／３）

関係にある。**17**は，口縁部の一部を欠くため，片口になる可能性もある。胎土は，径５㎜以下の小石・砂粒を多く含み，焼成は良好で褐色をおびた暗灰色を呈する。外底部には，回転糸切り痕がみられる。口径27.0cm，底径9.6cm，器高9.3cm。**18**は，口縁の一部を外方につまみ出して，片口につくる。胎土には，径７㎜以下の砂粒・礫を多く包む。焼成は良好で，やや褐色をおびた灰色を呈する。外底部は回転糸切りで，板状痕もみとめられる。口径26.8cm，底径８.８cm，器高9.3cmをはかる。

19～**24**は**青磁**である。**19**は，高台付皿の体部である。茶色の比較的生目の細かい胎土に，やや緑色をおびた白色の不透明釉をかける。**20**は，小鉢である。見込みに，双魚文を貼付ける。淡灰色の胎土に，灰色かかった淡い青緑色の半透明釉をかける。全面施釉した後に，畳付の釉をかきとって，露胎とする。露胎部は，茶色を呈する。898号土壙出土。**21**～**24**は，鎬蓮弁文の碗である。**21**はやや細目の鎬蓮弁を片切彫りするものである。細く小さ目の高台から丸味を持った体部へとつづく。灰白色の胎土に，淡灰緑色の半透明釉をかける。施釉は全面になされ

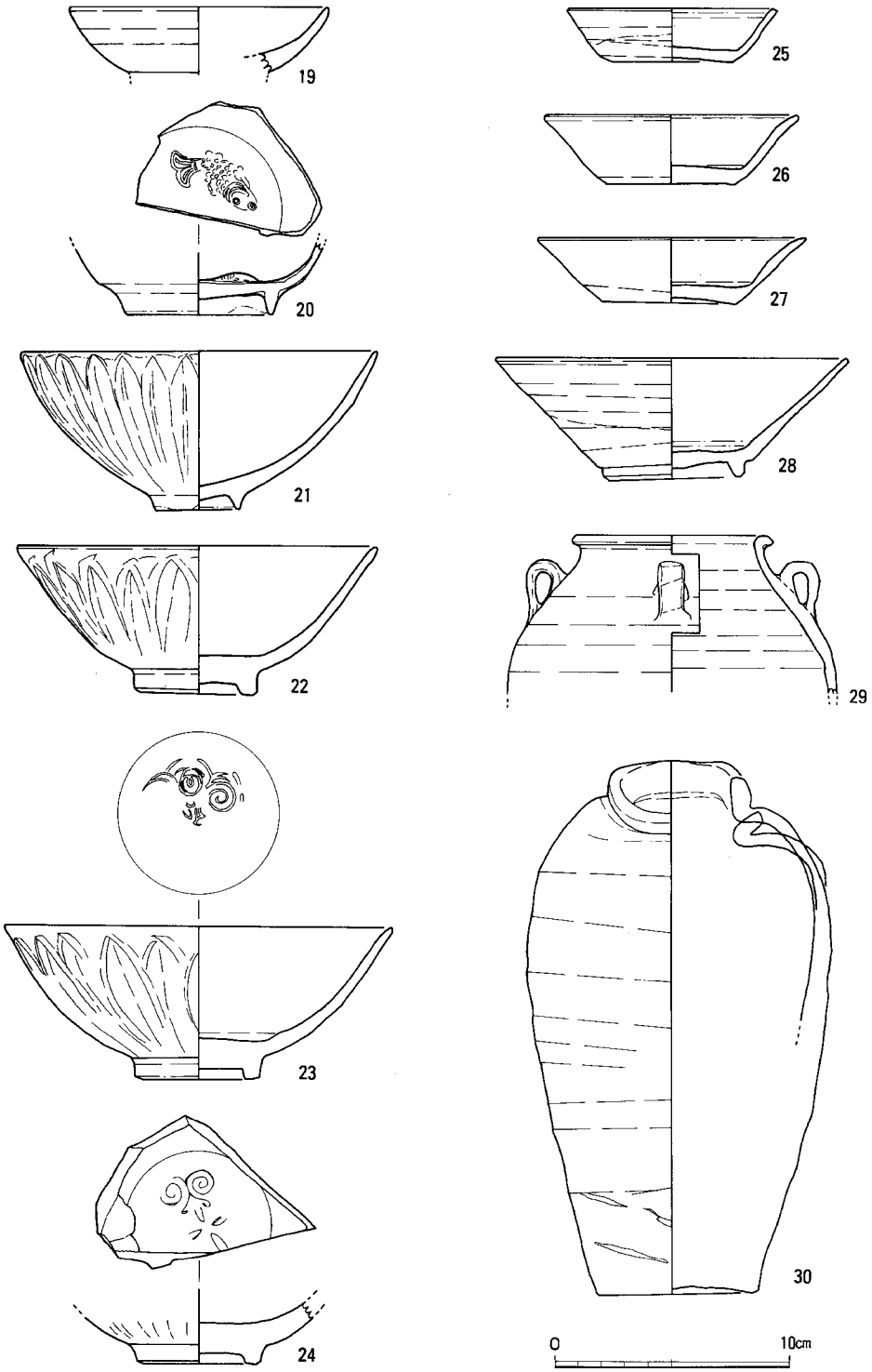
るが，高台畳付は釉をかきとって露胎とする。露胎部は，茶色を呈する。898号土壙出土。**22**は，幅広く厚い高台をつくる。体部は，その下半で横に張った後，やや内湾気味に直行する。鎬蓮弁文は，幅広く彫られている。淡灰色の胎土に，明緑灰色の半透明釉を施す。高台畳付から外底部は，露胎となる。898号土壙より出土した。**23**は，**22**と同様の形態を示す。見込みに印花文を押す。胎土は淡灰色で，緑灰色の釉をかける。釉表面には，粗い氷裂がみとめられる。高台畳付から内側は露胎となる。913号土壙より出土した。**24**は，底部片である。見込みに印花文を押す。淡灰色の胎土に，青味を帯びた淡緑灰色の半透明釉をかける。畳付から内側は露胎となる。913号土壙出土。

25〜**29**は白磁である。**25**〜**27**は口ハゲの皿である。**25**は，体部下半から底部を露胎とする。いずれも，913号土壙より出土している。**28**は，碗である。平坦で広い底部から，直線的に開く体部を持つ。胎土は淡灰色で生目が細かい。釉は，明灰色の透明釉で，光沢が強い。体部外面の上半から内面に施釉し，見込みは輪状に釉をかき取っている。913号土壙より出土。**29**は，壺である。肩部に耳がつくが，ひとつしか遺存していないので，全体で何個つくかは不明。淡灰色のきめ細かい胎土に，若干青味をおびた淡灰色の透明釉をかける。913号土壙出土。

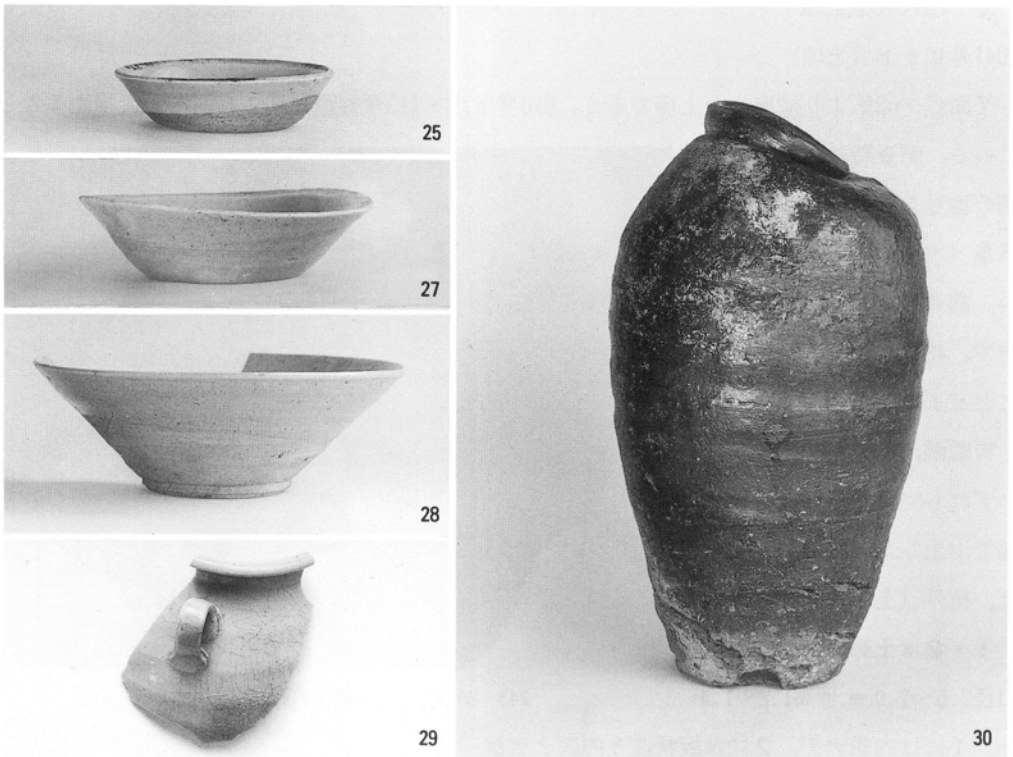
30は**褐釉陶器**の壺である。口縁の一部が大きく内側にひずんでいる。913号土壙より出土。

31は**平瓦**である。瓦上面には，全面に布目を残す。下面は，ヘラで縦に削った後，その両端に横方向のナデを施す。898号土壙より出土している。

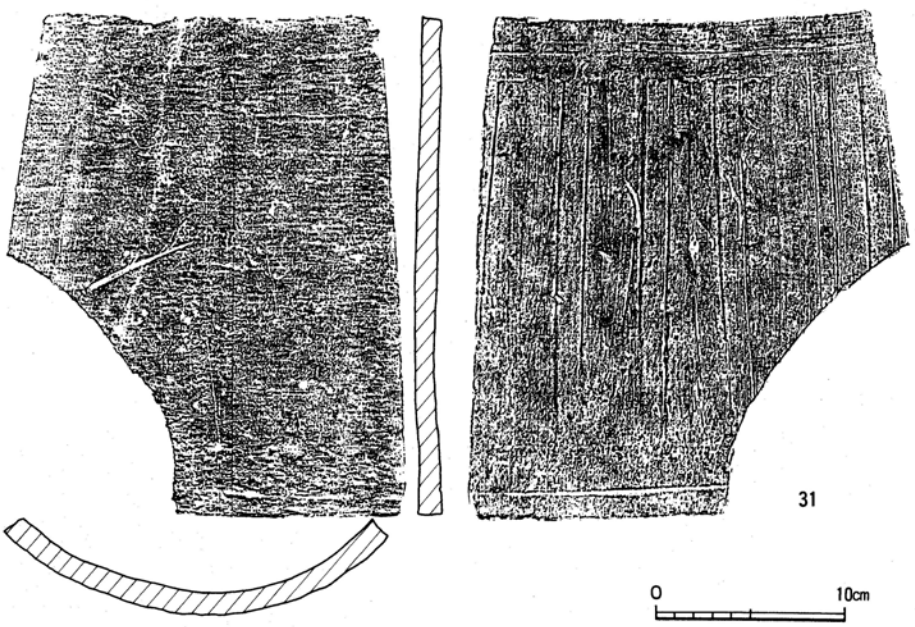
239　898号土壙・913号土壙出土遺物４（約１／３）



240 898号土壙・913号土壙出土遺物５（１／３）



241　898号土壙・913号土壙出土遺物６（約１／３）

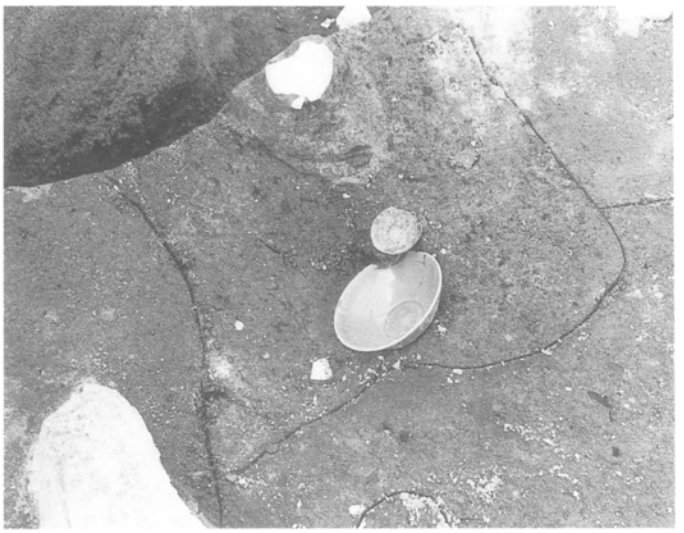


242　898号土壙・913号土壙出土遺物７（１／４）

② 柱穴状小土壙

2041号ピット（土壙）

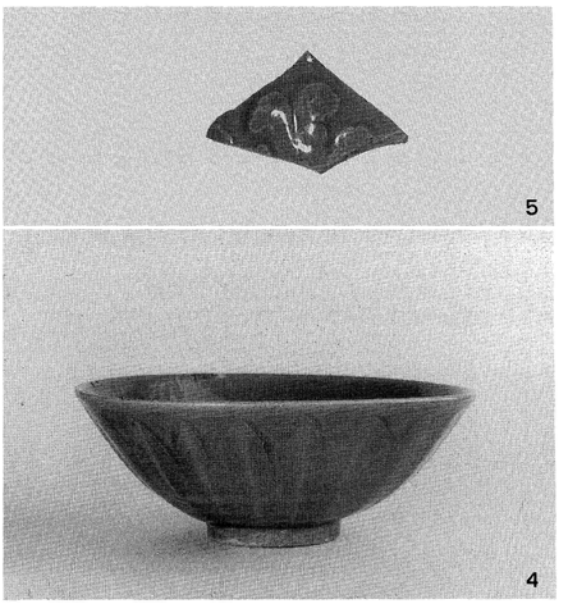
Ⅴ面C－02区より検出した土壙である。910号土壙・112号井戸に切られ，その大半を失なっている。調査時に誤って小土壙の番号を付しているが，土壙墓（木棺墓）の可能性が高い。調査したのは，土壙の一角で，48cm×48cm，深さ12cmにとどまる。

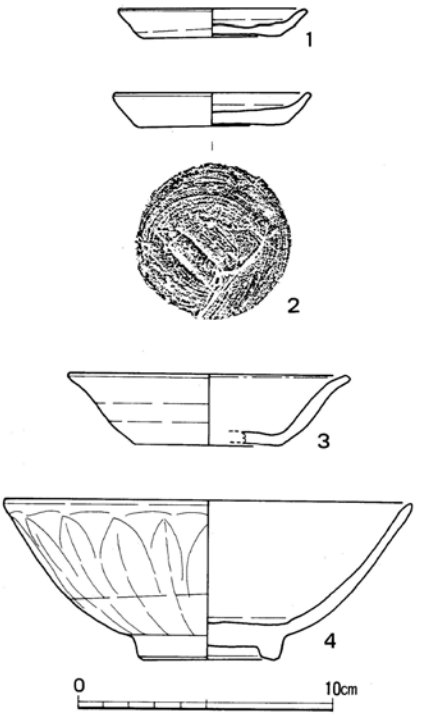


243 2041号ピット検出状況（南より）

青磁碗，白磁皿，土師皿がいずれも完形かそれに近い状態で出土した。副葬品とすれば，棺外（上？）副葬である。

1・2は**土師器**の皿である。口径7.5～7.9cm,器高1.2～1.4cm。**1**には内底ナデ，**2**には板状痕と内底ナデがみられる。**3**は**白磁**の口ハゲ皿である。**4・5**は**青磁**である。**4**は鎬蓮弁文の碗である。**5**は壺の



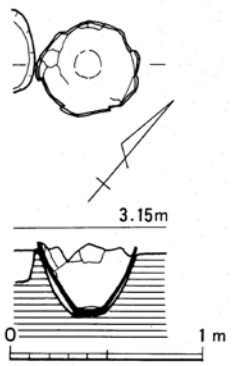


244 2041号ピット出土遺物（1／3）

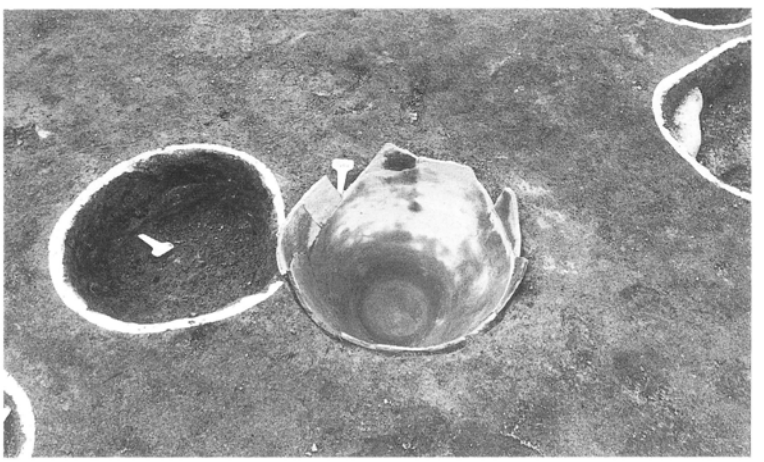
胴部片である。貼花文を施す。

2366号ピット

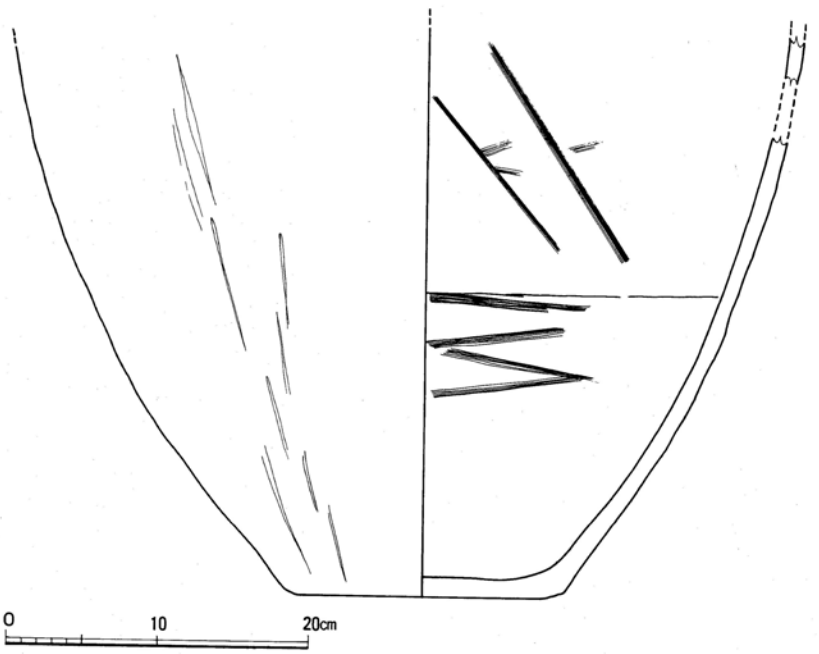
Ⅳ面C－01区より検出した埋甕遺構である。甕の大きさぎりぎりの土壙を掘って甕を裾えたもので，甕が胴部下半しか残っていない点から，本来はもう少し深かったものと思われる。検出しえた土壙の大きさは，径52cm，深さ36cmにとどまる。甕の上半部，口縁等の破片は，甕の下半部内からは全く出土しなかった。このことは，甕がその上半部分を失なった時には，すでに甕の内側は土がつまっていたことを示す。



245 2366号ピット



246 2366号ピット（南より）



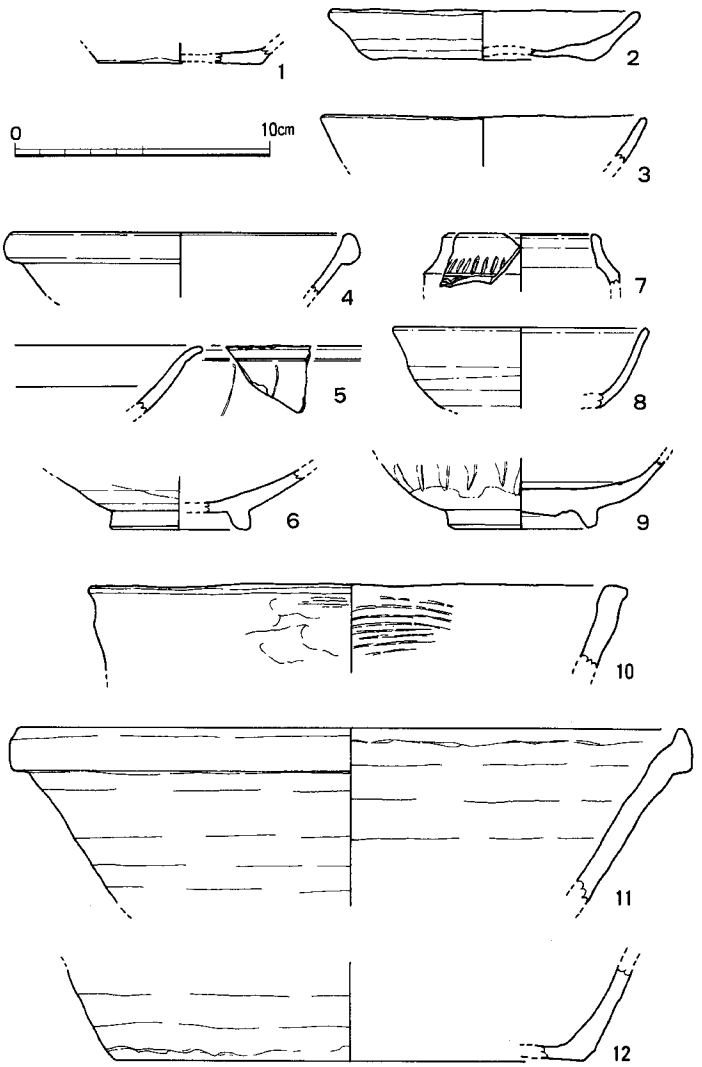
247 2366号ピット出土甕（1／5）

したがって，甕はその形状を失なわないまま埋没し，その後何らかの掘削行為によって上半部を削られ，廃棄されたものと考えることができる。

2366号ピットからは，他に全く遺物が出土しなかったため，参考資料として2366号ピット周囲のⅣ面上において遺物を採集した。

1～3・10は**土師器**である。**1**は皿，**2・3**は坏，**10**は土鍋である。**10**の外面には煤が厚く付着している。**4～8**は**白磁**である。**4～6**は碗，**7**は合子，**8**は口ハゲの皿である。**9**は**青磁**碗である。**11**は**東播系須恵質土器**の鉢である。**12**は**黄釉陶器**の盤である。

これらは，直接的に2366号ピットの年代は示さないとしても，少なくとも上限を示し，かつⅢ面とⅣ面との間に大きな年代的な開きがみられない点から，凡その時期は示しているものと考えている。



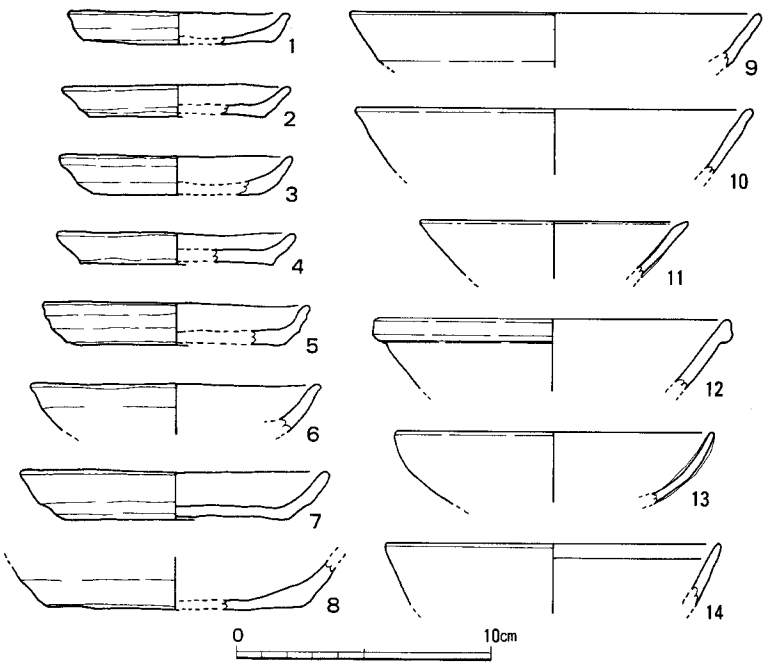
248 2366号ピット周辺採集遺物（1／3）

2370号ピット

Ⅳ面C－01区検出の小土壙である。直径53cmの略円形を呈し，深さは25cmをはかる。5号掘立柱建物を構成する柱穴である。

小片ではあるが，土師器，白磁，青磁等が出土している。

1～8は，**土師器**である。**1～4**は皿で，口径8.75～9.4cm，器高1.2～1.6cmをはかる。**5～8**は，坏である。口径10.6～12.2cm，器高1.65～1.85cmをはかる。すべて回転糸切りである。



249　2370号ピット出土遺物（1／3）

9は，**須恵器**の坏である。

10は，**瓦器**椀である。在地系。

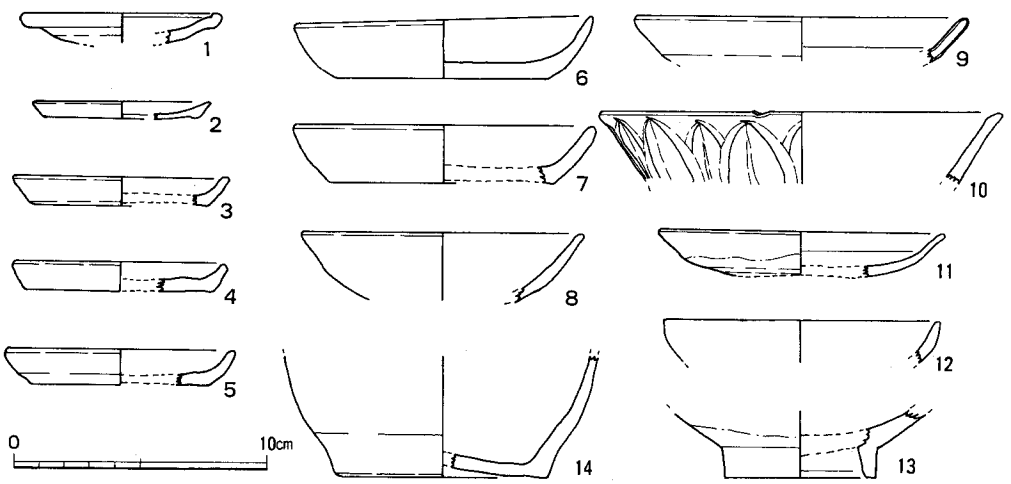
11・12は**白磁**である。**11**は，口縁部の釉をかきとる，いわゆる口ハゲの皿である。**12**の口縁部は，玉縁につくる。

13・14は，**青磁**の碗である。**14**の口縁直下内面には，一条の沈線がめぐる。

2381号ピット

Ⅳ面C－01区で検出したピットである。長径44cm，短径32cmの楕円形で，深さ17cmをはかる。

1～**8**は**土師器**である。**1**は「て」の字状口縁皿である。**2**～**5**は皿，**6**・**7**は坏である。**8**は早島式土器の椀である。**9**・**10**は**青磁**である。**9**は皿，**10**は鎬蓮弁文の碗である。**11**～**13**は**白磁**である。**14**は，**黄釉陶器**の盤である。

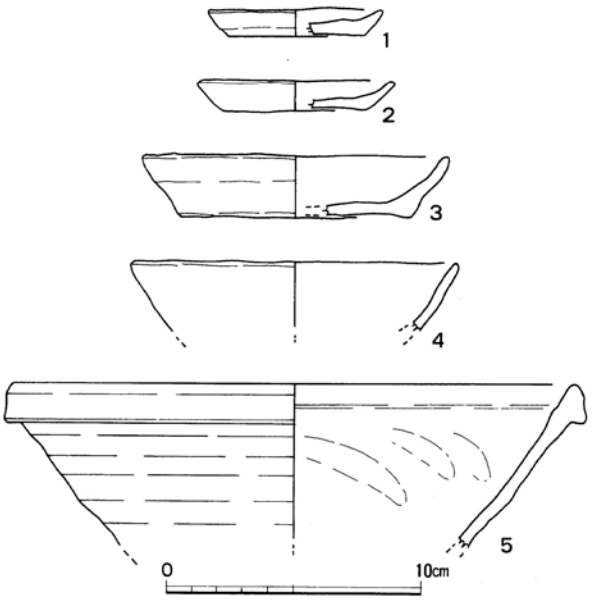


250　2381号ピット出土遺物（1／3）

2406号ピット

Ⅳ面C－01区において検出した，長径56cm，短径38cmの長楕円形を呈する小土壙である。深さは，18cmをはかる。

1～**4**は**土師器**である。**1**・**2**は皿で，口径6.9～7.8cm，器高1.05～1.2cmをはかる。**3**・**4**は坏である。



251 2406号ピット出土遺物（1／3）

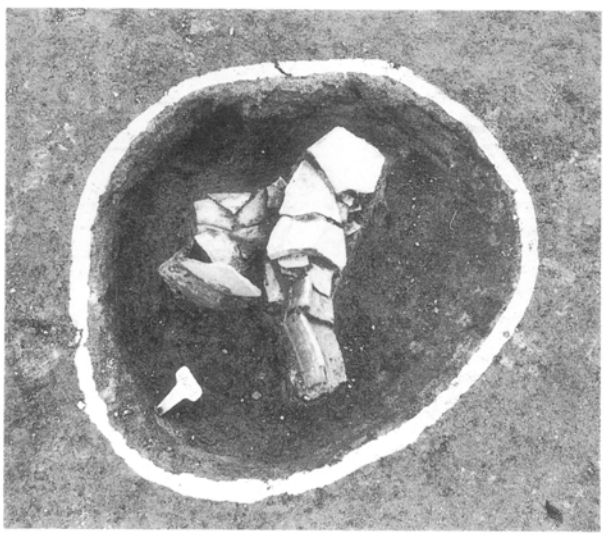
口径12.2～13.0cm，器高は**3**で2.4cmをはかる。

5は**東播系須恵質土器**の鉢である。内面には，指で強くひき上げた様な痕跡がならぶ。

2515号ピット

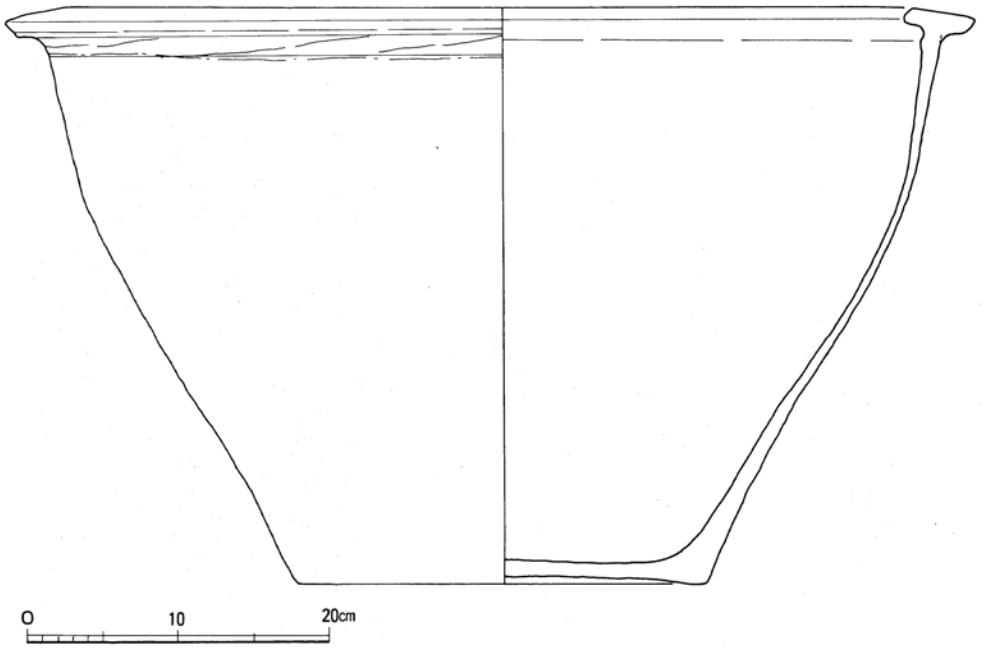
Ⅴ面B－03区より検出した小土壙である。前述した913号土壙のすぐ東側に，32cmほどの間をあけて検出された。長径68cm，短径54cmの略楕円形を呈し，深さ10～14cmをはかる。褐釉陶器甕の口縁部及び胴部片がならんで出土した。

1は，**褐釉陶器**の甕である。口縁部は，T字形につくる。茶褐色～黒褐色を呈する胎土に，灰緑褐色の不透明釉が施される。釉は，口縁部から体部外面にかかり，口縁部上面は釉を削り露胎となる。2次的に火熱を受けており，そのために破砕されたと思われる。同一個体片は，Ⅳ面



252 2515号ピット（東より）

下C－01区，Ⅴ面B－03区を中心に包含層から100片以上出土している。これらの破片が2515号ピットに伴なったとは到底考えられず，火災にあって破砕した甕を廃棄するにあたって，特に数片を選んで土壙を掘って埋めたとしか考えられない状況である。

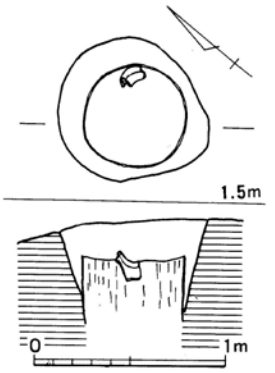


253　2515号ピット出土遺物（1／5）

③　井戸

114号井戸

Ⅶ面Ｂ－04区において検出した井戸である。ほとんど最下部近くを調査した。井戸の掘りかたは，直径約76cmの略円形を呈し，その中央に直径約56cmの，木桶の痕跡と思われる木質が確認できた。木質のすぐ内側には，白磁の四耳壺片が出土している。木質は，標高90cm位まで，遺構検出面であるⅦ面から約48cm下まで追うことができたが，それより下は湧水のため崩壊し，調査ができなかった。



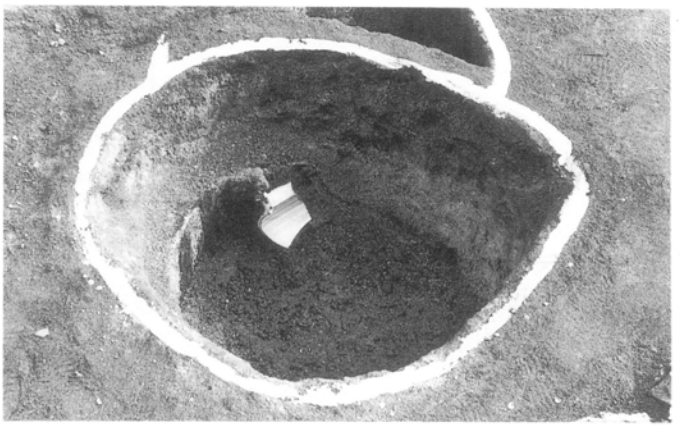
254　114号井戸

１・２は**土師器**である。**１**は皿で，口径7.6cm，器高1.3cmをはかる。**２**は坏である。口径10.6cm，器高2.2cm。**３～５**は**須恵器**である。**３**は高台付坏，**４・５**は坏である。

６・７は**青磁**の碗である。

８～11は，**白磁**である。**８・９**は皿である。**９**は見込みの釉を輪状にかきとって，露胎とする。**10**は碗である。**11**は四耳壺である。

12は，**黄褐釉陶器**の壺の底部である。体部下位は露胎となる。

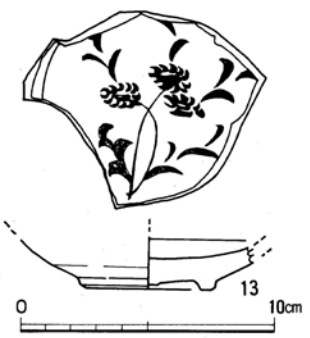


255　114号井戸（西より）

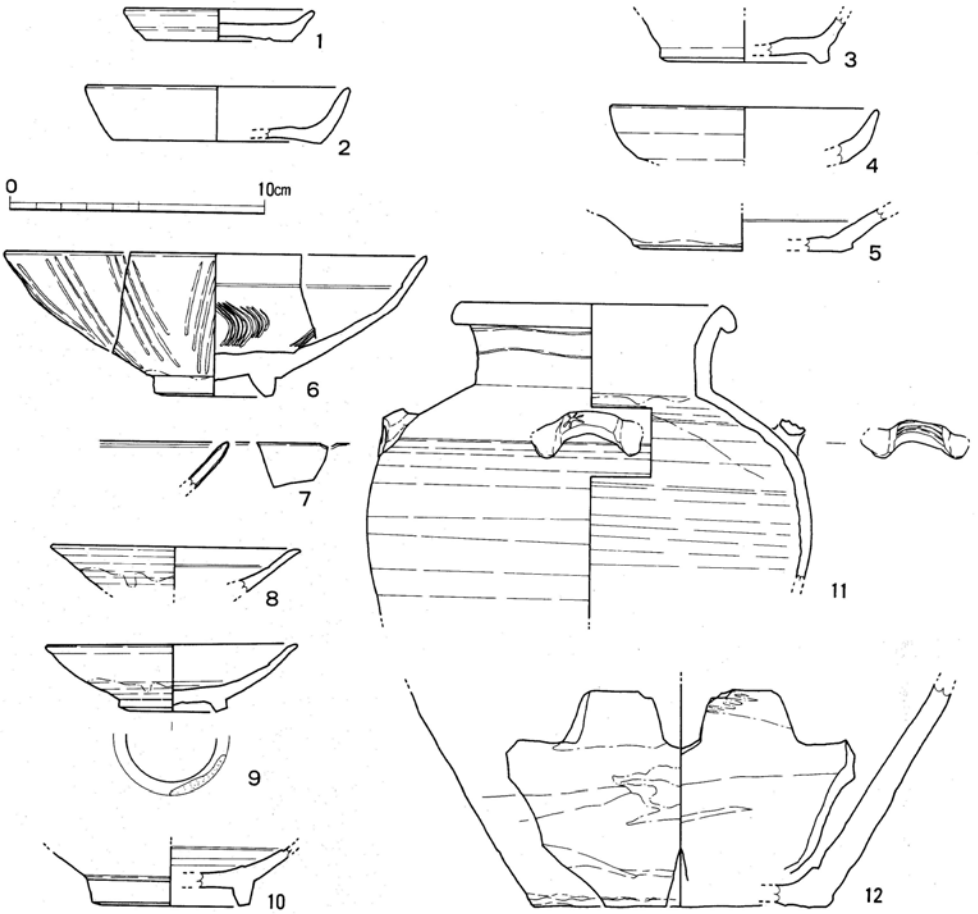
13は，**元代の染付**である。白色精良で貝殻状の剝離を見る胎土に，かすかに青味をおびた乳白色の粘りのある釉をかける。釉は全面に施し，高台畳付はかるく拭き取って露胎とする。染付は，黒味のある藍色で簡単な花枝文様を描いている。外底部中央にはまばらに，畳付ではその一部に砂が付着している。1988年５月，折から来福された長谷部楽爾，弓場紀知両氏より，元代染付との御教示を受けた。

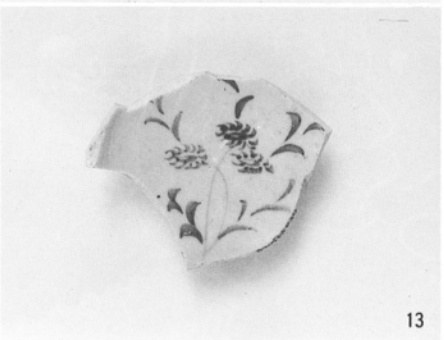
その他，玉縁状口縁を作る備前焼の甕が出土している。口縁の特徴から，備前焼Ⅲ～Ⅳ期に属する。

114号井戸出土とした遺物には，新旧ふたつの要素がみられ，遺物取り上げ時に混乱している可能性がある。



256　114号井戸出土遺物１





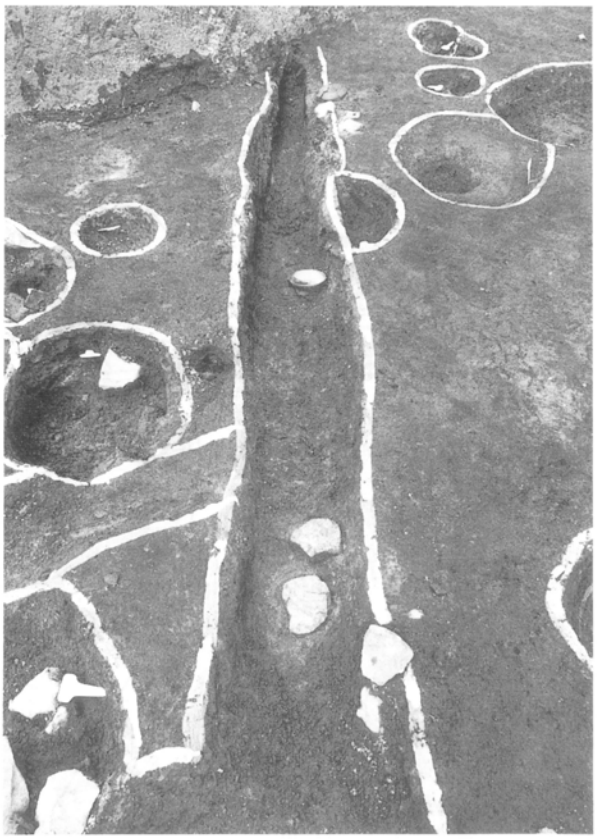
257 T14号井戸出土遺物2（1／3）

④ 溝

13号溝

Ⅳ面C－02区において検出したものである。南側の14号溝とは，180cm（溝の心々）の距離をおいて平行する。この両溝の間が道路であったということも想定できるが，中央トレンチによる土層観察では，両方の溝とも上位の層が堆積する段階で溝の掘り込み面を失なっており，両溝が併存したか否かについては確認できなかった。

13号溝は，主軸をN－38°30′－Eにとって直線的に掘られた溝である。C－01区においては，遺構検出面の標高を設定する際に誤りをおかし，検出しえなかったが，本来は伸びていたであろう。C－02区において検出した長さは，550cmにおよぶ。幅は，西端で38cm，東端で24cmと東に向って細くなる。深さは，西端で14cm（標高2.82m）東端で20cm（標高2.66m）と東に向って深くなる。

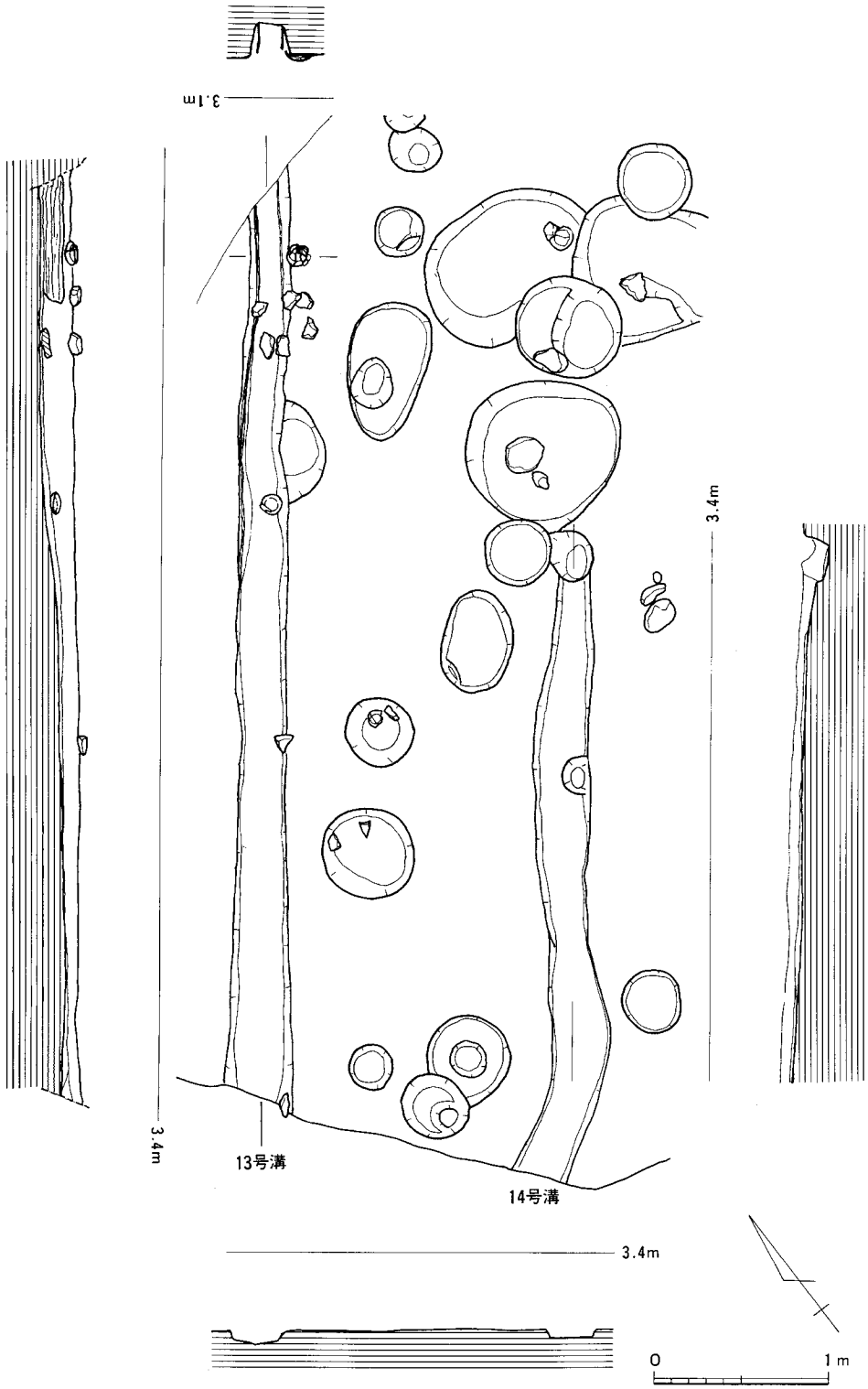


258 13号溝（西より）

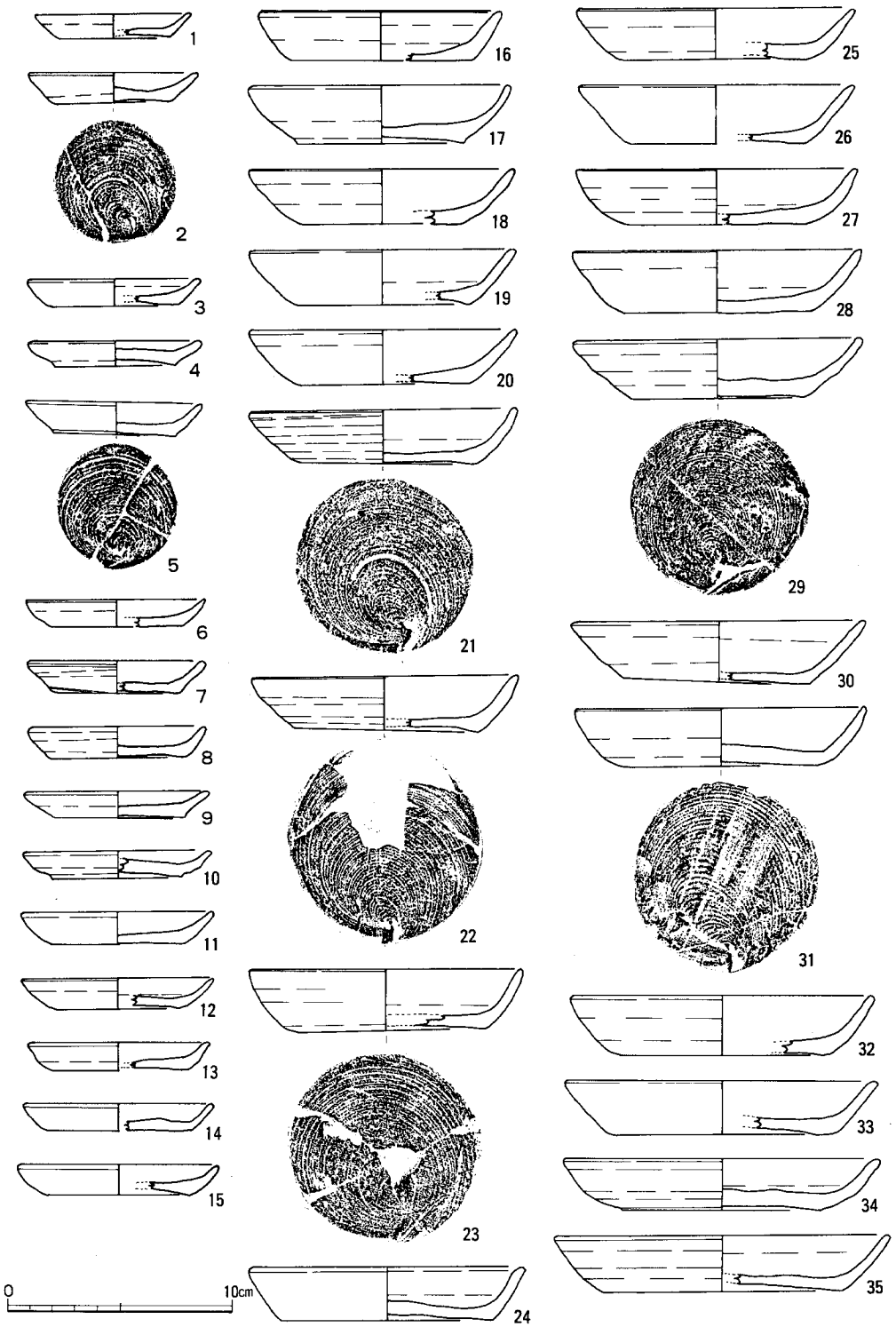
溝の構造は，箱形の掘りかたを掘った後，その両壁に板材を寝かせて立てるものである。板材は，北側壁で228cm，南側壁で76cm分を検出している。

溝の埋土は，灰白色の粗砂であった。また，有機物の腐植土層は全くみられない。こ

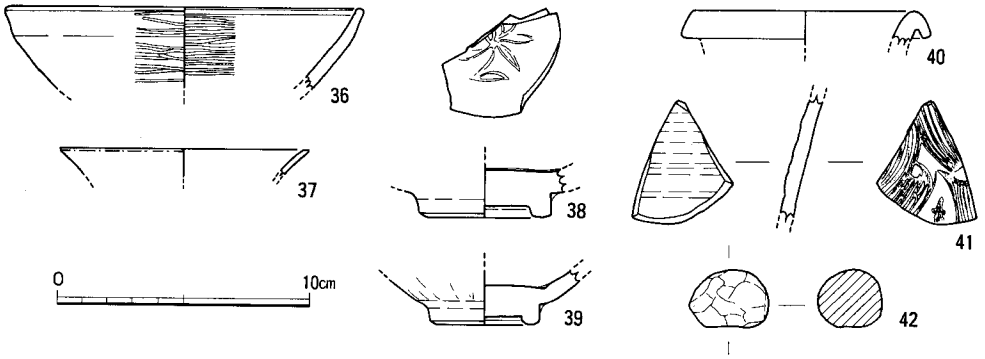
259 13号溝・14号溝（東より）



260 13号溝・14号溝実測図（1／40）



261 13号溝出土遺物１（１／３）



262 13号溝出土遺物２（１／３）

れらの点から，13号溝は水が流れていて，湛水したり，澱んだりする状況はなかったと考えられる。ただし，常時水が流れていたとは考えにくく，水が流れ易い溝で，雨水，生活廃水などはすぐに流れ落ちて行ったと思われる。この状況は，14号溝も共通する。14号溝は東側を柱穴・土壙等に切られ，調査区東端まで通して調査することはできなかったが，溝底の傾斜の仕方，埋土の状況等は，13号溝と同様である。

１～35は**土師器**である。**１～15**は皿である。口径7.0～9.0cm，器高1.1～1.5cmをはかる。**１～４・７・10・11・13～15**には内底ナデが，**９**には板状痕と内底ナデがみとめられる。**16～35**は坏である。口径11.0～15.0cm，器高2.2～2.8cmをはかる。**16・18～20・24～28・30・32～35**には内底ナデが，**17・29・31**には板状痕と内底ナデがみられる。

36は**瓦器**である。楠葉型瓦器椀で，内面は密にヘラミガキ，外面はやや間をあけたヘラミガキがなされる。内面の口縁部直下には，沈線が１条めぐる。

37は**白磁**の皿である。口縁部の釉をかき取り，口ハゲとする。

38～40は**青磁**である。**38・39**は鎬蓮弁文の碗である。**38**の見込みには印花文が押される。**40**は壺の口縁である。

41は，**青白磁**の梅瓶の小片である。淡灰色で精良な胎土に，やや緑色をおびた淡青色の透明釉がかかる。

42は，**毬球玉**である。砂岩を搞打して球状にととのえる。

(5) 中世Ⅰ期の遺構

① 土壙

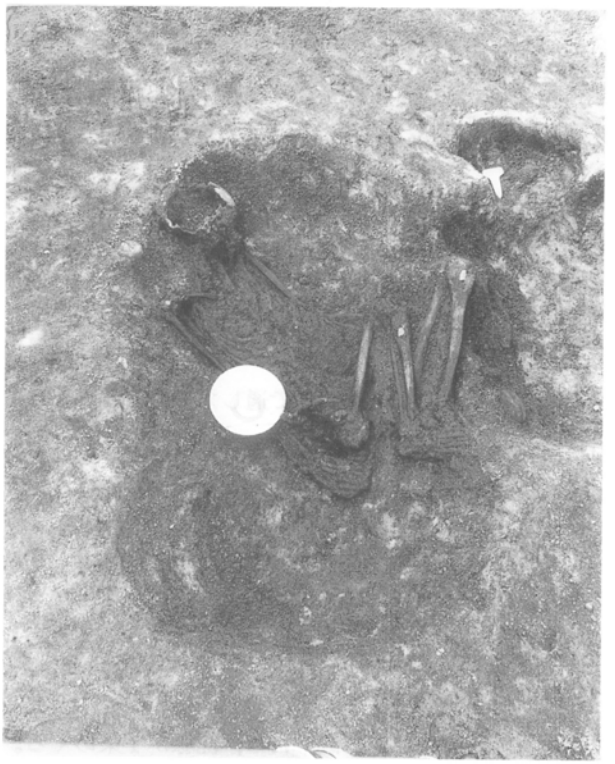
877号土壙

Ⅶ面B－01区で検出した土壙墓である。Ⅵ面からの掘り下げの際，人骨の頭部にあたり，周囲を精査して検出したもので，その為，頭蓋骨の右側頭部を若干破損している。

土壙は，長軸130cm，短軸78cmの小判形を呈し，深さは21cm分を検出している。本来は更に深かったものと思われる。壙底はほぼ平坦であるが，側壁はゆるい角度で立ち上る。人骨は，脚を折り曲げて屈葬されており，胸から頭にかけては，土壙壁面に沿って上方に起きている。この状態から木棺・桶に容れて埋葬されたものではなく，土壙に直葬されていたとみられる。

人骨は全身の骨格が原位置をとどめていたが，遺存状態は悪く，かなりもろくなっていた。九州大学医学部中橋孝博講師によって取り上げていただいた(P.273～289)。

副葬品としては，白磁碗が一点出土したのみである。人骨は，上体に沿って右腕をま



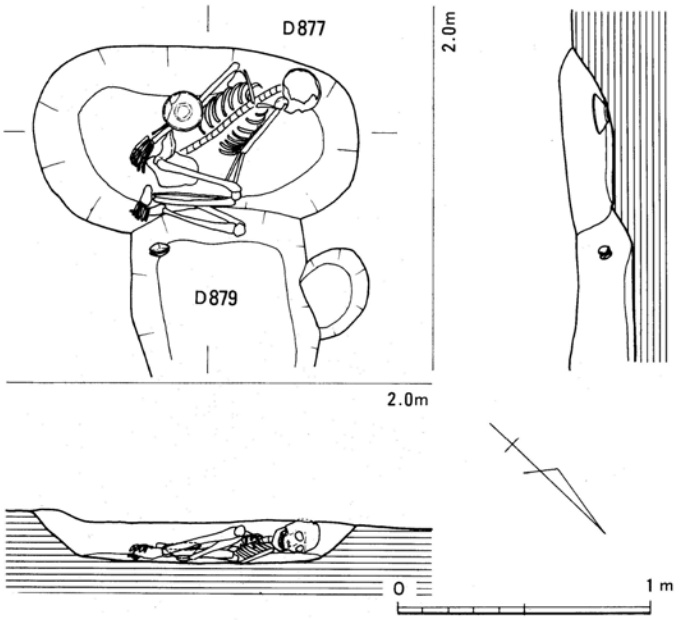
263 877号土壙（西より）

264 白磁碗出土状況（西より）

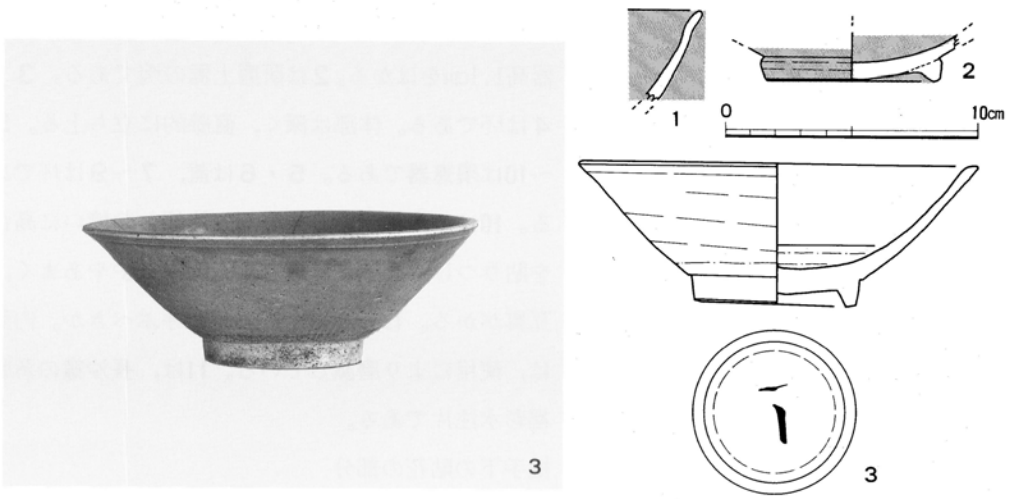
っすぐに伸しているが，その肘の上にのせて副葬されていた。丁度，右腹部の上にあたる。

Fig.266の**3**が副葬されていた**白磁**碗である。体部はわずかに内湾気味に直行し，口縁を外方に尖らせておさめる。見込みは，輪状に釉をかきとる。体部下位から高台，外底部は，露胎となる。

1・2は，埋土中より出土した**黒色土器**埦である。丁寧なヘラミガキを施す。



265 877号土壙実測図（1／30）

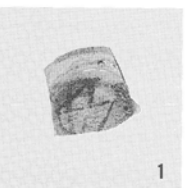


266 877号土壙出土遺物（1／3）

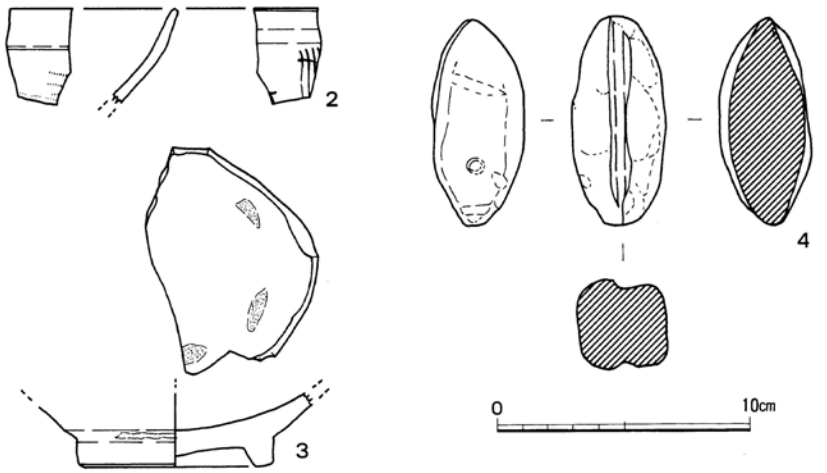
879号土壙

Ⅶ面B－01区，877号土壙に切られていた土壙である。主軸を東北－南西に向けた略長方形の土壙で，断面観察では側壁は垂直に近く立っており，木棺墓の可能性も考えられる。

1は，**白磁**の碗で底部に花押を墨書している。**2・3**は**青磁**である。**2**は中国同安窯系の碗，**3**は高麗青磁の碗である。**4**は**土錘**である。



267 白磁墨書



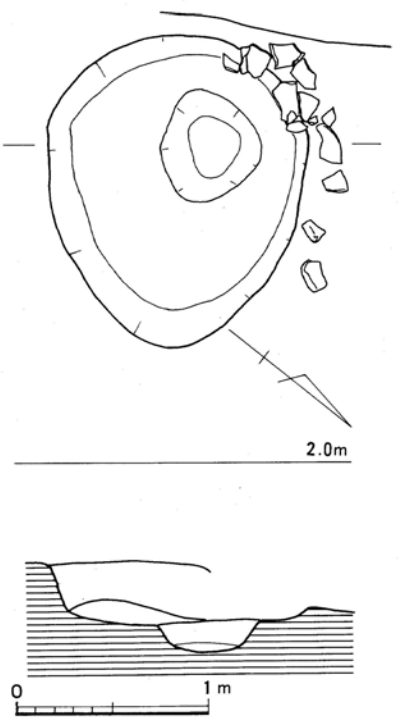
268 879号土壙出土遺物（1／3）

881号土壙

Ⅶ面B－04区で検出した略円形の土壙である。後述する876号土壙（P.193）を切る。また北側の土壙上端に須恵器片がかたまってみられたが，881号土壙にともなうものではない。

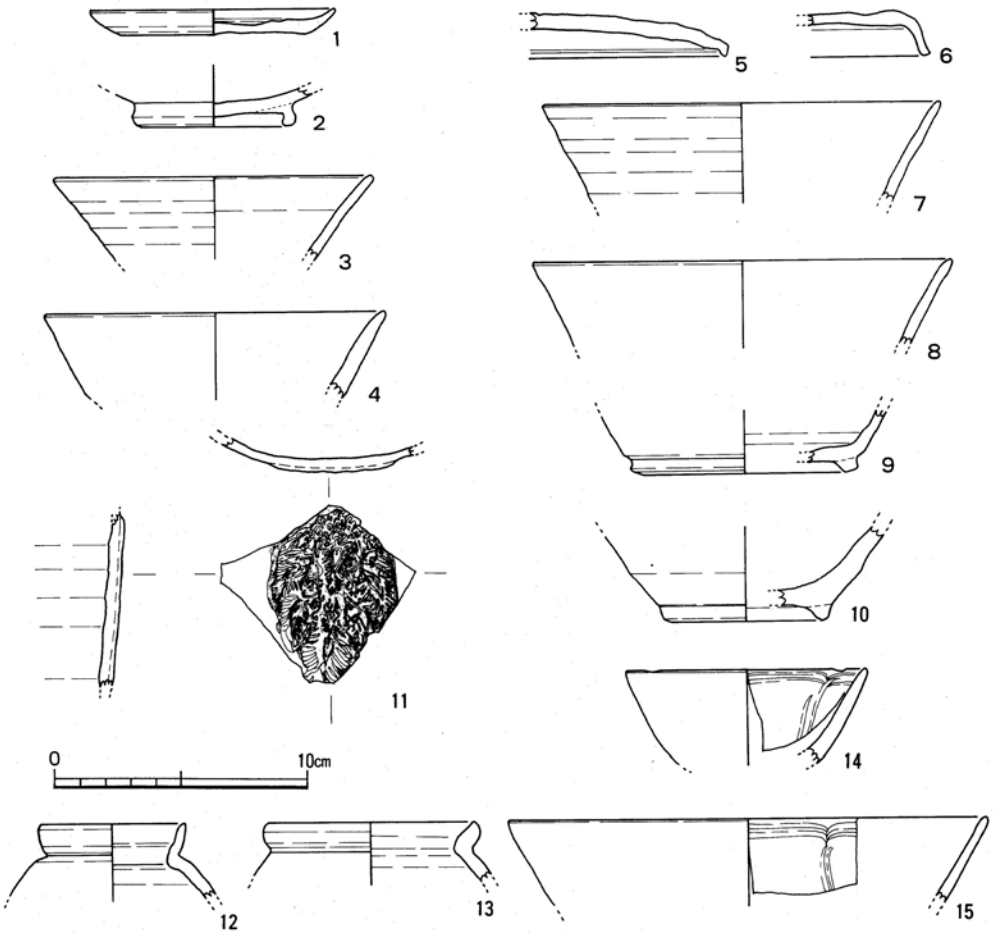
1～4は**土師器**である。**1**は皿で，底部ヘラ切り，板状痕・内面ナデを施す。口径9.9㎝，器高1.1㎝をはかる。**2**は研磨土器の椀である。**3・4**は坏である。体部は深く，直線的に立ち上る。**5～10**は**須恵器**である。**5・6**は蓋，**7～9**は坏である。**10**はこね鉢である。底部と体部との境いに高台を貼りつける。胎土はあらく，焼成もややあまく，瓦質がかる。むしろ須恵質土器と呼ぶべきか。内面は，使用により磨滅している。**11**は，**長沙窯**の黄釉褐彩水注片である。把手下の貼花の部分にあたる。**12・13**は，**褐釉陶器**の壺である。**14・15**は**青磁**碗である。

遺物は，時代的にはまとまりにかけている。



269 881号土壙実測図（1／40）

270 881号土壙出土遺物1

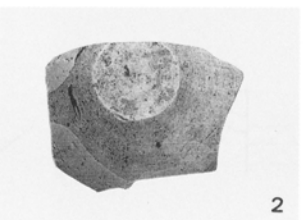


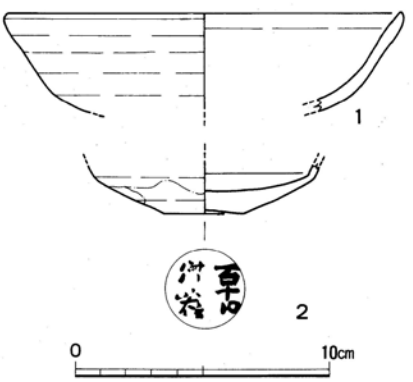
271 881号土壙出土遺物２（１／３）

895号土壙

Ｖ面Ｃ－01区で検出された土壙である。長径100cm，短径95cmの略円形を呈し，深さ33cmである。

１は**瓦器**椀である。体部上半は直線的にひらく。ヘラミガキが施されるが，単位はとらえがたい。**２**は**白磁**の皿である。外底部に「百十内僧器」と二行書された墨書がみられる。



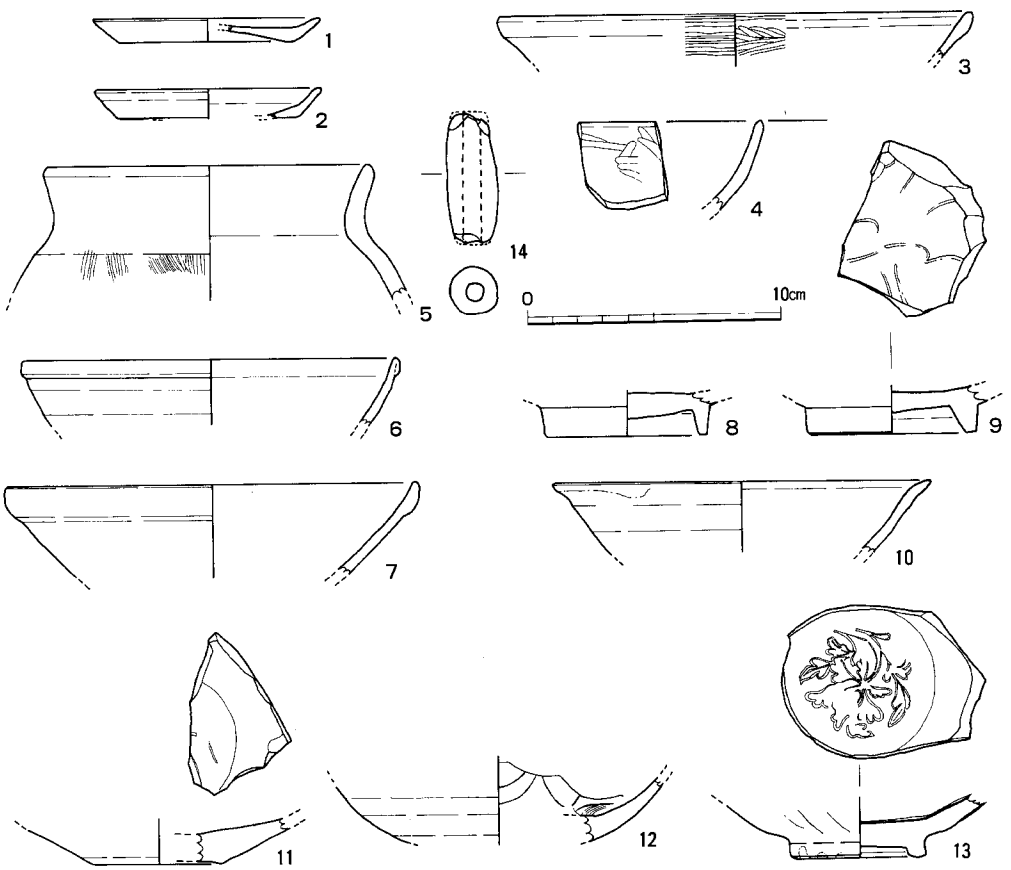


272 895号土壙出土遺物（１／３）

909号土壙（中世II期？）

V面C－01区で検出した土壙である。116号井戸に切られて，その北半部分を失なう。長方形の平面を呈すると思われ，長辺150cm以上，短辺約140cm，深さ39cmをはかる。

1～5は**土師器**である。**1・2**は皿で，口径9.0cm，器高0.95～1.0cmをはかる。底部は回転糸切りである。**3・4**は研磨土器の埦である。**3**は肥厚した口縁部に，細かいヘラミガキが密に施される。**4**は内湾気味に直行する口縁で，幅広のヘラミガキが施され，単位はつかみにくい。**5**は，甕である。体部外面には，縦位の刷毛目調整痕がのこる。**6～10**は，**白磁**の碗である。**6・7**は，口縁を玉縁につくる。**6**の玉縁口縁は細く，やや扁平だが丸味を持つ。**7**は，断面三角の玉縁となる。**8・9**は底部である。外底部，高台は露胎となる。**10**は，直線的にひらく体部から，やや外反気味に口縁をひき出す。**11～13**は**青磁**である。いずれも龍泉窯系である。**11**は皿，**12・13**は碗で，内面に片切彫りで施文（花文？）する。**13**の見込みには印花文がつく。**14**は**土錘**である。土師質だが，焼成は良好。



273 909号土壙出土遺物（1／3）

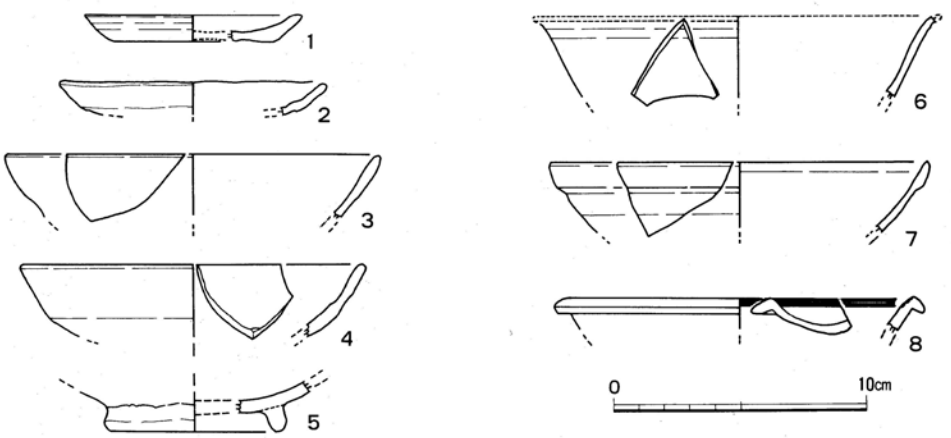
② 井戸

100号井戸（878号土壙，古代Ⅱ期？）

Ⅶ面Ｂ－01区で検出した井戸である。北側を110号井戸で，西側を111号井戸で切られる。Ⅶ面Ｂ－01区で検出した中世Ⅰ期の100・109～111号の４基の井戸の中では，最も古い井戸で，遺物からみて古代Ⅱ期に遡りうる可能性もある。井筒の最下部には木桶(？)，さらにその中には曲物を裾えていた。

１～３は**土師器**である。**１・２**は皿で，**１**は底部をヘラ切りする。口径8.7cm，器高1.1cm。**３**は椀である。内外面は横方向にヘラミガキする。**４・５**は**瓦器**椀である。**４**の内外面，

274 100号井戸（南より） 上－木桶 下－曲物検出状況



275 100号井戸出土遺物（１／３）

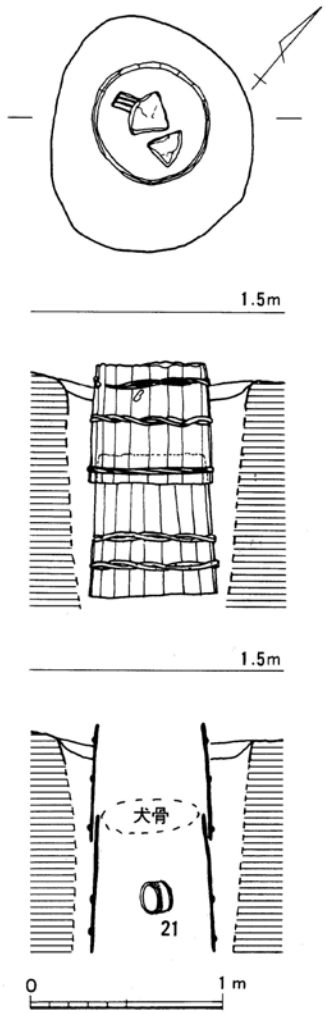
5の内面は，ヘラミガキを施す。**6**は**越州窯系青磁**の碗である。**7**は**白磁**の碗である。玉縁口縁は，細目だがやや扁平につくる。**8**は**青白磁**である。灰白色の胎に，青白色の透明釉をかける。口唇部内側に，沈線が2本横走する。

109号井戸

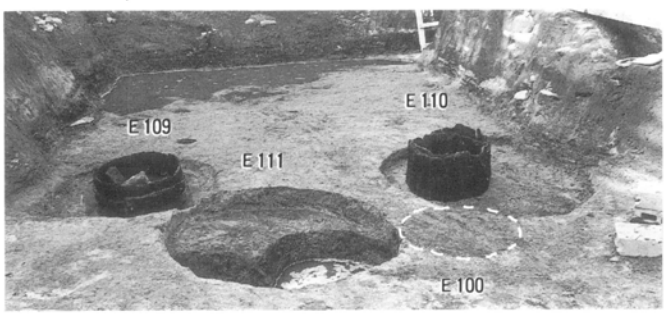
Ⅶ面B－01区より検出した。ほりかたの直径約110cm，井戸側の直径約62cmをはかる。

井戸側は，木桶を重ねたものである。桶は，下から2段分を検出した。下段の井戸側桶の下部は，湧水が激しく，曲物の有無は確認できなかった。下段の桶の中位で，小形の曲物（Fig.281）が出土したが，井戸内に落されたもので，井戸最下部に裾えられたものではない。

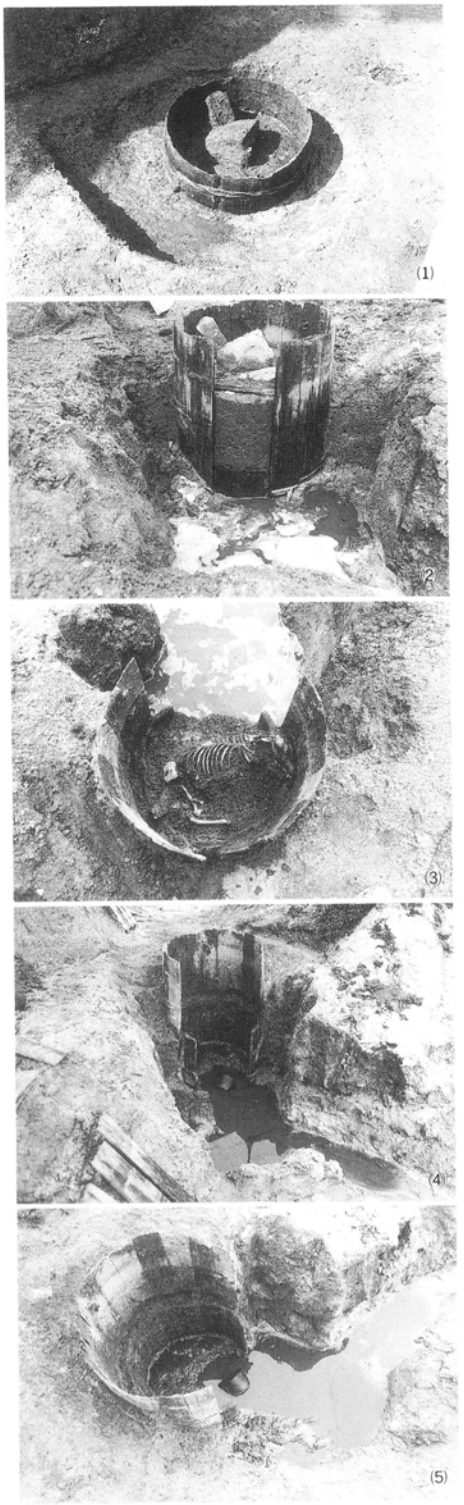
井戸側内の埋土には，土層の変化はみられないが，丁度下段の桶の上面で犬の全身骨格を検出した。掘り下げ時に，前肢の骨を相ついで上げた為に確認できたもので，頭を下段の桶の上端にのせて横にねた状態であった。犬が横臥しているレベルを境に，上下の土層で小礫のまじりかたの多少などわずかな差はみとめられた。犬の状態からみて，下層の埋土上面は，ほとんど水平をなしていたと考えられる。しかし，井戸の埋積過程で時間差があったとは考えがたく，井戸を廃棄して埋める途中で，死んだ犬を埋葬したものとみられる。また，下段桶中位で出土した曲物の出土層は，湧水のため土が汚れて確認できなかったが，調査時の所見では井戸側下層と大差ないものの砂粒が多くまじっていた。曲物の出土レベルは，現在の湧水レベル以下である。109号井戸当時と現代とで湧水レベルが変っていないものとすれば，曲物が完形品で全く破損していない点，曲物が側板を下に向けて，転がった状況で出土している点からみて，この曲物は，廃棄さ



276 109号井戸実測図



277 Ⅶ面B－01区井戸群（南より）



れたものではなく，誤って井戸内におとしたものと考えるべきであろう。

出土遺物は，土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦器・青磁・白磁・陶器・石鍋・木製品等である。

1・2は**土師器**である。**1**は皿で，口径8.3cm，器高1.05cmをはかる。**2**は坏である。口径12.1cm，器高2.7cmである。ともに底部は回転糸切りする。

3は**黒色土器**である。埦の高台片で，断面三角形を呈する分厚い高台が，やや踏ん張り気味につけられている。内面は不定方向のヘラミガキを密に施す。漆黒色を呈する。

4・5は**瓦器**の埦片である。**5**は，内外面に横位のヘラミガキがみとめられる。ミガキの単位は太く，明瞭な稜をつくらない。

6は**灰釉陶器**の埦である。灰色のやや生目のあらい胎土に，灰緑色の透明釉を施す。外面は露胎である。釉は，ごまだれ状のむらを持ち，細かい氷裂が無数にみられる。内面の調整は，内底部から体部の下位にかけてコテあて，体部中位以上をヨコナデする。体部外面は，ヨコナデするが，体部上半と下半でヨコナデの原体が異なり，下半部の方が条線が細かく鋭い。高台は断面方形の付け高台で，高台を付ける際のヨコナデで底部の切り離し痕は消されている。口径16.8cm，高台径 8.0cm，器高4.7cmをはかる。

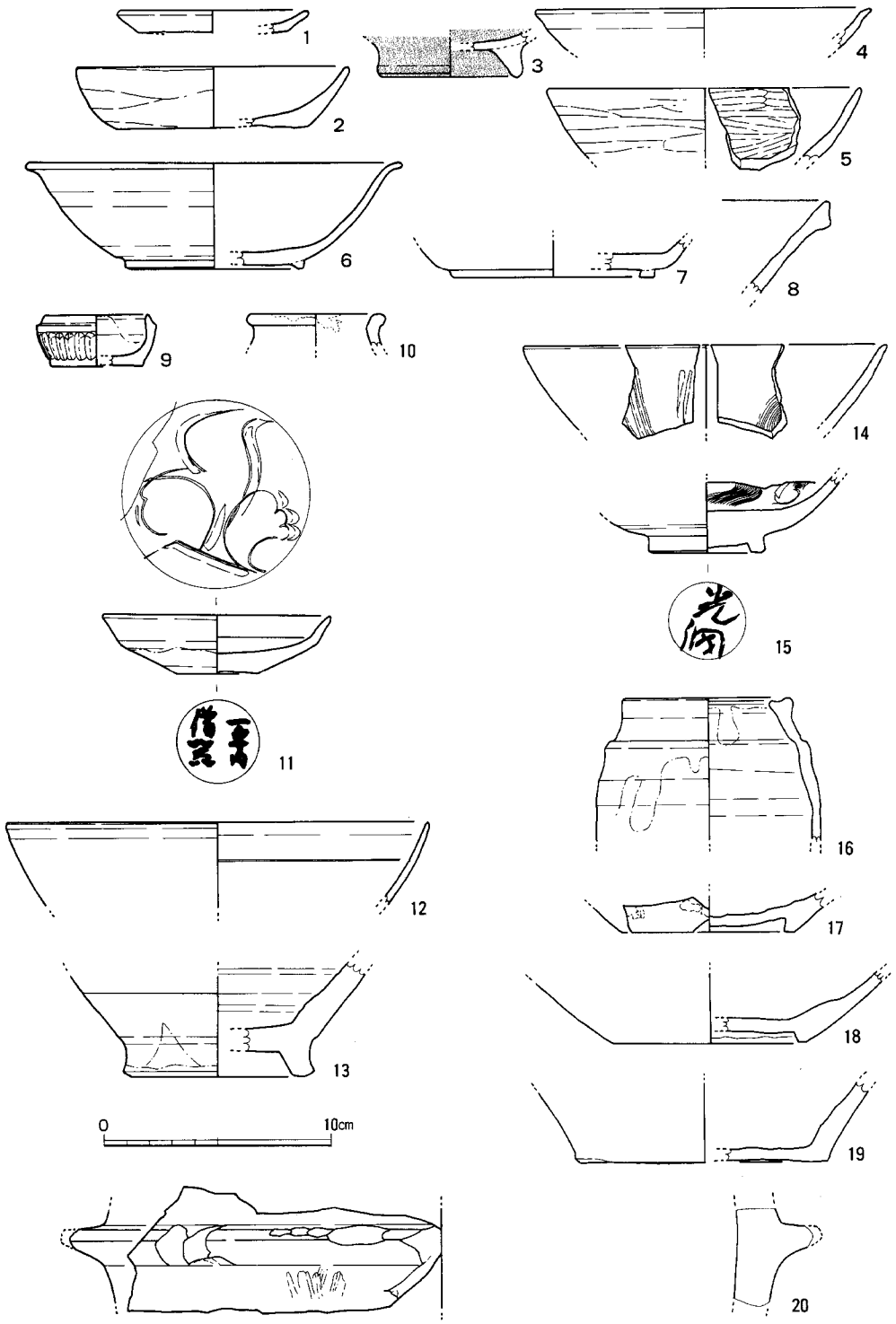
◀ **278** 109号井戸

(1) 検出状況（南東より）

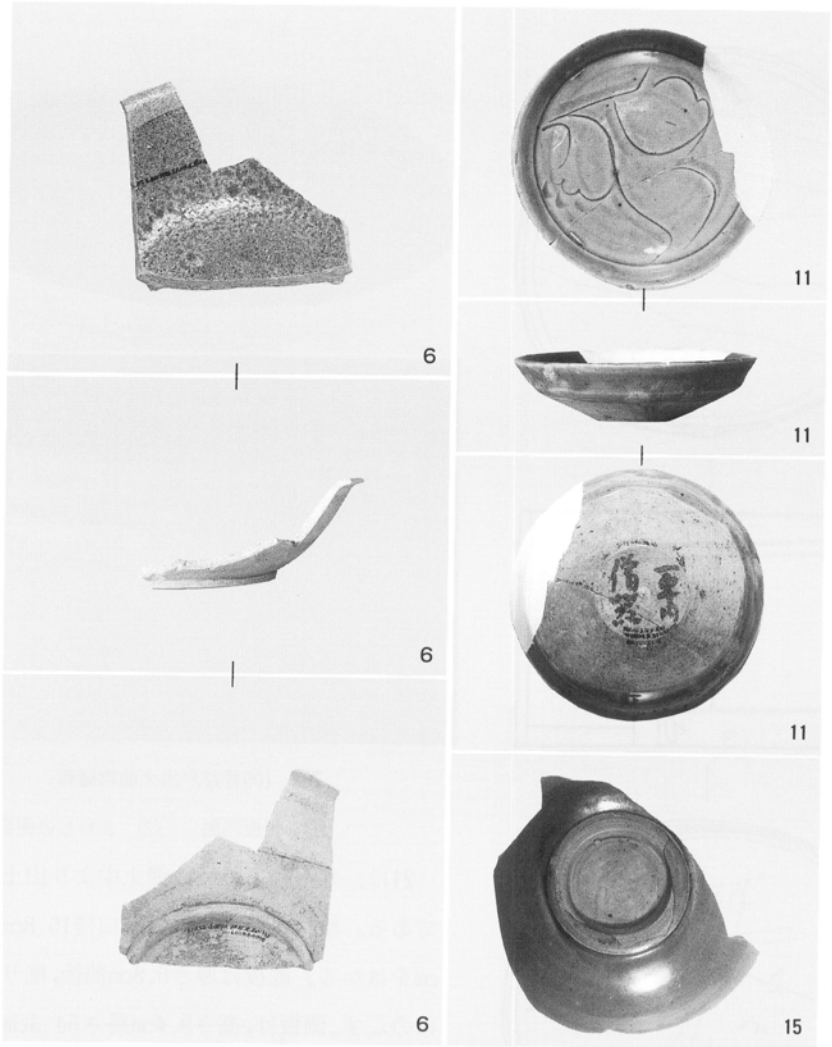
(2) 土層堆積状況（南より）

(3) 犬骨格検出状況（北より）

(4) 曲物出土状況（南西より）　(5) 同（西より）



279 109号井戸出土遺物1（1／3）



280　109号井戸出土遺物２（約１／３）

７・８は**須恵器**である。７は高台坏，８は鉢である。

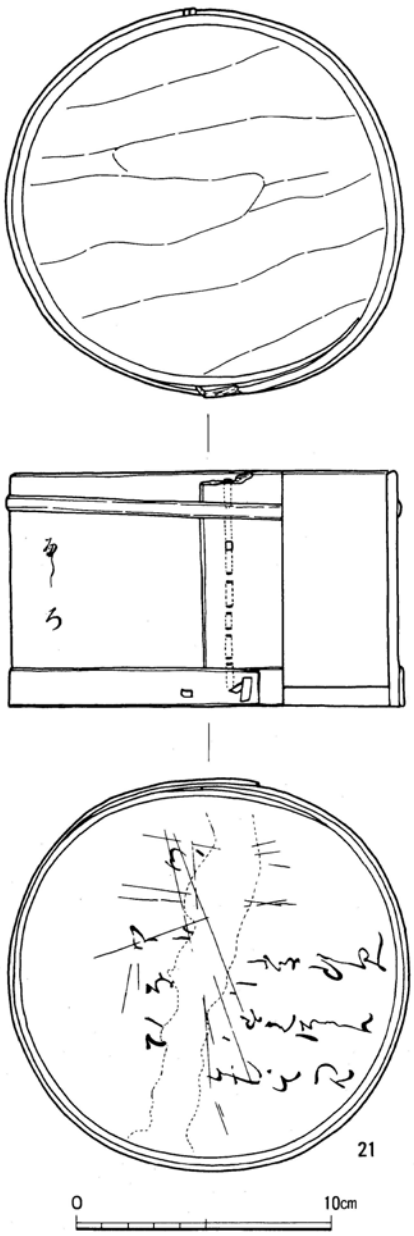
９は**青白磁**の合子身である。

10～13は**白磁**である。10は小壺である。11は皿で，底部に「百十内　僧器」と記された２行書きの墨書がある。12は碗，13は壺（四耳壺？）の底部である。畳付以内は露胎である。

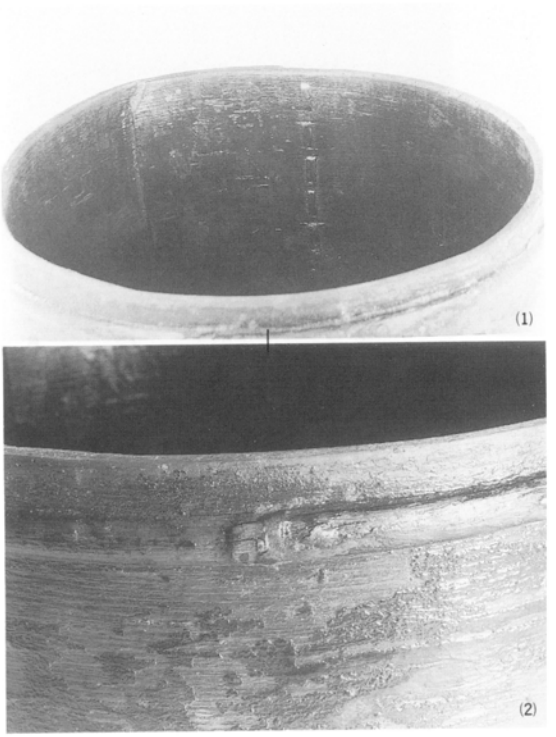
14・15は**青磁**の碗である。14は同安窯系，15は龍泉窯系で，15の高台内には「光綱」と読める墨書がみとめられる。

16～19は**陶器**である。16は褐釉を施した短頸壺である。17・18は，平鉢の底部で，外底部を碁笥底に削る。19は甕の底部であろう。

20は滑石製の**石鍋**である。外面には煤が付着する。



281 109号井戸出土遺物3（1／3）



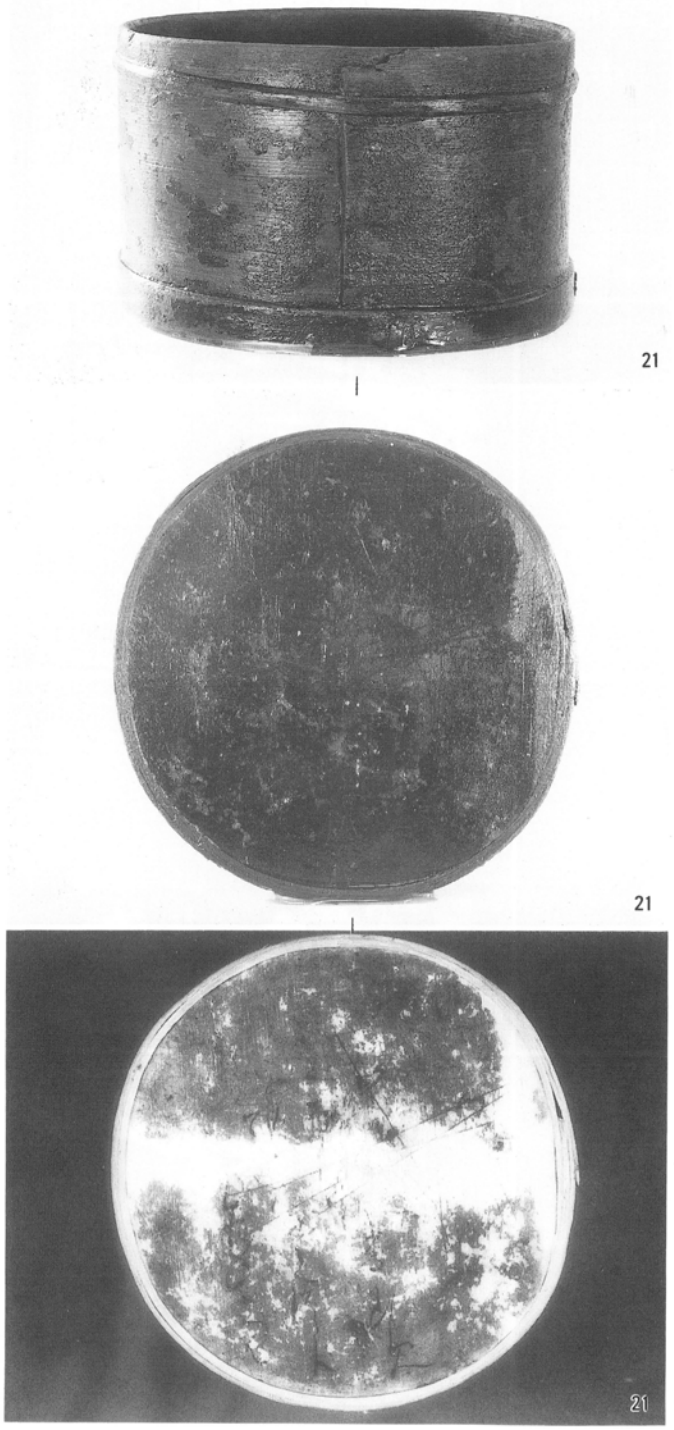
282 109号井戸出土曲物細部

(1) 側板内面　(2) まわしの側板固定部分

21は，井戸側下段桶の埋土中より出土した**曲物**である。桧材を用いている。口径15.8cm，器高9.4cmをはかる。底板は厚さ0.8cm前後，削り痕を明瞭にのこす。側板は，高さ9.4cm長さ54.3cmの板を円形にまげている。重なり部分は，7.5cmにおよぶ。まわしの側板は，上段は幅0.6cm，下段は幅約1.5cmをはかる。側板・まわしの側板の固定部分は，桜皮によってとじあわせている。

曲物には，全面にうすく黒漆がかけられている。漆の遺存状態は良好とは言えず，ところどころはげているが，漆のはげ目から墨書がうかがわれた。奈良国立文化財研究所光谷拓実氏のもとで年輪年代測定を行なったが，その際赤外線テレビにかけたところ，側板の全周と底板の外底部全面に墨書されていることが判明した。Fig.283～285に奈良国立文化財研究所において撮影し

註　曲物の部材名称は，P.242註12の文献による

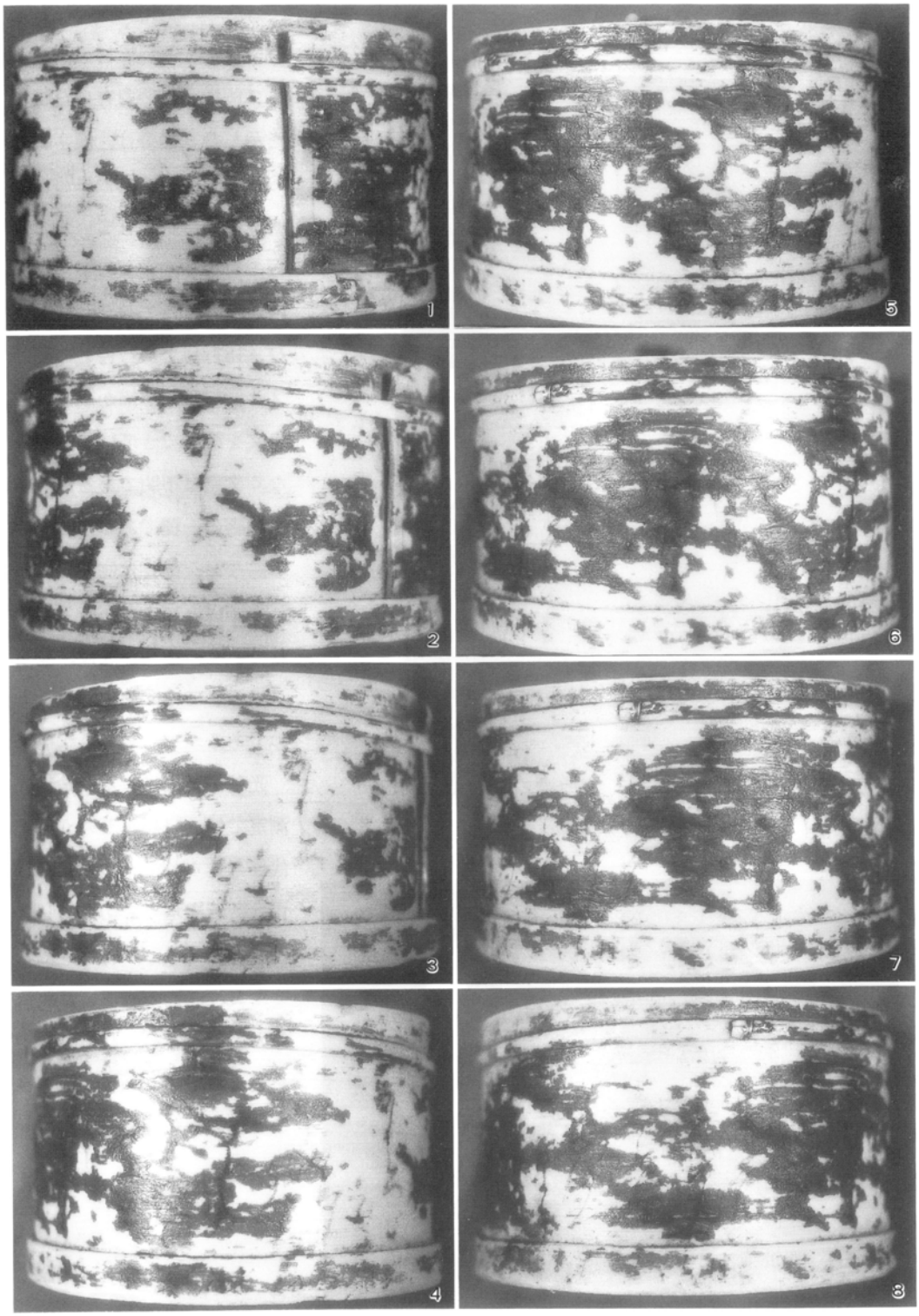


283 109号井戸出土曲物

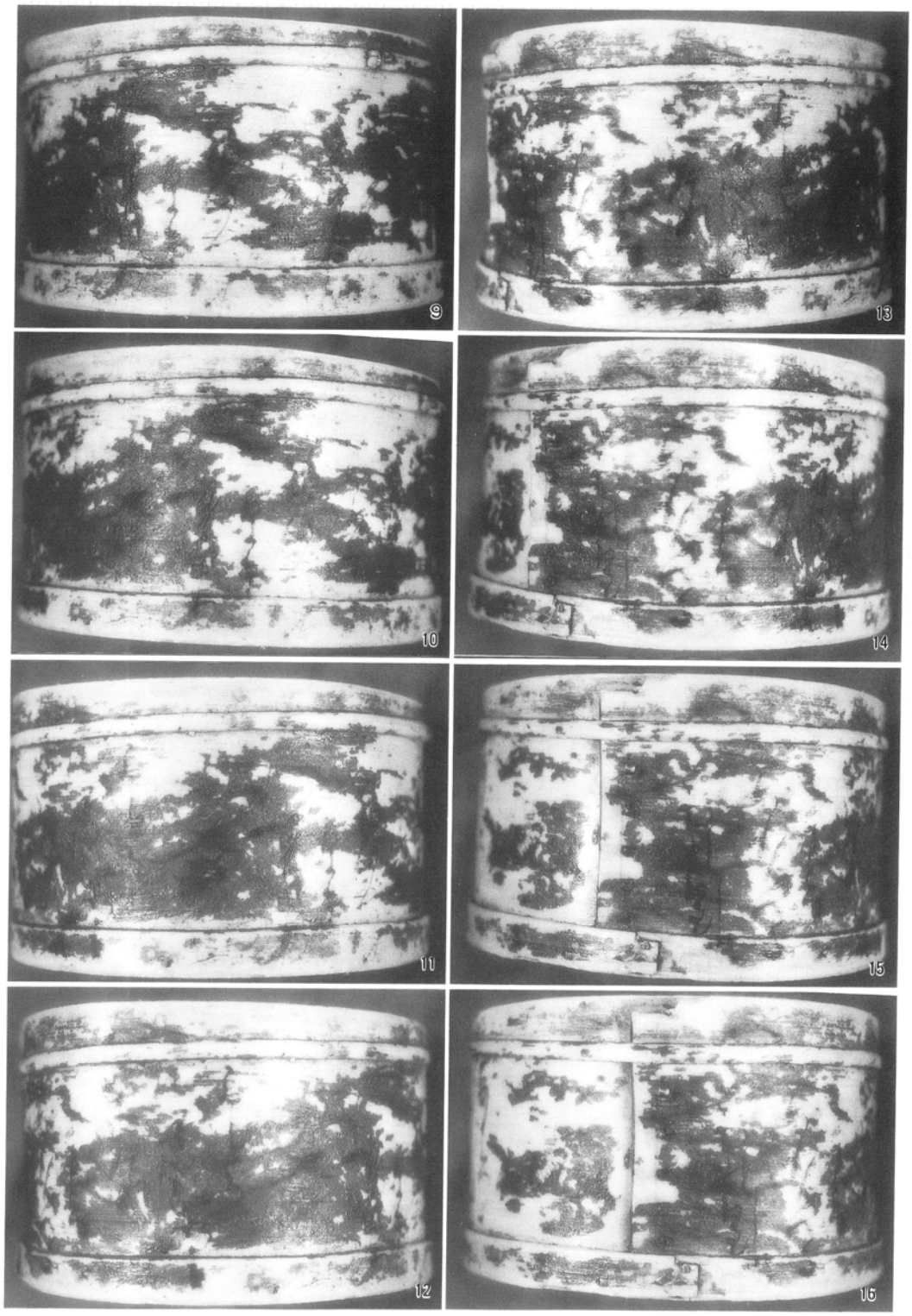
ていただいた赤外線写真，Fig. 286に同研究所綾村宏氏によって解読していただいた釈文を示した。墨書は，漢字混りの仮名書きで，側板に25行，底板に6行かかれている。側板の墨書は，側板の継ぎ目の横から始まっており，冒頭及び，18行目と19行目との間の2ケ所に戯画が描かれている。全文を解読できている訳ではなく文意は不明であるが，中世歌謡の一種であろうと考える。なお，墨書は側板とまわしの側板とにまたがって書かれており，曲物作成後，漆をかけるまでの間に書かれたものである。

光谷拓実氏による年輪年代測定では，1148年という実年代が与えられている。また材質は，近畿地方で切り出した桧材であることが判明した。

なお，曲物の底板には無数の刃傷がみとめられる。曲物を裏返して俎として使用することがあったのであろう。



284 109号井戸出土曲物墨書 1



285 109号井戸出土曲物墨書 2

「（墨画）
□□〔こカ〕ろ
て□□
その□□□
にて□□
なく候□
きて候□
□
□□
□□
お□□
いかて□
□□をあんにと
とはんや□
□
こゑて□
もはめ□□
□□□

この申□
（墨画）
□と□に
見にこそ□
きたれ　□
か□ろ□
□れ□やる
そ□し□
□□　」（側板）

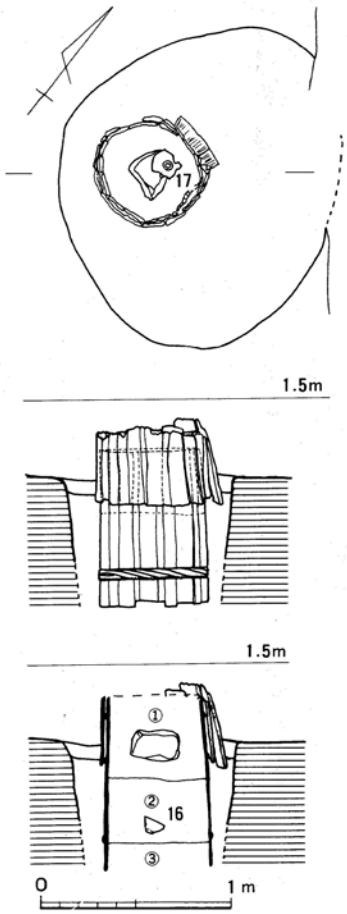
「い□
□□□□すみ
□□し
□□つらん
□□
□□み　」（底板）

286　109号井戸出土曲物墨書釈文

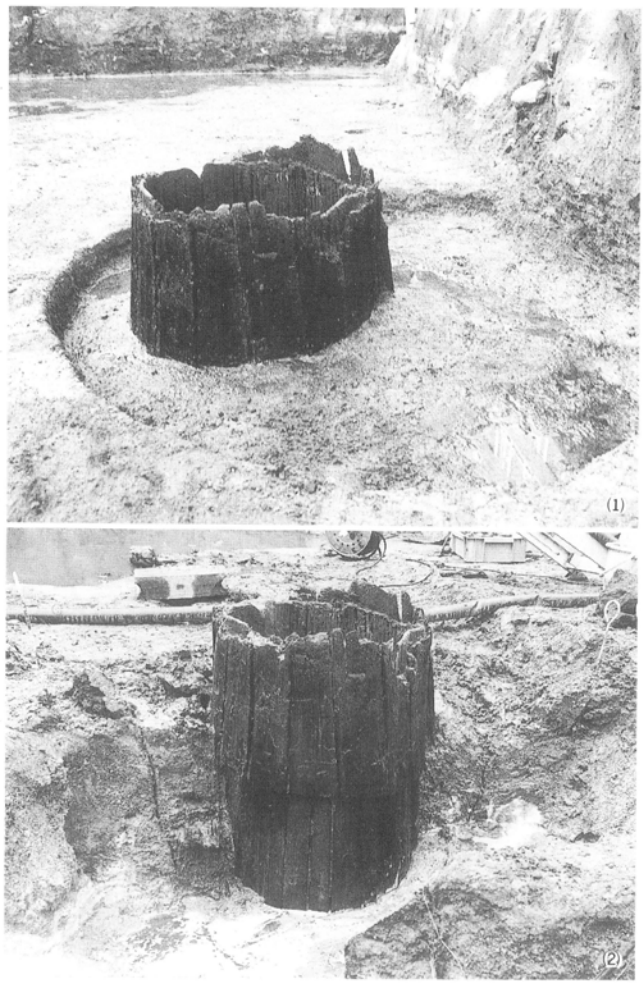
110号井戸

Ⅶ面Ｂ－01区より検出した井戸である。100号井戸（878号土壙）を切る。直径120cm前後の略円形の掘りかたで，直径52cm程の井戸が，掘りかた中心から西にずれてつくられている。最下部には，曲物が裾えてあったらしく木質の痕跡をみることができたが，湧水のため寸時の内に崩壊し，確認することはできなかった。井戸側の最下段は，口径約56cm，高さ約92cmの木桶である。上中下の３ケ所に竹をあんだタガをはめる。桶の口端（井戸に用いた際は下端）には，板の高さに不揃いがみられる。２段目は，１段目の桶の周囲に，板材を桶状にならべて立てたもので，タガでしめていない。また板材の幅もバラバラで，桶のような製品であったとは考えられない。おそらく，板を立てならべただけで，地上に露出していた部分にあたると考えたい。

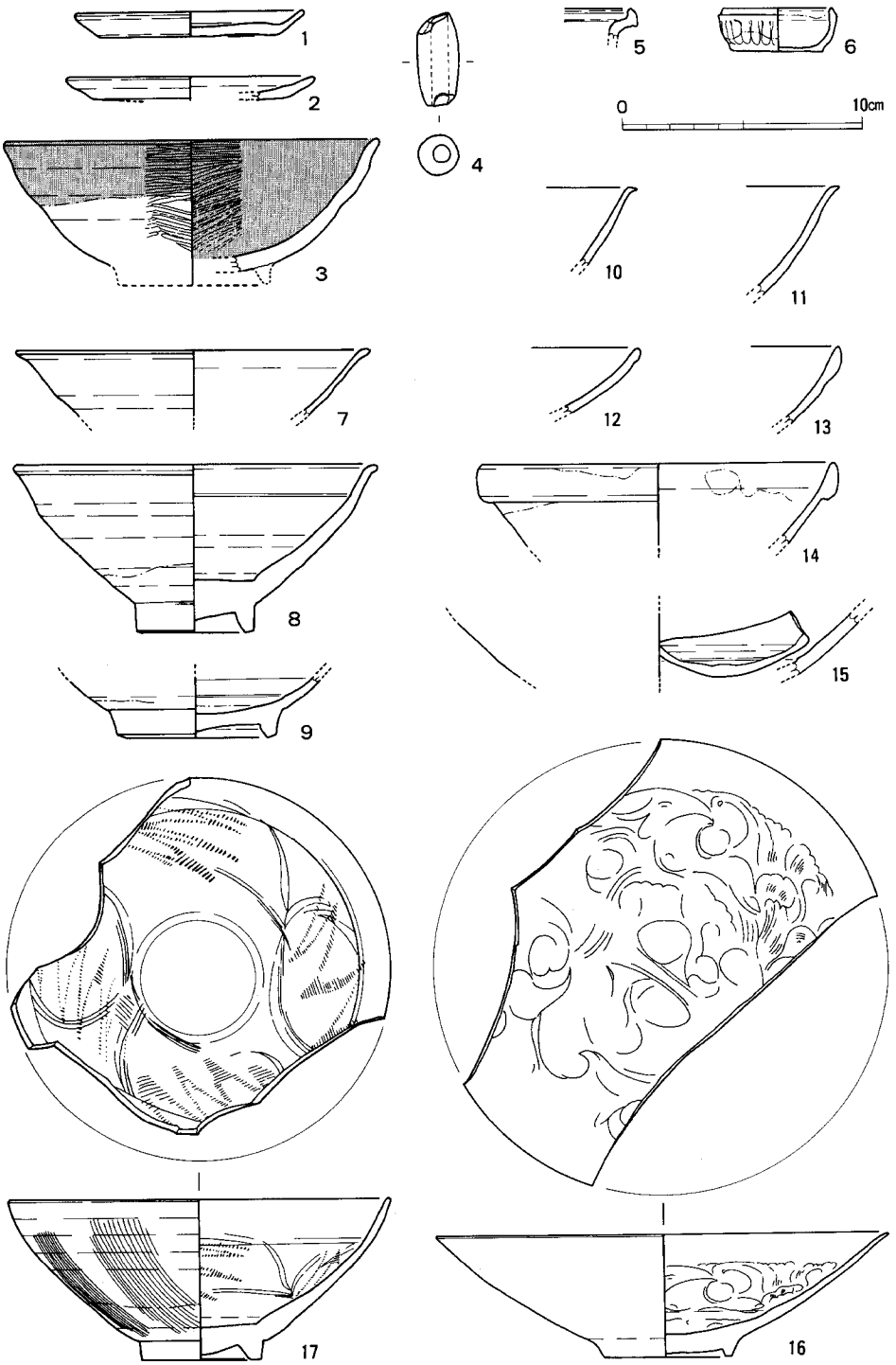
井戸の埋土は，大きく３層にわかれる。各層は整合面をなしており，堆積状況に混乱はみとめられない。①層からは上位で白



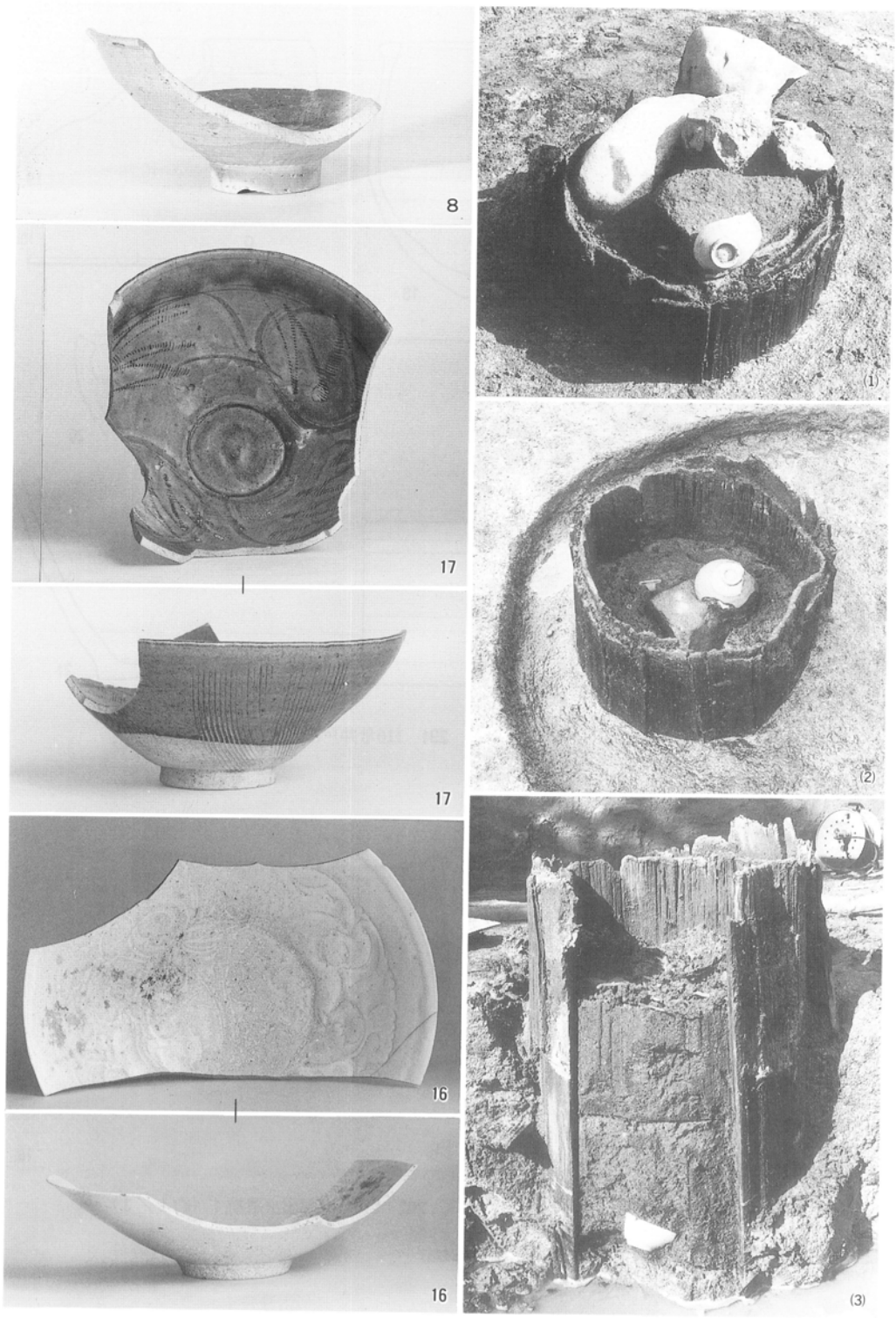
287 110号井戸実測図



288 110号井戸（南より）



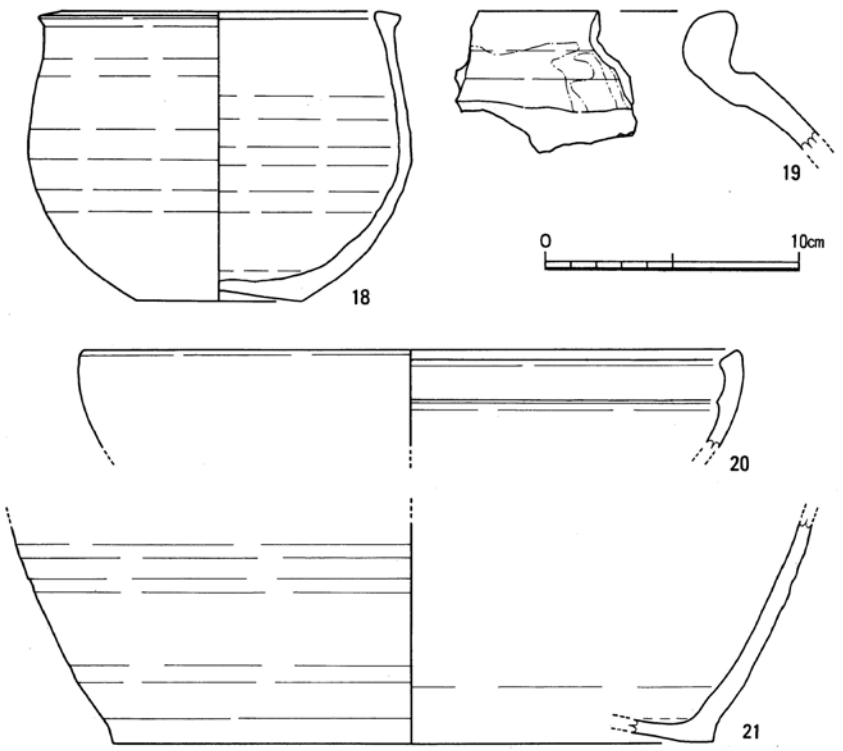
289 110号井戸出土遺物１（１／３）



290　110号井戸出土遺物２および出土状況

磁埦（**8**），中位で青磁碗（**17**），②層からは白磁碗（**16**）が出土している。ただし，井戸廃棄後の埋積過程に大きな時間的幅を想定できないとすれば，これら出土遺物における上下関係は，必ずしも前後関係を意味しない。

1・2は，**土師器**の皿である。口径9.7～10.5cm，器高1.1cm。糸切りである。**3**は**内黒土器**の埦である。高台を欠く。**4**は土錘である。**5**は**瓦器**で，鉢の口縁部と思われる。**6**は**青白磁**の合子である。**7**は**越州窯系青磁**の碗である。**8**～**16**は**白磁**で，**15**の内面には釉下褐彩がみられる。**17**は**青磁**である。同安窯系の碗と考えられる。**18・19**は**褐釉陶器**である。**18**は鉢，**19**は甕の口縁である。**20**は**無釉陶器**の鉢である。**21**は**黄釉陶器**の盤である。

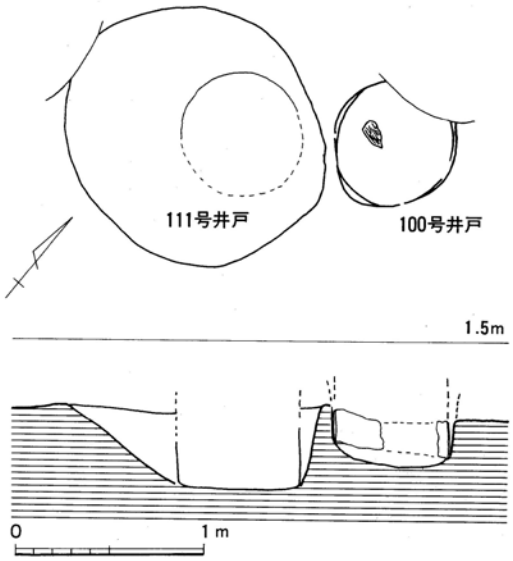


291　110号井戸出土遺物３（１／３）

292　110号井戸出土遺物４（約１／３）

111号井戸

Ⅶ面Ｂ－01区で検出した井戸である。100号井戸（878号土壙）を切り，109号井戸に切られる。掘りかたは径148㎝前後をはかり，掘りかたの中心から東に片寄って，直径66㎝の井戸側が検出された。井戸側は木質しか残っていなかったが，おそらく木桶であろう。最下部の水溜については，湧水のため確認できなかった。

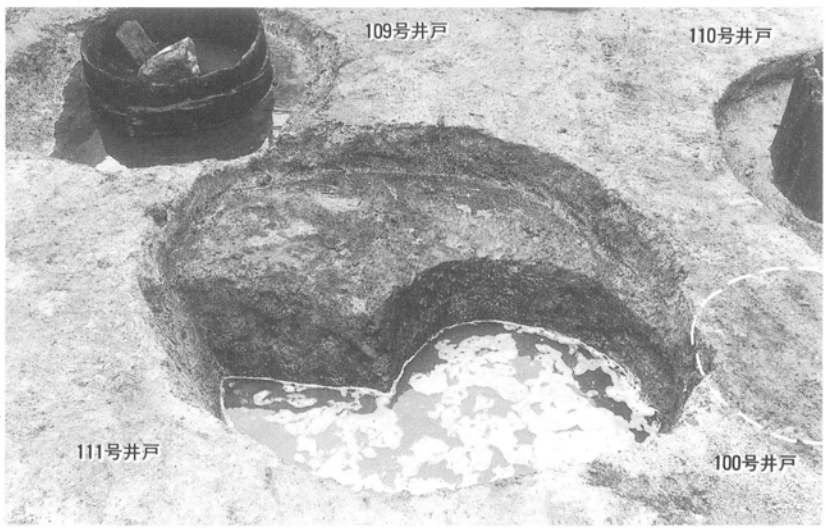


293　100号井戸・111号井戸実測図（１／40）

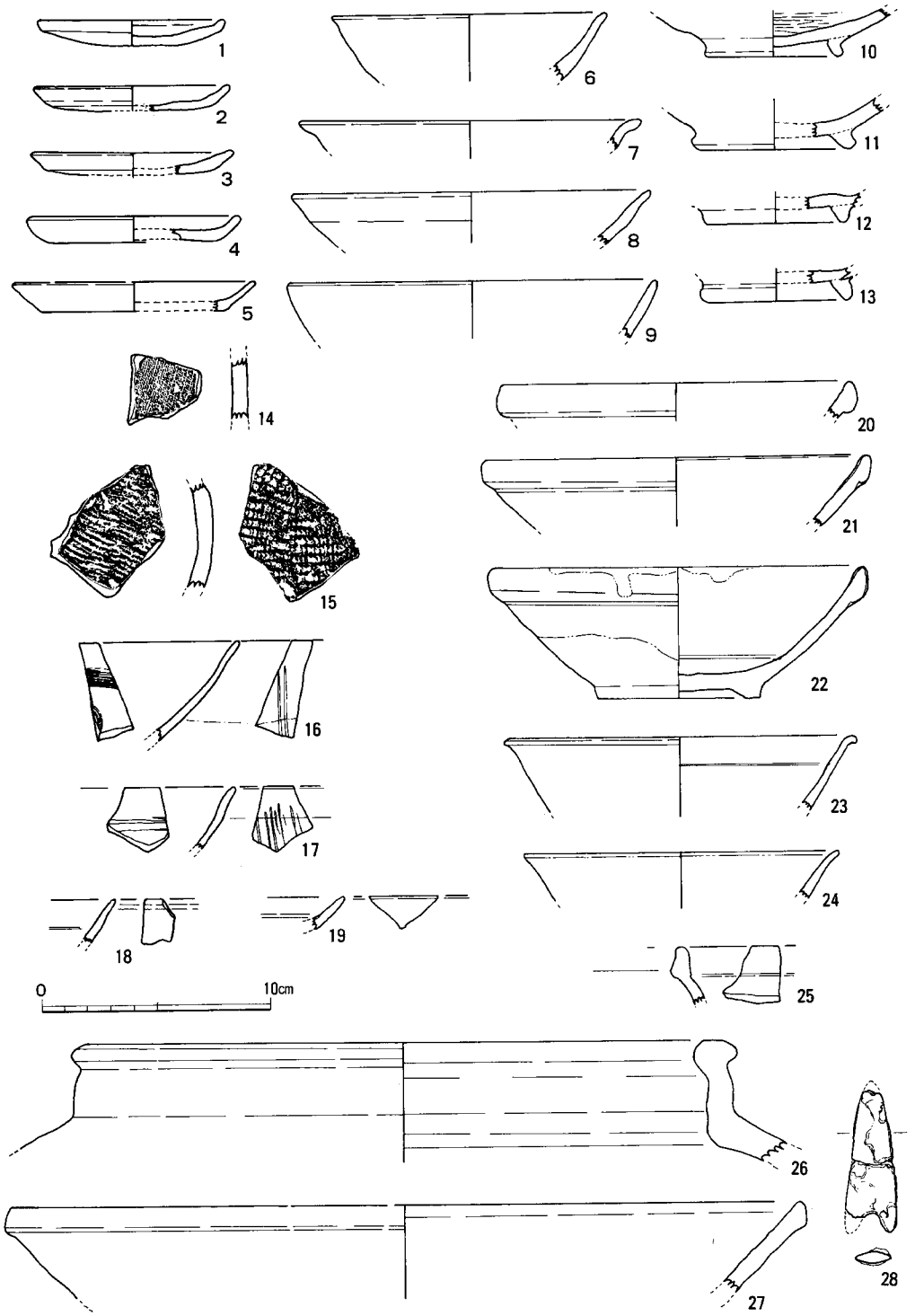
１～５・14は**土師器**である。**１～５**は皿である。**１**は「て」の字状口縁の皿で，搬入土器である。**２～５**は，口径8.8～10.8㎝，器高1.1～1.3㎝をはかる。**14**は焼塩壺の小片である。内面に細かい布目がみられる。**６～13**は，在地産の**瓦器**椀である。**15**は，**須恵器**の甕の小片である。外面に格子目叩き，内面に平行叩き痕を残す。**27**は，**瓦質土器**の鉢である。小片の為，スリ目の有無は確認できない。

16～19は**青磁**である。**16～18**は碗である。**16**は体部外面に片切彫で縦線文を入れる。**17**は櫛描文である。同安窯系青磁である。**18**は，内面の口縁直下に１条の沈線がめぐる。**19**は皿である。**20～24**は**白磁**の碗である。**20～22**は口縁を玉縁につくる。**24**は口縁部の釉をかき取り，口ハゲにつくる。**25・26**は**陶器**である。**25**は壺の口縁である。**26**は甕である。

28は**鉄鏃**である。凹基式の無茎鏃である。形態的には，古墳時代前期を下らない資料である。



294　111号井戸（南より）



295 111号井戸出土遺物（1／3）

(6) 古代Ⅱ期の遺構

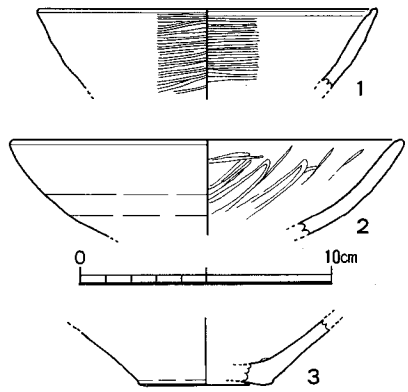
① 土壙

876号土壙

Ⅶ面B－03区・04区にまたがって検出された土壙である。長軸290cm，短軸140cm，深さ39cmをはかる。

1・2は，**瓦器**である。**1**は楠葉型瓦器椀である。内面は密にヘラミガキ，外面は若干間をおいてヘラミガキが施される。内面の口縁部直下には，沈線が1条めぐる。**2**は在地産の椀である。内面の上位には，コテあて痕が横にならび，その上に内面全体を大きくジグザグ状にヘラミガキする。体部外面中位以下には炭素の吸着はみられず，灰色を呈する。

3は**越州窯系青磁**碗である。見込みと畳付に目痕がみられる。

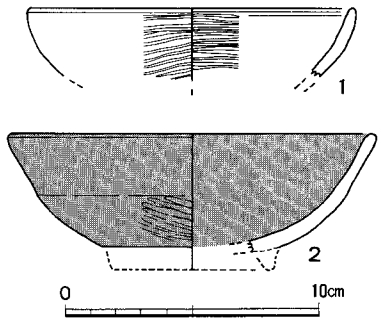


296 876号土壙出土遺物（1／3）

880号土壙

Ⅶ面B－04区より検出した不整形の土壙である。長軸144cm，短軸128cm，深さ23cmをはかる。

1は楠葉型**瓦器**椀である。内面は密にヘラミガキ，外面は若干間をあけたヘラミガキが施される。口縁部直下には沈線が1条めぐる。**2**は**黒色土器**の椀である。内外面には丁寧なヘラミガキが施される。高台は剝離している。漆黒色を呈する。

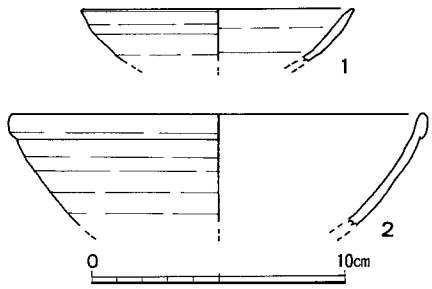


297 880号土壙出土遺物（1／3）

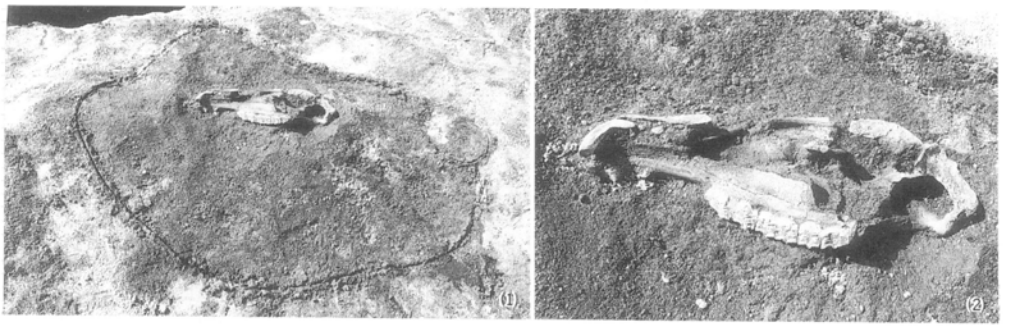
883号土壙

Ⅶ面B－02区で検出した土壙である。長径98cm短径72cmの楕円形を呈し，深さ15cmをはかる。埋土上面より馬の頭骨が出土した。下顎骨を欠き，また他の骨は全く出土していない。

1・2は**白磁**である。**1**は皿，**2**は碗である。**2**は口縁を小さく扁平な玉縁につくる。



298 883号土壙出土遺物（1／3）



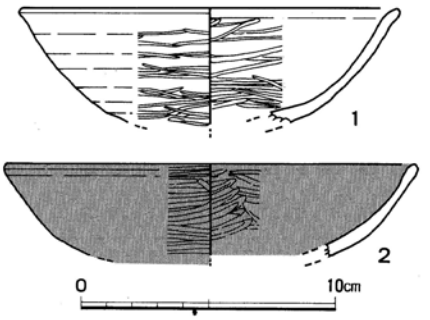
299　883号土壙馬骨出土状況（東より）

886号土壙

Ⅶ面Ｂ－02区において検出した大形の土壙である。大半は東の調査区外に出ると思われる。調査した部分で，さしわたし最大約４ｍをはかる。深さ約30cm。

１は**土師器**の研磨土器の椀である。内面はヨコナデを施した後，コテをあてて平滑に整え，その上にヘラミガキを行なう。外面はヨコナデの上からまばらにヘラミガキする。口縁部は，体部にヘラミガキを行なった後にヨコナデを施す。

２は**黒色土器**の椀である。内外面には密にヘラミガキを施す。黒灰色を呈する。



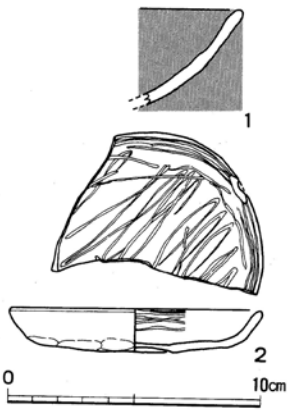
300　886号土壙出土遺物（１／３）

911号土壙

Ⅴ面Ｃ－01区より検出した土壙で，909号土壙に切られて，半ば以上を失なっていると思われる。調査しえた辺は，104cmをはかる。深さは40cmである。

１は**黒色土器**の椀である。丁寧なヘラミガキが施される。漆黒色を呈する。

２は楠葉型**瓦器**の皿である。体部内面は横位のヘラミガキ，内底部はジグザグ状に暗文が施される。体部外面はヨコナデ，外底部には掌紋がみられる。



301　911号土壙出土遺物

(7) 古代Ⅰ期の遺構

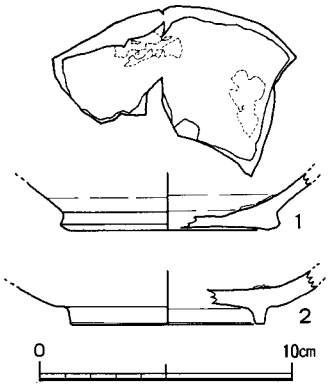
① 土壙

874号土壙

Ⅶ面B－03区で検出した楕円形を呈する土壙である。西半部は調査区外に出る。調査しえた部分で，長径方向124cm，短径108cm，深さ33cmをはかる。

1・2は**越州窯系青磁**碗である。**1**は平高台で体部下半から外底部を露胎とする。見込みには目痕がみられる。**2**は輪高台につくる。全面に施釉している。見込みには目痕がみとめられる。

その他，須恵器片，土師器片等が出土している。



302 874号土壙出土遺物

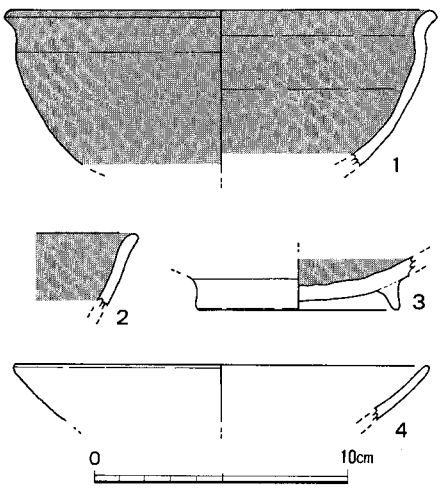
905号土壙

Ⅴ面C－01区で検出した楕円形の土壙である。長径80cm，短径74cm，深さ61cmをはかる。

1は**黒色土器**の埦である。内外面とも丁寧なヘラミガキを施す。黒褐色。

2・3は**内黒土器**の埦である。**2**は口縁部片，**3**は底部片である。**2**は内面ヘラミガキ，外面ヨコナデ。**3**は内面ヘラミガキ，高台はヨコナデし，外底部はヘラ切りして板目圧痕がのこる。

4は**越州窯系青磁**碗である。灰茶色の緻密な胎土に，緑黄色の半透明釉がかかる。釉表面にはこまかい氷裂がみとめられる。



303 905号土壙出土遺物（1／3）

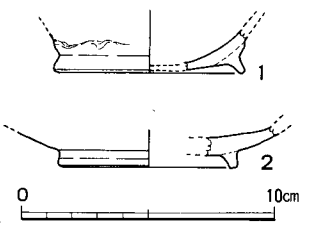
② 柱穴状小土壙

2149号ピット

Ⅶ面C－02区で検出した柱穴である。径36cm，深さ17cm。

1は**土師器**の高台付埦である。ヨコナデで整形する。

2は**緑釉陶器**の埦である。須恵質の硬胎に緑灰色の不透明釉がうすくかかる。

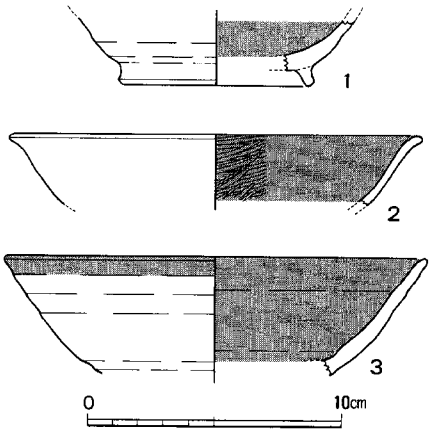


304 2149号ピット出土遺物

2439号ピット

Ⅶ面C－02区で検出した柱穴である。

1～**3**は，**内黒土器**の埦である。**1**は底部片である。内面はヘラミガキ，外面はヨコナデを施す。内面は漆黒色を呈する。**2**は体部片である。内面を密にヘラミガキ，外面はヨコナデする。内面は漆黒色を呈する。**3**は体部片である。内面はヘラミガキ，外面はヨコナデする。内面から口縁部外側まで炭素が吸着し，茶褐色を呈する。



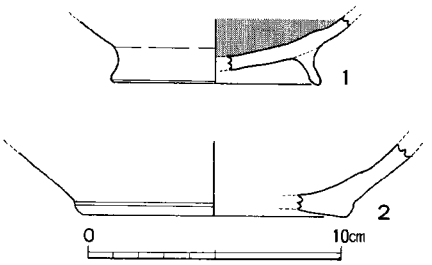
305 2439号ピット出土遺物（1／3）

2445号ピット

Ⅶ面C－02区で検出した柱穴である。

1は，**内黒土器**である。内面はヘラミガキ，外面はヨコナデする。内面は黒色を呈する。

2は，**越州窯系青磁**の碗である。外面（体部下半）は露胎である。灰褐色の緻密な胎土に，灰黄色の不透明釉をかける。



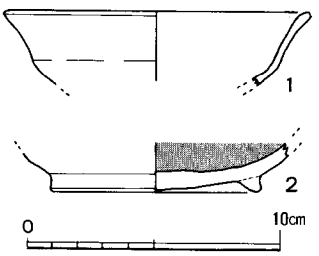
306 2445号ピット出土遺物（1／3）

2620号ピット

Ⅶ面C－01区で検出した小土壙である。

1は**土師器**の埦である。体部は，内外面ともヨコナデ調整を施す。

2は**内黒土器**埦である。内面はヘラミガキ，高台から体部外面はヨコナデ，外底部にはナデを施す。内面は，漆黒色を呈する。

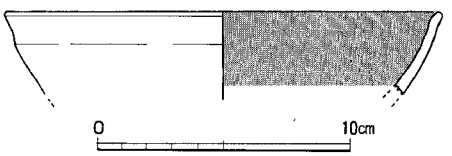


307 2620号ピット出土遺物

2681号ピット

Ⅶ面C－01区で検出した柱穴である。

1は**内黒土器**である。内面はヘラミガキ，外面はヨコナデする。内面には炭素が吸着し，淡灰褐色を呈する。



308 2681号ピット出土遺物

③　井戸

127号井戸

Ⅶ面C－02区において検出した井戸である。Ⅶ面C－01区から02区にかけては，104号・105号・108号・116号～121号・124号・125号・127号の12基の井戸が密集して切り合っていた。127号井戸は，これらの井戸の内最も遡るもので，112号井戸・118号井戸に切られていたため，全体の３分の１程度を検出しえたにすぎない。

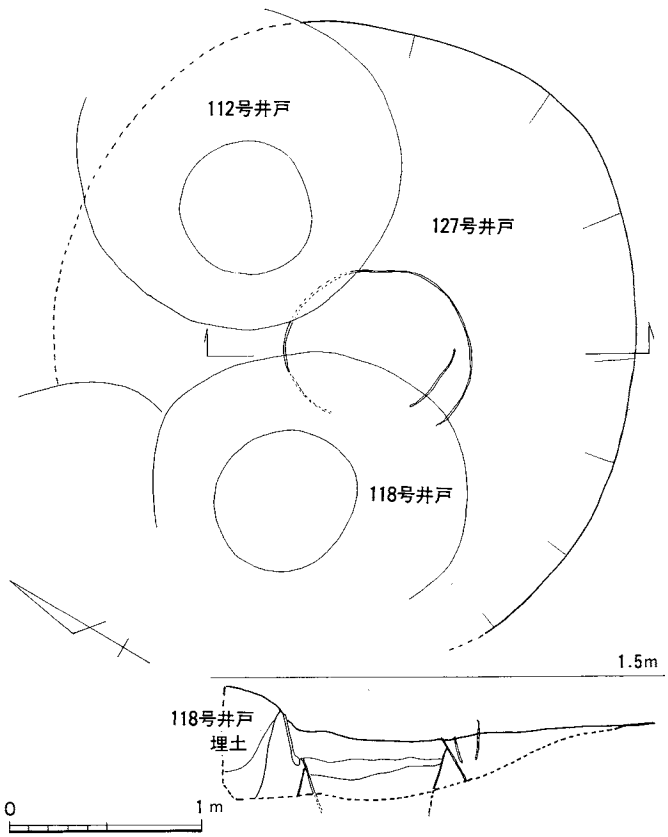
掘りかたは，復原直径320cmと思われる。浅いすり鉢状を呈する。井戸本体の部分は，北側で３重，南側で４重に木質および木質痕跡が検出され，その構造・木のつながりが曖昧である。最も外側のものを井戸側とすると，井戸側の復原直径は約104cmとなる。また，土層断面にみられた，最も内側で鉢形にひらいて立つ１組の木質を水溜とすると，水溜はその上端で直径74cmをはかる。湧水のため，標高0.7m付近から下は，調査できなかった。

出土遺物は，土師器・須恵器・内黒土器・緑釉陶器・越州窯系青磁・瓦・石鍋等である。

１～10は，**土師器**である。

１～６は坏で，口径11.3～12.8cm，器高3.2～3.3cmをはかる。胎土は生目細かく，淡茶色を呈する。いずれも焼成は良好である。外底部はヘラ切りする。体部は内外面ともにヨコナデ調整，内底はナデ調整を施す。**７～10**は椀である。**７**は，口縁部の内外にヘラミガキを施す。胎土は，砂粒を少量含むが，生目は細かい。**８～10**は，付け高台である。

11・12・23～25は**須恵器**である。**11**は坏蓋の小片である。端部は下方に小さく折りまげる。**12**は鉢である。口縁部を丸く肥厚させる。**23・24**は同一個体と思われる。壺の胴部



309　127号井戸実測図（１／40）

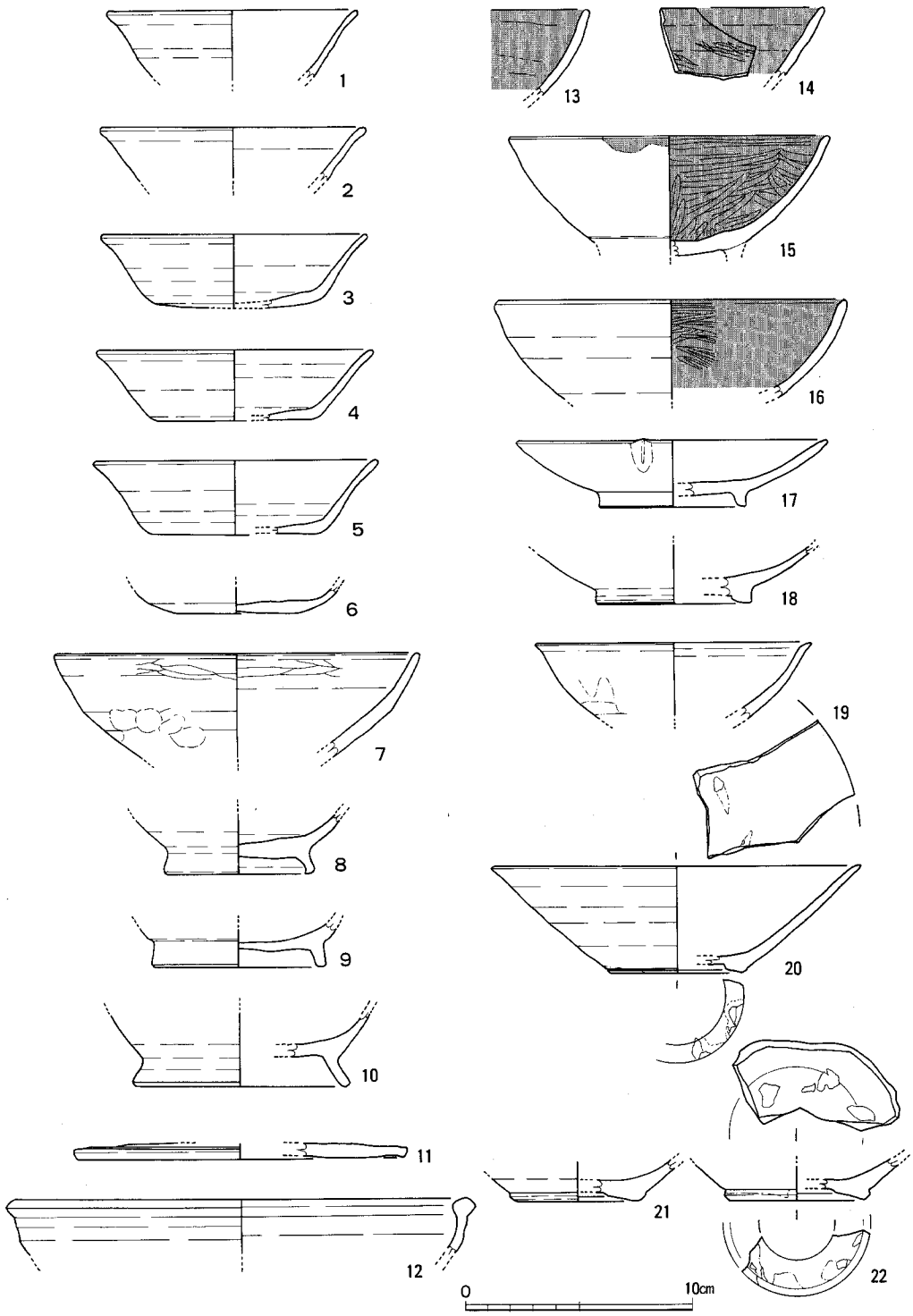
310　127号井戸　(1)北より

(2)土層断面（西より）

片である。外面は，格子目叩きを施す。内面はナデ調整を行なうが，指頭痕を消すにはいたらず，指頭痕の凹凸は明瞭にみとめられる。**25**は甕である。外面は，斜め方向に細かい刷毛目がくっきりと刻みこまれている。叩き痕を刷毛目調整で消していると思われる。内面には，青海波文様の同心円叩きを施す。

13〜16は，**内黒土器**の椀である。内面のヘラミガキは，体部は分割ヘラミガキ，内底部は一方向にジグザグのヘラミガキとなる。外面はヨコナデである。**15**は高台が剝落している。外底部は，ヘラ切りである。いずれも，内面に炭素を吸着させるため，外面は淡褐色〜茶褐色，内面は漆黒色〜黒色を呈する。

17・18は，**緑釉陶器**である。**17**は皿で，口縁を外側からくぼませて輪花につくる。全体の4分の1程の破片なので，輪花の数は不明。器壁は内外面とも全面にヘラミガキを施す。高台畳付はヘラ先で沈線状にくぼませる。淡褐色で若干の砂粒をまじえた土師質の軟胎に，鮮緑色の釉を全面に厚く施す。釉はガラス質を呈し，氷裂がみとめられる。**18**は椀の削り出し高台片で



311 127号井戸出土遺物１（１／３）

ある。内面は密にヘラミガキする。外面は，体部中位以上をヘラミガキ，下位はヘラケズリをとどめる。体部と高台との境目は，ヘラ状工具先端によって凹線状にくぼむ。高台外面はケズリ，畳付はヨコナデする。胎土は灰色の須恵質硬胎で，黒土粒，気孔がみられる。釉は灰緑色を呈し，うすく施される。高台畳付から外底部は，露胎となる。

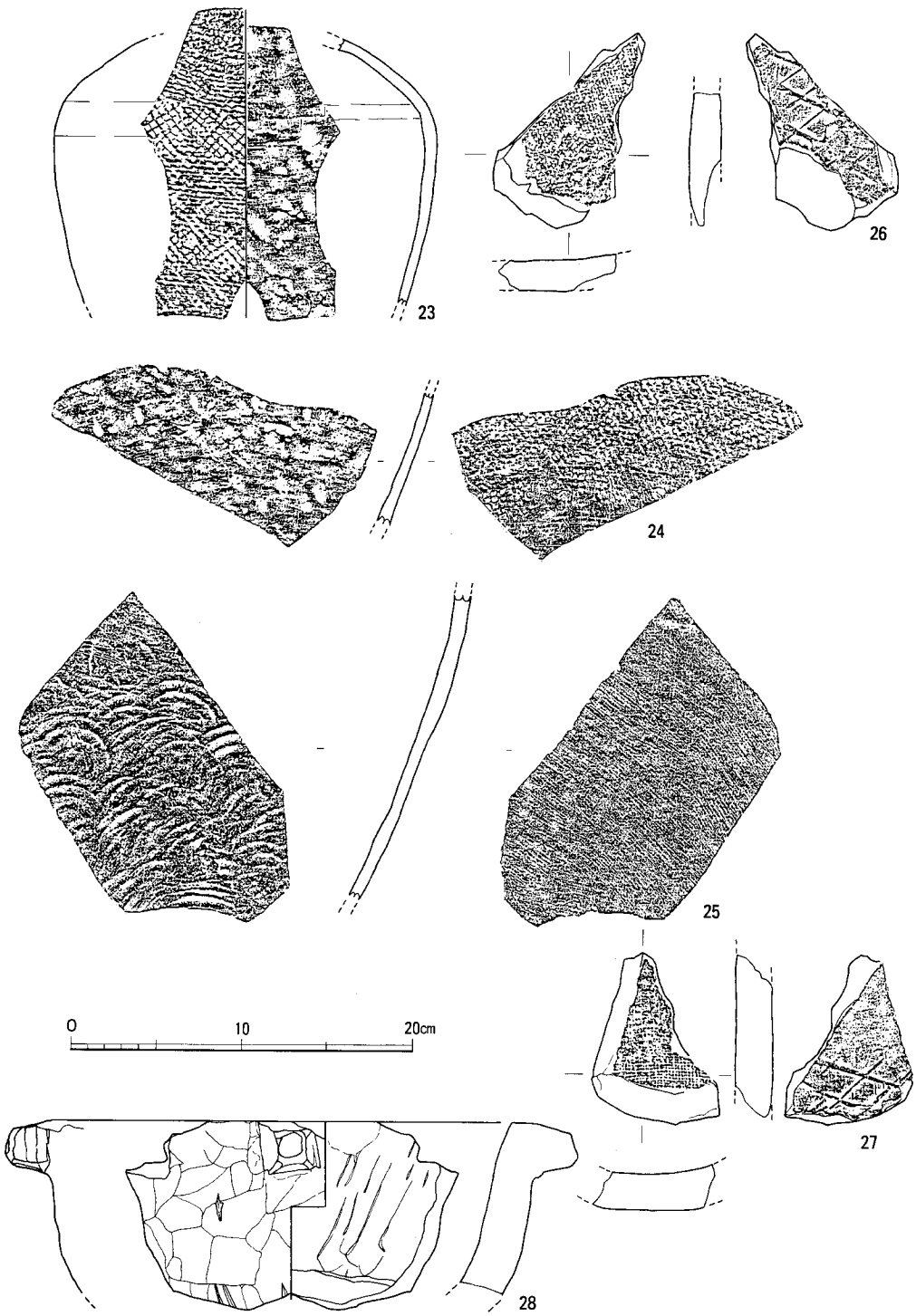
312　127号井戸出土遺物２（約１／３）

19～22は，**越州窯系青磁**碗である。**19**は体部外面下位を露胎とする。体部外面中位には，化粧がけがみられる。**20**は，蛇の目高台につくる。畳付から外底部を露胎とする。見込みと畳付に，重ね焼きの目痕がみられる。**21**も蛇の目高台である。釉は全体に施され，畳付外側角のみ，研磨したかの様に丸味を持ち，釉もとれている。**22**も蛇の目高台につくる。体部下位から外底は露胎となる。白化粧がみられる。見込みと畳付に目痕有。

26・67は**瓦**である。

28は**滑石製石鍋**である。煤が付着する。

4・7・13～19・21・23～25・28は井戸側内より出土している。



313 127号井戸出土遺物３（１／４）

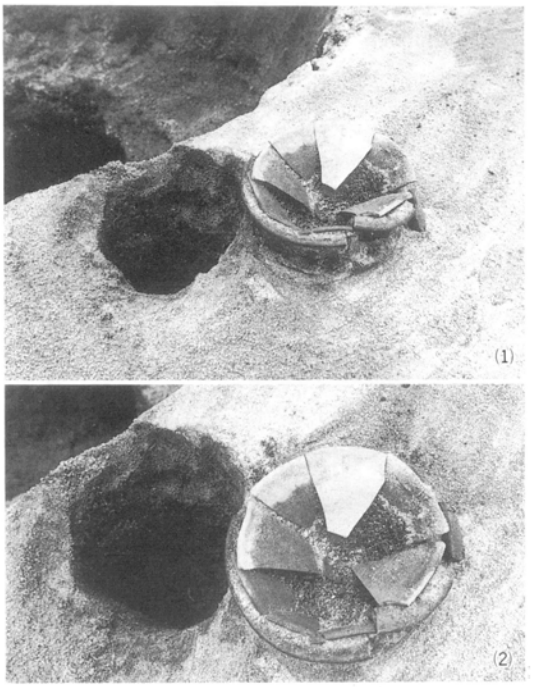
④　地鎮遺構

ＳＸ27

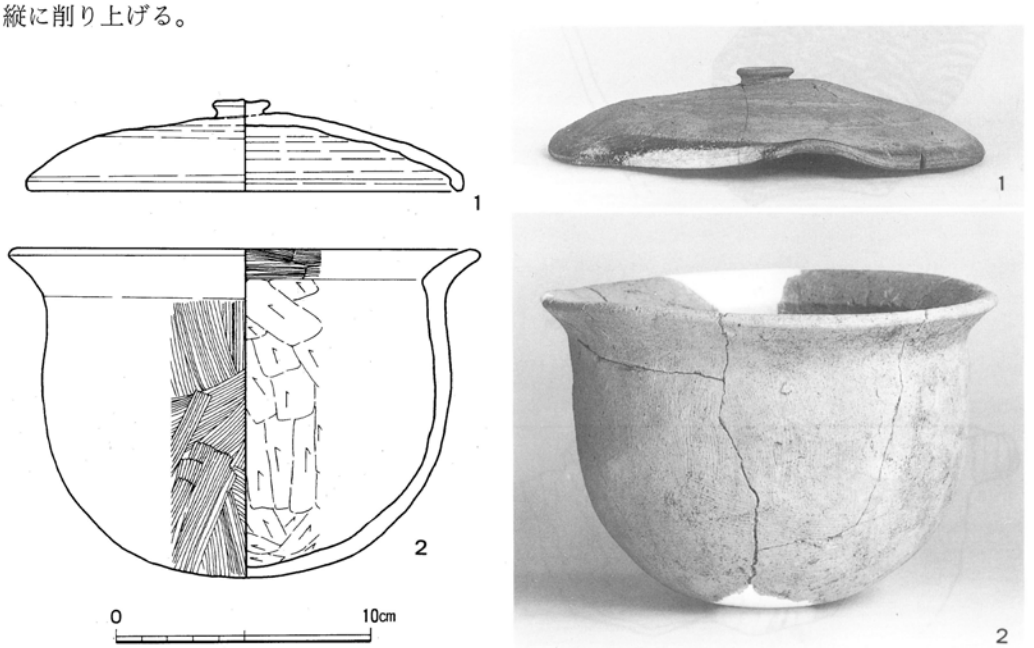
Ⅶ面Ｃ－01区より検出した遺構である。土師器の甕に須恵器の坏蓋をかぶせたもので，地鎮遺構と解される。掘りかたは検出されず，甕の大きさギリギリに土壙を掘って埋置したものと考えられる。甕内には，砂がつまっていたが，周囲の砂と異質なところはない。しかし，蓋は割れていたが，甕の底までは落ちこんでいなかったので，甕内が空洞であったとは思われず，少なくとも半分程度は砂がつめてあったものと解される。

１は**須恵器**の蓋である。口縁端部を下に折り返す。

２は**土師器**の甕である。体部外面はタテハケ，口縁部内面はヨコハケ，体部内面は縦に削り上げる。



314　ＳＸ27（西南より）



315　ＳＸ27出土遺物（１／３）

(8) その他の遺構・遺物

① 建物址

博多遺跡群では，遺構の密集と重複によって建物址の抽出は困難とされてきた。今調査においてもその推定はむずかしく，わずかに10棟を復原できたにとどまった。この10棟についてはFig. 316～Fig. 318に図示し，以下に補足説明を加える。

1号建物址　I面A－04区。722号土壙埋土の上面に礎石をおく。また礎石はI面をおおう焼土層の中と下から検出されており，この焼土が戦国時代末期島津氏の焼き打ちによるものとすると，1号建物はこの焼け跡からの再興の際にならされたこととなり，1583年を下限とする。

2号建物址　II面B－01区。51号配石遺構に切られている。

3号建物址　II面B－03・04区。礎石列。塀の可能性がある。ただし高低にバラつきがある。主軸方位は，N－41°40′－Eにとる。

4号建物址　III面B－03区。

5号建物址　IV面B－04区。南側に張り出し状の柱穴がみられる。建物全体の規模からすると縁側を持つ建物とは考えがたく，おそらくは土庇の柱穴であろう。839号土壙を切る。839号土壙は中世III期でも早い段階と思われるから，5号建物址は中世III期前半に位置付けられる。

6号建物址　IV面B－04区。梁に半間の庇の出がつく。5号建物址と重複し，これを切る。

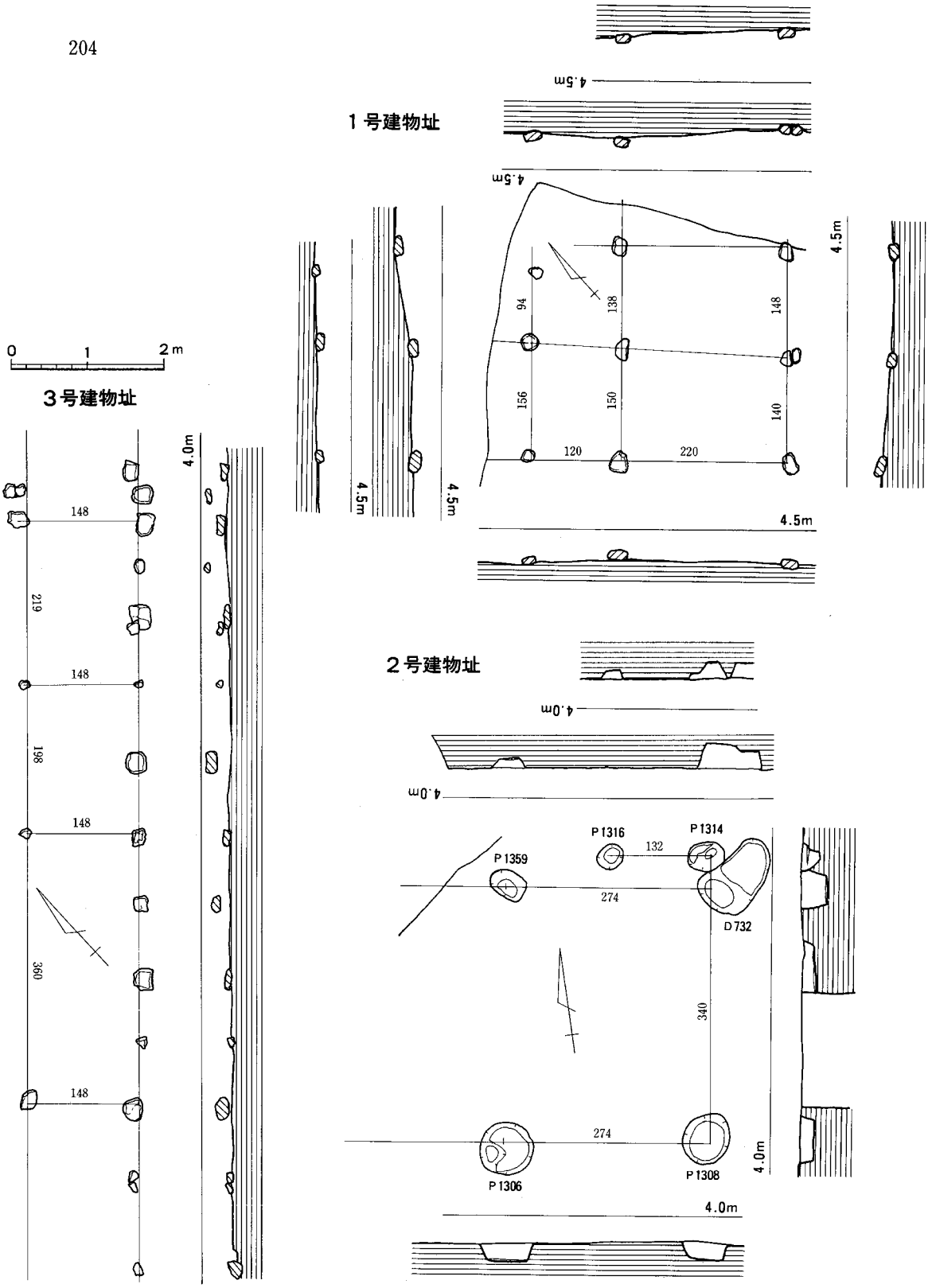
7号建物址　IV面B－04区。梁間2間，桁行2間の総柱建物。全体にいびつな配列をとる。846号土壙に切られている。846号土壙は，中世II期とした土壙である。したがって，中世II期を下ることはない。

8号建物址　IV面B－03・C－01区。梁間2間（間に柱が立たず外見上は1間）に半間の庇または縁がつく。建物規模・柱配置のバラつきからみて，身舎に床を張った可能性は低いと思われるので，土庇であろう。2370号ピットより遺物が出土している。小片であるが，中世II期に属する。埋甕遺構（2266号ピット）を身舎にとりこむが，同時関係は明らかではない。

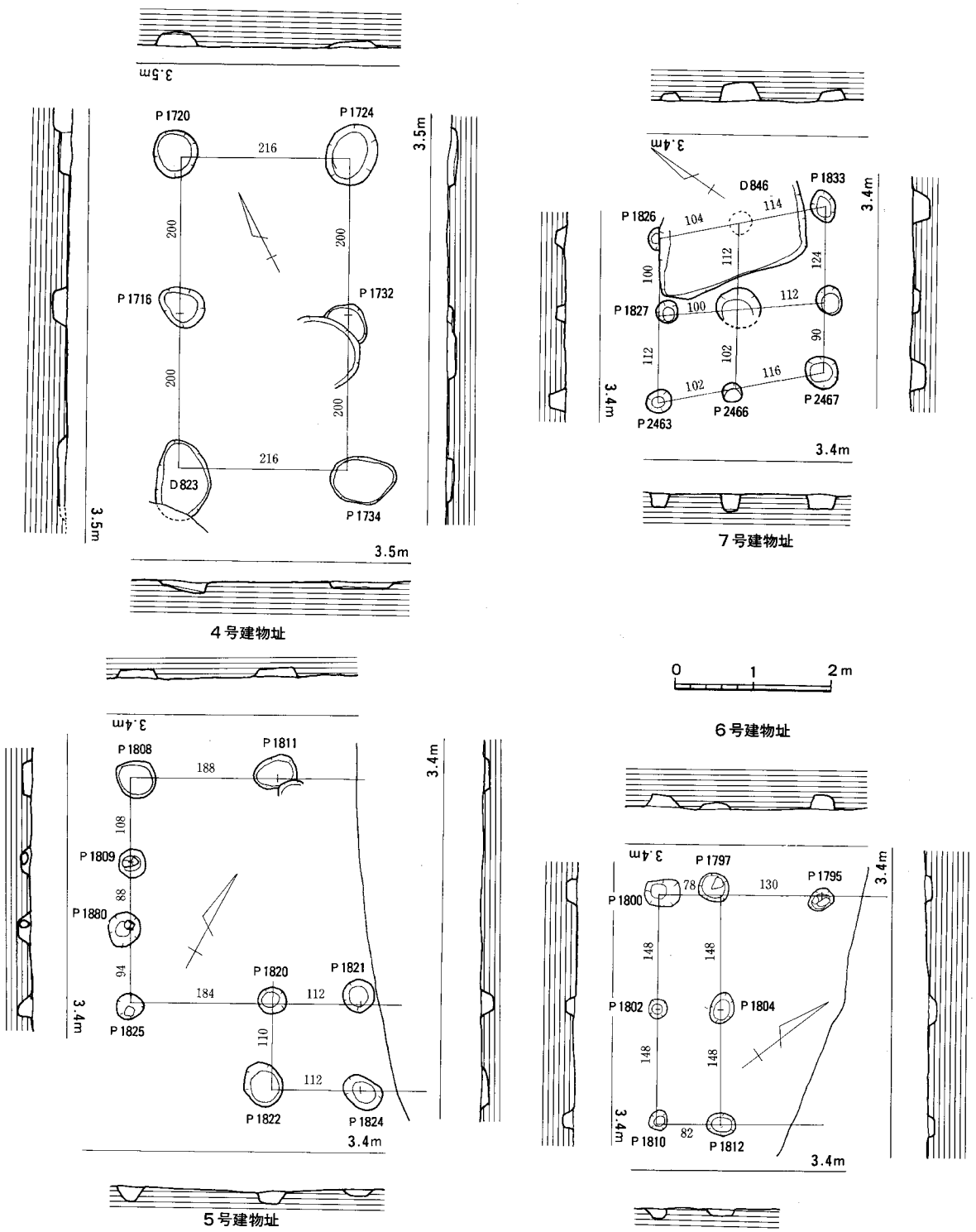
9号建物址　IV面A－03・B－01区。中世III期に属する854号土壙，15号溝よりも新しい。したがって，15世紀を遡るものではない。

10号建物址　VII面B－01区。879号土壙に切られている。879号土壙は中世I期の土壙で，10号建物址も中世I期以前，おそらくは12世紀代におかれる。

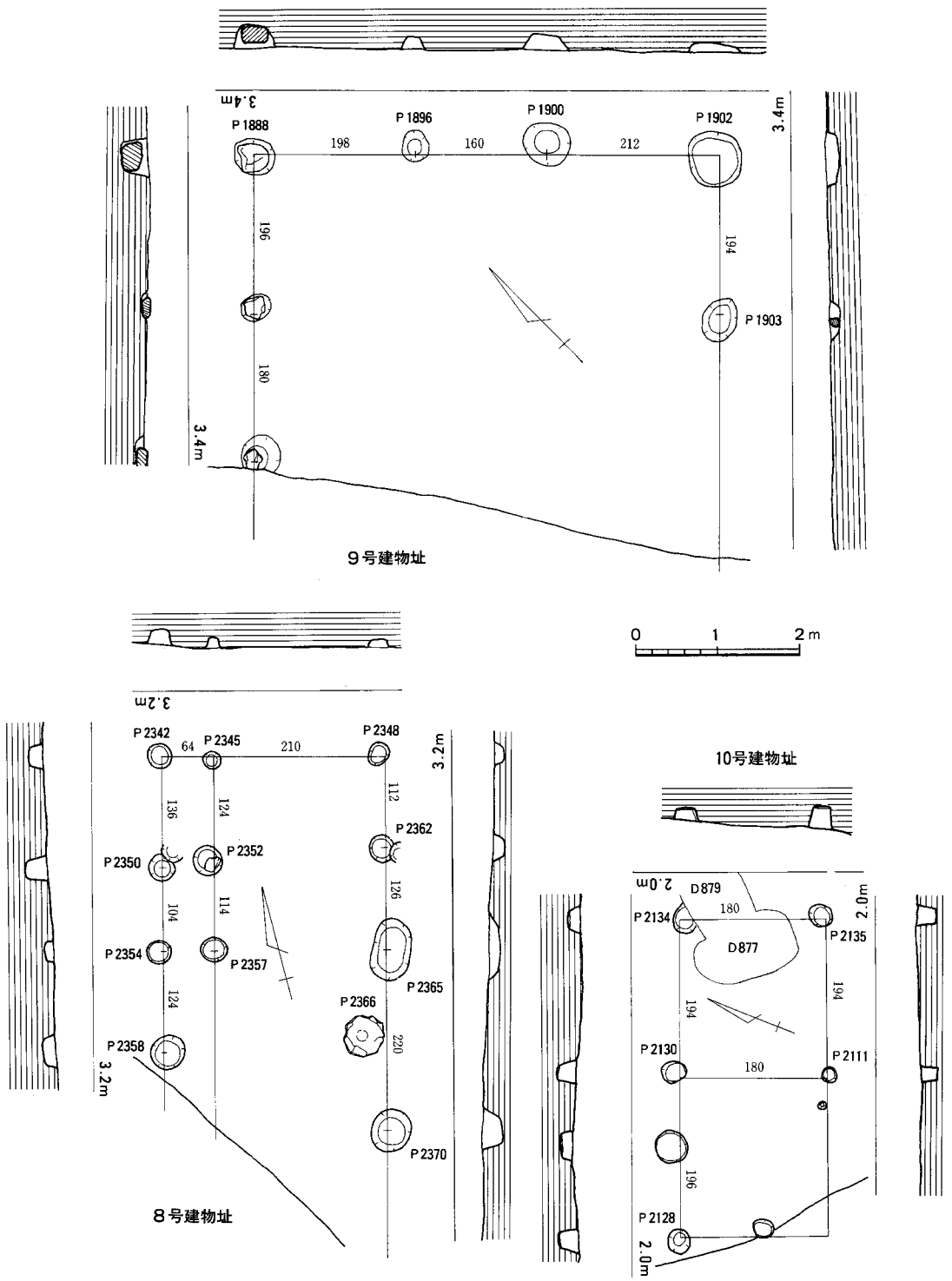
その他，VII面B－03，04，C－01，02区においては，多数の柱穴が検出された。それらは，柱穴の密集の疎密から，大体の建物の輪郭を描いている様にみられるが，建物址として柱穴を抽出することはできなかった。おそらく柱筋，柱間等にバラつきがあるためであろう。またI面からVI面までの各面においても，途中まで柱穴を並べることのできる配列はみとめられた。



316 建物址実測図1（1／80）



317　建物址実測図２（１／80）



318 建物址実測図３（１／80）

② その他の出土遺物

これまでで触れることのできなかった，遺構出土遺物，包含層出土遺物の内，看過できないと思われるものを抽出し，その種類別に図示する。

Fig. 319に示したのは，**土師器**である。**1・2**は，胎土・整形等，在地の土器とするには疑問が残る。**3**は耳皿である。**6～11**は，**早島式土器埦**である。**12～23**は，**「て」の字状口縁皿**である。胎土・色調から在地における模倣ではないと思われる。**26～35**は，山口県の大内氏館址などでみられる土器で，胎土・色調から在地産ではなく搬入土器と考える。

Fig. 320は，古代の**国産施釉陶器**である。**38～53**は**緑釉陶器**である。**38**は香炉の蓋か。沈線で花文を刻む。**54～65**は**灰釉陶器**である。

Fig. 321・322は，中世の**国産陶器**である。**66～76**は**瀬戸焼**である。**67・71**は鉄釉，他は灰釉を施す。**77**は，**常滑焼**の甕口縁である。12世紀後半のものである。**78～86**は**備前焼**である。**82**は，備前焼Ⅰ期末（鎌倉時代初頭）の甕口縁である。

Fig. 323・324は，**青磁**である。**107**は双環を下げる壺の頸部である。**109**は，酒会壺の小片である。**111**は獣面脚である。

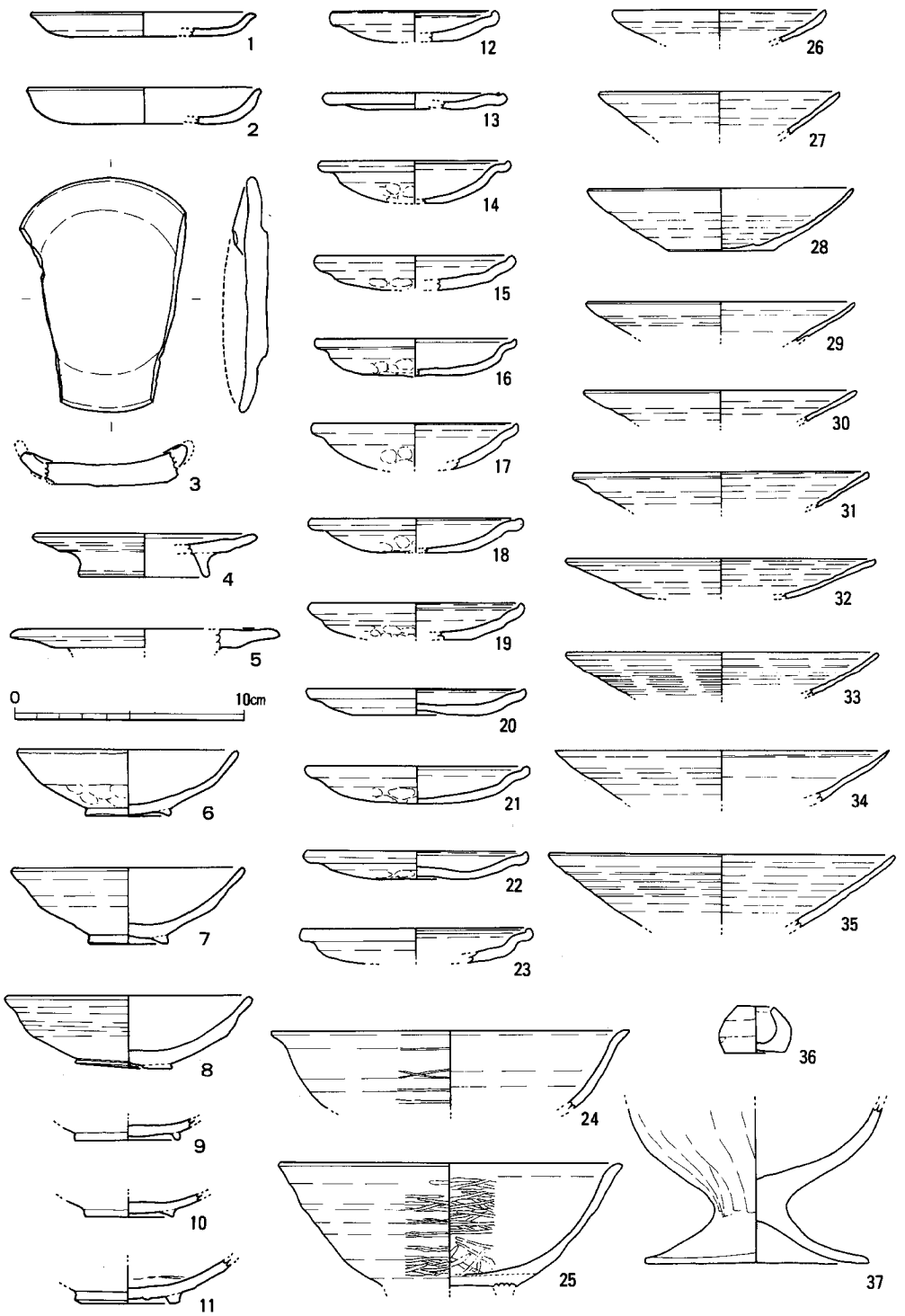
Fig. 325・326は，**白磁・青白磁**である。**114～142**は白磁，**143～158**は青白磁である。**131**は，高台を蛇の目高台につくる小片で，今回の調査では1点しか出土していない。**139～142**は卵白釉をかける，枢府磁である。**156**の青白磁は小片だが，おそらく騎馬人物像の馬体前半分と人物膝頭部分であろう。

Fig. 327は**染付**である。**159**は**元代の染付**である。実測図はFig. 328左上に示した。

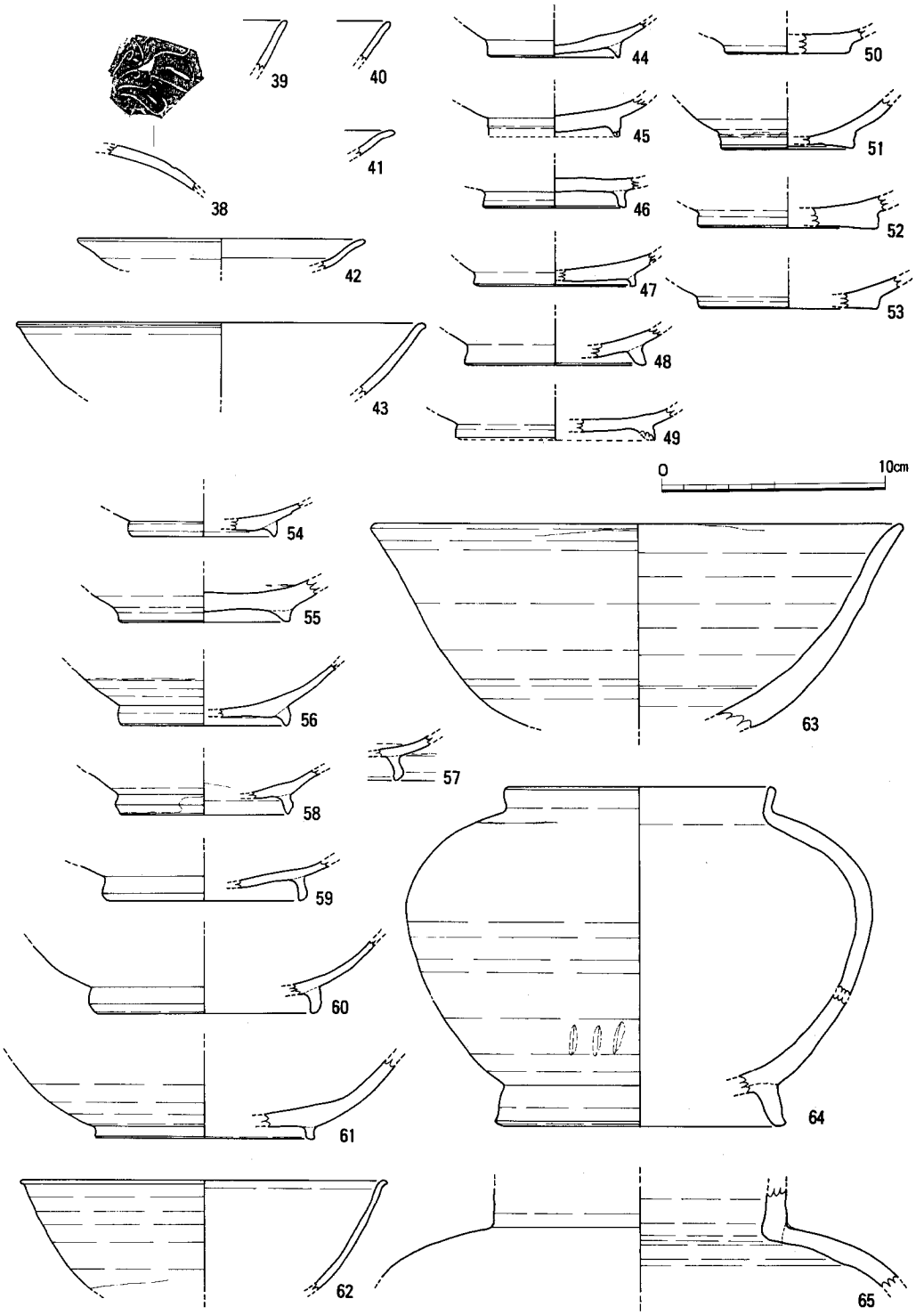
Fig. 328の**173**は，**イスラム陶器**である。小片の為，もとの形態・部位はわからない。イスラム陶器は，築港線関係第2次調査でも小片が出土した（市報184集未収録）。**174～178**は**ベトナム陶器**である。**176～178**は，鉄絵を施す。

Fig. 329，**179～184**は，高麗，李朝の**象嵌青磁**である。象嵌青磁の出土量が多いのも，築港線第2次・第3次調査の特徴である。

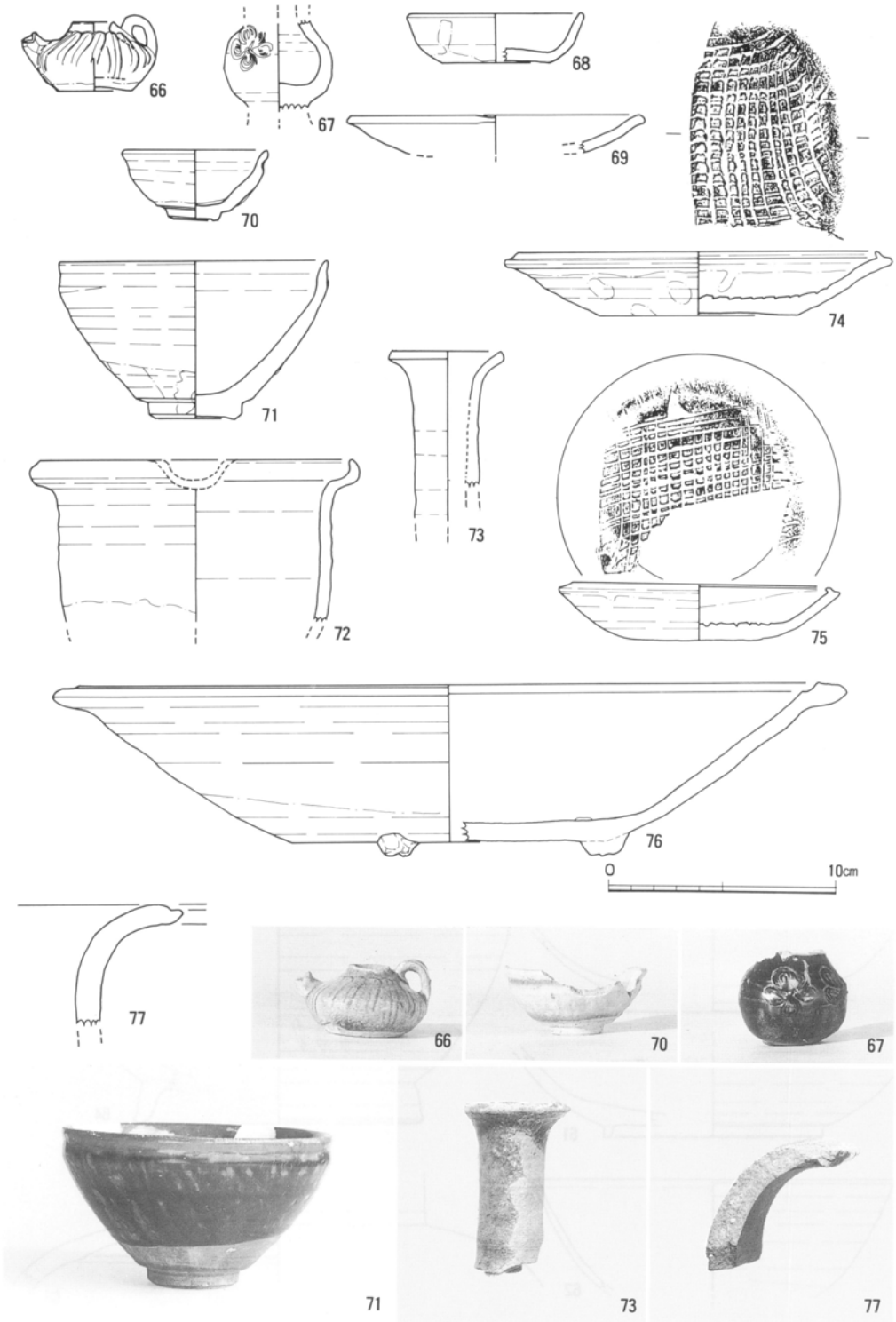
Fig. 330，**185～196**は，**骨製品**である。**185～194**は笄である。**195**は一部をくり抜いて中空とする。外面には全面に黒漆をかける。用途不明。**196**は，車輻状に細沈線を刻む。表面が黒ずんでいてはっきりしないが，漆をうすくかけた可能性がある。**197～201**は**石製品**である。**197～200**は滑石製である。**197**は錘。**198**は用途不明。**199～200**は，スタンプ状につくる。**201**は砥石である。**202～204**は**鉄製品**である。身幅，平造りである点から，短刀と思われる。**205・206**は**ガラス製品**である。**205**は深緑色の勾玉である。**206**は透明ガラスで，尖った方の先端には，小さな劈開がみられる。また反対側は平らにつくり，この側から半ばまで孔が穿たれる。この孔に軸をさしこんで回した独楽であろうか。



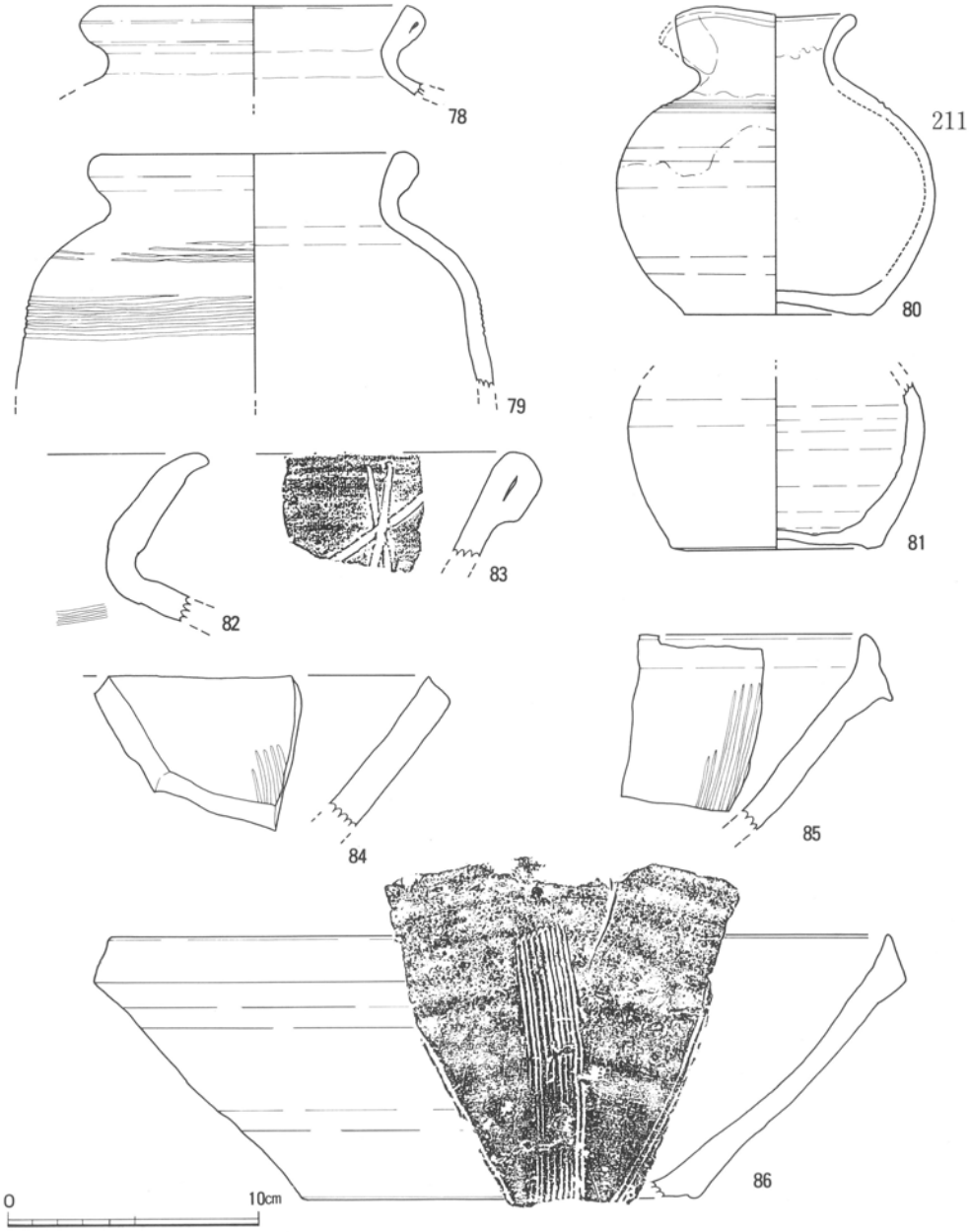
319 その他の出土遺物１（１／３）　土師皿・坏・椀

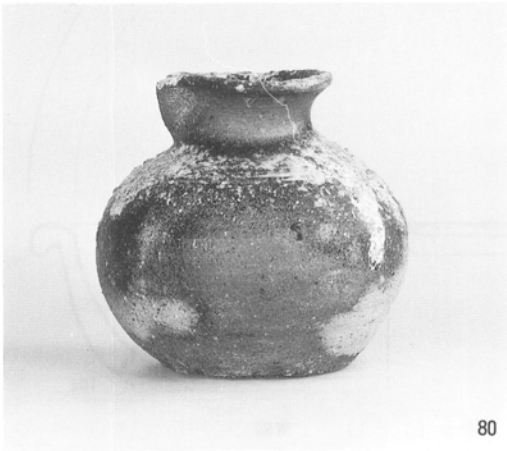


320　その他の出土遺物２（１／３）　　緑釉陶器・灰釉陶器

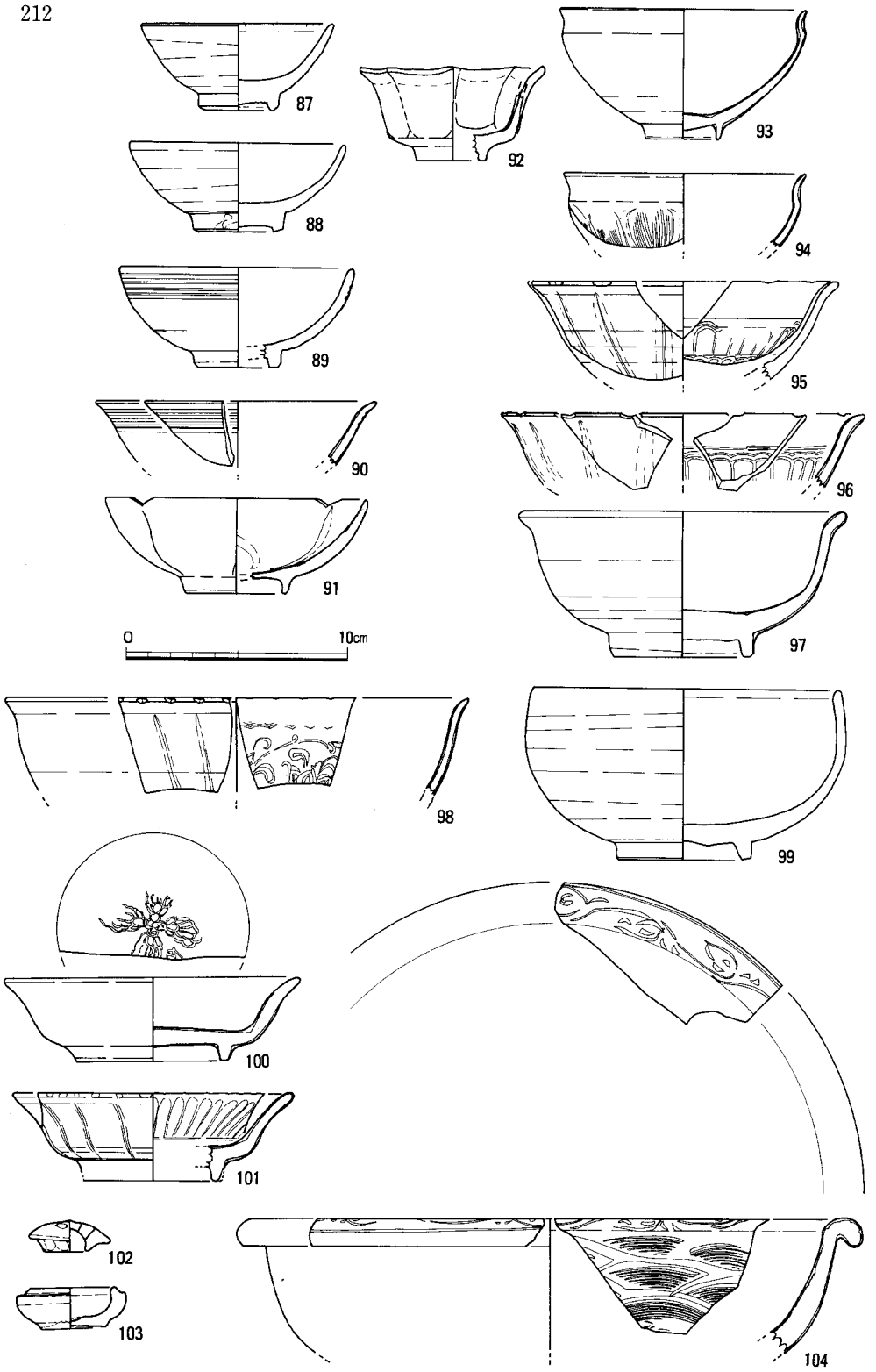


321　その他の出土遺物３（１／３）　　瀬戸焼・常滑焼

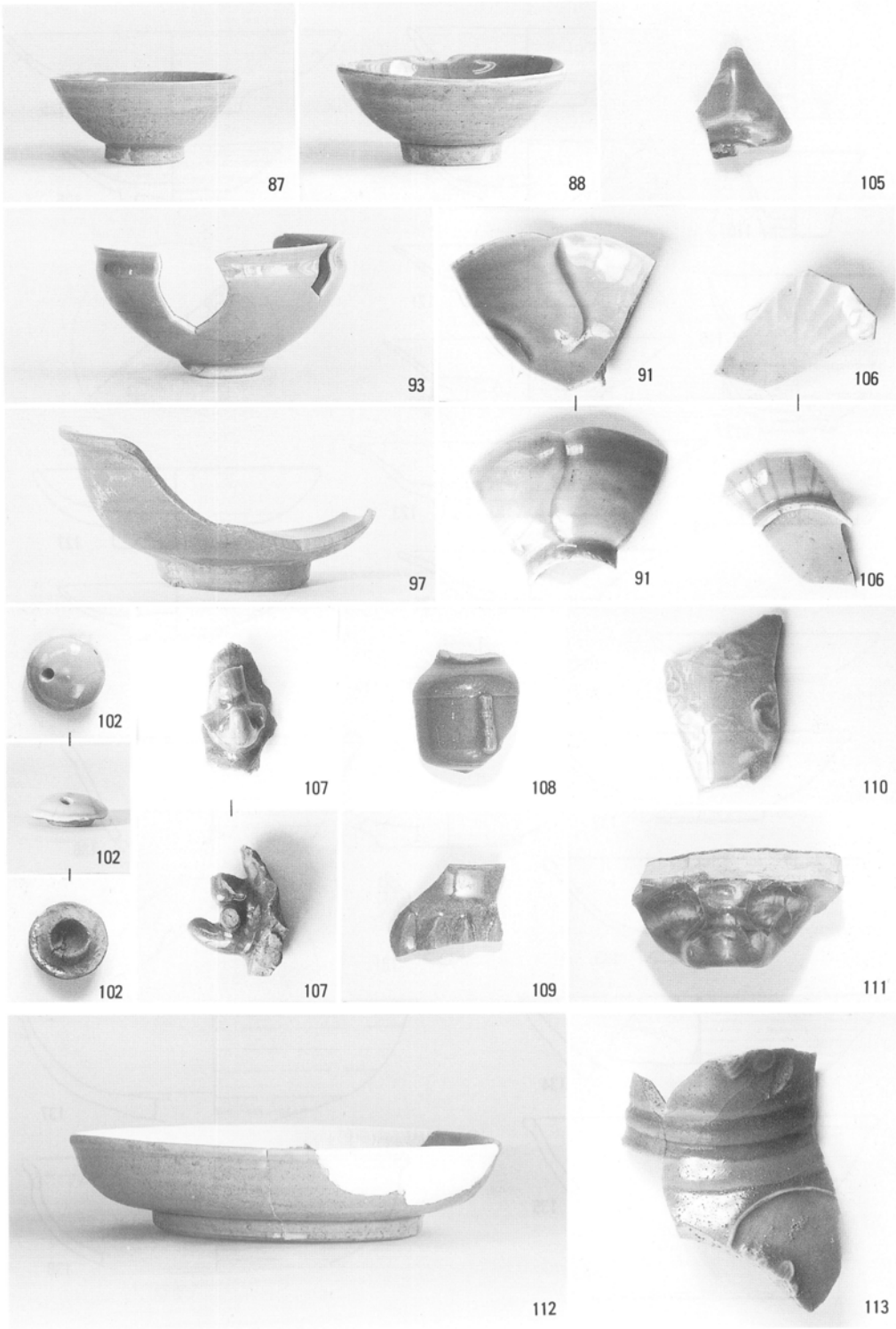




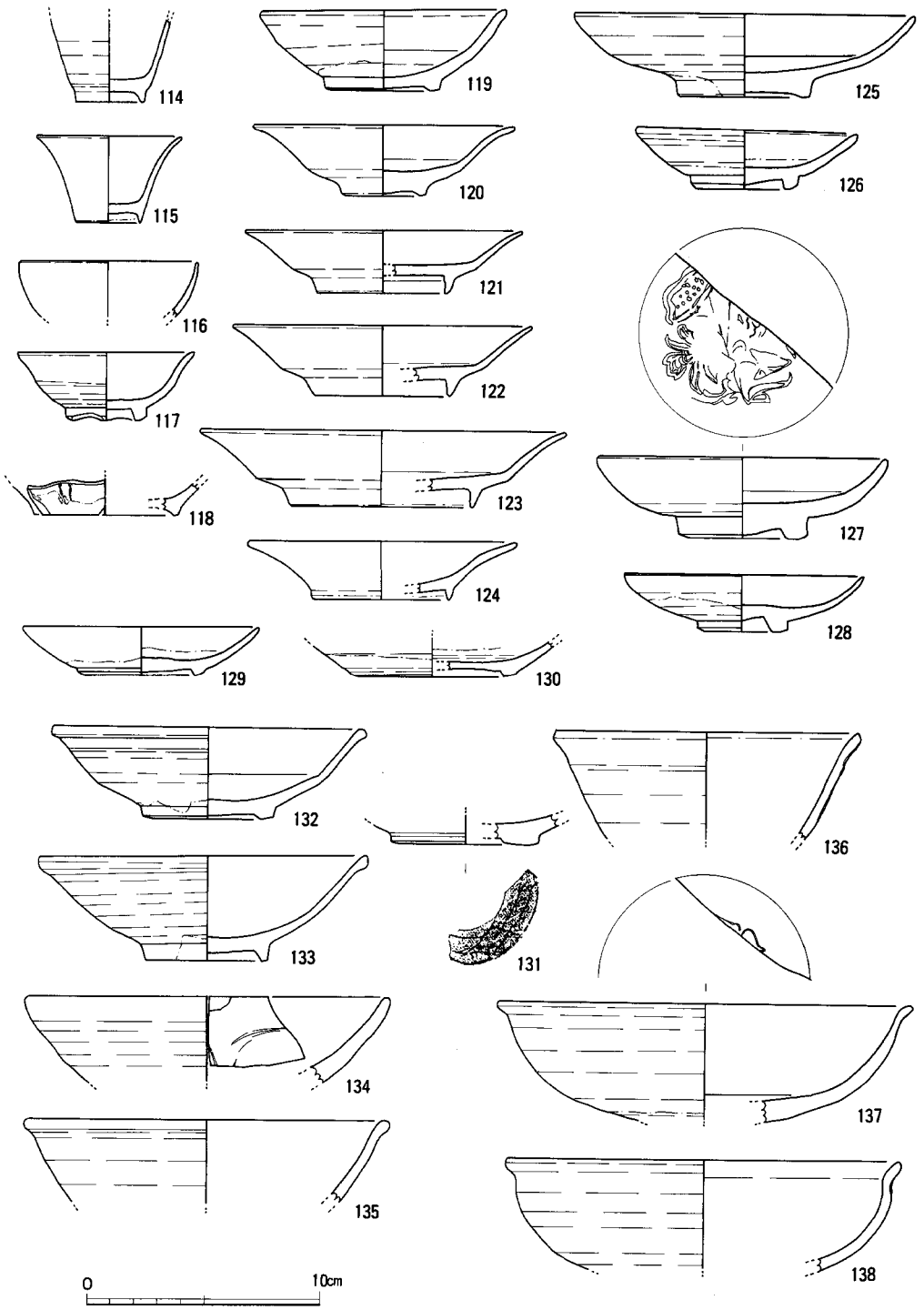
322　その他の出土遺物４（１／３）　　備前焼



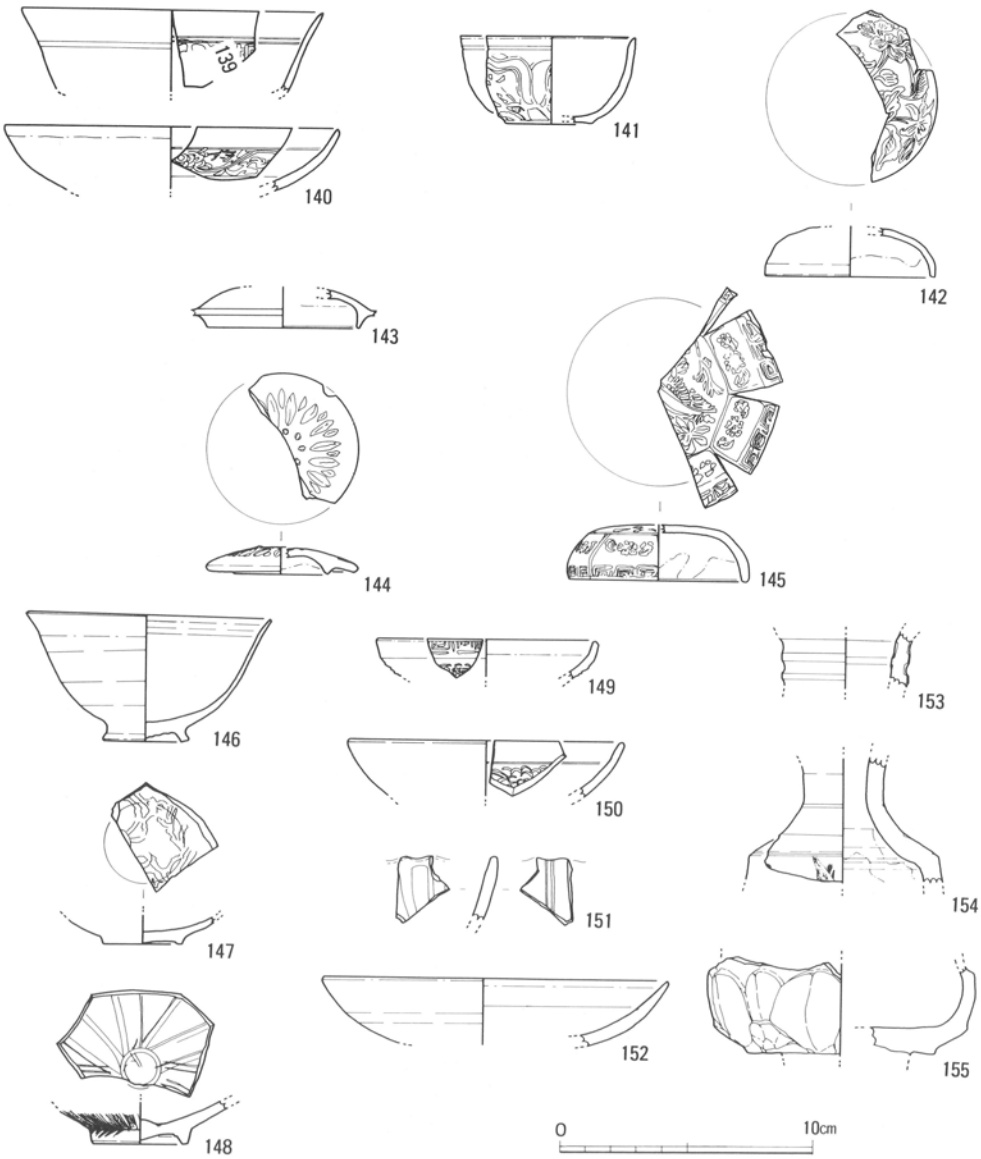
323 その他の出土遺物５（１／３）　青磁

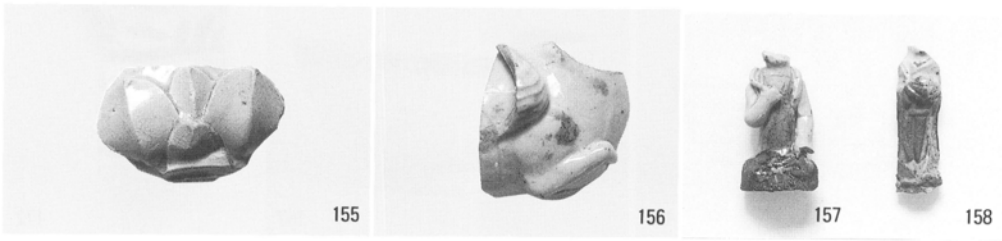


324　その他の出土遺物６（１／３）　　青磁



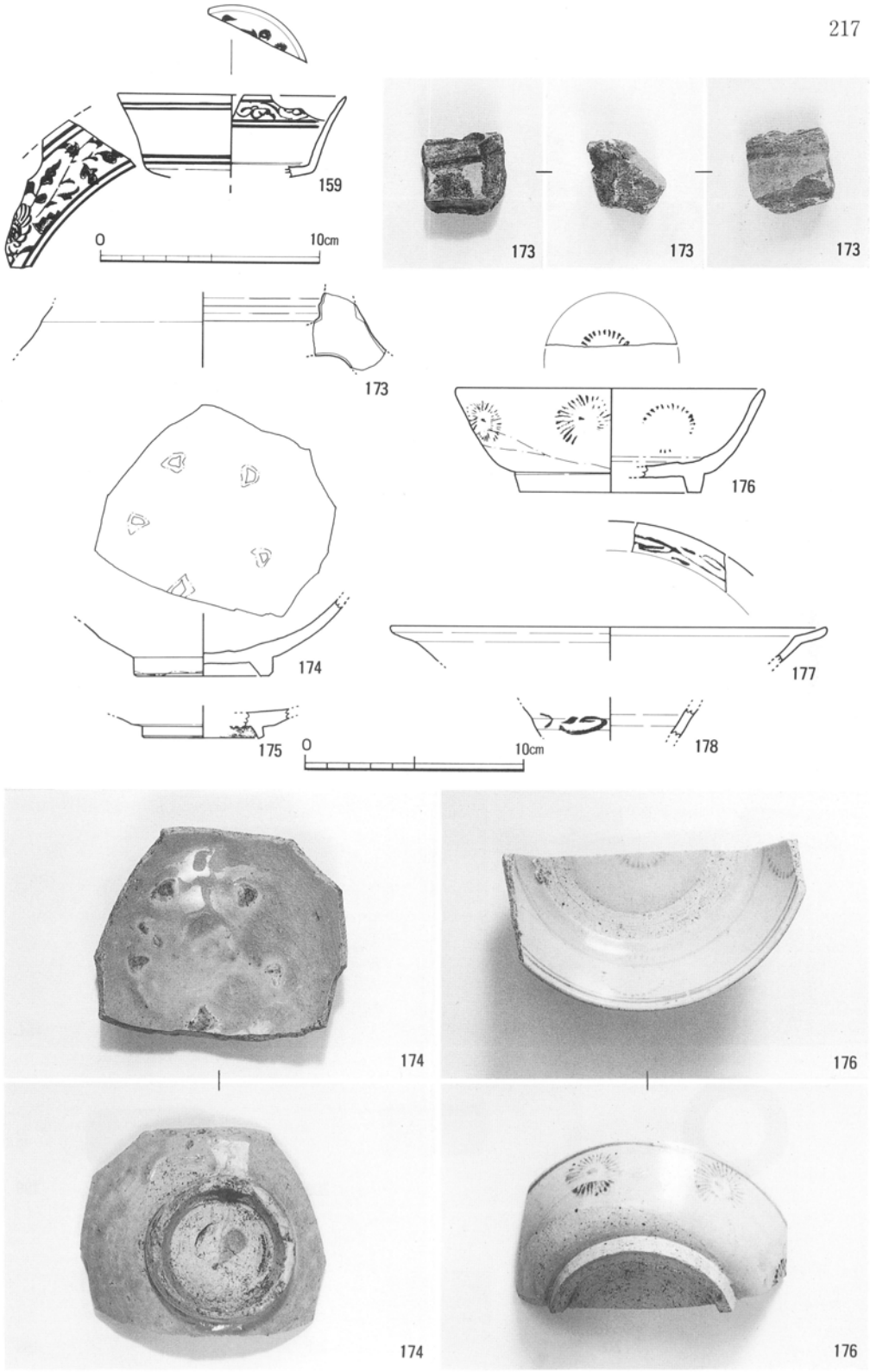
325 その他の出土遺物７（１／３）　白磁



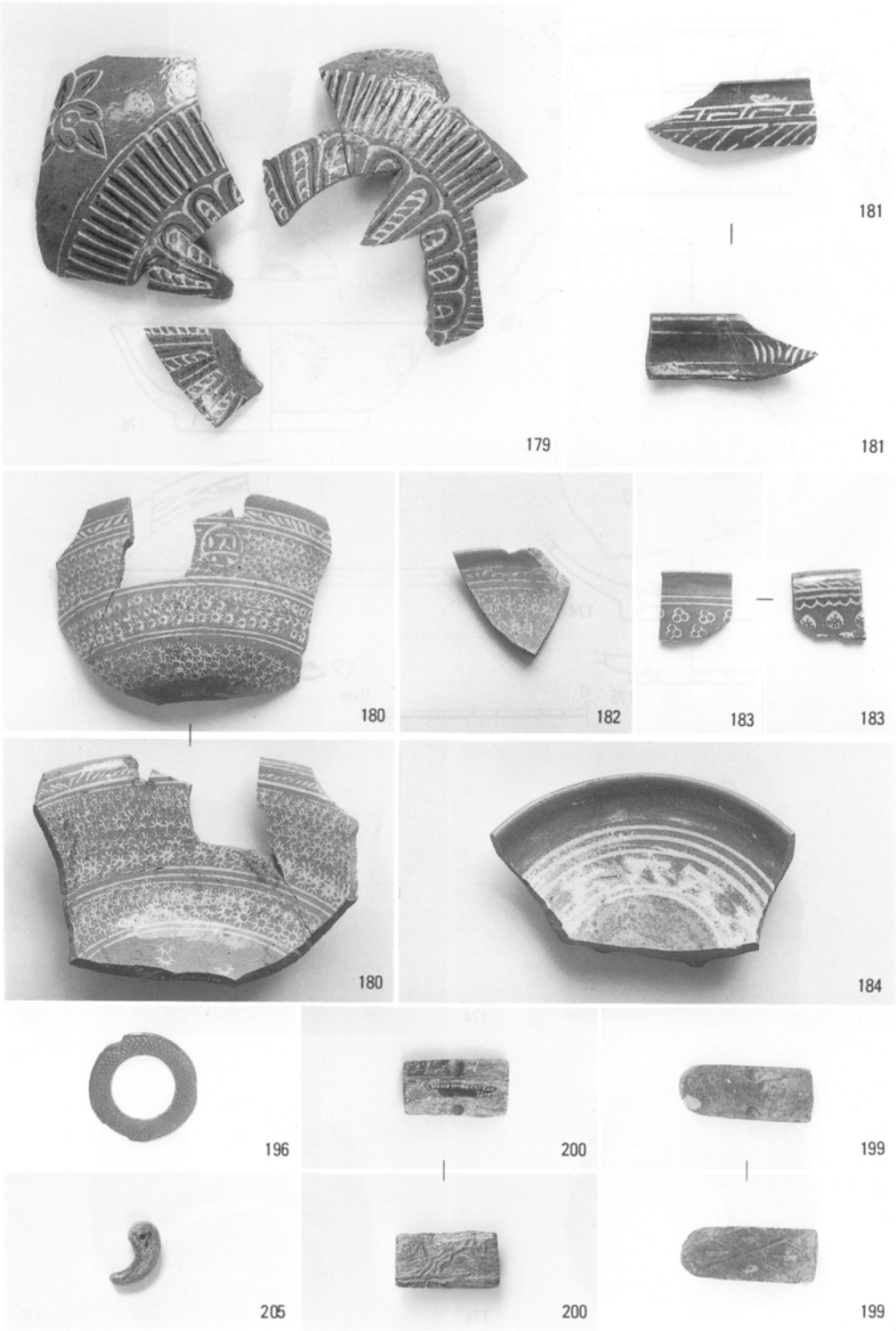


326　その他の出土遺物８（１／３）　白磁・青白磁

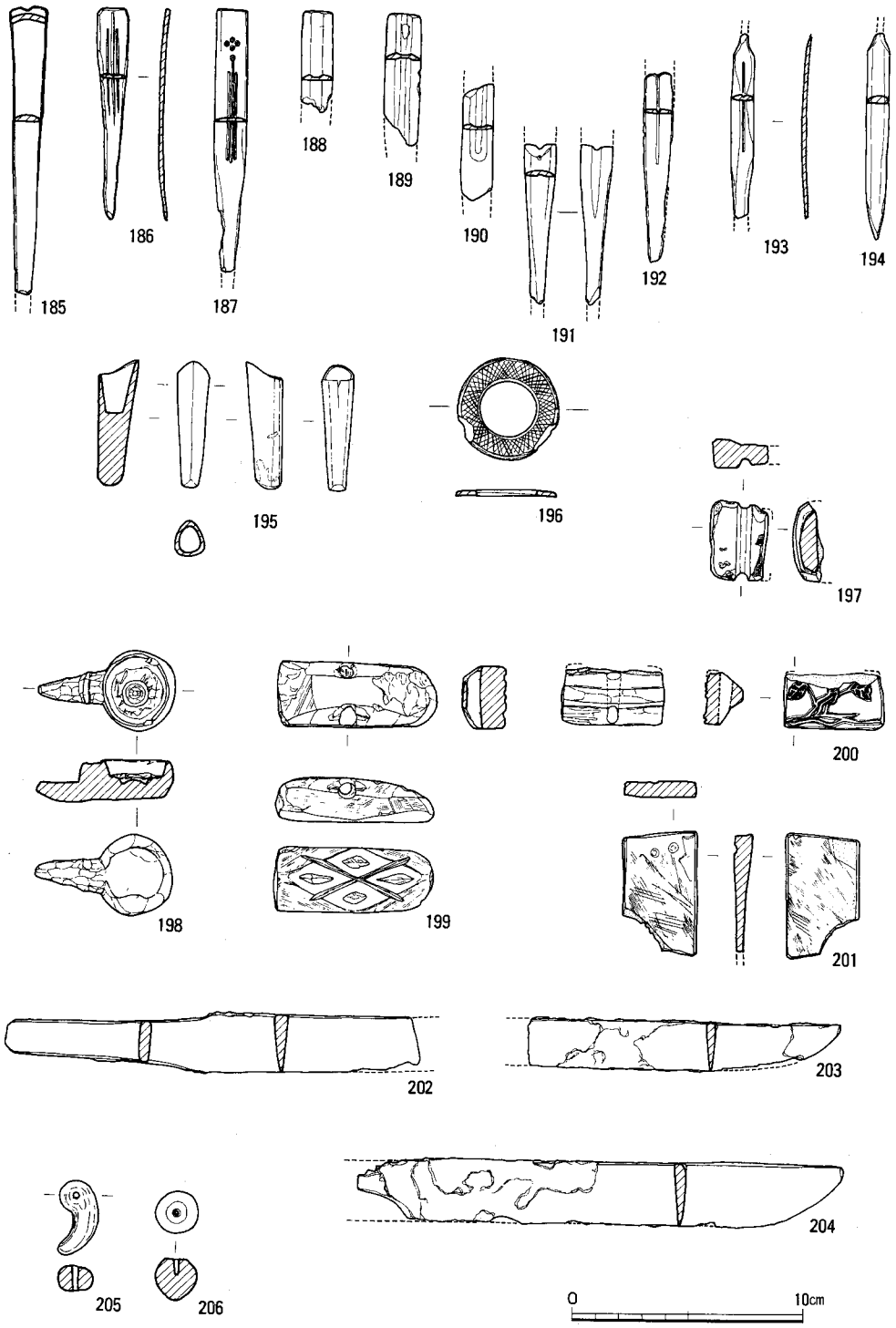
327　その他の出土遺物９（約１／３）　染付



328　その他の出土遺物10（1／3）　元染付・イスラム陶器・ベトナム陶器



329　その他の出土遺物11（約１／３）　　高麗・季朝象嵌青磁・その他



330 その他の出土遺構12（1／3）　骨製品・石製品・鉄製品・ガラス製品

墨書土器

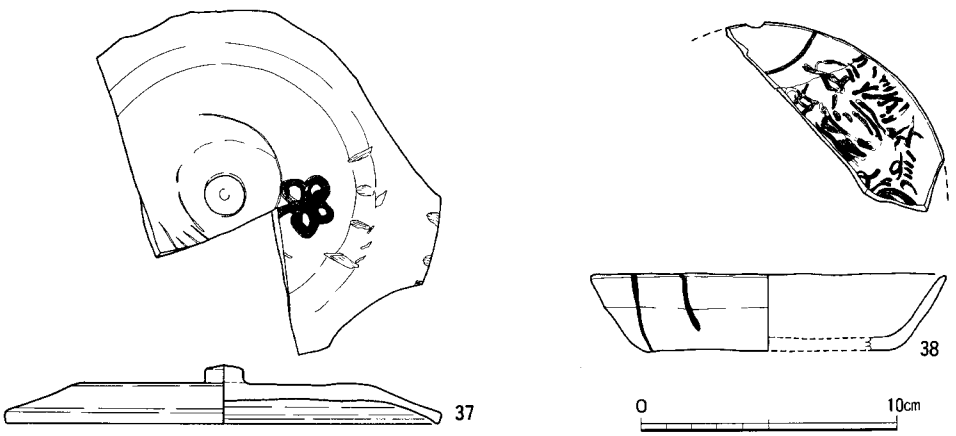
出土した墨書土器の大半をしめるのは，輸入陶磁器の底に文字を書いたもので，その他には土師器・須恵器・瓦器に小数例みられる。以下，墨書の内容にそって略述する。

1－「越綱」，**2**－「□綱」，**3**－「折綱」，**4**－「李綱」，**5**－「□綱」，**6**－「周□」，**7**－「呉好」，**8**－「錢」，**9**－「宋」，**10**－「芯會」，**11**－「荘」，**12**－「大」，**13**－「侍」，**14**－文字，読めず，**15**－「王□」，**16**－文字，読めず，**17**－「寺」，**18**－「吉」線刻，**19**～**25**・**27**－花押，**26**－「口」，**28**～**30**・**34**－「十」**31**－「一」，**32**－「七」，**33**－「百」，**35**－「参」，**36**－「二」。**12**・**28**・**29**は須恵器，**1**～**11**・**13**～**16**・**18**～**25**・**30**～**35**は白磁，**26**・**27**・**36**は青磁，**17**は天目である。

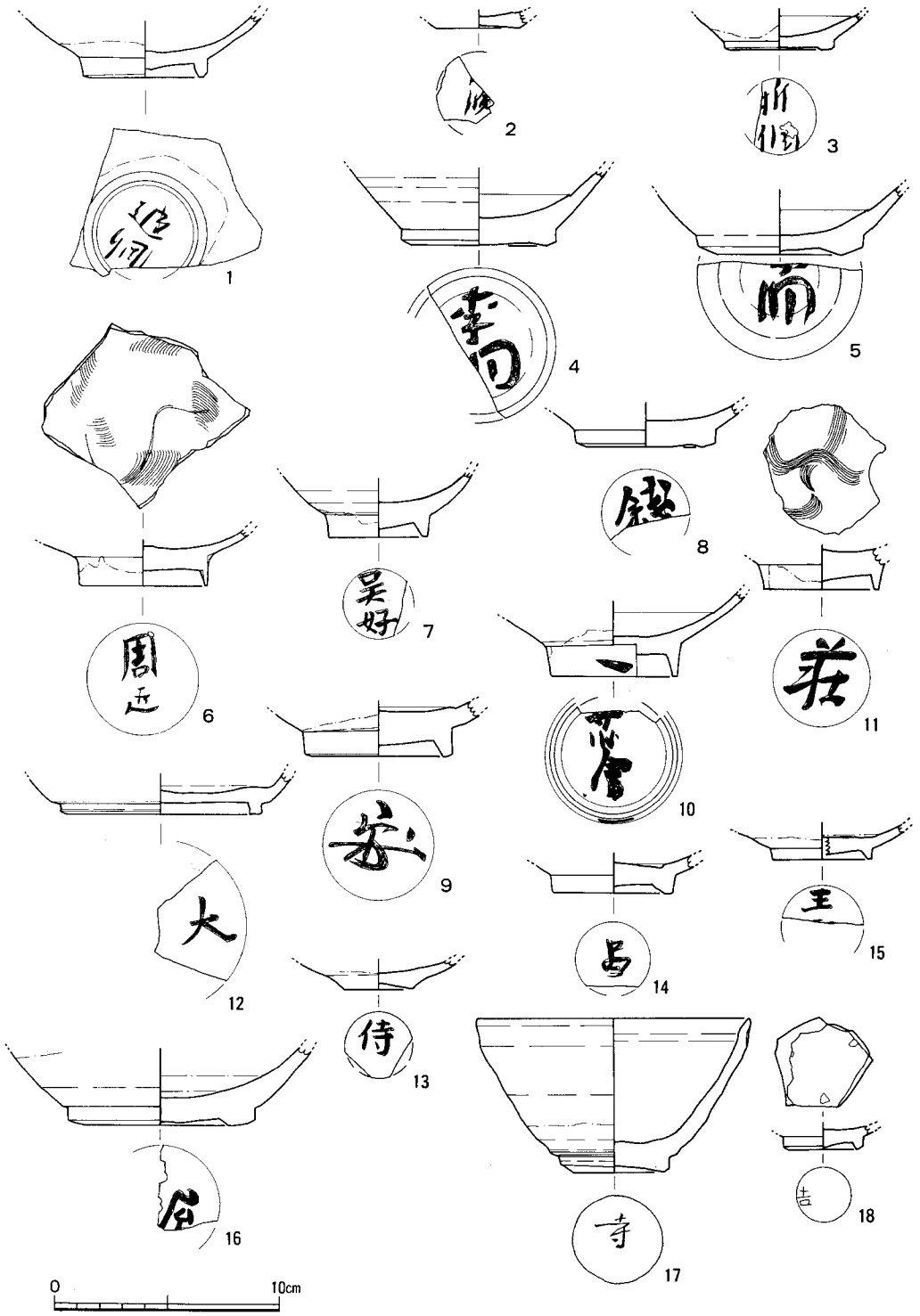
これらは，大別して人名もしくはそれに関わるもの，その他の文字，数字，花押の4種に分類される。

以上の外に，戯画を描くものもある。**37**は須恵器の坏蓋である。頂部近くに，花模様が墨書される。**38**は土師器の坏である。体部内面には，人面墨書が，外面には墨書による縦線が垂下する。

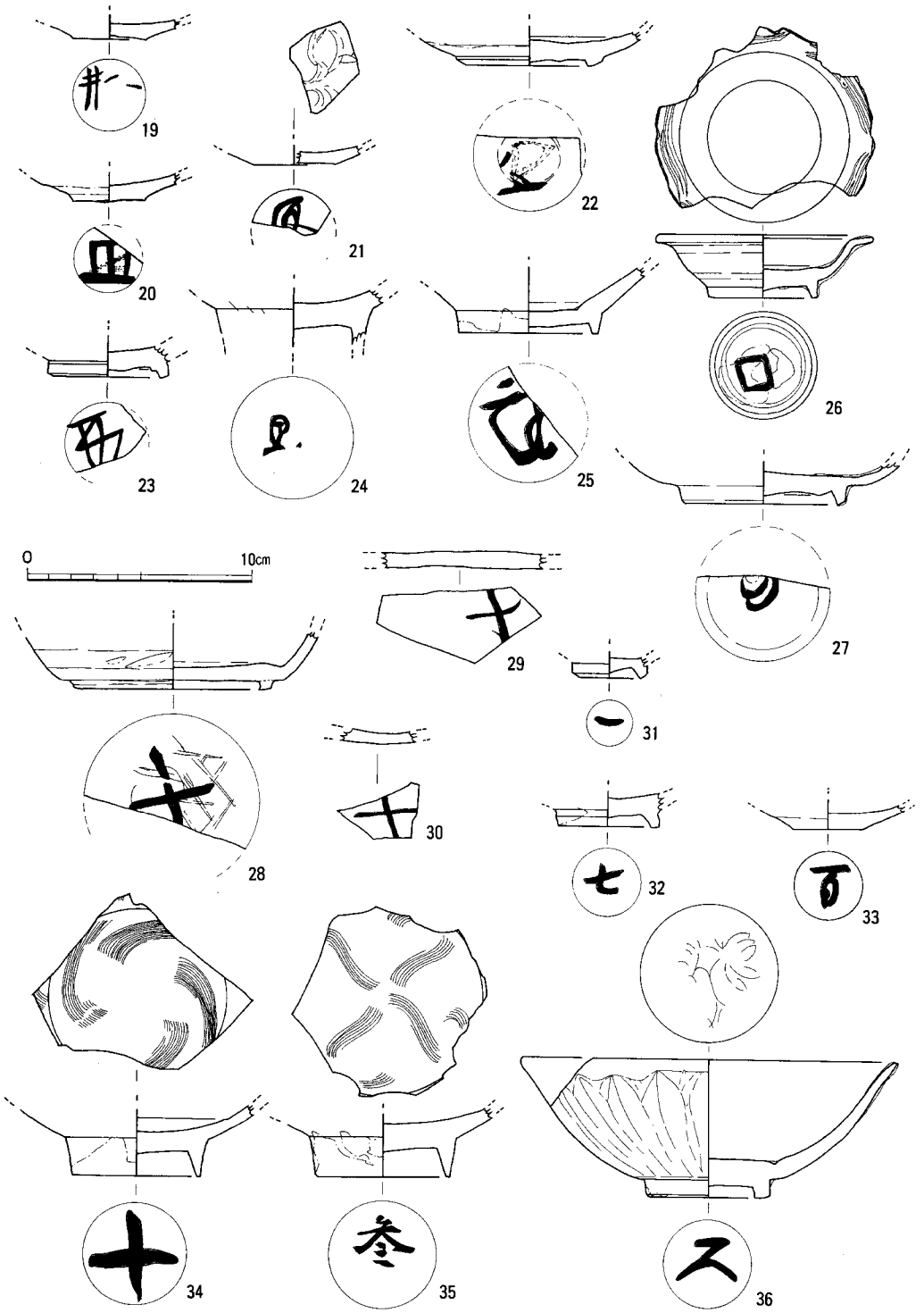
以上を簡略にまとめると，人名もしくはそれに関わるものを墨書した例は，ほとんどが11世紀後半～13世紀に集中する。これは白磁の全盛期から青磁碗の普及期にあたる。文字を書くものでは，**12**の様に8世紀後半にさかのぼるものがみられる。これは，築港線関係2次調査出土の「長官」墨書須恵器とあわせて，一般集落への帰属は考えがたい。数字を書き込む資料も，古いものは8世紀後半にさかのぼる。花押は，人名等と同じく11世紀後半以降の遺物にみられる。



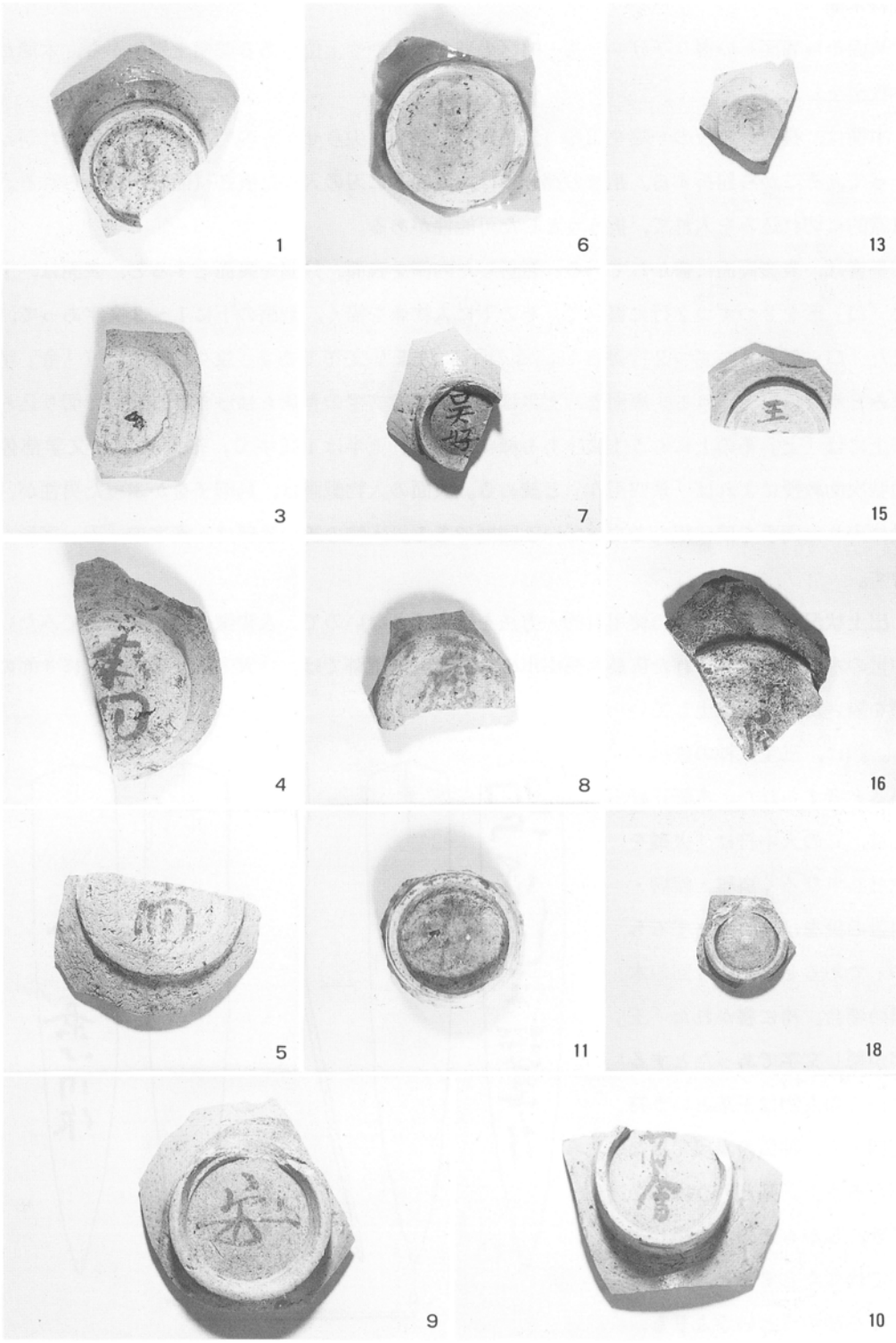
331 墨書土器1（1／3）



332 墨書土器２（１／３）



333 墨書土器３（１／３）



334 墨書土器 4 （約 1 ／ 3 ）

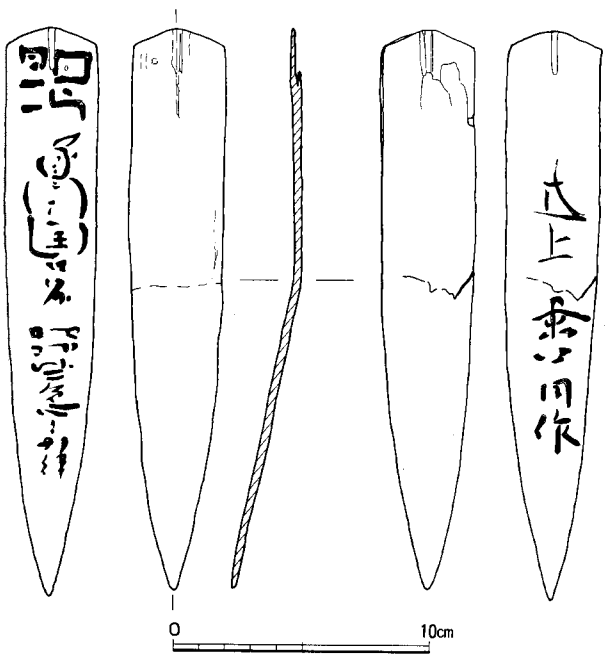
呪符木簡

Ⅵ面からⅦ面への掘り下げ中，A－04区のⅦ面よりやや上位にある腐植土層中から，木簡が1枚出土した。

木簡は，長方形の板の一端を山形（圭頭）に，他端を尖らせたものである。中程で割れがはいって，そこから屈折する。割れの部分には，直線的に刃の入った痕跡（面）が認められる。意識的に切れ込みを入れて，折ろうとした可能性がある。

墨書は，表裏両面に書かれている。屈折した内側を表面，外側を裏面とすると，表面は，上に「口」形を2つずつ2行に書いて，その下に人物像を描く。戯画の下に1～2文字あって，また「口」形を3つずつ2行書きし，その下に決まり文句である「急々如律令」（「令」字はみとれない）と入れる。裏面は，上半は朽ち気味で文字の有無もはっきりしない。切り込みの上には「上」その上にもう1文字ある様にみえる。下半は4文字で，福岡大学人文学部佐伯弘次助教授によれば「景四用作」と読める。表面の人物戯画は，烏帽子をかぶった男性が，袖に入れた両手を前に組んで立っている図柄である。人物の袴の股部は，漢字の「王」字形をなす。

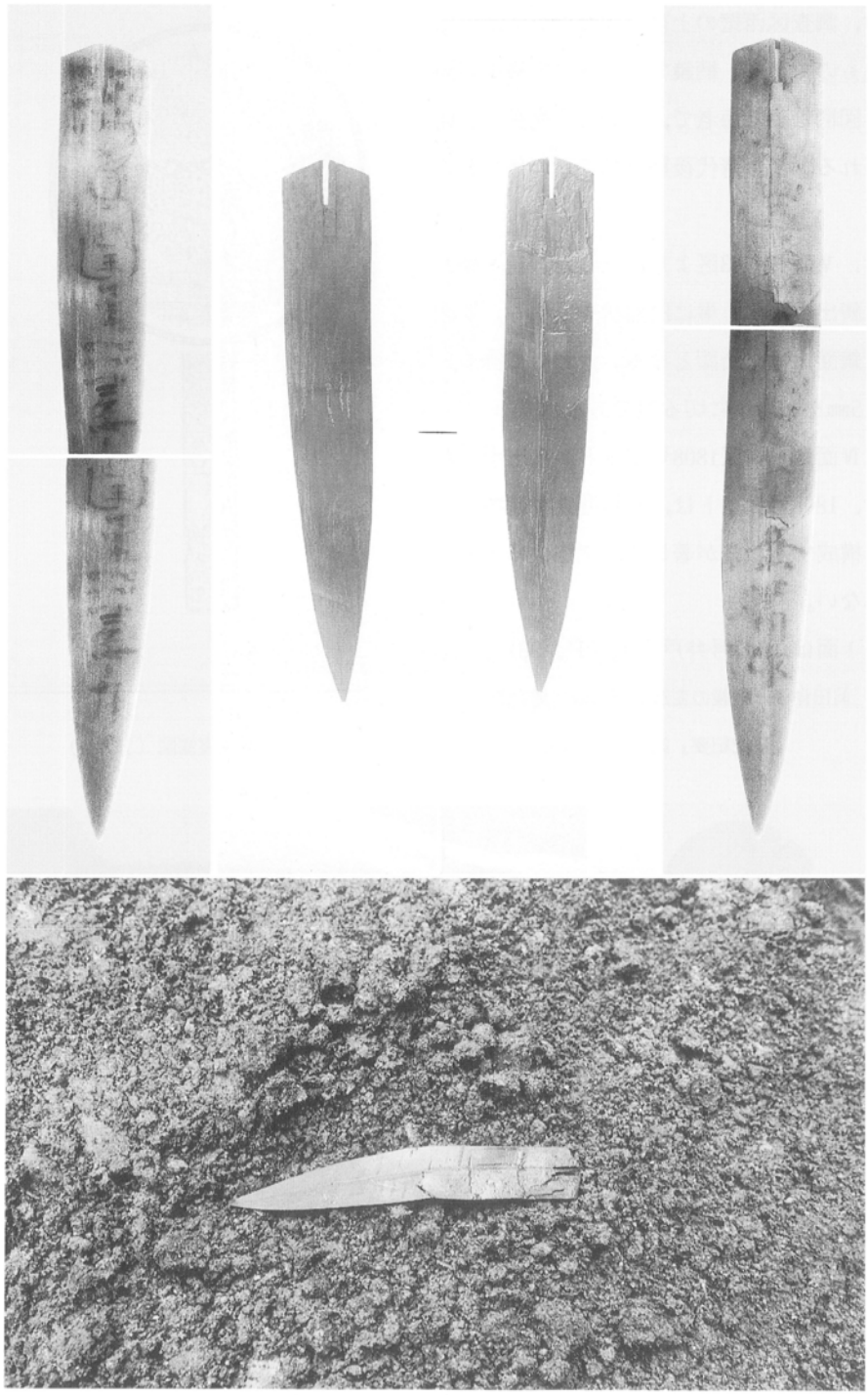
出土状況からは，木簡の使用目的・方法を推定できないので，人物像の面から考えてみたい。中世の木簡資料に恵まれた広島県福山市の草戸千軒町遺跡では，「天中」と書いた下に3面の顔を描いた木簡が出土している。顔は，三宝荒神の表現であると考えられた。水野正好氏は，この天中符は「火難を主としてひろく盗難・疾病・口舌の災をはらおうとするもの」であるとした。今回の木簡の場合，袴に書かれた「王」字が穏し文字であったとすると，この人物は王某という特定個人で，神仏の表現ではないだろう。王某という人物を描き，しかもその名を穏し文字で伏せたとすると，これは災疫をはらうというよりも，王某を呪詛するものと思われ



335 呪符木簡実測図（1／3）

る。切り込んで折っているのも,その為の行為ではなかろうか。

註　水野正好「三宝荒神符と天中の呪句」『草戸千軒ニュース』No47. 1977年



336　呪符木簡及び出土状況

銅鏡

本調査からは，４面の鏡が出土した。

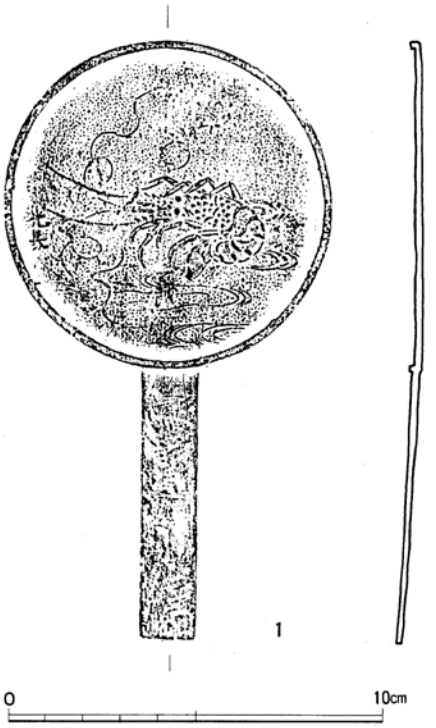
１は，調査区西壁の上部，地表下約50cmで出土したものである。柄鏡で，鏡背に文様を陽鋳する。図柄は磯に海老で，左側に「光長」と銘がみられる。江戸時代後期（19Ｃ）の作であろう。[註]

２は，Ｖ面Ｂ－03区より出土した。鈕・縁とも特に鋳出されず，単に円盤状を呈する。平滑な面（鏡面）は，凸面となる。きわめて簿く，厚さ0.5mmをわずかに切る程である。

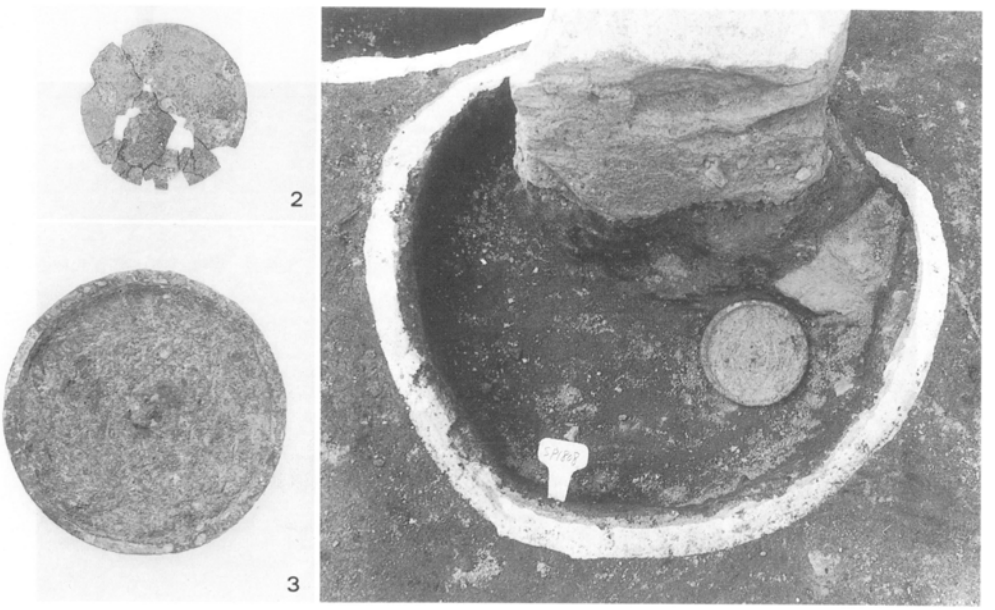
３はⅣ面Ｂ－04区1808号ピットから出土したもので，1808号ピットは，４号掘立柱建物の北西角を構成する。銹が著しく，文様はほとんど見取れない。

もう１面は，107号井戸出土（Ｐ．93）

註　前田洋子「柄鏡の変遷」『大阪市博物館研究紀要』第９冊　1977年



337　柄鏡実測図（１／２）



338　銅鏡及び1808号ピット鏡出土状況

銅銭

今回の調査で出土した銅銭は，2257枚にのぼる。その内訳は下表の通りである。また，Fig. 339～341には，拓本のとれたものの内主要なもののみを示した。また，これら銅銭の内には，模鋳銭と思われるものも含まれていた。それについては，拓本の銭文の末尾に「模？」として示している。なお，その判断の参考にしたのは，奥平昌洪『東亜銭志』（1974）所収の拓影に

出土銅銭一覧

貨銭名	時代	初鋳	数
五銖銭	後漢	後漢（後期）	1
開元通寶	唐	武徳4年 621年	52
周元通寶	後周	顯徳2年 955年	3
太平通寶	北宋	太平興国元年 976年	6
淳化元寶	北宋	淳化元年 990年	12
至道元寶	北宋	至道元年 995年	6
咸平元寶	北宋	咸平元年 998年	6
景徳元寶	北宋	景徳元年 1004年	17
祥符元寶	北宋	大中祥符元年1008年	13
祥符通寶	北宋	大中祥符元年1008年	6
天禧通寶	北宋	天禧年間 1017年～21年	4
天聖元寶	北宋	天聖元年 1023年	29
明道元寶	北宋	明道元年 1032年	1
景祐元寶	北宋	景祐元年 1034年	10
皇宋通寶	北宋	寶元二年 1038年	53
至和元寶	北宋	至和元年 1054年	6
至和通寶	北宋	至和元年 1054年	1
嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年 1056年	6
嘉祐通寶	北宋	嘉祐元年 1056年	10
治平元寶	北宋	治平元年 1064年	10
治平通寶	北宋	治平元年 1064年	2
熙寧元寶	北宋	熙寧元年 1068年	41
熙寧通寶	北宋	熙寧元年 1068年	3
元豊通寶	北宋	元豊元年 1078年	69
元祐通寶	北宋	元祐元年 1086年	53

貨銭名	時代	初鋳	数
紹聖元寶	北宋	紹聖元年 1094年	19
元符通寶	北宋	元符元年 1098年	6
聖宋元寶	北宋	建中靖国元年1101年	16
聖宋通寶	北宋	建中靖国元年1101年	1
崇寧通寶	北宋	崇寧元年 1102年	1
大観通寶	北宋	大観元年 1107年	7
政和通寶	北宋	政和元年 1111年	31
宣和通寶	北宋	宣和元年 1119年	1
紹興通寶	南宋	紹興元年 1131年	1
正隆元寶	金	正隆元年 1156年	1
紹熙元寶	南宋	紹熙元年 1190年	2
嘉泰通寶	南宋	嘉泰元年 1201年	1
嘉定通寶	南宋	嘉定年間 1208年～24年	1
大宋元寶	南宋	寶慶元年 1225年	1
紹定通寶	南宋	紹定年間 1228年～33年	5
淳祐元寶	南宋	淳祐年間 1241年～52年	2
皇宋元寶	南宋	寶祐元年 1253年	3
咸淳元寶	南宋	咸淳元年 1265年	2
至大通寶	元	至大3年 1310年	1
洪武通寶	明	洪武元年 1368年	21
永楽通寶	明	永楽6年 1406年	42
朝鮮通寶	朝鮮	世宗5年 1423年	1
宣徳通寶	明	宣徳8年 1433年	2
寛永通寶	江戸	寛永13年 1636年	21
解読不能			1678

銅銭出土遺構一覧 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
I 面	702号土壙	紹聖元寶 1
	〃	元豊通寶 1
	706号土壙	解読不能 1
	709号土壙	開元通寶 1
	〃	解読不能 3
	711号土壙	元祐通寶 1
	〃	開元通寶 1
	〃	解読不能 1
	713号土壙	解読不能 1
	721号土壙	洪武通寶 2
	722号土壙	永楽通寶 1
	723号土壙	洪武通寶 1
	〃	解読不能 2
	724号土壙	元祐通寶 1
	725号土壙	解読不能 1
	760号土壙	洪武通寶 1
	763号土壙	寛永通寶 3
	〃	祥符元寶 1
	767号土壙	天聖元寶 1
	768号土壙	元祐通寶 1
	〃	解読不能 1
	1210号ピット	解読不能 1
	1211号ピット	解読不能 1
	1216号ピット	解読不能 2
	1226号ピット	元祐通寶 1
	1236号ピット	永楽通寶 2
	〃	祥符通寶 2
	〃	元祐通寶 1
	〃	景徳元寶 1
	〃	開元通寶 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
I 面	1236号ピット	政和通寶 1
	〃	咸淳元寶 1
	〃	天聖元寶 1
	〃	熙寧通寶 1
	〃	解読不能 2
	1237号ピット	祥符元寶 1
	〃	解読不能 2
	1369号ピット	洪武通寶 1
	〃	開元通寶 2
	〃	元豊通寶 1
	〃	解読不能 1
	1394号ピット	永楽通寶 1
	1395号ピット	嘉祐通寶 1
	1422号ピット	解読不能 2
	1426号ピット	解読不能94
	102号井戸	寛永通寶 1
	〃	紹聖元寶 1
	〃	解読不能13
	103号井戸	洪武通寶 1
	〃	景徳元寶 1
	104号井戸	元豊通寶 1
	〃	淳化元寶 1
	〃	解読不能 5
	105号井戸	元祐通寶 1
	〃	熙寧元寶 1
	〃	解読不能 2
	51号配石遺構	開元通寶 1
	〃	元祐通寶 3
	〃	洪武通寶 1
	〃	至大通寶 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
I 面	51号配石遺構	天聖元寶 2
	〃	皇宋通寶 2
	〃	淳化元寶 1
	〃	永楽通寶 1
	〃	太平通寶 1
	〃	解読不能 9
II 面	727号土壙	景徳元寶 1
	〃	解読不能 4
	731号土壙	元祐通寶 1
	〃	解読不能 1
	733号土壙	解読不能 1
	738号土壙	解読不能 3
	739号土壙	解読不能 1
	740号土壙	永楽通寶 1
	〃	解読不能 5
	741号土壙	寛永通寶 1
	747号土壙	元祐通寶 1
	〃	皇宋通寶 1
	〃	聖宋元寶 1
	〃	解読不能 3
	749号土壙	解読不能 1
	755号土壙	解読不能 3
	1256号ピット	解読不能 2
	1257号ピット	解読不能 3
	1279号ピット	解読不能 1
	1285号ピット	解読不能 1
	1286号ピット	解読不能 4
	1336号ピット	解読不能 2
	1360号ピット	紹聖元寶 1
	1433号ピット	解読不能 1

銅銭出土遺構一覧２

検出面	出土遺構	銭貨名数
II面	1440号ピット	解読不能 1
	1461号ピット	元豊通寶 3
	〃	咸平元寶 1
	〃	熙寧元寶 1
	〃	天聖元寶 1
	〃	解読不能 1
	1462号ピット	解読不能 1
	1463号ピット	解読不能 1
	1464号ピット	解読不能 1
	1466号ピット	解読不能 1
	1470号ピット	解読不能 1
	1473号ピット	解読不能 1
	1479号ピット	解読不能 1
	12号溝	解読不能 1
II面下	55号配石遺構	永楽通寶 1
	〃	祥符通寶 1
	〃	元豊通寶 2
	〃	景祐元寶 1
	〃	解読不能 9
	56号配石遺構	開元通寶 1
	〃	解読不能 1
	SX05	洪武通寶 2
	〃	元豊通寶 2
	〃	元祐通寶 2
	〃	聖宋元寶 1
	〃	皇宋元寶 1
	〃	皇宋通寶 2
	〃	政和通寶 1
	〃	至道元寶 1
	SX06	熙寧元寶 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
II面下	SX06	解読不能 1
	SX10	解読不能 2
	SX11	解読不能 1
III面	771号土壙	嘉祐通寶 1
	776号土壙	至道元寶 1
	777号土壙	解読不能 1
	779号土壙	聖宋元寶 1
	781号土壙	解読不能 3
	784号土壙	軋元重寶 1
	〃	解読不能 1
	786号土壙	皇宋通寶 1
	788号土壙	皇宋通寶 1
	〃	聖宋元寶 1
	〃	熙寧通寶 1
	〃	解読不能 2
	793号土壙	解読不能 2
	801号土壙	永楽通寶 1
	803号土壙	解読不能 1
	805号土壙	元祐通寶 1
	〃	熙寧元寶 1
	806号土壙	政和通寶 1
	〃	開元通寶 1
	〃	解読不能 2
	807号土壙	解読不能 1
	808号土壙	解読不能 1
	810号土壙	解読不能 1
	813号土壙	元豊通寶 1
	〃	天聖元寶 1
	〃	解読不能 1
	816号土壙	天聖元寶 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
III面	818号土壙	解読不能 1
	820号土壙	嘉祐通寶 1
	〃	元祐通寶 1
	〃	元豊通寶 2
	〃	天聖元寶 1
	〃	嘉祐元寶 1
	〃	開元通寶 1
	〃	聖宋元寶 1
	〃	解読不能30
	826号土壙	解読不能 1
	829号土壙	元符通寶 1
	831号土壙	元祐通寶 1
	1489号ピット	解読不能 1
	1497号ピット	解読不能 1
	1498号ピット	解読不能 1
	1519号ピット	解読不能 1
	1522号ピット	元豊通寶 1
	1531号ピット	嘉祐通寶 1
	〃	皇宋通寶 1
	〃	解読不能 2
	1533号ピット	解読不能 1
	1540号ピット	解読不能 1
	1543号ピット	洪武通寶 1
	1578号ピット	解読不能 1
	1581号ピット	解読不能 1
	1600号ピット	解読不能 1
	1604号ピット	解読不能 1
	1611号ピット	熙寧元寶 1
	〃	解読不能 2
	1619号ピット	解読不能 2

銅銭出土遺構一覧３

検出面	出土遺構	銭貨名数
Ⅲ面	1620号ピット	政和通寶 1
	1637号ピット	政和通寶 1
	1665号ピット	太平通寶 1
	1721号ピット	朝鮮通寶 1
	〃	永楽通寶 2
	〃	嘉祐元寶 1
	〃	解読不能 5
	1749号ピット	解読不能 1
	59号配石遺構	解読不能 2
Ⅳ面	833号土壙	解読不能 6
	836号土壙	元豊通寶 1
	〃	解読不能 1
	838号土壙	解読不能 1
	845号土壙	咸平元寶 1
	〃	解読不能10
	846号土壙	皇宋元寶 1
	〃	解読不能 1
	849号土壙	解読不能 2
	851号土壙	解読不能10
	854号土壙	解読不能 1
	855号土壙	解読不能 2
	888号土壙	解読不能 1
	1783号ピット	景徳元寶 1
	1785号ピット	景徳元寶 1
	1799号ピット	洪武通寶 1
	1804号ピット	解読不能 1
	1815号ピット	解読不能 1
	1818号ピット	解読不能 1
	1819号ピット	解読不能 2
	1842号ピット	解読不能 1

検出面	出土遺構	銭貨名数
Ⅳ面	1843号ピット	熙寧元寶 1
	〃	解読不能 1
	1851号ピット	解読不能 1
	1852号ピット	崇寧通寶 1
	1881号ピット	元豊通寶 1
	〃	熙寧元寶 1
	〃	解読不能 3
	1882号ピット	解読不能 1
	1883号ピット	元豊通寶 1
	〃	解読不能 3
	1884号ピット	元豊通寶 1
	〃	政和通寶 1
	1890号ピット	元豊通寶 1
	1892号ピット	解読不能 1
	1896号ピット	政和通寶 1
	1903号ピット	解読不能 1
	1908号ピット	解読不能 1
	1924号ピット	元豊通寶 1
	〃	熙寧元寶 1
	〃	解読不能 1
	1933号ピット	解読不能 1
	2367号ピット	熙寧元寶 1
	2467号ピット	皇宋通寶 1
	〃	解読不能 1
	107号井戸	政和通寶 1
	〃	解読不能 5
	108号井戸	解読不能 1
	115号井戸	解読不能 1
	60号配石遺構	解読不能 1
	10号溝	大観通寶 2

検出面	出土遺構	銭貨名数
Ⅳ面	10号溝	開元通寶 5
	〃	政和通寶 1
	〃	元豊通寶 7
	〃	至和元寶 1
	〃	紹聖元寶 1
	〃	至道元寶 1
	〃	元祐通寶 2
	〃	皇宋通寶 4
	〃	景祐元寶 2
	〃	熙寧元寶 1
	〃	天聖元寶 3
	〃	天禧通寶 1
	〃	景徳元寶 1
	〃	解読不能43
	13号溝	解読不能 1
	15号溝	祥符元寶 1
	〃	元祐通寶 1
	〃	紹聖元寶 1
	〃	解読不能15
	SX14	解読不能 1
	SX15	解読不能 2
Ⅴ面	857号土壙	解読不能 1
	858号土壙	大観通寶 1
	〃	嘉祐元寶 1
	〃	治平元寶 1
	〃	紹聖元寶 1
	〃	解読不能36
	859号土壙	解読不能 1
	899号土壙	解読不能 1
	901号土壙	解読不能 1

銅銭出土遺構一覧４

検出面	出土遺構	銭貨名数
Ⅴ面	909号土壙	解読不能１
	1947号ピット	解読不能２
	1951号ピット	解読不能２
	1966号ピット	解読不能１
	1991号ピット	解読不能１
	2005号ピット	解読不能１
	2016号ピット	皇宋通寶１
	2023号ピット	解読不能２
	SX18	開元通寶１
	〃	大観通寶１
	〃	解読不能１
Ⅵ面	863号土壙	解読不能３
	864号土壙	天聖元寶１

検出面	出土遺構	銭貨名数
Ⅵ面	864号土壙	至和元寶１
	〃	解読不能１
	872号土壙	解読不能３
	698号土壙	景徳元寶１
	〃	紹定通寶１
	〃	天聖元寶１
	〃	開元通寶１
	〃	元豊通寶２
	〃	熙寧元寶１
	〃	治平元寶１
	〃	解読不能１
	2075号ピット	解読不能１
	2083号ピット	嘉祐通寶１

検出面	出土遺構	銭貨名数
Ⅵ面	2084号ピット	解読不能１
	2085号ピット	解読不能２
	2086号ピット	紹聖元寶１
	〃	解読不能３
	2087号ピット	開元通寶１
	〃	解読不能２
	2090号ピット	解読不能１
	2091号ピット	解読不能１
	2094号ピット	解読不能３
	2106号ピット	解読不能１
	2108号ピット	解読不能２
	2110号ピット	解読不能１
Ⅶ面	2222号ピット	解読不能１

よる。

1は「五銖銭」である。Ｃ－01区Ⅳ面下より出土した。（詳細はＰ.240）

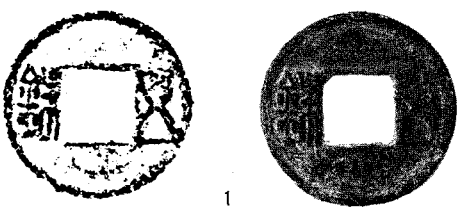
4は「開元通寶」であるが，唐代のそれとは明らかに字体が異なる。五代の南唐等のものにこの字体がみられる。

30の「嘉祐通寶」の「祐」字は，他の諸例と比べ小さく，示扁は「木」に近い。模鋳銭であろうか。

38の「元豊通寶」は，縁が広く，郭が大きい。そのため，銭文は天地左右を狭く限られ，扁平になる。模鋳銭か。

39の「元豊通寶」には，鋳型の割れによると思われる細隆起線が「元」から「豊」にかけてみとめられる。

その他，異例なほど彫りが深く，加刀銭ではないかと思われるものが数点みられた。残念ながら充分な比較資料を持たない為，詳述はさけた。



1

339　銅銭拓本１（１／１）

2
開元通寶
A-03・04区Ⅳ面M10

3
開元通寶
B-02区Ⅰ面D709

4
開元通寶
B-01区Ⅵ面P2087

5
周元通寶
A-04区Ⅱ面下

6
軋ヵ元重寶
C-02区Ⅲ面D784

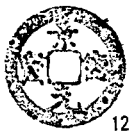
7
太平通寶
B-01区Ⅰ面S51

8
淳化元寶
B-01区Ⅵ面

9
淳化元寶
B-01区Ⅰ面S51

10
至道元寶
B-02区Ⅱ面下SX05

11
咸平元寶
C-01区Ⅰ面下


12
景德元寶
B-02・04区Ⅰ面E103

13
景德元寶
A-03・04区Ⅳ面M10

14
景德元寶
B-01区Ⅲ面下

15
祥符元寶
B-04区Ⅰ面P1237

16
祥符元寶
B-02区Ⅳ面M15

17
祥符元寶
C-01区Ⅰ面下

18
祥符元寶
B-04区Ⅰ面P1236

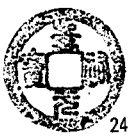
19
天禧通寶
B-01区Ⅱ面下

20
天聖元寶
B-01区Ⅰ面S51

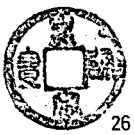
21
天聖元寶
A-03区Ⅲ面D816

22
明道通寶
B-02区Ⅱ面下

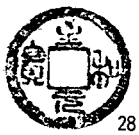
23
景祐元寶
A-04区Ⅳ面


24
景祐元寶
A-04区Ⅳ面

25
皇宋通寶
C-02区Ⅰ面下


26
皇宋通寶
B-04区Ⅱ面D747

27
皇宋通寶
B-04区Ⅱ面下


28
至和元寶
C-02区Ⅰ面

29
嘉祐通寶
B-01区Ⅱ面下

30
嘉祐通寶(模?)
B-04区Ⅲ面下

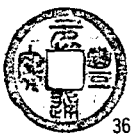
31
治平元寶
B-04区攪乱

32
治平元寶
B-01区Ⅲ面

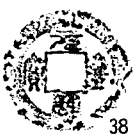
33
熙寧元寶
B-04区Ⅱ面下

34
熙寧元寶
C-02区Ⅲ面

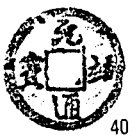
35
元豐通寶
C-02区Ⅱ面P1461


36
元豐通寶
B-04区Ⅲ面

37
元豐通寶
B-04区Ⅲ面

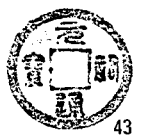

38
元豐通寶(模?)
A-03区Ⅳ面

39
元豐通寶
A-03・04区Ⅳ面M10


40
元祐通寶
B-04区Ⅰ面P1236

41
元祐通寶
B-04区Ⅰ面D711

42
元祐通寶
C-02区Ⅱ面


43
元祐通寶
B-01区Ⅰ面下

44
元祐通寶
B-02区Ⅲ面下

45
紹聖元寶
B-04区Ⅲ面下

46
紹聖元寶
B-04区Ⅴ面

47
元符通寶
B-04区Ⅱ面下

48
元符通寶
C-02区Ⅰ面下

49
聖宋元寶
C-01区Ⅱ面

50
聖宋元寶
B-04区Ⅱ面下

51
崇寧通寶
C-02区Ⅳ面P1852

52
大観通寶
B-02区SX18

53
大観通寶
B-02区Ⅴ面

54
政和通寶
B-02区Ⅱ面下SX05

55
政和通寶
C-02区攪乱

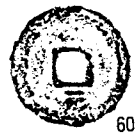
56
政和通寶
B-01区Ⅲ面P1637

57
宣和通寶
B-01区Ⅲ面下

58
紹興通寶
B-04区Ⅰ面下

59
正隆元寶
B-01区Ⅱ面下

—
紹熙元寶
B-02区Ⅲ面下


60
(裏元)

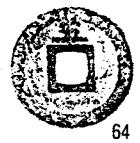
61
紹熙元寶
B-04区Ⅰ面下

62
大宋元寶
B-01区Ⅵ面

—
紹定通寶
表採

63
(裏三)

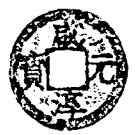
—
紹定通寶
C-02区Ⅲ面


64
(裏五)

—
淳祐元寶欠
A-03区Ⅲ面

65
(裏元)

66
皇宋元寶
C-02区Ⅳ面D846


—
咸淳元寶
C-02区Ⅲ面

67
(裏二)

68
至大通寶
B-01区Ⅰ面S51

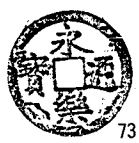
—
洪武通寶
B-02.04区Ⅱ面

69
(裏一銭)

70
洪武通寶
B-04区Ⅲ面P1543

71
洪武通寶
B-01区Ⅰ面S51

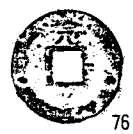
72
永樂通寶
C-01区Ⅰ面下


73
永樂通寶
A-03区Ⅱ面下S55

74
朝鮮通寶
B-03区Ⅲ面P1721

75
宣德通寶
A-04区Ⅱ面下

—
寛永通寶
B-01・03区Ⅰ面E102


76
(裏元)

—
寛永通寶
B-03・04区Ⅰ面

77
(裏文)

341　銅銭拓本３（２／３）

板碑・墓石

Ⅲ面Ａ－04区，59号配石遺構から板碑がⅣ面Ｂ－01区から墓石が出土した。

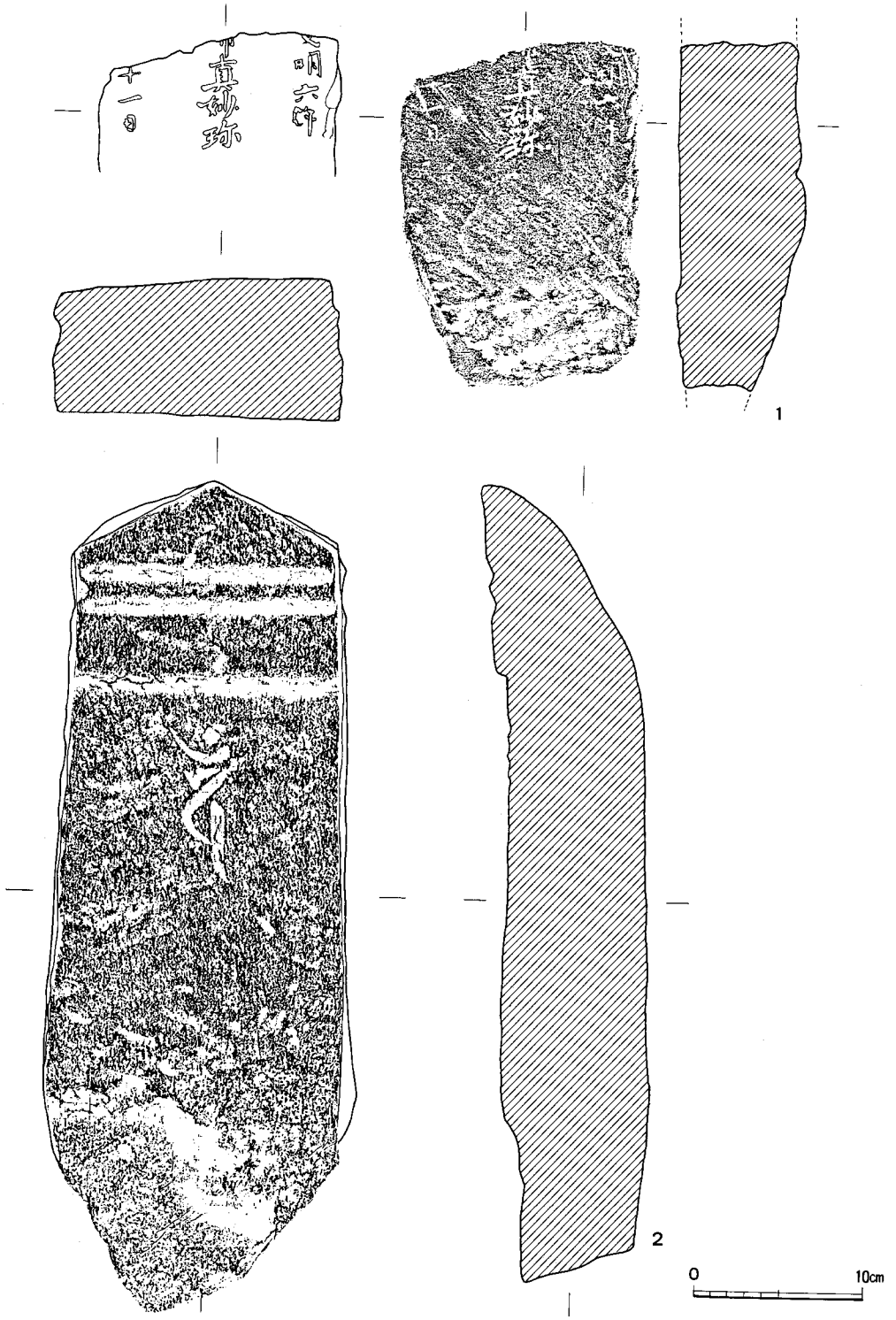
1は墓石である。折損した後，柱の根石として転用されたもので，Ⅳ面からの出土ではあるが，Ⅲ面とⅣ面の間から掘り込んだ柱穴に伴うものであろう。表面には三行書きで，右から「文明六午」「□真妙珎」「十一日」と彫られている。「文」の字は上半を欠くが，六年まであり，２字目が「明」で，午歳である元号という点から，「文明」と考えられる。これは，文字の下半部の形状とも一致する。文明６年は，1474年にあたる。

2は，板碑である。

博多遺跡群における板碑の出土例は少ない。隣接する民間関係第26次調査からも出土しているので，Ｐ.243に実測図を示す。

342　墓石（１／３）

343　墓石出土状況（西より）



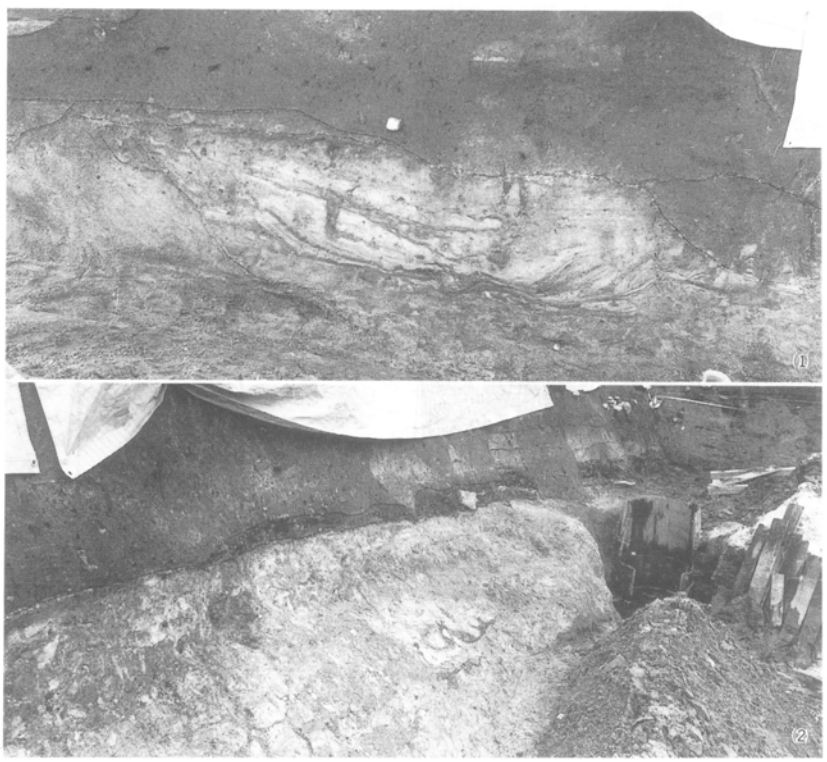
344　板碑・墓石実測図（1／4）

第三章　小　　結

以上，都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財第３次発掘調査の概要について，主要な遺構を中心に述べてきた。報告書の末尾にあたって，築港線第３次調査によって知り得た若干の知見及び問題点についてまとめておきたい。

調査地点の立地・環境について　築港線第３次調査地点は，「第一章　３．調査地点の位置と環境」で述べたように博多濱の北端にあたる。博多濱とその北側の沖ノ濱とは，従来は水道で隔てられていたと考えられてきた。ところが，昭和55年度に実施された福岡市高速鉄道関係呉服町交差点の調査において，水道の真ん中とされていた交差点の地下から12世紀初頭の木棺墓・溝が検出され，この地点が12世紀以降は陸化していたことが明かとなった。また，呉服町交差点から200メートルほど西に離れた昭和60年度の民間関係第29次調査では，[註1]近世初頭に行われた大規模な埋立の痕跡が調査され，中世以前は湿地であったことが確認された。呉服町交差点から50メートルほど東に離れた昭和56年度の民間関係第15次調査地点においても[註2]厚い泥土の堆積がみられた。これら既往の調査から中世においては，博多濱と沖ノ濱は呉服町交差点付近を陸橋としてつながっていたことが判明した。

築港線第３次調査においては，調査地点のほぼ中央を南東から北西に向けて地山砂層の落ち込みが認められた。落ち込みから北側は，灰色の粗砂が厚く堆積していた。この堆積中には明らかな層理がみられるが，その方向



344　地山落ち込み土層堆積状況（東より）

は一定せず流れ込んだ状態を示し，8世紀・9世紀代の遺物を多く包含している。遺構はまったくみられず，遺構が営まれるのは，12世紀初頭以後である。その段階では，落ち込みは完全に埋没している。また，土層観察によると，遺構が営まれている面の下は有機質の多い薄い腐植土層であった。このことから，流水のもとで堆積が進み，最後は一時的に湿地状を呈していたと考えられる。これと同様の状況は，築港線第3次調査地点と道路を隔てた斜め北側に当る民間関係第40次調査においても確認された。第40次調査における土層観察の結果からは，12世紀初頭の遺構面の基盤層が湿地の埋没後になされた人為的な埋立土である可能性が指摘されている。[註3]

これらの調査結果から，築港線第3次調査地点中央および民間関係第40次調査地点の南側を通る線から北側は，平安時代中頃までは湿地であったことが分かった。この湿地の一部，呉服町交差点から民間関係第40次調査地点にかかる一帯（築港線第3次調査を含む）は，自然環境のもとでの堆積及び人為的な埋立によって陸化し，12世紀初頭には博多濱の都市域に含まれていったのである。

10号溝について　築港線第3次調査地点A－03・04区において検出した10号溝は，そのほんの一部を調査できたに留まったものの石積みをともなった溝として博多では初めての例となった。本文中で触れたように，10号溝は東から西に向かって傾斜し，東側が溝の奥詰まりにあたると考えられる。ところで，築港線第3次調査地点の東側には，民間関係第35次調査[註4]で検出された道路が伸びてくると推測される。この道路の東側の側溝の延長にあたると考えられる溝が築港線第3次調査地点とは20メートルほど東に離れた民間関係第26次調査[註5]において検出されており，10号溝の東端から15メートル前後で道路につきあたると思われる。これらの点から，10号溝は，道路の西側からはじまり西に伸びていたものと考えられる。

10号溝の性格については，その形状のほとんどが不明であるため確定できない。今回の調査範囲内で言えることは，これが水濠状を呈していたということである。

室町時代，都市としての博多は博多濱と沖ノ濱とを合わせた80,000平方メートルにも及んでいたと考えられる。1333年，建武政権は論功行賞として沖ノ濱を大友貞宗に与えた。その後，1348年室町幕府は博多を管領在所として指定する。しかし，九州探題の力は弱く，九州の在地勢力を押さえ南朝勢力を圧倒したのは，1371年探題として赴任した今川了俊であった。了俊は1395年解任され，渋川満頼が探題となる。満頼とその跡を襲った義俊父子は，1420年朝鮮使節を迎えるに当って，博多の道路を整備し門を作らせるなど，市街整備を行っている。ところが，九州探題による博多支配も長続きせず，1429年までに沖ノ濱は再び大友氏の領するところとなり，間もなく博多濱も少弐氏の手に落ちることとなる。[註6]

10号溝が営まれたのは，九州探題今川氏から渋川氏にかかる時期であった。沖ノ濱から博多

濱にはいる陸橋である呉服町交差点付近を通りすぎてすぐの地点に掘削された10号溝は，博多濱からみれば，大友氏色を残す沖ノ濱に対する防衛線とも言えるのではないだろうか。

地鎮遺構ＳＸ27について　築港線第３次調査地点Ｃ－01区において検出された地鎮遺構ＳＸ－27は，８世紀後半と考えられる。これとほぼ同様の遺構が，民間関係第35次調査において発見されている。やはり土師器の甕と須恵器の坏蓋とを組み合わせたもので，ＳＸ－27との相違は須恵器の坏蓋が２枚，上の坏蓋は伏せて，下の坏蓋は裏がえして甕の上に乗っていたという点だけであった。この２個所の地鎮遺構は，直線距離で約60メートル離れている。２個所を結ぶ方位は，Ｎ－120°－Ｅである。[註4] ＳＸ－27の北側は，前述したように湿地であるから，ＳＸ－27にかかる施設が北側に伸びることは考えられない。仮にＳＸ－27が用地の四至になされたもののひとつとすれば，民間関係第35次調査検出の地鎮遺構と対になることも考えられる。

ところで，ＳＸ－27にかかわる遺構として考えられるのは，築港線第２次調査で検出した89号井戸である。89号井戸は，ややいびつな方形の掘りかたに方形に板を組んだ井戸側，曲物を据えた水溜をもった８世紀後半の井戸である。「長官」と墨書された須恵器が出土している。また，築港線第２次調査地点の全域が含まれると思われるが，築港線第２次調査地点からは円面硯・風字二面硯・石帯・銅製銙帯が出土し，律令官人の居宅が営まれていたという可能性が指摘されている。[註7] この推定を支持すれば，ＳＸ－27はこの居宅に伴う地鎮遺構であったということになろう。

墨書陶磁器について　前章Ｐ.220で記したように輸入陶磁器に書かれた墨書には，人名もしくは人名にかかわるもの，身分あるいは所属を表したもの，数字を書いたものなどがある。ここでは，身分あるいは所属を表したとしたものについて考えてみたい。

築港線第３次調査で出土した墨書陶磁器で身分にかかわるものには，「侍」・「僧器」がある。築港線第２次調査出土資料には，単に「僧」としたものもみられた。これらは，身分を表した名詞ではあるが，特定個人をさすものではない。したがって，器としての所有の主体が，個人ではなかったことを意味している。まさに，「僧器」というのはその表現であり，不特定の僧に供される器であったことを物語っている。また，「寺」という墨書も「僧」・「僧器」とならんで寺院に所属する器物であったことを示している。

それでは，「侍」と書かれた墨書はどこで用いられたのであろうか。実は，「侍」という語には，身分を示す以外に建物をさす用例もみられる。たとえば，吾妻鏡治承四年11月25日条に「侍二五ケ間萱葺屋也」とか，同文治四年７月10日条に「次於西侍有盃酌」などと有るのがこれで，従者たちの詰める侍廊を示している。前者は源朝長邸，後者は源頼朝の鎌倉御所の一部であるが，侍廊は上級武士の邸宅に限ったものではなく，貴族の邸宅においても設けられていた。[註8] また，侍屋という表記も見られ，仁平二年10月12日の『賀茂某家地譲状案』[註9]には「三間一

面侍屋一宇」,建久六年6月の『中原為經譲状』には「侍屋一宇」などと記されている。車宿とかねていた場合もあり，建久三年11月22日の『大中臣某處分状案』[註10]には，「三間一面侍車宿壹宇」[註11]と見える。これらの侍廊は，間面記載法で記された寝殿に付属した建物である。京都の貴族の邸宅においては早くから見られることから，本来は寝殿造りの一部を構成する建物であり，それが武士階級にまで広がった，あるいはその呼称が広がったものと考えられる。「中原為經」や「大中臣某」は，地方の在地領主であり，侍廊（侍屋）が地方の建築にまで取り入れられていたということができる。ただし在地領主の居館に必ずしも備わっていたとは限らず，譲状に侍屋の記載を欠くものもみられる。陶磁器の底に書かれた「侍」の文字が特定の個人をさしていないことは明らかである。したがって，身分もしくは建物を表している。「僧」・「僧器」の例に習えば身分を表すことになるが，寺院における僧のように常時多数の侍が集まっている状態は想定しがたい。この場合は，むしろ建物を表したものと考え，侍廊において用いられた器と位置付けるのが妥当であろう。言い替えれば，博多の築港線第3次調査地点の近くに侍廊を備えた施設（邸宅・居館）が存在したということになる。「侍」と墨書された白磁の皿からは，12世紀という年代が与えられる。元寇・鎌倉幕府による鎮西探題の設置までは1世紀もの間がある。この時代では，文献の上からは貴族・有力武士の博多居留は知られていない。推測の域を出ないが，大宰府に勢力をもった有力府官または西下した中級貴族の邸宅が営まれたものと考えたい。

109号井戸出土曲物について　Ⅶ面109号井戸から出土した曲物の用途について触れてみたい。109号井戸出土曲物は，平面形は円形で，直径15.8cm，器高9.4cmを計る。井戸の最下部からの出土であるが，水溜部分に据えられたものではなく，落ち込んだと思われる状況を示していた。曲物は完形を保っており，表面に薄く塗られた黒漆が部分的に剝がれている以外は全く欠損していない。穿孔するなどの2次的な加工は認められない。

この曲物は，曲物の形態と用途について論じた南博史氏の分類[註12]によれば，Ⅰ類Sタイプにあてはまる。南氏は絵巻物に描かれている曲物を検討し，曲物の基本的用途を『水用容器』・『食物用容器』・『運搬用容器』に集約した。Ⅰ類Sタイプは，『水用容器』としては「水桶」・「つるべ」,『食物用容器』として用いられていたとする。これに基づいて109号井戸出土曲物を見ると，曲物底板の外面には無数の刃物傷がみられ，俎替わりの包丁傷と思われる。この点から見て，曲物に縄を掛けて「つるべ」にしたものとは考えられない。「水桶」・『食物用容器』のいずれとも断じがたいが，裏側に包丁傷が無数に残されている点，井戸の中に落としている点などから，水桶と考えるのが妥当であろう。

下駄について　博多遺跡群は砂丘上に営まれた遺跡であり，木製遺物が残ることは少ない。築港線第3次調査は，木製遺物を多量に検出した数少ない調査のひとつである。今回，その概

略を報告するにあたって特に下駄について形態別に分類して記述することとした。その分類については，本文中では触れられなかったのでここに記すこととする。

下駄の分類については諸先学によって試みられているところである。本来ならばそれら先行研究の成果によって記すべきであるが，今回は執筆者の不勉強のためそれらを咀嚼できていないまま報告することとなってしまった。そのため，出土資料に基づいて，その形態的特徴を記号化するという観点からAからHまでの8類に分類した。以下にその内容を記す。

- 歯を削り出すもの
  - 歯の断面が楕円形を呈し，肉厚く台形に広がるもの ―― A類
  - 歯の断面が長方形で張りを持たず，上下の幅がほぼ同じ物 ―― B類
- 歯を別に作りはめ込むもの
  - 台に枘穴を穿たないもの ―― C類
  - 歯に枘を作り，台の枘穴にはめこむもの
    - 枘1本 ―― D類
    - 枘2本 ―― E類
    - 前歯枘1本，後歯枘2本 ―― F類
    - 前歯枘2本，後歯枘1本 ―― G類
    - その他（別に楔を打つ） ―― H類

C類は陰卯，D～H類は露卯の下駄にあたる。

築港線第3次調査で出土しているのは，ほとんどがC類である。しかし，若干乍らA・B類もみられた。また，上の分類とは別に釘を併用するものも認められた。特定の形態のものに付随した技術ではないようである。

五銖銭について　築港線第3次調査において出土した銅銭の整理中，五銖銭が確認された。Ⅳ面下C－01区から出土した銅銭の中の一枚である。

五銖銭は，径2.57cm，厚さ0.12cm，重さ2.3gを計る。「五」字，「銖」字の高さは穿の長さとほぼ等しい。「五」字の斜線は湾曲しながら交錯する。「銖」字の金扁の4点は縦長である。朱旁は円折し，頭の両角が外向きに広がる。穿の上辺は肥厚し，いわゆる穿上横文につくる。

五銖銭の分類・編年については，中国においてその豊富な出土資料から洛陽焼溝漢墓[註13]・河北満城漢墓[註14]の報告において試みられている。岡内三真氏は焼溝漢墓の分類・編年の問題点を指摘した上で，Ⅲ型7式の分類・編年を行った[註15]。築港線第3次調査出土五銖銭は，岡内分類のⅢa式に該当する。岡内氏は後漢後期の桓帝から献帝までの時期に当てている。

日本国内における五銖銭の出土は中国におけるそれと比較にならないほど少なく，山口県宇部市沖ノ山遺跡96枚以上[註16]，福岡県北九州市守恒遺跡1枚[註17]，同福岡市博多遺跡群1枚[註18]，大分県大分市松崎遺跡2枚[註19]，熊本県玉名市保多地2号墳2枚[註16]，大阪府和泉市和泉黄金塚古墳1枚[註20]であり，朝鮮系無文土器の甕とされる土器に埋納されていた沖ノ山遺跡例を除けばいずれも1～2枚の

出土にとどまっている。五銖銭は漢代から隋代まで鋳造されているが，日本国内で中世の遺跡から出土したのは築港線第3次調査出土例が初めてである。出土した包含層の年代観は，C－01区のⅣ面・Ⅴ面での検出遺構からみて14世紀代に求められる。築港線第3次調査地点では，土器の小片まで含めて，古墳時代以前に遡りうる遺物は黒曜石の石核片が2点，111号井戸出土の鉄鏃（Fig.295－28）1点のみである。このような状況の中で，弥生時代に将来された五銖銭が14世紀の包含層に混入する可能性は極めて低いと言える。また，貨幣そのものの持つ価値について全く無知で，奈良時代になっても容易に貨幣を流通させえなかった我が国に於て，五銖銭が弥生時代から中世まで伝世することは不可能に近いと言えよう。五銖銭は，早くとも宋銭が大量に流入した平安時代末期以降にもたらされたものと考えるのが妥当であろう。

銅銭について　築港線第3次調査において出土した銅銭の枚数は2257枚にのぼる。これは，博多遺跡群の1回の調査で出土した銅銭の数としては最も多い。銭種も多く，49種類に及んでいる。これを既往の調査と比較すると下のようになる。

(1)高速鉄道店屋町工区調査	1,832m²	28枚出土	（北宋24，南宋1，金1，明2）
(2)高速鉄道祇園町工区調査	4,500m²	48枚出土	（唐1，北宋13，南宋1，元1，日本6，不明26）
(3)高速鉄道祇園町出入口調査	215m²	9枚出土	（唐1，北宋3，日本2，不明3）
(4)築港線第1次調査	630m²	212枚出土	（唐4，北宋45，南宋2，明6，日本5，不明150）
(5)築港線第2次調査	564m²	159枚出土	（唐4，北宋63，南宋3，明5，日本4，不明80）
(6)民間関係第26次調査	135m²	634枚出土	（唐12，後周1，北宋108，金1，明103，朝鮮2，不明405）
(7)民間関係第28次調査	1,745m²	101枚出土	（唐3，北宋30，元1，明3，日本40，不明24）

以上は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵された資料から算出した数字および報告書からの引用である。(6)は築港線第3次調査地点の東に隣接する調査地点で，調査面積に対する出土枚数を見ると築港線第3次調査に匹敵する数字となる。これに対し，(1)～(3)・(7)は南にはなれた調査地点で，前述した博多濱の最頂部にあたる。(7)は(1)～(3)に比べて出土枚数では突出するが，寛永通寶がほとんどを占める日本銭を除くと大差はみられない。

このような調査地点による出土枚数の差は，おそらく包含層の厚さの違いによるものと思われる。これは，時代別の遺構の遺存状況にも表れており，博多濱南部では中世後半期の遺構が少なく中世前半の遺構の上にすぐ江戸時代の遺構がかぶさっている。それに対し，博多濱北部では特にその北縁において中世後半の遺構が多く検出されている。ところで，上の比較資料を見ると，出土枚数の多寡は日本の中世後半にあたる明銭のみならず，唐銭・北宋銭にも認められる。民間関係第26次調査や築港線第3次調査では，鎌倉時代以前の遺構はむしろ少なく，出土した唐銭や北宋銭の大半は室町時代以降にも流通していたものと思われる。もちろん唐銭や

北宋銭の全てが室町時代に下るわけではなく，12世紀の遺構からも出土し，日宋貿易が盛行した平安時代末期以来もたらされ続け流通していたものと考えられる。

おわりに　この報告書は，十分な整理検討を終えていない段階で，少しでも多くの遺構・遺物を取り上げ紹介するという方針で編集した概要報告書である。また，自然科学的な分析成果については，優先的に収録することとし，３本の原稿をいただいた。報告書の末尾にあたり，1986年に報告した民間関係第26次調査の概報からもれた板碑および中橋孝博氏の寄稿に関連して同調査出土の木棺の実測図を示すこととする。

註１　高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ　博多　福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集　1988年

註２　博多Ⅷ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第148集　1987年

註３　平成元年度報告書刊行予定

註４　博多12　福岡市埋蔵文化財調査報告書第177集　1988年

註５　博多Ⅵ　福岡市埋蔵文化財調査報告書第144集　1986年

註６　川添昭二「海にひらかれた都市　古代・中世の博多」
『よみがえる中世　1　東アジアの国際都市博多』　平凡社　1988年

註７　都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告（II）　博多
福岡市埋蔵文化財調査報告書第184集　1988年

註８　平安時代・鎌倉時代の貴族の邸宅については下記の文献を参考にした
太田静六『寝殿造の研究』　吉川弘文館　1987年

註９　平安遺文2771号

註10　鎌倉遺文803号

註11　鎌倉遺文639号

註12　南博史「絵巻物にみる曲物の一考察」　『平安博物館研究紀要』第７輯　1982年
南博史「曲物の形態と用途」『横田健一先生古稀記念文化史論叢』下　創元社　1987年

註13　『洛陽焼溝漢墓』　中国科学院考古研究所洛陽区考古発掘隊　1959年

註14　『満城漢墓発掘報告』中国社会科学院考古研究所・河北省文物管理処　1980年

註15　岡内三真「漢代五銖銭の研究」　『朝鮮学報』第102輯　1982年

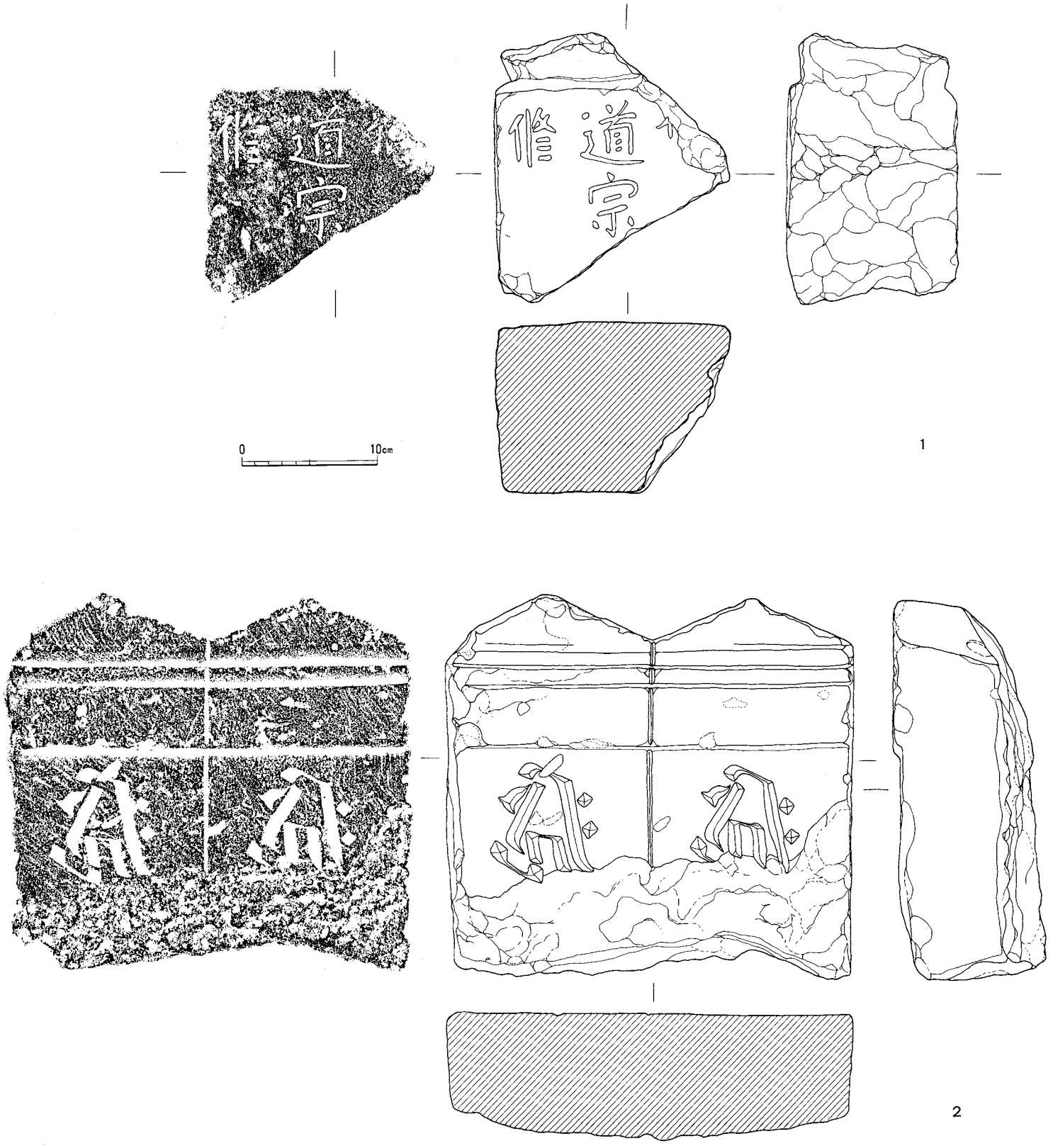
註16　小田富士雄「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」『古文化談叢』第９集　1982年

註17　『守恒遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第50集　北九州市教育文化事業団　1988年

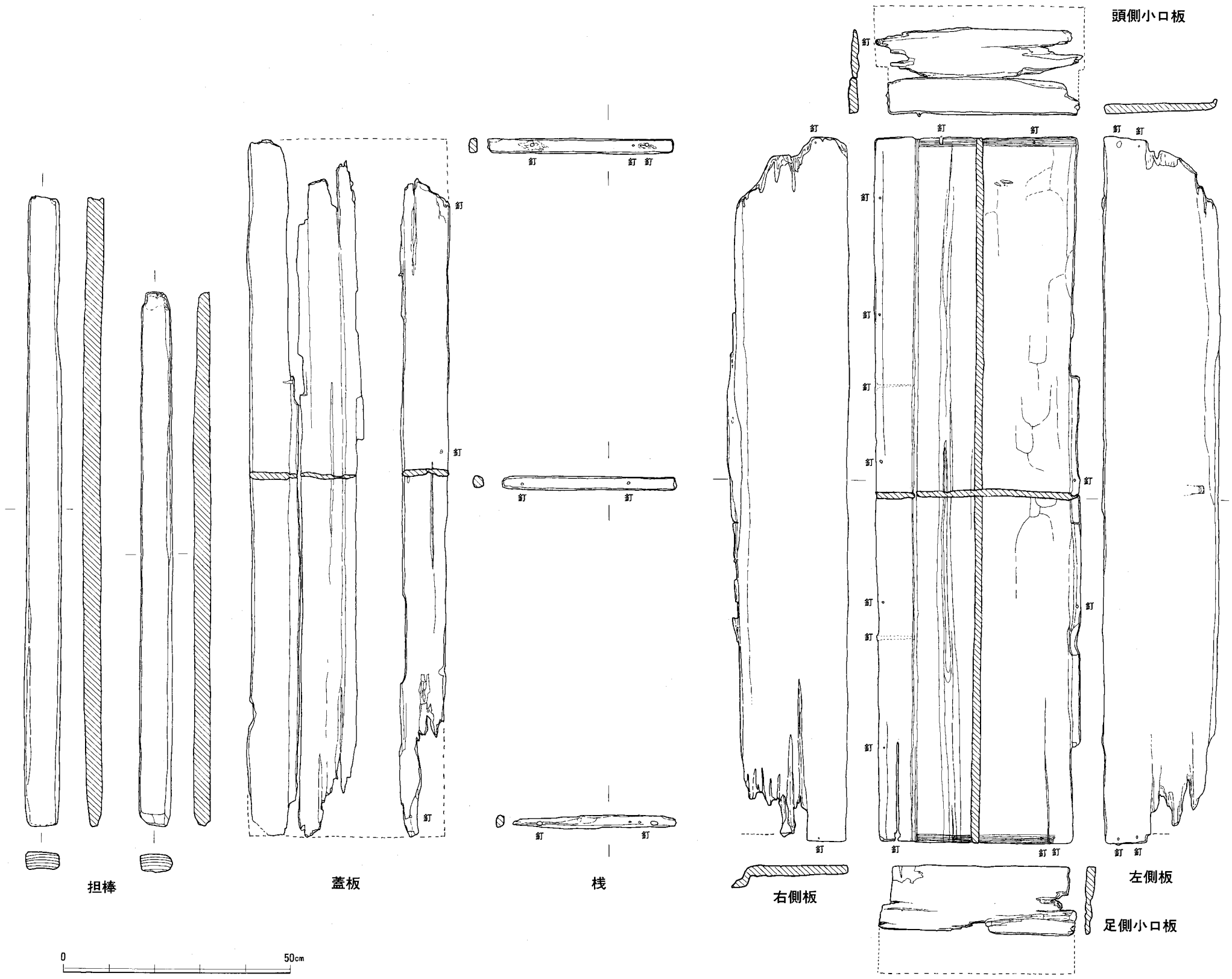
註18　奥村武『博多袖之湊址發掘文化財目録』　1953年

註19　小田富士雄「大分市丹生川周辺の弥生遺物」『九州考古学研究　弥生時代編』
学生社　1982年

註20　『和泉黄金塚古墳』　1954年



345 博多遺跡群第26次調査出土墓石・板碑（1／4）



346 博多遺跡群第26次調査出土木棺（26－1号人骨埋葬，1／10）

博多遺跡群築港線関係第３次調査出土の鋳造鉄精錬溶解滓の金属学調査

大　澤　正　己

概要

都市計画道路博多駅築港線関係第３次調査において16世紀前半に比定される790号土壙(1×1.5×0.2mのピット)に伴なって出土した金属溶解滓の調査を行なった。

該品は，鉄酸化物主体の滓であるが，その中の局所に片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄部分をはじめとして，ヴスタイト(Wüstite:FeO)，マグネタイト(Magnetite:Fe_3O_4)，イルミナイト(Ilmenite:$FeO \cdot TiO_2$)ら鉱物組成を内蔵するもので，鉄鋳造の溶解滓に分類される。鋳造用原料素材は，砂鉄系の鉄滓と共存した粗鉄塊(製錬滓スラグを付着する)が供されたと考えられる。従来，あまり見られなかったタイプの滓であり，鋳造鉄精錬溶解滓と仮称しておきたい。

１．いきさつ

博多遺跡群の790号土壙は，福岡市博多区上呉服町1番地に所在し，都市計画道路博多駅築港線関係第３次調査において検出された。790号土壙からはパンケース箱２杯分(約28kg)の金属溶解滓を残存するものの，遺構の性格が不明瞭であった。

この為，福岡市教育委員会より調査依頼の要請があったので，博多遺跡群第40次調査において出土した鍛錬鍛冶(小鍛冶)椀形滓(近世)と比較検討を行なった。その結果について報告する。

２．調査方法

２－１，供試材

Table. 1に供試材の履歴を示す。博多遺跡群築港線第３次調査出土の鋳造精錬溶解滓は，ブロック状の大塊である。同一個体と考えられるが２ケ所より試料採取を行なった。また，比較材として博多遺跡群第40次調査で出土した通常の鍛錬鍛冶(小鍛冶)椀形滓を加えている。

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	遺跡名	出土位置	推定年代	試料大きさ		調査項目		
					サイズ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	化学組成	EPMA
V-881	鋳造精錬溶解滓	博多築港線第３次調査	B区-01　Ⅲ面	16世紀前半	100×60×40	350	○	○	○
2	〃	〃	SD-790 850726	〃	60×60×30	155	○	○	
3	鍛錬鍛冶椀形滓	博多遺跡群第40次調査	第1面 88.10.15	近　代	120×85×30	422	○	○	○

2－2．調査項目

(1) 肉眼観察

(2) 顕微鏡組織

各供試材は水道水で充分に洗滌した後，中核部をベークライト樹脂に埋込み，エメリー研磨紙の＃150，＃240，＃320，＃600，＃1,000と順を追って研磨し，最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げている。

(3) 化学組成

化学組成分析は次の方法をとっている。

重クロム酸使用の重量法……酸化第1鉄（FeO），二酸化珪素（SiO_2）。赤外吸収法……炭素（C），硫黄（S）。原子吸光法……全鉄分（Total Fe），酸化アルミニウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3），バナジウム（V），銅（Cu）。中和滴定法……五酸化燐（P_2O_5）。

(4) EPMA調査（Electron Probe Micro Analyzer）

別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は，真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し，発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し，定性的な測定結果を得る方法である。これが最近ではCMA（Computer Aided X-ray Micro Analyzer（以下CMAと略記）という新しい総合状態分析装置が開発された。原理はEPMAと同じであるが，標準試料とX線強度との対比から元素定量値を得ることができるコンピューター内蔵の新鋭器機である。

本稿では，鋳造精錬溶解滓中に内蔵されたねずみ鋳鉄をはじめ，各種鉱物組成を特性X線像で解析している。

3．調査結果

790号土壙概要

790号土壙は，築港線第3次調査A－03区II面下より検出した。土壙は，南側を最近の地下室によって破壊されており，検出できたのは長軸138cm，推定短軸約65cm，深さ24cmにとどまる。

壙底には，点々と礫を配し，土壙内にはすきまなく鉄滓がつまっていた。鉄滓はその密度より上下2層にわかれる。下層の鉄滓は赤色で上層と比べややもろい。上層の鉄滓は暗赤色を呈し，一枚石状にかたまって非常にかたい。上層・下層ともに土砂の堆積を全くふくまず，鉄滓のみの堆積（沈澱）層である。

遺物は，全く出土していないが，II面・III面の遺構から16世紀前半頃の土壙と考えられる。

3－1．博多遺跡群築港線第3次調査出土品

(1) V－881鋳造精錬溶解滓

① 肉眼観察

表裏ともに赤褐色を呈した無光沢金属酸化物塊で肌は荒れている。また，局部的に金属鉄の酸化した赤黒色鉄錆亀裂部があり，所により木炭痕を残す。含銅質で緑青を発生する個所も見受けられる。比重は大きく弱磁性質。

② 顕微鏡組織

Photo. 1の①～⑨に示す。組織は鉄酸化物主体で，これに砂鉄系製錬滓のもつ各種鉱物組成を少区画ごとに散在させる。以下，①から⑨までの組織を順を追って述べる。

①は，片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄(Gray Cast Iron)である。黒い片状は黒鉛(Graphite)であり，素地は金属鉄が残留すればパーライト(Pearlite)を析出した組織が腐食時(etching)に表われる筈であるが，酸化を受けていて，この確認はとれなかった。片状黒鉛の析出は，炭素(C)量が1.7%以上で冷却速度が遅い場合と，珪素(Si)の含有量が多い場合に表われる。

②で組織写真の両端の灰白色まだら部は，金属鉄の酸化したゲーサイト(Goethite:α-FeO・OH)であり，その内側に白色多角形の大型結晶が存在するのはマグネタイト(Magnetite:Fe_3O_4)である。また，中央部の灰色長柱状結晶はフェアライト(Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$)と，白色微小粒状結晶のヴスタイト(Wüstite:FeO)が樹状晶で晶出している。この中央部の組織拡大が③である。

④は周囲がゲーサイトで，灰色角状の自然鉱物の汚染状態がみられ，その中央にヴスタイトとフェアライトが共存するのが認められる。⑤はその拡大組織である。

⑥組織も周辺部は，やはり金属鉄の酸化したゲーサイトで，その中央部に暗黒色逆三角形のガラス質スラグ中に白色針状結晶のイルミナイト(Ilmenite:$FeO \cdot TiO_2$)が析出する。イルミナイトは砂鉄系原料に表われる組織である。⑦は拡大組織である。

⑧も周辺部はゲーサイト化し，その中央部にヴスタイトとマグネタイト，それに淡灰色多角形状のアノルサイト(Anorthite:$CaO \cdot Al_2O_3 \cdot 2SiO_2$)を晶出する組織である。⑨は拡大組織を示す。当組織の構成は砂鉄製錬滓のもつ特徴を呈するものである。

以上の結果から該滓は，鉄酸化物の中に，ねずみ銑鉄や砂鉄系製錬滓の鉱物組成を局部に少量残存させる構成滓である事が判る。

(3) 化学組成

Table. 2に示す。鉄分が多く，全鉄分(Total Fe)は50.4%で，このうち酸化第1鉄(FeO)は12.14%と低目で，酸化第2鉄(Fe_2O_3)の方が58.5%と高く，鉄酸化物の多いことが判る。それに対して，ガラス質成分の二酸化珪素(SiO_2) 12.98%，酸化アルミニウム(Al_2O_3) 2.46%，酸化カルシウム(CaO) 0.89%，酸化マグネシウム(MgO) 0.28%でこれらを合計すると16.61%と逆に低目となっている。

次に，該滓の炭素（C）量は，1.67％と高目で，局部にねずみ銑鉄を包含していた影響が表われている。また，二酸化珪素（SiO_2）として12.98％が含有されている事は，ねずみ銑鉄中に珪素（Si）が固溶されていて，これが片状黒鉛の析出に効いた可能性をもつものと考えられる。

製鉄原料が砂鉱系か鉱石系かを判別する二酸化チタン（TiO_2）は，1.32％含有され，通常鍛冶滓（鍛錬鍛冶滓，小鍛冶滓）に比べると高目傾向にある。顕微鏡組織でみたチタン—鉄酸化物であるイルミナイトらの影響である。

また，他の随伴微量元素は，酸化マンガン（MnO）0.24％，酸化クロム（Cr_2O_3）0.04％，五酸化燐（P_2O_5）0.27％，硫黄（S）0.019％，バナジウム（V）0.053％らは低目傾向にある。ただし，銅（Cu）のみは，0.96％と多く肉眼観察でみられた緑青の発生が認められたものと合致する。鋳鉄溶解時に少量の銅製品の混入があった可能性が考えられる。

該滓は化学組成からも鉄酸化物主体で鉄滓系ガラス質成分は少なく，鋳鉄溶解に関連した排出物と考えられる。その時の原料は低チタン砂鉄系の素材が用いられたと推定される。

(4) EPMA調査

まず，Photo. 3とTable. 3に鉄酸化物中に残存する砂鉄粒子を示す。砂鉄は約60μ程度の小粒子である。この粒子からの検出元素はTable. 3の高速定性分析結果からみると，Fe，Si，Al，Ti，Mgの強度順となる。これらの検出元素を視覚化するとPhoto. 3に示した特性X線像となる。白色輝点が認められる個所に分析元素が存在することを示す。

Feは，白色輝点が，ほぼ全面から検出される。素地が鉄酸化物であり，砂鉄粒子が磁鉄鉱であるからである。鉄酸化物は，SiやAlの汚染物質があり，砂鉄粒子側はTiが微量固溶する。地元賦存砂鉄の可能性が大きい。

Photo. 4とTable. 4は，ヴスタイト（Wüstite：FeO）とガラス質スラグ中のフェアライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の分析結果である。ヴスタイトからはFeに強く白色輝点が認められ，かつ，ガラス質スラグ側のフェアライトからも検出される。また，ガラス質側には，球状化した金属鉄の存在が認められる。ガラス質物質はSi，Al，Ca，Mg，K，Na，Sbらであり，Tiもかなく強く残存する。砂鉄系の素材の確証となる。

Photo. 5とTable. 5はねずみ鋳鉄部の分析結果である。片状黒鉛にCが集中しているのが判る。なおこの基地にはCuが固溶される。Si，Ca，Mgらは土壌からの汚染物質とみるべきであろう。

Photo. 6とTable. 6はマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）の分析結果である。マグネタイト結晶にはFeが強く，Tiは弱く白色輝点が集中する。ガラス質スラグには，Si，Al，Ca，Mg，K，Naらが検出される。

Photo. 7とTable. 7にはウルボスピネル（Ulvöspinel：$2FeO \cdot TiO_2$）とガラス質スラグ部

分の分析結果である。ウルボスピネルにはTiに強く白色輝点が集中し，これにFeとVが加わっている。これも砂鉄系鉄素材の使用を裏付ける試料となる。

(2) V－882　鋳造精錬溶解滓

① 肉眼観察

V－881に準ずるものであるが，こちらは緑青発生の少ない個所である。

② 顕微鏡組織

組織構成はV－881に準じている。結果をPhoto. 2の⑩～⑭に示す。組織の大半は鉄酸化物のゲーサイト（Goethite:α-FeO•OH）であり，その局部に⑩に示す片状黒鉛をもつねずみ鋳鉄，⑪⑫に掲げた白色多角形状結晶のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4），⑬⑭の暗黒色ガラス質スラグ中に晶出するマグネタイトらである。

③ 化学組成

Table. 2に示す，構成成分はV－881とほぼ同傾向である。該滓は炭素（C）量が1.80%と若干高目で，銅（Cu）が0.38%低く，外観で緑青がみられなかった結果と，よく対応がとれている。

3－2．博多遺跡群第40次調査品

(1) V－883　鍛錬鍛冶椀形滓

① 肉眼観察

表裏ともに砂粒を付着し，赤褐色鉄錆に包まれた椀形状の鉄滓である。表側は平坦で局部に木炭痕を残す。裏面はわずかに滴下状反応痕をもち，木炭痕と少量の木炭噛み込みが認められる。破面は中核部がコークス状黒色多孔質の鍛冶滓特有外観部で，その周囲を取り囲んで赤褐色鉄錆が覆ってサンドイッチ状をなしている。

② 顕微鏡組織

Photo. 2の⑮⑯に示す。鉱物組成は白色粒状の大きく成長したヴスタイト（Wüstite: FeO）と，灰色長柱状結晶のフェアライト（Fayalite:2FeO・SiO_2)が暗黒色ガラス質スラグ中に晶出している。鍛錬鍛冶滓特有の晶癖を呈するものである。

③ 化学組成

Table. 2に示す，全鉄分（Total Fe）は，49.3%あり，このうち，酸化第1鉄（FeO）が39.5%と高目で，検鏡組織で観察されたヴスタイト（Wüstite:FeO）の多量晶出とよく対応し，酸化第2鉄（Fe_2O_3）は26.6%の割合である。ガラス質成分としては，二酸化珪素（SiO_2)20.88%，酸化アルミニウム（Al_2O_3）4.02%，酸化カルシウム（CaO）3.12%，酸化マグネシウム（MgO）2.64%の合計30.66%となり，塩基性成分の酸化カルシウムと酸化マグネシウムが多いのが注目される。二酸化チタン（TiO_2）は0.37%，バナジウム（V）0.017%と低目は鍛錬鍛冶滓（小鍛

冶滓）の特徴を示す。また，随伴微量元素らは，酸化マンガン（MnO）0.12%，酸化クロム（Cr_2O_3）0.04%，硫黄（S）0.018%と低目傾向にあるが，五酸化燐（P_2O_5）1.11%，銅（Cu）0.011%は高く，鉱石系鉄素材の鉄製品鍛造が考えられる。

④ EPMA調査

分析結果をPhoto. 8とTable. 8に示す。分析個所は，ヴスタイト（Wüstite:FeO）とフェアライト（Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$）および基地の暗黒色ガラス質スラグ部である。

Table. 8は高速定性分析結果であり，検出元素は，Si，Fe，Al，Mg，Ca，K，Na，Tiらとなる。これを視覚化した特性X線像がPhoto. 8である。

ヴスタイトの結晶に強く白色輝点が集中するのはFeであり，これに微量のTiが存在して固溶しているのが判る。フェアライトには，Si，Fe，Mgらの存在が明らかとなる。またマグネシウムの検出からFayalite，Magnesian（$(Fe \cdot Mg)_2SiO_4$の同定も考えられる。ガラス質スラグ部分には，Si，Al，Ca，K，Naらが検出される。

該滓は，化学組成の項目で言及した様に，含銅系であるので微量チタン（Ti）の検出は砂鉄系ではなく磁鉄鉱系の可能性が秘められている。

4．考察

博多遺跡群築港線第3次調査で，16世紀前半に推定される790号土壙より出土した金属溶解滓を調査した。調査対象滓は，外観的にも鉄酸化物を多く含有する滓で，一部に緑青が発生し，銅含有量の高い事が予測できた。鉱物組成は，鉄酸化物のゲーサイト（Goethite:α-$FeO \cdot OH$）が主体をなすが，その中の局部に片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄部分をはじめとして，ヴスタイト（Wüstite:FeO），マグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4），イルミナイト（Ilmenite:$FeO \cdot TiO_2$），ウルボスピネル（Ulvöspinel:$2FeO \cdot TiO_2$），半還元砂鉄粒子，砂鉄粒子ら各種鉱物が1個体の中で数多く混在する。

この種の滓は，鉄生産の第1工程の製錬滓（砂鉄や鉱石を木炭で還元する時点で排出される滓）とも違い，また，鉄器製作時の鍛冶滓とも異なる。第40次調査に出土した鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）の鉱物組成と化学組成は前述した様に，ヴスタイト＋フェアライトの単独相であり，化学組成はTable. 2の如く，酸化第2鉄（Fe_2O_3）が26.6%と少なく，二酸化チタン（TiO_2）も0.37%と低目である。

また，砂鉄製錬滓においても，鉄酸化物を主体とする傾向は認められない。参考までに示したTable. 2の有田遺跡81次調査出土の砂鉄製錬滓は，全鉄分（Total Fe）が35.5%と低目であり，造滓成分系（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$）は41.27%と高目傾向にある。

この様に，博多遺跡群築港線第3次調査出土滓は，従来検出されていた滓とは，異なったタイプの鉱物組成を呈するもので，分類的には鉄鋳造時の残渣滓と考えられ，鋳造精錬溶解滓と仮称して

おきたい。なおここに精錬の文字を入れたのは，鋳造溶解用の鉄素材は，粗鉄塊で製錬滓鉱物の，マグネタイト，ウルボスピネル，半還元砂鉄粒子らを多く共存させたもので熟鉄ではなく，成分調整的工程が想定できるからである。銅(Cu)が高目にあるのは，鉄溶解に当って，銅製品も加えられた為と考えられるが詳細は今後の研究課題となる。

また，砂鉄粒子や半還元砂鉄粒子の存在は，溶融銑鉄中に酸化脱炭剤として砂鉄を添加しつつ攪拌脱炭する炒鋼法による鋼製造法の可能性も検討しなければならないが，遺構そのものに，そういった根拠が希薄で，今後の類例を待ちつつ，この問題は考えてゆきたい。

5．まとめ

博多遺跡群築港線第3次調査で検出された790号土壙出土滓について調査した。

〈1〉 該滓の主体鉱物は，鉄酸化物のゲーサイト(Goethite:α-FeO・OH)である。

〈2〉 鉄酸化物中には，片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄が存在し，790号土壙は鉄鋳造に関連する遺構の可能性を秘めている。

〈3〉 該滓の中には各種鉱物組成が残存する。ヴスタイト(Wüstite:FeO)＋フェアライト(Fayalite:$2FeO \cdot SiO_2$)，マグネタイト(Magnetite:Fe_3O_4)＋フェアライト，ヴスタイト＋アノルサイト(Anorthite:$CaO \cdot Al_2O_3 + 2SiO_2$)，暗黒色ガラス質＋イルミナイト(Ilmenite:$FeO \cdot TiO_2$)，ウルボスピネル(Ulvöspinel:$2FeO \cdot TiO_2$)，半還元砂鉄粒子，銅分らである。

〈4〉 〈3〉に示した鉱物組成は，砂鉄系製錬滓であり，これは粗鉄塊に付着したものと考えられる。鋳造溶解時は成分調整も兼ねた操業であり，該滓を鋳造精錬溶解滓と仮称しておきたい。

〈5〉 なお該滓は，半還元砂鉄粒子や，砂鉄粒子が残留するので溶融銑鉄を酸化脱炭させる製鋼法の炒鋼法の検討も必要となる。

〈6〉 該滓は外観から緑青が認められ，かつ銅(Cu)分として1％近くの高含有量であることから，鋳銅関連を配慮したが，これを裏付ける事象は思い付かなかった。

〈7〉 該滓についての最終結論は，今後の類例をみて決定したいと考える。

〈8〉 博多遺跡群第40次調査出土鉄滓は，鉄器製作時の鍛冶炉の炉底に堆積した鍛錬鍛冶椀形滓(小鍛冶滓)に分類される。鉄素材は鉱石系が想定されて，福岡平野の古代にみられる砂鉄系とは異なっている。近世になると，鉄素材の流通が大きくなり，他地域からの搬入が考えられる。

平成元年1月8日脱稿

Table. 2　福岡平野出土各種金属滓の化学組成

符　号	遺 跡 名	市町別	出土位置	試　　料	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)
V－881	博多 (築港線第3次)	福岡市	B—01区Ⅲ面 790号土壙	鋳造精錬溶解滓	16世紀前半	50.4	12.14	58.5	12.98	2.46
V－882	〃	〃	〃	〃	〃	51.5	11.42	61.0	12.56	2.46
V－883	博多(第40次)	〃	第1面	鍛錬鍛冶滓	近世	49.3	39.5	26.6	20.88	4.02
2V－841	飯盛(第4次)	〃	LM－16地区 第4号炉跡	〃	奈良末～平安	50.7	18.82	51.6	12.54	4.96
2V－842	〃 (〃)	〃	LM－16地区 第5号炉跡	精錬鍛冶滓	〃	56.6	51.7	23.43	11.62	4.16
20－831C	有田(第81次)	〃	I区SE19上部	砂鉄精錬滓	奈良	35.5	38.9	7.56	26.5	9.54

酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_3 / Total Fe	注
0.89	0.28	0.24	1.32	0.04	0.019	0.27	1.67	0.053	0.96	16.61	0.330	0.026	1
1.14	0.34	0.25	1.38	0.04	0.021	0.34	1.80	0.056	0.38	16.50	0.320	0.027	〃
3.12	2.64	0.12	0.37	0.04	0.018	1.11	0.30	0.017	0.011	30.66	0.622	0.008	〃
1.33	0.64	0.11	0.75	Nil	0.050	0.37	0.64	0.060	Nil	19.47	0.384	0.015	2
2.94	1.01	0.20	2.25	0.099	0.028	0.23	0.21	0.17	Nil	19.73	0.349	0.040	〃
4.27	0.96	0.56	7.51	0.06	0.036	0.36	0.12	0.18	Nil	41.27	1.163	0.212	3

注
1．大澤正己「博多遺跡群築港線関係第3次調査出土の鋳造鉄精錬溶解滓の金属学的調査」『博多』〈都市計画道路博多駅築港線関埋蔵文化財調査報告Ⅲ〉(福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集)福岡市教育委員会　1989。
2．飯盛遺跡第4次調査、福岡市教育委員会、1984.12.15。未発表資料。
3．大澤正己「有田遺跡群(第81次調査)出土鉄滓と砂鉄の金属学的調査」『有田遺跡群－第81次調査－』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集)福岡市教育委員会　1986。

POS. NO. HOLDER NO. X(MM) Y(MM) Z(MM) COMMENT(8 CHARACTER)
[O:END] [C.R.:SAME]
11 :1 40.000 40.000 11.000 V881-1
READY(PAGE) ?

POS. NO. 11

COMMENT : V881-1
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.010E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
07-JAN-89

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -l	6.45	273	*************+	○TI-k	2.75	179	***********++	PB-l	1.18	66	***********
SR-l	6.86	206	*************	BA-l	2.78	71	**********	PT-l	1.31	64	***********
W -m	6.98	188	*************	CA-k	3.36	65	*********+	IR-l	1.35	60	***********
◎SI-k	7.13	1527	**************+++++	SB-l	3.44	44	*********	ZN-k	1.44	51	**********
RB-l	7.32	160	************	SN-l	3.60	35	********	CU-k	1.54	62	**********+
◎AL-k	8.34	465	*************++++	K -k	3.74	51	*********	NI-k	1.66	36	**********
BR-l	8.37	158	************	CD-l	3.96	24	********	CO-k	1.79	34	*********
AS-l	9.67	41	*********	CL-k	4.73	21	******+	◎FE-k	1.94	5642	*************+++++++++
○MG-k	9.89	69	*********+	S -k	5.37	9	*****	MN-k	2.10	18	*******
GE-l	10.44	27	*******+	MO-l	5.41	8	*****	CR-k	2.29	15	******
GA-l	11.29	20	*******	NB-l	5.72	7	*****	V -k	2.50	10	*****
NA-k	11.91	22	*******	ZR-l	6.07	8	****+	CE-l	2.56	6	****
F -k	18.32	6	****	P -k	6.16	8	*****	LA-l	2.67	8	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
MG AL SI TI FE ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
CA

Photo. 3に示すSE(2次電子像)の砂鉄粒子の分析結果である。砂鉄粒子から検出される元素は、強度(Count)の順から並べると、鉄(Fe)5,642、珪素(Si)1,527、アルミ(Al)465、チタン(Ti)179、マグネシウム(Mg)69となる。砂鉄粒子中のチタン(Ti)分の低いことから、地元の大原海岸周辺の賦存砂鉄と考えられる。この砂鉄が溶解中に添加されたのか、作業中の混入物か検討を要する問題である。

Table. 3 博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中砂鉄粒子部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果、(Photo 3の特性X線像と対応する)

POS. NO. HOLDER NO. X(MM) Y(MM) Z(MM) COMMENT(8 CHARACTER)
[O:END] [C.R.:SAME]
10 :1 40.000 40.000 11.000 V881-2
READY(PAGE) ?

POS. NO. 10

COMMENT : V881-2
ACCEL. VOLT. (KV): 15
PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)
STAGE POS. : X 40000 Y 40000 Z 11000
07-JAN-89

CH(1) TAP				CH(2) PET				CH(3) LIF			
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -l	6.45	265	*************	◎TI-k	2.75	532	************++++	PB-l	1.18	67	***********
SR-l	6.86	207	*************	BA-l	2.78	77	**********	PT-l	1.31	64	***********
W -m	6.98	199	*************	○CA-k	3.36	222	***********+++	IR-l	1.35	60	***********
◎SI-k	7.13	5394	***************++++++	○SB-l	3.44	62	*********++	ZN-k	1.44	53	**********
RB-l	7.32	149	************	SN-l	3.60	35	********	CU-k	1.54	45	**********
◎AL-k	8.34	1022	*************+++++	○K -k	3.74	125	***********++	NI-k	1.66	35	*********
BR-l	8.37	250	*************	CD-l	3.96	25	********	CO-k	1.79	29	*********
AS-l	9.67	39	*********	CL-k	4.73	25	*******+	◎FE-k	1.94	4754	*************++++++++++
○MG-k	9.89	205	************+++	S -k	5.37	9	*****	○MN-k	2.10	33	*******++
GE-l	10.44	30	********	MO-l	5.41	10	*****	CR-k	2.29	14	******
GA-l	11.29	17	*******	NB-l	5.72	7	*****	V -k	2.50	11	******
○NA-k	11.91	65	********+++	ZR-l	6.07	7	****+	CE-l	2.56	7	****+
F -k	18.32	7	****+	P -k	6.16	6	****	LA-l	2.67	7	*****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
NA MG AL SI K CA TI MN FE SB ← 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
Y

Photo. 4に示したSE(2次電子像)のヴスタイト(FeO)とガラス質スラグの分析結果である。検出元素をCount順に並べると珪素(Si)5,394、鉄(Fe)4,754、アルミ(Al)1,022、チタン(Ti)532、カルシウム(Ca)222、マグネシウム(Mg)205、カリウム(K)125、ナトリウム(Na)65、アンチモン(Sb)62、マンガン(Mn)33となる。

ヴスタイトはFeOで鉄(Fe)が検出され、ガラス質スラグ中にはフェアライト(Fayalite:$2FeO\,SiO_2$)が存在し、これからも鉄(Fe)が感知される。また、ガラス質スラグ中には砂鉄原料系であるので、チタン(Ti)が検出される。

Table. 4 博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中ヴスタイト(Wüstite:FeO)+ガラス質スラグのコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

```
  POS. NO.    HOLDER NO.      X(MM)     Y(MM)     Z(MM)     COMMENT(8 CHARACTER)
              [0:END]                                        [C.R.:SAME]
      9         :11         40.000    40.000    11.000     V881-3
                                                                                      READY(PAGE) ?

 POS. NO.     9

   COMMENT      : V881-3
   ACCEL. VOLT. (KV):    15
   PROBE CURRENT : 5.000E-08 (A)                                                                                07-JAN-89
   STAGE POS. :   X   40000   Y   40000   Z   11000

               CH(1)    TAP                                CH(2)    PET                              CH(3)    LIF

  EL      WL    COUNT        INTENSITY(LOG)       EL      WL   COUNT       INTENSITY(LOG)       EL      WL   COUNT       INTENSITY(LOG)

  Y -1   6.45     243 *************              TI-k   2.75     78 **********               PB-1   1.18     57 **********
  SR-1   6.86     188 *************              BA-1   2.78     71 **********               PT-1   1.31     49 *********
  W -m   6.98     162 ************             ○CA-k   3.36    113 **********+              IR-1   1.35     56 **********
○SI-k   7.13     556 **************+++          SB-1   3.44     31 ********                 ZN-k   1.44     52 *********
  RB-1   7.32     125 ************               SN-1   3.60     37 ********+              ○CU-k   1.54     63 *********+
  AL-k   8.34      67 **********                 K -k   3.74     39 ********+                NI-k   1.66     30 ********
  BR-1   8.37      66 **********                 CD-1   3.96     24 *******+                 CO-k   1.79     35 ********
  AS-1   9.67      39 *********                  CL-k   4.73     18 *****++                ◎FE-k   1.94   5372 ************++++++++++
○MG-k   9.89      51 ********+                  S -k   5.37     13 *****+                   MN-k   2.10     16 ******+
  GE-1  10.44      19 *******                    MO-1   5.41      9 *****                    CR-k   2.29     14 ******
  GA-1  11.29      20 *******                    NB-1   5.72     12 *****+                   V -k   2.50      7 ****+
  NA-k  11.91      18 *******                    ZR-1   6.07      4 ****                     CE-1   2.56      7 **+++
  F -k  18.32       7 *****                      P -k   6.16      9 ****+                    LA-1   2.67      6 ****

  RESULTS:

  THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
    MG   SI   CA   FE   CU ←─ 検出元素

  THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
    CL   CE
```

片状黒鉛を析出するねずみ鋳鉄部の分析である。Photo. 5のSE(2次電子像)に示す組織が分析個所である。検出元素は鉄(Fe)のCountが5,373が最大で、これに続くものとして、珪素(Si)556、カルシウム(Ca)113、銅(Cu)63、マグネシウム(Mg)51である。銅(Cu)は地鉄中に固溶している。なお、黒鉛の炭素(C)は高速定性では測定できずに特性X線像で捕えられている。

Table. 5 博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解中、ねずみ鋳鉄のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

```
  POS. NO.    HOLDER NO.      X(MM)     Y(MM)     Z(MM)     COMMENT(8 CHARACTER)
              [0:END]                                        [C.R.:SAME]
      3         :1          40.000    40.000    11.000     V881-4
                                                                                      READY(PAGE) ?

 POS. NO.     3

   COMMENT      : V881-4
   ACCEL. VOLT. (KV):    15
   PROBE CURRENT : 5.002E-08 (A)                                                                                10-JAN-89
   STAGE POS. :   X   40000   Y   40000   Z   11000

               CH(1)    TAP                                CH(2)    PET                              CH(3)    LIF

  EL      WL    COUNT        INTENSITY(LOG)       EL      WL   COUNT       INTENSITY(LOG)       EL      WL   COUNT       INTENSITY(LOG)

  Y -1   6.45     251 *************            ◎TI-k   2.75    796 *************+++          PB-1   1.18     65 **********
  SR-1   6.86     213 *************              BA-1   2.78     77 **********               PT-1   1.31     59 **********
  W -m   6.98     205 *************            ○CA-k   3.36    147 ***********++             IR-1   1.35     63 **********+
◎SI-k   7.13    7302 ******************++++++ ○SB-1   3.44     55 *********++               ZN-k   1.44     50 *********
  RB-1   7.32     165 ************               SN-1   3.60     28 ********                 CU-k   1.54     44 *********
◎AL-k   8.34    1794 **************+++++      ○K -k   3.74    169 ***********++              NI-k   1.66     30 *******+
  BR-1   8.37     473 **************+            CD-1   3.96     29 *******+                 CO-k   1.79     29 ********
  AS-1   9.67      41 *********                  CL-k   4.73     19 ******+                ◎FE-k   1.94   4693 ************+++++++++
○MG-k   9.89     107 **********++               S -k   5.37      9 *****                  ○MN-k   2.10     37 ******++
  GE-1  10.44      23 *******                    MO-1   5.41      9 *****                    CR-k   2.29     17 ******+
  GA-1  11.29      20 *******                    NB-1   5.72      6 ****                     V -k   2.50     17 *******
○NA-k  11.91      47 ********+                  ZR-1   6.07      8 *****                    CE-1   2.56      7 *****
  F -k  18.32       9 *****                      P -k   6.16      6 ****                     LA-1   2.67      4 ****

  RESULTS:

  THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
    NA   MG   AL   SI   K   CA   TI   MN   FE   S? ←─ 検出元素

  THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
    IR
```

Photo. 6に示したSE(2次電子像)のマグネタイト(Magnetite : Fe_3O_4)の分析結果である。検出元素の強度(Count)順に並べると珪素(Si)7,302、鉄(Fe)4,693、アルミ(Al)1,794、チタン(Ti)796、カリウム(K)169、カルシウム(Ca)147、マグネシウム(Mg)107、アンチモン(Sb)55、ナトリウム(Na)47、マンガン(Mn)37となる。マグネタイトの結晶にはチタン(Ti)が固溶されていて砂鉄系とわかる。

Table. 6 博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中Magnetite部(Fe_3O_4)のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

```
 POS. NO.   HOLDER NO.     X(MM)    Y(MM)    Z(MM)    COMMENT(8 CHARACTER)
            [O:END]                                    [C.R.:SAME]
    4         :1         40.000   40.000   11.000    V881-5
                                                                    READY(PAGE) ?

POS. NO.    4

  COMMENT     : V881-5
  ACCEL. VOLT. (KV):    15
  PROBE CURRENT : 5.002E-08 (A)                                                      10-JAN-89
  STAGE POS. :  X  40000  Y  40000  Z  11000

               CH(1)   TAP                         CH(2)   PET                          CH(3)   LIF

EL       WL    COUNT      INTENSITY(LOG)       EL      WL    COUNT      INTENSITY(LOG)       EL     WL    COUNT      INTENSITY(LOG)

  Y -1   6.45    254 *************          ◎TI-k   2.75   5043 *************+++++++     PB-1   1.18     61 **********
  SR-1   6.86    218 *************            BA-1   2.78    101 ***********             PT-1   1.31     54 **********
  W -m   6.98    206 *************           OCA-k   3.36    264 ***********+++          IR-1   1.35     57 **********
◎SI-k   7.13   4003 ***************+++++      SB-1   3.44     45 *********               ZN-k   1.44     55 *********+
  RB-1   7.32    150 ************             SN-1   3.60     37 ********+               CU-k   1.54     36 *********
◎AL-k   8.34   1299 ***************++++      OK -k   3.74    127 **********++            NI-k   1.66     33 ********
  BR-1   8.37    333 **************+           CD-1   3.96     23 *******                 CO-k   1.79     27 ********
  AS-1   9.67     48 *********                 CL-k   4.73     19 ******+               ◎FE-k   1.94   3975 ***********++++++++
 OMG-k   9.89     96 ***********+              S -k   5.37     12 ******                 O MN-k  2.10    133 *******+++++
  GE-1  10.44     29 ********                  MO-1   5.41      9 *****                  O CR-k  2.29     27 ******++
  GA-1  11.29     26 ********                  NB-1   5.72      8 *****                  O V -k  2.50    106 **********+
  NA-k  11.91     26 ********                △ZR-1   6.07     15 *****+                   CE-1   2.56      6 ****
  F -k  18.32      6 ****                      P -k   6.16      9 *****                    LA-1   2.67      6 ****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
  MG  AL  SI  K   CA  TI  V   CR  MN  FE  ←—検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
  ZR
```

Photo. 7SE（2次電子像）に示したウルボスピネル（Ulvöspinel : $2FeO \cdot TiO_2$）を中心とした個所の分析結果である。検出元素の強度（Count）順に並べると、チタン（Ti）5,043、二酸化珪素（SiO_2）4,003、鉄（Fe）3,975、アルミ（Al）1,299、カルシウム（Ca）264、マンガン（Mn）133、カリウム（K）127、バナジウム（V）106、マグネシウム（Mg）96、クロム（Cr）27となる。ウルボスピネルはチタン（Ti）濃度が高く、かつ、砂鉄特有成分のバナジウム、微量のジルコニウム（Zr）を含有する。福岡平野でウルボスピネルの結晶を晶出する鉄滓や鉄塊は数少ない類例である。

Table. 7 博多遺跡（築港線第3次）出土鋳造精錬溶解滓中Ulvöspinel（$2FeO \cdot TiO_2$）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

```
 POS. NO.   HOLDER NO.     X(MM)    Y(MM)    Z(MM)    COMMENT(8 CHARACTER)
            [O:END]                                    [C.R.:SAME]
    6         :1         40.000   40.000   11.000    V-883
                                                                    READY(PAGE) ?

POS. NO.    6

  COMMENT     : V-883
  ACCEL. VOLT. (KV):    15
  PROBE CURRENT : 5.010E-08 (A)                                                      11-JAN-89
  STAGE POS. :  X  40000  Y  40000  Z  11000

               CH(1)   TAP                         CH(2)   PET                          CH(3)   LIF

EL       WL    COUNT      INTENSITY(LOG)       EL      WL    COUNT      INTENSITY(LOG)       EL     WL    COUNT      INTENSITY(LOG)

  Y -1   6.45    269 *************           OTI-k   2.75    115 **********+             PB-1   1.18     65 **********
  SR-1   6.86    231 *************            BA-1   2.78     75 **********              PT-1   1.31     61 **********
  W -m   6.98    212 *************           OCA-k   3.36    588 ************++++         IR-1   1.35     59 *********+
◎SI-k   7.13   6940 ****************++++++    SB-1   3.44     56 *********+              ZN-k   1.44     51 *********
  RB-1   7.32    155 ************             SN-1   3.60     36 *********               CU-k   1.54     42 *********
◎AL-k   8.34   1367 ***************+++++     OK -k   3.74    179 ***********++            NI-k   1.66     26 ********
  BR-1   8.37    377 **************            CD-1   3.96     23 *******                 CO-k   1.79     32 ********
  AS-1   9.67     51 *********                 CL-k   4.73     17 *******               ◎FE-k   1.94   4682 ************+++++++++
 OMG-k   9.89    720 **************++++        S -k   5.37      8 ****+                   MN-k   2.10     23 *******+
  GE-1  10.44     27 ********                  MO-1   5.41      7 *****                   CR-k   2.29     10 *****
  GA-1  11.29     25 ********                  NB-1   5.72      6 ****                    V -k   2.50      8 *****
 ONA-k  11.91     71 *********++               ZR-1   6.07      7 *****                   CE-1   2.56      6 ****
  F -k  18.32      8 *****                     P -k   6.16     12 *****+                  LA-1   2.67      6 ****

RESULTS:

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
  NA  MG  AL  SI  K   CA  TI  FE  ←—— 検出元素

THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
  MN  SB
```

Photo 8に示したSE（2次電子像）のヴスタイト（Wüstite : FeO）とフェアライト（Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$）とガラス質スラグ部分の分析である。検出元素は珪素（Si）のCountが最大で6,940、続いて鉄（Fe）の4,682で、FeOのヴスタイト、$2FeO \cdot SiO_2$のフェアライトの主成分を表わしている。また、アルミ（Al）1,367、以下マグネシウム（Mg）720、カルシウム（Ca）588、ウリウム（K）179、ナトリウム（Na）71らはガラス質成分である。なお、該品にもチタン（Ti）が微量検出（115）されて砂鉄系を思わせるが、磁鉄鉱系と解釈すべきと考える。（化学組成を根拠とする）。

Table. 8 博多遺跡（第40次）出土鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）V－883中Wüstite＋Fayalite結晶のコンピュータープログラム高速定性分析結果。

(1)　Ⅴ－881
博多遺跡（筑港線第3次）
（B－01区ＳＤ790出土）
鋳造精錬溶解滓

外観写真

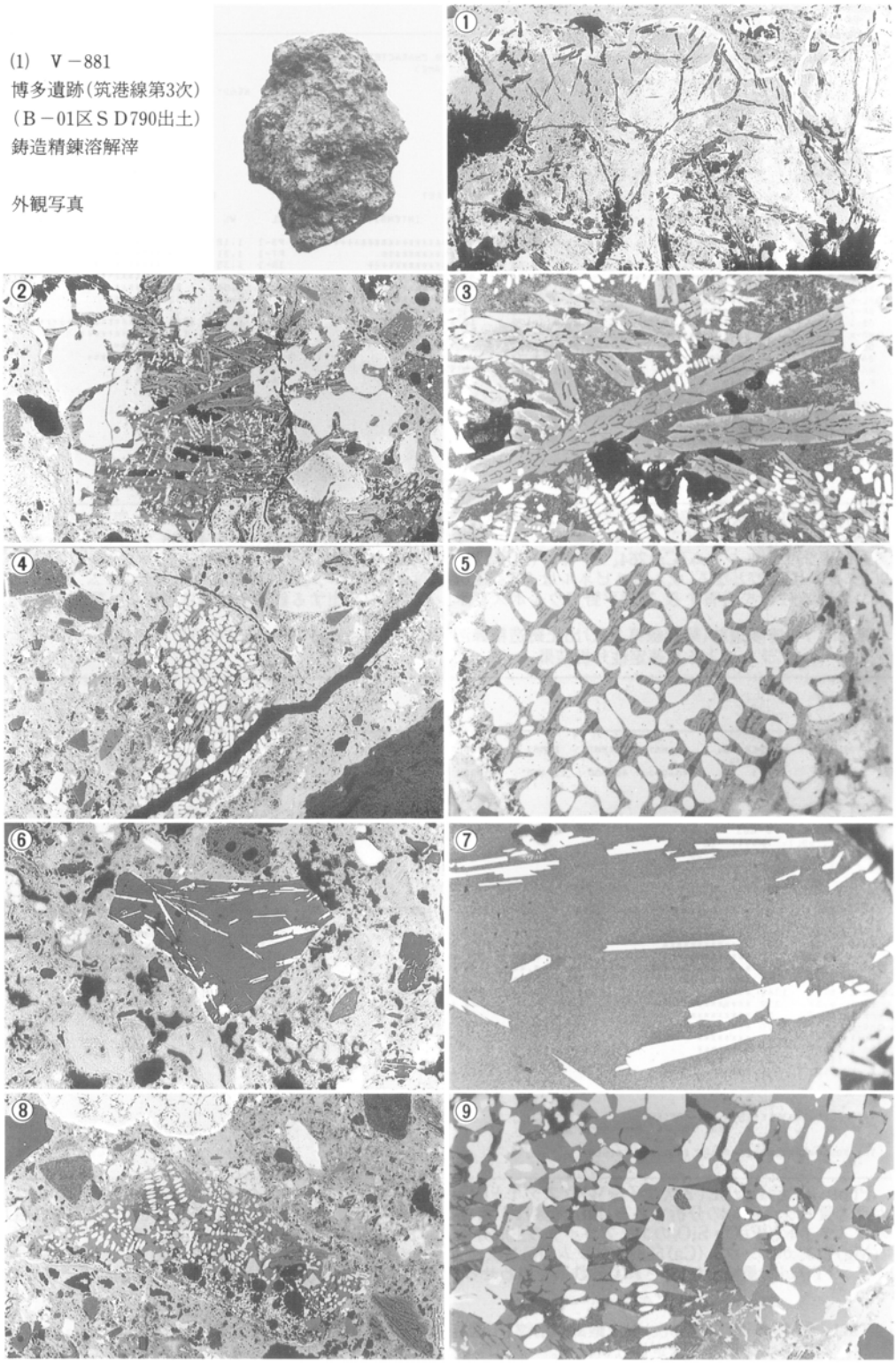
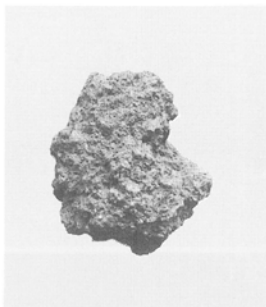
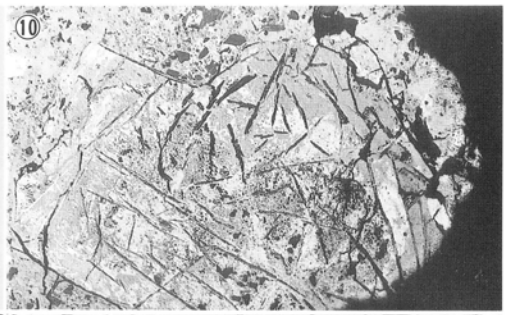


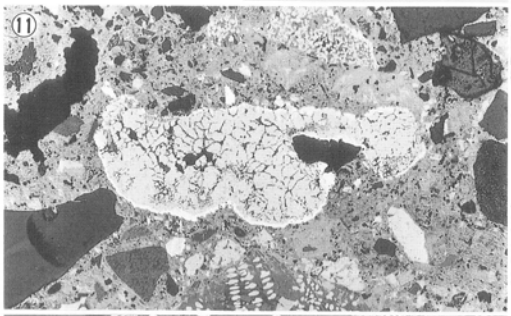
Photo. 1　鋳造精錬溶解滓の顕微鏡組織
①②④⑥⑧×100，③⑤⑦⑨×400

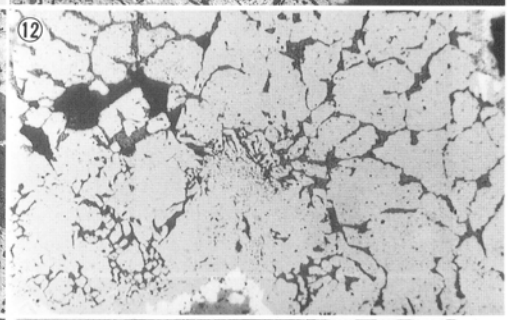
(2)　Ⅴ－882
博多遺跡(築港線第3次)
(B－01区SD790出土)
鋳造精錬溶解滓

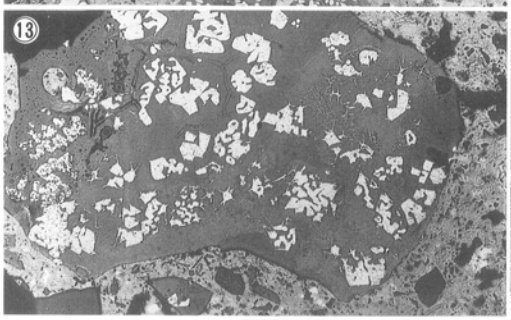
外観写真1／2.9



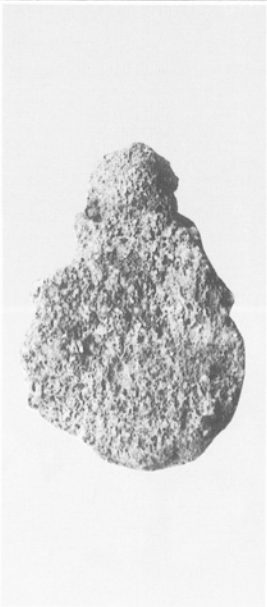


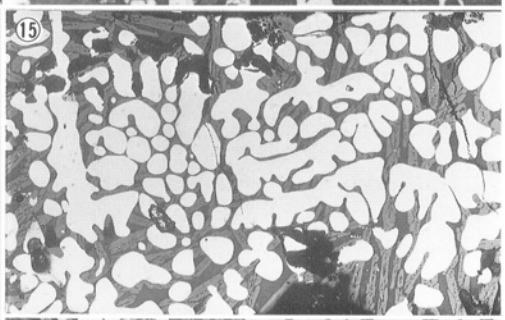






(3)　Ⅴ－883
博多遺跡(第40次)
(第1面出土)
鍛錬鍛冶滓
×100
外観写真1／2.9





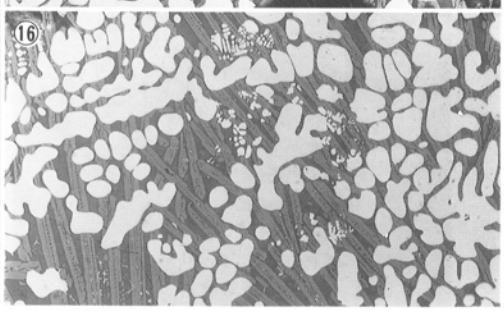


Photo. 2　鋳造精錬溶解滓と鍛錬鍛冶滓の顕微鏡組織
⑩⑪⑬×100，⑫⑭×400

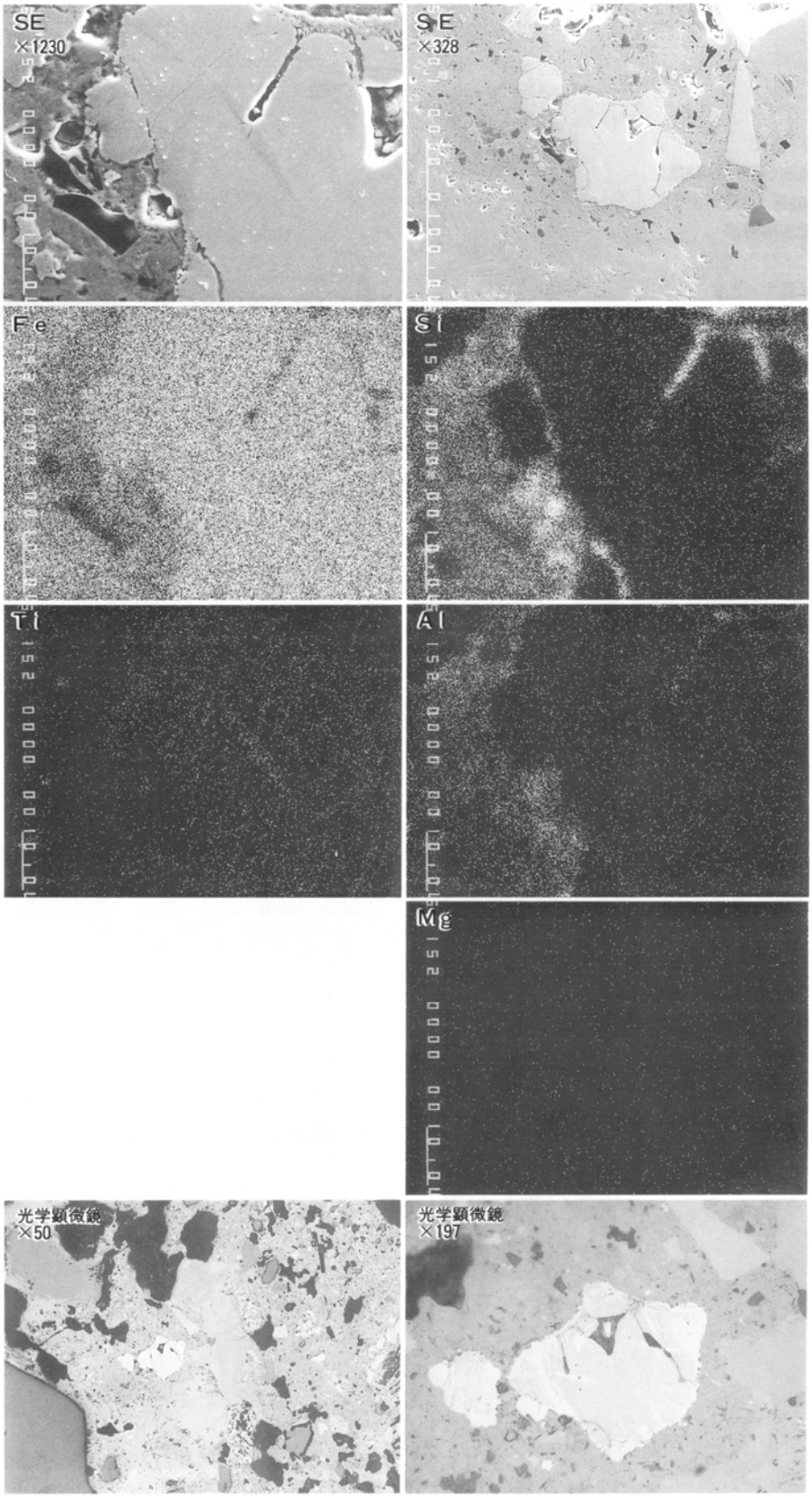


Photo. 3　博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中砂鉄粒子の特性X線像
(Ⅴ－881－①)　　(×900)
〈Table. 3の高速定性分析結果と対応する〉

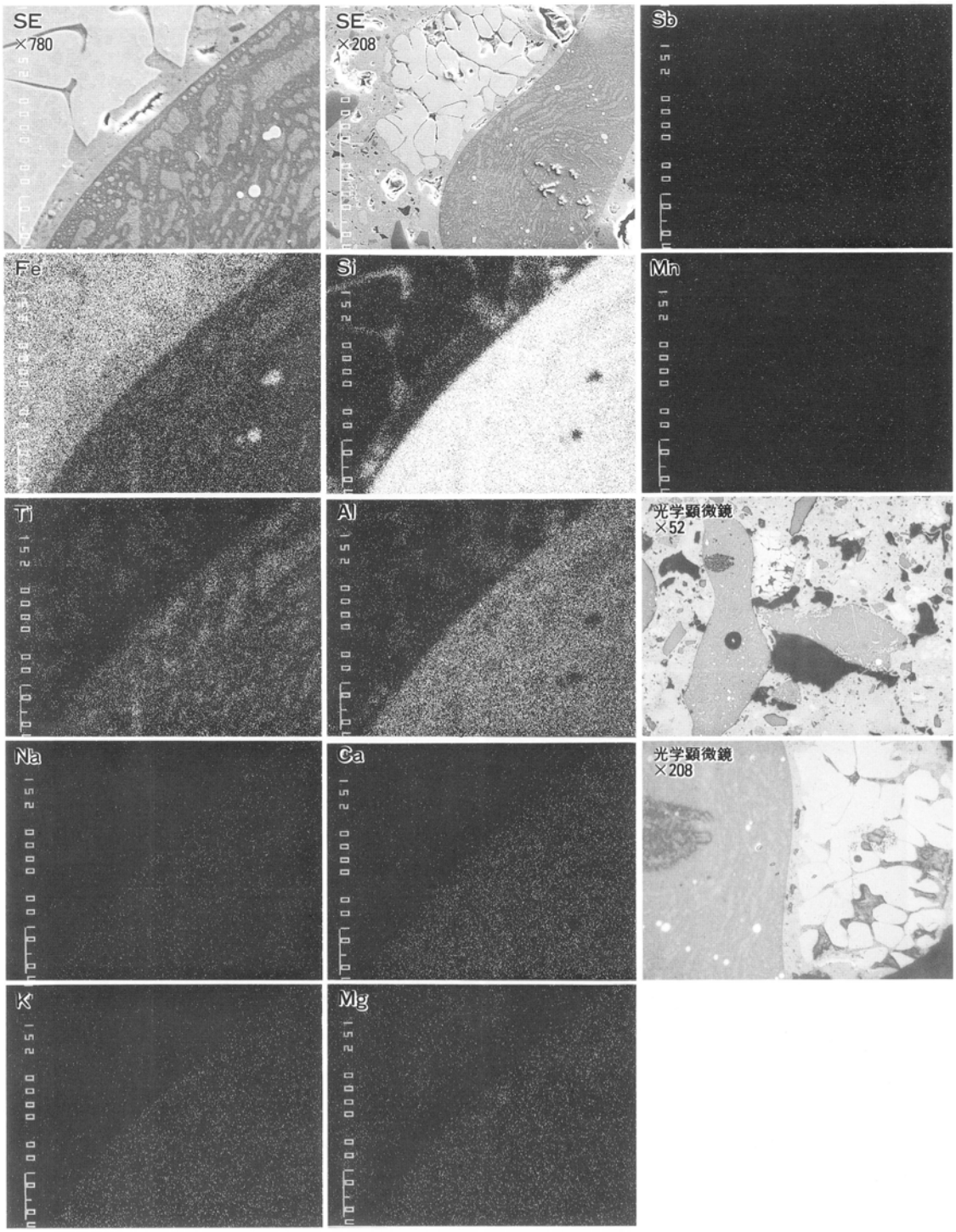


Photo. 4　博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中 Wüstite (FeO)＋ガラス質スラグの特性X線像
(V－881－②)　(×900)
〈 Table. 4 の高速定性分析結果と対応する〉

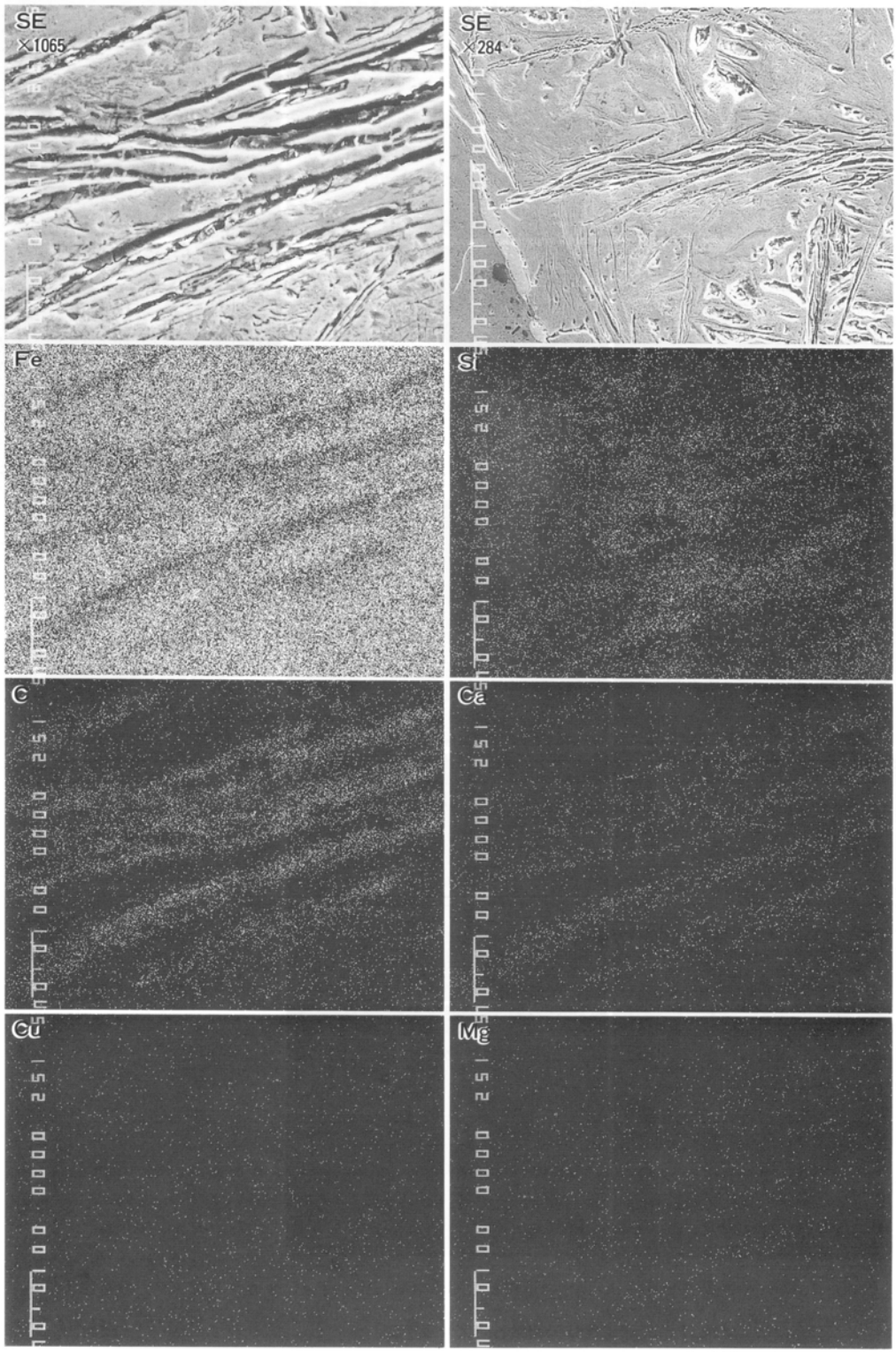


Photo. 5　博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中ねずみ鋳鉄部の特性X線像
(Ⅴ－881－③)　　(×900)
〈Table. 5の高速定性分析結果と対応する〉

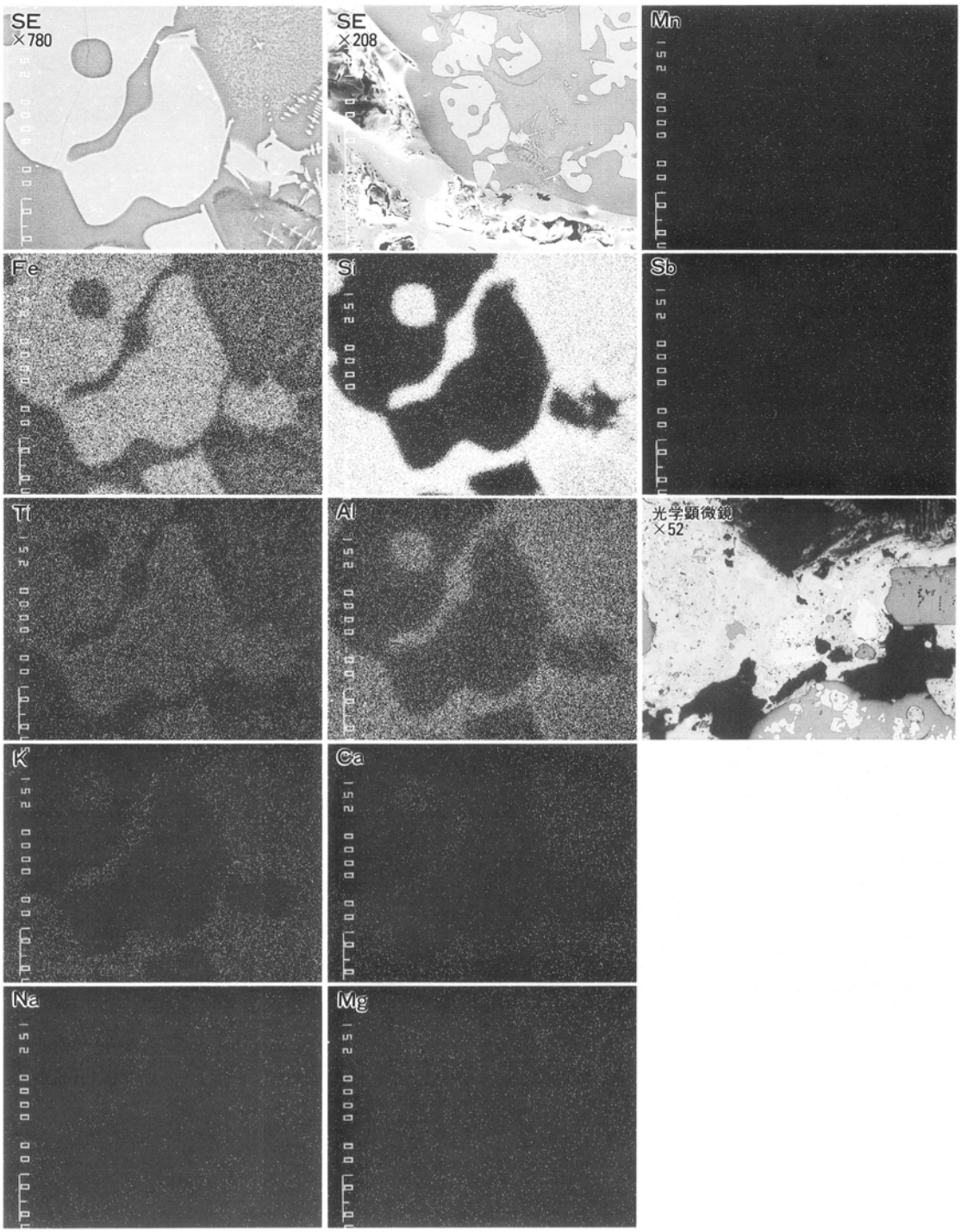


Photo. 6　博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中 Magnetite (Fe_3O_4) の特性X線像
(Ⅴ－881－④)　(×900)
〈Table. 6 の高速定性分析結果と対応する〉

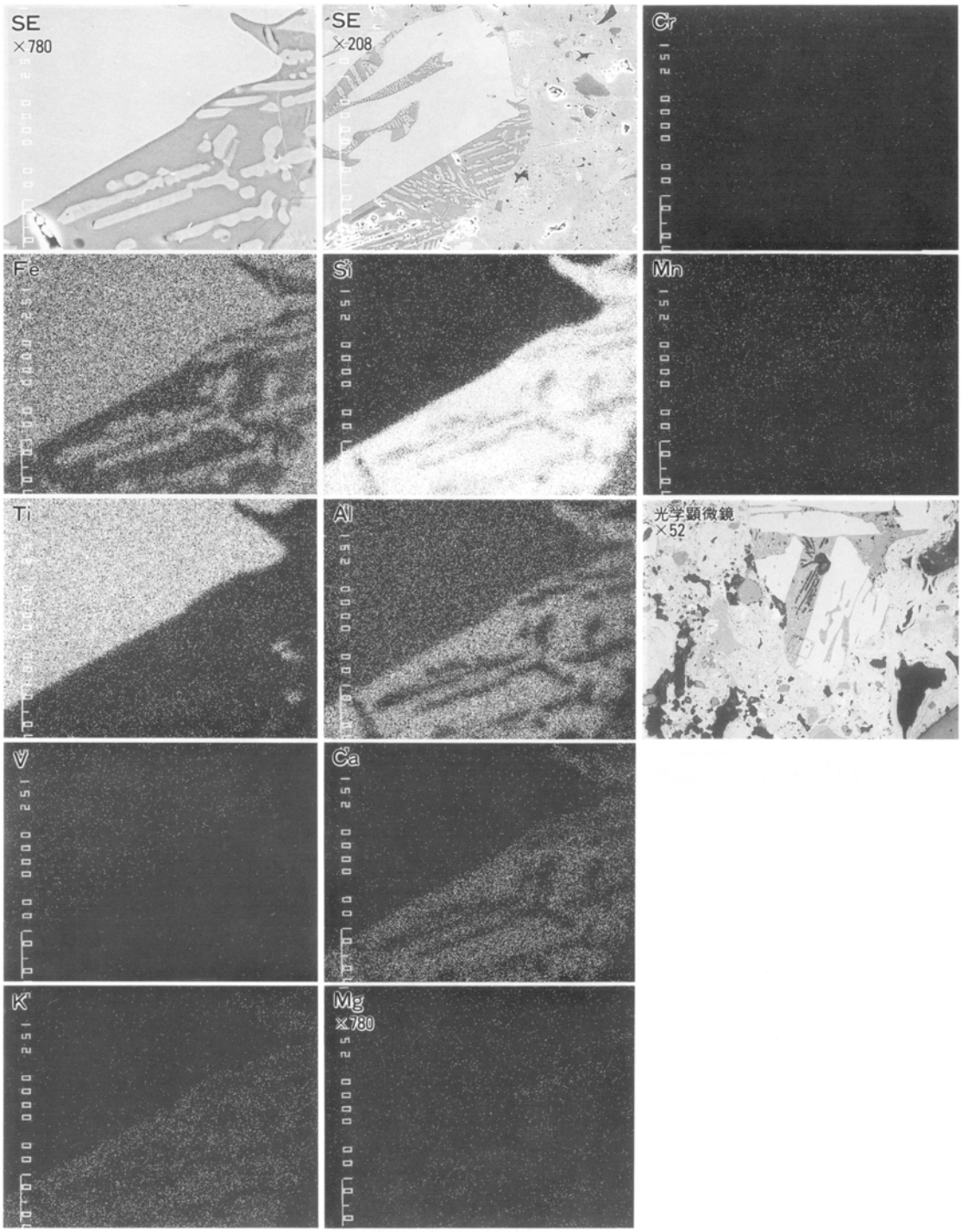


Photo. 7　博多遺跡(築港線第3次)出土鋳造精錬溶解滓中 Ulvöspinel ($2FeO \cdot TiO_2$) の特性X線像
(Ⅴ－881－⑤)　(×900)
〈Table. 7 の高速定性分析結果と対応する〉

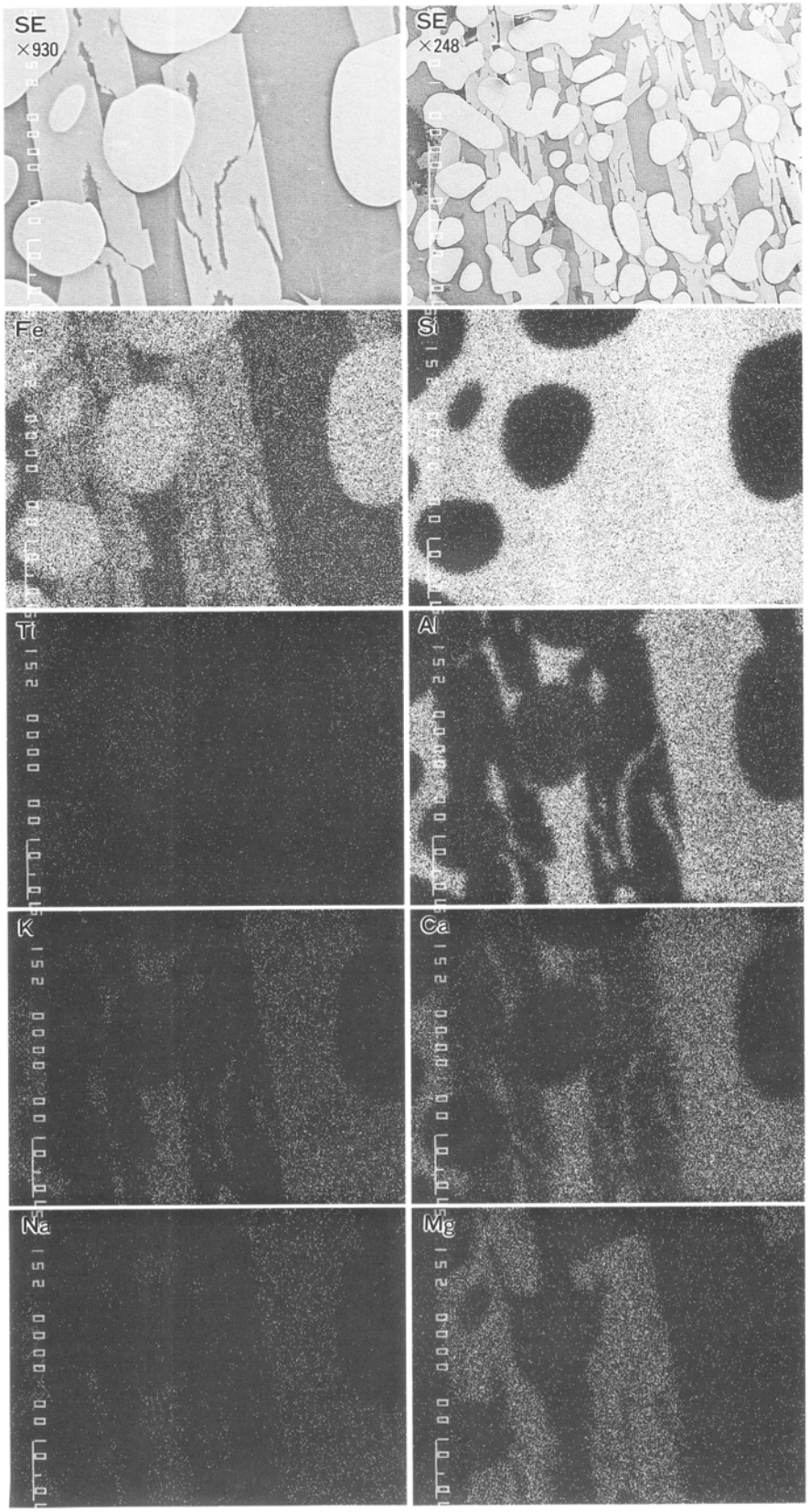


Photo. 8　博多遺跡(第40次)出土鍛錬鍛冶滓(Ⅴ－883)の特性X線像(×900)
〈Table. 8 の高速定性分析結果と対応する〉

福岡市内に所在する3遺跡出土木製品の年輪年代測定結果について

光　谷　拓　実
(奈良国立文化財研究所)

はじめに

考古学の調査，研究はまず最初に遺跡，遺構，遺物の年代を明らかにすることからはじまる。その方法としては，考古学本来の手法である各種遺物の型式学的研究法にもとづいた相対年代と，自然科学的な年代測定法によって求める絶対年代とがある。相対年代の場合，考古資料による型式編年の精度がいくらあがったとしてもそれ自身からは，暦年代を求めることはできない。そこで，自然科学的な方法によって相対年代のどこかに暦年代を定める必要がでてくる。この自然科学的な年代測定法のなかで今注目されているものに樹木の年輪を用いた年輪年代測定法がある。この方法は，C^{14}年代測定法をはじめとする他の多くの自然化学的な年代測定法に比べて，複雑な前提条件がなく，しかも精度が高いという利点を持っている。

この年代測定法は，今世紀初頭にアメリカで確立され，わが国においても多くの研究者がこれを手掛けてきたが，これまでほとんど進展をみることはなかった。しかし，奈良国立文化財研究所では，1980年からこの方面の研究に着手し，ついにヒノキを用いた年輪年代測定法を実用段階にまで進展させることに成功した。現在，年代を1年単位で割り出す基準の暦年標準パターンは，紀元前206年から1988年までの約2200年間が完成している。数年前からはこの標準パターンを使って，広い地域の考古学，建築史，美術史等に関連した木質古文化財の年代測定に応用し成果をあげている。

福岡市内に所在する十郎川遺跡，井相田C遺跡，博多遺跡群の3遺跡からは，年輪年代法の実施可能なヒノキ材の木製品としてそれぞれ，折敷断面（2点）・下駄の歯（1点），木皿（2点），曲物底板（1点）・折敷（1点）の総数7点を選定し，年代測定をおこなうこととした。これらの年輪変動パターンと暦年標準パターンとの照合に成功すれば，現在の暦年標準パターンが福岡県下の各種木質古文化財に適用できるとの見通しが得られるばかりでなく，得られた年輪年代をもとに遺跡，遺構，遺物の年代を考察する上で重要な年代値を提供できることになる。以下に上記7点の年輪年代を求めた結果の概略を報告する。

2　試料と方法

年輪年代測定法を行なった試料は，十郎川遺跡出土の折敷断片―2点，下駄の歯―1点，井相田遺跡C遺跡出土の木皿―2点，博多遺跡群出土の曲物底板―1点，折敷―1点の総数7点を選定した。これらの木取りはいずれも柾目である。樹種は顕微鏡による木材組織の識別からすべてヒノキであることが判明した。

年輪幅の計測は，アメリカ製（F・ヘンソン社製，0.01mmまで計測可能）の年輪幅読取器を使用し，試料の柾目面から直接計測した。計測した年輪データはただちにコンピュータに入力し，年輪変動パターングラフの作成と暦年標準パターンとの照合作業に備えた。暦年標準パターンと試料7点とのパターン照合は，相互相関分析手法を用いて相関の最も高い年代位置を検出し，ついでこの検出位置にもとづいて双方の年輪変動パターングラフをライトボックス上に重ね合わせておき，目視でもって細かい検討を行ない，最終判断を下すこととした。[1)]

3　結果と考察

試料7点の計測年輪数と残存最外年輪測定年代は表―1に示したとおりである。なお，表中に示したt値とは，暦年標準パターンを構成する年輪データを基準データとし，試料1点ごとの年輪データを暦年標準パターンの古い年代位置から新しい年代位置へと順にずらしながらそのたびごとの相関係数rを求め，ついでt分布検定を行なった結果，最も高いt値を検出した年代位置での数値である（t値が高ければ高いほど相方の年輪変動パターンがよく類似していることを示す。このとき，t分布検定に関しては，自由度60以上，有意水準0.1%のt表より求めたt値＝3.5を一応の基準とした)。

表－1　年代測定結果一覧表

遺跡名	試料No.	タイプ	計測年輪数	t値	残存最外年輪測定年代	発掘所見による年代	備考
十郎川	折敷断片1	C	167	4.1	1231	9～10C	
	〃 2	C	120	6.0	1077	9～10C	
	下駄の歯1	C	147	5.8	1161	9～10C	
井相田C	木　皿1	C	136	5.9	537	8C後半	
	木　皿2	C	139	9.1	759	8C後半	
博多遺跡群	曲物底板1	C	311	7.7	1148	12C後半～13C前半	墨書あり
	折　敷1	C	278	5.2	1336	14C後半～15C初	

試料7点と暦年標準パターンとの照合の結果，検出した最大のt値は基準としたt＝3.5よりいずれも高い数値が得られた。この検出結果にもとづいて，暦年標準パターングラフと試料の年輪変動パターングラフとを重ねあわせ，相方の変動変化を詳細に検討した結果，7点とも検出した年代位置で正しく重複していることが確認できた。このことは試料7点の年輪変動パターンと暦年標準パターングラフとがよく類似していることを示している。なかでも井相田C

遺跡の木皿2と博多遺跡群の曲物底板(墨書有り)の年輪変動パターンは暦年標準パターンと酷似している。このことは，暦年標準パターンの作成に用いた試料材とこれらの産地とが地域的に近い関係にあるのか，あるいは地域は異なっていても生育環境条件がよく似た地域で生育したものであることを示唆している。

つぎに，表中のタイプとは，試料の形状を大きくA，B，C，と3つのタイプに分類したものである。年輪年代測定法で対象とする試料には，さまざまな形状をしたものがある。Aタイプとは，試料に樹皮，あるいは生育していた当時の最外年輪が残存している形状のものをいう。このタイプのものは，その最外年輪の暦年がその材の伐採年，あるいは枯死年に相当する，したがってAタイプは年輪年代測定法にとって最良の試料となるが，その事例は決して多くない。問題となるのは，試料がもともとの材木の外周にあたる部分を除去した形状のものである。この種の試料はBタイプとCタイプの2種類にわかれる。Bタイプは，辺材部，すなわち樹木が生育していた当時には細胞が生理活動をしていた周辺年輪部分であるが，その一部が試料に残存しているものであれば，除去された部分を含めて辺材部に含まれる平均年輪数を算出しておけば，伐採年代に近い暦年をその試料材に当てることができる。参考までに，木曾系ヒノキ(樹齢約200～300)100点から算出した辺材部に占める平均年輪数は53±17である。ところが，多くの試料のなかには，辺材部幅2.2cmで96層を数えたものもある一方で，肥大生長が良好な試料には辺材部幅3.9cmでわずか23層しかないものもあるのでこの数値の取り扱いには注意を要する。つぎにCタイプと呼んでいるものは，辺材部が完全に除去されている試料であって，しかも辺材部に続く心材部をどれほど除去したものか判らない。したがって，試料に残る最外年輪の暦年にどれだけ除去した年輪数を加算すればよいのか（今回選定した7点の試料もこのタイプに属す）不明である。つまり，このB，Cタイプの試料を対象とした時には，年輪年代測定法によって決定できた試料の最外年輪の暦年は，試料の伐採年とはまったく無関係であり，試料の最外年輪の暦年をもって年代推定の上限を示すにとどまる。この他に，原木を伐採後，製品にするまでの寝かす期間や古材の転用などの点を考えると，遺跡，遺構，遺物の年代決定には，年輪年代測定法による暦年代をそのまま使うのではなく，土器等に代表される発掘資料の細かい検討あるいは遺跡を取り巻く歴史的な諸条件を勘案して総合的に年代推定を行なう必要がある。

以上の点を銘記して，7点の年輪年代値を見ていただきたい。

1）　3遺跡出土の木製品の推定年代について

3遺跡から出土した7点の木製品は，辺材部が残っているかどうかを確認するため心材部と辺材部との間でみられる色調差に注意して肉眼的に観察したが，3点とも試料全体が同一色調である点や，こうした木製品は狂いが生じないようにあらかじめ辺材部分を除去するのが基本

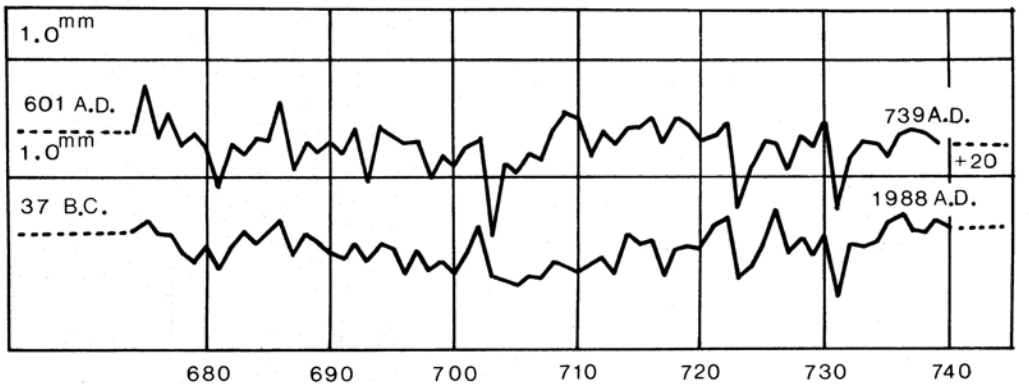
である点を考え合わせ，いずれも辺材部は残存していないものと判断した。したがって，これら木製品の原材の伐採年を推定することはできない。しかし原材の伐採年に近い年代を求めようとすると，少なくともこれらの測定年代に辺材部に占める平均年輪数を加算する必要があるが，木曾系ヒノキで求めた数値を今回のような産地不明の試料にそのままあてはめるにはいささか無理がある。さらに，こうした木製品は原材を伐採してから製品に仕上げるまである一定期間寝かすのが常であると聞く。その上製品として長期間使用したのちに廃棄する場合が多いことを考慮に入れると廃棄まで相当の経過年数を想定しなければならない。したがって原木の伐採から廃棄までの一連の経過年数をどの程度見積もって遺構の年代推定をすればよいのか，これらに具体的な数値を求めることはできないから，Cタイプの試料から得られた年輪年代はあくまでも試料の伐採年の上限年代を示すにとどまる。よってこうした試料の年輪年代は，遺構の年代よりかなり古い年代を示しているとみてよかろう。

まず表―1より残存最外年輪測定年代値についてみてみると，同一遺跡からの出土木製品でありながら，得られた年輪年代値のバラツキは，ほぼ同時期の木製品だとすると加工程度の差や原材のどの部分から木取りしたのかなどがその原因の一つとして考えられる。一方で木製品を作った時の年代差や廃棄した時の年代差も合わせて考えられる。このようにCタイプの試料から求めた年輪年代値をそのまま遺構の年代にあてはめるにはかなり無理がある。しかし，十郎川遺跡，井相田C遺跡，博多遺跡群の3遺跡が長年にわたって存続した遺跡でなく，しかも同一遺構に一括投棄したものであれば，最も新しい年輪年代値を示した試料の暦年（十郎川遺跡―折敷1：1231年，井相田C遺跡―木皿2：759年，博多遺跡群―折敷1336年）が遺構，遺物の上限年代を示すものとみてよかろう。これには詳細な発掘所見にもとづいた裏付けがなければならない。なお，図―1には1例として暦年標準パターングラフ（下）と井相田C遺跡出土の木皿2の年輪変動パターングラフ(上)の一部を重複した年代位置で示した。

まとめ

福岡市内に所在する3遺跡から7点の木製品を選定し，年輪年代測定法を行なった。その結果，現在作成している暦年標準パターンは，この地域の出土木製品にも適用できることが判明した。このことは，暦年標準パターンを作成した近畿産の試料材とほぼ同じような生育条件で生育した材であることが想定されるため，木製品として当時この地域まで流通していたことも推定される。この点については，今後の大きな検討課題の一つである。今回は，7点の木製品すべてについてその残存最外年輪測定年代をもとめることはできたが，Cタイプのため遺跡，遺構，遺物の暦年代とは直接結び付かなかった。しかし，遺跡，遺構，遺物の年代を考察する上で貴重な年代情報を提供したことだけは確かである。今後，AないしBタイプの木製品の出土が待たれる。

1）　わが国における年輪年代学の確立とその応用（第1報）—現生木のヒノキによる年輪変動パターンの特性検討—　　木材学会誌　第33号　168—169　　1987



図－1　暦年標準パターングラフ（下）と井相田C遺跡出土の木皿2の年輪変動パターングラフ（上）
（注）＋20とは，計測不可能な年輪が739年に形成された年輪の外側にまだ20年輪確認できた数である。

図－2　博多遺跡群築港線関係第3次調査出土，曲物，折敷底板

博多遺跡群第26次調査・築港線関係第3次調査出土の中世人骨について

中　橋　孝　博
（九州大学医学部解剖第2講座）

はじめに

北部九州地方は，周知のように弥生時代を中心に大量の古人骨を出土しており，人骨形質の時代的な変化を追跡できる，我国では数少ない地域の一つである。ただ，これまでのところ縄文人骨が小数に留まっている点と，特に古代から中世にかけての資料が皆無に近く，研究を進めるにあたっての大きな障害になっていた。今回（1985年度），博多市街のビル建設や道路拡張工事にともなう発掘調査によって，その懸案の中世人骨が出土した。僅かに4体の，それも1体を除いていずれも不完全なものではあるが，この地方では殆ど類例の無い中世所属のものである点に加えて，博多という古い歴史を持つ商都の住民の遺骨でもあり，その情報のもたらす意義は決して小さくないと考える。以下に比較的近在の山口県吉母浜遺跡から出土した中世人骨，および今回の出土地にもごく近い，同じ博多市街区から出土した天福寺江戸時代人等との比較を通して，その形質上の特徴について知り得たところを報告する。

Ⅰ．博多遺跡群，第26次調査出土人骨

1985年度，福岡市博多区上呉服町における，ビル建設にともなう調査によって検出された人骨で，成人2体と乳児1体の計3体からなる（中橋・永井，1986）。

A，26—1号人骨

出土状況：現在の地表から約4.3—4.6m下（標高1.5m前後）に検出された木棺墓中に埋葬されていたもので，頭位には木枕が置かれ，副葬品として，棺外に青磁碗1，土師皿4枚，棺内の頭蓋下には銅鏡1面，木櫛2枚，斉串1枚を伴っていた。埋葬姿勢は膝を軽く曲げた伸展位で，両腕もほぼ体側に沿って伸ばされている。頭蓋と四肢骨の遺存状況は良好だが，軀幹部の脊椎や肋骨の大半は消失していた。

所属時代：上記の副葬品や層序関係等，考古学的見地から，13世紀前半の鎌倉時代のものと考えられている。

性別・年齢：恥骨は欠損しているが，ほぼ90度に開いた大座骨切痕や，深い前耳状溝の存在，あるいは頭蓋の乳用突起等，各筋付着部の発達の弱さや四肢骨幹の細さは，いづれも女性的特徴を示している。また，頭蓋の主縫合のうち，冠状縫合の内板はほぼ全域が癒着し，矢状縫合も内外板ともかなり癒着が進行していることや，歯がかなり摩耗，脱落し，椎体には老年性の骨増殖も認められることから，既に熟年に達した遺体とみなされる。

（形質）

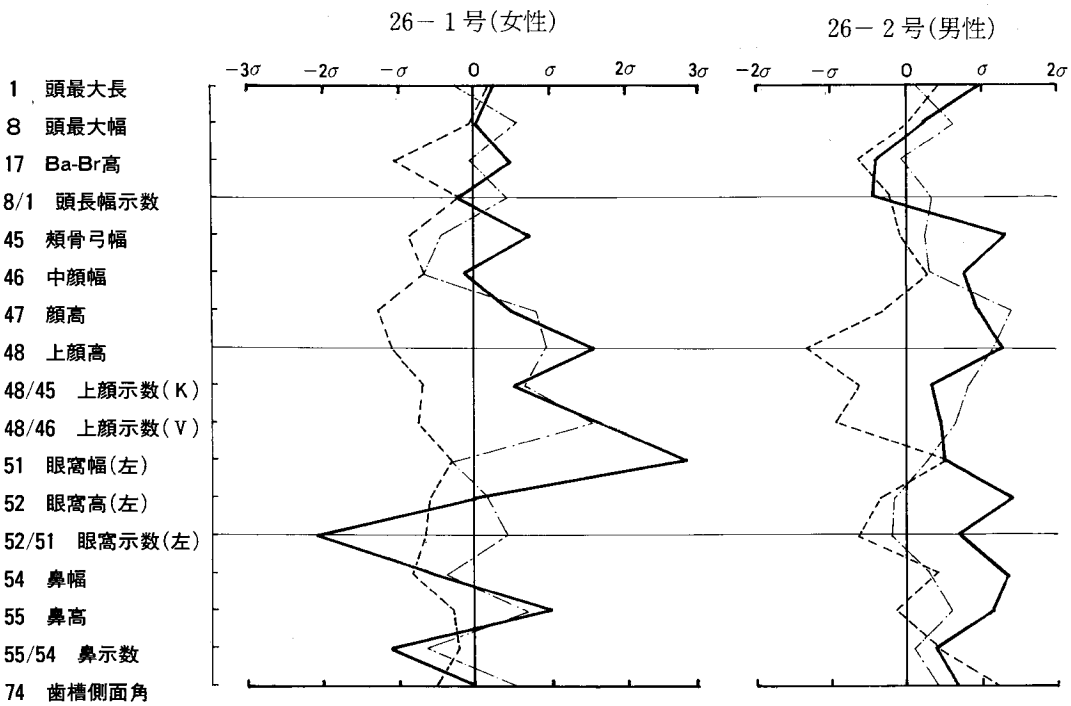
a，頭蓋骨

計測結果を第1表に，また比較のため他の中世人等の計測値を併せて第2表に一覧した。

脳頭蓋：かなりの長・高頭傾向を示す。第2表，および第1図に明らかなように，現代人や同じ博多の天福寺江戸時代人に較べると，頭長が比較的長く，頭幅の狭さとあいまって，その頭長幅示数は74.2と，長頭型に属す。また，頭高も高いために，長高，幅高示数はそれぞれ高，尖頭型に入り，比較群中では同じ中世人である吉母浜（中橋・永井，1985）に類似した特徴を見せているが，長頭性はともかくも，やや低頭に傾く材木座中世人とは異なる。

顔面部：全体の大きさとしては，吉母浜をはじめとする比較群を上回る傾向を見せ，特に上顔高は71mmと著しく高く，低顔を特徴とする関東の材木座（鈴木，1956）や熊本県尾窪を始めとする中部九州の中世人（佐熊，1986）とは際だった差を見せている。その示数でみても，例えばkollmann の上顔示数（53.8）は中上顔型に入り，狭・高顔を主特徴とする現代人（原田，1954）はともかくも，中世人としてはかなり高顔型の持ち主である吉母浜をも上回っている。

この顔面高径の高さに関連して，鼻高もかなり大きく，その示数（49.0：中鼻型）は現代的な形状を表しているが，しかし，眼窩についてだけは傾向を異にし，眼窩示数は73.9と，



第1図 吉母浜中世人を基準とした偏差折線
(——博多 ----天福寺江戸時代人 ……材木座中世人)

他地方の中世人に較べてもなお低い。但しこれは，眼窩高が低いためではなく，眼窩幅が著しく広いことに因るもので，最小前頭幅（94mm）や上顔幅（111mm）等，顔面上半部の幅径がいずれも男性並に広いことが当女性人骨の顔貌をやや特異なものにしている。

顔面部の目だった特徴として，さらに顕著な歯槽性突顎と扁平な鼻根部があげられる。鼻根彎曲示数（第４表）は94.4と，著しく扁平で，鼻根部の陥凹，眉間の膨隆も共に弱い。また，歯槽側面角は62度で，上記の長頭性や鼻根部の扁平性と共に，他の中世人との共通した時代特性を表していると言えよう（図２）。

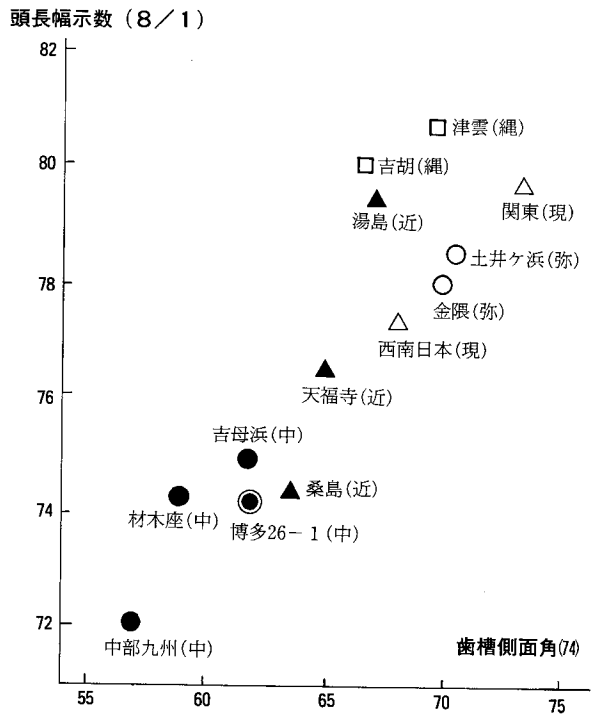
これらの点に関連して，前頭骨と頬上顎骨の扁平度を求めてみると，それぞれの平坦示数は11.5と23.3で，顔面上部の著しい扁平性と，上顎部の前突傾向がはっきりと示されている。

また，この著しい突顎のために，下顎との咬合形式はいわゆる屋状咬合を呈し，上顎切歯の裏面，歯頸部近くには，下顎切歯との嚙み合わせに因る咬耗溝が水平方向に刻まれている。

以下に歯式を示しておく。

／ ／ × × × △ △ I^1	I^1 I^2 C × × × M^2 ×
× × × P_2 ○ C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1 P_2 × × ×

（○：歯槽開放　×：歯槽閉鎖　／：欠損　△：歯根のみ）



第２図　頭長幅示数と歯槽側面角による比較

b，四肢骨

計測結果を比較群と共に第6，7表に示す。

上肢骨：全体的に長く，華奢な特徴を示す。上・前腕いずれもかなり長く，比較に用いた中世以降の各集団の平均値をかなり上回っている。それに引き換え，骨体部の諸径は逆に下回っており，その長厚示数の小ささに示されているようにひどく華奢である。なお，断面形状において特に扁平傾向等は認められない。また，上・前腕の長径比（橈骨最大長／上腕骨最大長）は75.8で，現代人（73.6）よりは吉母浜中世人（76.2）に比較的近く，前腕部が比較的長い特徴を持つより古い古人骨集団（例えば津雲縄文人は79.3）とは隔たっている。

下肢骨：上肢に類似して，かなり長く，やや細い傾向を見せるが，下腿骨の細さはそれほど目だたない。大腿骨の中央断面示数はこの時代の女性としてはやや大きく，また脛骨でもかなりの扁平性が認められる。

脛骨と大腿骨の長径比は81.0で，中世以降の集団に類似しており（例えば，吉母浜中世人は81.8，現代人は80.7），この比率の大きい，つまり大腿に較べて下腿が相対的に長い縄文人等（津雲は83.5）とはやはり大きな差を見せている。また，上腕骨と大腿骨の太さの比率を求めてみると，68.4となり，上腕が相対的にかなり細い。同比率の小さい点を一つの特徴とする吉母浜中世人（66.7）とこの点でもまた類似性が認められ，現代人（73.9）とはかなり異なる。

推定身長：大腿骨最大長にPearson法を適用して推定身長を求めてみると，150，4 cm（藤井の式を適用すると150.5cm）となり，第8表に示したように，中世人としては高身長の女性である。

B，26—2号人骨

出土状況：地表下2.3—2.5m（標高3.5m前後）の墓壙から検出されたもので，頭蓋の保存は良好だが，それ以外の体部骨は一片も含まれていない。頭頂を下にしたかたちで埋葬されていたが，下顎は関節から外れて右側頭部に接した状態で検出され，頸椎も見いだせなかった。墓壙も頭蓋を収容するだけの大きさしかなく，こうした状況からみて，いずれか他所において白骨化した頭蓋をこの小穴に再葬したものと推察される。なお，副葬品はない。

所属時代：主に層序関係に関する考古学的考察から，16世紀前半頃のほぼ戦国時代所属のものと考えられている。

性別・年齢：乳様突起をはじめとする各筋付着部の発達度が良好で，諸計測値もかなり大きく，男性と判別される。また，歯の咬耗がやや進行し，縫合の各部，特にその内板がかなり癒着していることから，熟年に達した人骨と考えられる。

（形質）

計測結果を第1，3表に示す。

脳頭蓋：かなり大きく，また顕著な長頭傾向がみられる。頭最大長（187mm）は各比較群の平均値をかなり上回っており，そのため頭長幅示数は73.3と，長頭型の中位に入る。また，長高，幅高示数はそれぞれ中，尖頭型に属し，吉母浜ほどではないがかなりの高頭傾向も示す。

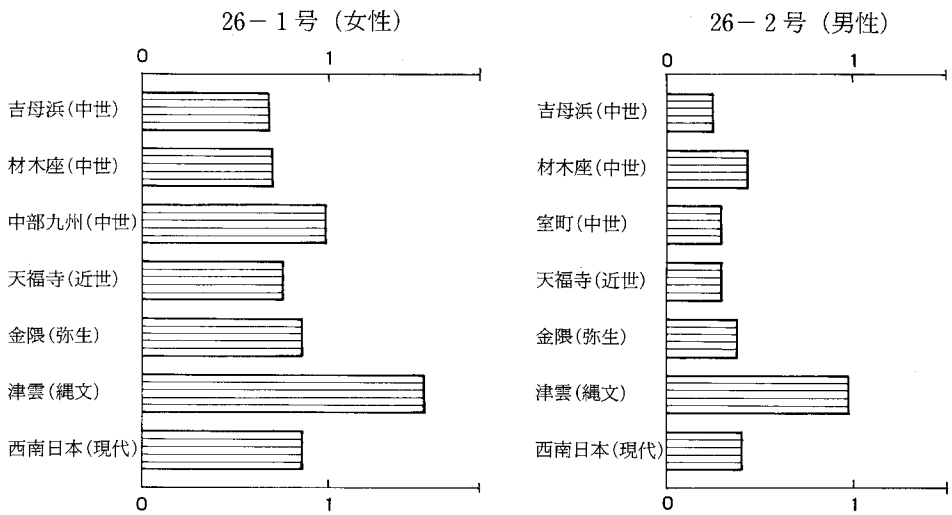
顔面部：脳頭蓋と同様，全体的にかなりサイズが大きい。第1図にも示したように，顔面の幅径の大きさもさることながら，中世人骨としては特に顔面高径の顔高，上顔高の高さが目だち，他の中世人を大きく上回って，高顔で知られる北部九州弥生人の平均値（それぞれ123.8mm，74.8mm）にも近い。Kollmann の上顔示数は52.8（中上顔型）で，中世人の中ではかなり高顔の持ち主である吉母浜よりも面長な特徴を示し，眼窩や鼻部にも同傾向が見られる。

鼻根部（第5表）はやはり著しく扁平で，鼻骨の平坦示数（29.6）も吉母浜（31.8）に近いが，前頭骨の平坦示数は17.7と，やや高値に傾き（吉母浜：15.3），上顔部の水平方向の彎曲は比較的強いようである。なお，26—1号のような強度の歯槽性突顎は見られず，咬合形式は鋏状咬合である。下顎体はかなり厚く，下顎枝も幅広く頑状な特徴を示す。

歯式を以下に示す。

○ M^2 M^1 P^2 P^1 C I^2 I^1	I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2 M^3
× M_2 M_1 ○ P_1 ○ ○ ○	○ ○ C P_1 P_2 M_1 M_2 ○

（○：歯槽開放　×：歯槽閉鎖　／：欠損　△：歯根のみ）



第3図　博多遺跡群出土中世人骨からのペンロースの形態・距離（頭蓋9項目）

C，26—3号人骨

出土状況：26—2号のすぐ近く，約70cmほど離れた小穴中に見いだされた。頭蓋骨は右側を下に圧平された状態で検出され，復元は困難なもののかなりの部分が遺存しているが，その他の体部骨では頸椎と上位肋骨が数片，それに上腕骨とみられる骨片が一個あるのみで，下半身の骨は見いだせない。関節状況を確認していないので，原埋葬か再葬か，いずれとも判断し難いが，頭蓋のかなり良好な遺存状態に較べて下半身の骨が一片も存在しない点は不自然であり，あるいはこれも26—2号と同様，何等かの人為的な修飾を受けた埋葬である可能性が考えられる。

所属時代：26—2号と同じ，16世紀前半のものと考えられている。

性別・年齢：歯の萌出状況から，生後8—9月の乳児とみなされる。性別は不明。

II．築港線，第3次調査出土人骨

1985年度，築港線の拡張工事にともなう調査に際して，博多区上呉服町から出土した。

出土状況：地表下約4m（標高1.5m）の位置に検出された土壙墓に埋葬されていたもので，右腹側部に白磁碗一個を伴っていた。上半身はほぼ仰臥し，頭は左側頭部を下に，両腕は体側に沿って伸ばしている。白磁碗はこの右腕の肘部に乗せられたかたちで見いだされたものである。また，下半身は強屈した膝を左に倒し，足首は右足を上に重ねていた。ほぼ全身にわたって遺存しているが，残念ながら保存状況は不良で，頭蓋の顔面部や四肢骨端部は多く欠損している。

所属時代：伴出遺物や層序関係から，13世紀前半の鎌倉時代の人骨とみなされている。

性別・年齢：骨盤の保存状況は悪いが，深い前耳状溝が認められ，大座骨切痕の開きも大きく，また，四肢の細さや，頭蓋の諸形状からみて，女性とみなされる。年齢については縫合の癒着がまだ認められず，歯の咬耗もあまり進行していないので，比較的若い成年人骨と考えられる。

（形質）

a，頭蓋骨

殆ど計測は不能であったが，僅かながら得られた結果を第1，2表に示す。

乳様突起の発達は比較的良好だが，外後頭隆起部や側頭筋線の発達はごく弱く，眉間の膨隆，鼻根の陥凹も弱い。

計測値に見る特徴は不明な点が多いが，頭最大幅は推定値ながら136mmで，この時代の女性としてはかなり大きな値を見せている。しかし，その上面観において，短頭傾向は窺い得ない。眼窩上縁はゆるやかな円弧を描き，やや高眼窩傾向を見せている。上顔高は少なくとも68mmに達し，ほぼ現代人や天福寺江戸時代人に近く，吉母浜等，他の中世人骨をかなり上回っている

ようである。鼻高値にも同傾向が窺える。

鼻根部（第4表）の扁平度は，吉母浜中世人に近く，天福寺江戸時代人よりはその程度が強い。上顎歯槽部はかなり前突し，歯槽性突顎の可能性が窺える。

以下に歯式を示す。

△	M^2	×	P^2	P^1	C	I^2	I^1	I^1	I^2	C	P^1	P^2	M^1	M^2	M^3
×	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	×

（○：歯槽開放　×：歯槽閉鎖　／：欠損　△：歯根のみ）

b，四肢骨

上肢骨：かなり最小な傾向をみせる。最大長の計測は不可能ながら，吉母浜に較べて長さに大差はないようだが，骨体はやや細く，例えば上腕骨の中央周，最小周は比較群の平均を下回っており，かなり扁平性も強い。同傾向は橈骨でも，また尺骨でも認められる。

下肢骨：大腿骨は上肢同様，かなり細い。ただ，その断面型は26—1号とは逆に前後方向に短かく，骨体中央，および上骨体の各断面示数は吉母浜を始めとする比較群をかなり下回っている。脛骨は大腿骨ほど細くはないが，ただ著しく扁平で，示数値だけをみると，扁平で知られる津雲縄文人（63.0）をも凌いでいる。また，上腕骨が大腿骨との比較で相対的にかなり細い。

推定身長：大腿骨の最大長は正確には求め得なかったが，370—380mm程度とみなされ，一応これを基にPearsonの式から算出してみると，145—147cmの身長がみこまれる。中世の女性としてはほぼ平均と言える。

総括・考察

1985年度の博多における調査によって，成人3体（内，男性1，女性2）と乳児1体の中世所属の人骨が出土した。所属時代は13世紀の鎌倉時代から16世紀の戦国時代のものまでやや幅があり，埋葬状況にも違いがあるが，それぞれの特徴をまず概括しておくと以下のようになる。

1，博多遺跡群，26—1号（女性・熟年，13C前半）

・脳頭蓋はかなりの長，高頭傾向を示す。

・顔面は全体的にやや大きい。特に上顔高や鼻高といった高径の大きさが目だち，中世人としては非常に面長な顔貌の持ち主といえる（Kollmann 上顔示数：53.8)。ただ，眼窩だけは顔面上半部の幅の広さに付随して眼窩幅が大きく，その示数は低眼窩型となる。

・この顔面上半は鼻根部を始めとして扁平性が強いが，下半では強度の歯槽性突顎がみられ，屋状咬合となっている。

・上，下肢ともかなり長く，華奢である。

・大腿骨骨幹は前後に厚く，脛骨にはかなりの扁平性が認められる。

・四肢の前腕と上腕，下腿と大腿の長径比は比較的小さく，吉母浜中世人等に類似する。また，大腿骨に較べて上腕骨が相対的にかなり細い。

・推定身長は150.4cmで，中世人女性としては高身長である。

2，博多遺跡群，26―2号（男性・熟年，16C前半）

・脳頭蓋は大きく，強い長頭型を示し，頭高も比較的高い。

・顔面も大きく，特にその高さが目だつ。Kollmann の上顔示数は52.6で他の中世人，特に低顔傾向の強い材木座や中部九州中世人との差が顕著である。

・鼻根部はやはり扁平性が強いが，さほどの歯槽性突顎は認められない。咬合形式は鋏状咬合である。

3，築港線第3次調査出土人骨（女性・成年，13C前半）

・頭蓋の正確な計測値は得られなかったが，眼窩や鼻部も含めてかなり高顔傾向が窺える(上顔高：68mm以上)。

・鼻根部は扁平性が強く，また，歯槽性突顎の可能性が窺える。

・四肢は他の中・近世人同様，比較的短かく，また，やや華奢な傾向を示す。

・上腕骨，脛骨はかなり扁平性が強い。また，上腕骨は下肢に比し相対的にもかなり細い。

・推定身長は145―147cm程度で，他の中世人同様，低身長である。

中世や近世の人々がどんな形態的特徴をもっていたのか，実際の人骨資料でそうした点を探ることは，約一世紀にも及ぶ我国の人類学研究においても永く看過され続けてきた。鎌倉市の材木座から数百体にのぼる中世人骨を発掘し，初めてその形質を明らかにしたのは，東京大学人類学教室の鈴木尚である。彼が学会や誌上（鈴木，1956）で発表した中世人骨の特徴は，しかし当時の学会に必ずしもすんなりとは受け入れられなかった。それは材木座人骨が，それまでの古人骨に関する常識では考え難いほどの強度の長頭の持ち主で，さらには古墳人以上に低顔性が強く，鼻根は扁平でおまけにひどい反っ歯といった特異な特徴を示したからである。しかし，これをきっかけにその後，全国各地で中世人骨も調査対象にされるようになり，出土資料が増えるに連れ，鈴木によって示された特徴は，ある程度全国的な広がりをもった，中世人共通の時代特性であることが明らかにされてきた。九州でも尾窪等（内藤，1973：佐熊1987）の例があり，山口県下関市の吉母浜遺跡（中橋・永井，1985）からも100体を越す保存良好な中世人骨が出土した。そしてこの吉母浜人では，長頭や突顎といった時代特性に加えて，他地方の中世人よりはかなり面長な特徴もみられ，中世における地域差の存在も明らかにされている。

今回，博多の旧市街区から出土した中世人骨においても，上記のように幾つか他地方の中世

人と共通する特徴がみられたことにまず注目したい。即ち，先に報告した１例（中橋・永井1987）も加えると，博多から出土した計測可能な３体の中世人骨は，いずれも強い長頭傾向を見せており，また鼻根部の扁平性も著しい。１体のみだが，強度の歯槽性突顎が認められた点もそうした中世人形質の汎日本性を改めて確認させる事例として指摘できよう。それと同時に，今回の３体に共通して認められる注目すべき特徴として，高顔性があげられる。吉母浜中世人もまた，材木座や尾窪に較べて高い顔面の持ち主であったが，この３体をみる限りではいずれもその平均値を上回っている。26―１，２号では幅径も比較的広く，顔のサイズが全体的にかなり大きい点も，他地方の中世人が「小顔傾向」をとることを考え合わせると非常に興味深い。この顔のサイズの大きさは同じ博多の天福寺江戸時代人（中橋，1987）でも観察されており，頭型の問題と同じくまだ統計的に有意の考察が行える資料数に達していないが，今後，当地の中世人を追加調査していく上で注意すべき点として指摘しておきたい。それが博多という古い歴史をもつ商都の住人の特徴なのかどうか，そうであるならばそうした変化をもたらす要因はどこにあるのか。先に天福寺江戸時代人に関する報文の中でも少し考えてみたが，こうした問題の具体的な検証は，人骨形質と遺伝，環境要因との相関を明らかにする上で，何等かの重要な知見をもたらすことが期待され，今後の重要課題となろう。

ともあれ，今回その頭蓋形質を明確に知り得たのはわずかに男女各１体にすぎないので，ここでみた特徴をはたして博多の中世人の特徴としていいのかどうか，まだ確言できる状況にはない。何よりも資料の追加が先決問題であろう。ただ，そうしたやや中世人としては特殊な形質も含めて，その全体的な傾向としては，２体とも各所に中世人としての特徴を共有しており（第２図），さほど明確ではないが吉母浜中世人とも特にその高顔傾向において共通点が見いだされる。両者は地理的な近さに加え，共に「渡来系」とされる高顔の弥生人の出土地のものでもあり，その類似性と差異は当地における時代的な推移を考える上で興味深い。

北部九州地方は，周知のように，全国でいち早く弥生文化を開花させた地域であり，この地の住民の形質的特徴を知ることは，日本人の成立を考える上でも重要な意味を持っている。とりわけその中心地でもある博多は，古くから栄えた港町・商都でもあり，上でも触れたようにそうした環境が住人の形質にどういった影響を与えているのかを知ることは，広く中世人に共通して見られる上記の時代特性の発現に関する疑問を解く上でも，重要な課題になるものと考える。今回得られた資料が直ちにそうした研究に寄与するものとは言えないにしろ，これまで皆無に近かった中世人骨が初めて出土した意義は決して小さくはなく，今後も資料蓄積の努力が重ねられ，いずれこうした問題を改めて検討する機会のくることを期待したい。

（当人骨を研究する機会を与えて下さった福岡市教育委員会の諸先生，諸士に深謝いたします。）

文献

阿部英世（1955）：「現代九州人大腿骨の人類学的研究」　人類学研究，2。

原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」　人類学研究，1。

鑄鍋勝登（1955）：「九州人下腿骨の研究」　人類学研究，2。

金関丈夫・永井昌文・佐野一（1960）「山口県豊浦郡豊北町土井ケ浜遺跡弥生式時代人頭骨について」　人類学研究，7。

金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」　人類学雑誌，43。

清野謙次・宮本博人（1925）：「津雲貝塚人人骨の人類学的研究。第二部，頭蓋骨の研究」人類学雑誌，41。

清野謙次・平井隆（1928）：「津雲貝塚人骨の人類学的研究，第3部，上肢骨の研究」人類学雑誌，43。

：「津雲貝塚人骨の人類学的研究，第4部，下肢骨の研究」人類学雑誌，43。

溝口静男（1957）：「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」　人類学研究，4。

森田茂（1950）：「関東日本人頭蓋骨の人類学的研究」　慈恵医大解剖学教室業績，16。

森田茂・河越逸行（1960）：「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺」人類学雑誌，22。

内藤芳篤（1973）：「尾窪―熊本県下益城郡城南町尾窪中世墳墓群の調査」熊本県文化財調査報告第12集，熊本県教育委員会。

中橋孝博（1987）：「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」　人類学雑誌，95。

中橋孝博・永井昌文（1985）：「山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨」吉母浜遺跡，下関市教育委員会。

中橋孝博・土肥直美・永井昌文：「金隈遺跡出土の弥生時代人骨」史跡金隈遺跡，福岡市埋蔵文化財調査報告書123，福岡市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1986）：「博多遺跡群第26次調査出土中世人骨」博多Ⅵ，福岡市埋蔵文化財調査報告書144，福岡市教育委員会。

中橋孝博・永井昌文（1987）：「博多遺跡群第28次調査出土中世人骨」博多Ⅶ，福岡市埋蔵文化財調査報告書147，福岡市教育委員会。

佐熊正史（1986）：「中世九州人頭蓋の人類学的研究」　長崎医学会雑誌，61。

専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」　人類学研究，4。

鈴木尚（1956）：「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」　岩波書店。

Suzuki,H.(1969)：Microevolutional changes in the Japanese Population from the

prehistoric age to the present-day.
J. Faculty of Science, University of Tokyo, III。
脇達也（1970）：「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の研究」　熊本医学会雑誌，44。

第1表　博多遺跡群第26次・築港線関係第3次調査
出土中世人骨の計測値

		博多遺跡群第26次		築港線第3次
		26－1	26－2	
		(女性)	(男性)	(女性)
1	頭蓋最大長	178	187	－
8	頭蓋最大幅	132	137	(136)
17	Ba － Br 高	(135)	138	－
8/1	頭長幅示数	74.2	73.3	－
17/1	頭長高示数	75.8	73.8	－
17/8	頭幅高示数	102.3	100.7	－
5	頭蓋基底長	(105)	101	－
9	最小前頭幅	94	102	88
23	頭蓋水平周	518	528	－
24	横弧長	304	317	－
25	正中矢状弧長	364	388	－
40	顔長	105	102	－
45	頬骨弓幅	132	142	－
46	中顔幅	98	(104)	－
47	顔高	114	122	－
48	上顔高	71	75	－
47/45	顔示数(K)	86.4	85.9	－
47/46	顔示数(V)	116.3	117.3	－
48/45	上顔示数(K)	53.8	52.8	－
48/46	上顔示数(V)	72.4	72.1	－
51	眼窩幅(左)	46	43	－
52	眼窩高(左)	34	37	－
52/51	眼窩示数(左)	73.9	86.0	－
54	鼻幅	25	28	－
55	鼻高	51	54	－
54/55	鼻示数	49.0	51.9	－
72	全側面角	84	85	－
74	歯槽側面角	62	68	－
65	下顎頭間幅	130	134	－
66	下顎角幅	99	112	－
68	下顎骨長	76	75	－
69	オトガイ高	(31)	35	30
70	下顎枝高(左)	52	56	－
71	下顎枝幅(左)	32	37	32
71/70	下顎枝示数(左)	61.5	66.1	－
79	下顎枝角	127	134	－

第２表　主要頭蓋計測値の比較（女性）

		博多（中世）26－1	築港線（中世）	吉母浜（中世）		材木座（中世）		中部九州（中世）		天福寺（近世）		西南日本（現代）	
				N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	178	－	26	176.4	62	177.9	14	179.0	38	174.7	42	172.8
8	頭蓋最大幅	132	(138)	26	132.0	60	131.8	11	130.6	38	133.5	42	133.8
17	Ba － Br 高	(135)	－	25	133.0	42	128.8	8	131.5	35	132.7	42	131.5
8/1	頭長幅示数	74.2	－	26	74.9	57	74.2	10	72.0	38	76.5	42	77.5
17/1	頭長高示数	75.8	－	25	75.4	40	73.4	8	73.9	35	76.1	42	76.2
17/8	頭幅高示数	102.3	－	25	100.7	40	97.6	6	101.0	35	99.4	42	98.4
45	頬骨弓幅	132	－	26	128.3	33	124.6	1	124.0	30	126.5	42	124.3
46	中顔幅	98	－	27	98.6	32	95.4	7	94.0	25	95.5	42	93.6
47	顔高	114	－	18	111.5	16	105.1	8	108.0	15	115.9	10	113.0
48	上顔高	71	－	19	65.5	40	61.6	10	61.3	22	68.8	48	68.6
47/45	顔示数（K）	86.4	－	18	86.3	15	84.5	1	90.3	15	91.1	10	90.5
47/46	顔示数（V）	116.3	－	18	111.5	15	109.4	4	116.9	15	120.9	10	118.3
48/45	上顔示数(K)	53.8	－	22	51.6	31	48.9	1	50.0	22	54.3	40	55.1
48/46	上顔示数(V)	72.4	－	22	66.5	29	64.1	6	65.3	22	71.8	40	73.2
51	眼窩幅（左）	46	－	25	41.1	36	40.7	5	40.0	30	40.5	42	40.7
52	眼窩高（左）	34	－	25	33.9	33	32.9	6	34.0	30	34.3	42	34.0
52/51	眼窩示数(左)	73.9	－	26	82.7	33	79.9	5	84.0	29	84.8	42	83.7
54	鼻幅	25	－	25	25.9	34	24.6	12	25.4	26	25.3	42	25.2
55	鼻高	51	－	25	48.6	34	46.9	11	47.4	28	49.9	42	48.7
54/55	鼻示数	49.0	－	25	53.5	32	52.7	11	54.3	26	51.0	42	51.9
72	全側面角	84	－	22	82.8	31	81.1	8	81.0	18	82.5	40	82.8
74	歯槽側面角	62	－	22	61.8	30	59.1	8	57.3	17	65.0	40	67.1

第３表　主要頭蓋計測値の比較（男性）

		博多（中世）26－2	吉母浜（中世）		材木座（中世）		中部九州（中世）		天福寺（近世）		西南日本（現代）	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	187	16	181.8	170	184.2	9	183.4	38	182.6	108	181.4
8	頭蓋最大幅	137	17	136.2	164	136.5	3	134.0	38	138.6	108	139.3
17	Ba － Br 高	138	17	139.4	96	137.2	8	136.0	33	139.2	108	139.3
8/1	頭長幅示数	73.3	16	74.9	164	74.2	3	72.8	37	76.0	108	76.6
17/1	頭長高示数	73.8	16	76.8	94	75.0	7	74.3	33	76.2	108	76.9
17/8	頭幅高示数	100.7	17	102.5	93	99.8	3	103.9	33	100.8	108	100.1
45	頬骨弓幅	142	18	135.2	96	134.8	－	－	25	136.4	106	134.5
46	中顔幅	(104)	19	100.3	107	101.8	2	100.0	24	101.8	107	99.9
47	顔高	122	11	117.3	48	115.8	7	114.0	14	126.9	66	122.2
48	上顔高	75	15	69.8	119	64.7	8	64.6	18	74.5	92	71.8
47/45	顔示数（K）	85.9	11	86.4	37	86.1	－	－	13	93.2	64	91.4
47/46	顔示数（V）	117.3	11	116.5	43	113.9	2	112.3	13	123.9	65	122.2
48/45	上顔示数(K)	52.8	15	51.7	87	49.6	－	－	17	54.4	90	53.5
48/46	上顔示数(V)	72.1	15	69.8	97	65.6	2	61.7	17	73.1	91	71.8
51	眼窩幅（左）	43	18	42.0	111	43.1	10(r)	41.3	24	42.6	108	43.0
52	眼窩高（左）	37	18	34.4	99	33.7	11(r)	33.1	24	34.1	108	34.4
52/51	眼窩示数(左)	86.0	18	82.1	96	78.2	9(r)	79.3	23	80.9	108	80.2
54	鼻幅	28	17	26.0	122	26.6	8	26.4	24	26.5	108	25.9
55	鼻高	54	16	51.4	121	51.1	11	49.2	24	52.9	108	52.2
54/55	鼻示数	51.9	16	50.5	96	52.1	8	53.5	24	50.1	108	49.8
72	全側面角	85	15	82.5	73	81.7	7	82.4	16	83.2	92	83.8
74	歯槽側面角	68	14	65.2	68	60.3	7	61.1	16	67.0	107	70.7

第 4 表　鼻根部計測値の比較(女性)

		博　多 (中世) 26−1	築港線 (中世)	吉母浜 (中世)		天福寺 (近世)		金　隈 (弥生)		西南日本 (現代)	
				N	M	N	M	N	M	N	M
50	前眼窩間幅	17	16	25	17.8	31	16.7	25	18.1	57	16.8
F	鼻根横弧長	18	18	25	19.8	30	19.5	23	19.7	57	19.3
50/F	鼻根彎曲示数	(94.4)	88.9	25	90.3	30	85.5	23	91.6	57	87.3
57	鼻骨最小幅	6.3	7.7	24	7.7	30	7.2	24	7.8	57	7.0

第 5 表　鼻根部計測値の比較(男性)

		博　多 (中世) 26−2	吉母浜 (中世)		材木座 (中世)		天福寺 (近世)		金　隈 (弥生)		西南日本 (現代)	
			N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
50	前眼窩間幅	22	18	18.8	108	19.1	24	17.5	25	18.5	89	17.7
F	鼻根横弧長	24	15	21.7	99	21.4	24	21.0	25	20.7	89	20.5
50/F	鼻根彎曲示数	91.7	15	86.6	96	89.0	24	83.0	25	89.4	89	86.2
57	鼻骨最小幅	9	17	7.9	108	8.0	25	7.1	25	7.9	88	6.9

第6表　上肢骨計測値とその比較(女性、左)

		博多(中世)26−1	築港線(中世)	吉母浜(中世) N	吉母浜(中世) M	天福寺(近世) N	天福寺(近世) M	金隈(弥生) N	金隈(弥生) M	九州(現代) N	九州(現代) M
上腕骨											
1	最大長	286	−	19	270.0	19	273.7	4	292.3(r)	36	270.0
2	全長	282	−	18	267.4	15	271.4	4	288.3(r)	36	268.6
5	中央最大径	17	20	28	19.9	20	20.3	4	20.5	36	19.8
6	中央最小径	13	13	28	14.8	20	15.5	4	15.8	36	14.8
7	骨体最小周	50	50	28	54.1	21	56.0	11	56.9	36	54.8
7a	中央周	51	55	28	57.3	20	59.3	4	60.8	36	56.9
6/5	骨体断面示数	76.5	65.0	28	74.1	20	75.9	4	76.8	36	75.3
7/1	長厚示数	17.5	−	19	20.0	17	20.7	4	19.9(r)	36	20.2
橈骨											
1	最大長	217(r)	−	18	206.0	12	197.9	8	214.0	12	199.9
2	機能長	206(r)	−	18	193.1	11	183.5	6	202.0	12	187.0
3	最小周	31	33	27	34.6	16	35.7	22	36.5	12	34.7
4	骨体横径	14	14	27	15.1	16	15.3	22	15.3	12	14.5
4a	骨体中央横径	12	−	27	13.4	14	14.0	12	14.0	12	13.5
5	骨体矢状径	9	9	27	10.1	16	10.3	22	10.8	12	9.7
5a	骨体中央矢状径	9	−	27	10.1	14	10.2	12	10.7	12	9.7
3/2	長厚示数	15.0(r)	−	18	17.9	11	19.4	6	17.3	11	18.1
5/4	骨体断面示数	64.3	64.3	27	67.3	15	67.4	22	70.6	10	68.3
5a/4a	中央断面示数	75.0	−	27	75.4	14	73.2	12	76.5	−	−
尺骨											
1	最大長	234(r)	−	20	222.4	11	211.1	4	235.8(r)	12	215.0
2	機能長	208(r)	−	22	196.7	11	184.3	3	207.0	12	189.2
3	最小周	29	−	25	32.5	12	32.4	13	33.9	12	32.1
11	矢状径	11	10	28	10.8	17	11.2	19	11.1	12	10.9
12	横径	14	15	28	14.9	17	14.3	19	15.6	12	13.9
3/2	長厚示数	13.5(r)	−	22	16.7	11	17.6	2	16.1	12	16.8
11/12	骨体断面示数	78.6	66.7	28	72.8	17	79.0	19	71.5	12	77.5

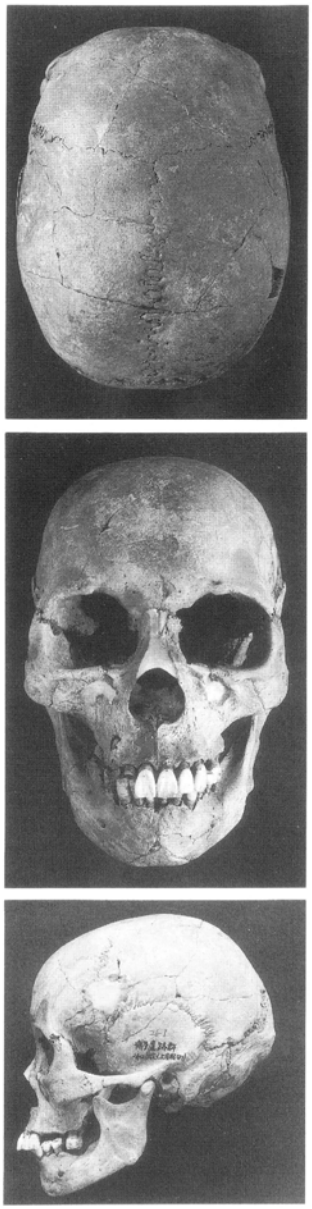
第7表　下肢骨計測値とその比較(女性、左)

		博多 (中世) 26−1	築港線 (中世)	吉母浜 (中世) N	吉母浜 (中世) M	天福寺 (近世) N	天福寺 (近世) M	金隈 (弥生) N	金隈 (弥生) M	九州 (現代) N	九州 (現代) M
大腿骨											
1	最大長	400	−	25	378.0	18	380.6	13	405.5	13	380.1
2	自然位長	396	−	24	375.8	16	376.7	6	402.5	13	375.9
6	中央矢状径	24	21	28	23.3	21	23.6	27	25.9	13	23.6
7	中央横径	23	24	28	24.8	21	24.0	27	26.1	13	23.2
8	中央周	73	71	28	76.1	21	75.2	27	81.6	13	74.2
9	骨体上横径	28	29	28	29.1	17	27.7	22	30.1	13	27.5
10	骨体上矢状径	21.5	20	28	20.9	17	22.7	22	23.6	13	21.3
8/2	長厚示数	18.4	−	24	20.4	15	19.8	6	21.1	13	19.8
6/7	中央断面示数	104.3	87.5	28	94.5	21	98.7	27	99.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	75.0	69.0	28	72.0	17	82.3	22	77.6	13	77.1
脛骨											
1	全長	318	−	16	309.2	15	304.1	7	317.1	14	301.0
1a	最大長	324	−	17	313.8	15	305.6	9	321.9	14	306.6
8	中央最大径	24	−	26	26.1	17	24.4	13	26.2	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	30	31	25	29.7	19	27.8	28	30.6	14	28.1
9	中央横径	17	−	26	18.3	17	18.6	13	20.5	14	18.8
9a	栄養孔位横径	19	18	25	20.0	19	20.7	28	22.4	14	21.1
10	骨体周	66	−	26	70.3	17	67.5	13	73.0	14	70.1
10a	栄養孔位周	78	78	25	78.8	19	76.5	28	82.8	14	78.2
10b	最小周	60	63	25	64.9	17	62.7	24	67.7	14	63.6
9/8	中央断面示数	70.8	−	26	70.4	17	76.9	13	78.2	14	76.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	63.3	58.1	25	67.4	19	75.0	28	73.5	14	74.9
10b/1	長厚示数	18.9	−	16	20.6	14	21.2	7	21.2	14	21.2
腓骨											
1	最大長	311(r)	−	13	304.7	6	300.0	2	304.5(r)	14	300.6
2	中央最大径	14	13	23	13.7	11	12.8	3	14.0	14	12.9
3	中央最小径	10	9	23	9.7	11	9.2	3	8.3	14	8.6
4	中央周	39	37	22	39.2	11	36.6	3	37.3	14	36.8
4a	最小周	31(r)	−	22	33.0	8	32.9	5	35.8	14	32.3
3/2	中央断面示数	71.4	69.2	23	71.3	11	71.9	3	59.5	14	67.6
4a/1	長厚示数	10.0(r)	−	13	11.1	5	11.0	2	13.0(r)	14	10.8

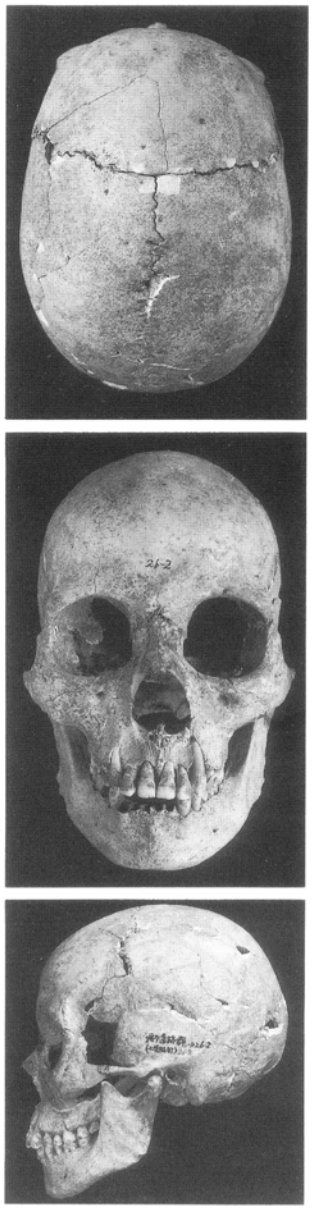
第8表　推定身長の比較(女性)

(cm)

	身長 N	身長 M
博多 26−1		150.4
築港線		145−147
吉母浜(中世)	22	146.5
材木座(中世)	3	146.9
尾窪(中世)	3	146.0
室町(中世)	17	146.6
天福寺(近世)	20	146.5
金隈(弥生)	17	151.3



博多遺跡群26－１号
（女性，熟年）



博多遺跡群26－２号
（男性，熟年）

都市計画道路博多駅築港線関係
埋蔵文化財調査報告(Ⅲ)

博　多

福岡市埋蔵文化財調査報告書第204集
1989年（平成元年）３月31日
発　行　　福岡市教育委員会
印　刷　　株式会社　チューエツ